Yanagida, Izumi
Meiji bungaku sōkan

柳田泉著

明治文學叢刊

政治小說研究 下

第169號

東京

春秋社藏版

松柏館發賣

『政治小說研究』下卷の刊行に當りて

お待ちかねの『政治小說研究』下卷が漸く刊行されることゝなつた。昭和十年の秋同中卷を出して以來、足かけ五年になる。實に長い間失禮したものだと、つくづく恐縮してゐる次第である。

昭和十年秋『政治小說研究』中卷を出して以來、實は著者の身邊にいろいろの出來事があつた。その中で本書刊行の遲延に關係あるものをいふと、第一は、國劇向上會のお話で『坪內逍遙傳』の執筆にかゝつたこと、これは想像さるゝ如き大役であつたが、兎も角勉强をして約一年間で下稿を完成し、それを同會にお引渡しした。(偶然にも、それが河竹繁俊氏との共著になつて此の五月に刊行となつたのは、大きな喜びだ)。この時の無理が祟つたか、その後健康を害し、視神經衰弱(眼病ではない)といふので讀書執筆に大に困難を來すことになつた。恐らく『逍遙傳』の執筆だけでさうなつたのではあるまい、多年の讀書人的不攝生がつもりつもつてこゝに至つたものであらう。その健康も爾後兩三年間の攝養でほゞ恢復して今日に至つてゐる、が、然しこの視神經衰弱及び一般不健康の病狀が大に本書の完成を遲延させたことは爭へない。

第二は、昭和十年四月以後早稻田大學に出講したこと、これは每週一回の講義であるが、やはりきまつて學校講義となると準備その他に多少手間をかけることになるので、全力を擧げて本書の完成にのみかゝるといふわけにいかない。これも、本書刊行の遲延に多少の關係はあらう。

第三は、私自身の經濟的事情だ。これはこゝに書き立てる限りではないので御想像に任せるが、要するに、誰しも

さうであらうが、かういふ研究仕事は不經濟、不生産的なもの、一口にいつて「もうからぬ」ものだから、かゝる研究執筆を進行させる一方、何か「もうかる」ものを併行的にやらなくてはならぬ。そこで何うしても、本來一年で完成する研究なら二年乃至三年かゝるといふ勘定になる。本書刊行の遲延にはその邊のこともあるやうだ。

が、兎もかく、私としては出來るだけの事をして、本書上中下三巻千八百頁の完成に漕ぎつけたのだ。まづまづ大慶の部といつて可からう。たゞいさゝか心にかゝるのは、下巻卽ち本巻の内容が豫告した分と少し變更せざるを得なくなつた點だ。それの主な理由は、非常時日本の出版事情による頁數の減縮である。豫告のまゝ出すと恐らく七百頁以上八百頁にもなりさうだつたので、驚いて數項目を削つて、やつと本書の頁數に落ちつかせることが出來た。中巻刊行のとき、奥附廣告には――

藤田鳴鶴の『濟民偉業錄』

尾崎學堂の『新日本』について

（附）叢菊野史仁田桂次郎

加藤城陽の『回天綺談』

久松義典の政治小説

（附）吉田熹六について

矢野龍溪の『浮城物語』

宇田川文海・小宮山天香

『自由鏡』の著者小林雄七郎

秋風道人内村義城

（附）志賀祐五郎

高安龜次郎

服部誠一の政治小説
福地櫻痴研究
（附）塚原澁柿

として置いたが、此の中で、大きな項目では加藤城陽の條、宇田川文海、小林雄七郎、內村義城、服部誠一の條がそれぞれ削られたことになり、附錄では仁田桂次郎、吉田熹六、志賀祐五郎、高安龜次郎、塚原澁柿の全部が削られたことになる。原稿紙で約四百枚分儉約されたわけだ。もつとも、これ等は此の下巻には削つたが、そのうち部分的にでも別の形で發表するつもりであるから、その際は宜しく御愛讀を願ひたい。もちろん、宇田川文海、服部誠一などは、本叢刊で續刊される『戯作家及び戯作小説』の中で論究しても可いから、この方に廻さうかとも考へてゐる。差しむき小林雄七郎に關することだけは急いで何かで發表したいと思つてゐる。

豫定の分を削つた點で、或は讀者諸氏の失望を買ふところがあるかも知れないが、その代りに、多少加はつたものもある。久松義典の條で經濟小説に言及出來たこと、小宮山天香を詳しく述べることが出來たこと、福地櫻痴の社會思想、木下尙江を通じての政治小説と社會小説の連契といふ點などは、最初本書の案を立てた際、考へてゐなかつたところだ。その邊にまた、多少お役に立つ事柄もあらう。

索引をといふお話は、大分前からあつたし、私自身も全三巻完成の上でつけようと思つてゐたのだが、只今のやうに多忙ではとてもそんな時間がない。索引をつけるために本書の刊行が又一年も遲れるのでは、何とも恐縮に堪へないので、索引代りに總目一覽をつけることにした。これは利用していたゞきたい。索引のやうに滿足にはいかなくとも、ともかく索引の代用として十分役立つものである。

最後に、本書の完成をこんなに長い間、多大の好意をもつて見守つていたゞいた先輩諸氏、友人諸氏、讀者諸氏に

重ねてあつく謝意を表する。

昭和十四年六月

柳田泉

追記。以上の如き内容の變更に伴なひ、上中巻の中の註に下巻の某々所を參照せよとあつても、今度刊行の下巻にはそれに相當するところが削られて無くなつてゐるものがあらう。從つて上中巻の讀者には多少異樣な心地がするかも知れないが、如上の理由で止むを得ないわけだから、重ねて諒恕を乞ひたい。

下巻目次

研究本記（續）

研究本記（續）

藤田鳴鶴の『濟民偉業錄』について

『濟民偉業錄』研究前記

一

此の章の主眼は勿論藤田鳴鶴の政治小說『濟民偉業錄』の研究にあるが、何等かの點でその理解を助けんがため前記數節を冠する。

かゝる前記は本書では大抵著者の傳記事實の探求から始まつてゐるが、こゝでは政治家及び文學者としての鳴鶴を研究するのでなく、鳴鶴の書いた一部の政治小說を研究するのみのことであるから、傳記は先づ從來普通に行はれてゐるもの（例へば太田原在文氏の『十大先覺記者傳』中のものゝ如き）でいゝとして置かう。勿論鳴鶴はそれ自身の詳傳を書くだけの價値ある人物であるから私は他日彼のことを詳しく調べてみたいと思つてゐる。今はそこまでは及ばない。然し矢野龍溪と相馳騁した改進黨の名士でありながら、鳴鶴は早死しただけ、さう知られてゐないので、丁度、鳴鶴が死んだ時犬養毅が彼を弔ふた文章を發見したから、これを掲げて「藤田鳴鶴とは何人ぞ」といふ問ひの答へにしたい。これが前記の第一である。それから第二は鳴鶴と小說、鳴鶴の小說に對する關心、第三は鳴鶴が『偉業錄』以前に試みた小說的文字といふ順序で語りたい。

鳴鶴の政治的イデオロギイは特別に研究せずとも、改進黨の領袖の一人であり、龍溪の政見と大同小異であり、三田派、英國風、改進主義だといふ諸點を考へて置いて、それでいゝといふことにする。

鳴鶴を弔した犬養毅の文章は、明治二十五年八月二十八日郵便報知五九六一號に掲載されてゐる、鳴鶴はいはゞ犬養の先輩であり、親分であり、上役であつただけに、放膽な犬養もこの文章だけは一生懸命に書いたものと見え、なかなかの名文である。

○嗚呼是れ鳴鶴藤田君を葬るの日なり。

嗚呼是れ我黨の先輩我社の先輩我兄事の友鳴鶴藤田君を葬るの日なり予豈筆を執るに忍びんや夫れ死生命か天の無情何爲れぞ獨り之を此の失意の境に奪へる壽夭數か天の無情何爲れぞ獨り此の不遇の時に奪へる君享年四十有一にして其の京に在る二十二年間の歲月は概ね患苦多くして歡樂少く志愈大にして事愈よ乖ひたる苦境逆運の歷史なりき始め君の慶應義塾に在るや數年の間學資給せず寢食安んぜず困學苦攻異日の志望を以て自ら慰る外未だ曾て謂ふ所の歡樂たるものあらず既にして頭角嶄然三千弟子の中僅かに指を屈す然れども其衆中に傑出したる所以のもの不幸にも却て一生を擧げて苦境逆運の底に埋歿する始めとはなりぬ當時塾生の氣風官吏を賤み民業を貴み自由民權の說を以て藩閥政府の反對に立てり況や君夙に才識を以て稱せられ隨て抱負甚だ大にして官吏たるを耻ち商賈たるを屑しとせざりしをや終に我報知新聞社の聘する所となりて其の主筆に任ず時年二十三健筆縱横盛に民權自由の說を唱へて政府を排擊し正論直筆毫厘假借する所なし故を以て屢々忌諱に觸れ新聞條例の設あるに及び首として禁錮の刑に處せられ爾來藩閥の徒殆んど謀叛人を以て待ち終に轗軻不遇の境に陷ると雖も之に由りて人民の元氣を振作し政事の思想を發達せしめたる功績極めて多しと爲す君我社に從事する殆んど十六年の久しきに亘り日々掲載したる論說記事數千篇の多きに上る蓋し君が如く久しく一社に從事したるもの我邦新聞紙の起りしより未だ曾て在らざる所なり況や十有九年の間政事世界に馳騁して未だ嘗て官祿を以て身を汚さざる者に於てをや改進黨の起るや君同志

を率ゐて創立の事に盡力し爾來我黨先進の地位を占めて內外の聲望を繫げる事茲に十餘年其間諸州を巡回し黨務を參畫し力を用ふる甚だ多し然るに不幸にも志業は健康に相副はず第一議會前後劇務に從事せしより稍や健全を傷ひ第二議會に及びては衰羸既に甚し是の時に當り議會極めて多事なりしを以て君終に病を以て公事を怠るに忍びざりき然れども若し夫の議會解散の事選擧干渉の事なかりせば或は猶ほ免れしやも未だ知る可からず選擧爭競の際重患の身を以て憤慨鬱勃の境に當り僅に其の戰捷を得たるの日は病既に膏肓に入り扁倉の術と雖も復た奈何ともすべからざるの日なりき嗚呼死孰れか悲しからざらん然れども苦境逆運の中に一生を埋歿したる君が如きもの果して幾人かある近年吾友小野君逝き馬場君逝き吉田君逝き皆苦境逆運の中に一生を終はり空しく其の患苦の實行墮涙の歷史を留めて予輩をして長へに痛恨哀惜の情に禁へざらしむ然るに天猶ほ之を以て足れりとせざるか今は又君を奪ひ去り予輩をして更に終天の恨を加へしむ天の吾徒に殃する何ぞ夫れ慘毒なるや夫れ苦境逆運は志士仁人の自ら求めて就き自ら樂て居る所逝くもの復た何をか恨みん然りと雖ども苦極れば樂を生じ逆極れば順に歸す君が生涯既に幾多の苦境逆運を閱し盡今や將に順運に向ひ樂地に入らんとして而して終に其の事を見るに及ばず豈悲しからずや抑も今より數年の歲月は君が一生の志業に於ける九仭の一簣にあらずや然るに天之れに年を假さず多年の志業一朝にして泡沫に歸す嗚呼悲しい哉然りと雖も君が多年國家に盡したる功績は遍く擧國人民の腦裏に入りて以て無形の記功碑を成せり君逝くと雖ども君が名は以て不朽に傳ふるに足れり是れ聊以て君の靈を慰め又以て予輩哀悼の情を慰めんか嗚呼此の經歷ありて此の不幸に終る卻て益々哀むべく益々惜むべき哉。

謹で君の行狀を按ずるに少時より最も文學の才に富み學校に在りて作る所の詩文既に誦すべき者あり其の京に來り業學を修むるに及び一時詩文を廢し專志研鑽專ら政治經濟の學を修む其の新聞に從事するに及び筆硯漸く漫に暇あれば必ず和漢兩洋の稗官小說詩歌文章及び俗間院本の類を博涉し最も好んで義太夫本を讀み其の文辭精妙の處は往

々背誦して一字を遺せず文を作る極めて快速にして始より構思を費さず卒然机に向ひ紙を展れば筆走り意到り一篇立ろに成る君交遊甚だ博く貴賤雅俗を問はず然れども其の中介然自ら持する所あり少しく意に合はざれば必ず言ふ言へば必ず再び意に留めず最も好で書生を養ひ前後十七八年の間寄食するもの極て多し予即ち其一人なり君諱は楨字は士基鶴谷山人九皐外史鳴鶴居士皆其別號なり著はす所數種にして其の濟民偉業錄文明東漸史の如き共に續篇を著述するに暇あらずして終はる終はるの日に至るまで精神平生に異ならず予今ま筆を執るに當り音容恍として猶ほ面前に在るを覺ゆるなり。

明治廿五年八月廿八日

犬　養　毅　謹　記

此の文章は名文であるばかりでなく、一篇の鳴鶴論としても極めて要領のいゝものである。これをよく讀めば、藤田鳴鶴なる人の一生の功業文章、趣味性格が髣髴と想察される。なまなか凡手の傳記幾十篇に勝つてゐる。

二

前記の第二として、鳴鶴の小說に對する興味を抽出して述べたい。

鳴鶴が小說に對して興味をもつてゐたことについては、今の犬養の文章中にも見え、又一種の淨瑠璃文粹ともいふべき『やまと文範』(十四年四月刊)なる書の序文で鳴鶴自らも稗史小說に對する嗜好を認めてゐる。而かもそのかゝる嗜好なり興味なりが可成り異常に强かつたものと見えて、鳴鶴の何んな小さい略傳でも、稗史小說を好み云々といふ特質を記してゐないものはない。犬養は此の嗜を新聞に從事してから以後のことのやうにいつてゐるが、それは甚だしく人眼を惹いたのがそれ以後のことだといふ風に解すべきで、事實は矢張り幼少時代から、稗史小說が好きだつ

たものらしい。現に『やまと文範』の序文では鳴鶴は自分の幼少から好きだつたと明言してゐる。

鳴鶴のかういふ嗜好なり興味なりは、その渉獵範圍が次第に深く且つ博くなるにつれてさういふ漠然たる狀態に止まつてゐずに、小說に對するや丶系統立つた知識を生んだ、而してその知識から自然一種の小說論が組織されると共に、小說改良を試みようとする意が萠して來たらしい。この小說改良意識は、思ふに矢野龍溪の『經國美談』の出現に多少の刺戟をうけたことが事實であらう。これは鳴鶴と龍溪との親善な、友誼的な、然し妙に緊張した競爭的な關係のことを考へて見れば、明白なところである。鳴鶴の小說に對する考への纏つたものは、先づ『繫思談』初篇の叙の中に見えてゐる（十八年十一月二十七日報知新聞）。叙の全文（原漢文）を和譯して示さう。

詩亡ビテ戲曲作リ、戲曲衰ヘテ稗史興ルト。泰西ノ邦ニ在リテハ、歌頌ノ宮朝廷ニ設ケラレテ、詩賦ノ學大學ニ講ゼラレ、東洋ノ國ニテハ風雅ヲ慕尙シテ今ニ至ルマデ衰ヘズ、吟誦ノ聲洋々乎トシテ常ニ海隅ニ溢ル。詩何ゾ曾テ亡ビンヤ。文人才子力ヲ傳奇ニ傾クル者、世其ノ人ニ乏シカラズ、之ヲ敎坊ニ施シ、之ヲ勾欄ニ演シ、都人士玩讀愛觀、唯タ其ノ及バザルヲ之レ懼ル。東西同軌、滔々トシテ皆是レナリ。戲曲何ゾ曾テ衰ヘンヤ。稗官野乘、其ノ類寔ニ繁シ。其ノ最モ舊キ者、或ハ千餘年前ニ成ル。其ノ近體ト稱スル者、創見亦二百年ヲ下ラズ。稗史ノ興ル、亦何ゾ曾テ兩者ノ後ニ在ランヤ。嗚呼是レ說有ル也。人心靈妙、靜ニシテ性、動ニシテ情、其ノ發達固ヨリ一偏ナラズ。智以テ辨識シ、情以テ感覺ス。是非利害、去就スル所以ヲ知リ、妍媸美醜、愛惡スル所以ヲ悟ル。智以テ已ム可カラズ、情亦已ム可キニ非ズ、人事是ニ於テカ岐ル焉。實學正藝、智ニ發シ、理想美術、情ニ本ヅク。二者相因リ、互ニ經緯ヲ成シテ、以テ世道人心ヲ彌綸スル、其ノ功固ヨリ相下ラズ。猶ホ剛柔互ヒニ用ヒ、寬猛兼濟フガゴトシ。国中ノ人人、皆ナ丁壯ノ男子トシ、駿稱戟ノ如ク、腕臂鐵ニ比スルモ、亦何ノ用フル所ゾ。生活ヲ經營スルヤ、必ラズ且ニ閨閣柔嫩ノ手ヲ待タントスル者、未ダ曾テ其ノ故無クンバ有ラザル也。上世人文未ダ開ケズ、樸

籍未ダ備ハラズ。傳聞スル所有ルモ、亦唯ダ口耳相屬シ、識々相因ルノミ。是ニ是テカ其ノ言語ヲ擇ビテ、以テ聽悟ニ便ニシ、其ノ聲調ヲ諧ヘテ、以テ記臆ニ資ス。而シテ蒙昧ノ俗、簡樸ノ民、其ノ實狀ヲ模スル、亦甚ダ艱蹇ナラズ。是ヲ以テ語句限ル所有リ、音節律スル所有リト雖モ、然レドモ人情世態、歷々トシテ辭表ニ活動シ、實ニ性靈ヲ叙シ、諷刺ヲ寓スルノミナラズ、是レ萬葉葩經柯麻(ホーメル)氏ノ東西ニ與ル所以也。」中葉以降、世運上進シ、事變漸ク繁ク、言語文章モ亦漸ク完備ス。瀏朗タル其節奏、綺麗ナル其語句、纖巧ヲ以テ勝ヲ一時ニ爭フ者之レ有リ、達意紀實、直ニ城郭ニ迫リ、以テ詩篇ノ圍範ノ外ニ出ル者之レ有リ、詩篇ト史傳ト、岐レテ二ト爲リテ、而シテ詩亡ビヌ。蓋シ詩ノ亡ブニハ非ザル也、其ノ文化ヲ翼成スルノ用亡ブル也。力有ル者是ノ際ニ起リ、詩篇ノ面目ヲ一新シ、奇異特絕驚ク可ク喜ブ可キノ事ヲ把リ、嬉笑怒罵、語々眞ヲ模シ、因ヲ考ヘ果ヲ推シ、其ノ顚末ヲ悉シテ、諸伎ヲ施シ、擧手投足、人心ヲ悚動センコトヲ務ム。人心其ノ巧妙ヲ喜ビ、觀感興起スル所有リ。而シテ後人ノ之ヲ觀ル、最モ以テ資リテ古代ノ情態ヲ徵ス可シ焉。院本謠譜ノ我ニ於ケル、傳奇ノ漢土ニ於ケル、未ダ曾テ軌ヲ同フセズンバアラズ。而シテ特羅麻(ドラマ)ノ歐洲ニ於ル、最モ以テ然リト爲ス。歐人風俗頹墮ノ世ヲ語ルヤ、必ズ曰ク路易第十四、必ズ曰ク査爾斯(チャーレス)第二ト。而シテ毛利厄(モリエル)威査禮(ワイチヤアレー)、之ヲ特羅麻(ドラマ)ニ著シテ、殊ニ其ノ靈妙ヲ極ム、史傳蓋シ及ブ能ハザルナリ焉。抑モ實學ト美術ト、固ヨリ科ヲ同フス可ラズ。往古史傳ト詩篇ト、合シテ一爲ルハ、勢特ニ然ル也。已ニ其ノ相判ルヽニ及ンデヤ、理想ヲ發揮シテ以テ文化ヲ翼成スル者、特ニ戲曲ニ在リ。故ニ曰ク、詩亡ンデ戲曲作ルト。」世態愈々進ミ、人文愈々開ケ、智巧ト閱歷ト、日ニ就リ月ニ將ム。人ノ世ニ處ル、心匠精密、事必ズ實際ヲ期ス。聲色妄動セズ、喜怒妄發セズ、擧止必ズ肯綮ニ中ランコトヲ欲ス。故ニ其ノ望矚スル所、人間中ノ人ニ在リテ、神仙中ノ人ニ在ラズ、其ノ仰觀スル所、世事中ノ本業ニ在リテ、超世拔俗ノ奇跡ニ在ラザル也。是ヲ以テ赫々ノ功、奕々ノ名、復タ耳目ヲ眩スルニ足ラズ、奇異絕特ノ事復タ心情ヲ動スニ足ラズ、蓋シ事變頃刻ヲ竢タズ、平

地震ニ波瀾ヲ湧起スル者、戲曲ニ在リテ上乘爲リ。今ヤ人情反覆、波瀾常ニ中ニ動蕩スルモ、外貌ニ就テ痕迹ヲ求ムレバ殆ンド得易カラズ、是レ豈ニ言語動作ノ能ク模擬スル所ナラン哉。是ニ於テカ戲曲漸ク勢ヲ失ヒ、其ノ世道人心ヲ補裨スルノ功衰フル也。一浮一沈、一起一蹶、或ハ自ラ之ヲ致シ、或ハ時機然ラシム。人生轉變、固ヨリ端倪ス可カラズ、而シテ或ハ意ヲ決シ、或ハ勇ヲ鼓シ、或ハ悔憤シ、或ハ怡悅シ、或ハ良心己ヲ責メ、或ハ鄙吝內ニ萌シ、性情變化、愈出テ愈窮ラズ。其ノ虛實ヲ甄別シ、其ノ情宜ヲ精審シ、碧翁ノ秘ヲ窺ヒテ、以テ命數ヲ觀、人ノ腦子裡ヲ探ル。纔ニ思念スル所有リ、朕兆未ダ發セザルニ、即チ模映描出、復タ影ヲ遁ル、無キ也。是ニ於テカ、立意高妙、理想ヲ發揮ス。以テ感動セザル可カラザル也。是ニ於テカ敍述精詳、情景ヲ曲盡ス。以テ娛樂セザ可カラザル也、是ニ是テカ警句雋語、辭藻ヲ巧麗ニス。以テ鑑戒セザル可カラザル也。是ニ於テカ美刺明發、具ニ微恉ヲ存ス。叢瑣ヲ满マズ、理窟ニ陷ラズ、浮華ノ習ヲ去リ、架空ノ嘲ヲ免ル、此レ稗史ノ大ニ歐洲ニ興ル所以ニシテ、此ニ非ズンバ、以テ世道人心ヲ補裨スルニ足ラザル也。故ニ曰ク戲曲衰ヘテ稗史興ルト。然リト雖モ是レ特ニ外形ニ就テ言フ耳。詩ト曰ヒ、戲曲ト曰ヒ、稗史ト曰ヒ、之ヲ要スルニ美術也。而シテ皆理想ニ歸着ス。唯ダ其ノ發達、自ラ次第有リ、是レヲ異ト爲ス耳。之レニ聲調節奏ヲ寓シテ詩篇有リ、之ヲ綴ルニ眼前情景ヲ以テシテ戲曲有リ、之ヲ補フニ人心ノ顯象ヲ以テシテ稗史有リ。稗史豈ニ曾テ聲調節奏ト眼前情景トヲ廢セン哉。生物家ノ所謂進化ナル者、亦タ文藝ノ間ニ行ハル。獼猴ノ人類ノ父祖タルヲ知ラバ、斯レ稗史ガ詩篇ノ兒孫タルヲ知ラン矣。夫レ唯ダ進化シテ止マズ、是ヲ以テ稗史又古今體ノ別有リ。我得(ゲーテ)獨逸ニ出デ、斯各德(スコット)英蘭(イングランド)ニ生ル、實ニ近代稗官ノ宗匠タリ。[illegible]鼓福實ル、近代ノ妙、二氏ニ至リテ極レリ矣。李頓侯(リットン)其ノ間ニ崛起シ、[illegible]其ノ鼎ヲ擧シ、[illegible]ノ長ヲ兼ネ[illegible]シテ別ニ一家ノ機軸ヲ出ス。落想超凡、[illegible]精詳、最モ實寫ヲ以テ稱セラル。[illegible]書ヲ嗜ミ、壯ニ及ンデ戲曲ヲ好ム、其ノ一科ニ於ケル、優ニ作家ノ域ニ入ル。之レヲ養フコト素有リ、淵源深遠ナ

リ、宜ナルカナ、其ノ發シテ稗史ト爲ル者、滾々乎トシテ其ノ窮スル所ヲ知ラザル也。友人尾崎君、侯ノ遺著一巻ヲ譯シ、題シテ繫思談ト曰フ。將ニ以テ稗史ノ模範ト爲サントスル也。余本邦稗史ノ不振ヲ慨スルヤ尚シ矣。因テ君ノ擧ヲ善シトシ、假スニ一臂ヲ以テス。頃者排印已ニ成ル、乃チ聊カ文藝沿革ノ由ヲ叙シテ以テ卷首ニ冠ス。或ハ謂フ、稗史ハ勸誘諷規、特ニ蚩氓ヲ喩スノ具ノミ、之ヲ實學ニ比スルニ、固ヨリ主僕ノ若ク然リト。嗚呼、至道ヲ寓シ、舊俗ヲ審ニス、其ノ經史ニ於ケル、内助ノ功、固ヨリ尠シトセズ。巧麗ノ文辭ヲ以テ高妙ノ理想ヲ表見スルニ至リテハ、即チ洵ニ其ノ獨擅スル所、權力相同ジカラズト雖モ、婦妻自ラ婦妻ノ本分有リ。端麗ノ容、淑婉ノ徳、以テ夫子ノ業ヲ寔々ニ翼賛スル者、是レ豈ニ婢妾奴僕ノ事ナラン哉。

これは、正に當時の鳴鶴の文藝學に於ける造詣を傾けたものと見るべく、今日の知識なり研究なりから見れば眞面目に相手取るに大人氣ない點もあるが、當の鳴鶴は却て大眞面目で見得を切つたものである。然しこれを讀むと彼が小說に大に關心をもつてゐたといふこと、彼に小說改良の志が可成り前からあつたといふこと、而かも彼が小說の本質を何ういふものと考へてゐたかといふことが、推察される。（至道ヲ寓シ、舊俗ヲ審ニス云々のところを通讀して見られよ）。而して從來の知識階級乃至政治家者流の小說稗史觀に比すると、小說を可成り高く評價してゐる、これは何れにしても注目すべき點である。後『繫思談』の中篇が出るや、鳴鶴は再び長い叙文をものしてこれに冠したが（二十年天長節後一日云々と日附あり）、これが又初篇の叙と相表裏する小說論と見ていゝものである。矢張り和譯して掲げる。

大化中興ノ治ハ、李唐ノ制度ヲ模倣シ、明治革新ノ政ハ歐西ノ文物ヲ模倣セリ。凡ソ宮室服飾器玩飲饌ヨリ以テ進退揖讓ノ禮ニ至ルマデ、此ヲ捨テ彼ヲ取ラザルハ莫シ、論者輙チ、我邦人ガ模倣ニ長ジテ剏作ニ短ナルヲ斥ク。余曰ク模倣ノ才モ亦タ才也。人苟モ才ヲ尙バンカ、即チ何ゾ獨リ模倣ヲ賤マン。今夫レ傳承師授、問道受業、模倣ノ

ミ。敷教施化、風移俗易、模倣ノミ。取長捨短、彼我相済、模倣ノミ。繪畫圖象、求範造化、模倣ノミ。唯ダ鸚鵡人語ヲ作シ、獼猴衣冠ヲ服スルモ、而カモ論談應酬、遂ニ能スル所ニ非ズ。模倣ノ貴ブ可キハ、巧拙如何ヲ顧ミル耳。夫レ稗史小説ハ、史傳ハ則チ三國志ニ據リ、志怪ハ則チ西遊記ヲ學ブ。結構ノ聚散、才婉ノ離合ハ、水滸金瓶、之レガ粉本爲リ。翻作スル所有ルモ、亦タ唯萬篇一律ノミ、模倣スル所有レバ則チ虎ヲ畫イテ猫ニ類ス。形貌愈々似テ風神愈々遠シ。近日政治小説、陸續印行、紙價頓ニ昂ル。其ノ作ノ佳ナルニ非ズ、皆亦範ヲ西稗ニ取テ然ル也。間々觀ルニ足ル者有リト雖モ、而モ或ハ生吞活剝、或ハ粗笨孟浪、其人ハ則チ才媛才子、其事ハ則チ奇遇奇禍、挿ムニ議論ヲ以テシテ勃窣理窟、飾ルニ辭藻ヲ以テシテ浮華纖佻ナリ。若シ夫レ景物ノ趣、性靈ノ眞、聲容言動ノ微ト、人心機用變化ノ妙トハ、或ハ全ク闕如シ或ハ語テ精ナラズ。嗚呼苟モ政治ヲ論ゼント欲セバ、盍(ナン)ゾ張膽明目、生面ニ下弁セザル。苟モ小説ヲ著サント欲セバ、盍(ナン)ゾ經營刻畫、細心刺繍セザル。顧ミルニ羊質虎皮、徒ラニ名聲ヲ冒シ、鬼面ヲ以テ人ヲ嚇サント欲ス。手段陋劣。慨スルニ勝フ可ケンヤ。彼ノ醒翁馬叟ノ輩、聖歎才子ノ書ヲ模倣ス、未ダ飣餖ヲ免レズト雖モ、形似甚ダ近シ。今ノ西稗ヲ模スル者、徒ラニ篇目ノ中ニ局促シ、辭氣且ツ肖似セシムルヲ得ズ、況ンヤ精神ヲヤ。夫レ翻作遽ニ企ツ可カラズ、前人ノ迹ニ蹤イテ、潜思研精、其神髓ヲ尋ネ、其意匠ヲ學ブ、亦唯ダ其才ノ宜シキ所ニ隨フノミ。而シテ之レヲ利導スル者ハ、則チ其遺蹟、豈ニ啻ニ形蹟ノミナラン哉。李頓(リットン)侯、英國著作家、模倣ニ巧ミナル者也。最モ歪得(ギョーテ)ノ著作ヲ喜ビ、脱胎換骨、自ラ能ク篇ヲ爲ス者頗ル多シ。斯ノ書、其老境ニ成ル。圓活流暢、絶テ刻畫ノ體ヲ見サズ。余以爲ラク、邦人ノ小説ヲ作ル者ノ好範也。是ニ於テカ助譯ヲ命シ、譯ニ其意匠ヲ釋シ深ク語脈文理ヲ考ヘ、繁蕪ヲ抉摘シテ、[illegible]滿無キヲ删シ、以テ讀者ヲシテ、其神ヲ求メ、其意ヲ師トスル所以ヲ悟リテ、模倣ニ三昧ナルヲ得シメンコトヲ希フ（中略）抑モソモ文章ハ德其ト相表裏ス、翻作ノ難キ、模倣ノ易カラザル、文人才子畢生ノ力ヲ費ヒテ斯レニ從事ス、固ヨリ其レ宜ナリ矣。

（下略）。

此の議論は、如何にも文明開化時代を去ること遠からぬ時代の議論たることを思はせるものがある。小說に創作を尊ぶといはずして模倣を尊ぶといひ、小說の著作には西洋小說の眞似模倣を第一義とするといふ意を示し、小說改良の第一義は西洋小說の模倣にありと換言せんばかりである。又こゝでも文學の本質を論じてゐるが、これも初篇の叙の中に見えるものと同趣旨で、政治家鳴鶴の文學觀を窺ふ資料とならう。當時の政治小說を種々論じてゐるところは、正面的な議論ではないが、當事者の言としてともかく人を首肯させる力はある、但し傍證的な一般論であるから、多少の例外は勿論認められなくてはならない。（文中に「醒翁馬叟」云々とあるが、醒翁は京傳を指し馬叟は馬琴のことである。聖歎は天下六才子書を評定した清の金聖歎のこと）。

以上の叙文二篇を合せて讀むと、鳴鶴の小說觀念及びその小說改良意識の如何なるものであつたかゞ大體わかる。

三

前記の第三として、『濟民偉業錄』以前に於ける鳴鶴の小說的文學に就いて略叙したい。

鳴鶴のこの種の著書で一番古いものとして擧げられるのは、『文明東漸史』であらう。（明治十七年九月刊）。研究家によつては（例へば高須梅溪氏、宮島新三郎君の如き）、此の書をもつて一種の政治小說と見なし、さうとして論議してゐる人々もある。これを小說とせば可成り面白いものになつたと思ふが、生憎、この書は歷史であつて全然小說ではない。況んやこれを政治小說と見るなど、全然出來ぬ相談である。現に著者鳴鶴自身がかう凡例の一節で斷言してゐる。

本史ヲ內外二篇ニ分ツ內篇ハ則文明東漸ノ正史ニシテ引用書ニ基キ總ベテ著者ノ編纂論述スル所ニ係ル外篇ハ則正

史ニ附隨スベキ副史ニシテ渡邊高野二氏ノ傳ヲ除クノ外皆二氏ノ著述スル所ニ係ル云々。

わざ／＼引用するまでもないのだが、今後とも『文明東漸史』を普通の政治小說なりなどゝいふ論者が出ぬとも限らぬから、これが正眞正銘の歷史であることを、著者の語を引いて是正して置く次第である。

この書の內容は、その凡例でも明白である通り、——

本史ハ天文以降天保ノ末年ニ至ル迄凡ソ三百年間外國交際ヨリ生ジタル事變ヲ記述シ泰西文明ノ東漸セル起因成果ヲ明カニシ讀者ヲシテ封建鎖國ノ世ニ當リ泰西文明ノ進歩セル實勢ヲ知ラシム。

といふ趣旨で書かれたもので、上記の如く政治小說ではなしに歷史であることに疑ひがないとし、たゞ純粹な學術的な歷史を作るつもりで書かれたものか何うか。大方さうではあるまい。勿論上記凡例に記してある如き趣意內容の書をかくつもりではあつたらうが、然しそれだけではない、自序に「數年前少シク思フ所アリテ」著述にかゝつたものといつてゐる。

當時西學ヲ講ズル者其新思想ヲ政治上ニ實施センコトヲ勉メテ禍ニ罹リ流讁辛苦次グニ死ヲ以テシ偉績ヲ後世ニ貽セルノ志士其跡ノ隱淺シテ世ニ傳ハラザルヲ見テ頗ル遺憾トセリ依テ泰西文明ノ東漸セル情勢ト其學術技藝ヲ傳ヘタル志士ノ國家ニ對スル事蹟トヲ討尋シテ一部ノ小史ヲ備センコトヲ期シ云々。

ともある。又凡例に、——

著者ガ本書ヲ編ムニ當リ最モ意ヲ用ヒタルハ天保年間渡邊華山、高野長英ノ徒ガ蘭學ヲ主唱シ罪ヲ君側ニ受ケテ死ニ至ルマデ千辛萬苦シテ力ヲ國事ニ盡シタルノ經歷ニアリ云々。

とあるので、著者の「思フ所」が如何なるものか略ぼ知られる。即ち華山長英は何をしたかといふに、彼等は、——

蘭學ニ得タルノ知識ヲ以テ政治上ニ施スノ端緒ヲ發キ內閣ノ施政ニ其學術ヲ實施シ以テ外國ニ處スルノ方策ヲ講ゼ

リ

なほこれに註釋を加へると「同志ヲ糾合シ經濟ヲ講究シ政治ヲ談論スルノ際現ニ實事ニ就テ説ヲ建テ其ノ行事ノ大ニ社會ニ影響シタル」ことをいふのである。華山長英はこの爲め生前悲慘な眼にあつた。然し今日結局如何、華山長英は立派な時の勝者ではないか。今日地を代へると、今の民權志士は即ち古への華山長英である。一は古の志士の受難の跡を示して今の志士を激勵し、一は今の民權論の淵源たる西洋文明移入の徑路を説いて、結局民權論の勝利とならざるを得ない旨を豫言する。これが鳴鶴の所謂「思フ所」であつたらう。

この書には以上の如き政治的イデオロギイが寓されてゐる上に、その中心となつてゐる渡邊華山、高野長英の履歴には傳奇的分子が多いので、處々自らなる稗史的文字となつてゐる（例へば高野長英の最後の場面の如き）。そのために卒讀して政治小説と誤まられるのも、或は當然といへないこともないかも知れない。然し如何程政治小説的分子に富んでゐるにせよ、又如何程政治小説的效果を擧げてゐるにせよ、政治小説でないことは、今述べた通りである。

『文明東漸史』の次に鳴鶴の名を帶びて出た小説的文字としては『諷世嘲俗繫思談』（明治十八年十一月初編刊行、二十一年五月中編刊行）であるが、これは藤田鳴鶴、尾崎庸夫の同譯といふことになつて居り、從來普通は尾崎の譯へ鳴鶴が加筆したものであらうといふことになつてゐるが、實はこれを譯したのは、青年朝比奈知泉である、私は朝比奈氏に問ふて始めてそれが判明した。朝比奈は鳴鶴に養はれた書生の一人であつた。それを報知新聞に載せるについて社員尾崎の名を假りさせ、自分も校閲位はした。それが出版の際もそのまゝ名義人になつたのであるといふ。從つて『繫思談』を鳴鶴の譯とするのは可笑しいので、本來ならばこゝに擧げなくてもいゝのかとも思ふが、然し前に叙文を揭げてゐる因みもあり、又多少にしろ加筆してゐるに違ひないと思ふから、これについて少し語ることにする。

『繋思談』の原作は『ケネルム・チリングリー實行錄』（Kenelm Chilingly : His Adventures And Opinions）でロード・リツトンが最晩年の作にかゝるものである（一八七三年脱稿、同年リツトンの歿後刊行）。前に第二編の敍文中にも見えたと思ふが、リツトンはゲエテの影響を大にうけてゐて、その小説にもゲエテの小説を模範にしてゐるものが少なくない。此の篇といひ、『花柳春話』の原本たる『アーネスト・マルトラヴアース』といひ、皆ゲエテの『ウイルヘルム・マイスタア』の面影が著しく模倣されてゐるものであるが、殊に此の『ケネルム』の如きは、『マイスタア』流の遍歴小説の體をそつくりそのまゝ模倣してゐる。

荒筋を語ると、準男爵（バロネット）チリングリイ家の一人息子たるケネルムは當時の新思想たるリアリズムの名の下に極端の非實際的な教育を受けた爲め、一種奇矯な生悟りの非人間的な性格となる。父男爵はこれを憂へ、暗に實人生と學校とは違ふから、實人生の觀察に從ふやう勸める。ケネルムはこれを容れ、無斷で家出し身分を掩して人生修業の旅に上る。さうして悲喜種々のアドヴエンチユアに出會ふ。色魔俳優の手から少女を救ふ。農夫の手傳ひをする。若い戀人同士を助けて、相手の亂暴者を挫ぐ。而かもその亂暴者の窮地を見てはこれを慰め勵まして新境地を開かしめる。貴族の家に客となつては令嬢の戀を避ける。當時青年の理想たる政治を語つては、政黨政治の輿論にこびることを遺憾といふ。勿論此等の出來事は個々獨立してゐるのではない、皆それ〲連絡があり、最後に綜合されてクライマックスに達する。凡そケネルムの信條が三つある。人生は虛僞に滿ちたもの、男子獨身がよし、婦人はいらぬものといふのである。彼も人生修業の始めは、人生の虛僞に驚くが、やがて次第に人生の眞實にうたれる。就中時に彼の行方に姿を現す行吟詩人と會話の度を高めるにつれて、人生のロマンス、神秘などについて考へさせられる。さうして遂に彼は少女リヽーに對する大きな愛の力によつて人生の傳記者から人生の Partaker となり、やがて失戀の苦によつて現實の偉大さに直面し、非現實な消極的な新思想をすてゝ積極的に舊傳統に生きる、といふところで人生修業が終るの

である。事件が一貫してゐないので誠に梗概を語り惡いが、大體は以上の如くでいゝ。

著者の意圖は勿論ケネルムの立場をかりて、政治、戀愛、結婚、財富等の問題から、政治家、貴族、女性、記者、農夫、藝術家等の生活を批評して、これに自家の理想を寓しようとしたのである。その新思想に賛成せずして途に舊傳統を守つたところには確かに反動家リツトンの面影が見える。然しそこは如何にせよ、此の小說が政治的宣傳なり暴露なり批評なりだけを主眼としたものでないことのは、明白である。然るにこの小說の譯者は、この小說の政治的分子がその主眼であるかの如く見做してゐる。

著者ノ意蓋シ專ラ英國社會實際生活ノ現狀ヲ描寫シ流俗ヲ嘲罵シ一世ヲ諷規スルニ在リ而シテ其最モ意ヲ用ヰタルハ代議制ノ弊ヲ矯ムルニ在ルナリ（例言）

鳴鶴も矢張りさう考へてゐた。

代議ノ制、選擧ノ法、善ハ卽チ善ナリ、美ハ卽チ美ナリ。徒ラニ其ノ善美ニ眩シ、其ノ弊端病根ヲ極メズンバ、善制美法、或ハ將ニ文具ト爲リテ止マントス。而シテ族制專固、豪富專横、一國社會平權ヲ得ザルモノ、英國ニ於テ最モ然リトナス。李翁ノ斯書ヲ著スヤ、著眼專ラ此ニ在リ云々。（初篇、第三篇第三回の評）

かゝる見方は、『ケネルム』が政治小說でない限り偏した見方であり、譯者なり評者なりの原書に對する理解不十分を示す。若しこの小說の中の政治的イデオロギイを正確に解したならば、却て妙な結果になつたであらう。何となればケネルムの政治論は專ら代議政治の弊を論じた暴露的なものであり、從つて當時代議政治を實現しようと努力してゐた鳴鶴等の主張の强さを減殺することゝなり、時人の輿論に冷水をあびせることになつたらうからである。然し『ケネルム』が兎もかく政治小說ではないのに、これを政治小說視して紹介したところに、時代の要求も個人の嗜好もよく出てゐる。

『繋思談』が政治小說として見ればかく不完全な見當違ひなものであるに係らず、これは明治初期の西洋文學移入の歴史からいへば、正に『花柳春話』につぐ劃期的の重要なものとなつてゐる。これはこの小說の飜譯の態度があくまで革命的なもので、よく當時の小說改良の精神を體現してゐるかに見えるからである。從來紹介された西洋文學は內容を主としたもので、形式即ち文章の方を意識的に大切にしたものはなかつた。ところが、この『繋思談』が初めて小說の飜譯紹介には文章をも重視すべきことを高唱したのである。

稗史ハ文ヲ美術ニ屬セルモノナルガ故ニ構案ト文辭ト相得テ其妙ヲ見ルベキモノナルコト論ヲ待タザルニ世ノ譯家多クハ其構案ノミヲ取リテ之ヲ發表スルノ文辭ニ於テハ絕テ心ヲ用ヰルコトナク全ク原文ノ眞相ヲ失フモ肯テ顧ミザルハ東西言語文章ノ同ジカラザルニモ因ルベシトハ雖モ美術ノ文ヲ譯スルノ本意ヲ亡失セルコト之ヨリ甚シキハナシ譯者窃ニ茲ニ慨スル事アリ相謀テ一種ノ譯文體ヲ創意シ語格ノ許サン限リハ努メテ原文ノ形貌面目ヲ存セン事ヲ期シコレガ爲メニハ瑣末ニ渉レル邦文ノ法度ノ如キハ寧ロ之ヲ破ルモ肯テ顧ミル所ニ非ズ精緻ノ思想ヲ叙述スルニ方リ往々已ムベカラザルモノアレバナリ云々（例言）。

これは、前記の政治家的な初期的文學觀と違つて、案外大膽に文學的良心を見せてゐるが、これは譯者朝比奈氏の見識であるか、それとも果して鳴鶴の意識が加はつてゐるか、例言の署名に譯者等とあるから、少くとも鳴鶴がかゝる態度を是認したことは事實であらう。若しこれが鳴鶴だとせば、前と反對に大に卓見といふべく、その文學眼の進歩並々ならぬことを語つてゐる。

この『繋思談』の譯述に關係したことが、鳴鶴を驅つて『濟民偉業錄』の著作に着手せしめたとすれば極めて面白い關係が兩者の間に生ずるわけだが、然しどうもはつきり然うとばかりはいへないらしい。その理由は後でそれとなく分かる。たゞ叙文で此の小說を創作の好模範だなどと賞めてゐることを考へると、この作に對する心醉といふこと

も鳴鶴が小說著作の直接動機の一つになつてゐるかも知れない。現に『濟民偉業錄』の技術的方面で『[illegible]思談』に多少負ふところのあることは認めなくてはなるまい。

最後に私は一寸冒險を試みたい。それは鳴鶴のシェークスピヤ紹介といふ點に關してである。敢て冒險といふ、十二分に鳴鶴だといふ確信がないからである、敢て試みたいといふ、傍證が如何にも鳴鶴でなければならぬと指示してゐるからである。

明治十七年の十二月から十八年の八月へかけて、九皐山史又は九皐生なる名で郵便報知新聞の叢話欄でシェークスピヤ戲曲梗槪を（ラムの物語で）紹介してゐる者がある。私はこの九皐生が鳴鶴であると思ふ。既に犬養毅の弔文にもあつた如く、鳴鶴は一號を九皐外史といつた。これは共に詩經の小雅鶴鳴篇から出た語だから兩々併用したのであらう。又明治十七年二月當時報知の記者をしてゐた菊亭香水（佐藤藏太郞）が函右日報にロミオとジュリエットの梗槪を揭げて『花月情話』と題したことがあつた。ところが香水の自傳によると、これが數回揭げられた時報知の主筆格の鳴鶴が香水に對して、右『花月情話』の揭載取り止めを賴んだ、その理由は自分が近々此の同じ『ロミオとジュリエット』のことを報知紙上に紹介するつもりであるから自分に讓つてくれぬかといふのであつた。それで香水は仕方なく執筆を中絕したといふ。然るに九皐生なるものが約一年後の報知に同じ『ロミオ』を紹介してゐる、近々ではないにせよ、これは正に、鳴鶴が香水への言明の實現したものではあるまいか。かういふ傍證によつて、私は此の九皐生を鳴鶴であると思ふのである。

その紹介された物語は皆で四編で、第一は十七年十二月十六日以下二十八日に亙つて『花間の一夢』と題して『シムベリン』を、第二は十八年四月七日から五月七日に亙つて『落花の夕暮』（無署名）と題して『ロミオとジュリエツ

ト』を、第三は七月十日から十八日に亙つて『榮枯の夢』と題して『マクベス』を、第四は七月二十二日から八月十一日に亙つて『雨後の花』と題して『未よければ總てよし』を紹介してゐる。紹介の趣意は『花間の一夢』の序によつて知られよう。

余往キニ撒斯比亞（セキクスピア）ノ稗史ヲ抄錄セル一書中最モ邦人ノ耳目ニ入リ易キ小說ヲ譯述シ之ヲ春宵閑話（初メ春宵夜話）ト題シテ本紙中ニ掲ゲ一ハ以テ泰西ノ稗史ニ存スル風味ヲ知ラシメ一ハ以テ余カ文藻ヲ培養スルノ一助ニ供セン事ヲ期シ三四種ヲ譯シ了レリ爾後故アリテ之ヲ紙上ニ載スルヲ廢シタルモ既ニ其稿ヲ脫セル者若干種ヲ存セリ今ヤ本紙ヲ改革シ叢話ノ一欄ヲ置テ日々是等ノ文辭ヲ掲グルコトニ定メラレシヨリ遊戲ニ屬スル閑文字モ亦必要ヲ報スルニ會ヘリ云々。

沙翁紹介の目的はこの引用文によりて（一）西洋小說紹介（二）譯者の文學的試筆といふ二つにあることが分かる。さうして（一）からは更に小說改良の一助たらしめんとする意味が看取され、（二）からは小說への興味、創作の仕度といふ意味が看取される。文例として左に『雨後の花』から一節を引いて置かう。

少女邊列奈（ヘレナ）は兼てより辨杜蘭を深く愛慕し世にある限りの誠を傾け切なる思ひに沈みしも貴賤の差別は中を隔つる籬となり少女心に思ひけるやう辨杜蘭は佛國世家の貴紳にて侯爵を保てる身なるに其身は一士人の娘にて祖先は世に知られたる名家なりしも兩親は果敢なく墓らして早く世を去り其身は他人の保護にて人となりし賤しき産れにあるものを所詮適はぬ戀なれば可戀可愛の御主人樣と思ひ做して唯婢女の分際を守るべしされば邊列奈の戀愛は高く中天に懸りたる明星を慕ふが如く餘りに距離の懸隔したればこそ双方一處に集まり夫よ妻よと呼びかはす幸福は得られまじく思はれたり然るに戀といへる曲者は兎角得難く遂げ難き途を撰んで進むものにて邊列奈は其の頭上に輝きて遙かに隔たりし明星を思ひ染め切なる情を運びしも其身を恥ぢて彼の曲者（戀）をば抑壓してありけるに今戀

人の故郷を去つて都の空へと赴くを見るに附けても唯戀しさの彌まさり目には涙の雨を湛へ胸は愁の泉を開けり固より果敢なき戀にしあれど思ひ焦れし其人が朝夕目前にあらんには胸に塞がる雲霧も空に輝く明星の光りに披らく便宜もあらんに今より遠く隔たりて憂さを慰め悲みを拂ふことさへならずしていとゞ歎きを增すばかり如何はせんと女氣の思ひ苦してはなか〳〵に思慮も分別も出でざりけり。

譯文も先づ格別拙劣なものとは見えない。素人の餘技としては先づ上乘とすべきである。ところで、問題は上記『花間の一夢』の序中の文句、「余往キニ撒斯比亞ノ稗史ヲ抄錄セル一書中ヨリ最モ邦人ノ耳目ニ入リ易キ小說ヲ譯出シ之ヲ春宵閑話ト題シテ本紙中ニ揭ゲ」云々といふ一條である。此の『春宵閑話』(初め夜話)は明治十六年三月から六月に亙るもので、三月十四日から二十四日までのは、『冬物語』(ウイントルステール)の梗概、四月五日から二十四日までは『お氣に召すまゝ』の紹介、五月三日から二十四日までは『ヴエロナの二紳士』、六月二日から二十一日までは『ハムレツト』の紹介、といふ順次になつてゐる(此の四編の中『お氣に召すまゝ』は單行本がある、『佛國某州廳吉侯情話』といふものがこれである。)譯者は翠嵐生と署名してゐるが、今迄はこの翠嵐生が何人か分らず、此の方面の研究家によつて大に疑問とされてゐた。然るに上記の序によると、翠嵐生は卽ち九皐山史と同一人である。從つて九皐山史が鳴鶴であるとせば、翠嵐生も鳴鶴でなければならぬ。若しさうとせば、これは日本に於けるシェークスピヤ移入史上、重大な且つ興味ある發見である。

明白に九皐を鳴鶴と斷定するには今少し早いかも知れないが、私は鳴鶴といふ見當が動くまいと思ふ。さうすると、鳴鶴の手に成る小說的文字は、正に明治十六年三月の『春宵閑話』をもつて最初としなくてはならぬ。上記の諸點については博雅の是正を乞ひたい。

なほ參考までにいふと、鳴鶴の西洋紀行なる『觀風叢話』の觀劇の記中にもシェークスピヤに對する興味が明かに

出てゐる。一寸引例して置かう。

幸にしてセキスピーヤの脚本にかゝるものは大抵其筋立を書物にて知り得るにより言語不通の不便を幾分か補ふて批評は下だし能はざるも俳優の技倆如何は測量し難きに非ず（觀風叢話上、遊記の中、觀劇の條二八〇頁）。

これが遺族所藏の原稿では、——

幸にしてセキスピーヤの脚本にかゝるものは曾て大抵其筋立を書物にて知り得たるにより云々。

となつてゐて、この「曾て」の二字を消してあり、又「得たる」となつてゐる。これで鳴鶴が日本にゐるころからシエークスピヤの戯曲に關心をもち、これを讀んだことが明白だと斷言出來よう（たとひラムによつて讀んだにせよ）。

『濟民偉業錄』研究

一

以上前記のシエークスピヤ紹介の條でも記したし、又『文明東漸史』刊行の年月も參考にはならうが、鳴鶴が小說めくもの（一種の政治小說といつてもよからう）の創作に興味をもち始めたのは、先づ明治十六年である。而して明治十六年は矢野龍溪の『經國美談』が出て讀書子に甚大な感激を與へた年である。この事は注意して頂きたい。

『濟民偉業錄』の出版廣告（一）にいふ——

鳴鶴先生夙ニ我ガ稗官小說ノ淺薄猥褻ナルヲ嘆シ一書ヲ著ハシ其模範ヲ示スニ意アリ云々。

鳴鶴が小說創作に對する興味は恐らく小說改良の志と表裏して生じたものであらうが、彼が改進黨の領袖として東奔西走に多忙だつた爲め本格的に小說執筆の時間を得なかつた。それで兎に角、本格的に小說を執筆したいといふ念願

の第一の現れとして『偉業錄』を起稿したのは、明治十八年の秋である。翌十九年の秋前編上下だけ漸く脫稿したのでこれに補訂を加へて刊行したのが明治二十年三月であつた。(同年十月別製本刊行)。

萬事周到な鳴鶴のことであるから、起稿の時に全編のプランの大體は立てゝゐたものに違ひない、それで『偉業錄』の後編も執筆すればいゝばかりになつてゐたものと思ふが、明治二十年に引續いて多忙續きの彼には執筆の機會に惠まれなかつた。明治二十一年には洋行、二十二年には大隈伯の條約改正擁護運動、二十三年は國會議員出馬といふわけ、それが漸く片づいて一段落となると今度は彼自身の重患で矢張り筆がとれなかつた。それで遂に『偉業錄』は前編上下のまゝ吾等の手に殘されることになつたのである。

註(一) 明治二十四年四月二十四日郵便報知廣告。

二

例によつて『偉業錄』の梗概を語る。『經國美談』の場合には、有名な周知の作品ではあり、本も澤山あるので多少簡易に語つたが、これは餘り人に讀まれぬものであり、本もさう見かけぬので、いさゝか詳しく語らう。

明の世宗肅皇帝の嘉靖年間(二十九年より三十三年へかけての物語)のことである。嚴嵩(げんすう)父子が帝の信用を博して漸く專制の威を示しかけて來た朝廷に、際立つて淸節な骨鯁の臣楊繼盛(號椒山(しようざん))といふ人があつた。彼に一子雲字(あざな)は士龍といふ少年がある。平生孟子にいふ濟民の大業を理想として、支那では士人第一の義務となつてゐる仕進に就かうとはしない。繼盛は一日雲に早く科擧の制に應じて登第し、立身して志を行ふやうに勸める。然るに雲は言下に反對する。世に科擧の制程人を愚にするものはない、終生四書一經に拘泥して生きた仕事をすることを許さない。自分は平生の念願通り野にあつて濟民の大業に從ひたいといふ、且つ假に仕進したとしても嚴嵩等が跋扈してゐるので

は早晩禍にかゝることが分つてゐる。むしろ自分を江湖に放して呉れゝば却つて他日萬民の爲め役に立つことがあらうといふので、暫時天下周遊の時期を與へてくれんことを求める。繼盛も自分と理想を異にするが、いつも變らぬ雲の見識に感じ、その乞ひを許す。さうして雲の眞の素生を始めて話してやる。雲は繼盛の實子ではない。漂泊の日本武人と繼盛の姉楊翠娥の間に生れたもので、兩親の早死のために叔父繼盛の子として育てられたものである。かくて雲は勇んで天下周遊の途に上るが、繼盛は別に臨んで、日本刀一口と系譜一卷と實父の言行を記した冊子との三つを餞別とする。

こゝに、大名府濬縣と云ふところに魯訥字は敏行といふ富豪がある。此の人も有爲の士で嚴嵩の暴政に不平であるが自身でこれに反抗するといふ氣力も決斷もないので遊宴に心を紛らしてゐる。濬縣の知事は劇仇といひ、上に阿り下を虐げるといふ點では典型的の酷吏であり、勿論嚴家の氣に入りでもあるから貪婪の點でも負けてゐない。劇仇は魯家の富に眼をつけて頻りに誣するところがあるが、魯は勿論これを拒むだけの氣骨のない男ではない。それで劇仇は遂に事に托し魯を捕へて入獄させる。魯は悲憤の餘り病となるが、病が重いとわかると、一女瓊英に怨を呑んで死ぬ旨の遺言をして自殺してしまふ。魯の夫人もこれを心配する餘り間もなく病死する。瓊英はかねて男子として育てられてゐたので男裝のまゝ急に家を逃れ、機を見て父母の讐を復さうと志す。

さて天下周遊の途に上つた楊雲は、保安府で不圖俠漢馬忠を助けたことから同地の富家孫蓮と知り合つたが、父楊繼盛の友人であつたところから、その世話で暫時此の土地に逗留することになる。馬はかつて孫家のために悪ブルジヨアの陳常を懲したので、陳のため奸計に命を失はうとした。これを楊雲が助けたのである。楊雲に（以下楊といふ）この家で一人の少年客に紹介されるがこれが魯英即ち瓊英なのである、亡父との關係を知つて孫家に匿まはれてゐたのである。魯は楊と一度會つて別れ難い友誼を結ぶ。楊は魯家の不幸を聞いて魯を慰めるが、同時に父母の仇を

報ずるに專らであることを不可とし、自分の同志として濟民救時の大業に當ることを勸める。魯は頗るこれに感激して同志とならうと誓ふ。孫は、二人の志を賞しつゝも、青年急躁の弊なきやう求める。馬も楊に服し、同志となる。かくて三人近村の寺院を假りて同居して文武を勵むことになる。尤も魯が此の仲間に加はつたのは、一つは、孫家の娘紅霞の感情を絕つためもあつた。

此の間、孫家の親類で易州の知事荀安が訪來り、種々最近の朝廷の消息を傳へたが、それはたゞ嚴黨の跋扈と正義不振を語るものゝみであつた。短氣の馬忠は直に飛び出して、嚴嵩父子を屠らうといきまくが楊に制止される。然し荀氏の物語から、近く嚴嵩が諸方に腹心を派して地方官會議を開かしめ、處士横議を取締らせるといふ消息を聞き、これは國家の不祥事だといふので、追て樣子を探るため易州に赴くことを約束する。楊の出立の意を聞いて魯英は一時茫然とする。だが出立に先立つて一夜偶然の機會から人生結婚の大事を論じる。さうして楊がわが大事を翼賛してくれる佳人であれば喜んで結婚する主義だときいて、魯英は心中覺悟するところがあるものゝ如く、決然として楊に別れる。

易州に赴いた楊雲は、荀安にあひ、按撫使の諸地方に下るのは嚴嵩のために處士にクーデターを加へるものであることが分つたので、何等か對抗の策に出でなくてはならぬと考へる。この時荀安の許で知り合つた許儀といふ男があるが、常に嚴嵩を罵り過激の言辭を弄して眞實節義家らしく見えるので、楊も心を許して交はる。許儀の紹介で又祖祐といふ豪傑とも知りあふが、祖祐も楊の人物に惚れて直ちに隔意ない同志となる。

楊雲の父楊繼盛はかねがね嚴嵩一派から目の上の瘤視されてゐたが、遂に狄道に貶謫されることになつた。易州にもこれを機會に、かつて楊雲が荀安の席上論じた「民は天意の代表也」といふ孟子に基いた民權論を理由にして、先づ楊雲を捕へようとかゝる。幸ひ祖祐が早く腹心の間諜から報告されたので、急いで楊に敎へ、二人で（孫家を志し

て〕易州を逃れる。途中追手に會つて、楊と祖萠等とは別れ別れになつたが、楊は山賊の手に落ちる。

ところが意外も意外、その山賊の頭目は馬忠であつた。揚が去つた後、孫遠の家にも意外の變があつたのだ。惡ブル陳菜は孫宗の娘紅霞に思ひをかけて此の前も馬忠に酷い目にあつたのだが、懲りずまに再び縁談をいひ入れたものの元より許されはせぬ。陳はこれを根にもつて孫のことを府伯に讒言する。府伯も孫が自分に賄賂を贈らぬことを心中面白くなく思つてゐたので、こゝぞと孫遠夫婦を縛する。居合した馬忠と魯英はこの不法を怒つて捕卒相手に戰つたが及ばぬ。それで魯は一旦引上げて後圖を講じようとしたが、馬はきかず、孫遠夫婦を取り返さうとして追ひかける。娘紅霞は陳に迫られて自殺するといふ悲劇となる。馬は深入りして捕卒に捉はれたが、捕卒に劍法の弟子（陸參等）がゐたので馬を助け出し、遂にこの山（龍跡山といふ）に籠つて賊をなすに至つたのだ。楊は、魯英の行方を案じつゝも、馬の輕卒を戒め、濟民主義より、一人に殉ぜずして天下に殉ぜよと自重論を說き、暴に報ゆるに暴をもつてすること勿れと諷する。

楊雲は、父の謫所を訪はうとして馬忠に書を遺し山寨を立つ。途中山路に迷つて異人の家に宿る、然るに翌日早くも官兵の追手の氣勢が感じられたので壁を破つて逃れる。すると老異人が追ひついて雲の素生を當て、自分の身上姓名を名乘つてきかせる。老異人は司馬駿（しばしゆん）字は千里といひ雲の實父の舊同志である。元より雲の濟民の大志を賛し、これを助けようとする。司馬老人の一女雪陜がかけつけ、いよいよ追手が迫つたと告げるので、かねて用意の筏で河を渡つてのがれるが、雪陜は官兵の流矢に中つて水中に落ちて行方知れずになる。

司馬と楊とは、一軒の隱家に落つくが、司馬は天下の形勢を察して、楊に、このまゝ父の謫所に赴く事は危險でありむしろ此處に待つてゐる方が宜しい、父繼盛どのゝ召返しも近いであらうといふ。楊も成る程と思つて司馬の隱れ家に暫時止まり、司馬から劍法、兵法、その他を學び、一年餘をこゝで過した。司馬と楊雲はこの間、閑に任せて詳

に將來の方針を計議したが、司馬はいふ、何うで自分等の手で濟民の策を行はねばならぬが、それは正道眞理による議論を手段としなくてはならぬ、さうしてこれを實行するにはそれだけの實力がなくてはならぬ云々。而してその方策實現の第一歩として司馬の舊知交河の知事趙端(ちようたん)を味方にしようとする。趙端は賢士でもあり義氣もあるからである。かくて二人が交河へ出る途中、これも楊雲に別れて以來放浪中の祖爺に出あひ、三人ともに趙端を訪ふ。趙は喜んで三人を逗留させ、頗る優待する。此の時交河縣地方へも嚴氏の腹心馬司諫(ばしかん)といふものがきて、處士横議を禁ずるクーデターの强制がある。三人の客がこの機に乘じ、諷刺で趙の意を激せしめ、辭職さして同志に加らしめんとする。趙は一度決心するが夫人曾氏に責められて思直し、曾氏及び曾氏の氣に入りの某甲に三人の客を引合せ、人物試驗をさせることにする。曾氏は勿論三人にケチをつけて趙の辭職を引とめる口實にする下心であつたが、楊雲の人品言動に柄にない好色心を動かし、俄に趙の辭職に賛成し、三客と同志になることを勸める。かうして曾氏は楊雲に近づかうといふのである。かくて三人は趙を味方にするに先づ成功したが、然し楊雲は曾氏の態度に口に不快を益すことになつた。

一旦楊雲は郊の大廟に遊び、不圖魯英のことを思ひ出して、かつて魯と贈答した詩を壁に書いて歸つたところ、この詩が緣となつて、魯英を始め、孫遠、馬忠等と邂逅することになつた。一同にとつて何といふ大きな喜びであつたらう。直ちに双方のその後の物語が始まる。魯等三人の交河へ來たわけは——馬は楊と離れてから、府伯の甥某の僞筆の計を用ひて孫遠夫婦を救ひ出し、怨重なる陳某の一家を鏖殺にし、直ちに山賊團は解散した。それから孫を蘇州へ落し自分は魯英の行方を探しに方々を歩き廻つたところ、丁度北京で魯と會ふことが出來た。魯は父の舊友蔡潤(さいじゆん)に助けられ北京で科擧の仕度中であつたのである。それから二人で孫を訪ね、更に三人で上京の途中、交河の知某趙端の評判を聞いて、同志になる人物か何うかを見に立ち寄つたところであつた。楊は三人を導いて趙の家に來ると、趙

は勿論大喜びで三人を逗留さした。司馬等も三人が志の固いのを察し、直ちに打ちとけて同志となつた。

楊雲はそのうちにも、曾氏の執拗な戀に堪えきれなくなつたので、遂に無斷で逃亡した。ところが魯英は魯英で、司馬駿の炯眼に早くも女性と見破られたので頗る不安を感じて、矢張り無斷で逃亡する。ところが途中で二人は偶然出會つたので、連れ立つて京師まで愉快な旅を續ける。かくて楊は久しぶりで父の家へ（父は司馬駿の豫言の如くこれより先き召返されて重い職任を授けられてゐた）、魯は再び科擧の仕度にいそしむことになつた。

だが楊雲は父の家にゐても煩累が多くて面白くなかつたので再遊の志を決する。さうして魯に會つて、今のうちに父に頼んで科擧に登第するやう取計らつてやるからその心組をするやうにいふ。魯はとても普通手段ではいかぬと思ひ、方便に黄金の力を假りようとする。魯の父は多年蓄へた黄金を某所に埋藏してあつたので、魯は楊に頼み、その金を掘出して送つてくれといふ。楊は承知して出かける。出かけるに臨んで父の勇退をすゝめたが、父は聞き入れなかつた。

楊と魯が出奔した後で、司馬駿等は頗るこれを不審としたが、二人の人格を知つてゐるので醜い動機があらうとは想像しなかつた。そのうち趙は愈々辭職したが、司馬駿は例の實力養成の一手段且つ一種の避禍策として、趙に勸め、厚く府伯に賄賂して盤山の賊を討つ許可を得させようとする。此の賊を討つと共に、これを理由に人數を集め、こゝを根據にして鹽鐵の利を占め、一擧兩得をやらうといふのである。ところが曾氏は楊雲に逃られた不平不滿から、お氣に入りの某甲と共に出奔して、府伯の許に赴き、この計略を謀叛だと訴へようといふ。趙端を始め一同は手分けしてこれを阻止しようとして、大騷動をする。

嚴嵩はクーデター後いよいよ專橫を極めるので楊繼盛は遂に見かね、立つて嵩の十大罪を上疏した。繼盛は勿論直に獄に下されたが、このために天下の耳目を動かすことは少くはなかつた。然し楊雲の身は自然に一寸急迫したもの

になつた。

楊雲は魯英と約束した通り、魯家の忠臣甘傑を尋ね、その手によつて埋藏の黄金を京師に送つた。魯はこれによつて無事及第した。楊は約束を果して安心して他地方へ周遊に廻つてゐるうち、ふと許儀が某縣主簿といふ官になつたことを聞き、好奇心と憤懣の氣持から彼を訪ねた。訪ねて會ふと、矢張り許儀は昔ながらの過激家らしい許儀であつた。楊を見て、直ちに楊が訪ねて來た意を見ぬき、楊の父の消息を告げて暗に激せしめる。楊は若いだけにつひ此の手にかゝつて朝政を痛く罵り、無道の君につかへぬ大義を引き、許儀に同志となつて道を天下に行へといふ。許儀はその爲めには兵革に訴へても辭せぬかと問ひつめたのは心あつてゞあるが、楊は行がかりから、うつかり、然うだと答へる。

許儀は辭職して楊雲を伴なひ、再び濬縣に來る。楊はこゝで馬の舊部下陸參にあひ、盧山征伐が不許可となつた事をきく。許儀は何やら用事だとて一人外出したが、此の夜楊雲は不意に捕縛された。さうして翌日惡知縣劇仇の前に引出されて見て、始めて許儀が其の筋のスパイであることを知り、愕然としたが、最早免れぬところと覺悟して、何もいはぬ。

魯英は科擧に及第してから一日も早く好官を得て父の仇を報ひようとし、頻りに嚴父子に取り入つてゐたが、風の便りに楊雲の縛を聞くや、一刻も猶豫ならずと頻りに嚴世蕃に泣きついて遂に直隷巡撫の重職に任じられる。濬縣では許儀等は楊雲の處刑を促進しようとしたが、意外にもそれが實現されない。それはかつて曾夫人と稱した女性が今は流れて劇仇の妾となつてゐて、これがまだ楊雲に心を殘してゐるので、容易に楊の處刑を行はせないのである。そのうちに魯英は巡撫として濬縣に來り、先づ楊を獄より助け出し、劇仇の政績を調べてその惡政を數へ、遂にこれを捕へて魯家の故園に於いて首を斬り、亡父の怨を始めて報うた。

かくて魯英は今や男裝の必要がなくなつたので、もとの魯徹行の一女瓊英となり、多年切に愛慕の思を運んでゐた楊雲と婚姻し、かつて古寺の夜に二人で語り合つた如く、濟民の偉業の成就を助ける身となる。

こゝで『偉業録』の前編上下は小團圓する。（恐らく、これから種々の出來事の後嚴父子の失敗となり、楊雲夫婦その他の濟民の大業が功を奏することになる筈であつたらうといふことだけは想像される）。

三

此の小說の政治的主眼は、題目でも知られる如く濟民の二字にある。さうしてこの二字の文字上の出所典據は何處にあるにせよ、今この場合には、その思想的源泉は『孟子』の書に出てゐるのである。

兒（楊雲）は夙くより此說を執るが故（中略）經國濟民の道に於ては孟子七篇中兒の則りて以て施爲すべき項目拗からずと信ぜり兒が抱負する所を行ふに當りては唯濟民の要道を求むるに過ぎず民は是れ國の本本固ければ國安し國の安寧を求むるの正路は民を安んずるの一途にあり（第二回二十三頁）

これは一種東洋流の民權論であるが、これが即ちこの小說の政治的イデオロギイの根本で、一部の『濟民偉業録』は畢竟この東洋民權論の宣明のために書かれたといつても過言でない。鳴鶴は主人公楊雲の口をかりて、隨處にかゝる民權思想を吐露さしてゐる。抑もそも民を國の本といふ意は何ぞ、——

元來民ありて國あり國ありて政治あり政治ありて有司あるのみ民は即ち國の本にて之を傷ふものは取りも直さず國を傷ふものなり（第十三回二三一—二三二頁）

だが然し——

固より君は尊く臣は賤し吏は上にして民は下なるは國家あり政治ありて治を施し治を受るの區別ある以上實に止む

可らざるの秩序なり（同二三四頁）

といふ、楊雲の說明がこゝに止まれば、それは平凡な常識論に過ぎないが、楊雲卽ち鳴鶴の說明はこれを前提として一段獨特の飛躍をし、その東洋民權論の根據たる「民は天を代表す」といふ思想を披瀝して來る。

某は事理を談ずるの上に於て我邦に行はるゝ正道を指示せる亞聖孟子の說に依り民は天を代表するものなりと明言せんと存ずるなり（中略）古より聖賢民の望を得て天下を統一する時命を天に受くと云ふ天とは何ぞや彼蒼々たるものを云ふか決して然らず昔萬章孟子に問ふ堯以二天下一與レ舜有レ諸、曰否、天子不レ能下以二天下一與上レ人、然則舜有二天下一也孰與レ之、曰天與レ之、天與レ之者諄々然命之乎、曰否、天不レ言以二行與一レ事示レ之耳と說明し更らに其意を敷衍して終に書の大誓の本文を揭げ天視自二我民視一天聽自二我民聽一とは則所謂天與之義なりと論結せり朱子は之を釋して天は固より無形なり其視聽は皆民の視聽に從ふといへり是れ卽ち民は天を代表するものにあらずして何ぞや又詩の文王の篇に殷之未レ喪レ師、克配二上帝一、儀レ監二于殷一、峻命不レ易と大學に之を釋して衆を得れば則ち國を得衆を失へば則ち國を失ふの謂なりと說けり峻命は天命なり衆は民衆なり已に天命といへば必ず民衆の之に附從すること猶影の形に於けるが如く聖經賢傳天を民に配して說くこと極めて分明なり（同二三四—二三五頁）

實に堂々たる言で、東洋的民權思想からいへば全く卓見たるを失はない、「民は國の本」といふ意は、こゝに至つて痛快に說明されたものと見るべきである。而してかく人民を天の代表と見ることからして、又孟子の有名な湯武放伐論といふものも出て來る、卽ち此の民權思想から必然的に獨得な君民關係論が出るわけである。楊雲は勿論自然の結果としてこれにも論及してゐる。

抑も君臣の名分とは何物ぞ是れ偶然に生じたるにあらず必ず之を定むるの根基無かるべからず蓋し大義ありて然後名分あり下に臨んで民を治むる者之を君主と名け上を仰で治を受くるもの之れを臣民と名く其間に分限の成立する

ものとせば必ず其君たり臣たるの大義ありて其名分を定むるなり君主は善政を施して民を安んずるものなり常に善をなすものなり決して悪をなさゞるものなり若し虐政を施して暴利を行ひ善を爲さずして悪を爲し君たるの務に反して其臣民を賊はゞ大義に基ける君臣の名分は已に存立せざるなり孟子齊王の臣弑二其君一可乎の問に答へて賊レ仁者謂之賊賊義者謂之殘殘賊之人謂之一夫聞討一夫紂矣未聞弑君也といへり已に殘賊の人となれば君主たるの名を失ふて一夫と變ず故に君臣の名分は大義之れが根基となりて之れを定めたるのみ大義已に滅却せば君臣の名分何れの處にか存せん知るべし君臣の名分は道義と共に存廢するものなるを君、君ならずして焉んぞ臣を臣とするを得ん國の本は即ち民なり民ありて然後君あり今其本を賊ふもの安んぞ其名位を履むべけんや（中略）さりとて余は孟軻氏の説を株守するにもあらず聖賢の説も時世と共に動かざるを保せず唯り治道の上に於て動かす可らざるものは民を本とすること是れなり民によりて國を成し民の爲めに君を立て民の福利を以て治國の宗とすることは千古に通じて變易すべからざる大義なりと信ぜり云々（第二十二回四五八―四六〇頁）

此の孟子君臣論は、一種の民約論であるが、楊雲の血氣激昂した時に吐露さしたものであるだけに、このまゝ直ちに鳴鶴平素の信念に充てることは勿論出來ないし、且つ又一般的にいつてもこれはいはゞ支那人の解した『孟子』の思想であるから、日本人の政治思想のそれとは多少違ふものがあらう。然し大體に於いて民は國の本、君は其の代表といふ東洋的民主思想から、かゝる東洋的民約論を生じて來るのは、當然である。これが本になつて又、無道の君には仕へずとか、

罪無ふして士を殺せば大夫以て去るべし罪無ふして民を戮すれば士以て徙るべし。

とか、更に又これも有名な、――

天下の廣居に居り天下の正位に立ち天下の大道を行ふ志を得れば民と與に之に由り志を得ざれば獨り其道を行ふ。

といふ思想が出て來る。而して楊雲は「志を得ざるも獨り其道を行ふに止らず進んで之を天下に行はんと欲する」といふ、こゝに濟民の意義が廣く生かされてゐるのである。

鳴鶴がこの小説の根本思想として、孟子の民權論を引出して來たのは、勿論この小説の世界が明末の支那を舞臺にしてゐるからには違ひないが、然し鳴鶴個人としては、かゝる「民は國の本」、「民は天の代表」といふ如き思想を可成り早くから腦裡に醞釀さしてゐたものに違ひない、その上京以前學塾で作つた文章の中でかういつてゐる。

民是國之本、本固國安、未有其本亂而末治者、云々（去遊民論）

民之所欲、天必從之（藤房論）

以て鳴鶴の頭腦中に如上孟子の思想が如何に久しく浸み付いてゐるかゞ知られよう。

濟民の根本義は以上の如くであるとし、これを實行する手段は如何、それは一言でいへばあくまでも改進黨的な特色を帶びたものである。

元來在上の爲政者がよくその本務を自覺して政治を爲すときは、何も改めて在野の志士が濟民を唱へて天下に奔走する必要はない。太平の逸民とならば足れりである。然るに旣に經國濟民の理想を抱いて天下に同志を求めるといふ事それ自身が、爲政者に本務の自覺なく、濟民の大事を實行する心のないことを語るものといはなくてはならぬ。從つて楊雲等の時代、乃至これにいよく似た時代に當つて濟民の大理想を實現させるには、――

遂に身を以て此業に犧牲とするまでに思ひ定めて計畫するの外なし然らば權豪に對して飽くまで抗爭し正道を說き眞理を唱へ姦邪をして朝に立つこと能はざるに至らしむるまでに公議を鼓動せざる可らず（第十七回三三〇頁）

といふことになる。然るに「抗爭」といへば、人は必らず干戈を動かすのかと思ふ、又事實干戈を動かすことも時勢

が極端に悪化した時には止むを得ない一法であるかも知れないが、楊雲等の考へてゐるのは干戈の途ではない。

吾曹は全く之れに反し正道眞理を根據とし廣く同志を糾合し實力に依據せる讜論を以て濟民の業を遂げんと決心したるなり云々（第十七回三三一頁）

この實力に依據せる讜論とあるところが眼目である。いやしくも讜論正議を唱へる以上は、たゞ空名虚譽を得て滿足し、いざといふ時に手を束ねて爲政者の犠牲とされてゐるなどはいけない。「吾曹は唯正理を唱へて止むべきに非ず正しく之を實行せんとする」（三三二頁）ものである。それではそれに相當した實行の手段がなくてはならぬ。「其の手段といへるは他にあらず。——

我れ能く正道を保護して非道の攻撃を防禦し得べき實力を有する

即ち是である（三三二—三三三頁）。自分達の唱ふる大義には人民を濟はうといふ士が競ふて付くが、人民を苦めて自ら利せんとする輩は、必ず極力自分達に反對する。自分達がその位にも官にもゐずして濟民の理想を實行せんとすると、遂に爲政者から黨人なり叛賊なりとして見られ、強い彈壓をうけるに至ることはいふまでもない。その際この理想を護るだけの實力があれば、假令それを干戈に用ゐずとも、「能く自ら支ゆるに足るの勢を保ち滿を持して發せざるの間に朝廷の自ら愧ぢ自ら戒しめて此民を安ずるの道に向ふを希望する」（三三四頁）ことが出來よう。

然らばその實力養成の法如何。「先づ實力を得ること」を第一の手段とする。次には有爲の士に結び同士を集めることである。即ち金力と智力を味方として權力に對抗せんといふのである。これは第十七回に於て楊雲と司馬駿の間に戰圖された齊民黨の將來の運動方針である、第二十回に於ける司馬駿の趙端に對する獻策も、此の方針を裏書してゐる。

茲に交河縣を距ること百餘里にして蓮山縣といへるあり此縣内に蓮山といへるあり古寺廟を産せしを以て縣に名け

たる程なれば云々（中略）近時鹽山近傍に盜賊蜂起して遂に鹽山の知縣を逐ひ云々（中略）此機を外さず知府を說き賊徒征討の事を趙端司馬驥等の一手に引き受け功を奏せば其報として鹽山を請ひ受け兼て趙端孫遠等を渴仰せる百姓等を此に移して製鹽の業に從事し又趙端の貯蓄せる資材を以て大に貨を諸方に輸し産鹽の利潤とを併せて億萬の富を積み廣く天下有爲の士を募り智と金の力を一手に集めて河間要衝の地に據りて中央の一團居を作り正人君子罪を讒議に得て貶謫せられ或は庶民に編入せらるゝ等のことあれば財を抛つて之を救恤扶助し苟くも國の爲めに心を盡し民の爲めに力を効するものは皆之を保護するの道を設け直隷に接近せる諸省のうちにも銅鐵を産する礦山は總て之を占有して人を移し土民を募り大に其業を興し先づ資財を貯ふるを務め河間を中心として同志の士各處に散在して互ひに聲息を通じ正義讜論を武器となし絕えず朝廷の非政を攻擊せば漸く奸邪を刈るの勢を發かん云々（第二十二回四二一―五二二頁）

改進黨がその黨勢擴張に於て、又政治思想宣傳に於て、直接行動を避けて專ら言論の力によること、自由黨が腕力を第一視し金力智力を第二第三視するに對して專ら金力と智力によつて事を濟さうとし、腕力には防衞の消極的使命より認めぬことは、例へば鳴鶴の『腕力之說』（一）の如きものを一讀しても知られるところであつて、格別の博引傍證を要求する程な事新しい結論でもない。楊雲司馬驥の濟民策、實力養成論、金力智力集中主義の如きは、何れも皆あくまでも改進黨的な特色を帶びたものであつて、流石は改進黨領袖鳴鶴の政治小說といふべく、鳴鶴の心では立派に超黨派的な政治思想を宣傳したつもりでゐたかも知れぬが、『偉業錄』は、この點で上乘な改進黨主義宣傳小說となつてゐる。

なほ鳴鶴は此の資力第一主義を理想として宣傳したばかりでない、自分も實行しようとし、朋友達が仕官するのを見向きもせず、自分は却て實業方面に着目し、或は壬午銀行の創立に關係し、又甲信鐵道會社を目論んで社長となつ

たりした。

勿論この小說の改進黨的特色を擧げれば、以上主眼の點に於てさうであるばかりでなく折にふれ機に臨んで、行動の規準、處世の方針等には必らず鳴鶴の改進黨的立場が顏を出してゐる。例へば、第七回孫逵が、楊雲と魯芙に對して青年にありがちな急進輕躁が大功を成すに邪魔だと聞かせるあたり、第八回、楊雲が馬忠に對して、偉業を成すには忍耐を守らなくてはならぬといふところは、共に改進黨流の實着主義老成主義の現れと見て可い。更に又第九回、楊雲が馬忠のやゝもすれば血氣の勇にはやるのを戒め、武勇はいざといふ時にのみ用ふべく決して濫用してはならぬ、とて武勇蓄積論をしてゐるところ、第十四回、同じく楊雲が馬忠に對して自重論を說き、馬が官吏の横暴惡人の横行に自暴自棄となり「他人我を待つに暴虐を以てするゆゑ我豈獨り正路を踏むべけんや」と叫んだのに對し、——

足下の意若し他人暴虐を爲すゆゑ我も亦暴虐を施すべし他人正路を履まざるゆゑ我も亦正路を蹈むべからずといふにあらば到底吾曹の同志とは做し難し官府暴威を振ふて民を賊ふ時民能く道を守り理を執りて正義を鳴らし黨議を唱へ以て弊政を改革する等のことをばなさず人賊をなすゆゑ我亦賊をなすべしと揚言し以て上下相害ふは是れ我邦の弊風にて實に厭ふべき限りなり（二八五—二八六頁）

と說くあたり、さて又第二十四回、楊雲が濟民の爲には干戈に訴へても可也と放論して遂に奇禍を買ふあたりは、單に改進黨主義の非腕力論を主張してゐるばかりではない。更に進んで當時腕力を重視し、やゝもすれば暴動を起激した自由黨に對する警告なり諷刺なりとも見るべきである。例を引くことは以上で止めて置くが、此の小說の改進黨的特色は勿論以上の箇所で止まるものでないことは、承知を願ひたい。

この種の著作の常として、又當時の一般状勢、政界の現象への諷刺、内閣某等の寓意等も少くはない、吾等は、そ

れを到るところで窺察することが出來るが、これも矢張り幾つかの例を示すのみに止めざるを得ない。例へば第一回その他に重税のため地方の荒廢した有様を述べたのは明治十八年秋この小說起稿當時の日本農村の現狀である（報知新聞では視察員を派遣してゐる）。第十二回。監察御史鄢懋卿の丞相嚴嵩に對する建議の趣旨（近時朝政を誹謗して國事を論議するもの民間に黨を樹て其害は後漢の末の黨人にも劣らぬ有様にて其徒益蔓延して政治を横議すること愈々甚しきに及ばゝ由々敷大事を惹き出さん宜しく其氣焔未だ熾んならざるの初めに之れを撲滅して原を燎くの患を絶たざる可らず斯くするには威權ある朝臣各州治若くは縣治に莅み最寄の守令を招集して密議を遂げ處士の横議するものあらば悉く法を以て之れに中て又は事を設けて芟除し民心の之れが爲めに煽動せられて亂を思ふの路を杜絶するに若かず云々）（二〇六—七頁）は明治十四五年以後政府が度々地方官に訓令して志士の集會交通取締りを勵行せしめたのと同一轍に出る。又許儀の如き密偵の活動も自由黨裏面の事實その他から脫化して來たものといつて可い。第十五回第十六回あたりに、縣官が人民の好土地を强制的に買占める物語が出てゐるが、これなども當時地方民間に往々實例があつたものであらう。劇仇その他の惡知縣が何をモデルとして描かれたか、何を諷刺してゐるかは、いふまでもない。承相嚴嵩も、その專權振りは何か諷するところがあるやに見うけられる。更につきつめて考へると、この小說の題目たる「濟民」といふことも明治十八年頃の民間の不況悲慘から思ひついたものではあるまいかといふ氣もするが、さう考へると、この小說が何故に十八年に至つて筆を執られたかといふことも、よく分かるのである。又時々外寇に惱むことが問題にされてゐるが、（不用意のためいつも失敗する）、これも當時の日本の國防的立場について諷するところがあつたからに違ひない

最後に此の小說の深い大きな寓意について一言する。それは主人公の楊雲の素生についてだが、楊雲は日本浪人と支那淑女の混血兒である點を想起して頂きたい。楊雲は支那人として育つたが事實は日本人なのである。此の楊雲が

支那幾億の民衆を救濟しようといふ大志を發し而して恐らくこの小說ではその大志を成就することになつてゐるが、これは何を意味するか。即ち支那は畢竟日本人の手によらずば救濟覺醒され能はないといふ意味である。又魯英は何を意味するか、これは多少穿鑿に墮するも、假に魯國と英國を表象したものであるとせば、日本を代表する楊が魯英と結婚して共に支那救濟の大業に當るといふことは、日本と魯國乃至英國が提携して東亞保全に盡力すべしとの主張を暗示したものといはれなくもない。さうして當時又かういふ國策を唱へる論者も、現在あつたのであらう。此の邊に、明治十七八年の淸佛戰爭前後から漸く盛になつて來た東亞問題の片鱗が出てゐるのであるが、これはこの小說として最も注目すべき一點であると思ふ。

註（一） 明治十六年六月四日郵便報知三〇七一—七二號、なほ同年九月三十一日から連載の「詭激ノ政論」中にも非腕力主義、智力、金力主義の高唱がある。

四

『偉業錄』は政治の二字を別にし、小說として何ういふものか。一言でいへば、種々の缺點もあるが先づ此の頃續出した政治家の小說の中では上乘の方であり、今日でも一讀するに足るものゝ一つであらう。元來鳴鶴は單に政治小說を書くといふつもりだけでなく、小說としても立派なものにしたいといふ慾があつた。それで内容なり政治的イデオロギイなりは以上の如き東洋的なものにしたが、これを盛る形式は最新最善のもの（勿論鳴鶴として）にしたいと工夫した。その工夫の結果が小說としての『偉業錄』の到るところに顯然歴然と見えてゐる。

このか小說の内容思想が、以上の如く比較的古い東洋風なものであるが、鳴鶴はこの内容を盛るに能ふ限り最新の西洋的なものをもつてせんとした（この邊に又一つ鳴鶴の東西調和の理想が藏されてゐると見てもいゝかも知れない）。次

にその數例を指摘して、私の言が妄でないことを證して置く。

先づ第一回は逆寫法で、當然、第二回三回で說明される一エピソードを拔き出して大寫しにして見せて、爾後の事件に對する興味を誘つたもの、先づ全然西洋風といつてよい。それから第六回馬忠の心事を描くところ、第十一回魯英の心中の動きを示すところなど、その他澤山の例があるが、一種の心理描寫を試みてゐる點、この心理描寫が個人を生かしてのことで、從來の東洋小說にない行き方である。殊にこれもその心理描寫の一例といはれるかも知れぬが、篇中の人物が獨語の形式で自己の心中のことを述べ立てるところがある。第七回楊雲の獨語、第二十四回同じく楊雲の獄中獨語の如き、全く東洋小說にない新體の敍述形式といつてよく、鳴鶴が西洋小說の耽讀から借用したものに違ひない。鳴鶴の小說改良的野心の現れとしても注意すべきだが、それよりも小說敍述形式史の上からは更に注意されるべきものではなからうか。同じ心理描寫といつても、第十八回、楊雲が谷夫人から不義の戀を仕掛けられて日に弱つて行くところを側面から示した敍述も、一寸心にくい工夫であらう。第二十四回許儀が法廷に於ける態度口吻の如きも、和漢小說の白洲物とは違つた味で、全く西洋探偵小說あたりの裁判の條から脫化したらしい臭味がある。第二十六回の詳敍法も從來の東洋小說では考へられない試みである。最後に、一二特筆すべきことがあるが、それは第十一回楊雲と魯英の結婚論であるが、こゝで著者は此の二人を全然西洋流の文明社會にゐるものゝ如くに扱つてゐる。又第十九回楊雲と魯英と連立つて北京に赴くところの描寫、これも和漢小說の所謂道行と違ひ、大膽自然で、些も逡巡の態のないところも東洋小說としては絕對的新味である。こゝに至つて此等の人物は何百年前の明末時代から一躍して明治の新天地に降り、須藤南翠一流の改良小說的空氣を釀し出すかに思はれるのである。

鳴鶴の小說に對する關心及びその關心を實現しようといふ工夫は、以上の諸點を讀めば一斑が分かるに違ひない。

テクニクの方からいふと、鳴鶴も多少の準備をしたとはいへ、先づ素人であるから、趣向の立て方、描寫法、人物性格等で種々な小說から學んでゐる點が多いのは止むを得ない。就中此の點で負ふところのある小說は『葉思談』、『經國美談』、『水滸傳』等であるが、第二回楊雲が父の忠言を拒んで天下周遊に出ること、第十回楊雲が魯英に對して、男子は艱難の途に上つて心膽を練るを要すと語るところ等は『葉思談』の面影の殊に顯著なるものがあり、又所所の戰鬪、馬忠の奮鬪を描くところは正しく『水滸傳』から來てゐる。『經國美談』を學んだ痕は例へば第十三回の楊雲が負傷して水に落つるところと、『經國美談』のペロピダスが水中に落馬するところと比較して見ると明瞭であるが、それよりも總體の叙述の態度文章に於いて甚だしく似たものがある。

楊雲の性格は幾分理想化されてゐるが、矢張り『葉思談』のケネルムを粉本としてゐるところが多い。仕進を好まず女性を近づけず、少年にして老人の如く、凡てその意見、行動、言語、實によく似てゐる。たゞケネルムの人生にあくまで消極的なるに對し楊雲は積極的理想をもつてゐる點だけは違ふ。性格描寫としての楊雲は成功してゐない。

男裝の魯英も、ケネルムが助けた男裝少女から思ひついたところがあると思ふ。魯英の性格は苦心を要したらうが、その苦心だけに表現されてゐるとは思へぬが、然し表面ではあくまで男子であり、衷心はあくまで女性的な考へを失つてゐない點で、不自然な難しい役割が可成りの程度にこなされてゐる。馬忠にたゞたゞ奎達の寄生といふ外ない。人間としては面白くないが、性格だけは趙端が面白く描けてゐる。司馬讓は東洋流の軍師型の人物で、これだけは西洋風が少ない。羅尚、劉抗、許儀、此の三人は何れも一致するところがあつて描出したものに違ひないが、專制家羅時は恐らく歷史上の人物であるから別として問題視すべきは劉抗（地方長官）、許儀（密偵）である。此の二人は恐らく作者がこの小說を執筆した當時を眺めたに違ひない實在人物から抽象して、小說的に描き上げたものであらう。それだけにその人物に現實的な興味があり、その性格がいかにも現實味を帶びてゐる。殊に許儀がさうである。

背景は支那の詩文小説歴史地誌等に對する鳴鶴の知識から想像で捏ち上げたもの、この點は『經國美談』と同じことであるが、然し年代も地理も近いだけに鳴鶴の方が何割か損である。概念的でかさかさした空漠とした印象を與へるのも止むを得ないとして、矢張りこの事が、小説全體を無味乾燥にして、潤ひの少ない、オアシスのない沙漠の如き趣きをもたしめることは、事實である。

小説としての『偉業錄』の缺點については、一々擧げかねる程澤山ある、例へば楊と魯の關係にしても、他の事には驚くべき慧敏な楊雲が魯の女であることには何年間も氣がつかぬとか、又あれ程思慮周密な楊雲が詐儀の人物を看破出來ず、うかうか捕はるとか、その他描寫上性格上の事でいへばいふべき事は實に多い。然し今はそれを一々實例について示してゐる暇はないから、たゞ一つの重大な缺點だけを擧げて置く。それは、感情の熱が餘りに少ない事だ。この小説もさうだし、『經國美談』についてもいへることだが、成る程巧く考へて上手に組み立てゝあると感心はしても、兎もすると平板單調な感じを與へ、往々讀み通せぬといふ叫びを出させるのは、讀者を感情的に動かさぬからである。人に説くのは理智でいゝが、人を動かすには感情に訴へなくてはならぬ、感情には感情で應ずる。此の感情で動かさぬところは、改進黨流の短所であり、同時に改進黨派の政治小説一般の短所缺點でもある。理智的では可成り巧く出來てゐるに係らず、その藝術的效果に於いて、テクニク上の比較からすれば論するに足らぬ自由黨側の政治小説に劣る場合のあるのは、この感情の力の弱さのためである。説くことは實に至れり盡せりに説いてあるが、感激がない。『偉業錄』を讀む人も往々かゝる讀後感をもつて卷を掩ふことであらう。

『偉業錄』研究の前記で、私は此の小説の執筆が『經國美談』の出現に刺戟を受けたと書いた。それで今この研究を終るに當つて、兩者の對比を簡單に試みることにする。

先づ『經國美談』の舞臺は西洋であり、『偉業録』は東洋である。又年代が、前者が西洋古代であるのに、後者は東洋の比較的近代である。中心思想が、前者の西洋民權思想であるのに、後者は東洋民權思想である、主題が、一は「經國」と表すれば、後者は「濟民」と對句を取る。共に小說改良に意があり、小說として叙事その他に種々新工夫を凝してゐる。全體の文章に於ても、後者が前者を模した痕が多い。總體としては、『偉業録』が『經國美談』を目標としたといふに間違ひはなく、小說としても前者は明らかに優つてゐると斷ぜられるが、部分的には『偉業録』に一二優點のあることが認められる。例へば、『經國美談』はあまり史實を偏重し、構成を古典的に窮屈にし、威波能（イパミノンダス）、巴比陀（ペロピダス）、瑪留（メルロー）の三人を仁智勇の三德に當てはめた等の評をうけたに對し、『偉業録』はかゝる古典的構成を比較的破つて、やゝ自由に近代小說めく創作的分子を取り入れてゐる。この點は確に『偉業録』に幾分の長所がありはせぬか。然しこの點も、勿論鳴鶴が龍溪の小說の繩張りそのまゝを踏襲するを潔しとせず、強て對立の工夫をした一條だと見れば見られるのである。

尾崎學堂の『新日本』について

政治小說『新日本』研究前記

一

學堂の『新日本』の研究に於いても、凡て鳴鶴の『濟民偉業錄』の例に倣ふこととし、先づ前記から書く。然し鳴鶴と違つて、今日尾崎學堂の政治的閱歷なり人物なりは公知の事實となつてゐるから、前記の中でも閱歷なり性行一斑なりの敍述は止めにして、直ちにその小說觀、小說を如何に考へてゐたかといふ點から書きたい。

改進黨の花形たる若き學堂が、小說稗史戲曲の如きものに關心をもつてゐたといふことを語る資料は比較的澤山ある。天性の嗜好かそれとも紳士の嗜みとして修養したものか知らぬが、彼は文學に相當の關心をもち理解をもつてゐた。それは明治二十年十月朝野新聞へ入社する際に同新聞改革案（一）に、特に小說を掲載することを主張してゐるのに徵しても、又二十一年洋行中の見聞錄たる『米歐漫遊記』中に彼の遊んだ國々の文學社會の傾向、小說詩歌の梗概等を特に紹介（二）してゐるのに徵しても、明白に看取される。その他此の種のものはまだまだ多くあらう。然し學堂自身の小說觀を纏めて窺ふべき適確な資料は甚だ少ない。『新日本』初卷の序に――

小說ノ義タル極テ廣シ之ヲ大ニスレハ宇宙ヲ包羅シ之ヲ細ニスレハ毫釐ニ攝ス以テ憐香偷玉ノ痴情ヲ說クヘク以テ經國濟民ノ大計ヲ講スヘシ邦儒ノ小說ヲ卑ムハ未タ其何者タルヲ知ラサルカ爲メノミ

といふ數言が見えるが、これとて僅に學堂が小說なるものゝ威力を知つてゐたといふことを漠然と示すだけで別に纏

つた考へを見せたものではない。强ていさゝか變つたものといへば、『雪中梅』（末廣鐵腸著）の序文があるのみであらう。この序とて單に他人の小說に序したものと思へば、一種の空念佛式の放言かとも疑へるが、然し丁度この序を書いた時には、學堂自身の政治小說が出來てゐた（少くとも初編は）ことを考へると、必ずしもさうでないことが分かる。

學堂は龍溪、鳴鶴等に比較すると、より一層政治家意識が强かつたらしく、小說を論ずるにしても徹頭徹尾政治家の立場を離れてゐない。『雪中梅』序の小說論は、先づ政治家にとつて小說の必要なる所以から說く。

身を百億に現して隨時化導の方便を施す是れ菩薩乘の所說に非ずや今日吾人の期する所は此の民を化導して國家の利福を增進するに在り其職任の廣大重要なる豈に啻に佛徒の衆生濟度のみならんや故に今の政治家たる者は固より身を千萬億に變現して隨時化導の方便を施さゞる可からざる也然らずんば何を以てか三千年來昏々睡眠する三千餘萬の蒼生を覺起して富强文明の新世界に入らしむるを得ん此故に政治家は亦新聞記者たらざる可らず亦道德家たらざる可らず亦學者著述家事業家たらざる可らず特に身を小說家に現し錦心繡腸を鏡花水月の幻境に發露し以て大聲をして俚耳に入り易からしむるが如きは今日我國の政治家たる者の最急方便たりとす末廣君鐵腸早く玆に見る所あり旦には身を新聞記者に現して侃々諤々時弊を痛論し夕には身を小說家に現して世人をして拍案快を呼ぶの際知らず識らず政界の妙味を嘗めしめんと欲す其意を國家人民に用ゆること寔に深しと云ふべし

文中鐵腸の卓見を褒めてゐるのは、畢竟自ら語るものだと見ても可い。次の一段は小說の分類から政治小說の形式論めくものに及ぶ。

聞く小說なり之を分ては Novel, Romance の二大部類と爲る Novel とは何ぞ人情を基本として好奇者の喜ぶべきの言行を記述して之を潤飾し雖も荒唐不經に涉らざる者則ち是れなり Romance とは何ぞ架空にして險大動作の奇談

忽ちにして抜山倒河の言行巧みに之を連綴して敢て荒誕不經に流るゝを忌まざる者則ち是れなり

こゝまでは小説の分類であるが、『小説神髓』を讀みでもしたか又は直接西洋小説から得た知識を利用したのか、何れにしても政治家の頭腦でこゝまで氣がつくといふのは、當時としては異例だ。つゞく『雪中梅』の批評——

此書の如きは Novel の品類に屬すべき者にして意匠俊抜措辭奇警固より尋常小説家の企て及ぶ所に非ずと雖ども一言一行悉く模柢を世間實在の事態に占め從つて空漠荒唐に渉る者なし蓋し政治小説中の最も時事に適切なる者乎

といふところは、やがて移して『新日本』の評とするも可、否らにして新時代の政治小説の形式が Novel の形式によるべきものたるを主張する論となつてゐる。こゝは當時としては注意を要する。第三段は、小説辯。小説の歷史的生長を說いて小説の輕視すべからざるを論じ、併せて社會の第一線に立つ政治家が小説の筆を弄することを辯解したものである。

邦人未だ小説の何者たるを知らず動もすれば之を視て婦女子消閑の玩具にして士君子の手にだも觸るべき所に非ずと爲す焉ぞ知らん小説（今妥當の譯語を得ざるが故暫く小説の二字を以て Novel に充つ以下單に小説と記する者は皆是なりと知るべし）は近世文學上の一大發明にして其文化を贊育せること實に少小ならざるを古の歷史は荒誕怪奇にして編者の想像に成れる者多しと雖ども尙ほ是れ歷史にして小説に非ず支那の古に飛燕外傳穆天子傳等あれども復た一部の小説と稱すべき者なきに非ずや希臘羅馬波耳西亞拉比亞皆な怪譚奇話に富めり而して古昔復た一部の小説と稱すべき者なかりしに非ずや其の之れあるは近世に創まれり試に英國を以て之を例せん始めて小説の名に耻ぢざる者を生ぜるは十七世紀の初めに在り始めて當世現存の事實と人物とを敷衍して小説を作れるは同世紀の央に在り始めて理論上の主義を小説中に寓せるは今世紀の初めに在り之に尋で政治小説あり又之に尋で科學小説あり將に萬有を網羅して遺さゞらんとするは是れ近時小説の進步に非ずや小説も決して輕視すべきに非ざる也

この歴史に基ついた小說重視論は、當時の日本の知識階級なり讀書人には極めて有效であつたらう。日本人の歴史癖はいふまでもないところだ。又この辯解が鐵腸のためかと見えて、實は自家のためにしてゐるのだといふことも、喋喋いふ要がない。最後に然らば理想の小說は何うか。

小說の品類此の如く其れ多しと雖ども概して之を論ずるに實に過る者は怪譚と爲り實に過る者は歴史と爲り傳記と爲り學藝書となる巧みに虛實を湊合し人をして開卷手を釋くこと能はざらしめ而も娛讀の間覺えず益を得せしむる者にして始て有用の小說と云ふべき乎

即ち理想の小說は虛實湊合の興味と有益といふ二つの要素をもたなくてはならないわけである。前々來の論を合せていふと、Novel といふ新しい形式をとつた、想像的興味の豐かな新功利小說、さういふものが學堂の理想の小說だといふことになる。これは當日に於いては『雪中梅』に對する理想といふよりむしろ希望であるが、而も同時に自家の政治小說『新日本』の目標を示したものでもあると見て可い。

たゞ學堂は、こゝまで踏み込んで小說論をしながら、小說改良についての抱負を公然と發表してゐない。かゝる抱負や全然『新日本』の著者學堂になかつたとはいへないと思ふが、然し彼が敢てこの小說を提げて小說改良のことに自ら當るといふ意氣を積極的に示してゐるところはない。學堂の如く小說重視が本心であり、又新しい小說に筆を執つて見る熱心がある以上、その熱心があらゆる意味で佳い小說を作ること、即ち小說改良とまで發展して來べき筈のものであらう。然しそれがこゝまで及ばなかつたといふのは、學堂の小說重視論には多分に政治宣傳的なものがあるのだといふことを覺えしめるに十分である。學堂のかういふ考へが、『新日本』の出來榮えに反映してゐることもいふまでもなからう。

二

前記の第二は『政界奇觀・經世偉勳』についてである。『經世偉勳』は如何なるものかといふと、これは一言でいへばビコンスフヒールドの傳記である。

> 此書ハ微侯ガ卑賤ノ一寒生ヨリ起テ二タビ大宰相ト爲リ歐洲一代の名士ヲ叱咤凌駕シテ雄名ヲ天下ニ轟カセル履歴ニ基テ最近五十年間ノ英國内治外交史ヲ叙述セル者ニシテ政治ノ得失、制度ノ沿革ニ至テハ之ヲ叙スル事特ニ詳密ナリ（廣告）

即ちビコンスフヒールドの傳記ではあるが、寧ろビコンスフヒールドを中心とした英國政治外交史といつてゐるものである。

> 讀者微侯カ豪快沈痛ナル言行ト諸英雄ガ智略ヲ闘ハスノ奇觀トニ眩迷シテ手卷ヲ離ス能ハサルノ際知ラス識ラス制度ノ得失、内治外交政策ノ秘機、及ビ歐洲最近五十年間ノ雄壯快活ナル歷史ヲ領得スルヲ得ヘシ

即ち『經世偉勳』は正面からいへば決して政治小說でも小說でもないのだが、これを著作した學堂その人の用意とビコンスフヒールド自身の小說的經歷とが相俟つて、この小說ならぬ『經世偉勳』を立派に政治小說同樣たらしめてゐる。少くとも政治小說と同じ效力あるものたらしめてゐる。

學堂その人が本書を著作した用意は如何。吾等はそれを本書の凡例の第一條に於いて見るを得る。學堂によれば本書著述の主眼は、凡そ五つある。第一は「英國近世の大政治家微若稗德侯通斯黎理（ヂスレーリ）一代の内治外政策を略叙し世人をして歐洲政治家の實狀を知領せしむるにあり」云々、これは擧げていふまでもない當然のことである。重要な點は第二以下にある。第二に曰く「世人として勞苦を覺へずして天下無双の良制度と聞へたる英國憲法の眞面目を了解せし

むるに在り、」そのためには「憲法上の要義は務めて之を議論叙事の間に挿入し其理義難澁なる者には付するに解釋を以てせり讀者徴炭が言行の奇異痛快なるを見て拍案賞稱するの際覺へず英國憲法の要義を領するを得べし。」第三は一寸變つてゐる。「世の農利を重んずることを知らず妄に課するに重税を以てせんとする者の惑を同へすに在り故に農利を主持するの言論は務めて之を採錄したり、」これは當時の改進黨の立場、改進黨といふよりも一般民黨の租税省減の主張を寓したものである。第四は、「世の政治上に志ある者をして演說辯論の軌範を得せしむるに在り、」第五は、「暗々裡に智謀權略は遂に誠心實意に勝つ能はざることを證明するに在り」云々。この第五も、當時の在朝政治家に諷するところがあつたことは、勿論のことゝ見て可い。以上五項を一言でいへば、「國會政治の模範」(三)を示すためといふことになる。學堂がかゝる用意を、この書で如何に具現し、政治小說ならぬこの書を如何に政治小說化したか、如何に政治小說同樣乃至以上の效果あるものにしたか、いさゝか書中に即いて檢してみやう。

先づ政治一般についていへば、前後兩編を通じて憲法政治なるものゝ模範を示さうとしてゐるところが見え、同(一三八頁)には內閣の更迭と人民の信任との關係、內閣は人民の信と不信によつて動くべきことを說き、英國憲政運用の妙を敎へんとして居り、後編(一五〇頁)には內閣大臣共同責任の說から內閣大臣なるものゝ公器なることを說示してゐる。その他前編(一六〇頁)では政治の要は人民をして倦まざらしむるにあるを述べ、政黨政治の必要を諷してゐる等擧て盡し難い。政黨人としては後編(一四八頁)公私の別を明に立て、私交の故を以て公の功を認めぬといふことはなく、公事によつて私交を害せぬを理想とし、敵黨の人々にても賞むべきは賞める。尚ほ後編(一九一頁)には政治家の出處について論じてあるが、これは當時の爲政家に對する諷刺と見て可い。前編(一四六頁)には、政事犯を常事犯と同一視するの不可を論じてあるが、これは學堂當時の政事犯人が多く常事犯をもつて論じられたのに對して諷するところがあるのに違ひない。前編(二五六頁)印刷の自由を論じてあるところ、英國の言論界の自由を羨望してゐる

るらしき口吻、これも諷示するところがあるに違ひない。同じ前編（一三四頁）チヤーチストの暴動を詳しく叙し、過激主義の害を諷してある如く解されるところは、正しく十七年以後自由黨人士の暴動行爲を指斥してゐるものと見て可い。前編（一一八頁）外交には不干渉を要すといふ論、又同じ前編（二一二頁、二二四頁、二二九頁）農民の負擔過重なればこれを輕減するを至當とするといふ論、同（三一五頁）國權伸張のため軍備擴張は可なりとするも兵の本は金力にありとする論、これ等は自ら學堂所屬の改進黨の主張を宣傳しつゝあるものであらう。殊に前後兩編に亘つて保守黨が權略詐謀を平氣で用ふるに反し、英國改進黨が正々堂々民望によつて動くところを書いてあるのは、直ちに移して日本風にも及ぼし、當時日本の保守黨が如何に權詐百端に終始してゐるか、改進黨が如何に正々堂々と國利民福の増進に努力しつゝあるかといふことを示すつもりであらう。後編は殊に政黨政治の駈引について實際的知識を與へるやう種々説明を加へられてゐる。後編（二〇頁、二二頁）ビコンスフヰールド夫人のことから泰西社會に於ける政治家の夫人の覺悟を說き、政治家が又婦人の後援で志を成就することを說いてゐるのは、當時漸く盛んになつた日本の社交界、婦人社會に效ふるところあらんとするものである。殊に後編（六頁—八頁）の西洋社會に於ける小說家の位置を論じて小說家の爲めに氣を吐いてゐるのは、當時日本の社會でも文學なり小說なりが漸く重視されつゝあつた事實と對照して、矢張り寓意があるものであらう。

以上によつて如何に傳記文學たる『經世偉勳』がその著者の宣傳的意識の添加によつて政治小說化されてゐるかといふことは分かるが、更にその政治小說化を一層確實にするものは、小說的文字が多いことである。この小說的文字が學堂の小說家的技倆なり嗜好なりを示すと共に、この書に十分小說稗史的雰圍氣を釀生させてゐることは事實である。例へば次の一節を讀むと可い。

侯は元來豪邁不羈にして眼一世を曠ふし人を人とも思はぬ氣質なれど婦女子には鄭寧深切にして善く其機嫌を取り

たればなり侯が少年才子を以て遍りに夫人令嬢の知遇を受るに當ては人皆な侯の爲に一箇の風流才子にして終らんことを危めるに侯の意想は高く常人の上に出で一朝詐勤社交の快楽を振り棄てゝ海外漫遊の長途に上れる前其姉たるサラー女史に贈れる書信中に云へるあり

戀慕（戀愛）ヲ戀慕ヨ私開女中戀慕ト容顔トノ爲メニ結婚致候者ハ何レモ其細君ヲ打擲スル乎然ラズンバ之レト別居致居候私儀モ一生涯ノ長キ間ニハ種々ノ誤謬ニ陷ル事モ可有之候得共決シテ戀慕ノ爲メニハ結婚致間敷候畢竟ニ戀慕ノ爲メニ結ヘル婚姻ハ後來不幸ノ基ト確信罷在候

右の一文をして他人の筆に成らしめは讀者敢て之を怪まざる可れと繊侯は男自慢の好少年と云へる評判さへ受け其服裝容貌には少女も及ばぬまでの注意を加へ且つ其數多き小説は何れも多情多恨の風致を極め已れ自ら絶世の風流才子を以て任ずるの形跡躍て紙面に露出するなれば之を讀む者誰か其婚姻説の意表にして頗る高尚なるに驚かざらん是より數年の後侯は一夕リットン氏の宴會に招かれたるに來會の一夫人中に特に侯を見んことを欲するものありとて主人の紹介されしは即ちメイドストーンの有力者と聞へたるウェンドハム、レウェス氏の細君なりきと云ふ（後編第九章一〇頁—一一二頁）

此のレウヰス夫人こそは後のビコンスフヒールド伯夫人となる女性であるが、夫人とビコンスフヰールドとはその小説『ヴィヴィアン・グレー』を介して結ばれたものであつた。兩人が知り合ふに至つた事情は、全くそれ自身小説といつてよく、咢堂のこれを叙する文字も小説的興趣を帶びてゐることが看取されるであらう。この書にはかゝる小説的文字が少くはない。

咢堂は、この『經世偉勳』の一書によつて世人から深くビコンスフヒールドを景慕するものとされ、その衣鉢を傳

へんとしてゐるのだと評判された。ところが、學堂の政治的立場とビコンスフヒールド卿ヂスレーリのそれとは違ふので、この點から學堂を責める者もあつた。

私かに怪む、足下身改進黨に列しながら（假令自ら號して其客將とか別働隊長とか云ふにもせよ）異主義なる英國保守黨首領の言行に心醉して之を模倣せんと欲するを。足下もし說有らば幸に明教を垂れよ（四）。

これに對して學堂はかう辯解した。

抑もヂスレーリは其心術の邪正を問はず、單に其材略を論ずれば、實に天下古今有數の英傑なり。僕の自ら揣らざるを以てするも、豈其企及すべからざるを知らざらんや。且つ拙著經世偉勳の如きは、素と國會政治の模範を示し、兼て具翁の心志政略を反面より說明せんがために著せる者のみ。決してヂスレーリの人と爲りを景慕せるがゆゑに著はせるものにあらず。故に先きに之を具氏及び英國改進黨の諸首領に寄贈して、聊か其主義言行に賛同するの意を表せり。僕不敏と雖も豈に自ら揣らずして微侯の衣鉢を傳へんと欲するものならんや。僕が平常景慕する所の人物は自ら他に存するあり。

これによれば、學堂の眞に好きなのはグラッドストーンであつて、ヂスレーリではないかの如く聞える。『經世偉勳』の著もヂスレーリを傳せんためといはんより、グラッドストーンの高潔を描かん爲めといふ事になる。前に引用した著作の主眼の第五を見れば學堂の此の言も事實であらう。然しこゝで學堂はヂスレーリを景慕しないと斷言してゐるのはいさゝかよそ行きの言ひ方で、學堂自身恐らく氣がつかぬかも知れぬが、學堂とヂスレーリとは、實に似た所の多い人物であり、從つて世人が學堂をもつてヂスレーリの衣鉢を傳へるものだと見たのも、さう間違ひではないのである。二人の似たところは、第一その年少にして大志を發し、總理大臣を目ざしたところが似てゐる。第二天才早熟なところがある。第三その淸貧、金を散じて士を養ふ意氣が似てゐる。第四はその政治的立場で、これが最も注意を

要する點であるが、ヂスレーリは成る程保守黨である。然しこゝで考へなくてはならぬのは、ヂスレーリは保守黨であり乍ら英國改進黨のもつ急進政策を行つた人である（例へば『經世偉勳』の後編第十章、敵の秘書を竊て云々の條を讀んで見よ）、然るに學堂は漸進黨に近い改進黨にゐて、自由黨に接近し、自由黨の急激な改革意見と步調を合して改進黨を引摺らうとした人である。これは同じ改進黨員にありながら彼だけ自由黨と同じく保安條例を蒙つたのでも分かる。この點でもやはり似たところがあつたのである。第五、容貌身邊の修飾に意を用ゐた點なども二人相似てゐる。學堂も、當時野蠻な服裝の政治家が多かつた中で、決して儼とした紳士の服裝を崩さなかつたとは、當時の目擊者の談である。

以上で前記を終つて、本文に入ることにする。

註（一） 明治二十年十月十六日朝野新聞
註（二） 例へば同二十一年十月三十日――十一月三日朝野新聞
註（三） 明治二十三年三月三日郵便新聞、談叢欄（學堂偶抄）
註（四） 同

政治小說『新日本』研究

一 『新日本』

政治小說『新日本』は明治十九年の春、學堂の病中に立案され、大體此の年の秋頃までに（少くとも初卷は）脫稿

したものである。初卷の刊行は十九年十二月、第二卷のは二十年三月である。廣告によると此の作には「驚天動地」と角書がある。

この章を書いてこゝまで來たところ、或る用事で學堂に『新日本』のことを質問する必要が生じたので、學堂に會つて談話を筆記した。その筆記から『新日本』著作の動機のところだけ引くと次のやうである。（「國語と國文學」昭和九年八月號「政治家と文學意識」）

學問の目的は治國平天下にあるので私などが『新日本』を書いたのも趣味からでもあつたかも知れぬが、大きな目的は治國平天下の主張によるのです。（中略）當時の政治小說、末廣の『雪中梅』柴の『佳人之奇遇』などは讀んでゐて、その他矢野の『經國美談』には特に感心しました。『新日本』は之等の小說の刺戟を受けて大いに新しい日本を建設しようと思つて書きました。（下略）

これで『新日本』起稿の動機なり理想なりは大體わかるが、なほこれを起草した當時學堂は何ういふ西洋小說を讀んでゐたか、それを一瞥して置きたい。

當時は、リットンや、ヂスレリ、などの政治家の小說が讀まれ、私なども愛讀しましたが、私の讀んだ記憶にあるものは、ユウゴオ、デッケンズのもの、及びビーコンスフィルドの小說エンディミオン、ッレイク夫人の小說ジョンハリファクスでした。

これだけでも大分有益である。それは種々な點で『新日本』の註釋となるからだ。

さてこれから『新日本』に直接打突つて、直接に聞くことにしよう。

『新日本』の初卷の自序で、學堂は、彼にこの小說を著作させた根本動機たる「新日本」運動の必要をかういつてゐる。

外交開ケテ舊日本ノ柱石摧ケ幕府倒レテ日本ノ萌芽發ス爾來本邦ノ大勢ハ駸々乎トシテ舊ヲ棄テ新ニ就クノ方途ニ

向ヒ之ニ順フ者ハ成リ之ニ逆フ者ハ敗レタリ、政治ノ更革、社會ノ改良、一トシテ新日本ヲ構築全成スルノ運動ニ非サルハナシ國家ノ盛衰強弱唯タ舊習ヲ打破シテ新日本ヲ製造スルノ遲速如何ニ在ルノミ

初卷の第一章は、學堂居士が『新日本』を著くに至つた動機を重ねて説明したものであるが、そこでも矢張り新日本建設の必要を呼んでかういつてゐる。

今本邦目下の形勢たる素より土耳機の末路に比すべきに非ずと雖ども今にして早く朋黨の私爭を芟除し壯武の氣習を養成し偷安姑息の惰風を一洗するに非ずんば國運の衰頽吾れ未だ其底止する所を知らざるなり略して之を云へば舊習を打破して新日本を製造するに非ずんば國家永く其獨立だも保持する能はざらんとす復た何の暇有てか富強隆盛の幻夢を結ぶことを得ん云々

此の「新日本」運動は、これでは何の點から「新日本」の建設に努めるつもりのものであるか、學堂の所謂「新日本」の理想は具體的には何ういふものであるか。その詳しいものは、即ちこの小說を讀めば分るわけであるが、それの大略は『新日本』第二卷の自序に見えてゐる。曰く——

國家外交上ノ利害ハ支那ノ關係ヨリ大ナルハナシ故ニ之ニ關スル二三ノ策略ヲ論述シテ世間多少ノ愛國者ニ訴フ

國內ノ弊害ハ人民ノ柔弱卑屈ナルヨリ大ナルハナシ故ニ元氣ヲ鼓舞作興スルノ新策ヲ提出シテ當局者ノ參考ニ供ス

方今男女ノ關係ヲ見ルニ沒風流殺風景ノ極ニシテ殆ント禽獸ノ偶ヲ選フニ異ナラス故ニ精神高尚ナル模範ヲ畫テ改良ノ方針ヲ示ス

世ノ利害ノ爲ニ奔走スル者動モスレバ其職分ニ背キ訴訟ヲ濫起シ自由ヲ蹂躙スルノ流弊ヲ免レス故ニ聊カ其醜汚ヲ評論シテ其黨ハ懺悔センヿヲ勸ス

即ち（第一）は對支方針の確定、（第二）國民尚武主義、（第三）男女關係の改良から延いて女性の改良に及ぶこと、

（第四）法による不正不義を絶し、法に對する信賴をもたしめること。此の四項に基礎して新日本の建設を謀らうといふのが學堂の『新日本』運動の全貌である。今日からいふと、疎大な、簡略な、如來にも法三章式な東洋的豪傑風なものに見えるかも知れないが、學堂は畢竟新日本の進路がこゝにあると見た。此の「新日本」運動に、當時の凡ての日本政治家の理想と大同小異的なものであらうが、「新日本」なる標識を掲げて唱へ出したのは、學堂がその始めであり、或は表面上は又その終りであるかも知れない。然し此の運動は（運動といふべく、あまりに孤高な形態をとつてゐるかに見えるかも知れないが）、ともかく或る大きな混沌たる背景をもつてゐたことは事實である。十九年六月十九日郵便報知所載の「新日本」なる社説の如きは、その背景の一片であると見たい（若し又これが學堂の手に成るものであるとしてもその重要さが加はればとて減じはしない。六月といへば恐らく小說『新日本』の起稿直後に當つてゐやう。）

國家萬般ノ事唯タ其新鮮ナラサルヲ憂フルノミ進動世界ニ在テ舊物ニ執着スルハ國家ノ隆運ヲ促カス所以ニ非サル也左レバ制度法律文物慣習ヲ始メトシ有形無形悉皆ノ事物ヲ改新スルハ我官民共同ノ希望ニシテ特ニ制度法律ヲ改良進歩シ之ヲ新鮮ナラシムルノ希望ニ至テハ世人ノ最モ熱心ナル所ナリシモ近時國家困弊ニ苦ンテ活潑ナル政治上ノ運動ヲ爲ス能ハサルニ至レルヨリ世人多クハ其熱心ヲ轉シテ社會改良ノ點ニ向ヘリ蓋シ政治上ノ事ハ人民其意見ヲ實施スルノ前先ツ閣議ノ贊成ヲ得サル可ラスシテ之ヲ得ル事實ニ容易ナラスト雖モ社會上ノ事ニ至テハ則チ然ラス世人唯タ其意ヲ決スレハ政府ノ贊助ヲ仰カスシテ之ヲ施設變改スルヲ得ヘシ決ヲ他人ニ仰クモノハ事小ト雖モ之ニ着手スルノ前ニ於テ既ニ許多ノ煩勞ヲ要シ獨力以テ施設スル事ヲ得ルモノハ事大ト雖モ着手前ニ於テ無用ノ煩勞ヲ要スルカ如キ事ナシ是レ必ス近時ニ至リ世人カ政治改良ノ熱心ヲ轉シテ社會上ノ事物ニ向ケタル一因ナルヘシ兎ニ角舊日本ヲ改良シテ新日本ヲ製造スルハ歐米諸國ト駢馳スルニ至ルノ唯一手段ナレハ苟モ一點國ヲ愛スルノ志ア

ルモノハ皆ナ此處ニ向テ盡力セサル可ラス而シテ事物ハ皆ナ緻密ナル相互ノ關係ヲ有シ孤立シテ獨進獨退スル事ヲ得ヘキモノニ非サルカ故ニ定ニ政治ヲ企圖スルモノハ社會ノ改良モ亦之ヲ企圖セサル可ラス余輩ハ近時世人ノ政治上ノ熱心ヲ轉シテ社會上ニ向ケタルヲ見テ毫モ之ヲ歎セサルノミナラス却テ其必要止ム可ラサルノ順序ナルヲ信スル也夫レ然リ文明ノ制度ハ未開ノ社會ニ行ハル可ラス未開ノ制度ハ文明ノ社會ニ行ハル可ラス社會既ニ改良スレハ政治モ亦自ラ改良セサルヲ得ス政治改良シテ社會益々其面目ヲ一新ス此ノ如クニシテ萬般ノ事物漸ク改新シ遂ニ新日本ヲ現出スルニ至ルハ我カ臣民ノ希望ニ非スヤ（郵便報知新聞二〇〇七號）

學堂の名がやゝともすればビイコンスフヒールド卿デスレーリと結びつけられるとき、學堂の「新日本」運動がヂスレーリの「青年英國」Young England 運動を模倣したと見られ、乃至「青年英國」の暗示を受けたかと考へられるのは、寧ろ當然かも知れない。如何にも口調がよく、東西對偶をなすかに考へられる點は、誠に面白いとは思ふが、學堂が有意無意に模したかせぬかは第二の問題として、先づ第一にこの二つの運動の間には根本的な或る相違が含まれてゐるといふことに想到しなくてはならぬ。それは、「青年英國」運動は、時の青年貴族階級がプロレタリアと連結することによつてブルジョアジイを壓迫するための運動と解されていゝ一面をもつてゐるが、「新日本」運動（學堂主唱のそれのみに止まらず、かゝる名で總稱されるべきもの凡て）はあくまでもブルジョアジイ發展の爲めの運動でなければならぬ。上記社說の末段で「新日本」の擔荷たるものは中等社會にありとしてゐるのも、その意味からして首肯出來るのである。

前章にも引用したが『新日本』初卷の自序には、學堂の小天地觀が一寸見えてゐる。

小天ノ廣キ以テ凡ヲ具シ之ヲ大ニスレハ宇宙ヲ包擁シ之ヲ細ニスレハ毫釐ニ滲ス以テ情天侍辰ノ高情ヲ說ク、ヘノ以テ

經國濟民ノ大計ヲ講スヘシ邦儒ノ小說ヲ卑ムハ未タ其何者タルヲ知ラサルカ爲メノミ

小說の力を大に認めたところは可いとして、矢張り功利的立場からこれを認めてゐるのは、徹頭徹尾政治家型の學堂としてはさもあるべきことである。

二　梗　概

此の小說の人物で第一に主要なのが二人、これに次いで主要なのが二人、都合四人が初、二卷を通じて注意すべき人物である。第二に主要なのは秋野武藏及び佐久間勇で、主人公副主人公の役に當つてゐる。これに次いで主要なのは、秋野の僕大西三郎及び婢萩江である。これを簡單に說明すると、秋野は歸商せる舊幕人の子で、その家は屈指の富裕者である。佐久間は長州勤王家の孤子で、貴顯の身であるが、某學塾にある頃から秋野の人物に見所あるを思ふて深く傾投し、秋野も亦佐久間の爲人を慕ひ、二人莫逆の友誼を結んでゐる。大西は秋野の忠僕、萩江はもと京都の生れで惡人の爲めに神戸の娼家に賣られるところを秋野に救はれたものである。大西も萩江も秋野に心服すること神の如く、又佐久間を見ること、秋野の兄弟に異ならぬ。

さて此處から『新日本』の物語の筋に移らう、筋は、種々道具立を引出して見せてはゐるが、割合に單純なものである。

發端は、大西と萩江の、秋野及び佐久間比較論であるが、これは、時間的には最終末の場面(少くしてもこの二卷でいへば)でなくてはならぬ。これで物語は先づ秋野が佐久間と共同借居して勉學中、父が秋野の健康を案じて漫遊に出すところから始まる。

秋野は大西三郎を伴つて東海道を下る。函根の靈泉に浴し、富士の好景に吟情を恣まゝにし、靜岡に入つて高踏の

隱士に會ふ。二人の談話は幕末の形勢、幕府の優柔から歐米の富强、攘夷和戰の駈引、佛帝ナポレオンの野心、日本擾亂策に觸れる、隱士の意は過去の經驗によつて秋野に忠言を與へるにある。「卿夫れ唯た之を忠愛の大義に問ふて去就を斷せよ得失の爲めに心を動かさるゝこと勿れ」云々、これが隱士の高敎の骨髓であり、著者學堂の本音でもあらう。幕末の形勢で、人が忠良を傷つけて遠ざけること、幕府の優柔から勤王攘夷の美名を薩長に奪はれたこと、歐米の富强と漫りにこれに屈せぬ意氣等は、當時として諷するところがあつたと見て可い。隱士會談の一章は、「新日本」の源流を語るものとして注意されるべきである。

秋野は進んで三郎と桶狹間に今川義元を弔し、名古屋桑名から京都に入る。京都は名高い美人の地であるが、秋野は僅に故老勝區を探るのみで、花顏鶯喉には心を惹かれなかつた。

進んで須磨に於いては、秋野は大金を出して少女萩江を助ける。萩江が節を持して、惡人の言に從つて身賣せぬのに感激したのである。これよりして秋野は一僕の外に一婢を伴ふことになる。

（此の時は恰も改進黨員が大挙遊說の時である。第七章）

秋野は旅中諸處より佐久間に對してその見聞を寄せる。その例として、都の城から發した九州政情の見聞が本書に引かれてゐるが、その要は、改進黨員に會ひしこと、地方小政黨の軋轢甚しきこと、地方民智の低卑、人心一新の新政領の必要、蠻力が文明に勝つ所以の諸論點はある。秋野は遂に都の城から鹿兒島に入つた。

然し鹿兒島で秋野は意外の奇禍に逢ふ。事は萩江から發するが、萩江は今や秋野の人物に服し、誠心を傾けてこれに奉仕してゐる。然しその才色が漸く現はれて人眼に立つので、故知らぬ人は、或は秋野の情人をもつて目するのがある。秋野の旅寓に隣つて薩摩出身の某貴顯の公子が滯留してゐる。これが萩江を一見して魂を天外に飛し、秋野に交を求め、萩江の歡心を買ふに汲々たるものがある。然るに萩江は拒んで聞入れない。公子はこれを秋野があるため

と解し一夜秋野を暗撃する。然るに公子の暗撃は成功せず、公子は却て秋野に誠告をうけるので、益々秋野に含むところがあり、遂に決闘を申込む。萩江が自分から主人に迷惑をかけることになつたのに心配して、身代りにならうとする、勿論秋野は聞かぬ。そこで萩江は三郎と謀り、東京へ電報をうち、秋野の父の手で止めさせやうとする。ところが、父から來た返電は、決闘にはそれだけの理由があるのであらうからそれは止めない。たゞ卑怯な振舞をする勿れといふのであつた。そこで萩江は止むなく一度は自ら決闘場に出て公子に暗撃を加へて止めさせやうとする。然しそれで益々公子が怒り、決闘を思ひ切るところではない。かくて決闘するが結果は公子の負けとなる。然るに宮がこの事を偵知して、公子を咎めず、秋野の行爲を怪しからぬとし、秋野を捉へる。萩江は自首して自分が公子を撃つた旨をいふ。貴顯は公子の決闘を聞いてその輕薄を怒つたが、門下の人々が承知せず、代言人等を鹿兒島に下し、公子の爲めに畫策せしめ、秋野を謀殺の罪に陷入れんとする。佐久間はこの由を聞いて大に驚き、自ら鹿兒島に赴いて、敵黨の邪謀を探り、或は利益により、或は勢力によつて敵の裏をかく。宮もやむなく秋野を放免するが、萩江一人のみ未決監に殘される、公子暗撃の罪が決らぬからである。

勇は秋野に、秋野出來以來の時事問題を語り、佛國の復讐、支那問題等について意見を交換する。それから萩江の出監まで有馬温泉で靜養することにする。

秋野と佐久間は、有馬で前大臣鐵岡武之介一家と遇ひ、懇親な交際を結ぶ。鐵岡の一女操は秋野を慕ふ樣子がある。こゝで佐久間と操の西洋文學談は意外の見つけものであるが、鐵岡と三人ではいつも政治外交の議論ばかりである。問題は日清英の同盟、又は結黨論等頗る切迫したものばかりである。要するに英露の態度を參考して對支態度を定めるのが急務だといふ點では皆同論である(後に詳しく述べる)。

鐵岡一家を中心に當時の上流インテリゲンチヤの文明的社交生活が寫されてゐる。

秋野、佐久間は、萩江の出獄も近くなつたので又鹿兒島に至る。ところが、三郎もゐないし、萩江ももう出獄してゐない。三郎は秋野の電報にて佐土原に使し、萩江は同じ電報にて有馬へ上つたといふ。萩江の有馬行は公子及び代言人等の打つた芝居で、僞電報で釣つたのである。萩江は、有馬の宿について見れば、招んだ主が例の公子なので、驚いて氣絶してしまふ。（こゝで第二卷が終つてゐる）。

從來、『新日本』が三卷以後出版されてゐるか何うか疑問であつたが、今度學堂の直話で三卷以後の出てゐないことが確められた。曰く「第三卷を書くつもりでしたが保安條例に引き懸つて外遊した爲、色々な事情に妨げられて完成することが出來ませんでした」云々。（前記「國語と國文學」參照）

三

『新日本』の政治的イデオロギイは研究前記や「新日本」運動の條々で大體が窺知されると思ふが、今此の作に即してそれを研究してみたい。而してそれには「新日本」運動の四條目（第一章を參照）に從つて述べるのが當然であらう。

第一は對支問題である。この問題は實に第二卷の中樞といつてもよく、第三章以下、數章に亘つて、秋野、佐久間の二人をして充分に討議させてゐる。勿論小說のことであるから將來の假想に基く點もあるが、その邊は當時實際あつた志士の議論の一部と見て差支へがない。

議論の根本は英清同盟の成立（假想）である。此の同盟の目標は露國である。英國は、露國が佛國と接近した結果、ドイツと競爭狀態にあつて一寸東洋方面に手を延せぬのを幸ひとして、アフガンを窺ひ、土耳其及び支那と結んで露國の南侵を喰止める工作をしてゐるわけだ。英露、東洋に事ある時は、支那は北京を解放して英國の出師の足溜りとさせる。その代り支那が西藏及び琉球を領有する件については、英國は支那を助ける。これがこの同盟の根幹であ

る。然るに英國は日本とも相當深い親しい關係がある。若し英清同盟が朝鮮、琉球の問題に及んで來るとせば、日清は正面衝突とならうが、英國はその際何うするか。元來英國は義よりも利を重んずる國だから、利の多い支那貿易は斷絶しはすまい。寧ろ日本を犠牲にして支那貿易の利を守らうとするに違ひない。その際日本は日本としての立場を何うするか。これが新日本の青年志士が憂慮措く能はぬ問題であつた。事實又當時の歐洲の現況や、英清の接近はかかる事態の發生を豫想せしめるに十分なものがあつたのである。

佐久間勇と秋野武藏は鹿兒島に會ふや、この問題を詳論した。卽ちこの際日本の立場としては、進んで英清二國に加盟して日英清三國同盟として露國に當るか、又二國に背いて露國に結び日露同盟するかの二つよりない。佐久間は、日英清三國の同盟を非とし、從つて日露提携を可能と見る論である。

（上略）然るに世の此大勢を覆せざる者徒らに敵ならざるの露國を敵視し日清英三國の同盟を結ぶを以て策を得たりと爲す何ぞ夫れ迂濶なるや露は英清二國の宿敵にこそあれ決して我日本の宿敵には非ざる也今之に對して三國合從の約を結ぶは則ち英清の術中に陷て故なく更に敵國を增加するの道なり而して之が爲めに利する者は英清二國にして我れ獨り其弊を被むるべし故なく敵國を生じて獨り其弊を受るは尙ほ可なり英人の爲めに賣られ日本帝國を以て支那の歡心を買ふの犠牲に供せらるゝに至つては僕實に慷慨憤激に堪へざるなり（下略）第三章一八―一九頁

今日現に英國の支那を助けて朝鮮琉球に力を伸さしめんとするのは、既に日本を賣る端緒を開いたものである。苟も炯眼を以て事を幾微に察するの士あらば——

必ず我が帝國の大患深憂は此に在て彼に在らざるを知るべく又我外交上の長策は英清の術中に陷て故なく露國を敵視せざるに在ること（一九―二〇頁）

を知るべきである。日本と支那の和親は固より望むところであるが、これは一朝にして和親出來る國柄ではない。豐

公使曁以來明治に入つては征臺の役、京城の變等清算すべき幾多の問題を有する。又此の頃琉球問題を蒸し返して、落地回復云々を理由に日本と事を構へようとしてゐる。從つて眞に清國と和親せんとせば、先づ琉球を尙王に返し、昔通り兩屬としてからでないと不可であらう。然し如何に日英清同盟論者でも、こゝまで思ひ切つて國辱的行爲は出來るものではない。且つ琉球の返附がたゞその返附だけで濟めばまだしも、決して返附では濟まぬ。支那は必ずやこれを口實に我を壓伏蹂躙して甘心しようとするのは必然である。だから現在のまゝでたゞ和親々々といつてもそれは出來ない相談である。却て「一たび戰場に見て雌雄を決し砲烟彈雨を以て宿怨を一洗せば或は手を執て興亞の大計を談ずる」時があらうも知れない。

扨て若し果して日清兩國が一度は戰はなければならぬものとせば、日本としては一日も早い方が利である。支那が武力的に覺醒して十分準備せぬうちが可い。若し十分準備をしてからにせば、日本に必ず勝つといふ自信がない。且ついつまでも支那に對して退讓外交ばかりやつてゐたのでは、日本の士氣を萎靡させ、支那をして驕慢侮日の精神を日々に長ぜしめるものである。

秋野はこれに對して、佐久間の非三國同盟論には賛成するが、日清必戰論をば必ずしも必要としない。これは戰備を以て平和を買ふの方で、先づ軍備の擴張を行ひ、これを以て支那を恫喝して外交政略で支那を屈することが出來ると信じてゐる。又一部日本人の個人主義が英國人の宣傳的文獻に影響されてゐることを認め、故らに露國を日本の敵と見るのは反對するが、されぱとて直に北方露國と結んで支那を抑ゆべしといふ佐久間の持論の積極的方面には賛成しないのである。

秋野、佐久間は右局に於て更に此の問答を續ける。即ち日露同盟に對する秋野の疑念を佐久間が説破して、重ねて日清同盟の一事を極論してゐる。秋野の顧慮するところは、——

日露同盟の約若し其當を得ずして徒らに英清二國の憤怨を買ふが如きことあらば是れ實に國家の大患にして上下皆
其弊を免るゝ能はず

といふ點と、――

日清兩國の今日東西に在るは恰も曾て普墺二國の日耳曼列國内に在りしと一般到底並行兩立す可らざるの勢あることは僕之を思はざるに非ずと雖ども細かに觀察すれば二者の間亦多少の差異ある（を免れず）

といふ點とにある。これに對して佐久間は、單刀直入「日本の爲に計るに支那の强大なるを利とする乎將た其貧弱なるを利とするか乎」の問題を提起し、支那富强に赴いた曉には必ずや日本を壓伏蹂躪せずばやまぬと論じ、重ねて今日亞細亞に於ける日清の位置は、曩日日耳曼聯邦内に於ける普墺の位置と同じと主張し、單に同文同俗を理由に東亞同盟の議を唱へる人々は正にかつて同じ理由で普墺同盟を提唱した迂儒連中と同一の謬見を繰り返してビスマルクに笑はるゝものだと激語する。さうしてナポレオン三世が普相ビスマルクに與へた普墺同盟論の書を引用して、日清同盟が日本の生長發達を助けずして、却つて日本をして靜止せしめ乃至退歩せしむるの結果に終る危險のあることを豫言する。秋野はこゝで問題の結論を他日に持ち越してこの議論を打ちきつてしまふ。

以上二人の議論に於いて、一見分明なる如く學堂は佐久間の論に積極的に力瘤を入れて居り、從つて佐久間の意見が學堂の抱く對支政策に近いものであつたに違ひない。即ち强硬政策をもつて支那を抑へよといふのである。若し支那が英國を背後に控へて我が邦に臨むなら、我が邦も露國を延いてこれに對抗する。然しこれは英清同盟が實現の曉のことである。是が非でも日露が同盟するといふのではない。何でも彼かでも英清を敵とするといふのではない。要は彼等の誠意如何である。然し事現在の如くんば先づ支那に對しては差し向き積極的壓伏の態度で臨む、その壓伏も能ふべくば一日も早いが可い、壓伏された後の支那を如何に遇するかは又他日の問題であらう。かういふのが、學堂

によれば「新日本」の對支外交政策の根幹となるべき筈であつた。

學堂の外交政策は、かくの如くして、往々政友鐵腸等の政策とするところ（非日露同盟）と相反するのみならず（鐵腸の項參照）「内治ノ改良ヲ主トシ國權ノ擴張ニ及ホス事」、「外國ニ對シ勉メテ政略上ノ交渉ヲ薄クシ通商ノ關係ヲ厚クスル事」を黨則の一條項とする立憲改進黨の政策とは相容れないものがあるかに見える。學堂の對支積極主義は、決して外國に對して政略上の交際を薄くするものではない。反對に大に政略上の交渉を濃くするものでなければならぬ。既に外國に對してかく積極的態度を執るべきを主張する以上は、内治の改良は自然消極的な從的關係とならざるを得ぬ。

此の時に當つて内治の改良の具體的眼目の一は何かといふと、これは所謂藩閥政治の絶滅が第一である。學堂と雖も藩閥の跋扈を可といふのではない。藩閥を絶滅して民權を伸べたい熱心に於いて、鐵腸その他の諸政友に劣るものではない。然るに學堂は藩閥政治なるものに關して獨自の見解を持つてゐる。

藩閥政治の一語は方今の政治を腐敗する者の絶へず用ゆる所にして恰も惡政の符牒と爲れり。然れども其弊決して世人の囂々するが如く甚だしきに非ず幕末紛亂の後を承けて此清明天地を開創したるは藩閥政治の功たり苟も擾擾不定の政府を維持して確乎動かす可からざるに至らしめたるは亦藩閥政治の功也明治の初年世間鼎沸の日に方り二三雄藩の政治家毅然狂瀾怒濤中に卓立し國家を以て自ら任ぜるに非ずんば焉んぞ今日あるを得んや（第二卷九九頁—一〇〇頁）

維新革命の前後に於て薩長二藩の演じた役割は大きく、且つ人目に赫々たるものがある。從つて維新後の政治界に於て二藩が所謂獅子の分前をとつたとしても、これは當然の事象として誰も咎めなかつたらう、此の點で又伴直學堂の以上の如き見解は一理も二理もある。たゞ此の時の薩長政治家は所謂藩閥を排して公明なる政治を行ふ用意を不斷に

怠らなかつた。從つて薩長が主になつてゐたにしても、所謂藩閥政治といふ現象が明白に形成されてゐなかつた。その形成されたのは、明治六年征韓論分裂以後のことに屬する。こゝに幾分學堂の强辯と思はれるものがあるが、然しこゝで藩閥政治が薩長政治を意味し、藩閥政治の功罪が薩長政治の功罪を意味してゐるものとせば、學堂のこの見解を是也とせざるを得ない。「余豈に曲げて藩閥政治を疵護せんや唯だ世人の全く其功を沒して單に其弊のみを擧げ而も之を皇張誇大にするを不可とし聊か藩閥政治の爲めに寃を雪がんと欲するのみ」（同一〇〇頁）。藩閥政治に對する見解がかくの如くであるから、學堂は直向藩閥政治を攻擊して內政改良の能事了れりとする如き意味では內政改良第一主義者ではあり得ない。學堂の眼中には、所謂內政改良卽ち藩閥政治の攻擊より以上に緊切なるものがあつた。

今や外邦足を擧て我を蹂躙せすと雖ども口舌を以て我を愚弄し動もすれば則ち我が面に唾して其乾くを待たしめんとす是れ兄弟相ひ鬩て外侮を招くの時に非ざる也寔に國を憂ふる者は內政上悴々の不平に堪ゆる能はずして愈々外人の輕侮を加ふるが如きことなかるべきのみ二三地方人士の爲めに政權を專らにせらるゝは外人の蹂躙を受くるに就與(いづれ)ぞ、民權の內に伸びざるは國權の外に張らざるに就與ぞや、世間若し區々たる政權に戀々する者あらば之をして之を掌握せしめよ吾人は當さに全國の士氣を鼓舞し有爲の氣象を作興し國を富まし兵を强ふして外邦の輕侮を防ぐべきのみ（同一〇一頁）。

卽ち學堂の本意は對外振作、國權伸張にある。內政の改良整備はその手段である。對外第一主義であつて、內治第一主義ではない。學堂の此の政治意見は、その所屬の改進黨に於いても、又龍溪鐵腸の如き先輩政友の間に於いても實に卓然たるものがあることを認めなければならぬ。

「新日本」運動の四條目の第二は壯武の氣風である。曰く「國內ノ患害ハ人民ノ柔弱卑屈ナルヨリ大ナルハナシ故ニ

元氣ヲ鼓舞作興スルノ新案ヲ提出シテ當局者ノ參考ニ供ス」云々、此の新案の二字に注目を要する。

既に對外強硬、國權振作を以て方針と決せば、國民に壯武の氣を必要とすることは、論を俟たない、從つて國內の患害は、國民の柔弱卑屈なるより大なるはないのである。

見ずや天下皆な禮儀を棄てゝ首功を尙び兵馬精悍なる者は百方辭を設けて他の弱國を侵掠す故を以て列國競ふて尙武の氣象を養成し人民私に武を練て陸海軍の後援を爲す英に義勇社あり露に貿易艦隊あり曼人尙武の氣象は天下に卓絕し其平和主義を遵奉すること北米聯邦の如きを以てするも尙ほ人民私に武を練て緩急國に效さんことを勉む貔貅雲の如く陸海軍充滿すと雖ども國民皆な壯武なるに非ずんば究極今の爭奪世界に處して國家の體面を全ふする能はざる也復た何ぞ西歐の強國と騈驅して衡を中原に爭ふの盛事を夢想す可んや余が民權內に伸びざるを憂ふること敢て人後に落ちずと雖ども國權の外に張らざるを憂ふるの情は更に之を倍蓰す（第二卷一〇八―九頁）

かく說き來れば、壯武の氣象が對外強硬政策に必要なることは再び言ふを要しない。然るに當時の國情よりして此の壯武の氣象を養成することは、民權伸張にも亦同樣に必要になるのである。抑もその藩閥政治を以て民權の賊といふが、閥力の團結に於ては、長は薩に及ばず、薩は實に一縣を空うして政權に與つてゐる有樣である。而かも民智進步の程度からいへば薩は實に卑い。正に未開不文である。然るにかゝる卑い民智を以てかの如き強大な權力を握つてゐるのは何故ぞといへば勤王討幕の餘慶なることはいふまでもないが、これは實にその未開不文の蠻力による、文明都雅が蠻力に敗れるのは世界文明史上の原則である。而かも薩は、今日尙ほ此の蠻力の養成訓練に於いては至れり盡せりの觀がのある。薩に於ては「人皆な壯武にして各鄉至る所武を練り兵を訓じ擊劍以て遊と爲し操銃以て戲と爲す特に造士館員の如きは銃砲を翫弄に假て原野に操練し元氣旺盛にして體格雄偉なる都門學生の柔惰虛弱なるに似ざる也」（一〇三―四頁）。從つて世間皆な淫靡柔弱に赴くの今日に方り西薩獨り尙武の遺風を養ふ、何ぞ薩人の獨り卓見に

して他縣人士の無識なるや、といひたい。學堂の言によれば、民權の伸張とは、元來多數政治の主張である。多數政治では、寡が常に衆に屈するのが定數である。

蓋し古昔文化未だ開けず人智尙ほ蒙昧たるに方てや强は勝ち弱は敗る後人智稍や啓くるに及んで智力腕力を制し衆を得る者は勝ち之を失ふ者は敗れ獨力遂に衆力に勝たざるに至れり此時に方り衆の以て寡に敵し難きは人々皆な之を知ると雖ども戰はざれば以て懷に安んずる能はず間ま僥倖にして寡を以て衆に勝つことあれば也爾後人智益々開け兵仗亦益々精鋭を致すに及び僥倖の數漸く減じ人皆な衆寡の勢を見未だ戰はずして旣に勝敗の定數あるを知り寡常に衆に屈す是に於て乎多數政治あり諸黨競ふて人心を收攬し衆を得る者は進んで政權を握り衆を失ふ者は退て時期の至るを待ち戰はずして勝敗を決す寡の以て到底衆に勝つ可らざることを知れば也

これは多數政治の定數であり、即ち民權伸張の原則である。然しながら此の原則の適應されるのは、全國人民の力が相平均してゐる場合でなければならぬ。若しその力が平均せず、武力一方に偏倚するときは、此の原則に反して寡强よく衆弱を制するといふ變態的現象を生ずることがある。藩閥の場合の如きがこれである。藩閥政治の根本は、此の寡强能く衆弱を制するといふ薩の蠻力にある。壯武の力にある。故に藩閥政治を正さんとせば寡强制衆といふこの變態的現象を去るを要する。これを去るためには全國人民がその力に於て薩人の强を制しなくてはならぬ。而してその爲めには全國人民は、大に壯武の氣象を振起して武力を養成しなくてはならぬ。壯武の氣象を全國に養ふことが、藩閥政治を正し、民權の伸張に與るといふのは、この理がある爲めである。

そこでその壯武の氣象を養成する新案であるが、それについては學堂はかう明言するのである。

何爲れぞ操練費の一項を地方稅目中に加へ村社の祭祀に鄕黨の宴集に皆な擊劍操銃を以て柔弱淫靡の遊樂に代へしむるの方針を施さゞるや政府若し操練費を地方稅目中に加へ且つ尙武の氣象を鼓舞せば全國各府縣の人必ず喜んで

經費を支出し武を練り兵を訓し武力をして獨り西薩の一隅に偏せざらしむるに至るべき也（第二巻一〇六―七頁）勢ひ此處に至て政權が始めて全國に均分され、從つて藩閥政治の弊患が始めて除かれ、外國の侮辱も始めて掃攘されることになる、といふのである。

この新案は然し學堂がこの時始めて思ひついたものではない。明治十二年に早く「尙武論」の講演があり、全國の青少年に壯武の氣風を起すことの必要を論じてゐる。この講演を更に彼が主筆をしてゐた新潟新聞に掲げ、後章行本にしたのが明治十三年刊の『尙武論』である。思想的根柢はなかなか深い。

然しながら此の壯武主義が又、一面學堂の反改進黨思想を極めて明白に示す。既に『藤田鳴鶴』の條でも示した如く、改進黨は非腕力主義である。いゞは非壯武主義である。これは今更喋々立證するまでもないところだ。言ひ換へると、壯武主義は、改進黨を僞黨視して權力爭つた自由黨の本領である。改進黨は智力主義金力主義ではあつても、武力主義腕力主義ではない。この政治活動に於いて獨り孤然として自由黨に近づいていつた改進黨員尾崎學堂の行爲が、單なる機會とか一時の便宜とかによつて動いたものでないことが、こゝで大に首肯されるであらう。

以上の外に、この小說には學堂の政治的イデオロギイと思はれるやうなものが、いろ〳〵と散見してゐる。そのうちから一つ二つ擧げて、以上の追加にして置きたい。それも、以上の政治的イデオロギイが反改進黨的なもののみであつたから、反對に改進黨的なものを拾つて見よう。

先づ初編第八章が改進黨の遊說に宛てたものであるが、改進黨が從來東北・中國・九州等の合併を後廻しにしたことを難じ、東北地方・九州地方の政治的に重要なこと、改進黨はこの地方に大に力を入れなくてはならぬことを述べてある。それから改進黨の地方遊說方針として、穩健着實主義もいゝが、然し大局ならいふと、人目を驚く新主義が必要である（地方は立憲制度實用の準備を始めて該政黨の基礎が定まんであるから、これを統一する必要もあらう云々）

といふ――

抑ら民智の卑低なること遠く僕等の都門に在て推像せる所に下るがゆへ單に勝敗の權略上より觀察を下せば成るべく穩當着實俗耳に入り易きの言說を以て之を誘導せざる可からずと雖ども若し國家の大計上より論ずれば遠く時俗に超過する所の新主義を唱へて世間の耳目を驚破するを善しとす然らずんば彼等因循今日の景狀に安んじて進取の志を生ずる能はず歐米諸國は逸馬脫轡の勢を以て奔進することを知らずして老牛一步一喘の徐步を以て足れりとすべし內國政治上の安穩は之に因て保持することを得べしと雖ども歐米諸國に後るゝこと日に益々遠きに至らん（初卷、六九―七〇頁）

自由民權の語がやゝ陳套となつた人心を一新するためには、確にかゝる一の新主義を必要とした、學堂がこゝでこれを唱へてゐるのには、改進黨の爲めに更生策としてゞあるが、當時の凡ての政治運動を振作する意味でもそれを必要としてゐた。而してかゝる意圖が確に「新日本」出現運動を促す主因ともなつてゐると思ふ。然らば「新日本」運動を起したことは、同時に改進黨の精神的再組織を行はうとしたものと見ても可なるべく、此の點からせば學堂の「新日本」運動がいかに反改進黨的な分子を含むも、全然改進黨を離れたものでないことが知られやう。而して改進黨の綱領の首に「王室ノ尊榮ト人民ノ幸福ヲ全フスル事」云々とあるを想ひて次の一節を讀めば、改進黨の爲めに辯じ綱領の註釋を施してやつてゐるかの觀がなくもない。曰く――

我黨の主義を此兩地方に廣むるの道唯だ心胸を吐露して我輩忠君愛國の至誠に感動せしむるに在り毫も隱蔽する所なく我輩の赤心を吐露するも兩地方の志士尙ほ之に應ぜずんば是れ開明の氣運未だ西南と東北とに及ばざる也其罪志士の無學に在て我輩の不勉に在らず我輩又何をか憾まん他日西南東北の人政史を讀んで帝室の尊榮は人民の輿望を壓抑するに在らずして却て之に聽從するに在るを知り又之を國會議場に實驗して皇帝無責任の大義に反對する者

は則ち神聖無過なる皇帝陛下をして人民譏謗の衝に當らせ奉らんと欲する者なることを知らば必ず前過を悔て我黨の主義に贊成するに至るべし我黨の期する所は帝室長久の尊榮に在り又國家永遠の慶福に在り云々（初卷五九—六〇頁）

これに續けて、同志に對して宣べられた次の言を讀めば、益々改進黨的なるを覺ゆる。

假令二兒一游して、西南と東北とを風靡する能はざるも毫も此行の無功を憾むことを要せざる也今日の行は農夫の樹を植ゆるに譬ふ直に果實を收むる能はざるは當然のみ（中略）二兒夫れ急激の奏功を期せず唯だ加餐安眠して國の爲めに自愛せよ（同六〇頁）

たゞ以上の言には、學堂の口より直に出たるものといはんよりも、わざと矢野龍溪の言に擬したところがある。その餘りに改進的なるかに思はれるのは、蓋しその爲めであらう。

「新日本」運動の第三條目は、男女關係の改良である。此の運動の要目四條中、以上二條は政治的であり、日本として當面に必要な急迫せる問題であるが、以下の二條は政治的ではなく、社會改良の立場をとる。即ち以上二つに比すればやゝ間接的な意味をもつかも知れぬが、見方によりては政治よりも一層深い廣い意味をもつ。何れも社會改良の點では中心問題だからである。

學堂曰く、「方今男女ノ關係ヲ見ルニ浚風流殺風景ノ極ニシテ幾ント禽獸ノ偶ヲ選フニ異テラス」云々、勿論これは多少の誇張があるが、當時封建主義的男女關係の餘弊男子絶對尊重の立場から、女子の位地は極めて一般に低卑であり、單に子孫繁殖の道具視されるに過ぎなかつたのが大概である。いふまでもなく男女關係は人間倫理の根本であり、倫理問題は又人間の社會存在を鞏固にする有力な一因をなしてゐるから、男女關係の改良が社會改良に及ぶは必

要であり、從つて逆に社會改良に着手しようといふ人が、當時の男女關係の改良から着手しようとしたのは、その中心に觸着したものといつて可い。そこで學堂は如何にして男女關係の改良に着手するつもりであるかといふと、「稍ヤ高尙ナル模範ヲ畫テ改良の方針ヲ示ス」といつてゐる。此の「稍ヤ」の二字に改進黨的秩序主義が仄見えるのは面白い。この小說で、この高尙なる「模範」に相當する男女關係は、初、二兩卷でいふ限りに於いては、秋野武藏對萩江の關係である。鐵岡操孃との關係は改良されつゝあるもの乃至改良されんとするものゝ模範ではなく、改良されし後の一模範と見るべく、且つその情緖的關係も今後果して如何なる結果まで發展するのか明白でないから、操孃との關係は第二として、先づ萩江中心に男女關係改良の理想が寓されてゐるものと見ざるを得ない。それに男女關係云々といふも畢竟は、女性の地位の向上の一事に盡きるからである。

女性がその位地の向上を謀るには、勿論男子の助力に待つこと多々であるが、先づ女性自身がその人格を自覺し、人間として男子と對等の位地にあるものだといふ自信をもつことがその第一步である。萩江は元來は敎育とにいふに足らぬ一少女であるが、自身が男子の肉慾の具となることを死を以て拒み、美衣玉食の生活の誘惑にも負けず、惡漢夫婦の威喝にも毅然節を墜さない。武藏は又武藏で、元來都門貴媚の女子を文明社會の恥辱と見なす程の見識がある男子であるが萩江を助けてからの態度が當時としては實に立派で、萩江の女性人格を立派に認め、これを啓導し敎養を與へて女性として大成せしめるのを理想とする。萩江は又武藏のこの意を知つて、機ある每に自ら修養を怠らず能ふべくば武藏の股肱の役について他日の飛躍を助け、報恩の赤心を致さうとする。互ひに敬愛の意あつて亂に及ばず、純淸なる交際をつゞけると云ふのは、彼の封建主義時代の小說に見る如き、才子佳人相接して直ちに肉慾を恣にしあふのとは、格段の差である。

武藏の態度が新時代の男性として理想的なものとせば、彼の薩州の貴顯公子のそれは舊時代のこれを代表してゐる

ものといつて可い。公子が萩江に求めるのは、その顏色の美のみで、萩江の人格的價値を認めるのでも、啓導的態度をとるのでもない。公子の態度と比較すると、武藏の對女性態度が立派なものであることが、益々分明する。

武藏平生の理想は政治の改革にあるので、萩江も政治の何たるかを解せんと努力し、武藏もこれを慫慂するかに見える。萩江は曰ふ、「妾山野無學の婢賤と雖とも既に日夕主君に侍するの榮を辱ふす主君好む所の事を學んで聊か政治上の事態を解するに至るは妾が畢生の願なり」云々（初卷、八十一頁）。武藏に曰ふ、「歐米の貴女皆な政治を知らざるはなし其甚しきに至ては貴夫人にして能く內閣の政略を動かし內閣の進退勝敗を決する者あり卿が如きは歐米貴女の資質を備へて毫も東洋婦女子の妖柔卑屈なるに似ず予竊に卿が歐米に生れずして日本に生れたるを惜むなり然りと雖も女丈夫若し出でずんば我が婦女子の陋習を如何せん卿が前言若し違はずんば卿夫れ歐米貴女の言行を學んで我が婦女子妖柔卑屈の陋態を一洗するに勉むべし余請ふ勞費を吝まず卿をして此重任を遂げしむるの計を運らさん」云々（八一―八二頁）。こゝに至つて、武藏の考へてゐる女性の理想といふのも亦、男子を助けて政治に馳騁するにあることが知られるのである。この理想は單に『新日本』の作たる學堂居士が腦裡に湧かした幻影たるに止まらず、當時の進步した男女性は皆これを理想としたものである。讀者にして須藤南翠の小說『綠簑談』『新粧之佳人』の如きを讀めば、その好例を知るに苦しまぬであらう。

社會に於ける女性の位地を向上せしめる現實の機會は社交の舞臺にある。又女子が政治上に力を致すのも社交を通じての場合が多い。それで女性の向上は社交と密接に關連してゐることになるが、萩江は、この小說の初、二卷の關する限りに於いてはまだ社交界にその才色を展べる機會を惠まれてゐないが、從來必ずやさうなるべき脚色が立つてゐたことゝ思ふ。その點に於いて、缺を補ふものは、鐵岡孃中心の社交生活の描寫がある。萩江は將來この社交生活の一女主人公となるべく、その際に於て、鐵岡孃と好箇の女友なり戀敵なりになる筈であつたらう。然し遂同は何れ

にしても、『新日本』の女性の如何なるものなるかは、大體萩江の言動を中心に觀察せねば概念を捉へ得ると思ふ。而してこれが又「稍ヤ高尙ナル」女性改良の模範に相當するものなることは、いふをまたない。

第四條の、法の濫用妄用逆用の是正については詳しくいふを要すまい。前條は卽ち社會を倫理的見地から改造せんとしたものであり、この第四條目は同じく社會を法律的見地から改造することを提示してゐる。權力者のために法を曲用して强て社會的正義を歪げるのは、封建社會に見る最大惡風の一である。その大惡風が文明社會に於て尙ほ行はれる如きは法の威信の無いことを表白すると同時に、かゝる社會そのものがまだ十分に開明されてゐない徵象である。法は元來社會的正義の現れであり、權力者にのみ私する如きことがあつてはならない。寧ろ權力者の橫暴不正を矯正して人民の權利道理を伸暢するところにその本來の使命があるべきである。「新日本」の社會は社會的正義の力の强いものでなければならぬ。法的に權力者の橫暴を許さぬ如きものでなければならぬ。これには先づ法律家自身が法の威信に自覺して、社會正的義の維持者となる覺悟がなくてはならぬ。國家安定の基礎の一つは、こゝにありと知るを要する。

第二卷第一章、薩州貴公子側の某代言人が司法當局その他と凝して有罪の公子を無罪にし、無罪の武藏を有罪にしようと巧らむところを讀めば、思はず穿ち得て妙と套語を吐きたいぐらゐである。武藏は商家出身の平民であるといふ以外に何の罪もないが、たゞこの一罪のため謀殺の罪名をもつて刑を斷ぜられやうとするのである。法が人民に重くて貴顯に輕いといふのでは、「新日本」の社會として進步を誇るわけには行かない。こゝに學堂が法律改良の問題を「新日本」運動の第四條にした理由があると思ふ。

學堂は、當時この小說に描かれた如きかゝる不正事件を知つてゐたのかも知れない。或は不正事件とはいへぬまでも、何等かかゝる寃罪に題する如き出來事を知つてゐてこれを暗示したものであるかも知れない。學堂がこれを執筆

してゐた當時、馬場大石が爆裂物事件で入獄したことがあるが、かういふ出來事も以上の叙述に幾分の影響を與へてゐるかと思ふ（そのフレーム・アツプといふ點に於いて）。且つや他人の事件に待つまでもなく、學堂自身の經驗に於いてもかゝる出來事位は十分構想することが出來たであらう。

『新日本』のふくむ政治的乃至社會的思想については、先づ以上で大體を盡したと思ふが、以上の外に、やゝ斷片的に學堂の思想が若干散見してゐる。斷片的とはいへ、それはたゞ直接に系統的に述べられてゐないといふのみで、何れの點かでそれ〲既記の思想の何れかと表裏映發、追補するところがあると思ふから、これを拾つて置く。尤も本論の濟んだ後だから、簡略に從ふ方が可からう。

政治的なものからいへば、初編第七章（五五―五六頁）に、地方農民の困苦、農租輕減の主張が寓されてゐる。これは、『經世偉勳』の條で述べた同じ主張と表裏するもので、暗に民心欝屈の恐ろしいことを諷してゐる。更に初編第八章（七八頁）には藩閥政治の絶滅、議院制度の施設、輿論政治の必要を暗示してゐる。同章（七九頁）には、在野政黨の將來の勝利を卜してある。

此の頃、フランス歸りの光明寺三郎等によつて決鬪論が紹介され、これを我が國の武士道と對比し西洋文明の所産の良風美俗の一なる如く誤解して往々賞讃するものがあり、乃至實踐せんとするものが生じて、世人の注目するところとなつた。初編第十章以下の決鬪論はこの興味の現れの一つであるが、學堂の決鬪論は特色のあるもので、彼は決鬪をもつて文明生活の道徳からは決して許す可からざる野蠻の遺習だと見做してゐる、これは非腕力論の改進黨主義的立場からは當然の見方である。然し學堂に於いては、それが凡てゞはない。以上は見方の原則であるが、然し時と場合により決鬪にも多少の利益がなくはない。その利益とは、國民壯武の氣俗を養成すること、是れである。特に本邦今日の如く柔惰風を爲し文弱習を爲すの時に在ては「蠻世の遺習たる決鬪の如きも亦病を治するの一藥乎」といふ

のである。卽ち學堂は、尋常の場合ならば排斥して遺すところのない筈の決鬪を利用して、例の尙武論實踐の一端に供しようといふのである。治病の一藥といふ見地は、策略的な詭辯的な臭ひがするが、矢張り彼の立場からは一見識たるを失はぬ。なほ決鬪の小說に現れたるものに就ては、須藤南翠の『緑簑談』、坪内逍遙の『外務大臣』等がある。

第二卷の第五章では、鐵岡令孃と武藏及び勇との會話に西洋小說のことが度々出て來るが、これは當時の社交生活と文學の關係、當時のインテリゲンチャの小說的知識、乃至著者の批評眼などが窺へてなかなか面白いものである。小說的知識はデフォー、セルバンテス、スウヰフトから、ヂッケンズ、サッカレー等に及んでゐるが、こゝではスウヰフトが特に詳しく紹介されてゐる。『書籍戰記』(The Battle of Books)と『ガリヴァ旅行記』の梗槪が說かれてゐる。武藏等が當時の洋行歸朝者を嘲けつて、長人國から歸つたガリヴァに喩へてゐるのは、如何にも好比喩であつたらう。

同卷第八章には言語容貌を修飾するの必要を論じてゐるが、これは學堂の性癖と相應してゐて特に意味がある。儀容を修めるのは獨り婦人に必要なるのみならず、これを修めぬと男子と雖もこれが爲めに品位を喪すことがある。これは紳士政治家學堂の本來の面目として聽いていゝ、然し彼は同時に、かゝる修飾が繁文縟禮の始めとなることを、自ら警めてゐる。さうて西洋史上繁文縟禮の弊を樣々引いて例證して見せてゐるが、この例が又とても面白い。

四

『新日本』は、いはゞ素人小說家の未完な作品であり、これをテクニク方面から嚴密な研究批評を加へることは恐らく公平ではないであらう。

小說としての『新日本』を論ずる時に第一に注意しなければならぬのは、これが一大長編の發端のつもりであり、

現にテクニクの凡ての點でさういふ印象を與へてゐるといふことである。

従つてプロットに一番見るべきものがない。プロットにはヂスレーリの『ヴィヴィアン・グレイ』の影響があるといふ、成る程決鬪といひ、漫遊といひ、青年志士の團結といひ、鐵剛に相當する老政治家といひ、又國家乃至政界革新の理想といひ、似たところは可成り似てゐる。然し似たといふまでゝ、正かこれを模倣したとはいへまい。模倣したにしては、また似ないところが餘りに多い。無論學堂は『ヴィヴィアン』を讀んではゐたらうから無意識的にその感化に動されたといふことはいへよう。又似たといへばリットンの『繋思談』にも似てゐるところが少くない。人生經驗の旅行に出たり、少女を助けたり、奇禍に出會つたり、いろいろ似てゐる。然しこれも模倣とまでは言ひきれまい。若し學堂が『新日本』著作の上で最も意識的に模倣したものがあるとせば、それは柴東海散士の『佳人之奇遇』であつたに違ひない。描寫の手法、文章の模倣については後にもいふが、その（註）によつて古今の形勢故事典故等を説明する形式といひ、人物の配置といひ、國權伸張の大理想といひ、實によく奪胎の妙を盡してゐる。

然し先づプロットそのものゝ巧拙をいへば拙である。如何にも素人がでつち上げたといふ感じがする。鹿兒島に於ける武藏と貴公子の衝突位がともかくプロットといへるのであるから、推して知られる。劈頭倒叙法によつたのは、これは藤田鳴鶴の『済民偉業錄』を眞似た痕跡があるが、然し『新日本』の方は遙かに不自然且つ不必要であるかに見える。

性格については、此の小説中の主要場面に出る人物には皆モデルがあるといふ、欄外の評者も極力それを揣摩して掲げてゐるが、然し秋野以下の主要な人物は必ずしも或るモデルをそのまゝ寫したものではあるまい。自家の想像で他人の經驗を利用したところはあつても、モデルにしたといふ程のことはなかつたらう。若しあれば夫子自身、自家の經驗を利用して捏出したに止まるらしい。勿論何の人物も理想化され、或る階級的存在の表徴めいた氣味を幾分帶

びてゐることは事實である。著者が氣を吐く傀儡（ロボット）になつてゐるところも大分澤山ある。秋野は必ずしも主人公といふのではないが、種々な人物と連絡をもつてゐるので、自然主人公の位地になつてゐる。秋野は大ブルジョアの子弟で他日政治家を目指してゐる、佐久間は長州勤王武士の遺孤で、つまり武家血統のインテリであり、その目的は殖産興業にある。この二人がかく對立的な思想をもちつゝ而かも喧嘩もせずに「新日本」運動に專心してゐる。これに配される武士出の政治家鐵岡武之介は又オツトー・フオン・ビスマークが東洋流の修業をしたといふ如き國權的政治家となつてゐる。此等の三人の結合こそ、當時現實の新日本が最も必要としたものであつた。而して此の三人の結合が、自然薩摩人士に對する共同戰線になつてゐる點に、藩閥政治の上の學堂の深謀が寓されてゐると見ても、甚しい盲評ではないらしい。女性では、萩江は純日本女性を代表し、操孃は西洋風に敎育された女性を代表してゐる。以上三人に此の二人を配すると、當時の新興日本の社會現狀の如何なるものであつたかゞ、それによつてほゞ分る。萩江がいさゝか八犬傳式誇張なところがあるのと反對に、操子孃は比較的自然らしく描かれてゐる。

場面の描寫として稍や取るに足るのは、第二卷第五章以下有馬での一二章がそれに當らう。これは或點そのまゝで新日本風俗圖繪になる。鐵岡氏の招宴、宴會の有樣、宴後の歡談、文學談、遊戲娛樂、男女の自由な交際、何れも新日本の改良社會にのみ見出さるゝものであつて、舊日本に無いものである。此等の場面の描寫だけでは、却て南翠一輩の改良小說家達が想像で描き上げたものよりも迫眞的なものがある。これは學堂の方のが恐らく實見實感から出てゐるからだと思ふ。例へば「一列の長卓會者二十有餘名男女交錯して椅子に倚る縉士は皆な管する所の夫人令孃あり既婚の縉士は夫人を保管し未婚の縉士は令孃を保管す賓主の位席既に定まるや主人慇懃來賓に謝して曰く云々（中略）來賓皆な起立して其厚情を謝し各々其好む所に因て飲食に就く縉士は皆な其預る所の夫人令孃の意趣を迎合して或は美肉を供し或は良菓を獻じ或は衣冠裝飾の韻致あるを稱す」云々（第二卷、第五章四四－四五頁）。以て全斑を概すべき

であらう。

『新日本』の文章が『佳人之奇遇』と甚だ似てゐることは、既記の如くであるが、全篇漢文讀下し體であつて、『佳人之奇遇』程對偶の修飾美に富みはしないが、往々にして彼此別ち難い文情文致を示してゐる。

揚柳春を惜んで流紅を留め遊魚多情落花を啗ふ鶯語漸く老んとして尚ほ二分の嬌嫉を存し蝶翅風暖かにして栩々紅閙綠戰の中を徘徊す一庭の春色畫の如く詩の如し時に花の如き佳人落花の陰に在り斜めに御傑を翳さして流鶯啼處の枝を求む姿態窈窕嬌歩妖嬈靴底の軟草悉くは蹂躪の苦を覺へざるべし忽ち海棠滿期開の所に來り纖手を下して故らに半開の枝を折り斜めに螓首を屈して雲鬟に挿む花若し情あらば當に美人の頭に上れるを喜ぶべし正に是れ昨夜海棠新帶露數朶輕花嬌欲語美人曉起出蘭房折花對鏡比紅裝の情景なり（第二卷、第五章の冒頭）

仔細に讀み分けると『佳人之奇遇』の文は自ら『佳人之奇遇』の文であり、『新日本』の文は自ら『新日本』の文であるが、卒然それに臨めば、後出者が前出者を模倣したと評されても、實に言ひ説き難いものがある。

何れにしても『新日本』は小説としては長編の發端のみといふ未完のものであり、從つて凡ての點でさうとして見るべく、テクニク方面からは殆んど特別にいふ程のものはないが、たゞ當時出盛りかけて來た幾多の政治小説中、その政治意見の表出において極めて個人色の強い、明白な個性を帶びたものとして、矢張り明治初期に於ける代表的政治小説の一つと見るべきものたるは、異論がなからう。

久松義典とその政治小説

一　久松義典傳

狷堂野史久松義典は改進黨の一名士である。矢野龍溪、藤田鳴鶴と比肩するところまでいかぬにしても、尾崎學堂犬養木堂の連中とは十分伯仲の間に立ち交ることの出來るだけの聲望と材力をもつてゐた。事、志と違つて早く、中央政界と絕緣した爲め、政治家としては未完成になり、且つは比較的早く死んだので、その名も忘却に委されてしまつたが、彼の業績は、彼の名と共に忘却に委されて可い程無意味なものではなかつた。例へば、明治に於ける社會運動者の列に彼の名を見出したといふのは出來難い相談であるにしても、社會思想史乃至社會主義發展史を硏究するには、彼の著述の若干を全然度外視することは出來ない。此の種の彼の著述は、學問的に嶄然獨創の權威をもつものではなく、何れかといへば啓蒙的紹介的、且つ多分に通俗的な分子をさへもつたものであるが、過渡的の著述としては相應重視すべき眞面目なものたるを疑ふことが出來ない。更に、彼の業績の一部面として政治小說の著作があるが、彼はこの部面に於ては、日露戰爭前後から發生する社會主義小說との連絡を示す社會小說『東洋社會黨』の著者として、社會思想史上に於けるよりもやゝ重大な位地をもつてゐる。旁々、私は、今彼のことを語るに當り、能ふ限り詳細を期し、忘却に委されたる彼の名を世人の記憶に上らせるだけに止まらず、此の未完成の政治家の文學的業績に、それ相當の認識を生じさせたいと思ふのであるが、讀者は、こゝでも或は私の好事癖、發掘好き、乃至判官贔屓を笑ふかも知れない。だが、私はそれを覺悟で、腰を据ゑて、彼の傳記から始めるつもりである。

久松義典の傳は、明治二十三年三月『衆議院員候補者列傳』第一編（大久保利夫著）に見えるものが正確で且つ詳しい。但しこれは二十三年當時までの分しか記載がないからその以後は他の材料で補はなければならぬ。先づ『候補者列傳』のものを揭げよう。

『文壇ノ名將政治家ノ一人トシテ名ヲ知ラレタル久松義典君、幼名ハ芳次郎、狷堂又ハ黑林野史ト號ス。父ハ十郞左衛門義制、後ニ操軒ト改ム。其先ハ菅原道眞ヨリ出ヅ。道眞ノ孫文章博士山城守稚規ハ、童名久松丸、尾張知多郡下阿古居ノ庄ニ住ス。稚規ノ後胤佐渡守定俊ハ實ニ德川家康公ノ繼父ニシテ、其室傳通院ハ公ノ生母ナリ。永祿三年、公年十九、今川義元ヲ援フテ大高城ニ出陣シ、阿古居ノ館ニ宿ス。因テ定俊及ビ弟義春ヲ召見シテ松平氏ノ姓ヲ賜フ。而シテ義春ハ仍ホ舊姓ヲ冒セリ。義春ノ嗣子治兵衛尉義次、少將松平定勝ニ仕ヘ、家康公ノ上洛ニ當リテ定勝ト共ニ伏見城ヲ守衛ス。是レ久松ノ始祖ナリ。爾後十餘代、皆舊桑名藩ノ執政ト爲リ、義制モ亦其職ニ就キ、安政二年十月江戶藩邸ニ君ヲ生ム。後幾ナラズシテ家督ヲ君ニ讓ル。

君幼ヨリ敎ヲ藩校立敎館ニ受ケ、明治四年三月年甫メテ十七立敎館句讀師拜命、兒童授讀ノ職ニ就ク。五年一月助敎トナリ、經書講義ノ事ヲ掌ル。然レトモ君夙ニ大志ヲ抱キ、年少淺學ニシテ人ノ師トナルハ其本志ニ非ズ、常ニ笈ヲ負テ東京ニ良師ヲ求メント欲スルノ志アリ。

是ヨリ先キ舊藩主松平定敎、東京ノ邸ニ在リ、專ラ漢籍ヲ修ム。君擢デラレテ其侍讀トナリ、五年四月、上京シテ藩邸ニ奉仕ス。後幾クナラズシテ舊藩主ノ米國ニ遊學セシヲ以テ、藩邸ヲ辭シテ單身大阪ニ赴キ、某官人ノ塾僕トナリテ獨逸書ヲ學ビ、六年七月、同府公立學校ノ漢籍敎師ト爲リ、餘暇ヲ以テ更ニ英書ヲ講習ス。然ルニ、君、大阪ノ地タル、長ク學生ノ留マルベキ所ニ非ルヲ知リ、力學節儉、受クル所ノ微俸ヨリ若干ノ學資ヲ儲蓄シ、七年十二月、再ビ上京シテ私塾ニ入リ、專ラ英書ヲ修メントセシモ、元來鄕關ヲ出ツルノ時ヨリ一錢ノ學資ヲモ家ヨリ受ケシ事ナ

キヲ以テ、随意ニ師ヲ撰ビ書ヲ購フ事能ハス。當時慶應義塾、同人社、共慣義塾等、學生常ニ充満シテ皆自由ニ好ム所ノ學科ヲ修ムルニ方リ、君唯資力ナキガ為ニ、二三小私塾ノ間ニ轉寓スルノ間、會々實祿奉還ノ事アリ。郷里ノ家族方ニ生計ノ目途ヲ立ツベキノ時ナルヲ以テ、八年十月、歸省シテ學家轉住ノ事ヲ計畫シ、父母弟妹等五人ヲ連レテ上京シ、復タ學校教師ト為リ、薄俸以テ家族ヲ養ヒ、餘暇專ラ英書ヲ修ム。同年十二月、父操軒疾アリテ起タズ。慟哭ノ涙未タ乾カザルニ、九年七月ニ至テ、又復タ母及ビ兩妹ヲ喪ヒ、災害並ビ至リテ家道頓ニ衰廢セリ。蓋シ舊桑名藩タル、戊辰ノ變ニ朝敵トナリ、闔藩皆一時離散ノ姿トナリ、領地ニ留ル者ハ家祿以テ糊口ニ給セズ、東北ニ従軍セル者ハ往々戰死シタルヲ以テ、維新ノ朝廷ニ出仕セシ者、寥々トシテ數フベク、府下ニ遊學セル學生等ハ僅ニ數人ニ止マリタル程ニテ、他ハ皆一身ノ衣食ニ汲々タル場合ナレバ、就テ共ニ謀ルベキノ友ナシ。君是ニ於テ決然志ヲ立テテ家ヲ閉デ、弟妹兩人ノ生育ヲ他家ニ托シテ、官立學校（東京英語學校）ニ入塾シ、潜心英書ヲ講習ス。

爾來在校四年、學業大ニ成リタルヲ以テ、十二年九月、自ラ退學シ、「泰西雄辯大家集」ヲ譯述出版シ、大ニ當時ノ好評ヲ博シ、發賣五六千部ニ上レリ。此年十一月、栃木縣ノ囑ニ應ジテ師範學校教師ニ任ゼラレ、十二月、師範學校長トナル。當時教育ノ制未グ整ハズ、且ツ性素ト學理ヲ談ジテ人ヲ教ユル事ヲ屑シトセズ、辯論討論ノ大ニ將來ニ世用ヲ為スベキ事ヲ信ジタルヲ以テ、或ハ校内生徒ノ為メニ講談及ビ討論會ヲ起シ、或ハ縣下各郡有志者ノ請ニ應ジテ、毎月兩三回演説會ニ出張シ、以テ大ニ民心作興ノ事ヲ勉メ、就中下都賀郡吹上村ノ有志者鹽田奥造、新井章吾兩氏ノ招ニ應ジテ屢々同村ニ出張シ、努メテ自由民權ノ政理ヲ説明セシヨリ、為メニ士氣ノ激昂ヲ致シタル事淺カラズ。同縣下ニ演説會ノ盛ニ行ハレタルハ、蓋シ此時ニ在リト云フ。此間書肆金港堂ノ求ニ依テ、「小學讀本」三卷ヲ著ハシ、兩三縣ノ教科書ニ用ヒラル。又當時自由民權ノ説愈々熾ンニシテ、歐米政史ノ必要ヲ感ゼシヨリ、十四年、「泰西革命史鑑」六卷ヲ纂譯出版シ、頗ル世上ノ愛讀ヲ受ケタリ。其他「萬國史略」四卷、「體育親書」、「學校總理論」

各一巻、「啓蒙修身學」八巻ヲ著シテカヲ普通教育ノ擴張ニ盡シタル事淺カラズト雖モ、同年十月、國會開設ノ大詔一降セショリ、大ニ時勢ニ感ズル所アリ、慨然トシテ志ヲ立テ、身ヲ民間ニ置キテ國家ニ盡ス所アラント欲シ、十五年五月ヲ以テ辭職歸京シ、直チニ政治主義ヲ一定シテ立憲改進黨ニ加盟シ、且ツ報知新聞社員トナル。

同年九月、改進主義擴張ノ爲メ、藤田茂吉氏ト共ニ信濃、越後、越中、加賀、能登等ノ各地ヲ遊説シ、各所同志者ノ請ニ應ジテ日夜屢々公會演説ニ出席シ、巡回三ケ月ニシテ大阪ニ入リ、大阪新報社ノ聘ニ依テ、加藤政之助ト同ジク編輯事務ヲ幹理ス。是ヨリ大阪ノ同志者ト共ニ熱心改進主義ノ擴張ニ盡力シ、數回近畿地方ニ遊説セリ。十二月、廣島縣同志者ノ招ニ因テ、沼間守一、藤田高之等ノ諸氏ト共ニ同地方ニ出張ス。十七年一月、大阪新報ヲ改題シテ毎朝新聞ト爲スニ至リ、尙之ヲ幹理ス。九月、北陸地方同志者ノ請ニ應ジテ同地ニ出張シ、途上吉田熹六氏ト會シテ倶ニ加越能三州ヲ巡回シ、歸阪後「壯烈談林」一巻ヲ譯述ス。十八年五月、大阪ヲ去リテ再ビ報知社ニ入リ、幾クナラズシテ地方不景氣慘状觀察ノ爲メニ單身九州ニ漫遊ス。其際霜雨溽暑ノ困難ヲ冒シテ、七縣各地ノ山川ヲ跋渉シ、親シク窮民疾苦ノ實狀ヲ察シテ之カ報告ヲ公ニシ、巡回スル事四ケ月ニシテ歸京ス。此年十二月、「英和辭書」ノ譯述アリ。

十九年一月、國文社々長ノ任ヲ囑セラレ、九月、東京府會議員ニ當撰シ、十二月ヨリ翌二十年四月ニ亙リテ、「代議政談・月雪花」兩巻ヲ著ハシ、繼テ「南溟偉績」、「商海狂亂」各一巻ヲ著述ス。是ヨリ先キ尾崎行雄、朝野新聞社ノ聘ニ依テ入社シ、大ニ紙面ノ改良ヲ遂ゲントスルニ當リ、同社ニ入ル(十一月)。廿一年七月、富山縣同志者ノ請ニ應ジテ富山日報發刊事務監督ノ任ヲ負ヒ、朝野新聞社ヨリ出張シ、紙面ノ改良ヨリ改進主義ノ擴張等ヲ勉メテ、縣下各地ニ巡回シ、滯留五ケ月ニシテ歸社ス(十一月)。廿二年一月、九州ノ同志者熊本ノ山田武甫、嘉悅氏房、前田下學諸氏ノ依賴ニ付、社中數ケ月ノ暇ヲ得テ、復タ單身熊本ニ出張シ、改進主義ノ機關タル海西日報ノ發行事務ヲ幹理シ、九州同志大會ニ出席シテ同地方政黨ノ大勢ヲ審ニシ、且ツ屢々各郡ヲ巡回セリ。然ルニ先是一タビ郷里三重縣ニ

歸省セントノ念ハ年トシテ起ラザルハナク、但シ職務繁忙常ニ寸暇ナキガ爲メ覺ヘズ遷延シ來リシモ、是際帝國憲法ノ發布前後ニ當リテハ、時勢氣運ノ上ヨリシテ復タ他郷ニ安居スル能ハズ。縣地同志者ヨリハ幾タビカ電報及ビ書翰ヲ寄セテ頻リニ歸郷ヲ促ガシ來リタルヲ以テ、九州ノ同志者ニハ告グルニ情ヲ以テシ、遂ニ三月十四日ヲ以テ鄕里桑名ニ歸リ、屢々演說會懇親會ニ出席シテ、我ガ帝國議會ニハ是非トモ適任ノ議員ヲ選擧センコトヲ計畫シ、淹留三週日ニシテ歸京シ、同年十一月、復タ三重縣ニ歸省シテ鄕里ノ選擧區內ニ政友ヲ訪問シ、同月下旬歸京シテ朝野新聞ノ編輯ニ從事スル事故ノ如シ。

嗚呼君ハ文壇社會旣ニ名將ノ令聞ヲ博シ、政治社會亦良政治家ノ好評ヲ得タリ。其經歷ヨリ見ルモ亦其人物ヨリ見ルモ、一國代議士適任ノ人タルヤ、余ガ喋々ヲ要セザルモノアルナリ。知ラズ君ハ果シテ何レノ縣ヨリ代議士ノ任ヲ帶ビ本年ノ議會ニ列シテ壯快ナル運動ヲナサル、ヤ。』

かくて彼は三重縣第三區から出馬したのであるが、その人氣からいつて吾れ人ともに當選を期したに拘はらず、意外にも落選した。落選した原因は、彼の競爭相手たる某ブルジョア候補が、言論戰ではとても敵し難いと見て、秘密に黃金戰を用ゐた爲めであつたといふ。第一回の總選擧は日本歷史上未曾有の出來事であるだけに、候補者も選擧民も、その心意氣は爾後のそれの如きものではない、實に見上げた立派なものであつた。だが、この中には此の久松義典の場合の如く、早くも相手が買收戰術を利用したのもあつたのである。

義典が落選したといふ報が選擧區內に傳はるや、彼を以つて理想の候補とし、必然の努力を惜まなかつた有志達の落膽憤激は凄じいものであつた。人々は集つて、彼の爲めに慰勞懇親會を開き、大に彼を慰籍し激勵するところがあつた。これは、或る意味では最高點の當選よりも大なる榮譽であつたといひ得やう。新聞紙は傳へて曰ふ（讀賣新聞四六八八號、二十三年七月七日）、——

三重縣第三區内の候補競爭場裏に立ちて正々の旌旗を飜へし堂々の論陣を張り以て大に敵軍の陰謀秘策を打破攻擊したるの功勞に依りて已に區内人民に於て正義公道の驍將とまで稱へらるゝに到りたる久松義典氏の慰勞懇親會は豫定の如く彌よ去る二日を以て桑名郡桑名町眺憩樓に開會したり當日の來會者は桑名、員弁、朝明の三郡の有志者凡て二百餘名に及び午後第三時會員一同着席するや先づ倍井增太郎氏有志總代として開會の趣旨を述べ次に久松氏の懇篤なる答辭あり總つて林稻太郎外諸氏の演説あり夫れより豫て準備の膳部を配りて獻酬數行、絃歌和暢の間に慷慨激烈の談話あり各自充分歡を盡して退散したりと

かくて彼は、當選候補よりも意氣揚々と歸京したのであるが、この時の一敗の經驗と、第一回帝國議會の本質を見て、多年その實現の爲めに奮鬪して來た立憲政治なるものに大に幻滅を感じたらしい。そこで彼は、猛然、吾と自ら政治的野心を斷ち、淸新の天地に更生すべく、翌二十四年五月、北海道札幌の北海道每日新聞の主筆となつて赴任した。この時、同じく中央政治界に見切りをつけた中江兆民居士も北海道にあり、小樽の北門新報を監理してゐたが、かねて東京に於いて面識ある間柄ではあり、又北海道入りの心事も略ぼ似たらのがあつたので、遲く北海道行をした義典の方から交情を溫めることになり、意氣相投じて屢々往來した。かくて義典は、この交際の間に、兆民から社會主義的思想に對する興味を大に喚起されたらしい。兆民の刺激がなくとも、政治に激して社會主義的思想に赴くのは、當然の心事ともいへるのであるが、義典の場合、兆民の刺激がこれに輪をかけたものであらう。古い雜誌（「社會」、及び「社會雜誌」）に掲げられた彼の自傳斷片といふものは、北海道時代の彼をよく語つてゐる。曰く、——

　僕學淺く才駑曾て第一期議員候補を爭ふて志を得ず決然去りて遠く蝦北に入りしより全道を巡覽して二三の書を著はし積雪堆裏に社會清情教徒の生涯を送りつ五六の西書に就て社會主義問題の大要を知り聊か講究する所あつて云云（「社會」第四十號）。

又曰く、――

予は第一期議員選擧の候補を見事失敗せしより、廿四年五月飄然として北海道に入り、札幌の旅舍に着きたるその日より、筆を執りて鄙見を陳べ、これを「北海道毎日」に掲げたり。當時道廳は化物屋敷と呼ばるゝ程にて、百事腐敗の極に達し、製糖會社の破綻は、世上の大評判となり、貸下地の整理、移住民の奬勵は緊急問題として、一日も傍看し兼ねたるを以て、引つゞき道廳政務の改革案十餘案を起稿し、これを一書と成して「北海道新策」を刊行せり。是より先兆民居士は小樽港の紳士金子元三郎氏の聘に應じ、「北門新報」を監理せられ、予は專ら本道事情の調査に便せんが爲、「北海道毎日」に執筆せしが、居士には兼てより京地にて面識ありしを以て、時々相往來談論し、予が上國よりの「隨意的退去」と「社會的淸教徒」の生涯は、これが爲め却て一段の愉快と幸福を加ふることゝなりぬ。そは左の遺篇にて知らるべし。

北海道新策序

漆園叟は、有情動物なり、空谷跫音の一語以て知る可し、況して平生敬愛する所の朋友、彼れ唱へて我れ和し、我れ唱へて彼に和するてふ朋友、社會に立つ方針、略ぼ相同く、生涯を樂む趣向、又、略ぼ相同じき朋友に、他鄕に相逢ふ、其愉快如何にぞや、予當道に來りて北門新報連の外、甞く面識無きの人にて小樽札幌の市街は、予の爲めには、人の砂漠とも謂ふ可き感覺なりし眞最中に、端なく久松狷堂に邂逅せり、狷堂は予の敬愛する所の人物なり、臭味を同する所の朋友なり、夫れ此の如き朋友に此地に邂逅す、砂漠の旅行に行疲れたる旅人が、面前俄に草木鬱蒼として、蔭涼を呈する浮洲を眺むると一般の思を爲せり、予は國會を逃れ、豪傑仲間を逃れ、新聞記者連を逃れ、倶樂部を逃れ、天下取りの相談を逃れ、盲目馬の社會を逃れ、耄碌したる種族を逃れて、當道に來り、當道の少壯なる種族の中に身を投じ、是より遍く當道中略ぼ予と方針趣味を同する人物を朋友とせんと

欲す狷堂の當道に來れるも定て余と同一の心意氣なるべし、狷堂此頃一書を著し、題して北海道新策と曰ふ、蓋し北海道の眉毛窽穴を提採て、之を內地の豪傑人に示さんと欲す、眞に是れ灰頭土面撥草瞻風、爲人の心厚く且つ切なりと謂ふべし、札幌より東を寄せて、予の序文を徵せり、是に於て書す、明治二十四年十月初六、小樽色內町僑居に於て兆民居士識（社會學雜誌第四卷第一號「兆民居士を憶ふ」）

以上で兆民と義典の關係を想察出來ると思ふ。政治への不等不滿から社會主義に走るのは、明治に於ける社會思想發展の重大な要因の一となつてゐるが、義典の場合の如きは、その好型典の一つといつて可い。

義典は北海道開發の爲めには恩人の一人といつても可い。今日の北海道人士は義典のことを何う見てゐるか知らぬが、彼は中央の政治社會に見切りをつけたゞけ、北海道に理想の天地を造らんと欲し、極力その理想を實現せんが爲めに努めた。『北海道新策』は畢竟この理想の發表であつたと見て可い。彼の考へたのは、地方議會による政治的獨立と社會主義的理想を加味した自由の新社會を北海道の新天地に見ようとするにあつた。北海道開發、並びに紹介の爲めに彼の爲した努力の如何程のものであつたかは、彼の回顧を讀むと、その一斑が知られよう。

當時予は「北海道通覽」出版して微力を顧みず壹千餘金を費し、全國府縣知事に配布せしのみならず、更にこの書を携帶して全道巡回を企て、旅行日數一百日、騎馬行程二百五十里、汽船汽車一千七百哩、滯留四十二ヶ所、集會三十回、東は根室より千島、擇捉に抵り、北は北見の網走宗谷禮文利尻を窮めて、遂に樺太を望み、東西海岸を跋涉し了りて、廿六年七月より十一月に至り、移住奬勵、鐵道敷設、及び地方議會の件に付數萬人の請願書を作り、翌二十七年春これを兩議院に捧呈し、これより間もなく歸京せし云々（前同）

實に大變な努力であるといはなくてはならぬ。

歸京後の義典は何をしたものか、恐らく新聞雜誌への寄稿と、著述と研究の生活に入つたものらしい。その興味の

中心は、政治問題よりも社會問題、經濟問題等であり、著述の方も研究の方も、社會主義的な色彩をもつたものが多かつた。かくて明治三十二三年の交に及んで健康を害したので、その保養の意味で、舊緣のある栃木町に退き、そこで靜かに敎育と讀書に專心した。敎育といふのは、下野實業學校といふので、一種の靑年補習學校めくものであつた。彼は兼て田中正造と親しかつたので、この間種々田中氏の世話になつたものらしい。尙ほ、明治三十四五年の交、例の足尾鑛毒問題が喧しかつたとき、義典は、一つは土地柄から、この問題に關心をもち、多少論ずるところがあつたといふが、實際運動には關係しなかつた。然し社會主義關係の著書は、栃木町にゐた數年間に最も多い。彼は晚に再び起つて、金澤政敎新聞の主筆として赴任したが、幾干もなく明治三十八年六月二日同地に於いて歿した。享年五十。

二　著　作

久松義典の初期の著作に就ては、『候補者列傳』の引出のところで略ぼ知られるが、今便宜上、此の分をも加へて、その生涯の著作、譯物等を年代順に揭げて見ると、大體左の如きものであらう。

明治十二年　「泰西雄辯大家集」正續二卷（譯）

同　年　「文則明辯」（編輯）十冊

明治十三年六月　「敎育叢談」（編輯）

雜誌風のもの、十四年六月、十號

同　年九月　「佛氏生理書補遺」（譯）

同　　年　「小學讀本」三巻（著）
明治十四年　「萬國史略」四巻（譯）
同　　年　「體育新書」一巻（著）
同　　年　「學校總理論」一巻（譯）
同　　年　「啓蒙修身學」八巻（著）
明治十五—七年　「泰西革命史鑑」正續六巻
明治十六年　「泰西辯談典型」（譯）一巻
明治十八年　「英和辭書」（譯）
明治十九年　「壯烈譚林」（譯）一巻
明治二十年　「代議政談・月雪花」（著）二巻
同　　年　「南溟偉蹟」（著）前編一巻
同　　年　「南海狂瀾」（譯）一巻
明治廿二年　「國憲綱領述義」（著）一巻
明治廿五年　「北海道新策」（著）一巻
明治廿六年　「北海道通覽」（著）
明治卅三年　「近世社會主義評論」（著）一巻
明治卅四年　「社會研究新論」（著）一巻
同　　年　「最近國家社會主義」（著）一巻

同年　「社會主義新論」（著）一卷
同年　「社會小說東洋社會黨」（著）一卷
明治卅五年　「社會學講義」（著）一卷
同年　「殖民偉蹟」（著）一卷
明治卅六年　「社會學と事業」（著）
同年　「社會學と哲學」（著）
（「社會研究新論」と內容同じといふ）。
同年　「社會學問答」（著）

右の外に、彼の父義制、號操軒の遺著を刊行したものが一部ある。

明治廿一年　「殘燈一點」一卷

以上約三十種の著譯中、政治小說として私が當然取り上げるのは、——

「代議政談・月雪花」
「南溟偉蹟」
「商海狂亂」
「社會小說・東洋社會黨」

の四部であるが、その前に、政治小說の準備的著譯物と見て、——

「泰西革命史鑑」
「壯烈譚林」

の二部を簡單に解説することにしたい。

三　『泰西革命史鑑』と『壯烈譚林』

一　『泰西革命史鑑』

この書は、明治十三年末譯述に着手され、十五年一月第一、五月第二、七月第三と正編刊行、十六年から十七年に亙つて續編三册が刊行された。久松義典纂譯とある如く、「廣ク泰西ノ史類ニ就キテ其要ヲ摘譯シタル」ものであり、その主として據つたものは「革命史、文明史、史論、及ヒ二三ノ萬國史、國別史」であるといふが、それ等の書の何といふものであり、著者の何といふかは、一々明記してゐないから知る由もない。

内容の按配については、大略「紀事本末」の體に倣ひ、「專ラ革命ニ關係セル事蹟ヲ擧グルノミ」と斷はつてゐるが紀事本末の體に倣つてゐる點は事實としても、專ら革命に關係せる事蹟を擧ぐるといふのは、ぴつたり當つてゐない。寧ろ西洋歷史の出來事の中、專ら自由民權の宣傳に利用し得べき三四を選び、多分のイデオロギイを附加しつゝこれを詳述したものといふべきである。この選擇の標準となつたものは、「吾に自由を與へよ、然らずんば死を與へよ」の語で自由民權の志士からは神の如く崇拜された米國獨立當時の煽動雄辯家パトリツク・ヘンリイの演説で、即ちヘンリイが英王ジョオヂ三世を彈劾した大演説の中に——

"Caesar had his Brutus, Charles I. his Cronwell, and George III ——"

の語がある。これは譯者義典が譯してゐる如く、該撒(シーザル)ノ世有ニ不盧多ハ、査禮斯第一ノ世有ニ格朗空(クロムウエル)ハ、若爾日(ジョルジ)第三ノ世有ニ何

人」といふ意味であるが、義典は此の語によつて、西洋歴史中シーザル對ブルータスの事蹟、チャールズ一世對クロムウエルの事蹟、ジョオヂ三世對ワシントンの事蹟の三つを選んでこれを正編とし、更にフランス革命をもつて續編に充てたものである。叙述の態度は、表面紀事本末式に違ひないが、專ら暴君と志士とを明確に對照せしめることによつて、志士の功業を讃美し、自由民權の闘士に鼓舞激勵の精神的糧食を與へるにあつたことは、斷はるまでもない。

正編三冊、第壹冊は上卷〇（該撒世有ニ不盧多ニ）「羅馬共和政府轉覆ノ亂ヲ紀ス」と中卷〇（査禮斯第一世有ニ格朗空ニ）「英國君主政府廢滅ノ亂ヲ紀ス」の上半分を收め、第貳冊は中卷の下半分の大部分を收め、第參冊は中卷下半の續きと、下卷〇（若爾日第三世有何人）「北亞聯邦獨立開國ノ亂ヲ紀ス」を收めてある。續編三冊は凡て「佛國革命亂ノ顛末」を記したものである。これ又諸書を纂譯したものとのみ記し、原著作、乃至著作者を明記しない。

以上六冊の『泰西革命史鑑』に述るところの史實は周知のものであつて、今こゝで繰返して說くまでもない。義典は漢學に達し、文章を能くしたので、叙事に精彩のあるところが少くない。一例を引けば、——

（上略）是時卓鶩タル雄辯家巴的力顯理モ亦議席ニ列ナリシガ各員沈皆默スルヲ見テ慷慨悲憤自ラ已ム能ハス直ニ起立シテ先ツ英國國會ニ斯ノ如キ權力ナキコトヲ論シ且州民ハ固ヨリ此法令ニ抵抗スヘキ權利ヲ有スルコトヲ說キ畢生ノ力ヲ竭シテ之ヲ極言痛論シタリ然ルニ議長并ニ過半ノ議員等ハ皆王權黨ナルヲ以テ大ニ顯理ノ發議ヲ論駁シ往復辯議暫ク已マサリシカハ顯理ハ勃然激怒シテ益懸河ノ辯ヲ振ヒ滿場ノ異議ヲ論破シ去ルコト恰モ疾風ノ枯葉ヲ拂フカ如ク更ニ聲ヲ放チ呼ハリテ曰ク該撒ノ世ニハ不盧多アリ査禮斯第一ノ世ニハ格朗空アリ若爾日第三ノ世ニハ何人アリヤ」ト古例ヲ引キテ君權ノ强大ニ過ク可ラサルコトヲ論シ暗ニ不盧多格朗空其人ナキコトヲ慨嘆スルカ如クナリシカハ議長ハ之ヲ聞キテ大ニ驚キ忽チ「是レ叛逆ナリ〳〵」ト叫ヒタルトキ各員モ往〻同音ニ「叛逆ナリ〳〵〳〵」ト呼ハリタリ顯理ハ尙毫モ自ラ屈セス頭髮上指シ目眦爲メニ裂ケ愈聲ヲ放チテ「若爾日第三ノ世ニハ何人アリ

ヤ」ト反覆シ且謂テ曰ク「古例既ニ斯ノ如シ盍ソ之ニ則ラサルヤ他人ハ之ヲ以テ叛逆ト爲スモ余ハ毫モ之ニ管セサルナリ」ト斯ノ如クシテ各員ヲ論服シケレハ此事早クモ諸州ニ傳ハリ之カ爲メニ感奮興起スルモノ鮮カラス（第三冊、下卷第一回）

これは一例であるが此等の叙事は、本書中實に豐富である。これは何れも當時これを讀む者に對して、多大の刺激を與へ、益々自由民權に邁進する志を固めさせたことゝ思ふ。尙ほ各卷の末に「野史氏曰ク」として、義典の政治的立場から下した總評がある。これは勿論史實に卽した批評であつて專ら義典その人の政治的理想を吐露したものではないが、然し勿論その批評の間に、自らかゝる理想の片鱗が隱見してゐる。例へば中卷「英國君主政府覆滅ノ亂」と評した次の一節を讀んで見るが可い。

（上略）蓋英國人民ノ初志タル本ト政法改革ヲ企圖スルニ在リテ勢王家ニ抗シ政法ヲ論セサルヲ得ス以テ國亂ヲ起シタルモノナレハ他日國王ヲ弑シ政體ヲ改ムルニ至ルハ素ヨリ意想ノ外ニ在ルヘシ然ルニ其王權ノ偏重過大ニシテ大ニ自由幸福ヲ傷害スルニ至リテハ已ヲ得スシテ干戈ヲ動スニ至レリト雖モ其心豈毫モ王室ヲ轉覆スルコトヲ欲センヤ唯夫ノ人心激發ノ機ニ乘シテ希世ノ姦雄崛起スルアリ名ヲ一國ノ公義ニ藉リテ實ハ自己ノ野心ヲ逞クシ譎詐百端以テ國人ヲ戰亂ノ間ニ籠絡セルニ由リ終ニ茲ニ及ヒタルナリ之ヲ要スルニ英國革命ノ亂タル君主人民各權利ノ大小ヲ爭フテ頗ル一國ノ禍害ヲ生シタリト雖モ是ヨリシテ深ク鑑戒スル所アリ以テ他日ノ立憲政體ヲ確立スルコトヲ得タレハ其天下後世ニ益アルコト豈淺鮮乎哉惟フニ我邦近來大詔渙發セシヨリ朝野ノ人心翕然トシテ向フ所ヲ知リ企首刮目以テ數年ノ後ヲ想望シ以テ其自由幸福ヲ保安センコトヲ欲シ殆ト一日千秋ノ思アリ其果シテ能ク數年ノ後ニ至リ初メテ國會ヲ起シ憲法ヲ立テ以テ萬古不易ノ國體ヲ定ムルコトヲ得ルニ至ラハ眞ニ是レ千載ノ一時未曾有ノ盛事ト謂ハサル可ラス之ヲ彼英國ノ血ヲ流シ骨ヲ積ミ而後能ク之ヲ確立スルモノニ同視セハ其得失啻ニ霄壤ノミナ

ラス是特リ我邦古來ノ國體夐ニ萬國ニ卓絕スルアリ列聖相承ケ以テ臣民ヲ撫育スルノ致ス所ナレハ吾人ハ當ニ內以テ國家ノ鴻恩ヲ奉戴シ外以テ萬國ニ誇稱スルコトヲ得ヘシ雖然政權ハ利器ナリ之ヲ執ルモノ用ヲ誤リ易ク人心ハ活物ナリ機ニ隨フテ常ヲ失フモノナレハ數百歲ノ久キ天下ノ廣キ或ハ偏輕偏重ノ說ヲ主張シ既ニ國會ヲ開クモ大ニ其權利ヲ限制シ若クハ屢之ヲ解散スルコト查禮斯ノ如ク或ハ暴戾激烈ノ議ヲ倡ヘ國會ノ名義ヲ藉リテ叛逆ヲ企ツルコト獨立黨ノ如キモノアリテ我人民ヲ困メ我國體ヲ害スルコト無キヲ必セス此際必ス是非互ニ奪ツテ彼此相讐トシ各派ノ政黨紛然競起ルニ至ルヘシ是今日業已ニ其端緒ヲ開キタルモノニ非スヤ時勢茲ニ至リテハ吾人ハ當ニ中正ノ大道ニ由リ改進ノ主義ヲ奉シ以テ立憲政體ヲ千萬世ニ維持スル事猶英國輓近ノ形勢ノ如クナラン事ヲ欲シ眞成愛國ノ政黨諸人ト共ニ力ヲ竭シ論戰辯鬪スルアリ以テ國會ノ間ニ他黨ト雌雄ヲ決セサル可ラサルナリ（第參册）

此の評は種々敎ゆるところがあるが、第一に注意すべきは、義典の意圖は革命讚美ではないといふ點である。彼がかく革命の史實を詳叙したのは、これによつて上下の人に警告し、各々反省してかゝる極端な事態を回避せしめ、平和裡に眞正の立憲政體を現出したいといふにある。そこで自然、急激な革命主義を排し、中正の改進主義を重んずることゝなるが、これは換言すれば、自由黨の主義を排して、改進黨の主義を宣傳することに外ならぬのである。文中「國會ノ名義ヲ藉リテ叛逆ヲ企ツルコト獨立黨ノ如キモノアリテ」云々は、暗に諷するところがあるべく、從つて「希世ノ姦雄」たるクロムウルも、義典の意中には何人かを指すところがあつたものに違ひない。義典の非過激主義、非暴力主義は、更に「羅馬共和政府轉覆ノ亂」を評した次の一節によつて十分裏書きされるであらう。

（上略）是擧（シーザル刺殺）ヤ本ト一時ノ人心ヲ快フスルニ足ルカ如シト雖モ要スルニ輕發暴動荊軻聶政ノ爲タルニ過キス故ヲ以テ一姦雄先ツ亡ヒテ他姦雄繼キテ起リ再ヒ人心ヲ籠絡シテ大權ヲ其手ニ收メタリ而シテ彼ノ是擧ヲ首倡スルノ徒ハ蒼皇鼠竄シテ唯其身ヲ保タン事ヲ欲シ復タ亂後ノ事ヲ謀ルニ暇アラス何ソ其ノ進ムノ銳ニシテ

過クノ適ナルヤ是他ナシ其本意固ヨリ國ヲ憂ヘ民ヲ愛スルノ赤誠ヨリ出テス一時激スル所アリテ血氣ノ怒ニ乘シタルニ由ル而已宜ナリ其是擧ヲ以テ羅馬ノ國務ヲ興張スル事ヲ得ス空ク內亂ヲ起シテ自ラ禍ヲ招キタルヤ（第壹冊）

これも亦、改進黨の立場から自由黨に警告するものでなければならぬ。而して義典が國務を興張する所以とするものは、頗る理想主義的であり、彼の人柄を好く示してゐる。曰く、——

抑古今國務ノ興張スル所以ハ開明ノ高下如何ニ由ル開明ノ起ル所以ハ特ニ交際、政法、知識、道德ノ發達スルニ在ル耳四者各其性ヲ異ニスト雖モ相須テ用ヲ爲ス固ヨリ偏廢ス可ラサルナリ惟フニ羅馬ノ國タル交際、政法、知識皆盛ナラサルニ非ラス而シテ國勢興ラス開明進マサル所以ノモノハ獨道德ノ廢壞ニ由ル無キヲ得ンヤ蓋シ人心ニ有形ノ樂アリ無形ノ樂アリ彼此幷ヒ行ハレテ相悖ラス是レ人ノ人タル所以ノ理ナリ若夫彼能ク此ニ勝ツニ至レハ何ヲ以テ禽獸ト相懌ハンヤ一人之ニ由リテ其榮辱ヲ判シ一國之レニ由リテ其興廢ヲ決ス關係スル所最モ大矣愼マサル可ンヤ我邦輓近人文頗ル開ケ所謂交際、政法、知識モ漸ク盛ナラントス特ニ道德ニ至リテハ或ハ衰頽ノ兆ナキニ非ス今ニ及ヒテ之ヲ振興セスンハ上ハ以テ國運改進ノ途ヲ塞キ下ハ以テ吾人カ自由權利ノ基礎ヲ弱フスルニ至ラントス有志者豈猛省痛戒セサル可ンヤ（第壹冊）

國家興隆の基は文明開化にあり、文明開化の基は道德の進歩にありといふ、こゝにいふ道德がいはゆる東洋的舊道德を指すものでないことは論を俟たない。社會に對する倫理的批判の謂ひであり、社會的正義の力の謂ひであると解して始めて義典のいふ意味を了し得る。此の一節を讀むと、義典の人柄が知られると共に、彼が實際政治に、失望して社會主義的思想に入るに至る原因が既に見えてゐるやうな氣がする。

二　『讀史偶評・壯烈譚林』

『壯烈譚林』は全一册で、明治十七年譯に着手され、十九年一月出版に成つた。內容を一言にして言ふと、フランス革命に關與した志士烈婦の言行錄乃至王族王黨受難錄ともいふべきもので、上下二卷に分れ一卷各數十項の事蹟を記し、間々それに論評を加へてゐる、これが讀史偶評と冠されてゐる所以であらう。勿論義典の創作に成るところは一つもないが、一讀して何となく前者よりも稗史的趣味が濃いやうに感ぜられるのは、興味本位の讀物風に編纂されてゐる爲めである。上卷の項目は、――

烈婦激黨ノ渠魁ヲ殪ス
（シャルロット・コルデーのこと）
兩傑士ノ死狀
（ロベスピエールの死、ダントンの死）
暴徒群起ノ慘害
（婦人暴動のこと）
夫妻、自由ノ爲メニ殉節ス
（カミイユ・デムラン夫妻のこと）
民怨積ミテ王族ノ枯骨ニ及ブ
（民衆サン・ドニイの墳墓を毀つこと）
斷頭臺上ノ貞婦

（ボルドーの一婦人のこと）
義婦、志士ノ阨窮ヲ救フ
（ボーキー夫人のこと）
暴徒一朝ニシテ三千人ヲ囚撃ス
獄窓外ノ慘狀人ヲシテ慘鼻セシム
（パリの牢獄の慘狀）
王族獄中に辛楚を嘗ム
絶命辭
（マリイ・アントワネット后の絶命辭）
志士ノ龜鑑
（市長バイイーのこと）
三烈婦死ヲ決シテ父ヲ救フ
八晝夜ノ屠戮六千人
邪黨撲滅ノ壯語
正議能ク暴權ヲ掣肘ス
（ローランのこと、ダントンを防ぐ）
名士讒論ノ爲メニ罪ヲ獲テ自殺ス
（コンドルセーのこと）

下巻の方は――

議院國王ヲ死刑ニ處ス

劊手斷頭斧ト相親ム

（サムソンのこと）

雄辯家政社ニ聲譽ヲ馳ス

（ロベスピエールのこと）

議院王權廢止ヲ首唱ス

（ペルニョー）

懦夫及ビ烈婦就刑ノ狀ヲ異ニス

（ヘベール）

忠臣激黨ノ爲メニ刑ニ就ク

（バルナーヴ）

自由主義ヲ奉ズル武將ノ龜鑑

（デュムウリエーのこと）

名臣ノ奏議

（ローランのこと）

老政治家王事ノ爲メニ殉節ス

（狀師マールゼルブのこと）

記事は何れもフランス革命史中で有名なものばかりであるから、それは繰返すまでもないが、たゞ義典の評を一二抄出してお目にかけよう。上卷「王族獄中ニ辛楚ヲ嘗ム」の條の評に曰く、——

嗚呼佛國帝室ノ尊榮地ニ墜チテ王族ノ阨窮汚辱茲ニ至ルハ是レ其ノ自ラ取ル所ナリト云フト雖モ激黨諸人カ心事ノ畏ル可ク惡ム可キニ至リテハ苟モ忠誠ノ心アル者皆當ニ其肉ヲ啖ハンコトヲ欲ス女皇若シ暴政酷令ニ協參セシノ罪アリトスルモ之ヲ處スルコト自ラ其道アルヘシ幼冲皇子ノ如キハ果シテ何ノ罪カアル蓋此談ヲ一讀シテ怒髮上指セサルモノハ人臣ニ非ルナリ後世人臣タル者ハ焉ソ王室ノ尊榮ヲ希ハサル可ンヤ

下卷「懦夫及ビ烈婦就刑ノ狀ヲ異ニス」の條の評に曰く、——

疾風勁草ヲ知リ板蕩忠臣ヲ見ル平素無事ノ日一時ノ潮勢ニ乘シテ狂奔喧呼シ予獨リ民權黨ナリ將タ熱心家ナリト誇負シ慷慨激昂シテ愚夫愚婦ノ喝采ヲ博スルモノト雖モ其一旦鼎鑊前ニ在リ刀鋸後ニ在ルノ朝ニ臨ミテハヘベルト其醜態ヲ同フセザルモノ世上果シテ幾人カアル虛喝シテ世ニ衒フノ徒少ク自ラ戒省セヨ

此の評をよく留心して讀むと、義典に革命的過激行動の否認の意があるのが知られると共に、自由黨の所爲を非とする意味が隱約の間に現れてゐる。前評の激黨云々の條、後評の愚夫愚婦の條を讀むと、彼が此等の語によつて自由黨を指してゐることが明確に看取される。『壯烈譚林』の刊行された明治十九年は、自由黨に暴動が頻發した後であり、改進黨と公然鬪爭を宣言した後であるだけに、これを諷する義典の語も、前の『泰西革命史鑑』の場合よりも、可成り手强いものとなつてゐる。

四　久松義典の政治小説

一　『代議政談・月雪花』

『代議政談・月雪花』は前後二編、前は明治十九年十一月稿成、二十年一月出版（國華堂）、後は明治二十年三月稿成、同年十月出版であるが、前編の百餘頁に對し、後編は二百餘頁で、この量は倍する。標題に New Political Novel とあるが、この New は Political Novel として New であるといふのでなく、Political Novel といふ、Novel 中での New Genre の義であらう。この一語に當時の素人作家の意氣込みが仄見えてゐるやうに思はれる。

試みに自序によつて、此の小説を著した趣意を見ると、義典はかういつてゐる、——

（上略）大詔一降セシヨリ茲ニ六年、我內閣ハ責任宰相ノ制度ヲ確立シテ百揆咸ク立憲政體ノ針路ヲ指シ憲法ノ取調ヨリ議事堂ノ建築ニ至ルマデ一トシテ當路者宵肝ノ勞ヲ表示セザルハ莫シ自今四星霜ヲ經タル後我ガ政治社會ノ變遷ハ果シテ如何、定メテ知ル百事體面ヲ改メテ忽チ新乾坤ヲ現出シ始メテ雲雨ヲ披キ晴空白日ヲ仰グ可キ事ヲ、果シテ然ラバ則チ此數年ノ間ニ於テ將來ノ事ヲ豫想シ試ニ私議ヲ建テ、當路者ニ涓埃ノ微衷ヲ陳ベ且ツ民間ノ同志ト相諮詢スル事ノ如キハ洵ニ是レ目下ノ急務ナリト信ジタルガ故ナリ

即ち一種の代議政體未來記、國會未來記を想像し出して自家の理想とする代議政治を描出し、これを廟堂在野の政治家乃至政治關心者の參考に供したいといふのである。此の際、義典の所謂理想の代議政が改進黨の主義に基くものであらうとは、豫想されるところである。尙ほ例言に於いて、——

斯書ハ近來著者ガ時事ニ感スル所アリテ稿ヲ起シタルモノナリ其名ヲ月雪花ト呼ビタルハ世間普通ニ知ラレタル此三景ニ擬シテ三政治家ノ事蹟ヲ叙述シタルニ由ル

といつてゐるのは、自序の說明の補足として一步進めたものであり、又、――

讀書ノ要ハ知見ヲ開クト同時ニ快樂ヲ享クルニ在リ故ニ著者ハ說話中ニ議論ヲ加ヘ議論中ニ說話ヲ交ヘ或ハ單純ナル條理ニ據リテ諤々正言シ或ハ普通ノ人情ニ訴ヘテ喃々絮說スル事トナシタリ是レ議論ハ人ノ知見ヲ開キ說話ハ人ノ快樂ヲ生ジ讀者ヲシテ一擧兩得ノ利ヲ收メシメンガ爲メナリ

といつてゐるのは、此の書の內容を論文形式で發表せずして、小說形式にした理由である。義典は、專らこの內容をたゞ小說的形式化するに急であつて、これを小說的に秀れたものにするといふことは考へてゐなかつたらしい。これは畢竟義典自身に、矢野龍溪などの如き文學意識がなかつたせゐであらうが、然しそこを考へなかつた爲めに、此の『月雪花』は、小說としては實に機械的な面白くないものとなつてゐる。それは兎もあれ、研究の名目上、私はこの小說の梗概を傳へ、且つその中に含まれてゐる政治的理想を一應檢討することにしよう。

此の小說は、例言にいふ如く月、雪、花の三景に擬した三政治家の活動言論を寫したものであるが、その三政治家とは花房保（保守家）、雪江急太郎（急進家）、月形進（改進家）の三人である。三人中、何れが眞の中心主人公であるかは、殊更に說くまでもあるまい。

前編初回はいはゞ總論であり、顏見世である。花房、雪江、月形の三人は公園（恐らく上野か）に菊花見に出かけた歸り、晩餐を共にしたが、席上菊花の話から時事問題、社會の成行、國會論等に論を移して、各〻の立場から意見を交し合ふ。

花房は年四十四五、風流圓滑の老成家で、その主張するところが開明的保守主義なだけに、國會に於いては、一院

主義よりも上下二院主義を執るもので上院を以て皇室の藩屛とし、これによつて下院の粗暴僭越を制するといふ持論である。雪江はこれに對して三十にならぬ書生上りの急進家、蓬頭垢面に近い服裝であるが、これは徹底的な一院主義で、二院制には種々の弊がある、——

其尤も著しき者を擧ぐれば議事手續等が重複になりて徒に無用の時日を費します。無益の費用がかゝりて不經濟であります。議政上に往々混雜を生じ易くなります。我々が自由權利の活動に邪魔を受くる事があります。

云々と論じ立てゝ、大にこれを論駁する。花房もこれに敗けず再駁するが、兩人の間で解決がつかぬので、遂に月形の意見を聞くことになる。月形は年三十二三、深沈溫雅、風采容貌、眞に紳士の風がある。月形は雪江の一院制をアナクロニズムの過激論として否定するが、上院乃至元老院の性質職分については、花房に反對である。上院を以て專ら皇室の藩屛たらしめんとするのは、却て不敬で、皇室は全國人民が一致して翼戴すべきもので、上院の獨力で何うかういふべきものではない。上院の妙は君民を調和して政治運用の妙を計るにある云々。即ち劈頭に於いて、既に改進黨的政治理想の宣傳たることを明白にしてゐる。

以上を總序として、いよいよ小說的場景に入る。第二回は、雪江の故鄕の消息で、地名は何處ともないが、舊藩の城下、士族屋敷の一部に妹珠子は、學校教師をして母を養ひつゝ、兄が政治上に成功する日を待つてゐる。（作者は珠子の覺語を述るところに女性自覺の閃めきを示してゐる。）然るにその兄から久しく手紙もないので、母は心配してゐるが、實は雪江は筆禍によつて入獄し、獄中に病んでゐる。珠子は種々探索してその事を知つて驚いたが、母には何もいはずにゐるのである。

第三回は一轉して某處の選擧會場の光景である。作者は選擧會の光景を描く前に、選擧制度といふものゝ大體を說明してゐる。日本の選擧區を假設して、人口の比例から說き起し、歐米の實例を引用して細々と說明してゐるが、こ

れはこゝで繰返して論ずるまでもなからう。

選擧會に於ける候補者の演說で第一に起つたのは、雪江急太郎である。雪江は、七八年前自由民權論の全盛時代に比しこの頃の人々が政治に冷淡になつたことを咎め、國民が政治に目をつむつてゐる間に內治外交ともに油斷のならぬことになつたとて、選擧民の覺醒を促がし、自分の政見は、差當り地租輕減、常備兵服役期限の短縮、及び國權擴張の方案等であるといひ、――

萬一反對論者の駁擊を試むる者があれば飽くまで之を反駁し尙ほ我が論門に降伏せずんば決鬪狀を送りて輸贏を腕力に試み彼等を撲滅し盡すにあらずんば一步も退かぬ決心をいたしましタ。

と絕叫する。聽衆もこれに感動して雪江の人氣が大に揚つた折柄、場外に俄に喧嘩の聲がし、聽衆の騷動となり、演說會がメチヤメチヤとなる。これは雪江及び急進派の人氣の好いのを氣に病んだ保守派の奸策であつた。

かゝる折に急進派の內部の結束が固いと、この位ゐの妨害策は何でもなく退治出來るのであるが、多年消息が分らずにゐて急に議員選擧のために結合したのであるから、かゝる場合、內部に動搖が起つて、運動に統一がなくなる。保守黨はそこを狙つて、急進派の陣營を攪亂した上、一方郡村の公吏と十分結托してかゝるから、やゝともすると、保守派が選擧に勝ちさうになる。

この內部結束の必要と、保守派の官權との結托の點は、義典の憂慮の存するところであり、政黨者流の覺悟を促したところである。尾崎學堂は此の一段を評して「保守黨果シテ此ノ卑劣手段に出ン乎自餘ノ政黨者タル者、豈ニ預備セザル可ン哉」といつてゐる。

第四回も、全回議論といつていゝもので、先づ地方新聞記者の議論に托して、選擧人が選擧といふものに重大性を悟らぬこと、代議士選擧は立法官の叙任と同じで、この大權力は政府にはない、獨り人民にのみある、從つて選擧は

愼重にしなくてはならぬことなどを懇々と說いてゐるが、これは作者の老婆心に違ひない。ついで選擧方法の說明となる。つまり普通選擧か有限選擧か、直接選擧か間接選擧か、の問題である。義典は、西洋の例を引用して大にこの問題を說いてゐる。而して結議とするところは、當分は有限制の直接選擧を可とするといふのである。これは又改進黨多年の主張であつた。この中で說明を要するのは間接選擧といふことであるが、これは人民（卽ち選擧權を有する人々）をして先づ選擧委員を選ばしめ、この選擧委員をして代議士を選擧せしむる仕組みをいふ。有限制とは、納稅資格によつて選擧人の資格を制限するものである。當時の代議政治に對する意見では、自由黨は普通選擧の直選主義、保守黨は有限選擧の間選主義、改進黨は、賤民擅制の弊を防ぐため當分有限制をとるが、直選こそ人民の自治精神の發揮に適するものとして、有限選擧の直選主義を執つた。義典がこの小說で理想の選擧と主張するものは卽ち此の改進黨の主義である。

第五回は、前回の選擧論に對して投票論である。こゝでも先づ投票神聖論を常識的に又啓發的に論じて、さて本筋に入つてゐるが、前に述べた雪江の選擧區でも、いよいよ投票となつた。雪江はその人氣の强かつたことから見て當然自分が當選するものと考へてゐたが、開票してみると、意外にも阿部設吉なる此の地の縣會議員の當選となつた。阿部某は勿論人物としてはいふに足らぬ、たゞ大地主階級の一人といふのみで、縣會でも原案贊成ばかりしてゐるので地方官吏の受けは大によろしい。加ふるに此の區の選擧民は智識の程度が低いので民權の自由のといふことは分らぬ。そこを狙つて、阿部は一方では地方官の歡心を買ひ、又一方では黃金を用ゐて無思慮な人民に結合した結果、易易と當選することが出來たものである。雪江はこの結果を見て、日本全國の政治社會の爲めに悲んだ。

こゝで選擧方法の豫想に入るのであるが、この選擧方法は、今日と違つて可成りやゝこしいものとなつてゐる。先づ候補者は記錄所に屆け、且つ二三百圓の選擧費用を前納する。記錄所では、某選擧區の候補人名を年齡順に番號を

つけて新聞紙に廣告する。かくして投票となるのであるが、投票紙には廣告された候補人名のある限り凡ての候補人名を書かなくてはならぬ、たゞその順序は自分が最も望を屬する人物を第一とし、以下これに準ずるのである。さうしてその第一に書かれた人が辭すると、自然これが第二の人への投票に加へられる。

ところで、第一に立候補すべき人々で出なかつた人々を通觀すると、第一に立つべきその地方の豪農とか鉅商とかいふ人々は、大概老成家であるが、政治上に奔走したことがないので、國會とか天下の大政とかいふことに聞き怖ぢして出て來ない。此等中從來政治上に奔走して相當の知識ある人でも、辯論が拙だとか何とかいふ理由からいざとなつて急に引込思案になる人がある。又選擧に費用を要する點から用心して出ぬことにした人々もある。

從つて、當選した議員はといへば、官吏の干渉で當選して自分も官吏となつたやうに喜んでゐる半官議員、金錢で當選した銅臭議員なども少くなかつた。だが先づ概して記者、學者、法律家、代言人、地方議員、事業家、教育家等都會と地方とに論なく紳士として中等社會に位地を占めてゐる知識階級の人々が多く當選した。(これは改進黨全盛の豫言である)。此等知識階級の人々は、多く財産をもたぬ人々であるが、幸ひ巨商豪農の連中が情誼上一切の費用を引受けて支辨したので、立派に當選出來たのである。これが即ち知力と金力の理想的結合であつて、改進黨の最も力强いモツトーの一つであつた。

以上の豫想は、改進黨全盛の夢を別にせば、先づ當らぬでもなかつた。讀者は、宜しく第一回國會議員總選擧の結果に照して、義典の豫想を檢討して見られよ。豫想の半ばは、略ぼ適中してゐることを發見するであらう。

第六回は月形進の傳記である。この回の月形の傳は、恐らく義典自身の自傳をいさゝか潤飾したものらしく、その點で、いかにも硬い無味な前回迄に比較して、漸く若干の光彩が生じて來る。讀者は、前記の義典傳を想ひ起しつゝこの回を讀むべきである。

月形進は某藩門閥の子である。彼は家の事情によつて、高祿の出に似ず早くから家計に心を勞してゐたが、維新の大變に及んで、甚しい困窮を嘗めることとなつた。彼は武家の出ながら、夙に武技よりも文學を好み、それも經書の講義よりも歷史と文章に力を入れた。維新後一時藩の學校に敎鞭を執つたが、志すところがあつて、擧家都に出た。だが不幸にして僅か半年間に父母及び兩妹を喪つた上、他人に預けてあつた財産は詐欺漢の爲めに横領され、赤貧の境遇に陷入つたのである。

然るに、月形は、この境遇に陷入るや却て發奮し、專ら力を學業に盡し、「都下各所の學塾に流寓すること兩三年、この間始終朋友故舊等より學資を助けられ終に漸く自ら書籍を編述し又は世上に知友を得るに及びたる由、」云々。この邊は僞りのない義典自傳である。

かくて月形は幾分物質的に餘裕を生ずる身となり、世間にも交はることとなつたが、初めは堅く自ら持して敢て花柳の遊に耽る如きことはしなかつた。然るに漸く世間に出て交際も廣くなるにつれ、悟るところがあり、「士人當に世事を以て讀書を分つべからず讀書を以て世事に通ぜしむべし。人情に近づかざれば世を擧て皆畏途、物情を察せざれば一生倶に夢境」などといふた人の言に警醒されたか、今迄の頑固書生が急に一個の風流才子となり出した。前記義典傳には、この風流才子時代の彼について語るところが無いから、その補ひの爲め、一節引用して見よう。

凡べて物事は極度より極度に變化するものにて人の氣風の移り替はるも亦意想外に出づる事多し左れば月形の氣風は一たび風流才子と云ふ方角に向ひしより是まで物に應じ人に接するには唯一個の條理と云へる定木にのみ據りしが今日となりては人情を以て百事を處するの傾向となりたり已に人情を重んずる場合に於ては人情中如何なるものが尤も眞摯切實なるやと尋ぬるに男女愛慕の關係に如くものなし語に云く生々死々情の爲めにす多情の極生きんと欲して得ず死せんと欲して得ず以て生くべくして死し以て死すべくして生くと云ふ程なる譯合なるが故に一旦人情

の眞味を喫着して繾綣惻怛自ら已む能はざる場合に立到りては是まで石心鐵腸を以て自ら許したる月形も今は漸く花を愛し柳を折るの雅興を買ふに至り或時は一刻千金の春宵を惜しみて青樓に上り、夢を破るの曉鐘を恨みて階に滴るの朝雨を悅び比翼の芳契は末永く天地と倶に渝るまじと固く誓ひたる美人もありし由なり又或時は水邊の高樓に綺筵を開きて身は紅閨粉陣の間に擁せられ酒盃飛び弦聲沸き唱歌起り拇戰開け滿堂一たび目眩み耳聾するの豪興を盡せし後ち醉に乘じて愛妓に扶けられ別に小宴を開きて相對酌し一碗の淸醪、一鼎の香葉且つ飮み且つ喫し緩彈低唱の聲漸く霽みて夜方に五更ならんとするの歡を罄したることもありしとぞ故に嘗て其愛眄を被むりて屢々相會したる美人の內には一點の芳心尙ほ未だ灰せざる者あり南山の竹を罄して意を寫すも窮りなく東海の波を決して情を流すも盡きず愁は雲の如くにして長に聚まり泪は水の若く以て乾き難しと云ふに至る者は蓋し無きにしもあらざるべし（下略）

これが自叙の語であるとせば、義典にも亦多情多恨の時代があつたものであらう。義典は月形に托して、「斯くして一時花柳社會に往來し頗る人情纏綿の趣を探り得たるは其身に取り却て利益となりしことなきにしもあらざるべし」といつてゐるが、恐らく世間人事について經驗を積んだといふ意味であらう。然しこれは辯解の語として聞くべく、眞に利益を信じたものとは思へない。だが善惡は別として、この間の消息にこそ眞に小說的なものを含んでゐたことであらう。

かくて月形は、花柳社會に耽湎してゐるうちに、更に悟る所あり、節を改めて再び書齋裡の人となつた。一夜、讀書の餘、慨然として嘆して曰く、――

凡ソ權力ヲ握ルノ手ハ兎角ニ專橫恣睢ニ流レテ且ツ偷安ヲ是レ事トスルコト古今東西皆然リ故ニ苟モ當局者ヲシテ常ニ宵衣旰食ノ勞ヲ執ラシメ始終油斷ナク親切ニ國民最多數ノ幸福ヲ保護セシメント欲セバ人民先ヅ自ラ奮ツテ本

分ノ權利ヲ愛重シ當然ノ職務ヲ盡スコトニ注意シ大ハ一般ノ風俗ヨリ小ハ一個人ノ德義ニ至リ成ルベクハ餘リ敗壞ノ極ニ達セサル内ニ之ヲ救回スル事ヲ務メ人民先ツ自ラ改進シテ政府ノ改進ヲ促ガシ已ニ改進セル人民ハ未ダ改進セザル政府ヲ刺戟シ自ラ德義ヲ修メタル被治者ハ他ノ不親切ナル主治者ノ政治ヲ矯正スルノ方向ニ出デザル可カラズ敝風頽俗ハ政治改良ノ基ニアラズ德義節操ナキ人民ハ安ンゾ本分ノ自由權利ヲ享有スル事ヲ得ンヤ云々

即ち月形は、社會の改革は懸つて中等社會の士人の道德にあり、この道德が墮落してゐれば、政治の向上など出來ぬことを痛感する。かく、中等社會の士人（知識階級）の道德を政治改革の基準とする點も、改進黨の政治理想の一つである。

かくて、月形は機を見て同志と打ち合せ、國會議員立候補の準備として、地方巡遊に出かける。こゝで『月雪花』の前編は終つてゐる。

後編の第一、二の兩回は花房保の行動、心事を處するに托し、元老院即ち上院の組織、使命を說明してゐる。花房は元老院議員たらんとし、草野昇なる若手官吏の秀才を腹心として、元老院の組織、選任、使命等について種々調べる。これに對し草野は外國の例を引いて、詳しく返答する。かうして此の問答の間に、讀者をして元老院なるものについて常識を得せしめようといふプランである。即ち草野が說明する元老院の組織は殆ど作者義典が理想とする元老院即ち上院の組織と見ても可い。參考として、大略を說明しよう。

元老院議員は特選公選の二種に分れる。特選は「皇族華族及び嘗て重要の官にありし者、學識ある者」の中から天皇が親選されたもので、終身在職である。この種議員は總員の三分の二以下といふから、これが元老院の根幹と見て可い。公選は各府縣を一選擧區として、本員一名補缺一名を選擧する。その選擧方法は複選で、先づ各選擧區で選擧人二百名を選びその二百名が右の二名を選ぶ。何れも、皇族以外、年齡は三十以上の者に限る。在官者が議員になる

には辭職しなければならぬ。それから「代議院の彈劾に依りて行政及び司法官吏の國事犯又は職務上の過失を審問する事等」は皆至當の事柄だとなつてゐる。

そこで實際選任の際には何うならうかといふと、久松の見込みでは、特選では、皇族議員の少數は勿論であるが、華族でも公侯は少數の方であり、伯爵は實際政治家が多いから、議員となるのは、爾餘の伯爵階級と、子、男兩爵階級から出る。然し、それを合しても、議員に適する華族は極めて少ない。そこで元老院の中心は何うしても、「嘗て重要の官にありしもの、學識ある者」といふ連中となる。だから自然此の二種の議員は多數となるが、前官吏を無闇に殖すことは、元老院をして老朽官吏の隱居所化する恐れがあるから、宜しく學識ある議員を澤山にしなければならぬ、これは立憲政治上、元老院は代議院卽ち下院と對立し、時としては抵抗する必要もあるといふところからいつても、さうなければならぬ（インテリ中心の改進黨的特色が見えてゐる）。

此の學者的特選議員と共に元老院に於いて重大な責任を負ふのは、全國民間から選任されるべき公選議員である。此の種の議員は、——

純粹に人民から選擧せられ、代議する性質を有するものなれば彼の勤王、保守、老實、穩當などの主義を旨とし時としては因循、懦弱、干涉、壓制にも流れ易き多數議員の間に獨り民主政治の元素を持ち込み民權の伸張で油斷せず民福の增進に注意し又時としては活潑勇壯なる意見を提出して常に代議院の決議を助成し始終院中の空氣を新鮮にすることを勉むるのは實に此種の議員に限りましよう。

こゝに又民黨としての改進黨の面目が見えてゐる。公選議員はかく重大なものであるから、各地方で第一の人物（財の多少は論外として）でなければならぬ。從つて、これは後には、自然代議院卽ち下院から第一流の人物が昇進することになるといふのは當然である。この點で、今日の貴族院で最も多く活動してゐるのが、何種の議員かといふこと

を考へると、面白い對照を成してゐはせぬか。畢竟當時の民黨の理想は、上院においてもそのまゝ實現しなかつたのである。

今一つ注意すべき點は、著者が、元老院の使命に於いても、ドイツ流の、國王親選、下院反對、王室藩屛といふ思想を排斥して、英國流の、上下調整、下院補佐主義を說き、ドイツ流の親選說は、日本國上下の實情に即しないもので、日本の如き國情では、國民全體が皇室の藩屛であり、皇室藩屛を獨り親選議員の肩にのみあらしめるとする如きは、日本では許さるべきではないとする。そこで義典は元老院の本色なるものを說いて曰く、——

（前略）代議院は已に人民の代表者にて組織すれば元老院は經驗資歷ある人物を以て之を構成し一身の功績を表章せしめて萬人の想を繫ぐべしと云ふ趣意の樣だ、其仔細は代議士たる者は本と立法の學識を主とするからどつちかと云ふと爲政の才能に鍛鍊を缺くことが多からう故にこれを補ふには世故を閱歷して爲政の才能ある老練家を引入れそれで以て議政上に實際の便益を圖らんと企てた譯であらう、シテ此目的を達するには廣く天下の人材を公選するが第一にして、かの親選議官のみを寄せ集め限りある人數にて藩屛とか煎餅とか薄ツぺらな、せゝ細しい事を云ふなんぞには僕は至つて感心せぬ方だテ（以上第二回）

これが即ち改進黨的政治理想から上院なるものを觀たものである。

花房の娘お靜と草野と結婚の趣向は、小說的結構を續ける上から工夫されたものであらうが、本筋には別に關係はない。たゞ前編の第二回といひ、後編の第一、二回といひ、當時流行の婦女改良の思想が見えてゐる。これは尾崎氏の『新日本』等にも見えてゐたところであるが、久松氏もその邊の理想を多少述べてゐる。即ち女子教育の必要、女子教育と生意氣の禁物、押しつけ結婚の弊害、男女交際も男女同權も女子の教育をもつと進めて後のこととするなどである。

第三回に於いて、月形進はいよいよ地方巡回に出立する。その送別會の席上の有様等は、當時よくあつた有志懇親會等のスケッチであるらしく、義典としては珍らしく實感の籠つた細かい筆を弄してゐる。此の回で注意すべきは、月形が巡回の途次わざわざ訪問した日高操軒といふ隱士の言論である。此の操軒のモデルは恐らく義典の父久松義制（號操軒）であらう。「卓識高節の名は近國に隱れなく曾て國事に奔走して武功武勳共に著しく一官衙の長間にまで昇進せし人物なるが意見の合はざる事ありしより決然勇退し其後屢々官より徵辟を蒙むりたれども固辭して就かず」云云、これは卽ち義典の父操軒半生の自傳である。小說中の操軒が當今の壯士が國事に對する態度の不眞面目さを痛論し、昔の志士の意氣を說いてゐるが、これは義典の父の操軒が幕末維新の際に國事に奔走したときの實驗談と見て可い。だが何よりも興味があるのは、次の一節である。

（前略）次に今一ツ申し述べたいのは世人が國會開設を以て政治上、社會的何事にあれ、大革命の行はるゝを妄想する夢を醒ましたく思ふ事サ、勿論この未曾有の一大事は政治上の大變動を引き起し政治は國家人民が興廢禍福の關する所だからこれが爲めに一段の影響を及ぼすには相違ないが一旦國會が開けた曉には政事は忽ち善くなるであらう、國は忽ち高むであらう、兵備は忽ち整ふであらう、貿易は忽ち盛んになるであらう、ソシテ不景氣、不融通は忽ち無くなるであらうなんどと想ひ込んだら大間違で、大失望をするのは鏡に掛けて見る樣だ。

これは勿論實際の操軒の意見ではなく、小說の操軒卽ち作者義典の警告的文章であらうが、當時大勢は國會萬能論に心醉してゐたときに當つて、敢て此の言を發するのは、眼識の無いものには出來ぬことである。而して實際いざ國會開設となつて見て、義典のこの警告は、的中したのであつた。

義典は操軒をして、尙ほ將來の國事として「內に於て政黨爭權の弊及び善く之を調停するの方案、外に於ては外國の交涉、就中東洋諸國相扶持するの政略等」を變へしめてゐるが、これ等が何れも國會開設後當面の大問題となつた

ことは、人々の知る通りである。

此の一回は、『月雪花』前後編を通じて最も政治小說らしい場景を示すものであるが、山堂に燈を剔つて國事を談ずる快は、著者義典が諸地方巡回中度々味はつたところであらうと思ふ。

第四回は月形が出張先きの某地でなした演說の要旨、地方有志が感心して月形を代議士候補にせんとすること、反對派の壯士達が月形を降參させるつもりで反對に擊退されることを述べてゐるが、月形の演說の要旨といふのは、作者義典自身の政見に相違ない。その綱目は、內政上には稅法を改革して地租を輕減し、地方振興を計ること、(政府財政の緊縮、官吏減員、土木事業減省、府縣費の地方稅委託)、貿易を盛んにして國家の收入を增加せしめること(海關稅改正、輸入稅引上、輸出稅全廢)、奢侈品課稅等、軍事上には海軍擴張、文教上には普通敎育の勵行(地方實力に相當して)等、その他には地方自治論、知事と議會の關係、郡區長公選のこと、集會、新聞、出版に關する法律、即ち自由制度の論などである。即ち要約すると、地方自治、自由制度、稅法改革、海軍擴張、貿易振興、敎育普及等となるが、これが亦、改進黨自身の政綱として持するところであつたことは、郵便報知、朝野等、同黨機關新聞の言論を讀んで知り得るであらう。

義典は壯士の脅迫に藉口して選擧區民が地方の利害問題を以て代議士を束縛することは間違つてゐると、一針を打つてゐるのは、用意周到といふべきである。(これは然し、代議士が地方問題に冷淡でいゝといふことにはならない)。又、代議士候補を地方人士に限り、所謂輸入候補を嫌ふのも心得違ひだと論じてゐるが、これは勿論、眞實であるとはいへ、可成り自黨乃至同志の爲め辯じてゐる點があらう。

かくて、月形は此の地方から立候補して、忽ち最高點で當選する。

第五、六の兩回は雪江急太郞兄妹に關る。雪江の入黨、母の病氣、妹英子の健氣さなどは前編で知られるが、この

二回にはこの後の消息が見える。母が雪江に會はんとして上京するが、會はぬ中に病死する。雪江は出獄後地方を巡遊し、母の死後歸宅する。妹珠子は兄の友人氷川清彥と婚す。氷川は評論週報の主筆で過激な民主政治論者である。珠子も、氣力に富み敎育があり、且つ平生史書を愛讀してジャン・ダークや、マダム・ローランや、シャルロット・コルデイなどを敬慕してゐた程であるから、夫婦意氣投合して、眞の好配偶である（こゝに又作者の理想の夫婦觀といふ如きものが見えてゐる）。然るに、氷川はその過激な政治論より、當時某地に發した暴動に關係がありとて拘引され、未決にゐる中に急病で死ぬ。（こゝで政治家の言動の愼重ならざるべからざるを暗示してゐる）。珠子は夫の拘引に一時茫然とするが發奮して夫の代りに雜誌を編輯し、以前に劣らぬ盛大を續ける。かくて夫の死後は、益々その筆を磨いて、夫の遺志を繼承し民主思想鼓舞に決心をする。（作者の意では、日本にもかゝる婦人政論家の一人二人位ゐは出ても宜しからうといふのであらう）。尙ほ珠子が凶夢によつて夫の死を知るところは、夢の說明に、いかにも學者らしい作者の面影が見えて、思はず破顏せしめる。

雪江は、妹の結婚後、又地方巡遊に出で、遂に或る地方の選擧會に出て當選しようとしたことは、前編に述べた。然るに、投票の間際で形勢急轉して、失敗した。これは畢竟人心を收めることが足らなかつたのであるが、要は雪江が經濟的に餘りに無力であつたからである。そこで珠子は雜誌の利益を貯へて、兄をして再び立候補せしめ、選擧の方策の如きも一に自分で考へて兄に授け、遂に主として下等社會の選擧民の人心を收めて、見事當選するに至つた。以上この二回は、いはゞ珠子の活躍を描くのが主であるらしく受け取れる。

第七回から最終の第九回までは、先づ殆んど小說的趣向が無いといつても可い。

第七回は國會の開始となつたその當日の光景、國會議事堂の論、當時の都下の開化の有樣、代議士の分派から將來の政界への豫想などが說かれてゐる。議事堂の論は、見物人の批評に託して種々の方面から述べてゐるが、要點は傍

議席を廣くして成るべく輿論の府たる實を擧げるやうにする。議事堂の附近に各省の官衙を移して國事の連絡を圓滑にする、といふ二點である。これは、當時建築進行中の議事堂に對する民黨側の希望の一端を代表したものと見て可い。

作者は當時の都下の生活の開化進歩を描寫するに相當力を入れてゐるが、これは畢竟改進黨的社會改良思想を小說上に具現させたものである。開化の進歩は政治の改良と伴ふこと、此の頃起業者の「專要目的」となつてゐた鐵道の發達よりする都下の大繁昌、大博覽會の開場と地方人の出京、衣食住の改良の實現（といつても、要するに洋服、洋食、煉瓦家屋の流行を意味する。海外の流行、禮式尊重、室内裝飾なども大に注意されるに至つたこと、當時の社會改良が何を目標としてゐたかは、この邊の叙述で推察されやう）。就中、最も改良の實効を示したものは、劇場の改良である。

> 家屋は總體煉瓦造の三層建にして舞臺棧敷の土間に至るまで鉢形となし見物人には平等に見渡すの便利を得せしめ大體の規模は伊太利、佛蘭西等の劇場を手本となしこれを本邦の習慣に適用せしものなれば壯麗と便利と極めざるはなし又芝居茶屋は廢せられて見物人は皆椅子を用ゐ興行の時は夜分にして皆瓦斯燈電氣燈を點じ鳴物道具類なども餘程の改良を遂げ十分に上等品を用ゐて成べく實物に違はぬ樣にとの事を專一とすれば見物人の目先には一層優美高尚なる興味を添ひたり云々

以てその大要を知ることが出來る。又狂言脚本は、舊院本を廢しはせぬが、成るべく學識ある名家の新作を用ひる。役者は作家の意を受けて演ずる（從來と正反對である）。且つ脚本そのものを小說の如く書物として發行する。脚本の內容も「滑稽悲惨の兩種性質共に混交して理窟に偏せず人情に拘まざる一種の新趣向を打ち出し」たものにする。役者も書生から出るやうになる云々。これ等は、作者久松氏の演劇改良理想と見て可い。

それと共に音樂踏舞の改良もいよいよ目立つて來た云々。即ち洋式を基調とした音樂踏舞の一般的普及である。更に女子の風俗の目立つて洋風となつたこと、男女の往來同室の態度も、大に洋風となつたこと、洋人との交際の頻繁となつた爲め、言語文章に英語を用ゐるものが多くなつたこと、商業上では英語が必須のものとなつたこと、英語の盛行及び生活の西洋化と共に、キリスト教が深く人心に染み入つて來たことなどが說かれてゐるが、これは、半ば事實、半ば豫想と見て可く、大體は當時の社會改良思想の目標を示すものとして注意を要するものである。

今回新に當選せる代議士の分派については、改進黨を最多數とし、保守黨中正黨これに次ぎ、過激急進黨が第三位にあるとしてゐるが、これは勿論公平な豫言ではなく、改進黨宣傳の意圖を示したものたることはいふまでもない。

第八回は先づ政社（今日の政黨）の說明に費されてゐる。政社とは何ぞ、政社の議會にとつて必要なる所以を反覆して說いてある。（「政治上の大機關となりて實際の効用を著はすこと淺ゝたらず一定の主義一種の政策を立てゝ之を議場に提出し多數の贊成を得て難なく通過するの効を收めんには同志者先づ議場外にて十分の利害得失を研究し立論の順序、辯駁の方略まで拔目もなく吟味を遂げこれを演述するの議員よりこれを贊成するの人々まで前以て取極め置く程の事」云々）。その間、政社内の人々の談話に託して、議場の第一の仕事が當選議員の適否を調べるにあること、議長副議長委員の選擧、その心得（「公明清廉にして獨立不羈の氣節ある名士を撰ぶ」云々）、議事規則、議員出缺の取締り、決議の取り方、議場整理のこと、議員年俸のこと、議案のことなどを論じてゐる。その中で、議題の如何によつては、議員の缺席を認めるといふ說、年俸を與ふるは、議員生活の淸白を保持する點から必要といふ說は、如何にも改進黨らしい說である。作者久松氏は、その政社の理想を次の如く力說してゐるが、これは、理想に過ぎてやゝ空想に近いものがある。——

思慮深遠、立論精確にして內外大小の問題に應じ咄嗟の間に是非利害を辯ずるの識者あり音吐朗暢、體勢宛轉、シ

セロが所謂言容和順、旨趣透徹、氣力雄健の三性質を具へたる辯士あり、新聞雜誌には通信寄書の文を善くして詞句典雅、語調勁拔筆を執りて萬言立ちどころに成るも措辭平易にして能く世人を感ぜしむるの記者あり明かに事體世故に通じて事業の計畫に長ずるの老錬家あり、英斷果決一度取極めたる事は如何なる辛苦勞働をも避けずして奮進するの勇士あり、廣く各種各樣の社會に入り込みて紳士は勿論善く農工商の間に奔走周旋するの交際家あり、廣く英獨佛諸國の語に通じて明かに歐米諸邦の事情を識り洋人との應對に長じたる外交者あり、智計に富みて膽略あり、時機によりては隨分奇巧險强の術を逞らすべき策あり政治、法律、經濟、教育より武備、工藝、生產等の各科に至るまでそれ〳〵大體に通ぜる數人の學者あり、外は銀行及び商賣社會に十分の信用を得て內は財務出納の術に長じ理財學の原理を應用して實際の經驗に富みたる會計家ありこれ等の社員は各々一種の職業あつて立派に世上に立ち性質の異同人物の高下あるに拘はらず皆銘々の長所によりて才智を展べ相讓り相扶けて衆異湊合の成績を目的とするものなれば、同社の勢力は日に益々盛大にして朝暾の昇るが如く都下は勿論各地方に至るまで氣脈聲息を通ぜざる隈とてはなく云々。

これで見ると、義典の考へてゐた理想の政社即ち政黨は、今日日本の政黨のそれの如き親分子分的な封建的色彩をもつたものでなく、あくまで外國式、殊に英國式の、半ば社交俱樂部めく政治的同志の團體であつたことが知られる。主義と目的と手段を一にした政友の團體であつて、經濟的扶持の如き親分子分の關係ではない。これを當時の實際に徵するに、改進黨には稍や義典の理想に近いものがあり（大隈を黨首とはいふものゝ）、自由黨には親分子分關係の分子が多い。これはその黨員の身分上から說明される現象である。

政社維持法及び政社の事業の問題は一寸注目するに足りる。政社の維持には、發起人の創業費支辨を別として、民間有力者の寄附、所屬國會議員の寄附が基本金で、これを銀行に託し、その利子を每日の雜費に充る。社員は別に每

月若干の會費を出し、これで同社に附屬する諸種の事業をなす。その事業とは、「書籍館、運動體操場、會遊所」などの經營、「小說、雜誌の類」の出版、秀才學生の學資支辨、同志の選擧費用、政治上の入獄者の遺族救濟等をいふ。これ等は、今日からせばやゝ空想に屬するが、政治を人民に接觸せしめ、政黨政社の存在を社會にとつて有意義有益たらしめるためには、眞面目に熱心に考慮されて然るべき問題であると思ふ。

第九回は、國會議場に於ける月形、雪江、花房三士の行動について多少の豫測を試みてゐるが、要するに、三士とも、君民全體の最大幸福を理想とするもの、たゞその手段、見込等に於いて緩急の差があるのみ、その點は、自由民權時代の根本主義の爭ひと違ひ、議會內では凡て事が實際政治の問題と關連するので、その爭ひも以前と一變するに違ひないとは、作者の豫言である。然し三氏が何の問題で如何に爭ふかは、何等語られてゐない。大方、上來說き來つたところによつてそれを觀察せよといふのであらう。

議場の實際に關する豫想として、(一)眞の政治家の少なきこと、(二)小黨派分立は免れ難かるべきこと、(三)獨立中立者の多かるべきことの三つを擧げてゐるが、これは何れも、豫想としては的中したものである。たゞ作者義典は、この中立者の多い點を憂慮して、これは議會政治には面白くない現象であるとし、こゝに官僚專制、又はボス政治の發生する恐れがあると述べてゐるが、明治二十三年後の議會の實際に徵して、正しくその通りであつたといはざるを得ない。此の點、義典は炯眼であつたといひ得る。

尙ほ院外の政治運動として、政治新聞、政談演說の流行とその論調の變化を說いてゐるが、これは別にこゝに說く程のこともあるまい。新聞演說の流行の結果、人心輿論に從ひ、立憲政治の基礎を固めるに役立つた。

かくて著者義典は、『月雪花』の長編を結んでいふ、——

國會開設の後其體面を一變したるものゝ多きが中に新聞演說などの有樣は箇樣になりければ其の影響の一般人心に

及ぶ所は殆んど意想外の極度に達し國民皆政黨分立の必要を實際に感じこれより益々愛國公共の精神を以て多數の輿論に服從するの氣風を生じ平和手段と國情の勢力とにて一意に政治の改進を圖るの傾向をなし殊に憲法を固執して千萬世渝らざるの氣風を成し茲に東洋一種の新國體新人民を造り出しければ王室の尊敬は愈鞏固無疆にして日月と倶に長へに榮ひ人民の自由は益伸暢して海嶽と同じく安全なるに至りけるより内治全く整ふに國權外に張り富國强兵の長計は芽出度こゝに確定するの勢とはなりぬ。

こゝにも明らかに改進黨の政治理想を讃美する聲がこもつてゐることは、「内治全く整ふて」云々の一節を讀んでも知られるところである。

　小說としての『月雪花』は、前にも述べた如く、素人作家の手に成る政治小說の中でも特に生硬な素人臭紛々たるものである。（人物の會話の如き、その最も甚しい例である）。小說テクニク上からの批評は一切避けるが、たゞ附言的に述べて置きたいのは、此の『月雪花』も大體は、矢野龍溪の『經國美談』の影響下に成るものたるは疑へない。それは、月形、雪江、花房三政治家を主人公にしてゐる點（これをイパミノンダス、ペロピタス、メルローの仁智勇三人傑に對する）、『月雪花』結末の文句が『經國美談』の結末の條を模してゐる點など、種々思ひ合されるところがあるからである。小說としての『月雪花』の第一の缺點は、作中の事件が日時場所の一切不明なこと、人物の描寫が全く實在性がないこと（月形の或る部分を除けば）などで、小說として全く眞實性がなく、露骨に作爲物だといふことを示し過ぎてゐる點であらう。且つ又は本來未來小說であるべきものを、現在小說として書いてゐるので、時々作者の觀念が混亂して來る、例へば國會そのものは今度初めて開設されたといふ一方、先年の選擧云々といふ意味のことを述べてゐる。それでは、國會は疾くに開設されてゐたことにならう。それ等の點で缺點を數へれば限りがないが、この小說を「代議政治」の通俗教科書代りに書かれたものとせば、やゝ學者臭いが先づ目的を達してゐるといつ

て可い。而してこの學者臭いといふ點、學究的だといふ點が、同じ改進黨の名士仲間にも、久松義典の特色となるものである。

二 『南溟偉蹟』前篇

此の作は前篇だけ傳はつて後篇は傳はらぬが、察するに後篇は終に出版されなかつたものであるらしい。多年搜索したが、只今のところ、私は後篇出版の廣告さへも見てゐない。後篇の出版されなかつたのは、略ぼ確實であるらしい。前篇の出版は明治二十年九月である。

前著『月雪花』の後編、月形の立候補演說の條で、月形が海軍擴張をその政見の一端に示したことを述べたがその本文を引用すると、――

（前略）先づ海軍の擴張に就ては辯士も餘程熱心なるものと見え本邦が環海の孤島であるからには獨り一國防衞の點から見ても軍艦火器を具ふ可きは勿論、好し又外國に對して今一層貿易通商の關係を親密にし利害損益の點より容易に兵端を開かぬものとした處で矢張海軍の擴張を要する事論を待たずと云ふ趣意で直ちに日下各國軍艦の數を擧げ（中略）斯る有樣にては本邦一國の防禦すら迚も六ツかしいから自今他の費用を節減しても軍艦の新造、火器の準備をせねばならぬと云ふ趣意の樣であつた、云々（第四回）

當時海軍擴張は改進黨の黨是として立てゝあつたものではあるが、そればかりでなく、久松義典自身が極めて熱心にこの點に關心してゐたことが、上の引用からも窺はれる。『南溟偉蹟』はこの海軍擴張意見を宣傳するための政治小說であるといつて可い。義典の自序に曰く、――

畝傍艦ハ今何處ニカ在ル諸曼頓號ハ終ニ紀海ニ沒セリ春來斯異變ノ續發スルヤ爲メニ民心を激動セシコト我、我タ

ラズ顧テ又海防獻金ノ事アリシヨリ沈鬱無事ナル我ガ政治社會モ海洋船舶ヲ以テ一時ノ問題ト爲スニ至レリ豈亦奇ナラズヤ海洋船舶已ニ問題ト爲ラバ何ゾ進ミテ之ヲ利用スルノ道ヲ講ゼザル何ゾ之ニ由リテ功名ヲ取ルノ志ヲ發セザル顧フニ冒險勇往亦志士成功ノ一途ニシテ起業ノ地ハ獨リ朝ニアラズシテ野ニ在リ國内ニアラズシテ海外ニ在ルベシ海外ノ邦、山海遺利ヲ存シテ政治放任ヲ侚ビ通商貿易ノ利自由幸福ノ運求メテ得ザルハ莫ク取リテ竭キザルモノ其レ唯南溟濠洲諸國ニ在ラン乎是レ予ガ著ハシテ敢テ世上志士ニ望ム所ノ微意ナリ

これで、『南溟偉蹟』が海軍擴張のイデオロギイを強調する爲めの政治小説であることが知られるであらう。初の中の畝傍艦といひ、諸曼頓號といひ、海防獻金といふ、これ等は明治史上周知の事實であるが、さういふ周知の事實も、今日の青年讀者諸卿にとつては一向周知でないかも知れないから、多少の解説を試みることにして置く。

畝傍艦のことは、『政治小説研究』中卷（三四七頁、「政治小説家としての須藤南翠」）にも一寸述べて置いたが、度度出ることであるから、こゝでやゝ詳しく述べてみよう。畝傍艦は明治政府が海軍強化政策の一端として、明治十七年フランスのフォルシ・エ・シヤンチェー造船所に注文し、足かけ三年の日子と、經費百六十餘萬圓を費して明治十九年四月竣工進水した最新銳艦であつた。その速力の十八海里（ノット）も最新銳たる點の一であるが、三十餘門の大砲と、水雷に關する祕密の電氣裝置といふのが列國海軍に一寸注目されたものであるらしい。同年十月七日ハーヴル港を出發し、十一月末シンガポールに着き、十二月二日同港出發、横濱に向つたが、それきり消息不明となつてしまつたものである。南支那海あたりで急な暴風雨にでも出遭ひ、製艦技術の弱點（これは後で調査して判明）と相俟つて遂に覆沒したものであらうといふことに推定された。日本人の乘組は同軍艦受取の飯牟禮大尉、森友大機關士、准士官三人、下士官一人都合六人で、餘は全部フランス人であつた。政府でも大に驚いて、明治二十年一月から數回に亘り、早速明治丸、玄門丸等の汽船を出して、近海から南洋方面を隈なく搜索させ、又これを聞知した外國艦船も、大に同

情して間接直接に捜索に助力したが結局存在を突きとめる何の手掛りもなく、二十年十月に、海軍省でも捜索斷念して、正式に行方不明と發表した。同時にフランス造船會社からは保險金を手交したので、この金で英國に代艦建造を托して、結着となつた。然し畝傍艦そのものゝ行方は、今日までも全然謎のまゝで、何うなつたのか判明しない。或は暴風に沈沒したとも、又は海賊に奪はれたとも、乃至當時安南でフランスに抵抗してゐた黑旗軍の連中が利用してゐるとも、さては當時東洋に侵略の手を伸しつゝあつたロシヤが、日本海軍の强化されることを喜ばず、密々に南支那の魔海で或る手段で沈沒せしめたものであるとか、種々雜多な風說を生んだ。恐らく人爲的原因か自然的原因かは別として、畝傍艦が沈沒したことは確かであらう。然し人々は、期待が大きかつただけ、希望を棄てず、今にも何處からかひよつこり歸つて來るやうに、心待ちに待つたものである。この事件は當時としてはビッグニュースであり社會に對する反響も大きく、それだけに小說等にも度々利用された。それ等については、「小宮山天香」の條にもいささか述べてあるから、そこを參照していたゞきたい。

諸曼頓(ノルマントン)號の沈沒は、義典の序の文によると明治二十年の事件であるかの如く見えるが、事件そのものは、矢張り明治十九年で、畝傍艦の件より少し早く、十月二十一日(乃至二日)のことゝいふ。英國船ノルマントン號は此の夜橫濱を發して神戶に向つたが、紀州沖に於て暗礁に觸れ、船體を破損して沈沒した。その際船長ドレーク以下船員外人二十六名は短艇で難を逃れたが、船員日本人二十三名は短艇に乘れなかつたので、悉く溺死した。然るに、神戶英國領事は海事裁判に於て、かゝる醜陋卑怯なる態度を示したドレーク以下を無罪としたので、國論が沸騰し、朝野の憤激は非常なものであつた。政府でも流石に默視出來ず、兵庫縣知事内海忠勝をして神戶英國領事館に訴へさせたところ(この頃は治外法權で、外人の裁判にはかうするより仕方がなかつた)、十二月八日橫濱英國領事館でドレークに禁獄三ケ月の刑を科したが、他の船員は矢張り無罪であつた。そこで國民の義憤はいやが上にも燃え上り、明治二十年

に及んでも、なかなか鎭まらなかつた。この事件も亦、歌謠、小說等に作られたものが數種あつて、當時の人心がいかに悲憤慷慨したかといふことが、手に取るやうに分かる。

海防費獻金は、明治二十年三月の御詔勅に依るものである。三月十四日、明治天皇は御內帑金三十萬圓を政府に賜ひ、これを海防費に充てしめ給うた。これが切掛けとなつて、海防充實を目ざす國民的獻金運動となつたのである。政府が海軍擴張に意を用ひたのは、明治十六年以後のことであるが、十八年から十九年にかけては、以上の事件の外に、人心を海事に向けさせる事件が種々あつた（清國水兵長崎暴行事件の如きもその一つである）。丁度、さういふ時に、此の有り難い御詔勅が下されたのであるから、人心が容易に燃え上つたのである。

久松義典の『南溟偉蹟』は、つまりかゝる空氣の所產として、一般に海軍擴張のイデオロギイを宣傳する爲めに作られたものであるが、その小說的內容からいへば、主として材を畝傍艦事件に取つて想を構へてある。從つてそのストオリイが、いはゞ一篇の冒險小說の態となつてゐるのは、怪しむに足りない。尙ほ畝傍艦沈沒の原因としては、義典は、いかにも學究風に、自然原因說を採り、臺灣近海にて大風浪に遭つて船體破損した上、ヒリッピン、南洋、濠洲近くまで漂流して再度の暴風に沈沒したものと考へてゐる。「畝傍」の名は作中ではわざと隱されてゐるが、これは人心への影響を遠慮したものであらう（執筆は正式に行方不明とされる前である）。主人公の士官江村俊彥は、飯牟禮大尉によつて假想したものたること、勿論であらう。

例によつて、初回は總論的敍述で充ちてゐる、畝傍艦の說明、その特長、南洋の說明、畝傍艦沈沒と日本政府の損害を細々と說いてゐるが、それは略して、本筋の話頭を出さう。

英國留學中の士官江村俊彥は、政府の命で佛國造船所にて建造の新銳軍艦を受け、乘組の日佛人と共に歸國の途に上る。地中海、印度洋を經、南支那海に入り、日に母國に近づくことを喜んでゐたのも束の間、突然、上述の原因で

軍艦は沈んでしまふ。江村は水兵中元氣のいゝ數名と短艇で荒海に乘り出すが、その短艇も間もなく波に覆り、江村が一人或る未開蠻島に打ち上げられる。その場所を「ニュージーランドの北端オークランドに近き島」といふのは、作者の學究的な推定に成る。

江村を發見した蠻人達は、酋長のところに連れて行つて、その處置を種々評議するが、結局寬典論が勝つて、暫時奴隷として樣子を見ることになる。江村は脫出の機を得べく恥を忍んで蠻人の奴隷となつてゐたが、一蠻女（ポルトガルの混血兒）との戀によつて蠻人中の暴力派の頭目の怒りを買ひ、終に死刑に處されさうになる。そこで死刑の前夜、その蠻女の案内で、この島を脫出し、カヌーで他の島へ渡る。その途中カヌーが覆つて鱶の餌食とならうとする一條の冒險譚があるが、それは略す。

江村等の着いた島はオネモ、ナ（沃土）といひ、同じ蠻島でも、前の島に比すれば、やゝ文化が進み、政治組織の如きものを有し（君主、中央政府、等）且つは口碑的歷史をさへ有する。而してその歷史及び現狀が日本帝國のそれに頗る似てゐるのは、勿論作者の寓意がこもつてゐるところであらう（その寓意については、後に述べる）。この島の酋長は、前の島の酋長とは違ひ、頗る事理を解する上に、久しく白人の跋扈を憤る志があつたが、江村を引見して、大にその才識に感じ、遂に客卿として國家興復の大業（といふのも大袈裟であるが）を托することになる。

作者義典がオネモ、ナの歷史として語るところに曰く、酋長は開闢より今代まで二十五代、天地開闢の始男女の二神があり、諸神を生んで國の基を成した。その後數代經て、小酋長割據、勇武の一酋長が西部から起つて全島を統一した。今代の島主はその十數代の子孫であるが、天資英明、心を政治に用ゐ、島人の開導を計り、且つ白人强國の南洋侵略を患へてゐた云々。讀者は、この島の略歷が頗る日本歷史に似てゐることを覺るであらう。この島の歷史が日本に似てゐる如く、その現狀が又、頗る明治維新以來の日本帝國と似てゐる。曰く、この島に今より數十年前、島中

の志士が各所に蜂の如く起り、國家の積弊を矯め、萬事の革新を試みたことがある。この時の功ある志士は、或は死に、は或は退き、今日ではタカロー（遊樂）、カイロー（鰻）、マハンガ（誘惑）の三人が島國政治の中心人物である。レカ、ランギーの二人は家柄も古く、表面上は貴族として尊敬されてゐるが、實權はない。タカロー等三人は、數十年前の改革當時は、志士の中でもさう有力なものではなかつたが、先輩が次第にゐなくなつたので、今日では元勳として權力を振つてゐる。さうしてもはや昔日の進歩的精神は無く、「志滿ち意驕り已が身まはりなどを修むるをのみ勉めて」恬然恥ぢない。島民は一度はタカロー等に望を屬し、その善政を仰望したものであつたが、タカロー等は日夜淫に酒に耽り私利を計り、土木を興す等を仕事として、一向國家の前途、人民の進歩の如きことは考へない。その爲め昨今では風體の亂れが甚しく、人民は專ら物欲に目をつけるのみ、國事を患ふるのは、一人の島首と民間數人の有志者があるだけである。而かも島首と民間の有志の間は、タカロー等及びその子分によつて懸隔されてゐるので、相互の心事は相通じない。民間有志の中心はアラヒ（開導）及びウエウエロー（突入）なる二人であるが、アラヒの一派は開發手段で人民を開導しようとするに對し、ウエウエロー一派は「一切の事を破り毀ち手當り次第何處へも突入りて根から取り替ることを好みたる」ものである。兩派とも島内の重役人の遊樂耽安に不滿をもち、人民の前途を案じ、白人に南洋侵略を患ふる點は略ぼ同じであるが、その手段等については緩急の別があるので、これまで度々相爭鬪したことがある、だが今日は大に覺醒し、大同的に團結して目的達成に努力しようとしてゐる。

オネモ、ナの島の現狀、何ぞ夫れ明治二十年前後の日本帝國に相似たるやである。假にタカロー一派を伊藤博文を首腦とする官僚政治家と見、民間志士を板垣、大隈等と見、民間兩派を改進、自由の兩黨と見れば、以上のオネモ、ナ島の現狀なるものは、宛然鹿鳴館時代の日本政治社會の現狀の摸寫ではないか。作者の意圖は、この摸寫によつて、當時の政治社會を諷するにあつたことは疑ひがあるまい。即ち『南溟偉蹟』は、こゝに於いて、二重のイデオロ

ギイを持つ政治小説となる。即ち第一義的には海軍擴張、南洋進出のイデオロギイを示し、第二義的には、これに關連して當時の日本政治社會の諷刺的暴露と、豫言的警告である。而して、その豫言的警告の部分は、以下に述べる通りである。

江村は島政改革、國家興隆の大事業の端緒として、有志の教育から始める。第一に文字を改良して、ローマ字を採用せしめ、人民を智識的に啓發してよくよく南洋の現況、世界の大勢を呑み込ましめる。殊に白人の南洋侵略史を事細かに說き聞かせるので、民間有志も、種々覺醒されるところがあり、一層國家に盡す志を固めるに至つた。

かくて國事が日に日に非になるのに、タカロー等は依然宴安逸樂を改めぬので、遂に民間兩派の靑年等は島の大祭の夜を期して兵を擧げ、國家の爲めタカロー等を誅戮しようとする。だが江村はまだその機でないといふので、長老等と極力これをとゞめ、僅に事無きを得る。タカロー等は密偵の報告によつてこれを知り、自己の力に及ぶ限りの兵力をもつて身邊を守ると共に、民間有志を壓迫し、その暴政が忍び難いものになる。そこで民間志士コクルがタカローを暗殺するのを切掛けに、暴徒の蜂起となり、朝野の大衝突となり、民黨が勝つたものゝ、その民黨の中心は過激なウエウエロー一派（自由黨）であつたから、島中は全く無秩序無政府狀態となつた。

こゝで『南溟偉蹟』の前編が終つてゐるが、義典の此の豫言は、上は明治大帝の御稜威より、下は人民の聰明なる持重心その他いろいろな事情から日本帝國の政狀には實現しなかつたが、然し明治二十年の政狀は、全くかゝる豫言を敢て當然たらしめる程の渾沌暗澹たるものがあつたのである。

作者義典は、この前編の終尾を結ぶに當つて、——

「斯る國勢の間に立ちたる江村俊彦は如何に之を處理すべきや又南洋諸島の大勢につきてはその自由獨立を圖りて西洋諸國と對立し通商貿易の政略を擴張するには如何なる聯合協同の長策を建つべきや斯る危勢に處して功を奏す

ることゝ洵に是俊傑の士が本分なるべけれ」（第十回）

と語つてゐるが、これがやがて後編の趣向となるものであつたらう。然らば、後編が假に未刊であるにしても、その內容の大略は、この結語によつて知ることが出來るわけである。その點でこの結語の大切な暗示を含むものと言つて可い。

此の小說が第一義的に海軍擴張、南洋進出のイデオロギイを宣傳してゐることは度々前に述べた通りであるが、これに關聯して內政改革を說いてゐることゝ、既に述べた通りである。この意を最も明白に示したものは、第四回後半、主人公江村俊彥の述懷であらう。その述懷に曰く、——

（前略）今や我が國は將に海軍を擴張せんとする時機（をり）に到りたれば政府施治の順序も尋この進路を取らるゝやに聞き及びぬ成程世界萬國共に皆呑噬爭奪の政略を取るの世に當り一小島其間に孤立して國權を固持せんと欲するには海軍を擴張すること急務なり故に政府は海軍擴張の準備（ようい）として大藏省歲計豫算には幾百萬の金額を見積り置くなるべし云々

これは、當時の日本の國勢上、如何にしても海軍擴張の必要なことを强調する意味であらう。然るに國用多端の折といひ、且つ近年打ち續く不景氣があり、人民は罷弊してゐる。この罷弊せる人民から更に海軍擴張の費用を出させるのは、如何にも忍びない。成る程昔の德川流に民間の富豪に獻金せしめたなら、相當の金額も集らうが、それも然し昔と違つて思ふ程效果があるまい。然らば官爵を賣り、榮位を金に代へる方法は何うか、止むを得ぬ場合にはそれも結構であらう。海軍擴張といふ點だけからいへば、海軍をさへ擴張出來れば、その手段方法は何うでも宜しかるべき筈である。だがこゝが一考すべきところで、國家全體からいへば、單に形式的に海軍のみ擴張しても、國民の元氣がこれに伴はぬときは、その擴張は意味をなさぬ。

然しながら立國の本體より言ひたらんには如何程に海軍を擴張したればとてこれに釣り合ひ他の政務（まつりごと）の改進に盡力

せずんば猶かの四方の垣根を堅固にせしも母屋の頽破を棄て置くが如くならん在昔英國が當時に名高き西班牙の海軍無敵艦隊を打破りしは全く英國人民が報國敵愾の勇氣ありしによれりされば今日海軍の擴張と同時に注意すべきは人民が眞誠の愛國心を揮擢するに在るべしこれを爲すにはまづ當路者より其の精神と實蹟とを示さざる可らず今日は決して宴安に耽り遊戯を事とするの場合にあらざるべし云々。

前述のタカロー一派の攻撃がこゝに生きて來るわけである。この内政革新のイデオロギイは海軍擴張のそれに劣らず强いことは、その力の入れ方を見ても知られるであらう。

義典はこゝで航海術の發達について學者めかしい忠告を與へ、わが海軍も航海術に上達したとはいへ、此の畝傍やその他の先例もあるから、益々十分に心を潜めてこの術を學ばなくてはならぬ、これが海軍擴張に實際的意義あらしめる道であるといつてゐる。

當時の識者間に日本帝國發展の道として、北進卽ち大陸進出か、南進卽ち南洋進出かの二途が論議されたことは、『政治小說研究』中卷（須藤南翠、末廣鐵腸の條を參照）に略述したところから想察されるのであるが、作者久松氏は當時北進よりも南洋進出論に贊成したものと見て可い。その上、作者はこの點で、明白に、日本こそ南洋を白人の手から救濟すべき使命をもつものと考へてゐた。

（前略）仄に聞く今や南洋諸島の有様は眞に是危急存亡の秋にして西土諸國は山の如き軍艦を泛べ數百千の兵士を派遣して頻に各島の間を横行し國土を保護し荒地を開拓するを以て其口實とすれど其の實は暴慢無禮の振舞もて我が南洋に跋扈し我が諸島を侵略せんとす是に於てか舊國の版圖は益々縮まり土着の人種は愈々減じ數年を出でざる中に南洋諸島の舊人種は跡方もなく消え亡び替て入り込む新人種は豺狼の如き慾を逞うし我が物顏に横行するに至らんとす今日の有様にては我が國は幸にして未その難に罹らざれども今の時にありて早く之が計を爲さずんば他の

諸島と同じく意外の禍にかゝらんこと恐くは遠きにあらざるべし（中略）この場合に當り獨仰は幾多の歲月を歐洲に積みて深く研きし學問智識は高く衆人に抜け出でたるのみか心中窃に南洋を憂へ居るとの噂あれば何卒予が本心を察して爲めに一臂の力を添へ不肖の此身を引き立てゝ內はわが島の繁昌を計り外は外國の侮を禦ぎ廣く諸島の聯合を企て以て外人を抑ゆるの大計を立て給はずや是予が切に望む所なり（第六回）

以て義典の意のあるところを察するに足るであらう。此處に示されたものと同じイデオロギイが、此の作よりもやゝ後に出た矢野氏の『浮城物語』（後章參照）や遲塚麗水氏の『南蠻大王』（明治二十七年四月、小說百家選）にもはつきりそのまゝ現れてゐることは、注意すべきであらう。

前作で多少の經驗を積んだ爲めか、『南溟偉蹟』は、『月雪花』よりも幾分文學的、小說的なものとなつて來た、又さうするつもりで種々工夫を凝してはゐる。然し何しろ學者じみた說明が多く、南洋とか、土人の風俗とか、描寫の生硬な點がぬけず、政治的には感心させても、文學的に人を動かすところがないので、いかにも政治家の餘技といふところが鼻につき過ぎ、多く賣れなかつたと思ふ。後編の出なかつたのはその邊の事情もありはしないか。

蠻女ワイマタについて、女性改良の理想が只ほのめかされるが、この作では取り立てゝいふ程のものはない。

三 『商 海 狂 瀾』

明治二十年十一月刊行。久松義典譯補とあるが、內容全部殆んど譯といふに近く、たゞその結末に多少小說的形式を與へたる點と、當時の社會に照して多少のイデオロギイを示せる點とが補といふべきである。

此の小說（として語らう）は、有體にいふと經濟小說といふべく、政治小說といふのは當らないかも知れない。然

し主體が經濟小說であつても、政治小說として見ることを許さぬものでは勿論ない。寧ろ政治小說の一變態として見て、始めて此の經濟小說の意義がはつきりするであらう。

何故に此の小說を特に經濟小說といふかといふと、この書の中心內容となつてゐるのは、題の如く商業海の狂瀾怒濤だからである。第十八世紀の佛國及び英國、獨り佛國英國とのみいはず全歐洲の商業界、經濟界に大波紋を描いた例の西印度商會（West Indie Company）及び南海會社事件（the South Sea Bubbles又は South Sea Scheme）が、この小說の內容なのである。西印度商會及び南海會社事件の如何なるものか、又譯者義典が如何なる意圖で特に此の事件を選んで小說に作るに至つたかの大要は、此の書刊行の廣告を見ればそれと知られる。その文に曰く、――

第十八世紀ノ初ニ當テ歐洲ノ商賣社會ニ非常ノ大波瀾ヲ起シタルモノハ佛國ノ西印度會社ナリ英國ノ南海計劃ナリ夫ノ冒險大膽ナル我、朗（ジョン・ロー）及び我、伯瀾（ジョン・ブランド）等ノ策士ガ一種變體ノ生財案ヲ立テ政府ノ特權ニ依リテ新ニ銀行會社ヲ發起シ或ハ株劵ヲ發行シテ相場ノ騰貴四十倍ニ至ラシメ或ハ公債募集ノ新案ヲ以テ國債銷還ノ方法ヲ立テ相場會所ノ大繁昌ト國會議場ノ大激動ヲ起シタルノミナラズ一世ヲ驅リテ夢想狂奔ノ有樣トナラシメ投機賣買ト會社設立トハ一時ノ大流行トナリシモ一朝ニシテ株劵下落會社破産ノ激變ヲ生ゼショリ一般ノ大恐慌大騷動及ヒ大損亡トナリ諸會社皆總崩レ又共倒レトナリ憤死スル者餓死スルモノ入獄逃亡四分五裂ノ慘狀ヲ呈ハシタリ本書ハ此始末ヲ詳載シタル者ナレバ目下我商賣社會ノ形勢特ニ一變セントスルニ當テ活眼有志諸彥ノ愛讀セラルベキ珍書ナリ

此の文で大要は知られるのであるが、尙ほ補足的に西印度商會（會社）及び南海計劃なるものについて說明すると、西印度會社はジョン・ローがフランス政府を背景にして企てたもの、南海計劃（又は會社）はジョン・ブランドが英國政府を抱き込んで試みたもので、中心は違ふが、ロー及びブランドは知友であり、ブランドはローの成功を見て起つたものであるから、多く一括して論じられてゐる。

第十八世紀の初期のフランスは、前代ルイ十四世の豪奢浪費と外國戰爭の不始末を引受けて財政困難の頂上に立つてゐた。攝政オルレアン公を始め、內閣大臣の苦心は一に何とかして國家の財政難を救ひたいといふにあつたのである。然るに此の時スコツトランド生れの大山師でジョン・ローなるものが、これを見て、オルレアン公の腹デュヴォアと心を合せ、未曾有の新財政改革案を立てゝ公にその實行を勸めた。公は喜んでこれを實行するに決し、ローをその衝に當てたところ、ローの案によつてフランスの財界に忽ち活氣を生じ、フランス國家の財政的基礎は立ち直つたかに見えた。ローの財政案の正體は、かつて英國にゐる頃、友人の投機商ジョン・ブランド等と實現せんと努力して失敗したものを變形させたもの、卽ち西印度會社である。これは勿論英國の東印度會社の向ふを張る底意の下に成つたものであるがこゝに稱する西印度とは今の北米ミシシッピ河の流域たる廣袤千里の平野を指すもので、こゝには水陸の遺利が山積してゐる、然るにこの遺利がスペイン王位繼承戰爭の結果、ユトレヒト條約でフランスの自由になることになつた。この水陸の遺利を引當に政府の保護の下に西印度會社なる特許會社を造り、この會社を種子に、ロー自身、その怪腕を揮つてフランスの財政を建て直さうとした。若しローにして眞實西印度卽ちミシシッピの流域を開發を念とし投機的精神を恣にせず、フランス國家百年の大計を考へたなら、此の西印度會社も英國の東印度會社の如く發達し、遂には北米大陸が長くフランスの有となつたかも知れない。だが要するにローの精神は投機と糊塗にあり、國家を犧牲として自家の野心を滿足せしめる爲めに外ならなかつた。卽ちローの案では西印度會社そのものゝ眞の事業如何は何うでも可かつたので、たゞ景氣を煽る影法師に使つたゞのといつて可い。金銀寶石、その他の產物はごろごろ轉がつてゐる、會社は勞せずして巨萬の利がある、株主には五割十割の配當が出來るといふので、一度西印度會社の設立が發表されるや(一七一九年)巧みな宣傳と相俟つて景氣がわつと湧いた。一株五百フランの株が幾日もたゝぬ中に二萬フラン卽ち四十倍に上つたといふので、推して知るべきであらう。堂々たる財界の巨頭はもとより、無知

な人民に到るまで皆西印度景氣に浮かれ立ち、投機的空氣が社會を風靡した。ローは此の景氣を利用して多額の不換紙幣を流用せしめ、政府に財政の危機を切り拔けさせると共に、自分も大に私腹を肥した。ローの目的は外でなく、內にあつたのである。然しながらかういふ虛欺的手段で經濟の大法を糊塗し了せるものではない、一年ならずして馬脚を露し、一七二〇年に遂に此の會社が倒れるに至つたので、その爲め會社個人の倒產者が續出して、フランス財界は文字通り大嵐に見舞はれた。而して當時フランスは凡てにつけて歐洲の代表的國家であつたゞけに、間接に全歐洲の財界に大波紋を描いたのである。

ジョン・ローがその野心の實現をフランスに求めた如く、ジョン・ブランドはこれを英國に求めた。勿論形の上からいへば、ローの計劃を英國にもつて來たゞけのものであるから、大體は同樣の案で、これ又スペインから手に入れた南米の新殖民地の遺利なるものを誇大に宣傳して南海商社なる空中樓閣を造り上げ、財政難に惱む政府を抱き込み(此の會社で通商權を獨占し、その一部を國債償還に當てる)、議員を買收して遂に空中樓閣を一時現實のものとした。これも西印度商會と同じ一七一九年のことである。卽ち南海會社は西印度會社の景氣を利用して英國人の投機心を煽り立てたわけであるが、これ又、大に效果を示して、株價は額面に十倍する勢ひを示し、恐ろしい南海景氣を示した。(貴族富豪から普通の商人、人民は勿論、王太子たるプリンス・オヴ・ウエールズまでが土地思惑などをやられたといふのであるから、推してその投機熱の盛んであつたことが知られるであらう)。だがこれ又西印度會社の倒散と共に脆くも潰れて、無數の犧牲者を殘した。ブランドの計劃の方は、ローに比すると、より多く惡質であり、手段も惡どかつたので、通常の歷史には此の南海會社の方が有名であるが、これは實に、上述の如くジョン・ローの案を變形したもので、フランスの西印度會社の設立と因果關係をもつものであることを知らなくてはならぬ。

上揭廣告文の末段に「我國商賣社會ノ形勢特ニ一變セントス」と述られてゐるが、我が國の經濟界は、明治十九年、

二十年の頃からして漸く近代的意味に於ける會社企業熱の勃興期に入りつゝあつたのである。而してかゝる近代的會社企業熱の勃興は、我が國の經濟界が漸くその資本主義化の第一步を踏み出し始めたことを物語るものであらう。而して、この變化は又政治方面からせば、從來の理想主義的な、倫理的色彩を多分にもつた（自由民權中心の）政治思想から、漸次現實主義、實力主義的な經濟中心の政治形態に變化すべきことを豫想せしめるものであつた。

義典は「商賣社會」の形勢が特に一變せんとしつゝあつた明治二十年に『商海狂瀾』の一書を公けにしたのは、彼の過去の經驗によつて、「我」の將來を警醒し、かゝる轍を二度と踏ましめたくないといふ老婆心からであつた。かゝる時勢には小型和製のジョン・ロー、ジョン・ブランドの徒が現れ易い、願はくば我が新興經濟界をして、この書によつて狂瀾の捲き起ることを警戒せしめようといふのがその志であつたらう。『商海狂瀾』の序に、——

（前略）本書中記スル所ノ冒險策士ノ財政策。無盡藏ノ財源。株券ノ騰貴。投機賣買ノ流行。各種會社ノ設立ヨリ以テ株券下落ノ激變。商會商社ノ破產。一般ノ大恐慌及ヒ大損亡等ノ事蹟ニ至リテハ彼レ老成人等カ是迄一度ナラス二度ナラス屢ヽ經歷シテ手强キ苦痛ヲ被ムリ今デハ慾ニ失敗話トナリタルモノナリ左レハ黃口乳臭ノ吾人等ハコノ件事ニ鑑ミコノ敎課ヲ奉シ之ヲ以テ轉バヌ先ノ杖トモ柱トモ賴ミツヽ我カ商賣社會ニ大丈夫ナル建物ヲ確立スルノ參考ニ供シ渠等カ幾鉅萬ノ資本ヲ糜ヤシ渠等ガ數百年ノ經歷ヲ積ミテ隨分高ク買フタル代品物（シロモノ）ニ對シ無益ノ費用ナク無駄ナ骨折ナシニ低ク之ヲ仕入レ置キ他日却テ渠等ヲ凌駕シ渠等ヲ逐ヒ倒ス可キ商業ヲ開店スルニ至ラハ豈亦一大愉快ノ事ナラスヤ切ニ望ム本書ヲシテ此目的成就ノ先驅タラシメヨ決シテ反對ナル結果ノ前兆タラシムル勿レ

と說いてゐるので、義典が此の書を纂譯公刊した志が十分知られるのである。

『商海狂瀾』の語るところは二百年に近い昔のことであり、土地も遠い海の彼方、歐洲での出來事である。それを引いて明治二十年の日本を警醒せしめやうとするのは、何やら迂遠な、作者的杞憂らしく受取れぬでもない。然しながら

義典のかゝる老婆心は學者的杞憂に屬するものであつたらうか。一部の『高橋是清自傳』は吾等に極めて興味ある事實を教へてくれる。それは『南海狂瀾』公刊の前後には、既に日本に於いても、一種小規模なる「南海會社」の設立が目論まれつゝあつたことである。即ち南米ペルー、カラワクラ銀山事件なるものがこれである。たゞ中心人物たる高橋是清がジョン・ローやジョン・ブランドの如き私慾一方の人物でなかつたので、自ら犠牲になつて、此の事件を極めて小規模の損害に喰ひ止め得たのは、新興日本の經濟界にとつて極めて幸福であつたといはなくてはならぬ。(二)

『商海狂瀾』刊行の前後、即ち近代的會社企業熱の勃興の第一段階たる明治二十年時代には、從來の政治小説とは違つた、經濟小説ともいふべき一ジャンルが派生する。この『商海狂瀾』も、實はその一ジャンルの一部なのである。政治が社會生活の中心となつてゐる時は、政治小説が出現する。同樣に、經濟が社會生活の中心となるのに及んで經濟小説が出るのは、見易い道理であるが、此の經濟小説なるものは從來全然文學史的に認められて居らず、一二又認められても單に政治小説なる總名題の下にへし込まれて、獨立の存在を許されてゐない。然しながら社會狀勢からいふときは、政治小説の一ブランチとして經濟小説なるものがあり、普通の政治小説とは違つた獨自の領域をもつてゐることは獨立的に認めてやつて然るべきであらう。今後經濟小説なる題目は、明治文學の研究家の興味ある研究對象の一つとして取り上げられなければならぬと思ふ。

分類上からは、政治小説の一枝脈となつてゐるから、經濟小説の研究も當然私の手を着けるべきものであるかも知れないが、只今のところ私は種々先決を要する研究問題が多く、專心これに關係しかねる事情があるから、これは是非とも若い研究家諸君の奮發を望むものである。然し政治小説研究の際、多少經濟小説に就いても入手した資料があるので、こゝにはその資料の題名を掲げて、さういふ未來の經濟小説研究家の參考に供することにする。

明治十九年

○當世商人氣質　饗庭篁村

○何事も金づく慾情新話（やまと新聞）　澁柿園主人

明治二十年

○處世の機能　須藤南翠（？）

○内地雜居經濟未來記　松永道一

○未來の商人　倉田愛三郎（譯）

○忍耐起業出世之鏡　渡邊治編

（東洋のロビンソンといはれし田中鶴吉の傳也）

○腦力抵當金策奇事　大石喜太郎

○小人世界　仙橋散士（九岐晰）

（主人公は政治を見限つて實業界に入る、貧民救治論の說明、その實現、社會主義的小說の最初か）

○商海狂瀾　久松義典（譯著）

○新鐵道（浪華新聞）　野崎左文（？）

○新商人　赤司新三郎

（以上の中小說といへぬものも二三あるが、原書としてこゝに擧げて置く）。

明治二十一年

○經濟說說黃金の花　春日舍叟蘭　草風亭芝之

（春日舍は後藤薰、草風亭は高橋芳之亟。內容は、ミルとアダム・スミスの書によつて經濟學の原理を小說風に說けるもの）

○滑稽貧福氣質　若蘭島人（中島儀市）

○奇計妙策商賣の魁　鉄の舍主人著

○剛膽の商人　沌々子（政田彥三）

（壯士が政治を見限りて實業に轉じて成功する筋也）

○加利保留尼亞　村井弦齋

（日本人がカリホルニヤに經濟的に發展して新殖民地を作るといふ筋）

○新日本の商人　內村秋風道人

○經濟小說金貨氣質　前田健次郎

明治二十二年

○士族の商業　宇田川文海

○世界進步剛膽の世渡　香夢亭櫻山（名倉龜楠）

○萬里一條鐵（東雲新聞）　野崎左文（？）

○鐵道（大阪每日）　錦城居士編
○無爵王（同）　愛溪逸史（木内伊之助）
（英國の富豪ロスチヤイルドの傳記小說）．
○鐵世界　奧村柾兮
（鐵道讃美の小說、日本は鐵の世界に入つた云々）
○商業小說黃金雙紙　谷口政德
○商業小說出世美談　骨皮道人（西森武城）
○小說黃白（東西新聞）．　假名垣魯文

明治二十四年

○金小槌（民報）　蔭廼舍宿麓人
○珍說黃金大盡（東京日々）　二十四散史（右田寅彦）

明治二十五年

○時事小說鐵道未來記　西河鬼城　吉本秋亭

明治二十六年

○人造洪水（東京日々）　澁柿園主人

明治二十七年

○浮世長者　須藤南翠

明治三十四年

○經濟小說社會未來記（太陽）　美祿居士（譯）

（エドワード・ベラミイ『ルッキング・バックワード』の譯）

明治二十二年以後、作品の數が少なくなるのは、一つは私の調査未了の所爲もあるが、明治十九年から二十二年までの間に大概啓蒙の目的を達した爲めと、又二十三年以後國會議場內の政黨對政府の爭衡が社會の耳目を惹きつけた爲めに、經濟小說なるものが、次第に存在理由を失つて來たことも考へられやう。政治小說と同じく、小說として立派なるものが餘り出ずして倦かれたといふことも勿論その一理由と見て可い。此等經濟小說の思想發展を何う見るべきかは今後の問題であるが、上記年表の所々でも注記して置いた通り、政治に見限りをつけて實業に轉ずるといふ意識が大分多い。又、具體的に何を描いたかといふ點になると、金の力を描いたものは別として、鐵道が可成り多くの興味を寄せられてゐる。この點も、當時の會社企業熱の第一位に位するものが鐵道である點と照し合せて、誠に面白い事實といはざるを得ない。

註（一）　明治二十年十一月十八日「國民之友」第十二號廣告（本書一二八頁參照）

註（二）　『高橋是清自傳』昭和十一年二月〔一〇〕ペルー銀山の失敗と其の後の落魄時代

四　『社會小說東洋社會黨』

（一）前　記

『東洋社會黨』（明治三十四年六月一日、文學同志會出版）は久松義典の最後の政治小說で、前作より十四年後の作物であるが、その政治小說が、政治小說として出ず、社會小說として出たところに意義があり、又此の小說の重要性もある。そこで此の小說の研究に入る前に、多少の研究前記を必要とするのは止むを得ない。

その前記の第一は、第一章久松義典傳のところで既に述べた如く、久松氏の思想が、政治から社會主義的方面に傾いて來たことである。この點については繰り返すまでもない。

前記の第二は、義典の前作（『商海狂瀾』）を公にしてから此の小說を出すまでの十四年間に成された日本の經濟的增進に伴ふ社會意識の生長で、此の小說の理解には是非ともそれを一顧しなくてはならぬ。吾等は今便宜上、『日本社會主義運動史』（改造、社社會科學四ノ一、昭和三年二月發行）所載の年表を抄出する――

（明治二十八年）

日清戰爭媾和、償金二億兩（テール）と臺灣を得、朝鮮を勢力範圍とし、我が國の産業革命は著しく促進さる。

（明治二十九年）

東京鐵工組合組織。

（明治三十年）

足尾銅山鑛毒事件起る（[illegible]目立たく、事實はもつと早くから問題となつてゐた）。

神田青年會館にて日本最初の勞働問題演說會開かる。

職工義友會組織（東京）。此會は間もなく勞働組合期成會と改稱し、組合運動促進の爲め各地に遊說し、同盟罷工を援助し、工場法制定の運動などする。（此の運動に刺戟されて起つた勞働團體には、鐵工組合（組合員一千八百名）、活版工組合（組合員二千名）、日本鐵道矯正會（會員一千名）等がある。）この運動によつて組合運動がブルジョア政治運動から離れる。

「勞働世界」、「社會主義」、「社會雜誌」等發刊。（著譯書略）

日清戰後日本の資本主義が確立せられた反面、自然發生的に勞働者の抗爭運動が起つた。全國で三十二件の同盟罷業が起り、勞働問題、社會問題は當面切迫した問題の一つとして、新聞雜誌に盛んに論議される。

大井憲太郎、柳內義之進等は大日本勞働協會を組織し、社會政策的事業を起す。

（明治三十一年）

鐵工組合より英國機關工組合のストライキに對して應援の書翰を贈る。

日本鐵道會社機關手「我黨待遇期成同盟會」を組織す、會員四百名のストライキ起る。東北、關東に渉る列車の運轉途絕す。幾ばくもなく「同盟會」を解散、日本鐵道矯正會となる。

活版工同志懇話會組織（東京深川）。

勞働組合期成會、上野公園にて示威大運動會を開かんとして、突如當局より禁止を命ぜらる。

社會主義研究會組織（高木正義、河上淸、豐崎善之助、岸本能武太、新原俊秀、片山潛、幸德傳二郎、村井知至、安部磯雄、平井金三、佐治實然、神田佐一郎、杉村廣太郎等）、目的（社會主義の原理と、これを日本に應用するの可否とを考究する云々）、此の會の機關誌にはユニテリアン協會派の「六合雜誌」を以てする。

（明治三十二年）

勞働組合期成同盟會の活動が目醒しい。東京馬車鐵道從業員の解雇問題に盡力して、「市内鐵道馬車馭者車掌組合期成會」を組織、その他東京鑢製造業組合、石版印刷職工組合、東京船大工職工組合、東京雛人形組合の組織となる。

大阪週報刊行（柳内義之進主筆）。

（明治三十三年）

鐵工組合五千四百餘。

治安警察法發布（上記の形勢に不安を感じて發布されたもの）。反對論盛んに出る。

社會主義研究會は社會主義協會と改稱し、内部を改組す。

（明治三十四年）

日本勞働者懇親會（東京、向島、二六新聞主催）、社會民主黨組織、伊藤内閣により發表即日解散（安部磯雄、片山潜、幸徳傳二郎、木下尚江、河上清、西川光二郎等）、同志は日本平民黨として再擧を目論む、同じく解散を命ぜらる。

「勞働世界」は「社會主義」と改題、茶話會、談話會、地方の傳道旅行等により可成り活動す。實際政治方面の運動は、民主黨の解散によつて當分絶望なること明瞭となり、專ら社會主義協會によつて運動を續ける。

常識的、社會改良に乗出し、「理想團」組織。青年の渇仰は民友社より朝報社に向ふ。

矢野文雄、田川大吉郎等「社會問題研究會」を起す。

普通選擧同盟會生る。

年表だから眞の大略であるが、大勢を見るには以上でも十分事が足りる。これに對して、久松氏が社會主義的の著譯を公けにし始めたのが、明治三十三四年以後のことだといふ事實を書き加へて置かう。

前記の三は、直接間接にそのことと因果關係をもつものであるが、明治三十四年に至る數年間の政治的動向、これである。日清戰後、日本の政治的動きにも大小種々な變化があつたが、特に目立つた現象としては二つ程擧げ得る。その一は藩閥の沒落と政黨内閣の成立、その二は星亨の出現と金力政治の擡頭である。

前者については、『政治小說研究』上卷、「佳人之奇遇と東海散士」の條に於いて、その間の經緯を多少詳しく說いてあるから參照されたい。

藩閥政府がいかに政黨政府が嫌ひでも、代議政體と決した以上、政黨無視で政治が出來ない。そこで明治二十三年の國會開設以來、政黨操縱の成功不成功といふものが時の政府の存否を決する重大關鍵となつて來た。政府も、政黨は嫌ひであるが、然し現實の勢ひには抗しかね、これを巧みに操縱して、或は右、或は左と政海の荒波を凌ぐ。勿論政府はあくまで政黨を利用し、これを操縱するつもりでゐる。決して政黨に降つたのでも政黨政治の必要を認めたのでもない。政黨は政府からいへば何うにでもなるものと思つてゐる（事實或る點では何うにでもなつた）。然るにそれが度々繰返されるうち、いつとはなく主客顚倒の格で、政府自身が政黨の實力に左右されるやうになつて來た。殊に日清戰爭後は、明白に政黨が政府を左右し始めたのである。

日清戰爭後伊藤博文内閣は、自由黨と提携して對外硬の六派（改進黨、革新黨、國民協會、財政革新會、中國進步黨、大手倶樂部）に對抗したが、これは別に伊藤の方で强て懇請した結果ではなかつたものゝ、政黨が政黨と公然提携したのはこれが最初であつて、識者は、これを以て政黨政治實現の第一段階に入つたものと見た。（自由黨首領板垣

退助は入閣して内務大臣となつた）。

二十九年八月、伊藤内閣瓦解、同九月松方正義、大隈重信の聯立内閣が出現したが、これは、前内閣の支持者たる自由黨に反對した對外硬六派の變形、進步黨なるものと提携したものであつた。こゝに至つて政黨内閣の幻影が又一段と濃く映つて來たやうに思はれた。然るに此の内閣が、内閣の中堅たる薩派と、與黨たる進步黨の間に軋轢が生じ、進步黨では大隈を退却さして絶緣を宣言したので、政府は俄に自由黨に渡りをつけたが、自由黨でもこれを拒んだ。拒んだばかりでなく、逆に多年相爭つて來た改進黨を中心にして成立したところの進步黨と提携して、内閣を威嚇した。内閣明渡を迫る意味である。松方は、それでも周圍の入智慧で切拔けるつもりで議會を解散したが、解散したなり總辭職をした。この自由、進步兩黨の提携が確かに藩閥政治打破には大に效目があつた。

内閣組織は又も伊藤博文の番となつたが、伊藤は度々懲りてゐるので、今度は組織前に先づ進步黨と提携を策したが、成らず、自由黨に當つてみたが、これも公然の提携は不成功に終つた。だがそれでは何うにもならぬので、先づ伊藤内閣を押し立てゝ、さて大小策士（伊藤巳代治が動いた）を踊らせて色氣のありさうな自由黨を動かし、總選擧後には黨首板垣を内務大臣にすること、その他の諒解を得、自由黨を準與黨にすることが出來た。然るに總選擧後、伊藤は種々の事情で自由黨との約束を實現することが出來なかつたので、自由黨は俄然、與黨の態度を捨て、政府反對の勢を示し、改進黨と同盟して、伊藤内閣を強か叩きつけた。歷代内閣でこれ程痛烈に叩きつけられたものはまづ少ない。

勿論、伊藤も奥の手の解散を出して應じたが、小黨分立の時こそ、その間に頽勢挽回の策を施せるが、二大政黨がかうがつしと手を握つてゐるときには、解散など何の意味もない。自由、改進兩黨では、これを機に合同の相談を始め明治三十一年六月、遂に憲政黨なる一大政黨を組織したのである。その結果、伊藤は事の落着するところを見越し、

山縣有朋等の猛烈なる反對を排して、在野黨首板垣、大隈二人に內閣を明け渡し、大隈を總理とする政黨內閣が出來上つた。これは國民が自由民權時代から要望したところで、實に明治十八年內閣官制を發布して以來の大變革であつた。兎もかくも、これは大隈のいふ如く「時世の進步」の致すところであつたに違ひない。

然るに政黨內閣が出來上つて多年の希望が一朝に達せられたかの如く歡喜した國民は、いよいよ政黨內閣の施爲を見るに及んで更に一驚を喫した。それは折角の政黨內閣の根幹を爲す政黨そのものが、いつの間にか腐敗墮落してゐたことを發見したのである。元來政黨者流がその身命を賭して民權伸張を努めたのは、日本國家の爲め、國民の爲めに世界何れの國にも劣らぬ申分なき政治を布くといふにあつたのであるが、二十三年以後議會に於いて政府と駈引を鬪はせ、提携を反覆するに及んで、その大數は（恐らく無意識の間に）勢利黃白の頤使する偶人と化しつゝあつた。歲々彼等が勢猛に政府に迫るのは、何故であつたか。その初期に於いてこそ、それは理想實現の努力であつたれ、時を經、劫を經るにつれて、理想の實現は表面の看板と化し、內實は政府を威迫して、提携費なる黃白の多寡を爭ふことを目的とするに至つたのである。殊にその甚しくなつたのは、日清戰役後、伊藤博文が公然自由黨と提携して以後である。黃白に痲痺した理想の實現を實質的には忘却した政黨が、政府及び諸官局をもつて專ら勢利の府と目するに至つたことは當然であらう。既に勢利の走奴となつた以上、人間の慾には限りがない。大丈夫たるもの、政府からお當てがひを貰ふより、何ぞ一擧に勢利の本城を奪取せざる、といふ氣持が、言ひ合した如く政黨者流の心に動く。然らばこれを奪取する手段はといへば、曰く多數の威力、これである。事玆に至ると理想も、主義も、何もない、遮二無二多數の大政黨を作り上げて、一日も早く勢利の府たる政府（內閣）を乘取り、寶の山をわが手で自由に掻き廻さうとする。勿論憲政黨の成立はさういふ卑しい動機からばかり出來たのでないことは分つてゐるが、自由、改進兩黨に於ける少數の正人君子の主張や矜持は別として、大勢の意識の底の底にかういふ考へが踊つてゐたことは、政黨內

閣成立以後の政黨者流の行動が、それを證據立てるに至つたのである。讀者若し此の邊の消息を如實に知りたいとならば、福地櫻痴の暴露的政治小說を讀むに如くはない（本書の福地の條にも多少は說いて置いた）。政黨內閣の名は立派であるが、實質は投機や壯士の墻の類であつたのである。かくて三十一年六月末日に成つた政黨內閣は、何も仕事をせぬ中に、椅子爭ひの內訌を生じ、十月空しく瓦解してしまつた。

この瓦解も、實は舊自由派を背負つて立つ破壞の英雄星亨の方寸から出たところが多いが、殊にこれ以後は星の一人天下である。藩閥も政黨も一人の星に振り廻されて、好きなやうに飜弄される。上下の政機が一に黄白勢利を樞軸として動くやうになつたことは、今も述べた通りであるが、これら畢竟は時代社會の反映で、時代、社會に黄金第一の思想が旺盛にならぬと、政治界にだけさういふ特殊現象が現はれるわけがない。ところで星は、さういふ時代、さういふ社會に於いて、大膽にも半ば公然と、露骨に金力第一を示した取引政治を始めたのである。彼は黄金第一の社會に金力で動かぬ政治がないことを知り、政府、政黨の弱點をぎゆつと攫んで、思ふ通りに動かしたのである。星の此の遣り方は在米中に彼の國の政治界を見て學んだところであるといふが、時勢がさう動いてゐなかつたら、彼とてあれ程成功は出來なかつたらう。だが今日平心にして思ふに、星は全く疑問の人物である。彼は平氣で取引政治、買收政治をやつた。國政、市政を問はず、彼は遠慮なくこの筆法を用ひた。然し乍ら、彼の傳記を見るに、彼は決して政治道德を知らぬ漢子ではない。寧ろ或る意味で、知り過ぎる程知つてゐる。又、彼自身は單に勢利を得て足れりとする卑吝漢でもない。その私人的行動は可成り潔白である。それなのに、時の正義の叫びには一切耳を借さずして專ら自己の勢力の扶植に努め、その爲めには手段を選ばなかつのは、何故か。恐らく、星自身、腹の底には何等かの大きな政治理想を有つてゐたもので、それの實現の爲めに一切を犧牲にして進んだものではなからうか。目的にして善ならば、手段は惡くとも言ひ譯は立つ。星は恐らく心中、始終かく言ひつゞけてゐたものではなからうか。然らば星の

大理想とは何ぞ、それは星自身明確に語つてゐないので、勿論推察に依る外ないが、第一に藩閥政治の根絶的一掃といふことを擧げなくてはなるまい。その他理想の東京市の建設、日本國家の經濟的雄飛等、幾多の理想があつたに違ひない。而して、自分がかゝる理想を實現する位地に達するまでは、あらゆる手段をもつて進むことに決心してゐたものであらう。星は徹頭徹尾實際的な政治家である。所謂理想家の如く、理想を賣物にするところは毛頭無い。それだけに、囂々の非難にも逆擊せばとて、一言も辯解がましいことはしなかつた。寧ろかゝる非難を冷笑した。一つは自分の眞の腹を知らぬのを憐れむ心から、今一つは、非難の多くは單なる世間體をつくらふためのものと見たからである。然しながら彼の輕視した世の正議は、彼が考へたよりも强かつた、その爲めに彼は、「公盜」の巨魁として刺客の手に斃れるに至つたのである(三十四年六月)。今、憲政黨内閣の成立から星の横死に至る簡明な政治年表をつくると左の如くなる。

(明治三十一年)

六月、憲政黨內閣成立

內閣總理大臣兼外務大臣	大隈重信
內務大臣	板垣退助
陸軍大臣	桂太郎
海軍大臣	西鄉從道
農商務大臣	大石正己
文部大臣	尾崎行雄
大藏大臣	松田正久

司法大臣　　大東義徹
逓信大臣　　林有造

大隈を別にして、大石、尾崎、大東三人が進歩系、板垣、松田、林三人が自由系、四對三、但し椅子は大隈の兼任があるから、五對三。自由黨系不平。八月、駐米全權公使星亨、無斷にて歸國。自由系の支持にて閣臣均勢論を唱へ、自ら外務大臣を要求す。大隈肯んぜず（犬養毅の入智慧）。自由系益々不平、星、窃に内閣破壊を策す。同月、尾崎文相の舌禍（所謂共和演説なるもの）。自由系この問題を擴大して尾崎を辭職せしめ、後任を自派にて占めんとす。板垣、文相候補として星亨、江原素六の兩名を推擧、大隈肯んぜず。犬養毅を後任とす（十月二十七日）。

自由系總務委員、進歩系に對し憲政黨の解黨提議、進歩系拒絶す。（星、動き出す）。

十月二十九日、板垣、松田、林三人辭職。同日、自由系、自派のみにて「憲政黨大會」なるものを開き、專斷にて解黨を決議し、即時更に「新」なる憲政黨を組織す。進歩系その早業に啞然たり（星の細工、板垣は内務大臣、自由黨員西山志澄警視總監たるをもつて、公然この細工を助けた）。

大隈内閣瓦解。

十一月、進歩系、憲政本黨組織。

十一月八日、山縣有朋内閣組織、藩閥内閣復活。山縣、自由黨と提携（星の奔走）。自由黨、星の言により、多年反對の地租増徴に贊成（表面的に、五ケ年と限る）、その代り自由黨議員は各數百圓づゝ得たりといふ、且つ議員歳費を八百圓より二千圓に増す。此の提携に天下の非難囂々たり。

十二月、第十三議會。

（明治三十二年）

二月、地租案通過、此の際、星は議員買收を策し横濱本牧埋立を出願せる小山田某をして、交換的に買收を行はしむ。
三月十日、第十三議會閉會。(此の議會、俗に星の議會といふ)。此の前後より憲政黨員が政府に論功行賞の意味にて、官職を要求し始む。政府、四月、文官任用令を發布して、これを拒む。星等政府を責め、絕緣をもつて威嚇す。山縣、恐れて憲政黨の指圖する二三官僚を辭職せしめ、他意無きを示す。
六月、星、東京市會に入る。(大隈系の逐出し)。
七月、國民協會解散、官僚、政商の若干と合して帝國黨を組織す。政府側策士が憲政黨に對する牽制策の現れである。
十月、東京市會、市街鐵道敷設につき、紛擾す、(利益爭ひ)、星及びその一派を攻擊するもの多し。市營論起る。横濱灣埋立地問題に關して憲政黨內に內訌。(利益爭ひ)。
十一月、同問題にて星に不滿なる板垣は東京を去る。(星、憲政黨の實權を握る)。

第十四議會

(明治三十三年)

二月閉會。憲政黨、星の操縱にて與黨として活動。憲政本黨、官紀振肅の上奏案と、議員瀆職法案を提出、憲政黨極力これに當り、否決。何れも前議會に於ける議員買收を意味するもの。
三月、憲政黨員再び獵官運動、且つ黨勢擴張の爲め閣員の入黨を要求し、それが不可能とせば黨員を入閣せしめよと要求す。山縣拒む。是に於いて、山縣辭意を固むるところあり。
五月、北清事件。山縣、聖諭にて留任。
六月―七月、憲政黨、內閣と絕緣、伊藤博文に接近、伊藤の入黨を懇請す。板垣の代りに黨首たるを乞ひたるな

り。伊藤、自己の意が新黨組織にあるを暗示す。

八月、憲政黨解黨、伊藤の新政黨參加に決す、これ皆星の指揮に動けるなり。

九月、立憲政友會成立。中心は舊憲政黨員なり、世評は憲政黨の伊藤に降れるを嗤る、星自ら、伊藤を捕虜にして藩閥陣營を分裂せしめしを誇るが如し。伊藤、山縣の疎隔。山縣辭職。

十月、伊藤博文、政友會を率ゐて內閣組織。

內閣總理大臣	伊藤博文
內務大臣	金子堅太郎
大藏大臣	渡邊國武
外務大臣	加藤高明
文部大臣	松田正久
農商務大臣	林有造
遞信大臣	星亨
海軍大臣	山本權兵衞
陸軍大臣	桂太郎

十一月、此の前後より東京市會、市參事會に醜惡なる疑獄事件續々生じ、その關係者は多くは星の身邊より出づ。世間、星を以て疑獄事件の張本となす。各新聞、筆を揃へて星を攻む、就中東京毎日（木下尚江執筆）、星を以て「公盜の巨魁」となし、筆鋒最も鋭し。澁澤榮一、田口卯吉等、市會及び市參事會の腐敗を憤り、辭職す。星を起訴する者あり。貴族院各派、衆議院改進系、相呼應するが如く、星排斥に動く。（山縣及び大隈の連合軍と見て

可也)。又同じ政友會にても、市會に於ける利害等の關係より星に反對する者多し。伊藤首相苦慮。
十二月、貴族院各派、星の件に關し、伊藤に忠告。星、遞相を辭し、原敬を後任とす。
第十五議會。星、政友會院內總理たり(一人)。
(明治三十四年)
一月、星、市會議長。
貴族院、伊藤內閣に反對。(山縣の反伊藤感情の動き)。增稅案否決。勅語下賜。紛糾裡に辛うじて妥協案成る。
四月、閣議紛糾(伊藤直參と舊自由派の反目)。
五月、伊藤內閣總辭職。
六月、桂內閣成る。
六月二十一日、星、伊庭想太郎に刺さる。政友會內訌。
九月、伊藤、歐洲漫遊(政友會の內紛を逃避せる也)。
以上がその大體である。そこで以上の二つの年表を比較すると、勿論確然相通ずるものがある。星の出現は畢竟時代の風潮がこれを然らしめたものであり、取引政治の出現は事實經濟日本の發展途上に於ける一の必然事で、偶々星の出現によつてそれが促進されたに外ならぬ。從つて星が最も政治的に得意の腕を揮つた三十三、四年に於いて政治の墮落が最も强く叫ばれ、同時に社會主義意識も急速度に進步したことは、先づ當然と見て可い。何れにしても當時の日本が資本主義社會なるもの﹅絕大なる力を感じ始めつ﹅あつたことが、これで知られる。
右年表中、星亨關係の事件は、此の小說にも反映してゐるので、記憶して置いて頂きたい。

前記の第四は、以上の如き社會意識の生長及び政治上の動きが、當時の文學に如何に反映したかといふことである。簡單にいふと、以上の如き社會の發見、社會意識の生長からは社會小說なる新ジャンルが生れて、後には社會主義小說とまで生成した、又以上の如き政治的動搖の中からは政治小說復興の叫びが擧げられて、舊作家が頻りにこれに手を染め、一種の暴露的小說が續々と出た。

社會小說の語を冠した小說は恐らく明治二十年刊の『日本の未來』（牛山鶴堂著、藤澤蟠松訂）であらう。然し此の語を Social novel の義とするときは、坪內逍遙の『小說神髓』（明治十八年刊）に於いて旣に同義語（世話小說、現在小說）を見出すことが出來る。而して一般に文學界に「社會」なる文字が流行するに至つたのは、明治十八九年社會改良なる議論が盛になつて以後の事に屬する。從つて牛山氏の『日本の未來』に於ける社會小說は、幾分此の社會改良思想を反映したものであると見て然るべきであらう。然しながら此の社會改良にいふ社會は、眞に社會なるものを生ける經濟機構をもつた立體として見たのではなく、平面的に「現代生活」、即ち日常生活の擴がりと解しての社會であり、從つて此の社會小說の意味する社會も社會生活といふ以上に出なかつた。而して、當時の社會生活は政治問題が中心であつたから、此の社會小說が實質的には政治小說に外ならなかつたのである。

社會小說なる語の先後は別として、實質的に社會小說と見るべきものゝ先驅は何かといふと、私は、坪內逍遙の未完小說中にその萌芽を認めたい、即ち『內地雜居未來之夢』（明治十九年）、『此處やかしこ』（明治二十年）等である。又須藤南翠の小說『綠簑談』（明治十九年）等にも、その片鱗は認められやう。然し極めて明白に社會問題乃至社會主義思想を含有した小說は、私の知る限りでは、仙橋散士九岐晰氏の『小人世界』（明治二十年十月）を以て嚆矢とする。これは、前揭經濟小說の年表の條で述べた如く、貧民救治論を中心としたもので、具さに人民貧窮の原因を說き、富者貧者兩階級の覺醒を求め、今にして社會から貧窮を根絕しないと、社會は大なる不安に惱まされるに至ら

うといふ趣意を述べてゐる。時代柄として、不備な點は多いが、實質は立派な社會小說たることは疑へない。

然しながら此の『小人世界』の描いた種子は一つのジャンルとまでは發展せず、眞の孤立的先驅たるに止まり、社會小說の名も社會小說の實もこの時限りで消失したかに見えた。勿論全然消失したのではないが、社會の視聽を牽く程有力なジャンルとなるまでは生長し得なかつたのである。かくして約十年を經た明治二十九年十月、突如、民友社の「社會小說」出版豫告によつて、（十月二十一日以後、國民新聞）文壇の眼は「社會小說」たるものゝ上に注がれるに至つたのである（日淸戰後に於ける社會意識の覺醒に對照されたい）。その豫告の文章に曰く、――

明治二十二三年頃は我が文壇に新進作家の輩出尤も多かりし時とす、從來の御家騷動、復讐談の陳套を脫して新たに作家が新見を開拓したるの時期なりとす、此の時に方て我が社は努めて新作家の創作を促がし旣に其の名什巨觀を世に紹介したるもの尠からず、亦以て明治文壇に一の功なしとせず、爾來星霜幾變、國運伸張して社會の現象益益多角、多端。是れが裏面の消息を傳ふるもの又以て花鳥風月に安眠するの時に非らず、宜なり曩日の奇矯作家も亦念頭を實在の社會に置き、月雲風流、白粉紅賦、唯嬌、唯艷是れ喜ぶの文士も亦、社會、人間、生活、時勢といへる題目に着眼して以て數年錬磨筆硯を致さんとす、此際に當つて我社「社會小說」出版の擧あらんとし、明治文壇の新進作家、夙成家をして各々其の執る處の筆鋒を一所に集注せしめんとす、期する處は文壇の革進にあり、斯の如くしてよく名篇大作出て、明治文學界の生産をしてよく不朽に傳ふるを得ば、吾人の冀望空しからずといふべし云々

而してその豫定として、毎月一回乃至隔月一回、菊版二百頁內外の單行本の發行といふにあり、執筆候補者としては、第一齋藤綠雨（二十九年十二月下旬）、第二廣津柳浪（三十年一月下旬）、第三幸田露伴（同三月上旬）、第四後藤宙外（同四月下旬）、第五嵯峨のや主人、第六尾崎紅葉、その他といふ順序であつた。

民友社は、その名の如く平民主義をモットーとして起つたものであり、當時幾多の新聞雜誌中、社會意識、社會主義思想、社會問題に對する理解を傳播するに最も力のあつたものであるから、上下の社會意識が漸く盛んになり始めたのを見て、社會小說の出版を案じ、これによつて舊文學を革新し、新文學の方面を指示しようとしたことは、いかにも民友社らしき仕事であつたといひ得る。然しながら、民友社の出版せんとする「社會小說」なるものは、その宣言に見るも、その執筆豫定者に徵するも、寬濶な意味で、社會主義的思想を含んだ「社會小說」であつたとは定め難い。勿論かゝる社會小說が出來れば恐らく歡迎はしたに違ひないが（民友社の總帥德富蘇峯は此の頃は熱心な帝國主義者に變つてゐたことを一應考へてみよう）、然し必らずしもこれに限るといふのではなかつた。畢竟するに此の社會小說要求の叫びは、明治二十五六年、高田半峯等が度々說いた如く（一）、社會（政治をも含む）と文學とのより多くの接近を要求したもので、文學に大に社會意識を取り入れて、人生を better ならしむる如き小說、具體的にいへば、ユーゴーの如き、トルストイの如き小說を要求したものといつて可い。社會小說出版の發表に先立つこと一年、明治二十八年十一月、國民之友二七二號で德富蘇峯は「國民讀本としての小說」なる論文を發表してゐるが、その中の文句に、——

我が文學界の廣からざる所あり、健全ならざる所あり、統一せざる所あり、時勢と相涉らざる所ありて、未だ以て國民を敎ふるに足らざるを見、深く我が文學者の爲めに其經世安民の大抱負なきことを惜まざるを得ざる也云々

といふ一節がある、結局此の遺憾を晴らすために社會小說出版となつたものと見て可い。

此の社會小說の出版は遂に實現せずして止んだ、恐らく大概執筆もされなかつたらうと思ふ。然し社會小說出版の宣言そのものが、文壇に空前の反響を呼び、贊否囂々、批評界に論戰の渦紋を描き、「社會小說」の語は一時の流行語となり、作家評家の興味の焦點となつた。（その消長の進化については本間教授の「明治文學展望」（昭和三年六月）

中「社會小說研究」の條を讀まれたい）。かくして遂に年少俊銳なる早稻田の論客金子筑水をして「所謂社會小說を論ず」（明治三十一年二月號、早稻田文學第七年五號）なる名論文を書かしめるに至つたのみならず、此の前後、更に政治小說再興の叫びを擧げしめ、政治小說、社會小說を續出せしめたのは、民友社の此の宣言の力が與つて多い。

金子氏の論文は、當來の社會小說の範圍を決定せんと試みた分析的論文で、社會小說研究からいへば不朽の價値のあるものであるが、氏は社會小說の主要なる範圍を考察して大體次の四種とした。

（一）近世の社會主義（ソシアリズム）に關する事想を畫けるもの
（二）社會の個人に對する關係を畫けるもの
（三）漠然謂ふ小社會に關する事想を畫けるもの
（四）全體としての社會の行動を畫けるもの

而して氏は更に此の四種についてそれぞれ詳說するところがあつた。今その大要を述べると、第一に就いては、「下は勞働社會對資本家の問題より、上は平民對貴族の關係、被治者對治者の關係、幼者對治者の關係、弱者對强者の關係、無教育界對有教育界の關係等一々枚擧に遑あらず（中略）勞働社會對資本家の境遇を畫くも可なり、無教育界對有教育界の事態を寫すも可なり、要は廣く社會の歷史上、社會主義の現るゝ原因、勞働社會と資本家と爭鬪するに至る所以の動機、有教育者と無教育者と分かるゝ所以の人世觀等に着眼するにあり」といひ、第二については「そも〳〵個人と社會との間には何等の約束あるか、個人は實際社會のために一身を犧牲に供するか、社會は實際個人の犧牲を先天の約束とするか、此等諸問題の現るゝ複雜なる世相を觀ぜば、其の裡に人生の祕密を發見し得ざるべきか」云々と論じてゐる。第三は畢竟全分の社會に對する一分一分の社會を意味する、全社會に對する政治社會、實業社會、教育社會、宗教社會、職工社會、花柳社會等が卽ちそれで、かゝる社會の事想を中心とした小說である。第四は第三に反

し、全體としての社會の活動、發生、進歩退歩等の問題に關するもので、これが十分に出來ると社會小說の極致となると筑水はいふのである。

以上四種中、第四は、熟々考へると第一の最も完成したる小說と同意義として可いから、現實の社會小說の範圍たるものは、先づ第一から第三まで三種あるわけであるが、此の三種中、第二は西洋の社會文藝、例へばイプセン、ショウ等の社會劇の如きものがそれであるが、日本の文藝界には辛うじて芽を出しかけたのみ（即ち文學史上、悲慘小說、深刻小說、光明小說等と稱されるものに、多少見出し得る）、第三のものは最も多い、例へば從來政治小說、經濟小說、社會小說等と稱されるものは、皆この種に入る（成功不成功は今別問題とする）。好適例は福地櫻痴の小說がそれであるといつて可い。

そこで筑水の擧げたものゝ中で將來社會小說の新ジャンルとして要求さるべきものは、以上第一乃至第二に當るものでなくてはならぬ。何となれば第三は既に當時の日本文學に多量に存在して居り、從つて新にかゝるものを要求するのは、文壇の實情に合はぬからである。かくて民友社が社會小說出版の宣言を發表したときには、未だ明確に定まつてゐなかつた社會小說の概念が、筑水の此の論文に依つて略ぼ明確な對境をもつに至つた。これは全く將來の社會小說の方向を明示し、且つ決定したものであつて、此の論文の不朽の價値はこゝにあるのである。

而して筑水の論文に於いて殊にその炯眼を稱すべきは、社會小說を作る上に於ける注意である。曰く、――

小說は元來喜怒人情の動機を寫すを主となし、動機より現るゝ諸般の行爲事件を寫すを客となすが故に、社會小說もまた社會現象の動機を寫すを眼目となし、之より現れたる行爲事件を副となすべきなり。

又曰く、――

所謂社會小說を文壇の良産物となさんとせば、從來の探偵小說、政治小說、經國小說の社會活動の原動力を忽緒に

附せるものとは趣を異にし、之れを讀まば、社會の活動する機樞を、暗々裡に感得し得るものならんを要す。若し社會活動の動機を看過し、徒に些末の世相のみを畫かんか、其脚色は如何に巧みに、其の寫實は如何に精妙なりとも、世に何等の感化をか與へん。（中略）着眼常に世態の動機にむかへる作者は成功の望あり、然らざる者は到底成功の望なかるべし。動機を穿つこといよ〳〵深ければ、其の小說はいよ〳〵深刻なるべく、いよ〳〵大なる動機を活寫せば、其の作はいよ〳〵大なるべし云々。

此等の言は、實に近代小說の神髓を含味し得た新人筑水の如きに依つて始めて表明し得たところであつて、當時風潮に應じて社會小說、政治小說の作者となつた人々が深く三省すべきところであつた。當時續出せる此の種小說の成功と否とは、全く筑水の以上の警告に從ふと否とに依つて定まつてゐたといへよう。

筑水の「社會小說論」が所謂社會小說の概念を明らかにした年（三十一年）の六月に憲政黨内閣が成立し、社會の人心が一時又も政治に興味を抱き始めた。その興味が、日清戰役後の對文藝的要求、文藝をより多く社會に近けよといふ要求と相俟つて、再び政治小說を作れといふ叫びが揚がるに至つた。此の叫びは、明治二十年以前のそれとは異つて、文壇側から、文壇の新人によつて揚つたのである。そこに文壇自體の社會意識の進歩が認められるであらう。

それ等政治小說論の主要なものを列擧して置くと、——

○政治小說を作るべき好時機　　內田不知庵
明治三十一年九月、（『文藝小品』による）

○小說界の新生面　　後藤宙外
明治三十一年十月、「新小說」第三年第十一卷

○政治小說について　　後藤宙外

明治三十一年十一月、「新小說」第三年第十二卷

○政治小說　　島村抱月

明治三十一年十一月七日、讀賣新聞

等である。抱月の分は必ずしも政治小說を要求する叫びではないが、これに關係があるので附載して置く。明治三十二年に於いては、高山樗牛によつて「時代精神」と文學の關係が唱へられ、更に內田不知庵によつて社會小說の論が述べられたが、此等の論はその精神に於いて、三十二年以前の社會小說、政治小說要求の叫びと相通ずるものがあつたことはいふまでもない。

而して不知庵、宙外等は、その所論の實踐として、度々社會小說、政治小說を公けにし、福地櫻痴、山田美妙等も亦、巧拙は別して相應の貢獻をした。此等の作品については、卷末年表にいさゝか列擧してあるから、委細は年表について見らるべく、こゝでは費しないことにする。

以上で前記を終つたので、『東洋社會黨』の研究に入ることにしたい。

註（一一）　國民新聞廿三年九月七日「近頃の文學界」同廿六年四月十七日「文學者に政治思想政治家に文學思想無かるべからず」等

（二）『東洋社會黨』

『東洋社會黨』は、作そのものとしては一應纏つたものであるが、著者義典の腹案からいへば未完のものである。それは編末で後日譚をほのめかしてゐる著者の言でも知られるが、さうほのめかしてなくとも、敍述の間それと覺られる節がいろいろあるのである。

さて梗概を述べるが、その[illegible]の小說が種々入り組んでゐるので、大筋の簡單な割合に語り惡いから、先づ主な登

場人物を出すことにする。
平井太吉　大阪府下渡邊村の特殊階級から出た靴工場主の子で秀才。
豐原邦彥　新潟縣の大地主の三男、ドイツに留學した文學博士、社會思想家。平井の恩師である。
太田綾子　平井の學友太田卓三の姉、華族小笠原氏夫人。後に女流社會事業家。
本多守衞　北海道の人、老志士。
本多竹子　守衞の娘。
北川辰雄　當時の政界の黑幕的支配者、立憲黨首領。

主な人物は以上六人であるが、此の中で主人公と目されるのは平井太吉である。それは、此の小說全體の形式が、平井の學友の「僕」なる人物が平井の一生を追懷しての物語となつてゐるのを見て知られる。然し肝心の東洋社會黨は平井の事業でなく、その師豐原の事業なのである。それで小說の主人公は平井であるが、思想的にこの小說を支配するものは、平井でなくて豐原邦彥だといふことになる。だがその邊のことは後廻しとして、先づ梗概を述べよう。

時間的なことは明確に示してゐないが、凡てが十九世紀から二十世紀に移る明治三十四年前後數年間の出來事と假定される（それを二十年後に「僕」が物語つてゐるのである）。平井太吉は子供の時から工場主なる父と勞働者との間にいざこざの絕えぬのを見て、夙に漠然とながら勞資問題に心を苦しめてゐた。それで上京後學校に入るに際しても、社會主義敎育を標榜してゐるので有名な豐原邦彥の白山專門學校（小石川白山にあり）に入る。この頃は、世間の趨勢の變遷につれて學校方面にも大變化があり、——

これまで志願者の最も多かりし陸軍一般の學校は不景氣の頂點に達したが、これは近來常備兵設置の論が俄に勢力を得たる結果らしい、これに引かへ、海軍の學校商船學校及び商工業學校の繁昌は、實に驚くべきものであつた、

又舊來の學校にて重立ちたる科目であつたる漢文漢語はいよ〳〵普通科より刎ね出され、古文學の一科、又は支那語學の一科として帝國大學その他の一二學校に置かるゝの外、全く高閣の上に片附られ、文學專門家と淸語通譯者の外には、三文の價値なきものとなつたから、頑冥固陋にして無氣力なる漢學者は、こゝにいよ〳〵活路を失ふことゝなつた、この外彼の目に附きたるは、市中各所に開かるゝ通俗社會講談會と、帝國大學を始め、二三學校に行はるゝ社會學、經濟學の公開講義であつたが、これ等諸會の聽衆は、いつでも滿堂といふ好景氣であつた云々（第一編第一章）

さういふわけであるから、平井が白山專門學校に入つたのも當然であらう。

白山專門學校の創立者にして又持主たる豐原邦彥は「近來朝野の間に一大聲望を著はし、勢力が日に加はつて三田慶應義塾の故福澤翁に頡頏すべしといふ評判を取つてゐる」人物である。

十九世紀末より當世紀に及びたる社會の大變遷が經濟、政治、倫理の上に影響を及ぼし、舊主義舊學派は、漸く勢力を失はんとするに當りては、社會主義を執つてこの新潮流の衝に當り、こゝに經世安民の 新學說新政策を講明し、新社會に馳騁すべき有用の少壯社會家を養成する任務を負ふべき一大家が現れねばならんのであらう、かゝる時勢の必要に應じて起つたるその偉人こそ豐原先生である云々（同）

識者の豐原邦彥に對する期待はこれ程大きなものであつた。豐原自身も勿論、單に學究として、講壇社會學者として終るつもりはない、機を見て一大政黨を組織して國家の進運に貢獻したいといふのがその素志であつた。

平井太吉は白山專門學校に入り、毎日豐原先生の講座から社會學社會主義などの明快剴切なる講說を聽聞し、「二十世紀の新世界は社會的の新知見新觀念を要す、社會問題を解決するには、活世態を看破する活學問なかるべからず、且つ何事も實際的行爲が肝要にして、痛く空論妄想を斥くべし」などといふ訓辭を肝に銘してゐたが、不圖したこと

から、こゝに在學中大きな社會事件に關係するに至つた。それは華族小笠原伯夫人の離婚事件である。

小笠原伯夫人綾子（念の爲にいふが、これは全然假名で、現在の小笠原伯爵家などと何の關係があるのでもない）、この人は平井の學友太田卓三の姉であるが、才色双美の佳人だつたから、早く小笠原家から懇望されて嫁したのであるが、夫小笠原伯には前々からの素性のよからぬ女がついてゐて、これが小笠原家の家庭を掻き廻し、綾子などはあれどもなきが如く虐待する、夫人は夫の伯に訴へても、取り合はぬ。それで離縁を求めたが、きかれぬ。只今のところは、別莊に別居してゐるが、その生活費もろくに送らぬといふ虐待である。

平井は太田からこの話を聞いて青年らしい義憤を感じた。そこで平井は太田を介して小笠原夫人に會ひ、事情を訊ねた上、夫人の救出に盡力することになる。平井は能力ある好青年であり、人物も高尚であるから、かねて woman killer の名があつたが、綾子夫人も何となく平井を頼もしい慕はしい人だと思ふ。その情が自然外に現はれるかして、平井と綾子は醜關係があり、平井の盡力もその爲めだといふ噂が立つ。豐原先生は、これを耳にして、有爲なる平井の前途を誤まりはせぬかと憂慮し、平井を招いて、夫人との關係を訊ねる。だが勿論それは世評に止まつて、事實ではないのを知り、且つ平井が「これは一小笠原夫人の爲めばかりでなく、不等に抑壓されてゐる日本婦人の爲めの努力であり、やがては豐原先生の社會政策の實踐に外ならぬ」と說明するのを聞いて、大に安心する。然し先生は、平井の性格に空想的な點が多分にあるのを戒め、この點に注意しなければならぬと教へる。

平井は、豐原先生から許されたので、元氣が舊に倍した。そこで先づ本式に活動する第一歩として辯護士となり、いよいよ小笠原夫人の代理として、離婚と賠償の請求を訴訟として持ち出した。こゝで今迄一種のお家騷動風の興味をもつて見られてゐた小笠原事件は、俄然大きな社會問題として注意を集めた。勿論世評は平井等に宜くはない。山師、色事師、賣名漢などといふ噂は勿論、同業者で公然中傷する連中もあり、又小笠原家方面からの脅迫や買收もあ

つた。平井は、自分達の潔白と正義を信じてゐるので、少しも屈しなかつた。手間どつても、勝利は自分達のものだと知つてゐた。たゞともすると、世評に氣後れする綾子夫人を勵ます方が、餘計に骨が折れた。

平井が同業から憎まれたのは、別に理由があつた。それは、平井がいよいよ法曹界の人となつて見て、その弊害の山積してゐるのに呆れたので、直情徑行の彼は場處を嫌はず、法曹界の惡口を怒鳴り立てたからである。「社會正義の維持者が社會不正義の幇助者となつてゐる、こんな事で何の法曹だ」といふ調子である。彼はいつも法廷をもつて、法曹界彈劾の壇上とし、持前の氣魄を練り上げた雄辯にこめて手ひどく攻擊した。だから同業者から憎まれたのも無理がない。且つ彼の辯論は、單なる法律論ではなく、必らず經濟上、倫理上の見地を取り入れて社會的立場から主張もし、論斷もしたので、大抵の同業では太刀打ちが出來なかつた。彼はいつとなく「社會辯護士」といふ名を得た。彼は別に辯護士として世間的に成功する必要があるのではない、唯だ一つの目的の成就を望んでゐるだけであるが、然し實力の前には何の世評も力がない。彼に事件を依賴して成功する連中が殖えると共に、社會正義の保持者たる辯護士平井の名は、幾多同業者を凌いで隆々と揚つた。(此の間東洋社會黨の結黨も進行するのであるが、今便宜上、平井、綾子夫人の件を片付けよう)。

小笠原夫人の一件は、流石の平井の力をもつてしても、他の事件の如く、鋭鋒一擊で相手を參らせるといふわけにはいかない。小笠原家は華族であり富も權力もある。勿論小笠原家でも、有能の辯護士を集めて對策を講ずる、法官の方にも手を廻す。正當な裁判となつては問題ではないのだが、表面は延期延期で、裏面から買收や脅迫と來る。平井は度々不快な思ひをした。

だがこの難事件も、妙なところから案外スラスラと片づくことになつた。小笠原伯の弟で長年ベルリンに留學してゐたのが歸つて來た。流石政法、經濟、社會學を專攻したといふだけに、歸つて來て兄からこの事件を聞くと、却て

平井の方に贊成した。さうして兄や兄の周圍を說いて、示談で解決することゝし、一切辯護士の手を切らせ、自分で平井と接衝して、夫人は離緣する。慰藉料その他として七萬圓贈るといふので、無事事件が片づいた。

小笠原夫人改め太田綾子孃の喜びは勿論、平井も社會へ出て第一着の社會事業に成功したといふので、少なからず喜んだ。太田孃は平井の義俠に感激して、その感激が一種の戀となつてゐる。そこで今後の方針としては、自分も平井の指導をうけて社會事業に乘り出し、又婦人解放のために活動することゝし、小笠原家から得た金の過半を投じて、東京博愛協會なるものを設け、その第一の事業として市內十區に二百戶の組合長屋を建て、これを利用して貧民救濟に乘り出すことになつた。主役の太田孃の獻身的熱心に加ふるに、平井の指導宜しきを得たので、事業の草創から大に成績を擧げ、社會からはナイチンゲールの再來の如く讚美されるに至つた。

これより先き、平井の師豐原邦彥先生は、時勢が進んで時機がいよいよ熟したと見て、東洋社會黨の組織に着手し始めた。(事實は、各地方の有志團體が動いて社會黨組織の急を叫び、遂に豐原先生に迫つて黨組織の重任を双肩に擔はしめたのである。)勿論その基礎となるのは、自由専門學校であるから、學校は同じ學校でも、平生から此の目的の爲めの用意はしてある。卽ち此の學校では、單に敎壇で學生に社會主義思想、社會政策を講じたのみでない、他の二種の施設によつて、これを全國的に擴張し、社會黨の萠芽を培養することを怠らなかつた。その施設とは、(第一)巡回講師の制度、(第二)月次講話會の開設である。巡回講師といふのは、此の主義普及のため、學校の講師及び優等生が全國各地方の招聘に應じて出張講演する。而かも出張費用は一切學校持ちである。而かも、豐原先生の注意で、出張講師はその講演の主旨は勿論、辯舌態度に至るまで練りに練つた立派なものにしたから、各地方の聽衆の感激は非常なものであつた。此の巡回講演は地方人啓發の目的からなされるのであるが、その結果、學校と地方を親しましめ、地方に同感同志の士を生じて、全國各地方に幾多の別働體を作ることになつた。かゝる別働體が、いざ社會黨立

黨といふときにすぐそのまゝ參加して來る有力分子となるのは、いふまでもない。だが、學校としてはこの他にも、この講演によつて講師學生の學問を、單なる机上の都會的空論とせしめず、實際應用のきく活學問たらしめるといふ大きな利益があつた。つまり、二重の利益があつたわけである。次に月次講話であるが、これは丁度巡回講演の逆で、府下は勿論近縣から主として勞働者雇人階級の人士二三千人を學校へ招き、立食の饗應をしつゝ、彼等の隨意に經驗や註文を談話させるのである。表面の名は有志談話會といふのであるが、堅苦しい講演ではなく、何れかといへば、勞働者雇人達の不平を打ちまける會、命の洗濯の會、知識交換の會といふのが本體となつてゐる。さうして、巡回講演の方は學校の世話であり、先生の監督をうけるのであるが、此の月次談話會の方は、先生の夫人（ドイツ名家の女）が一切世話する。食事その他のことがあるし、會の性質が性質だから、何うしても女手が必要なのである。かくて集會者は腹藏なく、だが、順序正しく――

平生の職業上に不平のこと、面白からぬこと、雇主や役員の仕向方、その他賃銀の割合、勞働時間の長短、夜業の有樣等に就ては遠慮會釋なくどんな事でも

喋して可いのだから、全くの命の洗濯で、一月振りの不平鬱結を一夕に吐き出すのだ、こんな愉快なことはない。勿論たゞ彼等の談話を聞き放すのではなく、聞いた上で、豐原先生が或は批判し、或は奬勵し、戒告し、教訓する、その間に大きな感化力がある。從つて、この會も巡回講演と相俟つて立派に社會黨の準備工作として役立つわけである。

自由學校では平生から以上の如き用意をしてゐたのであるが、いよいよ立黨の時機が迫つたとなると、以上の準備工作の上に又一段と明確に立黨準備を進めた。それは日本社會俱樂部の結合と、社會八面鋒（新聞）の發行である。其の間豐原先生の股肱として奔走盡力したのが、先生が自由專門學校で養成した學生中の俊秀、所謂三傑七俊の十人である。平井太吉はその三傑中の一人であつた。（三傑七俊の名と素生は本文に詳しいが、その行動は、一二を除けば

本文中に述られてゐない、それの述られるところまでこの小說が發展しなかつたのであらう。それで、平井以外は此の梗概に出す必要がないので、一切略して置く。三傑とは平井太吉、筑波五郞、高井逵夫、七俊とは河中大三郞、八坂輝彥、淸原俊太郞、橘百枝、歸化米人某の子、支那革命家の子某、朝鮮人某である。素生は社會に不平ある失敗ブルジョアの子、代議士の子、軍人の子などである)。勿論この十人が皆同意見なのではない。從つて白山學校の中も皆同意見といふのではない、政黨の腐敗を怒り、社會改革の必要を認める點は同じであるが、改革の手段については、學校內でも(延いては全國的にも)秩序的と急進的の二つにはつきり分れてゐた。

かく豐原先生は、日本社會俱樂部で立黨準備の實務を進める一方、八面鋒を通して黨の主義政策の說明と宣傳に努めた。それで此の新成社會黨の思想傾向が彼の革命黨や無政府主義と違ふといふことが監督官廳にも分つたし、且つ豐原先生から特に內務大臣に談じて許可を得た次第もあつて、四月上旬の大祭日(恐らく四月三日神武天皇祭を指す)に上野公園に於て大盛況裡に立黨式を擧行し、こゝに東洋社會黨は勇ましく誕生したのである。その如何に盛況を極めたかは本文第七章に詳しいが、それはこゝでは略すとして、當日の會長は北海道から態々東上した七十五の老志士本多守衞が十七の孫女竹子に介抱されてつとめたことゝ、本多翁の朗讀した東洋社會黨の六綱領のことだけを記すことにする。綱領に曰く、——

皇室を尊戴し衆庶を按撫すること、國家の生產及び交通機關を公有すること、萬機公論に決するの聖勅を遵奉して普通選擧を施行すること、勞働保護の法律を制定すること、軍國主義を縮少し產業主義を伸張すること、國際は平和、自由、平等を主義とすること、

此の六項は東洋社會黨の神髓といふべきものである。(黨の社會思想の性質については後に述ることにする)。これが百五十名の委員に付託されて審議をつくすことゝなり、あとは萬歲と餘興の裡に立黨の盛會が終つた。

かくて、立黨式當日から四日目、日本社會倶樂部の樓上で評議會が始まる。社會黨本來の目的からいへば、發會式は半分以上お祭り騒ぎであるが、この評議會が眞の固めの會議である。

この評議會となつては、實に日本開闢以來の社會的憲法とも申すべきものの要素を議定するのであつて、その職責の至重至大なるは、例年開かるゝ帝國議會が政府の議案を被動的に可否するが如きものとは譯が違つて居る、日本帝國のみに限らない、支那、朝鮮、その他東洋一般の諸邦にも普及すべき目的の主動政策であるから、實にすばらしいものだ、かゝる目的を抱いて議場に列なりたる委員等が、非常の大奮發と非常の意氣込でかゝつたるため討論のいづれも謹嚴莊重にして、而かも慷慨激烈なりしは尤至極のことである云々（第八章六十五頁）。

此の會議の議長は衆望の歸する所として豊原先生が選ばれ、豊原先生は、平井を始め白山學校の講師及び三傑七俊中から説明員及び書記長以下を指命した。

會議の議題は初日は先づ普通選擧の件、この議題で婦人參政が問題となり、賛否囂々たるとき、平井は斷然發言して、婦人參政の必要について雄辯を振つた。（この件から平井に熱心な婦人フアンが出來、中でも熱心な鮫島春子は遂に太田孃と鞘當てを演ずるに至るが、これは本筋に關係がないから、書かない）。普通選擧について、貴族院廢止の緊急案が出た。二日目は生産交通機關國有の件、三日目には市府自治の件、四日目には軍備縮小民兵設備の件、四日以後議題となつたものは、府縣知事郡長公選論、勞働者疾病災難養老保險法、社會教育法規、貧家少年男女特別教育法、特別稅及び家督相續稅法、宗教獨立法、新聞雜誌集會政社法全廢案など喧しい問題ばかりで、從つて豫定の會期一週日で濟まず、十日にも及んで漸く散會した。

さて此の會議中、議題毎に評議委員の間に急進、自重の二派が生じ、常に數の上では自重派が勝つて來た。これは東洋社會黨が、日本に初めての社會主義團體であり、實行可能の政策から社會改革に着手しようといふ建前であつ

て、凡てに亘つて理想的改革の主張を滿足させ得ぬところから出てゐる。だがかくして、急進派の約三十餘名は、この會議中自然に一致して行動したところから、いつとはなく此の社會黨とは別に、非常手段をもつて決死の行動をすることに祕密血判までしてしまつた。例の本多翁もこの中の一人であつた。彼等は評議員會の終つた後、同志の增加を待つて急進社會黨となつて、一時百餘名に上り、中々盛んな勢力になり、東洋社會黨よりも世間の視聽を集める位ゐであつた。そこで彼等はいよいよ彼等らしく一命を拋つて非常手段の社會改革を企てることになつたが、實行順序の點で端なくも議論分裂となつた。それは、何うで事こゝに至る以上、世界萬國の同志と提手してやらうといふ一派（六十餘名）と、國外視察や他國の同志をあてにせず、何でも自力でやらうといふコリコリの一派（三十餘名）とに分裂したのである。かくて多數急進黨の方は、その考へ通り歐米諸國に七人、支那、朝鮮、ロシヤに五人の視察兼連絡員を出した、歐米班は社會事業社會運動の視察であるが、支那、朝鮮、ロシヤ各班は、社會情態を調査してこれに適當したる改革案をつくるのが目的である。

少數急進黨はいよいよ密議して實行プログラムをつくる。その內容は勿論判明してゐないが、社會改革の邪魔になる議會及び政治家に非常手段を施して日本の正氣を發揚するつもりといふだけは推測出來る（小說ながらさも尤もらしく說かれてゐる）。彼等は心中フランス革命の志士や虛無黨員、無政府黨員の活動を理想としてゐたのである。その中にも同志は追々減つて、最後に殘つたのは十三士、本多翁は彼等に殉ずるつもりで、竹子その他からいかにすゝめられても彼等の仲間を去らなかつた。かくて十三士は、その年十二月二十日開院式の日を期して事を擧げやうとしたが、その前夜本據たる芝の旅店で逮捕されてしまふ。

一方、東洋社會黨の方は、黨員がもはや三十萬に達し、三府四十餘縣の重立つた市町村に皆黨員があり、それが何れも本部の指導を得て活潑な地方運動を始めたいと催促して來る。黨員は昔の自由黨改進黨の時代とは違つて、無資

産無職業の産業政治屋は少なく、多くは農工商、殊に近代盛大になつた各種製造業主たる少壯實業家と、職工連中である。ここに時代の經濟的變化がはつきり出てゐるといつて可い。本部では、そこでいよいよ大規模に地方運動をすることになり、六月各地に人を派した。中でも平井には東北地方が當つた。彼は早速輕裝して、東北地方を巡回し、東洋社會黨の主旨を宣傳して新入黨員を勧誘すると共に、同志の團結を固めるに努力した。又地方の實情の觀察研究に意を用ゐたが、殊に驚いたのは舊來の選擧區と代議士の關係で、選擧區とは全くの有名無實といつて可いのだと知つて、今更の如く普通選擧の急務たるを感じた。平井は此の外、殊に新興商工業階級の奮發を促して、有志者に大きな感激を與へたといふ。

地方巡回から歸つた平井は、内閣大臣及び政黨領袖と會見して、社會黨の政策實行の見通しをつける大任を負はされる。當時の内閣は小黨の聯立であつたが、比較的人材を網羅してあつたので、大體に於て平井の意を好く聞き分けた。問題は下院に絶大な潜勢力を有する立憲政黨首領北川辰幸である。彼は黄金第一の社會的風潮に應じ、政府は合名會社、議會は株式會社、政治は取引也、商賣也といふ徹底した信念をもつてゐる人物である。彼の平生の仕事は、議員買收の請負である。この北川は、平井の社會政策論に對し、必要は必要だが日本としては時期尚早だと應じて取り合はなかつた。（尚ほ北川及びその持論は後に別に述べるから、こゝでは略する）。

さて、急進黨の決死隊たる十三士は、何うなつたかといふに、何れも潔よくその不穏計畫を認めたので、重懲役に處され、北海道集治監に苦役することゝなつた。同時に拘引された本多翁と竹子とは、この計畫の直接參加者でないことが明らかとなつて放免されたが、本多翁は高齢病弱の身で長い間監倉に過したので、それが原因となつて死ぬ。竹子は、悲憤やる方なく、女の身ながら祖父や十三士の志を繼がうと決心する。竹子は、かねて北川の買收政策によつて政治が全く金の支配となつてしまふのを憂へてゐた一人であるが、その北川の魔手がいよいよ社會に毒

を流す上、東洋社會黨の穩健な社會政策をさへ邪魔するつもりだと聞いたので、竹子は一身を犠牲にして北川を刺す。北川は死なゝかつたが、二度と社會活動の出來ぬ身となつたので、竹子の目的は達したわけである。かくて竹子も亦十三士の後を追つて北海道に送られる。この小說はこゝで一先づ終つて（事實は中絕して）ゐるのである。

以上の梗概は、筋としては別にさう複雜極るといふものではないが、いさゝか多岐に亘つてゐる觀があるから、今一應よく呑み込んでいたゞいて、さて內容を多少硏究的に檢討することゝしたい。

この小說の本來の眼目は何か。それは表題にもある如く、東洋社會黨の生起、活動である。東洋社會黨の主義とするところは何かといふと、社會主義である、その種類の如何は別として一種の社會主義である。そこで內容の檢討は、此の東洋社會黨の揭げてゐる社會主義なるものゝ如何なるものかといふ點を第一に取り上げなくてはならぬ。

そこで、上の梗概中に揭げた六項を今一度次に揭げると、――

（第一）皇室を尊戴し衆庶を按撫すること
（第二）國家の生產及び交通機關を公有とすること
（第三）萬機公論に決するの聖勅を遵奉して普通選擧を施行すること
（第四）勞働保護の法律を制定すること
（第五）軍國主義を縮少し產業主義を伸張すること
（第六）國際は平和、自由、平等を主義とすること

此の綱領で見ると、東洋社會黨の執る社會主義は、明白に民主的社會主義ではなくて、國家社會主義、乃至それに頗る近い調子のものであることが先づ分かる。これを『東洋社會黨』の刊行された同じ明治三十四年五月に組織された

社會民主黨の基礎的綱領八ヶ條と對比すると、その差の如何が明白になつて來る。曰く、——

（1）人種の差別、政治の異同に拘はらず、人類は皆同胞たりとの主義を擴張すること

（2）萬國の平和を來す爲には先づ軍備を全廢すること

（3）階級制度を全廢すること

（4）生産機關として必要なる土地及び資本を悉く公有とすること

（5）鐵道、船舶、運河、橋梁の如き交通機關は悉くこれを公有とすること

（6）財富の分配を公平にすること

（7）人民をして平等に政權を得せしむること

（8）人民をして平等に教育を受けしむる爲に國家に全部教育の費用を負擔すべきこと

此の後者の八綱領を以て前者の六綱領に比較すると、後者の（1）は前者の（第六）と通じ、後者の（2）は前者の（第五）に近い、又後者の（4）（5）は、前者の（第二）に相當する。後者の（7）は、前者の（第三）に相同じ。後者の（3）と（6）とは、社會主義思想からいへば、根本的に重要なものであるが、前者にはその意は見えない、たゞ（第四）の勞働法の制定の條で（6）の精神が眞の少し生かされてゐるのみである。（3）に至つては、全然考慮されてゐない。即ち社會民主黨の綱領は、階級是認に成る現存の社會制度を否定し、國家それ自身に重大な影響を與へることになるが、東洋社會黨の綱領は、現存の社會制度を認容し、國家組織に根本的な變革を來さずして、社會主義本來の精神を幾分か實現せんとする。從つて後者は、社會主義の純理論からいへば、明白に一時的中性的の方便主義たるの觀がある。蓋し日本國家内に於いて、合法的に社會主義的精神を實現することを目的とせば、此の東洋社會黨の綱領の如き、社會政策乃至社會改良主義に近いものとなるのは、止むを得ないところであらう。

東洋社會黨は、その發會式に於いて綱領を讀み上げた後、十日に亘つてその實行的綱領の討議をしたといふ。此の實行綱領は前の基本的六綱領の補足的說明であり、從つてこれを知ることによつて東洋社會黨の社會主義なるものが、なほはつきりして來る。

第一日の討議問題は普通選擧である。これは綱領の（第三）にもあることで、滿場一致で贊成した。

舊來の藩閥と黨閥を撲滅して、掃本的大革新を斷行せんとするには、先づ手を議院の掃蕩に下さゞる可らず、この目的は代議士選擧の方法を改革して、我黨より多數の議員を選出するより外なし

議會政治を否認すれば別であるが、然らざる以上、これは尤ものことである。社會改良の第一歩は普通選擧から始まる。そこで問題は一應可決されて「帝國臣民で年齡廿五歲以上の戶主は選擧權を有する」ことになつたが、問題は婦人を含めるか何うかである。討議でも激論が交はされ、平井太吉の如きは、婦人の爲めに雄辯を揮つて聽衆の大喝采を博したが、結局採決の結果婦人選擧權は多數で否決となつた。

又同日問題となつた華族を一代限りとし、授爵は以後廢止することにしたいといふ動議（これは事實上、貴族院廢止となる）も、多數で否決となつた。

第二日の討議問題は、鐵道、炭礦及び土地その他重立ちたる生產交通の機關を一切國有とする件である。かゝる生產交通機關の國有化は漸次に永き年月をかけて行ふこと、かゝるものゝ國有は有償とし、賠償資金は外債によるべきことが決議の要領である。又生產機關の國有といつても、日常生活品賣買等の一切の生產事業を含めて國家經營にしてしまつて民間資本家の商店合資會社等を一切認めぬといふのではない、差し向きは重立つた鐵道、炭田等のみの國有から着手するといふ補足的決議がある。さうして、土地、產業を無償にて國家に接收し、急に國有を斷行せよといふ動議は、矢張り議論では勝つたが、多數によつて否決となつた。

第三日目の討議は市府自治の問題であるが、前後十日の討議を通じて、久松が最も力をこめて論じてゐるのは、此の市府自治の問題である。何故とならば、この問題は一面に於いて、自治の成績擧らず市政腐敗の非難囂々たる東京市政に對する彈劾でもあるからである。黨の說明員は力をこめて、歐米の市府自治の計畫及び設備の整へることを說き、——

若し一國を一家と見ればその都府又は開港場は表座敷及び應接所なるべし、市府の自治の行政も擧らず、社會機關も備らずして、外人と平等に交際し、外資の輸入を望むが如きは、恰も表座敷と應接所に塵芥を堆積し、襖障子の破損も繕はず、床に生花置物もなく、缺茶碗はげ椀等の茶器膳部などにて友人を招待し、又は會談を爲さんとするものゝ如し、實に片腹痛き噺にて、無分別無頓著の極なり云々（第三編第九章）

と十分持論を述べたところ、傍聽席にゐた「東京市は勿論、橫濱、大阪、京都、神戶、函館等より態と傍聽に來た官民有志一は大に感動した。說明員は更に東京市評議員の註文に乘じて英國バーミンガム市、グラスゴウ市などの例を詳述し、市民の幸福に關するものは市自身が一切を經營してその間個人の私利を許さぬ實況を示すや、東京評議員は此等の兩市の善政と東京市の腐敗を對比して感慨禁ぜず、左の如く一言した。

若し我々の社會眼で東京市を眺めたならば、日本の首府とか東洋の大都會とか云ふことが恥づかしくつて堪へられない、恰も數百年前の武藏野に、熊や狼や狐狸などが徘徊する樣に思はれ物すごく荒れ果てたる妖魔界となつて仕舞つた。金持、地主、大株主、投機商、詐欺師、高利貸共が、この氣候温和交通自在なる中央都府に寄つてたかつて、唯銘々の私利私慾を爭へるは、濱邊の飢鴉が腐肉を啄むが如きその傍より盜賊、掏兒、餓鬼、蛆蟲に等しき政客議員共がのさばり出して、市民二百萬の膏血を吸ひつゝあるは、人體中の條蟲も同樣で、彼等は市府發達の滋養液にて生活すると云ふものだ、そして市區改正港灣修築その他萬事萬端が丸つきり打つちやり放しも同樣、誰れ一

人責任を負つて、公共的精神を振ふのがないとは、眞に慨かはしい、泣ても足りない不始末ではないか。（前同）
そこで東京市に關する限りでは、市内各區の有志が市會の「公民會」を鞭韃應援して市政の廓清を計ることゝなり、總體からでは手をつけ難いから先づ各區各町で「眞の社會的結合を遂げ、片端から少しづゝ改良を加へんとの方針を立て、學校、公園、公立浴場等何にても、事情の許す限りは、小仕掛けに實施する」ことになつた。當時の東京市政の腐敗のことは、なほ後にも出て來やう。

第四日の論題は軍備緊縮、民兵設備の件であるが、世界各國でも、十九世紀以來の文明で萬國平和の問題が繰り返され、明治三十一年（一八九八年）露帝ニコライ二世の平和會議の提唱となつた位ゐで、（翌九九年、ハーグの平和會議）、軍國主義を手控へて産業主義を進めるといふのが、世界各國の流行となつた。そこで社會黨の案も、日本もそれに應ずるといふのであるが、國家存立上、現在軍備は全廢が出來ぬので、常備制度をやめて民兵をもつてこれに代へる、又日本としては陸軍を減少して海軍を擴張するといふ。民兵では對外國防上、又對清政略上（清國を恐るゝのではない、清國は次第に歐米諸國の割據地となりつゝある、この際日本の立場は重大化するから、その點をいふ）、心元ないといふ說も出るが、文武專門家の協力と訓練の十分によつて、その心配をなくするといふことになつて納得した。

その他評議會に於ける討議の問題には、なほ種々なものゝあつたことは、前に（梗概の條）述べて置いた。
兎もあれ以上、實行綱領の討論及びその討論の結果を見ると、東洋社會黨の方針なり性質なりが一層明白になる。これは、前に語つたところである。即ち漸進的であり、秩序的であり、建設的、實行的、社會改良的であつて、あくまでも急進的破壞と革命とを避け、國家としての秩序制度を改めずして社會主義的政策を實行しようといふ。國家社會主義の本態は、人民の社會主義的要求を國家權力が受け入れて、それ自身の力で實現させるところにあるといふ

が、然らば此の東洋社會黨の政策乃至綱領の如きは、最も國家社會主義に近いものでなければならぬ。

東洋社會黨をしてかく漸進的、秩序的、國家社會主義的たらしめたのは何か。それは第一に黨組織者の思想にあることはいふまでもないが、一つは此の黨の實力を握つてゐる黨員の性質に重大な關係をもつて來るのである。即ち彼の社會黨發會式のときに參加した大部分は、職工女工等、勞働大衆がそれであるが、黨の中堅乃至幹部として指導權を握つてゐるものは、勞働大衆ではない、少數の知識階級とこれに附和した地方の新興ブルジョア階級である。從つてその評議員百五十名の大半を占めるものは、此等の人士であることは、察するに難くない。

> （前略）その中にて重立ちたるものは、工業又は炭礦業が繁昌して、產業經濟に非常の變動を生じたる地方と、年來政治家の踏臺となつて、政黨運動に疲れ果てたる各選擧區であつた、即ち九州は福岡、熊本、北海道は後志、北見、釧路、及び大阪、京都、高知縣、石川縣、新潟縣、東京近傍では桐生、足利、八王子、その他福島、青森、秋田あたりの樣であつた、この邊からは、いづれも百人以上乃至五六十人の委員及び同志者が來會したが、彼等の人柄と意氣とは、是迄の政黨員とは、全く其の趣きを異にして居た、彼等は皆年來產業上の經驗に富んだる實業家であつて、恒產あり恒業ある人々であるから、政黨に入つて、不義の利祿にあり附きたいの、國會議員を常職として、歲費に衣食したいなど、卑劣千萬なる根性のものは、一人もない、いづれも舊來の政黨に愛想をつかし、多年の實驗上より、社會上の新運動を渴望すること、大旱の雲霓の如く、政黨や議員はいよ／＼腐敗極まつて、到底賴みにならぬものと斷念し切つたる純正著實の人々が多かつたらしい（第二編第八章）

以上の如く、此の頃產業改革の進行につれて發生した地方の新興產業ブルジョアとそれの理論指導者の位地に立つ少數の知識階級、それらが恐らく此の社會黨を左右する勢力であつたと察せられる。尙ほ此の事實は、第五編第十七章から十八章へかけて平井太吉の東北遊說の際、平井の最も力をこめた聽衆が地方の新興產業ブルジョアであることに

よつても立派に裏書きされてゐる。以上の事實と評議員會に於ける實行綱領決定の際に、此等ブルジョアの利害を無視して急進派の社會革命的主張が敗北した事實とを照し合せると、黨そのものゝ性質は極めて明瞭となつて來る。

こゝに於いて憶ひ起すのは、往年の秩序的漸進主義、社會改良主義の改進黨イデオロギイである。改進黨は、明治十五年三月立黨の始めに當つて天下に何と宣言したか。人も知るその趣意書に約束二章を載せてゐるが、第二章に曰く、——

第二章　我黨ハ帝國ノ臣民ニシテ左ノ冀望ヲ有スルモノヲ以テ之ヲ團結ス

一　王室ノ尊榮ヲ保チ人民ノ幸福ヲ全フスル事
二　內治ノ改良ヲ主トシテ國權ノ擴張ニ及ホス事
三　中央干涉ノ政略ヲ省キ地方自治ノ基礎ヲ建ツル事
四　社會進步ノ度ニ隨ヒ選擧權ヲ伸濶スル事
五　外國ニ對シ勉メテ政略上ノ交涉ヲ薄クシ通商ノ關係ヲ厚クスル事
六　貨幣ノ制ハ硬貨ノ主義ヲ持スル事

以上六綱領をとつて、東洋社會黨の六綱領と比較して見られよ。相當興味ある結果が得られはせぬか。今假に前者を甲とし、後者を乙とすれば、甲の（一）は乙の（第一）と同內容と見て可く、甲の（四）は乙の（第二）に進化したものであり、甲の（五）は乙の（第六）に變形してゐる。又甲の（三）は乙の六綱領中に文字となつて現はれてゐないが、評議員會の實行綱領中には大に力說高調されてゐる。そこで、甲の（二）「內治ノ改良ヲ主トシ國權ノ擴張ニ及ボス事」が、乙の（第二）「國家の生產機關及び交通機關を公有とすること」、（第四）「勞働保護の法律を制定すること」、（第五）「軍國主義を縮少し產業主義を伸張すること」に相當する。尤も甲の（一）「人民ノ幸福」云々の考へ

も、そこに入つてゐること、いふまでもない。そこで假に乙の「軍國主義」といふ語を甲の「國權擴張」と同意であるとすると、甲に所謂「内治ノ改良」が「社會進歩ノ度」に從ひ、乙の所謂「生産及び交通機關の公有」、「勞働保護法」、「産業主義」となつて來たと見られぬことはない。而して改進黨の綱領は政治史上の事實であり、東洋社會黨のそれは政治小說上の假想であるが、この兩者を繋ぐものに明治二十九年第十議會に於ける進歩黨の實行議案なるものがある。進歩黨が改進黨の變形生長したものであることは、いふまでもない。これは、新聞條例改正、集會政社法改正、出版法改正、保安條例廢止、豫戒令廢止、經費節減、臺灣行政整備、軍備擴張期短縮等々十五條であるが、この外に、――

職工保護、小作人と地主、工場取締

等々を追加したものである。即ち改進黨イデオロギイが、時勢に促されていかに社會政策的な色彩を帶びて來たかといふことを察知出來る。即ち政治史上の改進黨が政治小說中の東洋社會黨に可成近くなつて來たことが、これで分かるのであるが、尚ほ改進黨以來の名士矢野龍溪、島田三郎等が此の頃より社會主義に關心をもち、それぞれ研究し始めてゐる點も、見逃してはならぬ。此のまゝでは改進黨イデオロギイには、「生産及交通機關の公有」といふ點が明白に表現されてゐないが、二十九年以後、三十四年に至る間にはかゝる公有云々の觀念まで展開し得るものと思つて可からう。何となれば、始めにいふ如く、此の數年間に於ける社會主義の進歩が異常なるものであり、苟も政治の事業に關係する進歩的人士は、官民ともにこれに深甚の注意を拂つてゐたのが當時の現勢であつたからである。例へば明治三十二年にインテリ官僚及び實業家の組織した帝國黨なるものゝ政綱にさへ、吾等はその强い影響を見る。政綱の(第六)に曰く、――

我黨は國家社會政策を擴充し、救貧備荒の實を擧げ、勞働者を保護し、以て社會の秩序を整齊せんことを期す

國家社會政策を云々してゐるところに、時代の風潮の反映を見るのである。官僚中心の帝國黨にして尙ほ且つ然り、秩序漸進的とはいへ、多年民間の進步的先覺團體を以て任じて來た改進黨に至つては、一層進んだ社會政策を抱いてゐたものと考へて可い。公有云々の觀念は、改進黨イデオロギイが必ずしも反對し、拒否するものではなかつたと斷じて可い。

要するに、久松義典の抱懷した東洋社會黨なるものは、主義としては一種の國家社會主義であり、政黨としては改進黨の社會主義的變形と見て可く、いはゞ改進黨精神をもつ進步主義者としてもち得る限りの社會理想を政治上に實現せんとしたものであることが、略ぼ推想されるであらう。

久松の理想がかく改進黨精神の社會主義的再現であるとせば、評議員會に於ける急進派のイデオロギイなり行動なりは何を意味するものであるか。これには歷史的と現勢的と二重の諷刺が含まれてゐるであらう。歷史的にいへば、往年改進黨の秩序主義に對して急進的破壞主義を以つて對抗した自由黨靑年派の言動の借用であり、現勢的にいへば、その自由黨に多少の脈をひく社會民主黨派の行動を諷したものであらう。往年改進黨が自由黨に對して下した批評は、餘りに理想に奔つて歷史と現實を無視してかゝるといふのであつたが、今此の小說に於いても、久松は彼の急進派一味に對して全然同樣の評語を與へてゐる（八二頁、一〇八頁、その他）。

抑も久松義典が社會主義思想に關心するに至つた動機が那邊にあつたか。それは前記、彼の傳中に述べた如く、自由民權理想の實現たる議會政治の腐敗墮落（果して久松氏の感ぜし如く初期の議會政治が腐敗せるものであつたか何うかは別として）を憤ふる心からこれに向つたものに違ひない。『東洋社會黨』を書いたころの久松氏の心中にも未だ勿論さういふ動機が消えてゐないのであるが、『東洋社會黨』の社會主義が特に國家社會主義といふ型をとるに至つた

のは何故か。ここに、久松氏が時勢の上に看取したものが反映してゐるといひ得る。

元來社會主義は（明白な社會現象としては）、十八世紀から十九世紀へかけての產業革命の結果、勞資の關係が一變して社會の經濟的局面に大變動を及ぼした爲めに生じた必然的現象である。世界の產業が資本主義的に行はれる以上、社會主義的思想も世界的にこれに附隨する。日本の產業も日清戰爭後に於いて、世界的舞臺に乘り出し始めるが、世界的舞臺に乘り出す以上は、それは當然資本主義的に行はれる、それでないと世界各國と競爭的に產業に從事することが出來ぬ。日本の產業が資本主義的に行はれるにつれて、勞資の關係の摩擦が激化するのは當然と見る可く、そこに社會主義思想の生長があるのは、勿論のことである。そこで、政治の腐敗云々も、日本の社會主義思想生長の理由の重大な一つには違ひないが、そればかりではない、社會主義の發生生長は、產業日本の發展に必然的に伴ふ附隨物だといふ點も重視されなければならぬ。即ち最初久松氏をして（乃至一般進步的知識階級をして）社會主義に關心せしめた政治的理由の外に、かういふ經濟的理由が生じ、而して日清戰爭後に於いては此の經濟的理由が主となり、政治的理由が從となつて、社會主義に對する進步的知識階級の關心を促したものと見て可い。

そこで日本でも、產業革命の進行につれて、社會主義が當然勢力を得る。それは當時誰しも豫想したところである。勞資關係が不和になれば社會の不安が增大する、社會不安が增大すれば、產業日本の發展はあつても、日本の國家としての威力が弱められはせぬか、世界的に國權擴張が出來るか何うか。その上又、當時（三十年代上半期）產業界の輿論となり、一部又實行もされたことであるが、日本の產業革命遂行には外國資本の移入を必要とするといふことである。つまり日本產業の資本主義化は外國資本によつて促進されるといふことである。外資移入は日清戰後の日本產業界に目立つた現象であり、年を逐うて益々甚しくなるかの如く豫想された。外資の跋扈は、日本產業を外資が支配するといふことになり、眞の日本の國力發展は外資によつて左右されるとなれば、日本の將來にとつて大患であ

る。此の外資の跋扈を抑制するものは、社會主義あるのみ。卽ち日本の產業革命による社會不安を積極的に調整して、國內上下の步調を揃へさせ、更に外國資本の不當なる跋扈を抑へるには、社會主義思想を採用し、社會政策を實現させるが第一である。聰明なる知識階級の憂國者達は、皆さう考へた。彼等が、日淸戰爭後競うて社會主義に關心をもつに至つたのは、かういふ見地からであつた。

勿論當時の社會主義思想家の悉くがかゝる見地にゐたとはいへない。西洋直譯もあつたらうし、日本國家など眼中にない人々もあつたかも知れない。然し當時社會主義に關心をもつた人々の多くは、明治十三四年の交、自由民權の理想を唱へたと同じ心持ちで社會主義に關心をもち、これを唱へたのである。自由民權論の時と同じく、その最も過激な社會主義者といへども、全然日本國家を無視してゐたか何うかは、疑問であると思ふ。多くは、日本國家の發展のため、富强のためにこれに關心したのである。

さて、國家は國家として立てゝ、然る後社會主義的理想を實現するには、如何すべきか。これは理論上からいへば、國家主義と社會主義とは到底一致すべきものではなからうが、臨時の便法として、國家社會主義なるものがあり得る。國家自身が社會主義的理想を實行可能な程度に盛つた社會政策を實施すること、これである。十九世紀後半から二十世紀へかけての歐洲各國は何れも必要に迫られて社會政策の若干を實行したが、國家社會主義の實行といふところまで進んだのは、ドイツである。鐵血宰相ビスマルクの功名は、オーストリアを挫き、フランスを打倒して隆々たるドイツ帝國を築き上げた點を第一と見られてゐるが、その後の二十年間、議會を相手にいかに國家社會主義政策の實現を期して努力したかの苦心に至つては、人は餘り買はない。買はないどころか、多くの社會史、社會思想史等からは、ビスマルクが社會黨の取締りに苦しんで窮した餘りかゝる「木に竹」式の愚案を考へついたのだといつて、嘲罵されてさへゐる。然しながら、素人の私をして敢ていはしめるなら、恐らくドイツの國家的富强の根本は、この二

十年間のビスマルクの努力にあつた。國家社會主義による努力にあつたといはざるを得ない。ところで、此の國家社會主義のドイツが、日清戰後の世界には、英國に代つて世界をリードする活躍に萬人の眼を見張らせ始めた。それは獨帝ウィルヘルム二世の個人的イデオロギイの現れであるかの如く取沙汰されたが、事實は當時のドイツの國力國情がよく帝をしてかゝる活躍を得せしめたのである。日本に近いところからいへば、明治三十三年北清事件に於けるドイツの態度は、他の歐米の無定見無方針と違ひ、實に明確な支那改造論を振りかざして鮮やかな進出振りを示した。日本の知識階級（つまり久松等）はドイツの此の進出振りを、ビスマルクの國家社會主義政策の結實したものと見たのである。元來國家社會主義はドイツが本家である上に、此のドイツがかゝる對外活躍を示したので、日本の愛國的社會主義關心者達の注意も國家社會主義に集中した。日本も宜しくドイツを學んで、國家社會主義政策を行ひ、國內の摩擦を緩和し、產業の發達を圓滑にして眞に富强の實を擧げ、以て國權擴張の途に上るべきであるとした。

且つ此の人々の最も意を強くしたことは、日本の歷史にかゝる國家社會主義的思想は勿論、施設も少なからずあることであつた。從つて、國家社會主義の精神は、日本國家の歷史から見ても、採用不可能なものではないとした。（以上、國家社會主義に對する知識階級の態度その他は、久松氏著『最近國家社會主義』に詳しい、この書は『東洋社會黨』と同時（三十四年六月）の出版になるもので、是非併せ看るべきものであらう）。

卽ち久松氏等の社會主義に對する關心は、全く往年自由民權の理想を高唱したときと同じ憂國的精神から出てゐる。これは社會主義者としては純な態度か不純な態度か、それは兎もかくとして、日本人としての對社會主義態度としては決して誤まつたものではない。

さて然らば、既に國家社會主義が躍進日本の實力養成上必須なるものであると定つた以上、これを單なる理想とし

て唱道するに止まらず、その實現實行に努力するを當然とする。『東洋社會黨』に於いて久松氏が說く國家社會主義の實行法は凡そ三段ある。その（第一）は、東洋社會黨の力で輿論を明確ならしめ、國民の意識を國家社會主義の上に集注せしめること、これは黨組織、倶樂部の組織、新聞の發行、地方遊說等によつて既に實行しつゝある。（第二）は有識階級、有產階級間に實行的先驅者をつくるに努めること、即ち平井太吉、太田孃の如き人々の活動がこれに相當するのであつて、これによつて國家社會主義は單なる理想ではない、空想ではない、實現實行の可能なものであるといふ好望を、社會の上下をして抱かしめることが出來る。これが出來ればこの主義が全國的に實現する第一歩に入つたものと見て可い。（第三）は、いよいよ政府と議會をして公然と此の主義に贊成せしめる。それには（第一）と（第二）とが必須の前提條件となる。これを前提として政府及び議會に働きかけ、政府及び議會を動かして此の主義を全國的に實現することに贊成せしめる。東洋社會黨は、以上二條の前提條件に成功したので、その效果を提げていよいよ政府及び議會に働きかけることになつた。だがその結果は何うであつたか。

　東洋社會黨を代表して時の內閣に働きかけたのは矢張り平井太吉であるが、內閣側の手答へは案外良好であつた。此の時の內閣は、首相秋津公の下に下院各派の領袖の參加した聯合內閣であつたが、それは當時の日本政界が政治上の主義主張よりもむしろ行きがかりの感情から對立した小政黨分立となつてゐたから、自然かゝる形態の內閣が生じたのである。秋津公は縉紳の出で政黨に關係がないが、細井外相は國民黨を、小溝藏相は中立黨を、大鹽內相は開國黨を、高峯法相は國民黨を、山中文相は同じ國民黨を、青柳農相と千代田遞相は實業黨を代表して入閣したものである。久松氏は各大臣の經歷を述べてゐるが、それを讀むと、秋津公は即ち近衞篤麿公、細井外相は大井憲太郎、小溝藏相は田口卯吉、大鹽內相は島田三郎、高峯法相は鳩山和夫、山中文相は高田早苗、青柳農相は益田孝か、千代田遞相は莊田平五郎を指してゐることが、明白に看取される。大臣中に彼の知人たる改進系の名士の多いのは兎もかくと

して、政界に實業黨の勢力を入れたこと、內閣大臣に實業家を入れたことは、當時及び將來の政治がいかに社會的又は經濟的に傾いて來たか、又來るに違ひないかを暗示し乃至豫言するものとして、首肯出來ることである。

秋津首相は近代的政治家で、例の新知識もあり、歐米の現況に通ぜる方であるから、全般の政治が總て社會的に傾き來つたこと位は、よく知つて居らるゝけれども、日本社會がまだ幼稚なるが爲め、責任ある身として、餘り十分の同情を表しなかつたそうだが、これは、左こそありさうなことだ、他の各大臣中で頗る熱心に贊成したるは、大鹽內相であつたさうだが、次に淺からぬ同情を寄せたるは小溝藏相であつて、細井外相も、社會主義に對する意見を述べて、贊成したる方といふことだ、農相と遞相は、實際問題の上より關係の最も近き方なれども、政界の新參者として、明白に意見を吐露し難き樣子があつたから、深くゆかなんだそうだが、つまり反對の議論はあるまいと思はれる（第十八章）

平井が內閣諸大臣に面會して社會黨の理想の實現を說きつけた結果はかくの如きものであつた。

そこで平井は轉じて政黨の領袖を說くことになるが、その眞先に會つたのが、下院に最も勢力ある立憲黨の首領北川辰雄である。北川は明白に時の憲政黨領袖星亭を指してゐる（北辰は星の代表名辭なることいふまでもない）。北川は早くから財力が政權を動かすこと、一國の主權を除けば天下の廣き、世界の大なる、何れの地何れの國として黃金の魔力に拮抗し得るものがないこと、卽ち金力卽政治といふ徹底した唯物的意見を持してゐたが、その後米國に遊んで金力政治の實際を見るに及んで、愈々その信念を堅め、行政は請負仕事、政府は合名會社、議院は株式會社、豫算審議は商取引の行爲だと深く信じた。彼は本來法律家であり、法を犯さぬ限りあらゆる手段を講じてその信念を日本の政治界に實行し出したのである。會社と會社の間に周旋して双方の便を計るものは、それ相當の報酬を得る、北川は同じ論法で政治と議會の間に周旋して公然報酬を要求する、いはゞ議會のブローカア、卸問屋の如き位地をいつ

とはなく固めてしまつた。議會は多數政治である、萬事多數で決する、それで彼の目的通り事を運ぶには多數を自由にしなくてはならぬ、それには買收が一番確實で手取早い、そこで北川は議員買收を第一の商賣とする。數十の配下を使ひ、百萬圓内外の資金を擁して、內閣と議會の生殺權を掌中に握つて置く、それが北川の理想である。配下には議員は勿論、辯護士、記者、執達吏、探偵、高利貸、待合女將、藝妓、あらゆるものが揃つてゐる。相手の議員次第で硬軟の手段を用ゐ、結局は目的を達せずには止まぬ。その資金には、外資が大がゝりに利用されてゐる。

此の北川をかゝる大きな勢力にしたのは、元來當時の社會の唯物的拜金思想であるが、今や逆に北川によつて拜金思想の菌子が撒布され、墮落を强めて來た。政界の腐敗の如きはいふまでもない。又かゝる絶大な黃金の魔力に會つては輿論も何も無力である。たゞ僅に東洋社會黨の「社會八面鋒」のみが敢然北川の行動を筆誅し、「公盜の巨魁、國賊の首領」等といふ名で彼を呼んだ（公盜云々は、島田三郎の東京毎日で星亭を攻擊したときの文句）。而からこの筆誅によつて、後に北川が刺客の一刀を浴びて失脚することになつた。

平井は此の北川に會つて社會黨の政策を實行する必要を說いた。北川は勿論西洋社會の形勢の如何の如きはよく知つてゐる、然し日本には、西洋程工業が興つてゐないのに、工業革命の結果たる社會主義的施設だけを實行するのは、時期尙早だ、むしろ工業促進が急務だといつて、平井の說を駁する。

（前略）つまり二十世紀は、社會的時代に相違あるまい、しかし平井君、よく考へて見給へ、こんなことは、皆太平洋を隔つる數千里以外の文明世界の形勢であつて、日本今日の社會には、大分距離のある咄だ、第一國が貧乏で、人は馬鹿計り、貧乏と馬鹿ほど厄介なものは無いのだ、それに政治家は坊ちゃんや、殿樣や、頑固おやぢ計りで、一人もろくな奴は居らん、その中實業家と云ふ連中計りは、金力があるから、將來日本に最有用の階級であるけれども彼等は新知見なくして、外國の事情に眞暗だから、差向外資の輸入にさへなか／＼骨が折れるのだ云々

（第十九章）

即ち外資を大に輸入して日本の産業を益々盛んにするのが第一義だといふ。此の邊の口調や論旨は、北川の本物星亨の言葉を好く注意して寫してある。星の毒舌は有名なものであつた。

かくて平井と北川との會見は物別れとなつて、東洋社會黨の政策實現に一頓挫を來したかに見える。久松氏はその後如何なる手段で政策實現を描く心算であつたか、この小說の未完成の爲めにそれは明確に知り難いが、本多竹子の一擊に北川を屈せしめてゐるところを見ると、邪魔な北川をかゝる運命によつて押退けて、別局面から社會黨政策の實現を描くつもりであつたのであらう。だが本物の星亨が、この小說が公けにされて一月と經ぬ三十四年六月二十一日に伊庭想太郎に刺殺されやうとは、實に意外中の意外であつた。この小說が全くこの點星の死を豫言したるのゝやうに見えて、いさゝか鬼氣がにじみ出る。『東洋社會黨』の中絕したのも、或はこの豫言的中などが原因になつてゐはしまいか。

以上、『東洋社會黨』の政治小說としての主眼點については略ぼ語り了つた。更にこれを單に小說的技巧乃至出來榮の上から瞥見せば、作者久松氏としては、從前の諸作、例へば『月雪花』に比し、『南海狂瀾』に比して、相當著大な小說的進歩をなしてゐることは認められる。その從前の諸作に比して、幾多の點に就いて遙に本格小說らしきものとなつてゐるが、第一に認められるのはその描寫である。生硬な漢文直譯風の文章から言文一致の柔かなものを用ゐ、描寫手法にも相當の考慮を拂つてゐる。恐らく久松氏も時代の文學的進歩を意識して、自ら此の作を、政治小說たる外に文學的にも秀れた小說たらしめんとしたものに違ひない。然しながら久松氏に若干の文學的進歩がありとせば、時代には更に著大な文學的進歩があつた。時代の文學は久松氏の創作心を誘つた逍遙、鐵腸時代から、紅葉、露伴時

代を經て、今や前期自然主義の近代文學時代に入らうとしてゐる。明治の文學史の大體上より見て、此の十數年の進步は、形式上內容上何れよりするも頗る顯著なものがあつたことは、今こゝで喫〻する必要がなからう。從つて小說としての『東洋社會黨』は、遂に時代の文學的技術からは完全に取り殘された形になつてゐる。且つや、その政治小說たる本質上、性格の言動が主であり、從つてプロットと性格に主力が注がれるのは當然であるが、久松氏は他の要素、例へば背景の如きを全然考慮に入れてない。人物活動のための舞臺や場景は多少描いてゐるが、作全體としての背景の解剖描寫が恐ろしく無視されてゐる。これが此の作の描くところに若干の力がありながら、全然眞實性がなく、自然的發展を缺き、遂に小說として問題とならぬ所以の主因である。

且つ、プロットと性格に主力が注がれてゐるとはいふものゝ、それはたゞ紙面の大半恐らく九分通りはその方に割かれてゐるといふ意味で、そのプロットなり性格なりが小說的に成功したといふ意味ではない。プロットについては多くいふことはない、久松氏は此の小說の性質上、金子筑水が社會小說論で注意した如く、東洋社會黨の起る動機に深く立ち入つてプロットを組み立つべきであつた。久松氏は動機を時勢にありとし、時勢を略叙してゐるが、それだけでは小說になり兼ねやう。もつと具體的に人間的動機を描破して、外からと共に內からも、東洋社會黨の生ずべき必然を說かないとならぬところである。所謂事の結果を說明するのみに止まらず、その動機を進行形に於いて把握して、社會黨生起の過程を描かなくては活々した好い小說にならぬ。作者はそれを全然描いてゐないとはいはぬが（例へば平井の場合には社會主義を抱く個人的理由はある）、それが餘りに概念的であり、理窟的であつて、却てこれあるが爲めに此の小說の文學的面白さを沒却させる如きものである。一々の例はあげぬが、プロットの不自然、不明瞭等は實に澤山ある、それには此の作が前半のみで止んだといふ事情も考へられるべく、一概に攻擊出來ぬにしても、作者の想像力の貧弱さは、蔽ふべくもない。梗概で知られる如く、此の作では、筋は少くも三つに分れてゐて、その

間に、これといふ有機的連絡がついてゐないので、讀後の印象も三つ別々に感じられて、小說のプロットとして最も大切な統一的發展の感じが與へられない。平井が主人公であるべきのに、思想的には豐原博士が絕對優勢であり、然らば豐原が主人公の一人かといへば、此の小說中豐原が直接登場して、讀者にその人品なり意見なりを開示する場面の殆んどないのは不思議といへる。然しこれとて、通篇が平井の一友人「僕」なる人物の追懷錄の形式になつてゐるといへば、辯解がつかぬこともなからう。

性格についていへば、梗概でも知らるゝ如く、最も重要なのは平井太吉、これについで豐原博士、太田孃、それから本多老人、孫女竹子、北川辰雄などである。その中で豐原博士は重要人物ながら殆んどその本相を示さないから此の中から省いても可い。先づ平井について語らう。平井太吉については、彼の樽井藤吉をモデルにしたといふ說が古くから聞くが、それは此の小說の題名『東洋社會黨』を樽井の首唱し創設した明治十五年の東洋社會黨と遠斷するから來る誤謬で、小說『東洋社會黨』と明治十五年の東洋社會黨と直接何の契緣も無い如く、樽井藤吉と平井太吉とは何の連絡もない。强ひてありとせば、それは平井太吉なる姓名を暗示された點であらう、これは恐らく樽井藤吉の姓名から暗示されたものであるかも知れない。その他の點では、樽井と平井の間に何の相似もない。これは、『東洋社會黨』の梗概を讀んで樽井の一生を顧みるとき、何人も今更の如く首肯せざるを得ぬであらう。樽井は產を棄てゝ漂浪し、平井は大資本家の子として暖衣飽食して學校を卒業し、樽井の殆んど無學に近きに對し、平井は最新の社會學者として大學敎授たる學識あり、平井は紳士、樽井は野人、平井は美丈夫、樽井は疱瘡痕面風采が揚らぬ、幾多の點に於いて實在の樽井は小說の平井のモデルでないことが推察される。蓋し平井には別にモデルがある。それは近世ドイツ社會黨の首領フィルディナンド・ラッサル、その人である。平井の人物閱歷は此のラッサルを日本的に飜譯したものである。久松氏は『東洋社會黨』の姉妹篇『最近國家社會主義』に於いて、張膽明目して近世ドイツ國家社會主義

の發達とラッサルの活動を叙べてゐたが、同じ國家社會主義思想を日本の舞臺に移入せしめるに當つて、立役者の一人、ラッサルを日本人に飜譯したのは、さもあるべき思ひつきであるといはなくてはならぬ。平井がラッサルであるとせば、太田孃卽ち前小笠原伯夫人は實在のハッツフェルト伯夫人であり、ラッサルのハッツフェルト伯夫人に對する努力は卽ち平井の小笠原伯夫人に對する努力であり、平井が小笠原伯夫人卽ち離婚後の太田孃の物質的助力によつて社會運動の實行に多大の便益を得るのは、ラッサルが訴訟成功後のハッツフェルト伯夫人の助力によつて無產者運動に乘り出したのと同じことである。この間に意識的模倣の痕跡が強く認められることは、『東洋社會黨』及び『最近國家社會主義』を讀み合せた人々の十分首肯出來るところであらう。たゞ久松氏が思想的にもラッサルをそのまゝ飜譯せず、當時の日本の國情を基準にして多少モディファイしたことは、注意して可い。久松氏の『東洋社會黨』が明治十五年の樽井の東洋社會黨を描いたものでないことは、久松氏の小說を一讀せば、何人にも明瞭に看取される。

樽井の社會黨はその黨則を規定して曰く、——

第一條　我黨は道德を以て言行の規準となす

第二條　我黨は平等を以て主義となす

第三條　我黨は社會公衆の最大福利を以て目的となす

更に明治十六年に於いてこれを修正して、——

第一條　我黨は親愛を言行の規準となす

第二條　我黨は自他平等を主義となす

第三條　（十五年に同じ）

更に第四條に右の綱領實現の手段を規定して、——

第四條　舊來の弊習を矯正し貧愚の世襲を破壞するに左の項目を以てす

一　天物共有

二　協同會社

三　兒子共育

四　理學的生殖

といつてゐるが（以上何れも田中惣五郎氏『東洋社會黨考』）、久松氏の『東洋社會黨』の六綱領をこれに對比してみても、名を同じくした兩社會黨の內容の如何に異なるものであるかが直ちに知られる。樽井のそれは國家社會主義を根本思想としたと普通に稱さるゝも、上記の綱領のみによれば國家社會主義よりも遙かに無政府主義思潮に近い。久松氏の東洋社會黨が近世ドイツの國家社會主義を背景的思想としてもつのとは、思想的にも著大な相違がある。久松氏は知識的には樽井の社會黨を知つてゐたに違ひないが、此の小說に於いて決して樽井のそれを寫さうと試みたものでないことを知るには、『東洋社會黨』を讀むまでもなく、以上綱領の比較だけでも十分であらう。

さて平井をラッサルとし、太田孃にハッツフェルト伯夫人の面影を認めた吾等は、人情として豐原博士にも何等かの同種のモデルを認めたくなる。恐らく豐原博士にも、白耳義の經濟博士にして講壇社會主義の雄といふラブレイ博士の如きモデルがあつたものであらう（『最近國家社會主義』二七頁）、又ワグネル、シュモラーの如き同國博士の面影も入つてゐると思はれる。兎もあれ博士のモデルは合成モデルであつて單一の實在的人物から來たものではあるまい。博士の思想及び政策が所謂ワグネル立案に頗る似てゐる點なども注意されて可い。

本多爺と北川とは、此の小說の人物中、最も現實的存在らしき匂ひのする人物である。北川の星たることは既に前に述べた。本多爺は何人ぞ、私はまだこの人に相當する政治家的人物を考へ得ないが、種々の點を綜合するに、本多

翁の言動は頗る板垣退助伯に似てゐるところがある。殊に自由黨時代の板垣に非常に似てゐる。だからといつて本多翁をもつて直ちに板垣とすることは無論出來ぬが、東洋社會黨對急進社會黨の關係が明治十五年當時の改進黨對自由黨の關係と酷似してゐるのに鑑み（恐らく久松氏はこの關係を頭に置きつゝ筆を執つたものであらう）、本多翁の立場は當年の自由黨總理板垣の立場と同じことである。たゞ本多翁の個人的經歷その他は、大方これに當る人物が別にあるに違ひない、恐らく久松氏の父久松操軒の如きがそれではなかつたらうかと推察される。

本多竹子がシャルロット・コルデイをモデルとしたことは、北川を刺す前後の事情が悉くコルデイがマラーを刺すに至るときのそれを丸寫しにしてある點から見て、多言を要しまい。久松氏は西洋史、殊にフランス革命史については特別な造詣をもつてゐた筈である。

以上の如く、久松義典氏の『東洋社會黨』は、文學的價値からいへば、格別取り立てゝいふ程のものはないが、政治小說發展の歷史からいへば、政治小說と社會小說乃至社會主義小說とを連鎖する受渡點に立つものとして、相當重大な意義をもつものたることは、上記の槩說によつて略ぼ明瞭に結論されると思ふ。而してその含む社會主義的思想は、改進黨的イデオロギイの變形たる國家社會主義であつて、社會小說乃至社會主義小說（木下尙江の諸著作の如き）の民主的社會主義とは種を異にしてゐることも注意されて然るべきところである。民主的社會主義が自由黨に思想的脈系を牽くことは、幸德秋水の存在によつても知り得る。この邊の社會思想の相違、對立、その他の吟味は、此の書の研究の範圍外に屬するし、且つ專門的知識をもたぬ私が敢て爲し能はぬところであるが、社會主義思想勃興の時代に入つても、自由改進兩黨の爭ひと同じ相剋が今なほ繰返されつゝあつたことは、この點からして想像され得る。

久松義典の名を知る人が少ない點、而かも政治小說家としての史的位地の比較的重大である點を考へて、私は、わ

ざと知りつゝ長々と彼のことを說いて來た。然しもう此の邊で、讀者も久松の何人かといふこと、彼の業績（といふのも大袈裟であるが）、その歷史的位地などについて、可成り詳しい知識をもたれたに違ひないと思はれるので、ここで筆を他章に移さう。

矢野龍溪『浮城物語』について

一

『龍溪矢野文雄君傳』は、勿論その第八篇に於いて『浮城物語』について語つてはゐるが、『經國美談』に比して頗る粗略を覺えしめる。然し私は『浮城』は、その出現の意義及び讀者への感化の點で、決して『經國美談』と甚しい徑庭がなかつたものと信ずるので、これを特別に抽出して聊か詳しく語ることにする。

『浮城物語』の單行は明治二十三年四月十六日であるが、『浮城』云々は原名ではない。原名は『報知異聞』といひ、此の年一月十六日から龍溪主宰の郵便報知新聞に掲載され、三月十九日第六十三回を以て一段落となつたものである。卽ち單行本『浮城』の報知異聞といふ角書は、原名を標示したものである。その『浮城』は卽ち浮べる城、Floating Castle で、軍艦を意味するものたるはいふまでもない。此の表題だけで既にこの小說の內容の海軍乃至海事に關係するものたることが推察される。

此の小說の發表されたのは、今いふ通り二十三年であるが、龍溪が此の種の小說を書かうと案を立てたのは、相當早いらしい。私は、『經國美談』の直後、龍溪の頭には既にさういふ案が浮び始めてゐたのではないかと思ふが、これは然し確たる證據のないことであり、從つて漫に力說を許さない、然し幾歩か讓つても、龍溪がその洋行中にこの小說の腹藁をつけたといふことは、先づ確實と見て可からう。この作に對する森田思軒の序に――

曩に偕に合衆國を過れるとき一夕旅窓に對坐す先生俄かに啞然として獨り笑ふ既にして余に向ひ頃來偶ま一小說を

思ひ得たり其の大都に云々今此の人物が足を失して甲板の上に滾轉するの狀を想像し自らおかしさに堪えずといへり是著の由て來るも亦た已に久しと謂ふべし

とあるので、それが知られる。蓋し龍溪が歐米漫遊の當時に觀察したるところをもつて海國日本民族將來の運命を照破し、言ふべからざる感慨の胸中に鬱勃たるに至つて次第にこの小說と凝結したものと見て可いであらう。思軒が同じ序に於いて——

彼の太西太平二海に連なる淼漫の水と亞米利加大野に群處せる黑白黃諸色雜種の氓とは豈先生當時の頭腦に觸れたるもの無しと爲さんや

といつてゐるのは、その實を獲てゐるかと思ふ。龍溪の腹藁が大體この時に定まつたとせば、これは丁度明治十九年のことである。されば、この腹藁が實際具現されるまでに、實に足かけ四年乃至五年を要した。これは一に龍溪の政治生活の多忙によるものであらうが、由來龍溪の仕事は、その文學上なると否とを問はず、時人に一步なり數步なり先行するのを常とするに、たゞこの小說『浮城物語』に於いては、時機に後れたりとはいはれぬまでも、却て時機に促されて出現したかの外見を示してゐるのは、腹藁から出產までの時間がかく長過ぎたからに外ならぬ。而して『浮城』が今日『經國美談』程に重視されてゐないやうに思はれるのは、矢張りこの邊に理由がある、即ち一は時機に先立つて時運を作つた、一は時機に先立つて生れる筈が生れ損なつて時運に促がされた形になつた、といふ點である。若し『浮城』が明治十九年腹藁の當時、直に發表される機會を惠まれたならば、恐らく『經國美談』以上の傑作と騷がれて、爾後續出した南洋進出の小說は、皆この『浮城物語』の模倣と見做されたであらう。

二

『浮城物語』を著した趣意に至つては、吾等は直接龍溪の自序に聞くことが出來る。

野史小說の要は人を悅ばしむるに在り、憂る者は之を樂しましめ、窮する者は之を達せしめ、悶を遣り鬱を洩らさしむれば、讀者乃ち悅ぶ、堅艦巨礮向ふ所前無く、雄略壯圖異域に横行し、理科學術世人の未だ爲し能はざる所を爲し、遠航貿易遺利を海外に收む、是れ此書の記する所なり、邦人若し之を讀で而て大に悅ばゝ其の悶鬱の在る所亦た知るべきのみ

昔し奈勃烈翁第一世帝の時、白耳義の畫工某、帝が地獄に墮落して群鬼に呵責せらるゝの圖を畫く、蓋し其國、地小に民少く、常に佛兵に凌虐せらるゝを憤り、悶鬱の遣洩する所、發して此畫と爲る、後人今に至て其志を憫れむ、若し後の此書を讀む者をして著者の志を憫れむを此の如きに至らしめば勝て慨す可けんや唯我が國勢、日に隆運に向ふ、決して此の如きの事なきを信ずるのみ

此の序は如何にも序の體を得て、含蓄が深い。先づ第一に小說の目的なるものを暗示してゐるが、龍溪の場合、小說の目的は、國民が憧憬しつゝも實際の世界に於いて具現し得ない理想的滿足を、空想の世界を假りて實現して見せるにある。これは『經國美談』の序に見える小說觀の自然の生長乃至延長であるが、彼の『小說神髓』によつて十分に宣言されたいはゆる寫實文學に對して對蹠的關係を執るもので、前にのべた須藤南翠の大衆小說論に近く、而かも南翠のものより一層簡明に確信的に大膽な態度をもつて語られてゐる。龍溪の小說觀については、次に增補的に追記することゝして、第二に此の序を讀んで推察されることは、當時の日本帝國の國際的地位である。東洋に於ける列强の勢力分布が略ぼ定まつてゐる此の頃、新に列强の半殖民的扱ひを脫した後進獨立國として先進强國に遠慮し勝ちに國權を伸張し市場を開拓して行かなくてはならぬ日本帝國上下の苦心焦慮が實によく此の序にも、又本文中の所々にも反映されてゐる。第三には、從つてかゝる時機に際してかゝる位地にある日本國民の抱懷せざるを得ぬ虹の如き理想

乃至希望が、こゝに暗示されてゐる。この序を玩味してから本文を讀むと、當時の日本が大に伸びんとして而かも列强に對する遠慮からそれも思ふまゝに出來ず、上下鬱々悶々として大に焦躁してゐる氣持を緩和し、且つ國民の努力と機會の如何によつては他日かゝる發展伸張の日も實現されやうから斷じて失望せず一層奮勵努力せよといふ獎誡の意から、この小說が書かれたことがよく分からう。『浮城物語』の眞意はこの自叙でよくわかるが、更にこの自序と表裏して此の小說の立案に關して今少し詳く語つてゐる文獻が一つある、それは明治二十三年六月、文學會の例會で龍溪が試みた演說の筆記で、『浮城物語立案の始末』と題するもの（六月二十八日以下國民新聞所載）である。龍溪は例通りの用心深い態度で、先づ一々原則論で念を押して、『浮城物語』の立案に說き及び、前後數項目に及んでゐる。

第一は小說本體論である。龍溪は小說の本體についてかう觀察してゐる。

小說の本體と妙處とは人々好惡に因て各々所見を異にすること恰も猶ほ不規則なる山形に對して縱より眺むるを好むと橫より眺むるを好む者とあるが如し小說の種類は千萬なり其味を異にすること千萬なり人の之に對して其の好みを同くせざること亦た猶ほ千百の食味に對して其の好みを同くせざるが如し然れども小說は斯くあるべき者たるの本體を括言するは左して難事に非らず余は彼の有名なる文學家ワルテル・スコット氏が小說は「不善ならぬ娛樂を世人に與ふるものなり」との語を以て當れりとせん事實を其儘に記載すれば小說に非ず歷史なり風教を主として娛樂を與へざれば小說に非ず道德書なり世にあり得べき事柄を湊合して世に有ることなき物語を組立て世人に娛樂を與ふるもの是れ小說の本色のみ故に小說は讀者を樂ましむるの多少を以てその優劣とす然れども娛樂を與ふと與に淫思を長ぜしめ忍心を增さしむるの類は娛樂の上に「不善」なる形容詞を冠するが故に又小說の本體本色を失するものとす

從つて『浮城物語』は「不善ならぬ娛樂」を多大に與へることを第一の主旨とする。然しながら「讀者に娛樂を與ふ

るは小説の正産物」ではあるが、そこには自ら副産物といふものがある。「世を矯め俗を激し人を戒め時を諷するは」是れその副産物である。例へば「無烟炭を造るに炭塊の外更に炭油を得る」が如きものである。『浮城物語』と此の副産物の關係は如何。

> 余は是等の事に於て性來甚だ多慾なり成べく多量の副産物を攫まんと欲す浮城物語の立案に於ける又た亦た然り世人に娯樂を與ふること他人の小説に劣らざるのみならず其の副産物を生ずることも亦た他人の小説より幾層倍の多量ならんことを望めり

則ち「正産物」の多大なることを謀ると同時に成るべく多量の「副産物」を得やうとする、これが『浮城』の立案者の第一の志である。では立案者のいふ「副産物」とは何をいふか。

> 日本の盛衰存亡は常に外より來るを知らしめ遠航貿易の務めざる可からざることを知らしめ海外の風土、人情、物産を知らしめ現世紀の兵器は理科學の所産なるを知らしめ理科學の貴むべきを知らしめ偉人傑士の風采を想望せしむる等は則ち皆な余の望む所の副産物の中に在り

此の所謂「余の望む所の副産物」を自叙中に述べられた著述の趣意と對比すると、龍溪の眼光が奈邊に注いでゐたかが、益々明瞭になる。龍溪が當時の日本及び日本人に對して何を望み、何を勸め、何を教へ、何を奬ましてゐたかが、一層よく裏書きされる。

龍溪の言によると、『浮城物語』も、最初は『經國美談』の故智に傚つて、歷史上の人物を借りて立案された。彼が驅使しようと腹藁したのは、山田仁左衛門長政と天竺徳兵衛の二人で、時代を徳川の初期にして日本人の海外發展の盛事を描かうとしたのである。ところが、よく考へてみると、これは主目的たる「娯樂」を與へる方では遺憾がないかも知れないが、副目的なる諷諭、教誡の方では十分に行かぬ恐れがある。第一これでは今日世界の兵器、物産、及

び列國の形勢を知らしめる方法がつかない。それで起稿の間際になつて、俄に改めて近時の人物に變つたものであるといふ。

以上は同じ立案といふうちでも、著作の根本態度を述べたもので、『浮城』の趣意に關連し、特に密接に自叙の文と表裏するところがあるが、以下は主として、立案の際に以上の根本態度から割出して、これを最も有效に實現せしめるために龍溪の取つた技術的工夫に關連してゐる。

龍溪は言ふ、小說の領分は、本來甚だ廣い、「一方に兒女の態を穿つ者あれば一方には偉人傑士の心事を寫し出すものあり一方禽鳥魚介の細を說くものあれば一方には天地山川の大を說くものあり」といふわけで、甚だ廣いのである。然るに此の小說の領分といふことについて大きな誤解が行はれてゐる。

我國近來の小說界は構思深邃益す／＼微に入り妙に入らんとす文運の進歩實に此時を以て始めとすべし然るに惜む所のものは其の種類概ね人情ものに限るが如し是に於てか世の知らざるもの或は之を以て小說界の領分既に此處に盡くと爲し（中略）廣大無邊なる小說界を目して手狹なる菜園と誤想し小說とさへ聞けば男女の情を寫すに止り快潤壯大なる娛樂をば到底此界に望み難き者なるが如く考ふ遺憾と謂はざる可けんや

小說の領分を以て人情一點張りとするのは、大きな誤解である。龍溪は、此の故に『浮城物語』の立案に當つてこの誤解を打破しようと試みた。

小說界の領分は北、氷海に始りて南、赤道直下に至る今の小說の種類皆其歸を同くするを以て世人は唯だ北極氷塊の地是小說の領分なりと思ふに似たり此に於て乎余は全く其趣向を一轉し赤道直下に向つて銅標を建て世人をして小說の領分の廣大無邊茫漾涯涘なきを知らしめんと考へたり是れ獨り余に於て快心の事なるのみならず蓋し亦た小說界に向て忠義を盡す所以なり

小說界に向つて忠義を盡す所以であるか何うかは兎もかくとして、かゝる試みが、此の當時の小說界――人情世態の描寫のみを本旨とした『小說神髓』直傳の文壇文學、インテリ文學――に對して殆んど革命的な爆發であることは確かだ。それは所謂人情世態小說が寫實的技術を生命とするに對し、龍溪のいふ如き、小說の領分擴大の試みは、無限の想像的手段に訴へなくてはならぬからである。

次は描寫の手法の問題である。龍溪はいふ、文學の技術は猶ほ繪畫の技術と似てゐる、「繪畫の韻致は畫題に依て同じからず富貴の韻致を主とするあり荒凉の韻致を主とするあり婉柔の韻致壯剛の韻致皆各々題と相ひ稱ふを要す」從つて佳人を畫くに嬌態嫣然衣に堪へざるが如く人をして馴れ親むの情を發せしむ之を術の至れるものとし猛者を畫くには雄偉健快人をして向ひ近く可からざる思ひあらしむ之を術の至れるものとす。」文學家の描寫の手法も亦これに則らなくてはならぬ。「兒女の情を寫すに當ては情思纒綿柔婉可憐の態を漲溢せしめ偉人傑士絕大の事業を寫し出だすに當ては快濶壯大豪宕落々の趣を躍如たらしむるを要す」といふことになる。而して此の後者が即ち『浮城物語』の目指すところであつた。

余の浮城物語は最初より兒女の情を寫すが爲めにせし者に非ずして偏に偉人傑士の風神態度を寫出ださんと期するに在り、知らず果して能く讀者をして快と呼び壯と呼ばしむに足るや否や余の心配する所は此の一事に在り若し此著を目して人情ものゝ趣きなしとするものあらば是れ猛者の畫に望むに佳人の態を以てするものなり豈に兩者の韻致本來別趣の者たるを知らんや

即ち『浮城物語』は、その描寫の手法に於いて所謂文壇小說に對立して來る。勿論かういふ對立はその描寫の對象の相違から來る自然の結果でもあるが、龍溪の場合には意識的に對立させてゐる、そこに大に意義があるのである。

龍溪が次に留意したのは、「事柄の壯快なると優美なるとを問はず之を寫すには須らく極微極密なるべきや否や」と

云ふ問題である。これに對して龍溪は、かういふ解決を與へた、曰く「余は我國今日の文學界は精粗繁簡の中を得たるもの最も適當なるの時代と考へたり」云々。その理由にいふ。

> 西洋の文は極めて密東洋の文は極めて粗是れ爭ひ難き東西の相違なり我が國人は長く此の粗文字に慣れて未だ西洋の密文字に慣れず今や漸く將さに粗より密に入らんとするの時に在り若し時好に投ずるの文字を作らんと欲する者あらば亦た粗密の中間に立たざる可からざるの勢あり

以上は我が國文壇の現勢に卽して論ずるもの、更に論歩を一轉して人文の進歩上からいふ――

> 西洋文運の進歩も其跡を推せば亦た粗より密に入りし者たり文字地を拂ひし中世の暗黑時代より卒然一躍して今日の密境に進みしには非るなり（中略）然る所以のものは他なし人心の進歩は積累の致す所なればなり

そこで次の斷案となるわけだ。

> 我國にて久く西書に陳籍する者こそ稍や西洋緻密文字の味を嘗め始めたりと雖も多數たる世人は未だ決して然るに非るなり此時に當て卒然と西書に劣らざる緻密文字を提出せば讀者の厭倦を來たさゞるもの幾んど希なり故に余は浮城物語の事柄の濶大なるに相當して精粗中間の文字を用ゆるを利ありと考へたりき

この粗密の中間とは漠然たる語であるが、從來の東洋小說の描寫よりは精密に、西洋小說に比すればやゝ粗にといふことである。これはつまり中庸を得るとか中庸を尊ぶとかいふことになるが、此の特色は、たゞに當時の文學世界の現狀が必要としてゐたからばかりでなく、著者龍溪の性格、秩序を重んじ、中道を貴ぶといふ性格から來てゐる點も多からう。

描寫の文章の問題の次には、その文章の語調の問題である。此の當時の文學界には「徒然草體の語調あり馬琴體の語調あり漢文崩しの語調あり西書譯文體の語調あり、何と云ひ何といふ其他種々の語調」がある、その中で如何なる

ものを用ふべきか、といふ問題である。これは然し當然『浮城物語』の性質によつて決定されなければならぬ。然るに『浮城物語』は本と事柄の豪宕なるを主とする小說である。豪宕激揚の場合に相當するのは、漢語調に若くはない。語勢が潔簡で餘音を存する爲めだ。『浮城』の內容に對すれば、徒然草調も緩漫であり、馬琴躰も纖弱であり、西書直譯體も勢ひが拔ける氣がする。そこで龍溪は寧ろ漢文崩しの語調を主とせんと決心した。勿論さうはいつても、此の文體のみを後生大事に守るのではない「或る場合には馬琴調を用ひ或る場合には直譯體を用ひ縱橫自在に使用して胸中敢て拘泥する所」がない。唯だ讀過の際に木に竹を繼いだやうに見えなければいゝとした。一つには當時は主として新聞體の漢語調がまだまだ勢力をもつてゐる時代であるから、かういふ語調を用ゐてもさう異樣には見えなからうと考へたからでもある。こゝで文例を引いて置く方がよからう。

我が浮城が第二艦を乘り拔け來て一二分を經さる內早く敵の中央旗艦と八町以內に行違ふ、彼れ早く巨砲を發し斜に我か前檣を擊折りたり、綜理聲を勵まして曰く「一齊打發」と萩氏聲に應じて船首の十二寸砲を轟發す、距離甚た近きに加るに氏の妙手を以てす、猛烈無比の雷藥を盛りし大尖彈、正に彼が水面上の機關室を打貫て爆發す、我船舷五寸砲二門、亦た同時に着發す、霹靂風砲亦た同時一彈を發す、此の恐るべき大爆裂彈、敵艦の後檣中檣の間なる甲板上に落つると見へしが、一聲の轟響、忽ち落雷の如く前檣後檣を合せて一齊大木を倒すが如く顚倒す、敵艦中遂に叫喚の聲を聞く、我船尾の十二寸砲、二三十秒を後れて亦た一彈を發す、敵艦の手前三十間餘の海面に達着し、海水を漣蹴して敵艦の中腹水際の邊に着發せり此の發砲此の戰鬪は只た是れ一呼吸四五十セコンドの間に起る、我が十二寸砲、五寸砲發射の響、是等諸砲の彈丸及び風砲大爆裂彈の破裂する響きに加ふるに又た敵艦の大砲發射彈丸着發の響を以てす、實に是れ山鳴り海答へ天震ひ地轟く、蛇波(ジャバ)洋底幾十尋の下に在る魚族も遠く四五十里の外に逃散せん（第四十五回）

これで大體の調子が知られるであらう。

龍溪は更に『浮城物語』がかゝる立案をなさしめるに至つた理由の二三を説明してゐるが、その一つに於て、當時の日本小説界と讀者との關係を根據としてゐる。龍溪の立場はいはゞ讀者重視論である。この點は注目させるものがある。

龍溪は重ねて小説には讀者を倦ましめず樂しましめることの必要なことを想起させて、さてそのために内容の布置、叙述の繁簡等、讀者から制限をうける點とを論じ、作家の最大苦心は「如何にせば一回又た一回と讀者を惹し導くべき乎」に在るので「浮城物語の如きも若し自己一家の好みを云はゞ今少し長く書きたし密に書きたしと思ふ底甚だ多かりしが斯くては讀者の機嫌を損ぜんかと省略の上にも省略を加る傾きとはなれり」と語つてゐる。これで見ても龍溪に、作家は讀者に從ふもの、讀者は作家を制作するものといふ思想があることが明白である。龍溪は更に進んで、この讀者尊重論の立場を今少し詳く説明してゐる。

小説は廣き世人を相手とす小説の優劣を鑑定するものは世上の讀者なり作家の本意も亦た敢て一二の人を相手となすにあらず文學世界の數寄者のみに悦ばれんとするに非らず後世に知己を待つにもあらず唯だ現世の讀者に娯樂を與へんと欲するのみ余の著の如く今日眼前に可成多量の副産物を攫まんと欲するものに在ては最も然らざるを得ず固く所執を守て知己を千歳に待たばいざ知らず現時の讀者に悦びられて其の所期を果さんと欲するものは皆此の如くならざるを得ざるべし其著一たび世に出でて當時を傾動するものすら猶ほ百年の後に傳はらざらんことを恐る況んや現世に悦びられずして焉んぞ能く知己を千歳に待つを得ん人事の進歩は近世に至て最も驚くに堪へたり世間の事物二三十年にして一變せざるものは殆んど稀れに小説中の事柄も亦た忽ち陳となり腐となる近く一例を擧げたゞば封建時代に人心を感動せしこと無類と稱せらるゝ忠臣藏の芝居さへも郡縣時代の今日となれば最早や大に其の感動

を滅ぜしむ世事の變遷則ち然らしむるのみ是れ吾人の旣に實驗する處現時に悅びらるゝもの必しも後世に悅びらるるを期す可らず況んや現時に悅びられずして其書の湮滅せざらんことを望むとも難いかな

實に大膽に讀者尊重論（といふよりも讀者第一論）を主張したものであるが、これは、考へてみると、前の小說本質論からの自然の歸結であり、たゞそれを特別の問題として取り上げて、詳しく所信を示したに過ぎない。從つて又、その小說本質論が當時の寫實文學第一の文壇小說と對蹠的立場に立たざるを得ないと同樣に、此の讀者第一主義も、當時の文壇小說家の考へ方とは全く對蹠的になつてゐる。當時の文壇小說は多少とも『小說神髓』の脈を引いたもので、世態人情の描寫といふその描寫を小說の本質とし、從つて讀者に娛樂を與へるとか、讀者の悅ぶやうに作をするとかいふことは考へず、作家が主で讀者が從、讀者は何でも作家の描寫したものをそのまゝに受け入れなければならぬとした。從つてその所謂小說は本質上非大衆的、最高知識階級的に局限されて、大衆の人氣の如きは問題とされず、却てかゝる人氣はその作の卑俗性を示すものだといふやうな考へをもつてゐる批評家が多かつた。かういふ小說家や批評家の考へが殆んど定則となつてゐる當時の文學社會で、今のやうな讀者第一主義を公表することは、たとひ無意識にせよ、文壇人に對する一種の挑戰といつてもいゝ大膽なものであつた。文壇側でも此の挑戰に應じた、應じたといふよりも寧ろこれを異端邪道視して克服する如き態度をとつた。その文壇側の態度については後に語ることにする。

上の龍溪の言で今一つ重視すべきは、作品の評價が時代と共に流動することを指摘してある點である。これは龍溪がさう確信をもつて主張してゐるといふ程ではなく、偶然に論及した形になつてゐるので、今こゝでこれを取り上げて詳しく論ずることは避けるが、兎もかくもかゝる見方は、龍溪の頭腦眼識の卓拔を語る一證だといつて可からう。

では如何にして讀者を悅ばしむべきか。龍溪によると、時代の必要上、そこに西洋流と日本流の別がなくてはなら

ぬ。西洋の小說は汗牛充棟精粗大小穿ち盡して殆んど餘地あることなく其讀者は百味の珍膳に飽く者の如し此時に當て勝を制するの道は最好味なる一片の煉羊羹を與ふるに在り

比喩は少々可笑しいが、意味するところは、西洋では小說が十分發達してゐるから、讀者を滿足させやうとしても容易でない、十分に骨折つて立派な作品を作らなければ、かういふ訓練された讀者を悅ばせることは出來ない。これが卽ち西洋流である。然るに日本の讀書社會の事情は違ふ。

日本の小說界は大に之に反す西洋の譯書すらも未だ甚だ多からず況んや新作ものも亦た甚だ寥々たるをや我國の讀者は恰も空腹饑腸の時に在る者なり此際に於て手近く勝を得るの道は一盆の牡丹餅を提出するに利ありとす若し他日小說の出ること月に年に多きを加へ讀者の口腹既に百味に飽く時に至らば其節こそ一片の煉羊羹を好むの時代とならん

日本の小說讀者は西洋の讀者と違ふ、西洋流からいへば隨分粗造といはれるものでも、日本の讀者なら十分これで滿足させることが出來る。僅に精妙巧選の練り上げた小さな作品を與へようと努むるよりも、先づ粗大粗造のものを與へ、早く讀者の滿足を買ふて、收穫を納むべきである。然るに文壇者流は急に西洋流の作品を與へようとのみかゝつてゐるが、これは全然讀者心理と讀書社會の現狀を度外視したものといはなければならぬ。

我が小說界は恰も亞非利加の大野に似たり東西幾千里到處空地なきはなし何れを擇むも耒鋤下さず斧斤入らず渺渺々たる無人の境なり此地に入る者一人の勞を以て最多量の穀物を得んと欲せば百萬「ニークル」にても二百萬「エークル」にても占め得らるゝ丈けの大野を占領し畦畝を起さず肥料を施さず其侭に播種して馬耕法を用ゐ麥種をばら蒔きと爲し大饗宴の備を爲すに在り若し夫れ舊邦故國は則ち然らず生齒既に繁く山林川澤尺寸の地も皆有主既に定て復た餘田あることなし此地に入るときは其耕作法亦た自ら趣を別にす一尺にても二尺にても手に入るだ

けの地面を切取り之を耕すにも亦た花壇の如く一株の稲も珍卉名花を養ふと同様にすべし其の面積の小なる割合にすれば他に比して必ず多量の收穫を得ん是れ亦た變に應じ宜に處するの道なり西洋の小說界は後者に譬ふ可く日本の小說界は前者に譬ふ可し平原渺茫眼界猶ほ空地多し寧ろ其の結構を大にせらるゝだけ大にし務めて多量の收穫を得べきのみ

此の一段も比喩が何やらぴたりとせぬやうに覺え、異論を容れる餘地のあることは勿論だが、大意を汲めば、龍溪の意のあるところが分からなくない。卽ち當時の寫實的文壇文學は概して一部の數寄者乃至玄人讀者の喜ぶものゝ製作を本旨とし、結構の細密描寫の精徴、心理の分析、表現の新奇、といふやうな事を專ら志してゐるが、これは西洋の小說界の流行をそのまゝ取り入れたので、日本の小說界の現狀には合はぬ、以上の如き諸條件はまだ大衆的讀者のよく理解するところではないから、小說をもつて大衆的讀者にアッピールして絕大の效果を收めようとするなら、先づ結構の壯大、變化の奇幻等、大衆的讀者も直に理解の出來るやうな條件を備へたものを第一に製作しなくてはならぬ、といふのである。かゝる立場からして循環的に、『浮城物語』はそれ故にあの如き結構をもつたものにしたのだといふ說明が出て來ることは、いふまでもあるまい。龍溪の意見及び『浮城物語』の立案條件は、凡てに於て大衆文學を目指してゐる點は、注目すべきである。『浮城物語』立案の理由として、これが新聞小說だといふことを擧げてゐる。新聞紙上、小說欄を別にすると、「全紙面の記事は皆騷々しき其日々々の出來事ならざるはなく何れを顧みるも皆切たり張たりの修羅場」である。此の修羅場の隣りに小說の別天地を現出しようとするのだ、「一方は熱の極、一方は靜の極」で、隨分調子の合ひ難いものがある。譬へてみると、「四面皆な鼕々たる軍樂の間に立ちて低調なる一中節を語り人耳に徹せしめんと勉るに似たり」である。その難澁知るべきのみ。「故に從來の經驗に徵するに結構の大なる小說ほど其の調子に見榮あり局面の小なる者ほど其の調子に見榮なし是れ亦た勢の免れざる所」、そこで此の『浮城物

語』は成る可く新聞紙と其の調子を協へしめようと心懸けた、といふのである。これは當時の大新聞なるものゝ空氣を多少とも知つてゐる人々には如何にも尤もだと首肯されるであらう。

かくて龍溪は、『浮城物語』立案の始末を先づ總結する、曰く——

前記する種々の理由より浮城物語の本幹は豪宕拓落を主として一個常情の人を畫出して主人公とし其傳に偉人奇士の神采態度をちら〳〵と隱見せしめて此の常情の人と相ひ反照せしめんと企てたり小說の主人公には異情なる人物多し（非常なる善人非常なる惡人の類）然ども浮城物語の主人公は言語動作皆て常情の外を出でず悦ぶべき時は乃ち悦び恐るべき時は乃ち恐れ逃ぐべき時は乃ち逃げ進むべき時は乃ち進むのみ而して一方には非凡なる奇士を畫き出して之を相掩映せしむ是れ聊か異を求めたるの一事なり云々

此の總結によつて『浮城物語』の小說的特色が更に明瞭にされてゐるのだが、それは、『浮城』は文壇小說に逆行して結構の壯大を目指すとはいつても、決してたゞ東洋流、馬琴流の古いロマンスに還らうといふのが目的ではなく、時代に應じた近代的新小說として立つ技術上の用意は十分もつてゐたので、例へば右の主人公の點出に關する考慮でそれが明示されてゐる。畢竟、『浮城物語』は、技術上からは、秩序的進歩を尊ぶ龍溪の頭腦が、社會の必要と小說界の進歩を顧慮して調和的に立案工夫した大衆小說だといへば、一番恰好してゐるであらう。

さて以上のやうな立案に於ける用意が、何のやうに實現されたか、それを吟味は後廻しとし、研究の題目たる此の小說の梗概と、この小說に盛られた龍溪の政治思想（廣義について）とを說かなければならぬ。

三

此の小說の發端は、龍溪によると、明治十一年の頃から始まるものであるといふが、第四回の末に「時方に三月初

句」云々の句があるところから見て、明治十一年三月頃から以後數ケ月間に亘る出來事と想定して可い。

緒言に主人公上井淸太郎の出身について眞實らしく述べてあるが、主人公の生地といふ神井が龍溪の生地佐伯の近くの海岸にあるといふことだけは事實で、上井某は全く龍溪の創作であるに違ひない。凡て『浮城』の緒言は、『嘉坡通信・報知叢談』の緒言の構想と大に似たものがある。かういふところは、所謂英雄欺ㇾ人くもので政治家龍溪らしい面目がもう躍如と出てゐる。

それにしても、龍溪が主人公上井の手から間接に得たといふ原書は「日記」の類であつて「總て本人の自叙傳を用ひ」「書中『余』と稱するのは上井淸太郎自家を指すもの」云々とあるから、先づ上井の身上から語らう。上井が笈を負て坂神方面へ遊學したのは、明治五年頃、十六七歳の時であるといふが、その以後明治十一年まで約六年間何をしてゐたか、それは上井自身が簡短に要約して語つてゐる。

最初は相應の學資を帶びたれども惡友に誘はれて遊蕩の爲めに過半を浪費し盡したり夫より後は頗ふる困窮して前非を悔ひ神戸なる外國宣教師の家に寄食し小使を勤めて專ら語學を修め且つ暇ある節には漢學をも學びたり然れども其教師が歸國せし後は又大阪なる他の宣教師に使はれ三年の間節儉して小遣錢を貯蓄して稍く百圓の高に上りしかば此より東京に出て身を立るの計を爲さんと横濱に着せり云々

ところが横濱の汽船問屋に一泊した際その虎の子の百圓（正味は九十二圓餘）を盜賊に仕てやられてしまつた。それで折角の東京入りも頗る悄然たるものとなつたが、測らず汽車の中で革嚢（かばん）を取り違へ、正直にも我身に引くらべて中身の金子三百圓を返却するために、横濱のグランドホテルを訪れて、作良義文、立花勝武といふ青年冒險家に面會する。それが此の物語の發端である。

發端以後は、一切上井の見聞日記といふ體で物語が進められてゐるが、この上井が、龍溪の案の如く極めて平凡な

性格の人間に出來て居り、この物語中の役割も大したものではないので、こゝで上井と手を分ち梗概を語る際には、上井を介して語ることをやめ、事件中心で進めて行かう。

此の小說では發端が忽ち事件の始まりとなつてゐる。作良、立花の如き英雄の身上の如きさへ、殆んど何等の說明もなく、いきなり海王丸の日本出發となる。

十一年三月、東京灣を出發した一行の冒險事業船海王丸は、先づグリーガン群島中の無人島に數週間碇泊し、この島で大飛躍の準備を始める。こゝで統領作良は一行の冒險事業の目的及び場所を說明して先づ一行の覺悟を新にする。さうして一行の大事業の豫程を定め、各人の部署を決定し、一行の訓練、武器の手入れ、新式武器の工夫等をする。かくて數週日の後、海王丸は豫程の如く香港に向ひ、こゝで不足の材料を積み込んで、いよいよ準備が完了する。それで土人相手の貿易を試むべく、先づボルネオに向ふ。ボルネオ、ブルニー地方のラポアン灣沿岸で第一回の交易をやる、さうして交易に大利を得るが、土人の狡計に陷り、夜危く海王丸を燒拂はれんとする。だが大砲の威力で漸く逃れ、翌日大に土人村落で復讐する。一行は海王丸の損傷を修理するため、交易巡航を見合せて適當な投錨地を探してゐるうち、南海地方の名物海賊船と出會ふ。海賊船とはいへ、この船は英國某造船所から支那政府へ引渡しの途中、海賊の手に落ちたものであり、尋常の船舶ではなく、立派な新造軍艦である。普通に戰つては木造船たる海王丸などの敵對出來るものではない。海王丸はその快速力を利用して、賊船の攻撃を逃れる。さうして一旦安全地帶に避難しつゝ、大膽にも此の賊船を我が有とする策を練る。策が決するや、今度は猛然と賊船を逆襲し、一擧にしてこの堅艦を分捕してしまふ。さうしてこれを『浮城艦』と改號し、この方を一行の母艦とし海王丸を副とする、浮城には加ふるに賊の遺留した金財が數十萬弗ある。これで一行の意氣が大に昂る。

一行は、捕虜中の白人を上陸せしむるためにバタビヤに入港する。ところが、かねて海賊船の行衞を見張つてゐた

和蘭陀鎭臺は、一行を作の海賊船と誤認し、稅關に談判すべく上陸した士官を抑留した上、浮城及び海王丸を砲擊する。浮城、海王はこれに應戰して能く砲臺を沈默せしめるが、然し士官を取返す手段がつかぬので、一時退去して後圖を計ることになる。さうしてソンバワ島の一大灣に投錨して專ら艦體の修理に當り、傍ら土人との交易に從ふ。

こゝに投錨中、主人公上井の空中冒險のエピソードがある。哨兵(ものみ)の一つとして揚げてゐた大氣球が、上井等を載せたまま綱がきれて漂流してしまつたのだ。かくて上井と一行中の醫師菊川淸の二人が、氣球を破つて漸く下降したが、そこはセレベス島の南部の蠻地であつた。二人はこゝで種々危險な、滑稽な目に遭ふ、始めは奴隷となつて甘蔗圃の栽培をさせられが、菊川は副酋長の腹痛を直したので自由の身になり、ついで上井は老酋長の娘の戀婿となつて、此の蠻族の王位に即く。ところが結婚と即位の祝酒に部落中が踊狂つてゐるうちに、猛惡な隣部落の蠻民に襲擊され、菊川、上井ともに再び鐵鎖に縛られる、それもいゝが、今度は鰐魚狩りの囮とされ、危く大鰐魚の餌食とならうとするところを、搜索隊に助けられる。

此の間、一方では統領たる作良義文が熱帶病たるマラリヤの重症に惱んで一行をハラハラさせるが、それも何うにか癒えて、七月五日、一行はソンバワの大灣を發し、バクビヤ洋からマラツカ海峽に入る。これはこゝを通過する英國船リバープール號を止め、乘客中の和蘭陀領事フレーヘードを捕へ、これとバタビヤ鎭臺に抑留された士官と交換しようといふのである。領事捕虜の一段は、全篇中のヤマの一つであらう。

浮城、海王は再びバタビヤ港に入り、領事の手紙を添へて使者を上陸させ、捕虜交換の策を行はうとする。鎭臺ではその士官が死んだと稱して、遺骸を送り來り、領事を受け取つて歸る。然しこれは彼等の豫定の奸計で、かうして領事を受け取つてから、俄に鎭臺所屬の軍艦を五艘出して、一行を擊滅しようとかゝる。そこで浮城、海王の二艦と和蘭陀艦隊の間にジャバ洋上で壯快な海戰が行はれる。戰鬪數時間の後、蘭艦は敗北し、二艦を走らし、一艦を沈

め、一艦を拿捕する。走つた二艦は海上王英國の戰艦を應援として盛返して來るが、浮城は再び英艦をも走らせる。かくて浮城、海王の威名がジャバ、スマトラの間に大に振つた。

かゝる中にも、密々人を派して鎭臺に抑留されてゐる士官の生死を探らしめたところ、鎭臺の言は噓で、生きてゐることが確實となつた。それで更に新に士官取返しの手段を講ずる。

丁度この頃、ジャバ島には土人叛亂の氣勢があつた。蘭人の暴横なる、土人を搾取して物産上の利を占めるのに飽足せず、遂に正統なる島王の領土を强制買收せんとしたので、大に土人の不滿を買ひ、ジャバ島王の治するソラカルタを中心に、土人が蜂起する形勢となつたのだ。この消息を密使の手で分かつたので、作良は立花と密議し、ソラカルタ、ヨコカルタの二王を助けて和蘭陀鎭臺と一戰し、ジャバ島を獨立せしむる計畫を定めた。

かくて二人は、先づヨコカルタ王に見えて、盛に蘭人の横暴を鳴らし、島王の敵愾心を鼓吹して、遂に擧兵の意を決せしめる。王は軍事一切を作良と立花に委任する。作良は謀主乃至軍師となり、立花は大將軍となつて、日本人一同協力して、急に土兵を組織し、大に和蘭陀鎭臺の精兵と戰ふ。日本軍は最初、機先を制して大に進出するが、軍機の手違ひから鎭臺兵の攻擊が有利になり、一時日本軍の旗色が危くなる。然しユラバヤの血戰で鎭臺兵を徹底的に打ち破つてからは、勝利の鍵を完全に握り、やがては一路バタビヤまで進軍しようとする。この形勢に鎭臺では大に狼狽し、密々二王の側近者に手を廻し、二王を懷柔して鎭臺提出の和議に同意せしめる。それで、バタビヤまで進んで和蘭陀人を放逐しようと意氣込んでゐた日本軍は、二王の意氣地なさに大に悲憤したが、作良、立花の慰撫で漸く和睦に同意し、先の士官を返させ、別に償金百萬を得る。

『浮城物語』の完成せる部分はこれで終る。その大部な割合に、筋立が順序よく、外的事件が主となつてゐるところから梗概を語るにもそれ程勞せずに比較的簡短に出來る。然し龍溪の意圖では、『浮城物語』がこれで完成したのでは

なく、まだまだ發展すべきであつた。それは附言を讀んでも知られやう。

此の小說は第一回小革囊より起て千八百八十三年（明治十七年）馬島の女王バナバロ第三世位に卽き越て二年佛人馬島と和を講する迄凡そ二百回餘に涉るべき筈なり今ま此の第六十三回を以て假に一小段落とす是より以後には兩雄か浮城海王を印度洋に乘出たし種々樣々の珍事奇聞あり或は南極に漾ひ或は南亞非利加の內地に漂泊し或はアビシニヤ、アラビヤ沿岸を歷走し或は南亞米利加に彷徨ふ等其の結構は雄壯偉大兒女の情少く風雲の氣多く人をして一讀快濶ならしむべし

然し惜しいかな、龍溪の腹案は、遂に全部實現するに至らず、龍溪が一小段落と稱した現在のまゝの『浮城物語』が遺されるの止むを得ざるに了つてゐる。

四

さて此の小說の本文では、自序及び立案始末で示された龍溪の理想が、如何に表されてゐるか。本文で特別に龍溪の理想を代表してゐるのは、大統領作良義文である。龍溪がかくかくの場合にはかうかう行動しようといふ意志があると、それがそつくり作良に代表されてゐる。從つて龍溪の理想を具體的に知らんとせば、作良の言行を觀察すれば大抵當れりとする。その意味で、この小說の骨髓ともいふべきものは、第六回大事業から第七回新版圖に亘る作良の大演說である。これはグリーガン群島中の無名孤島に於て、作良が一行の覺悟を新ならしめる爲めに一行今後の行動の豫程を公然と發表したものであるが、その點に於て此の演說はこの小說の結構の骨子を成してゐるものといつていいのは勿論、それと同時にこれは作者龍溪が、作良の口を藉りて述べた煽動演說、日本國民全體に對して海外雄飛を鼓吹する大煽動演說と見ていゝのである。作良卽ち龍溪の大演說は、國際的大舞臺に於ける平等の要求、白人專橫に

對する反感、日本人の積極的海外進出の必要から發端する。これはやがて自序にいふ「雄略壯圖異域に横行し遠航貿易遺利を海外に收む」ることを務めしむる精神であり、言葉にいふ「日本の盛衰存亡は常に外より來るを知らしめ、遠航貿易の務めざる可からざるを知らしめ」る精神であることはいふまでもない。作良曰く、――

某し熟々考ふるに我々已でに此の地球に生れ來りし以上亦た此の全地球を横行するの自由あるべし豈に其の日本に生れたるの故を以て其働きを日本のみに限るべきの理あらんや、况よ我々の眼前に横はる海洋は是れ天の我々をして地球を横行せしむるの道路なり五大洲中何の處か天の我々に蹂躪を許さゝるの地あらん、我々已に此の地球に生れ來れり應さに此の全地球を以て一舞臺とし稀世の大業を成すべきのみ、何ぞ必らずしも日本のみに踞蹐たらん

これが冒頭で、以下種々例を擧げてこの主意を滔々と敷衍してゐる。「稀世の大業」の例としては、コサックの酋長エルマツクのシベリヤ征服、フランシスコ・ピザロウのペリユー侵略が擧げられる。大業は人數の多いのを以て成るのではない。計畫の宜きを得るのと覺悟一つである。「人生朝露の如し假令ひ亞細亞洲の一隅に退縮して黄老養生の道を求むるも豈良く百歳の壽に超んや、骨を埋るの青山は到處に在り、世界何の處か墳墓の地なからん」だ。由來西洋人は地球を以て功名の地と爲し、日本人は自國を以て功名の地とするが、これは痛歎に堪へない。

昔し神后、異域を征すと雖ども其事藐焉たり虚實保すべからず、豐公、師を海外に出だすも亦た寸土を加ふる能はす嗚呼何ぞ古より我が國人の小膽なるや、彼の西洋人種の偉業を立つる者多きを考ふれば日本人は顔色なしと言ふべし、日本千古の英雄中我々の心事を知る者は只だ一個の豐臣公あるのみ、他は是れ奴輩、數ふるに足らず、我々今ま將さに全地球を蹂躪して無人の地を席捲し日本に幾十倍の大版圖を拓て之を陛下に獻じ我々請て其他を鎭せんとす、若し不幸にして日本の國力之を所有するに勝へずんば、我々諸君と與に自ら其他に王たらん

意氣豪爽、人心を快然たらしむるものがある。當時の日本人に對しては、此の作が強調していはぬと刺激の力とならな

かつたかも知れぬ。

彼れ西人は嘗て一兵を置かす唯一竿の國旗を無人の地に建てゝ曰く是れ我か版圖なりと、嘗て一樹を植へす、其海客一たび足を容るゝの地を目して曰く是れ我か領屬なりと何そ其の傍若無人なるや、我々今ま去て無主の地を略し、微弱にして自立する能はざる邦國を征服するも何の不可かあらん、萬國公法は論なり法にあらざるなり若し先取を以て所屬の權利を定むと言はゞ我々は先取すべきの地あり、若し守衛の力以て所有の權利を生すと言はゞ我々の武力以て守るに足るの地あり、諸君夫れ能く我々と死生を共にして此の大業に從ふべき乎、余は諸君の心中實に其の好む所を取らんことを欲す敢て强いざるのみ（下略）

西洋人の傍若無人、日本人の平等要求、如何にも此の通りであり、又無理がないところである。

こゝまでは、作良の演說はその大業を企てる精神を論じたもので、その根底には既記の條件が潜んでゐる。以上更にその大業を實行する方略手段の論である。これが龍溪の特色で、彼はたとひ小說中の事にしろ、荒唐無稽な議論は避けてしない、彼は事業を成す所以を論ずれば更に明白にそれを成す方法を說明してゐる。これは及び難いところだ、殊にその實行方法には、極度の實現可能性が含まれてゐるに於てをや（此の策は明治十一年の當時として立てたもので、二十三年の當時ではないのだから、その心算で讀まなくてはならぬ。）

然らば作良のいふその大業遂行の方略は如何。この頃の海外雄飛策は大抵南洋進出論だが、作良即ち龍溪の方策は同じ南洋進出でも、尋常論者の上を超す雄大なものである。彼はいふ——

前の如く述べ來らば諸君或は謂はん、南洋諸島最とも略有すべきの地多しと、大に然らず、南洋には未開の地なきにあらねども其の所屬既に定て又た動かす可らす今ま之を爭ふも勞して功なし、獨り中央亞非利加の地、尙ほ蒙昧に屬す我々の驥足を伸ふべきもの實に此地に在り然れども之を略有するに次叙あり我々は左の如くせんことを要

す。

「之を略有するに次叙あり」云々の一語、實に龍溪（乃至改進黨的）の秩序的進歩の主義を示し餘蘊なしである。以上を前置として、この空前の大事業、大冒險の豫程に說き及ぶ。「我々の事業に必要にして日本に乏しき材料多し故に一先香港に立寄らん、然して、呂宋、ボルネオ、ジャバ、スマタラの諸島を巡航し我が船中の荷物（昨年西南の亂後に不用となりし兵隊巡査の古服及び古道具類）是等諸島の蠻人に賣渡して其の產物、胡椒、珈琲、香材等を廉價に買取らば茲に莫大の利益を得へし之れを以て更に一隻の新艦を買入れ尙ほ兵備を整へて印度洋に乘出さん、」南洋に出るは出るが、然し南洋をこの終極の活動の大舞臺とするのではなく、先づ南洋で準備行爲を終つた後、印度洋まで出る。それからが本舞臺である。（從ってこの意味では、現存の『浮城物語』は本舞臺に入らずに序の幕だけで中絕したといつても可い。）

印度洋の極南にはグラタセツト、セントパウル、アムステルダム等の諸島あり然れども是等は已に諸國の所屬に歸したり、唯、南緯四十度、東徑六十度、の地に一島あり、昔年一海客此地に至ると雖とも其事秘して傳へす、故に歐洲列國未だ之を知る者少し、余の嘗て西遊するや密に此事を探知せり、故に今諸君と共に先づ此島を取らん、海客の秘記に據るに島の廣さ幾んど我が對馬に同し、我が日本の福島及び仙臺は北緯四十度の間に在り、此島は南緯四十度の間に在り、南緯北緯の異なるありとも同く是れ赤道を距ること四十度、氣候最も日本人に可なり、其の地味亦た磽确ならす是れ豈に天の賜にあらすや、我々諸君と共に先づ此地を以て本據と爲さん、此地や東に航すれば濠洲の諸都府あり、西に航すれば英領喜望峯の繁華あり、南に航すれば印度の大都會あり、貿易の便航海の利、實に天府の地と云ふべし、我々は諸君と與に後來海上の大王たらんことを期す此島は則ち我々の居るべき所、故に之を名けて海王島とせん

皆が手近の南洋南洋といふを聞き流しにして遠く印度洋に根據地を定めようといふ。改進黨といへば何がなし文弱黨

を想像するが、龍溪のこの考へは、たとひ想像上のことにせよ、その雄大さ、文弱の徒の考へつくところではない。

更に海王島占領後の第一手段は如何。

海王島を略有する後ちは夫より馬太加須島（マダカスカル）を取らん、馬島と聞かば諸君は定めて小島の如く思ふべしと雖ども大に然らず、其の面積は二二八、五七〇平方里にして殆んと日本に二倍せり（日本は一四七、六二九平方里のみ）此地は人口三萬の多きに及び地形は亞非利加に接するとも其の人種は亞非利加種に屬せずして馬來種に屬す則ち我が日本人種と大に相似たるものなり、又た其の言語も子音母音の二音を以て成立つの聲多く明かに日本人と其の語原を同くす、又其地は豐饒にして最も米作に可なり現に土人は米を食とす、其他薩摩芋蕉實等を產す、穀食を專らとせし我我には最も便なり、國人三分の一は耶蘇教を奉ずと雖ども他の二分は尙ほ回教なり、是等の事は聊か我々と異なる所ありと雖とも之を占略する上は如何樣にもなるべし（中略）此國は南緯二十度の地に在るを以て日本に比すれば其の氣候頗る熱し此の一事獨り憾むべきのみ然れども其代りには又た木材に富み熱帶地方に限る高價の產物夥し之を我々の有と爲すも決して不足あること無けん

マダガスカル島を占領した後の針路は如何、いよいよ目的のアフリカ内地を侵略しようといふのである。

已に馬島を略有せば夫より手を延て接近せる亞非利加內地を侵略せん馬島に對し亞非利加大陸より海に注ぐ散別（サンベシ）なる大河あり、其長さ數百里に亘る沿河の地最も豐饒なり今や亞非利加大洲の赤道以南は其の所屬、已に定まれり、又た南緯二十度以南には喜望峰の英領あり、トランスバールありナタール等あり然れども其の中間廿度より赤道に至るの間、三百萬平方里に餘る國土（日本に幾十倍するの國土）は未だ定主あることなし是れ天の我々に賜ふ所にあらずや、今や歐洲多事にして露、土の戰ひ僅に終るも創夷未だ癒へず、英國は方にアフガンに事あり、佛國の志はトニスに向ひ、伊太利はトリポリーを窺はんとす、我々が亞非利加內地を略有するの機會、今日に過ぐるものあ

る事なし、若し歳月を遷延せば十年を出でずして中央亜非利加は必ず列國の爭地たらん、是れ我々が本年に於て是の大業を思立ちし所以なり（中略）我々方算の向ふ所即ち此の如し諸君之を熟思せよ（下略）

龍溪は、作良の此の雄大な宣言を遂に發端だけより實現させずに終つたが、たとひ實現されずとも、かゝる宣言は、當時の日本人としては極めて大膽な、世人の惰眠を破るに足るだけのものではあつたらう。

さて先にもいふ如く、これは明治十一年度の計策として聞くべく、二十三年には適應しない。明治十一年の當時、かゝる大理想を建てゝ、この宣言の如き方針を定めて海外に進出したなら、此の小説に於けるが如く成功したらうと龍溪は暗示するのである。前に此の宣言の實現性の事をいつたが、それは明治十一年としての實現性で、考へてみると、二十三年には既にかういふ實現性は歴史的に失はれてゐるわけであらう。それでは如何程雄大でも、空手形の雄大では仕方がないではないかといふ論になるが、それは少し違ふ、元來この宣言の實現性は、宣言そのものゝ感銘を強めるために持たされたもので、宣言の主旨は、海外の飛躍の必要といふに盡きるのである、それで主旨の印象を強めるに役立つ以上、過去に於ける實現性を利用して、現在に悔を遺さしめぬやう試みるのは、無意味なことでなからう。「棒程願へば」といふ諺草があるが、龍溪は、現在の願望を針程でも叶はせてやりたいところから、過去の「棒程」の願望をもち出したものと見て可い。

當時の海外雄飛といふことは、要するに、日本人を代表して海外に進出して白人と競爭することである。これには母國日本の必然（ネッセシティ）といふ觀念も必要であるが、同時に白人の不正横暴といふ觀念、自家の正義侠勇といふ立場も必要である。龍溪はその邊を忘れる漢子ではない。彼は作良立花一行があくまでも日本人の代表として行動するものなることを、一行の旗章問題を中心にあくまで強調してゐる（第九回[illegible]、等々）、日本の現在として必然的に海軍を盛んにし海事思想を大に養成しなくてはならぬことも説してゐる（第四十二回[illegible]、等々）、又東印度諸島に於ける和蘭陀

人の侵略を中心に、白人の東洋人に對する暴虐搾取を論じて、東洋人の無氣力を慨し、日本人が全東洋の爲めに奮起して、正義の力によつて白人放逐、東洋救濟の大業を成し遂げんといふ意味も、勿論所々に籠められてゐるのである（第四十九回日本男子の本分、第六十三回蛟龍豈遂に池中の物ならん、等々）。殊にジャバ洋上に於ける海戰の際、乃至ジャバ土民叛亂の陸戰の際に、對白人競爭意識のありありと出てゐることはこゝでいふまでもなからう。

扨て作良の演説についで重要なものは、第十回大演習、第十一回新發明の條に於ける新武器火藥その他に關する知識である。演習の中喇叭の演習、歩兵操練、射的の試驗までは尋常のものであるが、射的の試驗を重視して「銃戰の勝敗は一に命中の多寡に關す千人の敵兵各々一發を命中し、我が百人皆十發を命中せば衆寡の勢ひ正に相ひ當るに足る、且つ彼れ百ヤルド以內の命中を能くし、我れ百ヤルド以上の命中を能せば我に十倍の强みあり」といつてゐるのは、蓋し龍溪の體驗から割出した卓見である。龍溪は武士の出であり、少時兵士として京都にも出張したことがあり、砲術は殊に嗜む武藝であつた。然し以上はともかく尋常の試驗であるが、以下の所謂新發明に係るものゝ試驗に至つては、龍溪が特に力を入れて叙述してゐる。これによつても彼の烱眼が早晩戰爭なるものゝ科學戰、化學戰、空中戰、海底戰となることを豫想してこの點に讀者の注意を集めようと苦心してゐることが察せられるのである。新發明の一は曰く輕氣球、それも尋常氣球のやうに廣大不器用なものではない「球の大さ僅にタヽミ四疊半計に過ぎず又た通常氣球家の用る如き迂遠なる水素瓦斯等の類を以て緩々悠々と之に充たすにあらず、其法、火吹竹の大さにして長さ二尺計りなる鐵筒に籠むるに一種の漸燒火藥を以てしゴム管を以て此の筒を氣球の口に通ぜしめ、然る後ち筒內の火藥に點火す、然る時は三分間を出でず漸燒火藥より發吐する瓦斯氣球內に充滿し直ちに膨張昇騰す其の法實に簡便なり（中略）氣球の大さ此の如く小なりと雖ども球中の瓦斯が空氣より輕きこと幾百倍なるを以て其の上昇する力甚だ大なり（中略）氣球の形小なるが故大に運搬に便なり、又輕氣を球中に充たすも僅に三分間を要す」と、當時世

界の軍用氣球でこれ程輕便のものがない。此の發明は、その小形な實用的な點と瓦斯發生の一種の漸燒火藥がやゝまである。然し龍溪程の明敏な頭腦でもまだ飛行機とまでは考へつかなかつたらのであらう。新發明の第二は無煙火藥、第三當時は無聲火藥、第四は雷藥である。第二と第三については別に說明を要せぬが、第四は聊か說明しなくてはならぬ。これは一種猛烈無比の爆裂藥で、「その破裂力はダイナマイト、綿火藥（ゴンコットン）の上に出ること幾十倍にして佛國近時の發明たるメリニイトも亦た三舍を避くべし」といふもの、通常の火藥に比すれば綿火藥は五倍の爆裂力を有し、佛國の「メリニイト」は綿火藥よりも三倍の力を有すると云ふ、ところが此の雷藥は「一尺立方の容積を以て其の爆裂力は三百六十ヤルド（三町）四方に及び、其の破裂力の範圍內に在る物は鐵石、共に粉韲す」る、而かも又た「メリニイト」、「ダイナマイト」の如く容易に爆發する危險あることなし、之を大砲の彈中に裝入して發射するも銃身內に於て爆發する憂がない、といふのである。今日であつても、これ程の爆裂力を有する火藥なら相當以上有力なものであらうが、二十三年では、全く龍溪のいふ如く、「一奇藥」であつたに違ひない。かゝる火藥は、皆一行の化學專務桂若が、統領作良及び立花と專心凝議して發明したものとなつてゐる。この雷藥を盛る新製彈をクルップ砲によつて試驗する一段は、篇中最も壯快な文字の一であるが、全文を引用してゐる餘裕がない、たゞその試驗の結果を見て、統領作良は、立花に向ひ相慶して「以て英佛艦隊を走らしむるに足る」といつたといふから、大に滿足すべきものがあつたといふわけだ。

新發明の第五は大風砲で、これは口徑一尺餘、長さ二間半、然し尋常の大砲のやうに銃身の厚く且つ重いものではない。壓迫した空氣で爆裂藥を盛つた彈丸を發射する、最遠距離十五町に達するに過ぎないが、十五町以內の近地では「其の猛裂無比なる」雷藥を多量に裝入する巨彈を射て百物を粉韲せしむる效能がある。これ又一行の最大利器の一である。

その他新發明としては電氣階子（はしご）、電氣棒等があるが、これは珍異な防禦的武器といふのみで、大していふに足らぬといつて可い。魚形水雷の發明もあるが、これは略ぼ今日程度に發達したものが語られてゐる。潜海器も發明は成就したが、材料不足の爲め、試驗するまでは至らなかつた（この點を押川春浪の『海底軍艦』以下の作が空中、海底の戰鬪を中心とする武器の案出を骨子としてゐるのと比較すると、甚だ興味がある。）

龍溪がかく所謂新發明の武器の威力を並べ立てるのは、既記の如く將來の戰爭は、こゝに說く如く科學なり化學なりを中心にしたものになるといふ見込から、全く世人の注意をそこに引きつけるにあつたのである。

且つ又勿論海外雄飛といふ以上、兎も角も海を陸とし船を家とする覺悟がなくてはならぬので、自然海事思想の養成となり、船艦の知識の鼓吹となる。今その詳は說かぬが第十七回の新造軍艦の知識、第十九回の海戰の方略、その他海戰の際に於ける船艦の進退に關するもの、第三十六七回に於ける難破船處理の方法等、その他篇中到るところに船艦凡ての知識を收めてないものはない。

次には南洋地方の貿易、土人相手の交換方法等、冒險の氣分を失はずに而かも實利を收めることを忘れぬやう、よく實際を調べた上で巧みに小說的に案配されてゐる。殊に貿易の基礎知識ともいふべき南洋諸島の歷史、地理、風土、植物、海港等に關する知識は、流石龍溪だけあつて、却々骨を折つて調べてゐる。而かもあくまで日本人をして今後同地方に發展雄飛せしめるための豫備知識といふ立場から說いてあるのは、いかにもこの篇の精神を生かすものである。（例へば第十三回、地理風俗の條、東印度諸島の案內記事、第三十八回紀行の條、セレベスの地理、風俗、第四十九回日本男子の本分の條に於けるジャバの地理歷史、その他、此の間ジャバその他に關する地理的記事、南洋の風土一般の紹介は、澤山ある、第三十七回に於ける作良統領の熱病をマラリヤ病とした如き、矢張り同病についての知識を與へんとするもの、第五十七回のウーバス樹の毒氣のことも然り、その他かゝる知識を傳へたところは枚擧に暇がない。）

以上が、立案に所謂「海外の風土、人情、物産話を知らしめ現世紀の兵器は理科學の所產なるを知らしめ理科學の貴むべきを知らしめ」る精神を背景としてゐるもので、此の作の多量なる副產物の一つである。更に今一つの副產物たる「偉人傑士の風采を想望せしむる」云々に至つては前の梗概によつて明瞭であらうから、今こゝで略したい。

五

轉じて小說としての『浮城物語』を考察しやう。

小說としての『浮城』の生命は龍溪の言の如く、その結構の點にある。『經國美談』の際にも述べたところだが、この作のプロットも、いかにも手固くがつしりと、且つ組織的、秩序的、均齊的に出來てゐる。勿論未完のもの故、『經國美談』に見る如き完成の古典美はないが、それとなり得る可能性は立派に示してゐる。根本の趣向は割合に單純であるかの如き印象を與へる。これはこの小說の目的上、讀者の明解をあくまでのぞむ龍溪の老婆心の現れであつて、本來は決してさう單純なものではない。成る程海外雄飛といふ太い幹がたゞ直々と元氣よく靑天にとび出してゐるが、然しその大小の枝葉は可成り巧妙に複雜に案配されて、事件の進につれて、重疊たる意外の波瀾を立てゝ來、決して讀者をして倦ましめない。『經國美談』の例にもあることだが、この作でもプロットは幾段の秩序を分つて進展する。本筋を外さずにこの秩序的進展を成し遂げることは容易ならぬ小說家的才能を要とするが、龍溪は二度までもこれに可成り見事に及第してゐる。餘技としては、兎もかく偉といはざるを得ない。プロット進展の順序といへば、海王丸が出帆してから浮城艦を手に入れるまでが第一段、浮城を手に入れてから事件が急轉して、葡英聯艦との大海戰となるまでが第二段、第三段がジャバ獨立の陰謀である。勿論第一段を、數段に小別することが出來る。主人公上井が一行に加はるまでが第一、海王が出帆してから作良の大演說、一行の部署と大演習までが第二、最初の土人貿易と土人

の奸計が第三、海賊船との出會と賊艦分捕が第四といふ風にである。第二大段以下が矢張りかく幾つかの小段に分たれることは勿論である。かくして一小段は小段へ、一大段は大段へと連鎖環のやうに進展して行く、見事といへば見事なものである、壯麗といつてもいゝ。

勿論中心プロットは作良一行の冒險事業であるが、その冒險たるや、冷靜な打算と周到な準備とを經たもので、普通冒險に伴ふ一八勝負といふ如き觀念が殆んどない。此の點はあくまでも改進黨的矢野式の秩序第一主義である。第一、小說とはいへ、作中に述られた貿易策が、實行すれば出來るやうに出來てゐるのも、特色である。又一行の組織、乃至その同志を作る方法の如きも改進黨的である。先づ智力、金力を代表する作良が一行中の中樞に立つ、これは從來出た南洋進出小說に見ないところで、從來のは多くロビンソン的原始的なものであるが、これは始めからブルジョア的資本家的である。作良（智力金力）。次に勇力の權化たる立花勝武が來る。その下に更に文明の粹たる科學者が最高幹部を成し、科學者の次に勇力者が位する。この邊はあくまでも智力金力第一主義の改進黨的思想を示してゐる。同時に當時の日本社會の一面の空氣を反映するものとして、注意すべきであらう。

プロットの總體として、例の科學冒險小說の大家ジュール・ヴェルヌに影響されてゐることは、歴々と分かる。科學兵器の列擧もさうであるし、輕氣球とその失敗談もさうであるし、海賊の條も幾分負ふところがあらう。龍溪は、ヴェルヌが好きで『月世界旅行』の趣向に感心し、森田思軒にかゝる作家、かゝる小說をこそ今日の日本に紹介すべきだといつたので、例の「報知異聞」中のヴェルヌ紹介が試みられたのだともいふ。（一）

プロットについては大體の成功は勿論として、一二難をいへば、作者は上井の出身のことは比較的詳しく說いてあるが、主要人物たる作良、立花等の前身のことは眞の噂さ話程度しか出てゐない。その部下たる幹部級の人物の身分に至つて殆んど何等語られるところがない。これはこの小說を幾度となく愛讀した者にとつては確かに一の缺點と考

へられて來る。裁判の中は、事件の波瀾に興味が沒頭されるからこれは別に氣にならぬが、後には何うも何の說明がないと可笑しくなる。然しこれは考へやうによつては、龍溪の老獪なところともいへるので、この出身の說明を下手にしてゐると、後々の事件に對する興味が去つてしまふ恐れがある、それでかういふ枝葉的說明一切を排して知らん顏で發端から事件の眞中に飛び込ませることにしたのである。第四十回應接、第四十一回領事の條で、作良一行が英國汽船を強制抑留し、乘客たる和蘭陀領事を捕虜にするところは、本篇前後を通じての見せ場であるから、今少し描寫の筆を執拗にしても可かつたらう、英人船長なり船員なりの態度をもつと傲慢なものにし、日本人の威勢を今少し力を入れて寫したらと思はれるが、かういふところは、龍溪が英國風の紳士道を心得過ぎてゐるため飛んだ損をしてゐる。第二十六回の輕氣球の失敗による上井と菊川の冒險は、戰爭によつて一寸緊張した氣分を緩め、又更に大きな緊張にすゝむ前程として、そのユーモラスな氣分を買ふべきである。その他難所も妙所も、數へ上げると際涯がないが、大體の成功を認めて、それで措きたい。たゞ一寸附言したいのは、刊本の方の毎回の末に載つてゐる依田學海の評である。依川氏のかういふ漢文の評も、明治二十年前（十六七年頃）にはその書の品位を加へたものであるが、それは時代の教養その他と一致した點があつたからで、もう此の頃になつては大分時勢外れの氣味があり、學海百字評は新しがつても、その漢學仕込みの半可通的文學知識が露骨に目立つて、宜加減に止めぬかといひたくなつた。その文法をいつて左氏とか司馬遷とか韓氏とかいふのはまだしもとして、戰爭を形容するには、直ぐ[illegible]とか[illegible]とかやるのには、全く冷汗が出る。老人の冷水といふのが、かういふ時に遣ふのかと思ふ程ぴつたりあてはまるのである。

次に人物であるが、この作に登場する人物幾百人中、眞に活動するのは、主人公の上井と、大統領作良、兵馬總理立花の三人に過ぎない、その他の人々は部分的にその性格活動を描寫されてゐるのみ。然し活動する三人は割合に自然に巧みに描かれてゐる。作良、立花の二人は多少の漢詩的な英雄的氣質を帶びるに反し、上井が如何にも平凡に自然に

描かれてゐるので、他の二人の英雄的誇張も、上井の平凡さとの對照から生ずるものと見做され、それ程際立たずわざとらしく受けとれない。殊に、上井の出身が明瞭してゐるのに對し、作良、立花の二人の出身に幾分神秘の雲がかかつてゐる點が、如何にも浪漫的英雄にふさはしいものにしてゐるともいへる。何れにしても『浮城物語』が結構第一の小説である以上、それに伴なつての人物性格であり、この點では英雄的言行の具現といふ以外、性格の描寫に餘り多くを期待し難い。ただ寫實的に描かれてゐる主人公上井が案外龍溪の空想に成る人物であるに對し、統領作良には龍溪自身の面影がある。それかあらぬか、作良の言行が讀後一番頭に明瞭に殘る。立花も或る意味で龍溪の分身といへぬことはあるまいし、又賊艦奪取や敵軍追擊の場面に於ける彼の行動は實に胸のすく程立派なものがあるが、これは却て幾多古英雄の寄せ集めとも見えるのである。

　文章についての苦心は前に述べたから、こゝで繰返さないとして、たゞその場景描寫の力について一言すると、勿論自然描寫の如きは如何程調べて書いたにしても粗大で餘り上手とはいへまいが、この小説で殊に感服するのは、戰爭の場面の描寫である。實に戰爭の場面の成功がこの小説を傑れたものにする一要素だといつて可い。明治以後の小説で、專門家の實寫を別にせば、文士の假想を描いたものとしては實によく出來てゐる。戰爭の大きなものは、海戰が二度、陸戰が一度あるが、何れも立派な出來である。海戰を寫すに、前一度は影畫的に寫し、後一度は眞正面から堂々と寫してゐるのも面白い。陸戰の描寫では由樂坡（ユラベヤ）の血戰の條が最も佳い。もつとも海戰の方にはトラファルガーの戰、陸戰にはリユークトラの役の陣形その他が參考されてゐるらしいが、それにしてもこれで十分龍溪の軍事知識の平凡なものでないことが窺はれる。前にもいつたが、龍溪は大分佐伯藩の武士の出であり、幼少の頃は專ら文武に身心を鍛へ、砲術は得意なものであつた。又近代調練も學び、藩兵として京都にも出張したものである。かういふ素養があるから、その軍事眼が生きてゐる。從つてかゝる假想的戰爭の描寫に當つても、容易ならぬ迫眞性をもつたも

のになるわけであらう。

龍溪は、『浮城物語立案の始末』の末段に於て、その所論を總括して讀者に對して次の七ケ條の試問を發した。曰く

第一　小說界の術は兒女の情を穿つのみに止る乎將た偉人奇士の風神態度を寫し出すに及ぶべき乎浮城物語は其の目的とする所彼に在ずして是に在り知らず讀者をして果して能く偉人奇士の風神態度を想望せしむるに足るべきや否や

第二　文辭粗密の點に於て我國今日の文學界の粗密繁簡の中を得るもの果して讀者を飽かしめざるの利ありや浮城物語の如きは果して繁簡の中を得たるや否や

第三　忍心を長じ淫思を增さしめ之が爲めに不善の境に陷るの恐れはなきや否や

第四　讀者に娛樂を與ふると共に成る可く多量に攝取せんと心懸けたる副產物をば果して目的通りに收め得たる可きや否や

第五　書中の事柄は豪宕拓落と滑稽笑謔を主として哀怨窮愁の情思を一切之に雜へざるを目的と爲せしが果して其の目的に反することはなきや又書中の人物は喜怒哀樂總て常情の人を主として傍に幾個の奇士を畫き出して之と相照映せしむる積なりしが果して其の目的を達し居るや否や

第六　讀者をして厭倦せしめず一枚又一枚一回又一回と覺へず全部を通讀せしめんとて務に書たしと思ふ文字をも省き長く書き度しと思ふ事柄をも略し尾を去り緒を除て正眞正味の切身のみと爲せし積なるが果して其の目的を達し居るや否や一回を讀みて既に次回を讀むを厭はしむるの恐れはなきや（此一事は何人何書も同樣ながら此書は別して回數も多く大部と爲る可きが故に是點には一層注意せしなり）

第七　小說又讀者の種類を考ふれば此類の書は損多きに似たり其損多を以てせず他の一方に又一種の新讀者を增して損益相償ひ得べきや否や

私は此の試問に對して簡單にかう答へる。

第一　偉人奇士の風神態度を想望せしむるに足るべし

第二　中を得たりといへばいひ得、然し勿論これは當時としてのことのみ

第三　然る恐れは絕對になし

第四　大體目的通りに收め得たりとすべし、たゞ未完なるより十分といかぬ憾あるのみ

第五　先づ二つの目的を達したりといふも可也

第六　讀者を厭倦せしむる恐れなし

第七　相償ひて餘あるべし。從來小說の讀者は性別でいへば、女性に多く、年齡別にせば老年中年よりも少年に多い、從つて『浮城物語』の如きは、女性や少年の人々には人情小說程歡迎されないことはいふまでもない、然し一方又女性の代りに男性の讀者を增加せしめ、少年の讀者に加ふるに老年中年の讀者をもつてすることは明白である。

私の答へはかくの如くであるが、これによつて私は、『浮城物語』を大體として著者の理想を具現した小說であり、それだけに此の種のものとしては最も成功せるものたるを信ずる。

註(一)　拙著『明治初期の飜譯文學』、明治初期飜譯文學の中明治二十年以後の條を見よ。

六

私は、この研究の初めの方で、龍溪の小說觀や『浮城物語』の立案を論じたときに、その小說觀や立案の目的が、當時の文壇文學と往々背馳するところが多いといふ意味を再三繰返した。さてこれに對して文壇から一矢を酬ふといふことは、自己存續の權利を主張するもので、當然すぎる程當然である。果然この役を買つて出た人物がある、それは當時の新進批評家の雄と見られてゐた内田不知庵であつた。不知庵は國民新聞紙上で（明治二十三年七月十五日、十六日）「龍溪居士に質す」といふ一種の公開狀を發表した。不知庵は先づ龍溪がスコットの語を引いて小說娛樂說を唱へた點を駁撃した。彼はスコットの評論の淺薄を述べ、かゝる說はスコットを傚ふまでもなく、日本の文化文政頃の戯作家、春水種彥輩さへ抱いてゐた小說觀なるを論じ——

　是戯作時代に於て公言するは猶ほ可なり若し今日公衆の前に讀者に娛樂を與ふるを小說の目的とすと云ふ者ありとせば余は强ちに是を咎めざれども唯其公言者の見識幇間藝人よりも下れるを哀れまん。嗚呼余は龍溪居士の爲に悲む。思ふに君がフイロソフイーは能く是認せんが如斯きフイロソフイーを抱懷する淺見者世に頗る多くして龍溪居士の說半錢を値ひせざるなり

といつて、龍溪を眞向から痛打してゐる。不知庵によると、——

　小說は人間の運命を示すものにして兒女の粋を穿つも偉人傑士の心事を寫すも人生をだに示し得ば則ち可なり。然らずんば美人醜婦英雄聖者如何なる者の心事態度を描くも小說と云ふを得ざるなり。

「人生を示す」、卽ち人生の描寫、批評、解剖、說明、かくの如きものが小說の本質であつて、「不善ならぬ娛樂」ではない、卽ち作者の人生に對する態度の表明が小說の第一條件であつて、讀者に「娛樂」を與へることではないのである。卽ちこの論では作者が主であり、讀者は從である、龍溪の謂ふ如く讀者第一主義ではない、これが兩者の立場の根本的相違である。而してこゝに又文壇小說と大衆文學を區別する一つの規準がありとしなくてはならぬ。

故に古來の文學作者で眞の意味の小說（ノヴエル）といはれるものは甚だ少ない、少ないからこそその作者は政治家、哲學家、宗教家と同じ名譽、同じ位地を與へられてゐるのである。若したゞ「不善なる娛樂」程度のものであれば、小說家は「豆藏や輕業師」と同斷のもので、——

ギョウテ、ヂツケンズ、ゴンチヤローフ又巢林子西鶴の名譽も小唄八兵衞鹽屋長次郎と何ぞ撰ばん

といふわけであらう。龍溪の考へが是なれば、彼は「好んで名譽ある世界を去り豆藏輕業師と同格なる小說界に落ちんとする」ものである。これは漸く確立しかけた文壇の獨立自治を全く危くするものに外ならない。從てかゝる思想は飽くまでも排擊しなくてはならい。

次に龍溪は、文學を繪畫に譬へたが、不知庵はこれについても一矢を酬うてゐる。「文學は繪畫の如しと君は曰へり。是れ君の說として許すべし。然れども繪畫の韵致は畫題に依て同じからずとは外山博士の說と同じく審美學を知らざるが如し。畢竟形の現す處に依て說を爲すのみ、柔に對する感想も壯に對するの感想も豈異ならんや」云々。此の一點は然し不知庵の攻擊態度が的を外してゐる。龍溪は文學を繪畫に譬へて論をなしてゐるのだから、先づその當否を攻擊すべきで、龍溪の繪畫的知識の不足を攻擊しただけでは、龍溪の論旨を破したことにはならない。且つ龍溪は、繪畫の韵致が畫題に依て同じくないといつたのみで、韵致即優劣といふのではないから、不知庵の方が少々曲論の氣味がある。

思ふに、不知庵の龍溪攻擊は最初から喰ひ違つてゐる、龍溪は最初から大衆を當てとした目的小說を書くつもりで『浮城物語』を書いた、『浮城物語』をもつて小說の好模範とし、小說は凡て『浮城』流でなければならぬといふのではない。勿論『浮城物語』の立案上の用意を說明した語句で、當時の文壇文學に背馳する結果を生ずるものゝあつたことは事實である。然し此の際龍溪側で、『浮城』こそ唯一の小說だ、これが小說の模範だといはない限り、不知庵は

かゝる態度で頭からこれを却けるべきではなかつたのである。龍溪は『浮城物語』の如き小說も存在し得るし、又龍溪の目的理想からせばかういふ小說を書くことがその宣傳に都合がよかつたので書いたといふだけであれば、不知庵は『浮城物語』を評するにさういふ立場を認めて是認すべきであつたらう。ところが龍溪が素人の癖に（といつても不知庵よりも文壇の先輩である）小說いぢりをする、小說論をする、その論が割合に秩序が立つてがつちりとしてゐる、而かも論旨は結果に於て文壇小說と相反するものになる、さういふ點にいさゝか疳癪を起し過ぎて、文壇の權威を保持するため餘り高飛車に出過ぎたのである。それで『浮城物語』の是非よりも文壇的權威を顧念することが急なので、事毎に文壇小說の概念で『浮城物語』とその作者龍溪居士とを極めつけるといふ固意地な態度を現したのである。

不知庵は、龍溪が「偉人傑士絕大の事業を寫し出す」といふ語を捉へて、所謂政治小說と人情小說の比較を論じた。

二三年前政治小說なるもの流行せり、其主人公は壯年にして國家の大事を憂へ演說捕縛禁獄等を經過して終に國會議員となり又顯職に任ずる有爲の士にして春水亞流の艶治郎と其形を異にす。然るに後者の梅暦八幡鐘等死後五十年の今日に存在して却つて數段立派なる主人公を有したる政治小說僅二三年の中に埋沒したるは少しく鈍眼なる人は能く是を知れども君其所以を知るや否。

不知庵の意は、人情小說を揚げて政治小說を貶下するにある。人情本が作者死後五十年の今日尚存在を主張してゐるのは、これが政治小說よりも遙かに不知庵流の小說理想を具現してゐるからといふのであらう。而かも政治小說が「僅に二三年の中に埋沒したる」は何故ぞ。不知庵はこれに對して人情本を稱揚したと反對の理由を指示するに違ひない。然しそんなことでは政治小說「埋沒」の何故かゞ十分理解されてゐない。「君其所以を知るや否」といふ語を私

から不知庵に反問したい。埋沒の理由を政治小說の內容組織にのみ求めて、埋沒の最大理由が時代の政治熱との消長關係にあるのだといふことを知らなかつたら、不知庵も亦「銳眼なる人」ではない。政治的必要を使命として發生したものであり、その使命が終つた以上當然埋沒さるべき運命にある、決してその內的價値にのみ依つて然るものではない。若し未だその使命が終らず、政治上の必要がありとせば、如何に內容的に反不知庵的なものをもつてゐたにせよ、依然として盛行したであらう。不知庵の論は、政治小說なるものゝ本來特殊な使命をもつものたることを、忘れたものたるを免れない。

不知庵は更に『浮城物語』の結構の偉大といふことについて論をなしてゐる。龍溪の偉大は、作の一分子たる結構を偉大にするといふことであるのに、不知庵は直に此の偉大を小說として、詩として、藝術としての偉大といふ方に牽强して、『浮城』を排斥する理由にしてゐる。龍溪は、『浮城物語』の性質上、舞臺を思ひ切つて大きくとる必要があるので大きくとつた、これが卽ち龍溪のいふ結構偉大の語で表現されてゐるところで、これ以上でも以下でもない。且つ龍溪は、故意に小說の結構須らく偉大なるべしとも何とも主張したのではない、然るに不知庵は、これをもつて龍溪が『浮城物語』の本質的偉大を證する一資格としたかの如く見なし、――

若し小說は徒に偉大（君が偉大なり余が偉大にあらず）にして可なりとせば服部誠一氏が譯せし第二十世紀は小說の上乘にして是に卓絕するものなからん。君が浮城物語を比較して果して如何ぞ。又ベルネの月世界旅行は更に上乘にしてシエークスピヤもギヨーテも其以下にあらん。詩の大は果して此の如きものか。云々

と論じてゐるが、批評家として正しい態度とはいへない。不知庵によれば、龍溪が『浮城物語』の完成の爲めに拂つた一切の苦心が悉く無效に歸したといふのである。

何となれば君は唯末節に力を盡して根底を忘れたればなり。よし浮城物語の文章を以て美なりとせん、海事に關す

る調査を行屆きたりとせん、範圍を廣ふして多量の收獲を得たりとせん。是等は君が自信する如く上乘の域に到れりとするも畢竟造作を美にせし家の基礎固からずして微しの風吹けば微しの地震搖れば忽ち顚倒すると同樣なり

東西文學史上、古今の傑作小說をもつて『浮城』に比較したなら、それは成る程物の數でもないかも知れないが、明治二十三年度の日本小說界で果して『浮城物語』の存在がそれ程無意義なものであらうか。不知庵のいふ「基礎固からず」といふのは、龍溪の小說觀の皮相淺薄からして『浮城』をして同樣なものたらしめたといふのであらう、然し固い固くないは程度問題で、當時の文壇小說で絕對的に「基礎固し」と稱讚される小說は殆どあるまい。私は以上にも記した如く『浮城物語』が當時の小說として或る程度迄成功したものたることを信ずるものである。殊に左の一段に至つては、一種の暴論たるに庶幾い。

又クルップ或はアームストロング等の武器を列べしをもて君が手柄となせば一時間遊就館に遊び一時間八重山號を見物し一時間橫須賀造船所に橋立號の說明を煩はし他の一時間に富津觀音崎の砲臺を觀覽し最後の二時間に海戰史と造船史を通讀すれば浮城物語に十倍する巨多の兵具を羅列して其苦辛を誇り世人の精しからざるを嘆息するを得べし

龍溪の藝術的理解の淺薄を笑ふ不知庵にしてかゝる語を成すとは意外千萬で、全く藝術の力を冒瀆するものに外ならない。

最後に不知庵は、聲を大にして、龍溪の讀者第一主義と阿世主義を攻擊してゐる。後者は前者の結果と見るべきものであらうから、それについての論は兎もかくとして、讀者第一主義が、不知庵をして最も憤激せしめた一因たるはその語氣で明白である。

唯君が小說の優劣を判定するは世間の讀者にありと云ふに到つては君の爲に最も惜まざるを得ず。一度君地方に出

で丶世間の讀者の如何なるかを觀察すれば最大（此大は君が大にあらず）なる小說は世眼より選出したれば到底俗に容れられざるを悟らん。是れ古來より今日まで當然の事實にして試にヂスレリー氏の隨筆を繙かば名篇傑作は大抵作者の死後に顯はれしを知るべし

不知庵はその最大の例としてシェークスピヤを擧げてゐる。然しこれは以ての外で、シェークスピヤがエリザベス朝當時劇界第一の流行兒であつたことは今日種々の徵證に照して疑ふことが出來ない。一時淸敎徒時代に不當に抑壓され、その復興のためにニコラス・ロー等の力を要したが、然しこれは生前當時不遇であつたことを意味しはしない。而かも不知庵が同じ例としてホーマアやプルターク英雄傳を擧げてゐるのは、鬼面人を嚇すもので、兒戲に類する。此等古典の如き、當時の讀者に喜ばれたからこそ今日迄傳はることを得たもので、却て不知庵の論と反對の立場、即ち龍溪側の證據となるものであらう。

不知庵の批評は例になく躍起となつて昂奮してゐる、此の批評に於いてこれ程躍起となつたのは何故であるか、それは前にもいふ如く不知庵は『浮城物語』の批評を目的としてゐるのではなく、『浮城物語』を生じた龍溪の精神、その小說觀が、文壇文學の固守尊奉する純文學的原理を侵犯するに至るのを見て、その擁護の爲めに起つたものだからである。

而して同時にこの事は、當時『浮城物語』が龍溪の心配したとは反對に、讀者の愛讀をうけて大に流行し、爲めに文壇側で可成りの脅威を感じたことを意味してゐるものと解して間違ひがないであらう。

小説家としての小宮山天香

一　天香傳

天香小宮桂介は、有名な水戸藩儒家の出である。彼はその家門系統に大なる誇りをもつてゐたらしく、その墓誌の草稿を見ても、殆んど家系の大概が述べてあるばかりといつて可い。その文に曰ふ、——

君諱昌由、稱桂介、先儒楓軒之孫、南梁之弟也、考昌堅有六男六女、君爲其最少、而自幼好學、平居自修、爲長自成一家、以繼祖業焉、蓋先祖止齋、寛永中、始以文學、遊事于諸侯、而後世々相承、以至君既八世焉、而尚存家風、永保孝範云々

さうしてこの文章に附記して、「要するに家門系統の大略を記するのみにてよし他に及ぶ可らず」といつてゐる、以てその志の在るところを見るに足るわけだ。だが吾等の研究からいへば、この簡短な文章だけで我慢してゐるわけにはいかぬ、事實又天香その人が、單に家門系統だけを傳へて濟むやうな人物ではない。勢ひ、吾等は今少く詳しく彼を傳したい、それには此の墓誌の註釋から始めるのが便利だらうから、さうすることにしよう。

天香が大なる誇をもつてゐた小宮山氏の家系は何ういふものであらうか。彼自ら記していふ、蓋先祖止齋、寛永中、始以文學、遊事于諸侯云々、即ち小宮山氏が文學を以て現れたのは寛永年中以後のことだ。では、それ以前に小宮山氏の名有る者がなかつたかといへば、それはある、武田勝頼に天目山に殉じた小宮山内膳正友信の名は歴史の上に炳焉と輝いてゐる。天香が先祖と稱する止齋は、恐らくこの内膳の二三代の子孫だ。

止齋のことは、遺憾ながら私はよく知らないが、小宮山休庵といふ人と同一人ではあるまいか。休庵ならば、堀杏庵に學び、業成つて始め尾張侯に仕へ、後に二本松の丹羽侯に仕へたといふ。その子昌鄕（峴嶽）は仕を辭して水戸にあり、梁田蛻巖、細井廣澤と詩酒相友とした。昌鄕の長子を次郎右衛門昌嶠といふ、號桂軒、彼は文章を善くし又史才があつたので、水戸に仕へて大日本史の編修に關係をした。桂軒昌嶠の子が東湖昌德、此の昌德の子次郎右衛門昌秀が有名な楓軒先生、桂介の所謂先儒楓軒である。楓軒は學問文章も秀れてゐたが、治民の偉績のあつた人で、單に口舌講論だけの儒者ではない。楓軒の子が昌堅（初め壯次郎、後次郎右衛門）、これ又楓軒に似て讀書人でありながら郡奉行乃至代官の如き吏務を勤めて倦まなかつた人だ。此の昌堅の子が南梁昌玄（又昌綏）、即ち小宮山綏介で、此の人が天香の兄になる。この綏介氏は『德川十五代記』の著者、『支那文學全書』その他の編纂者として（內藤恥叟と共に）吾等にもよく名が知られてゐる。然しこの人もたゞこれだけの人ではない、ありふれた『人名辭典』の略傳を一瞥したゞけでもそれが分かる。

祖數世儒業を以て同藩（水戸）に仕ふ家藏の圖書萬卷充棟の富あり歲三十擢でて藩學弘道館の敎授たり後轉じて民政を知り、治績を賞されて劍服の賜あり、又國史（大日本史）志表編修の事を命ぜられ更に遷て軍務に參す明治戊辰の歲偶々國亂に遇ひ朋黨の禍に罹り幽閉多年寃抑久しきを經後出て仕へ史職に東京府に居る江戸の制度に博通するの故を以て其諮訪の員に備へ併せて地理誌編纂の事を總修せしむ又市區改正の事起るに及びて贊畫計設其力多きに居る當時旁ら編撰する所の東京城建置考並に二苑紀略の如き獻進以て乙夜の覽に供す二十一年官を罷めて退隱老を養ひ旁ら諸生に授く爾來或は神宮司廳の管する所の古事類苑の纂修に或は帝國大學の修むる所の史料編纂の事に與かり適意餘生を樂しむ云々

博士にもならず、男爵も貰はず、貴族院議員にもならなかつたけれども、それは畢竟時世に遭はなかつたからで、若

しこれを用ふる人があれば大に伸び得た人であらう。學識といひ才幹といひ、實に天香が「南梁の弟也」と誇るに足るだけの人物であつたに違ひない。この南梁から天香を入れて、休庵から八代になるから、世々相承、至君既八世焉といふ文字も首肯されるのである。

さて天香の傳を、私の知つた限り述べることにしよう。

最初にその號のことだが、號は實に澤山ある。小説を書くときは、初め天香逸史（外史）、後に即眞居士、又醒々居士、漢詩の時は三放又は天放、和歌に閑來子、隨筆には槃園（後、詩にも用ふ）この他桂花散人、天下皆秋樓主人等臨時の號が澤山ある、本稿で天香と冠したのは、これが小説家としての桂介の號として今日比較的知られてゐるからに外ならない。

墓誌にいふ、「君諱昌由、稱桂介。」今日專ら桂介で知られてゐるが、明治十六年七月以前には通稱を昌綏（まさはる）といつた、昌由も諱であるが昌綏も諱から來てゐるらしいから、初め昌由後昌綏と改めたものかも知れない、或は由綏、音相近いので假借したかとも考へられるが、何とも斷じられない。私は通篇天香で通すことにする。

天香の生れたのは安政二年四月十一日、場所は水戸大洗の磯濱で、それで幼名を磯五郎といつた。父昌堅がこの邊の奉行でもしてゐたものであらう。墓誌にもある通り、六男六女の最末子であつた。天香の幼時については、自ら「自幼好學」と傳へてゐるだけで他は分らないが、恐らく父昌堅や兄南梁に就いて十分漢學を仕込まれたものであらう。殊に南梁は兄とはいへ、年も二十位違つてゐたから、立派な教師振りを發揮したことであらう。天香の十三歳といへば、慶應三年であるが、傳ふる所によれば、その頃、彼は藩の爲替方に出仕したといふ。

明治維新の際の水戸藩は、天狗黨の復讐騒ぎの爲め先づメチャメチャとなつた。南梁の傳にもあるやうに、「偶々禍難に遭ひ門黨の禍に罹り幽閉多年窮抑久しき」に亙つたわけだから、天香とて決して幸福な眼を見なかつたに違ひ

ない。明治の初めから、十年までの間は、天香傳の暗黑時代である。彼はこの間種々な人々の世話になりつゝ苦學したといふが、彼が文章を學び、和文和歌の嗜みをもつやうになつたのは、この間の讀書生活から出てゐるらしい。戯作稗史小說類に對する趣味は、何うであつたか、家庭が家庭であるから、幼少からさういふ趣味に耽つたとも考へられぬが、然し歷史は家學として立てゝゐたところであつたから、稗史位は讀むことを咎められなかつたらう。これ等の趣味も、この暗黑時代に養はれたものではなからうか。

明治十年以後、天香の傳記は幾分の光明を示して來る。明治十年の後半期の某月、桂介は甲府觀風新聞なるものゝ假編輯長となつたことが分かる、それは翌十一年一月四日の朝野讀賣等に、桂介が建白を無斷掲載する件により、十年十二月二十六日附で禁獄二ケ月に處された記事が見えるからである。此の觀風新聞は妙に水戸人に緣のある新聞で、局長の渡井量藏が水戸人、印刷人の高瀨茂顯（後の眞鄕、卽ち菊亭靜）が水戸人であつた。天香が此の二人と何等か關係があつたものか、それとも第三者の仲介で入社したのか、その邊は今のところ明瞭でない。明治十年は桂介が二十二の時だ。

此の禁獄後も天香は觀風新聞に止まつてゐたものか何うか。明治十三年三月には朝野新聞の記者となつて、主筆の末廣鐵腸と一緒に旅行などしてゐるから、十一二年の交甲府を辭して歸京したのではあるまいか。青年天香の才學文章は、この頃からして識者の認むる所となつてゐたものらしいが、記者としての文名はまださう現はれなかつた。十三年八月、朝日新聞（大阪）の主宰者津田貞（土佐の人、號聿水、又花顚道人）が資本家木村平八と衝突して同新聞を去り、小澤扶公（すけひろ）を後援として新に「魁新聞」を起したが、この時天香は聘せられて記者となつて大阪に赴いた。爾後七八年間、天香の主な活動舞臺は大阪であり、文名も先づ近畿方面に知られることになつた。

津田貞は新聞主宰者として非凡な手腕をもつてゐたが、彼の文才學識も、當時の新聞記者としては稀に見る立派な

ものであつた。その津田が、天香には敬意を拂ひ、後進をもつて遇しなかつたといふから、天香の力量も漸く認識されて來たのであらう。魁では、記者として特に漫錄欄を擔當してゐたらしいが、此の漫錄欄は、當時の新聞紙にあつては呼物の一つである、學問文章の無い記者ではその擔當が出來かねた。津田がこれを若年の天香に托したのは、よくよく人物を見込んでのことであらう。彼は匿名で又は無署名で種々な文章を書いてゐるらしいが、これは今日から明確に指し難い。たゞ漢詩だけは、署名してあるから、それと知られる。

魁新聞の編輯局には、この頃天香の外に、宇田川文海、胡蝶園若菜（貞爾）、半井桃水などの諸文星が前後に集まつたが、年輩閱歷の如何にかゝはらず、皆天香を畏敬してゐた。十三年十二月、若菜が故あつて魁新聞を退社した後、天香は若菜の代りに校閱の重任に就いた。

津田貞は、多能多才で、文學、詩歌、辯論は勿論、さては生花、茶湯から割烹などにまで精通し、人品は眉目秀麗、堂々たる偉軀であつたといふが、天香とこの津田氏とは、いろいろな點で似てゐた。或る點は天香の方で好んで學んだものがあらうし、或る點は、無意識的に感化を受けたところが少くなかたらしい。

魁は、十四年の八月倒れたが、天香はその倒れるまで留まつてゐた（若菜の如き、十三年十一月に早くも退社し、間もなく敵手だつた朝日新聞に入社した）。こゝに天香の爲人を知るべき一話があるが、魁新聞が倒れる頃、資本家の小澤氏と主筆津田氏との間には何度となく紛議が起つた。然るに——

いよ〳〵社運滅亡に瀕するや、小澤君の父某は、生來一徹短慮の人とて、或日傳來の腰の物を引下げて社内へ躍り込み「我が資産の大半を亡費したのは、全く津田の甘言によるのだから、津田の奴めを斬殺して自殺する」と怒聲を上げたので、居合ふ人々は之をさゝえ、二階の編輯局では先づ津田先生を裏手から逃してやり、他の者も皆ちりぢりばら〳〵に逃亡させたが、獨り自若として机上に向つたまゝ動かなかつたのは小宮山天香先生であつた。先生

は幹部の中では、一番年少であつたが平素沈着にて物にあはてぬ人だから、他の者がうろたへ廻るを靜かに見て、書きかけの原稿を書いてゐられた。

するとそこへ、小澤老人は大刀を引さげて躍り込んで來たが、一同遁散つた中に、唯獨り小宮山先生がすまし込んでゐらるゝを見て、老人は手持無沙汰になつて突立つたまゝ、先生を見てゐると、先生はやをら向直つて「マアお坐んなさい、話しませう」とニツコリ笑つていはれたので、小澤老人すつかり其の膽力そなはる態度に恐れ入り「イヤ感心、あなたはお若いが話せる人だ」、とそこへ坐り込んで、頻りに津田先生の棚卸を始めたが、小宮山先生は一々その誤解を說いて、諄々慰撫せらるゝに及び、老人も根が分らぬ人ではないから、忽ち顏も言葉も柔らげて靜かに引上げて歸つたが、一時はどうなる事かと肝を消さぬ者はなかつた。そして其の當分、小宮山先生の沈着振りを稱揚する噂さが、同業間の話柄になつてゐたといふ。（一）

魁新聞が倒れると間もなく、津田は天香や魁の殘黨阪部淸次郎などを相手に、九月、畿內中報を創刊した。間もなく朝日へ走つた若菜貞爾も歸參した。天香はこの中報にも校閲と署名してゐる。誰いふとなく、畿內中報は大阪府知事建部鄕三の保護金を貰つてゐるといふ噂が出たが、津田の怪腕ではその位の藝はやつたかも知れない。元來畿內中報も、始め別人が案を立てゝ許可を得たのを讓りうけたものなのだ。

畿內中報は十五年一月に此花新聞と改題した。天香はそれより先き、日本立憲政黨新聞に聘せられて雜報主任の位地に就いたが、津田の依賴によつて每日一章づゝ戲文讀物の類を補助してゐた。

日本立憲政黨新聞は大阪日報を買收改題したので、十四年十二月許可を得、十五年十一月四日から發刊する筈だつたが、少し遲れて、一月中は大阪日報のまゝ、同年二月から改めることゝなつた。天香はこゝでも才學文章風格で同儕から推重されたものであつた。

當時の天香の人氣を卜知すべき資料が一つあるが、それは、十五年四月三十日の此花新聞に見える八犬士見立だ。これは一讀者の投稿だが、當時大阪で全盛をうたはれた新聞記者、俳優、藝妓の三者中、各八人を拔いて八犬士に配したものである。その中で天香は、八犬士中でも第一の花形役者といふべき犬塚信乃に配された。天香と同じく信乃に配されたのは、俳優では市川小團次、藝妓では、林席の若力といふ女性であつた。大阪地方の讀者が、果して天香の眞の技倆を認めてゐたかゐなかつたか、それは疑問だとしても、天香の人氣は爭へなかつた。思ふにかゝる人氣は、たゞ艶筆家とか手腕家といふだけに原因してゐるのでなく、天香の識見氣品人格が與つてゐると思ふ。尤も通俗讀者の人氣の中心たる讀物を書かして見ても、彼位凄艶優麗な文章をつらね得る人は先づ少なかつたのである。

日本立憲政黨新聞は、日本立憲政黨の機關紙であり、從て政治新聞であり、大新聞であつた。さうして立憲政黨新聞社は立憲政黨の宣傳部でもあり、事實上の本部でもあつたので、こゝの社員を中心に大阪政談演說會といふものが出來て居り、半定期的に演說會が催された。又時々、地方の招聘に應じて出張演說もした。

天香は元來が士族の出であり、政治が嫌ひでもなかつたと見えて、立憲政黨記者となつて以後、正式に黨員に加はり、度々政談演說會に臨んで演壇に立つた。座談は巧みであつたけれども、演說は又格別なので、當時雄辯家といはれた同黨の城山靜一に就いて演說法を學んだりしたが、結局ゼスチュアやエロキューションは大して成功しなかつたらしい。然し進んで度々演壇に立ち、知識階級らしい率直な自由主義を叫んだものだが、その慷慨には水戶人士流の不平不滿もまじつてゐたらうと思はれる。今手許にあるノートからその演題を掲げてお目にかけやう。

十五年四月　一　日　「史を讀で感あり」
同　四月　七　日　「虎を畫て成らず狗に類す」
同　四月廿一日　「誰か權利を得るに順逆の區別ありといふや」

同　五月六日　「咄々怪事」
同　五月二十日　「雷の説」
同　五月廿六日　「尙武論」
同　七月八日　「豪族政治の末運」
同　七月十三日　「責任論」
（この演說の爲め中止解散を喰つた。）
同　七月廿七日　「專制政治」

十五年は一番熱があり、十六年、十七年と次第に衰へはするが、全然演說を止めたのでないことは十八年一月十八日にも「何が爲に備へ何が爲に戰ふ」といふ題で演じてゐるので知られるのである。彼と共によく此の演說會に出る辯士は――

古澤滋、小室信介、河津祐之、草間時福、土居通豫（香國）、田口卯吉、新井毫、岸田とし子、甲田良造、小島忠里、菊池侃二、善積順藏、城山靜一、乳井吉之丞

などの人々、中にも河津、草間、城山、新井、土居などがよく出た。首領の中島信行も、時々は顏を出した。

この時代の天香について今一つ注意すべきことは政治小說を書いたことである。だが政治小說のことは、後篇に纏めて語るから、こゝでは何もいはずに置かう。

政治に興味を感じた結果政治書を讀む必要から、フランス語を勉强しかけたといふのも、この際のことであらう。

當時天香の手許にゐた後の大阪朝日記者岡田翠雨氏（昭和十年十一月死去）は當時の立憲政黨新聞をかう追懷してゐる。――

立憲政黨新聞の本社は東區今橋二丁目一番地の元十人兩替の一人であつた天王寺屋五兵衞の邸宅であつた宏壯なる家屋を借受けて之に充て、活版所も機械場も其內にあつた。會計長は丹後の澤邊正修氏、篤實なる理財家であつた。論說班は河津祐之、草間時福、古澤滋、田口謙吉の諸氏であつたが、古澤氏は間もなく自由新聞の主筆に迎へられて東京に去り、田口氏は編輯總括の實權を握つて、外勤者の統率など百般に涉つて執掌してゐたから、論文をかく事は少かつたが、夫でも論文でも氏の眼を通さないものはなかつた。市井事故其他の軟文雜報は小宮山先生を主任として、其下に中川光實（後に南海鐵道に入る）、乳井吉之丞、多田直勝の諸氏が机をならべ、當時にあつては朝日新聞社等よりも規模が大きかつた。けれども記事が堅くるしくて讀みにくいので、購讀者は繪入新聞よりもズツト尠ない。そして社員の給料は繪入新聞よりも多額であるから算盤のとれる筈がない。初めの豫算はガラリと外れ、年と共に財政は窮乏を加へた。社の組織は株式であつたか、合資であつたか、私は其の時分うつかりしてゐて調べて置かなかつたからハツキリいへないが、何でも大和の山持ち土倉庄次（三）郎氏なども出資してゐたもので折々社へ遊びに來られ、お金の話しをしてゐられた。

其頃の土倉氏は小ぶとりにふとつた人で、滋味な黑ずんだ着物を着流しで、手に鐵扇の樣なものを持てゐられ、寡言沈默の人であつた。（二）

新聞不況の原因は今一つある、それは政府の壓迫で、度々發行停止を喰つたからだ。それに十六年三月、立憲政黨といふものが解黨されたので、政治熱もいさゝか下火になつて、人心の緊張が緩んだなどといふこともあつたらう。それやこれやで、日本立憲政黨新聞は、遂に十八年九月に元の大阪日報に改題して、純然たる營利本位の新聞に還つた。此の前後河津、草間等の人々が相繼いで退社したが、天香も亦、十八年の春立憲政黨新聞を去つて、久し振りに上京し、繪入朝野新聞に入つて編輯を主宰することゝなつた。繪入朝野は、創刊の當時は兎に角、この頃は先づ朝野

新聞の別働隊といつた形であり、朝野の論説兼雜錄記者として好評であつた淺野乾が主筆であつた。淺野と天香とは、天香が明治十二年朝野にゐたころから相知であつたので、今度立憲政黨新聞を退いたのを機會に淺野が招いて入社せしめたのであつた。

（前略）入社後は（天香）編輯局の實權を握り、從來の編輯ぶりを一新して先生一流の編輯ぶりを發揮せられ、從來の傍訓繪入新聞とは全く局面の異つたものを作られた。論說は淺野、小宮山の兩氏が交る〲執筆し、この挿繪は當時賣出しの尾形月耕氏が新銳の氣を負ふて、繪入自由新聞、改進新聞、自由燈の諸家を向ふに廻して容齋張りの新機軸を見せた。普通の雜報記者には成嶋門下の人々あり（伊東枠太郞、臼井喜代松、武內某など）、艶種記者の主任としては前島和橋、久保田彥作二氏がゐたが、久保田氏は間もなく退社、和橋氏專ら輕妙の筆を振つた。小說は從來三世柳亭種彥翁及び其の門下の人々にかゝせてゐたが、小宮山先生入社後間もなく種彥翁は逝去した（註。十月十一日逝去）（三）

と岡田氏は追懷してゐる。天香は、論說のみならず、小說も書いた。その或るものは、今日判明しないが（變名匿名の爲め）、或るものは歷然と指呼することが出來るのである。岡田氏はいはゞ天香門生格であるだけに、その追懷の言には誇張と美化があるかも知れないが、左の一節を讀むと、天香の人品が如何に嶄然としたものであつたか解るであらう。

明治初年東京に簇生した小新聞の記者といふは、幕府時代の戲作者であつた二代目爲永春水、假名垣魯文、山々亭有人（條野傳平、採菊山人ともいふ）、三代目柳亭種彥（高畠藍泉）などの人々が領袖となつて流派を唱へ、世間からも假名垣派、柳亭派、爲永派などと稱し、各派とも多くの門弟を有し、幅をきかしてゐたものだが、中には昔しの卑しい戲作者根性をもつてゐる者もあり、總體に人品のよくない者が多かつた。幇間者流と見分けのつかない

人もあつたのだ。處が小宮山先生などは、其の出身といひ、品性といひ、學識といひ、到底彼等とは共に齢ひすべきではない。一見士君子の風丰があつて、其の謦咳（けいがい）に接する者威壓されざるはなかつたのだ。

當時繪入朝野新聞社にゐた久保田彦作氏の如きは、狂言作者の一人で、常に俳優に接して、諧謔これ事とし、其の恣態言動とも幇間まがひの似而非通人であつた。同じ社に机をならべてゐても、先生と肌のあふ筈がない。けれども先生の下宿などへ來ては、低頭平身、是命唯從ふの態度を示しながら、蔭では悪口をいふのであつた。（中略）又同社の前島和橋氏なども、劇場の各新聞記者招待の席上などで、頻りに小宮山先生の蔭口をいつてゐるのを傍聽した事がある。其の癖此人も先生の前では、平蜘蛛のやうに這ひつくばつてゐたものだ。（中略）つまり先生の人格は、卑しい俗物には解らないのだ。さうかといつて、先生は、堅い一方の野暮天かといふに、さうではない。須摩琴の嗜みもあり、横笛尺八も吹かれ、茶湯、生花も一通りはやつて退けられ、盆景などはビツクリする程うまかつた。折花攀柳の遊びにかけても、拔目はない。大阪にゐられた時分には、新町の美形が、先生に血道をあげてゐた事もあつた。（下略）（四）

だが天香の繪入朝野に在ることが、さう永くはなかつた。十九年一月、表面これといふ理由もなく、突然退社した。それは、噂されたところによると、主筆の淺野との間に面白からぬ事柄を生じたからだつたらしい。淺野は自分で賴んで天香を招いたのだが、天香の聲望が日を逐ふて隆盛になり、繪入朝野の實權も天香の手に移りはせぬかと危ぶまれたので、つまらぬ嫉妬を起して社主に讒訴したのが原因であつたといふ。

天香は一時根岸に閑居し、「めざまし新聞」に小説を掲げたり、他の新聞に雜文を書いたりしつゝ、悠々と生活を樂しんでゐたが、十九年十二月、再び下阪して浪華新聞を主宰することゝなつた。

浪華新聞は此の年六月大阪の代言人岡崎高厚の發行したものであるが、その創刊に關係したのは、坂崎紫瀾（主筆）、

野崎左文、香川蓬洲等であつた。坂崎は元々創刊準備だけの約束で下阪したものであるから、同八月一日第一號を發刊し、無事生長の見込みがつくと、十月には東京に引上げた。岡崎氏は、坂崎の後任として天香を招き、浪華新聞の主宰を託した。岡崎氏と天香とは、立憲政黨新聞以來知己の間であつたのだ。（岡崎は同新聞株主で常議員の一人）。

天香は浪華新聞を主宰することになると、これを一番物にして見せようといふ意氣で、硬派記者には多田直勝、千石濫、軟派記者には岡田翠雨と居殘りの香川蓬洲、それにこれも居殘りの三品蘭溪を小說方面の主任にして編輯局を揃へ、强敵朝日新聞に對抗しても相應手答へのある戰の出來るやうにし、新聞用紙は青色洋紙をつかつてゐたのを白色に改め、會社員こゝを專途と奮闘した。

社說はこれまで坂崎氏が一流の名文を書いてゐられたが、之に代つた小宮山先生も亦一派の文體を以て、少しも遜色のない諷刺文をかゝれ、小說は二篇掲載する中の一篇を三品氏が擔當して、北國の貿易商錢屋五兵衛の事蹟を寫本の實錄によつて脚色し、他の一篇は其頃賣出しの坪内逍遙博士に依賴した。社では之を呼物にするつもりで、當時としては隨分多額の原稿料を供したやうであつたが、博士は度々の希望に反し、式亭三馬の「酩酊氣質」や「四十七癖」の如き滑稽本に模して、當時の世相を書かれたので、一部の酢豆腐連には喜ばれたが、一般の客には受けなかつた。（五）

岡田氏は更に他の場所で、天香の文章についてかういつてゐる、――

小宮山先生は、博識宏聞の能文家、其の草せらるゝ所の論文は、殊更傍訓新聞に適する樣、興味本位の通俗平明を旨とし、然かも漢語雅言を縱橫自在に使ひこなして行文流暢、氣品亦卑しからず。坂崎氏の論文に比すれば、亦別種の風格趣致があつて、眞に得難い名文であつたが、惜い哉、其頃大阪の讀者には之を玩味愛賞する人が鮮なかつた。（六）

だが折角天香等の努力に係らず、形勢が有利に進展しなかつた。殊に打擊を受けたのは、かの大井憲太郎等の大阪事件が起つた際で、この時には朝日新聞の比較的完備した報道機關に壓迫されて、著るしく賣高が減つてしまひ、新聞の維持が困難になるに至つた。それで社主岡崎氏も終に斷念し、天香と謀つて、當時日の出の勢であつた神戸の貿易商兼松房次郎へ一社を擧げて譲渡すこととなつた。かくて天香は、事志と違つたまゝ、二十年七月の末歸京した。歸京後の天香は暫く浪人してゐたが、改進新聞の須藤南翠や、これも今は改進新聞に轉じてゐた岡田翠雨等の勸めで、いはば改進の客員めくものとなり、この年十一月から小說數篇を寄稿した。天香の名が小說家として後世に傳つてゐるのは、主としてこの時書いた小說の人氣によるものである。

とかくする中に、明治二十一年六月大阪朝日新聞社は、當時不振の極にあつた「めざまし新聞」を買收して東京朝日新聞と改題し、華々しく刊行することとなつた（七月）。朝日の社長村山龍平は見掛けによらず太つ腹な漢子でもあり又知人の勸もあつて、多年敵方の勇將として健鬪した天香を聘して東京朝日の主筆とした。恐らく村山は、天香の人物技倆を識つて、久しく推服してゐたのであつたらう。

當時の東朝の陣容は、硬派記者（方今の樣に記事が複雜でもなく、政治、經濟、敎育、府市政、社會の各部に分立してゐなかつたから一括して眞面目な記事を取扱ふ人を硬派記者といひ、花柳情事其他社會一般記事をつづる人を軟派記者といつた）は大朝から轉社した關德氏（逐軒）を首とし公論新報社から轉じた佐藤眞一、東京日々新聞の論說記者であつた河岸貫一（櫻所）など十數名（今の三越百貨店の重役で盛名ある小田久太郎氏及び後に本願寺會衆長となつた山本貫通氏も其末班にゐられた）軟派はめざまし新聞から居殘りの若菜貞爾氏（胡蝶園）を主任とし、其の補助に渡邊霞亭、半井桃水氏などが列してゐたから、當時としては先づ堂々たるものであつた。小說は霞亭、桃水の兩氏の外に宮崎三昧氏が大阪朝日から轉任して其班に加はつた。幾程もなく霞亭氏は大朝に轉じ、桃水

氏は小說專任となつたので、軟派の補缺には先づ根本吐芳氏が入社し、次で右田寅彥氏が都新聞から移つて入社した。又小說班には饗庭篁村氏が讀賣新聞から入つて之に列し、次で村上浪六、武田仰天子の二氏が入社したが、夫れは創刊後數ケ月若くは一箇年を經てからの事である。

東朝初代の主筆となられた小宮山先生は、鋭意獻身的精勵の覺悟で、從來和服しか着られなかつた先生が、活動に便する爲め粗朴なる詰襟の洋服を新調せられ、毎日午前九時から出勤して、夕刻は誰よりも後に殘り、大組の校正までも見屆けて退出するといふ精勵ぶりであつた。當時私はまだ改進新聞に在つて、先生の執務振りは見なかつたが、日曜毎にお宅へ伺候してゐたから、大約推想する事が出來たのだ。

社說は干河岸氏もかき、杉浦重剛氏及び今の慶應大學の講師瀧本誠一博士が社外から寄稿し、其他は多く小宮山先生が執筆せられた。政事雜報は橫澤次郎氏（後に桂臺灣總督の祕書官になつて收賄罪に問はれた）、橫川勇次氏（沖貞介氏と共に日露戰役の際、報國の大義に殉じた）、小西和氏（現代議士）、並木角太郎氏外數名の人々が探聞して來てはかくのであつたが、孰れも先生が眼を通され、過半は先生の靈筆によつて刪正潤色せられ、陸離たる光彩を副ゆるのであつた。橫川勇次氏、佐藤眞一氏などは、何れも小宮山先生の人格手腕に信賴してゐたが、一派の人々の間には先生の態度につき往々不滿が釀されて、抗辯する者もあつた所から、聖人にも比しき純情の先生は、痛く神經を刺戟せられ、頻りにうるさがつてゐられたのだ。（下略）

そのころ小宮山先生の許へは、絕えず堂々たる人士が枉駕せられた。衆議院第一世の議長中島信行、司法次官河津祐之及び草間時福、群馬縣代議士新井毫などの諸氏であつた。何れも曾て大阪の日本立憲政黨新聞社に在つて、親交を結ばれた人々であるが、此の人々によつて政府及び各政黨の消息は隨分明らかに分つて來るので、先生は社に在つて、外勤記者の探つて來る情報を燮理せらるゝに當つても、幾分か其所見を加味し、時には其の原稿の全部

を改竄せらるゝ事もあつたのだ。これが爲めにも外勤記者の一部には不平を生ずるに至つたのだ。（七）

天香は背は中以下であつたが秀麗な風貌の持主であり、質素ながらキチンとした身裝をしてをり、加ふるに文藻も識見も手腕も、社内一といふので、當時ピカ一といふ綽名があつたといふ。が岡田氏の追憶に見える如き一部の人々の不平不滿が、恐らく年とともに高まつてきたものと見えて、天香は次第に快々として樂しまず、やゝともすると家居して詩酒に鬱を遣る日が多くなつた。傳へるところによれば、編輯方針か何かに關して、社の幹部とも意見の衝突を來したなどもあつたといふ。それやこれやで、二十七八年以後は病と稱してふつつりと出社しなくなつた。社長村山は、事態の安からざるを感じて、再三天香の許に駕を枉げて出社を乞うたが、天香は言を左右にして、出社を斷るばかりであつた。勿論出社は斷はつたが、執筆は差支へがないからといふので、小說隨筆等の寄稿は再々した。この狀態が數年間續いた後、終に自然消滅的に、天香は朝日新聞社を退いたのである。

この後天香は悠遊を事として、全く浮世の塵雜を脫した生活をして居た。それでも最初の中は時折來訪する友人達と好んで談笑したものであつたが（彼の杉浦重剛の如き當時皇太子たりし　天皇陛下に帝王學御進講中であつたが、その歸途往々駕を枉げて天香の居を訪ひ、快話數刻に及んだといふ）、終には全く門戸を閉ぢて世間と交りを絕ち殆んど仙界の人の如き有樣であつたと言ふ。

昭和四年の春、大阪朝日新聞社に於て創業五十週年の記念祝賀が盛大に行はれるや、村山社長は、流石に天香の舊功を認めて、報ふるに千金の贈を以てしたといはれる。

天香は晩年中風を病み、その甥小宮山昌紀氏（現東京朝日新聞社員）の許に引取られて、懇ろな看病を受けてゐたが、昭和五年三月二十日七十六歲を以つて沒した。

註（一）明治文化硏究第四卷第十二號、岡田[illegible]「澤田幸水先生」（中）

註（二）　昭和五年九月、「ひむろ」第五卷九號、岡田翠雨「小宮山天香先生」（二）
註（三）　右同
註（四）　昭和五年十月「ひむろ」第五卷十號、「小宮山天香先生」（三）
註（五）　昭和五年十二月「ひむろ」第五卷十二號、「小宮山天香先生」（四）
註（六）　明治文化研究第五卷第六號、岡田翠雨「予の師事せる須藤南翠先生」（三）
註（七）　昭和六年一月、「ひむろ」第六卷一號、「小宮山天香先生」（五）

二　詩　歌

天香は新聞記者としては稀有な文藻の持主で、詩歌の嗜好が深く、而かもその作るところは、共に尋常に超えてゐた。彼は別に詩人を以て自ら居らなかつたが、然し大阪時代には、香國土居通豫等の如き專門詩人と詩酒徴逐の遊をなし、彼等に勝るとも劣らぬ技倆を示した。二三その見本を左に掲げよう。

三寸舌歌　讀史有感偶作此歌

三寸舌　一枝筆
筆可折兮舌可截　萬里帝州人不歌
咸陽春深坑火滅
坑火滅　詩書亡
從此生民奈射鄕　翁呼媼呼欲何適
枉起赤龍約三章

三寸舌　一枝筆
刀鋸加處紀綱絕　豎子成名君休尤
君家綱紀手自裂

長嘆息行

長嘆息　千古涙
千古涙在水東逝　人生五十幾時休
披卷消愁字亦愁　願焚世間書萬卷
扁舟載月臥江流

これは何れも明治十七年一月の作であるが、歌行樂府の體を用ゐてゐる、此の體は、詩才豐富な人の好んで用ゐるものであることは、漢詩の歷史的知識を多少もつてゐる人々なら直ちに首肯するところだ。尙ほ晩年は好んで絕句を作つたが、その數が數百篇ある。今その中一二を抜くと、――

秋柳詞　五首中錄二

誰弔夢骨過醉鄕　眼前秋思屬妻樓
長條似昔當年恨　嫋娜自扶趁夕陽

又

特地早涼感世情　惚荒未免容心驚

秋寒一夜長楊夢　誤聽風聲作雨聲

天香は又、詩ばかりでなく和歌にも達してゐた。和歌の嗜みは、いつ頃から持ち始めたものか、壯年の時代にはそれ程でもなかつたらしいが、晩年に近づいてからは、ひどくこれを嗜んで、鈴木重嶺に正を乞うてゐた。又、晩年世を謝してから後も、和歌の團欒の案內でもあると、喜んでこれに應じた。尙ほ自ら進んで、小人數の定期の集會に講義めいたことをしたこともあると聞いてゐる。左に若干首揭げよう。主として晩年の作ばかりである、——

閑居戀

世にあればありのすさみに忍ばれき
かくれては猶おとづれもなし

閑庭霰

あれにしを宿のさゝはら音たてゝ
ちるはたまく／＼あられなりけり

玉

あら玉もまたまもあれどうるはしき
ことばの玉をいかでひろはん

心

天つちのなにかおもひの隈ならん
ひろかりけりな人のこゝろは

幽思

物思ひ。しなひうらぶれ我をれば。折しもあれやねやのとに。しどに生たる玉ざさに。霰うちくる上枝には、あら玉くだけ下枝には、眞玉みだれてさら〳〵に。霰打散る時の間を。さもらひをればさら〳〵に。物も思はずうきふしもなし。

以上は眞の手任せに引いたものであり、作としての佳不佳に至つては自ら批評もあらうが、彼の文雅の嗜み、彼の詩藻が尋常に超えてゐたといふ點だけは、首肯させるに足ると思ふ。

三　小說の作

小說家としての天香は何ういふものを書いたか、時の文壇と何ういふ接觸があつたか。

天香の小說的文字は、恐らく十三年の魁時代から發してゐることは、想察に難くない。だが、今日吾等が眼にし得る限りの魁新聞を見て、幾篇の讀物を見出し得ても、その何れが果して天香の筆に成るものか、それをそれと明確に指し難い。漫錄の欄には天香の戲文のあることは明白であり、これは强て指示せば指示し得ると思ふが、これ亦その文章の悉くが匿名といつても可いから、それも此の場合引き合ひに出すことを止めよう。此花新聞の初期には、天香の讀物が載つてゐるといふ（岡田氏）、今日此花新聞を讀んで、成る程――

〇初花譚（十五年三月三日以下）

の如きものは、如何にも天香らしい文章たることは認められるが、これ又署名を缺いて居るので、此等の作品が果して天香の手に成るかいなかは、讀者の印象に依つて判斷を異にするかも知れない。

要するに、明治十五年十一月、日本立憲政黨新聞に出た「勇婦テレーズ傳」の以前の小說的文字は、今日のところでは、明確に知り難いといはざるを得ない。それで、今假に、此の「勇婦テレーズ傳」を以て天香の明治文壇と接觸

した最初の小説と見なして論ずることにしよう。

「勇婦テレーズ傳」は、明治十五年十一月五日から十六年二月十三日まで日本立憲政黨新聞に掲げられた歴史小説である。原著者はフランスの塚原澁柿とでもいふべきエルクマン・シャトリアン氏、この『マダム・テレーズ』(一八六三年刊)を抄譯したものがこれである。天香は、前述の如く多少フランス語を勉強したにしても、勿論かういふ小説を譯すなどといふことはまだ出來なかつたから、河津祐之に口譯して貰つてそれを文章に直したものであるといふ。新聞へ出たまゝの文章は、可成り和軟な、稗史的なものであるが、後でこれを片假名交りの『經國美談』乃至『佳人之奇遇』式の少し硬い文章に書き代へて『慨世史談 斷蓬奇縁』と改題し、木板和裝四冊物として出版した(二十年五月)。依田學海、河津祐之、巖谷一六の序、末廣鐵腸の書翰、栗本鋤雲、依田學海の評、同じ栗本鋤雲の跋語を加へた堂々たるもの、挿繪は當時柘植の木版彫刻で洋畫の陰影を模刻する事を發明した島崎天民の努力に成る。發行所の鳳文館は有名な書家の默鳳道人前田圓の經營にかゝるものであつたが、前田氏はこの出版で、『佳人之奇遇』式の當て方をしようとしたものらしい。然し宣傳の少なかつた爲めか、賣行が餘り面白くなく、版元は少なからず損失をしたらしいといふ(岡田氏)。

卷頭に天香の譯に成る新體詩風のフランス國歌があるが、この點も研究家の見落すべからざるものであらう。

此の小説の內容については、後に詳しく語らう。

「勇婦テレーズ」に續いて、十六年二月二十七日から四月十一日まで「ジュリアス・シーザルの劇」が同新聞に掲げられたが、これは鶯林河島敬藏の原譯に天香が文飾を加へたものである(十九年、『羅馬盛衰鑑』と題し、鶯林卑人、天香

逸史共譯の名で刊行）。岡田挙雨氏の如きは、新聞へ出たものは、殆んど天香の文章だといふ意味に明言してゐるが、縦しそれ程でないまでも、可成り天香の手が入つてゐることは疑へない。

「名節三葵」（十六年六月六日―七月二十四日、四十一回、日本立憲政黨新聞）、これは署名がないがその文章よりして天香の手に成ることは、明々白々疑ふ餘地無しである。「信義之友」といふ古ギリシヤの三名士のことを書いた歐洲の戯曲を小説に引直したものであるといふ。これも、內容についての詳しいことは、後に讓らう。

十六年六月二十三日以降の此花新聞（五一一號以下）に「錦繡美談花の曙」といふ幕末を舞臺にしたものが出てゐるがこれが酷く天香の筆致に似てゐる。或は天香と斷じても可いかも知れぬと思ふ。これは然し確信がないから、たゞ研究家の注意を惹くに止める。

外に立憲政黨新聞に載つたものとしては、十七年一月四日―十六日「歐洲情史小葵物語」これは一寸した短篇風のものだが、文章も清麗であり、內容も（やゝ教訓的に過ぎる點が何うかと思ふが）純愛の物語で、薄々とだが、後の森田思軒、森鷗外等の譯業の先驅的な氣味が見える。或る貴族の少年が、良妻を得んとして、硝子職人に化けて微行する。さうしてマリイといふ少女にその未來の夫人を發見するが、なほ彼の女の心を試すため、母の形見の金指環を贈る。マリイは無名の貧人の情のこもつた品といふので、それを大事にしてゐる。やがて貴族の家では寶物詮議が始まり、本物の硝子職人や、その情人たるマリイの家の女中が奉行所に引立てられる喜劇などもあつた末、少女マリイの純情が認められて、貴族の夫人となるといふ。マリイが、意地のわるい伯母の仕打に堪へかねて、救ひ手を望んでゐ

る、そこへ硝子職人の少年のひよつこり出て來るところが、殊に巧に出來てゐる。

十八年三月―五月「慨國餘話柴の小楯」これは譯物で署名は無いが、文章は何うしても天香でなければならぬ。私はこれを天香の譯文として、後に語ることにしよう。原作はドイツらしいが、原名原作者ともに未詳である。

今一部、これは新聞に出たものではないが、立憲政黨新聞在社時代に書いたものに、『新篇黄昏日記』がある。（十八年三月刊）。これは天香道人閑醒々居士編となつてゐるが、醒々居士も天香の別號の一たることは、岡田翠雨氏の證言がある。これは有名な少アレキサンドル・デュマの『椿姫』を飜案したものであるが、たゞ原著は、末段が女主人公の悲劇的な死で終るが、この飜案は結局才子佳人團圓して目出度し目出度しに終ることになつてゐる。恐らく讀者の理解や趣味を考へてのことであらうが、そこに矢張り時代が見える。但し飜案としては却々好い出來である。

此の頃の天香、小説家としての彼の教養趣味、又交友などについて、幸ひ岡田氏の追憶談があるから、それを引かう。これによつて、この頃の天香の著譯がなほ數篇を加へ得た筈なことが分かるのも、面白いことである。

小宮山先生の島之内綿屋町の僑居には、隨分人の出入りが多かつたが、當時朝日新聞に居られた宇田川文海翁は能く其のかきものに就いて相談に來られた。

當時小説の一つも書かうといふ者は、多く曲亭馬琴や山東京傳の讀本、爲永春水、松亭金水の人情本、式亭三馬、十返舍一九の滑稽本などの俗流に愛讀せらるゝものを耽讀して、其の文章趣向を模倣するのであつたが、小宮山先生は識見超凡、其の嗜好も月並でなかつた。讀本では種彦の「綟手摺昔木偶」六樹園飯盛の「飛騨匠物語」「近江縣物語」「しみのすみか物語」四方歌垣主人の「月宵鄙物語」などの典雅優麗なる文章を愛し、草双紙では馬琴、

京傳の物よりは種彦物、又は山東京山（京傳の弟）の「教草女房形氣」や「乳母双紙」などを好まれた。馬琴、京傳が支那小說燒直しの怪力亂神を語るを以て得意とするに引かへ、京山は別に一生面を拓き、西鶴、自笑、其碩の氣質物を狙つて、尋常茶飯事に近い平凡なる事件を資料として、巧みに童蒙を啓發しようとし、穩健質實なる趣向や筆致を以てするのをめでられたのである。種彦物の中でも草双紙の「正本製」や人情本の「緣結月下の菊」（お夏淸十郎）などの都て毛色のかはつたものをめでられた。

文海翁も小宮山先生と嗜好が一致し、互ひに手に入つた珍本を交換してよまれたが、四方歌垣の鄙物語の如きは、慥か文海翁が先によんで小宮山先生に奬められたやうであつた。小宮山先生は飛驒匠の高雅なる和文を愛せられ、竹芝の翁が娘の横死を悲しむ所の如きは、幾たびも繰返して讀まれ、殆ど暗誦してゐられた。漢書の如きは、餘り多く書架に置いてなかつたが、老莊諸家や經書詩書は疾くに涉獵して餘さず、急所々々は、これも殆ど暗誦してゐられた。立憲政黨新聞の編輯局でも、先生を生字引の如くに尊んでゐた。

明治十七年甲申の新春であつた。文海翁は干支を當込み「猿猴お申」といふ角書をして「新年第一筆」と題する小說を朝日新聞にかゝれたのが、非常の大當りであつた。引續き「巷說双葉松」「新編三枝物語」などをかいて（註、朝日新聞に）名聲を揚げられたが、「三枝物語」は初め小宮山先生が河津祐之氏の口述によつて、佛國小說を飜譯してゐられたのを文海翁に讓られたので、文章は大半小宮山先生の執筆に係り、唯言葉のみを翁が書かへられたのであつた。

文海翁の當り小說は、心齋橋北詰の書肆駸々堂から悉く單行本として出版したが、其の序文は小宮山先生のかゝれたものが數種あつた。猿猴お申の如きも其の一つだが、上梓の際、翁が先生に序文を賴みに來られると、先生は「新年第一筆といふは一時的の場當りで、永久に傳ふべき題でない」と改題を勸められた。翁も之を容れ、先生に

命題を托されたので、先生は『新編淀の車』と命ぜられた。それはお中が舊淀藩の士族の胤であるからだ。

明治十七年の冬、私は日本立憲政黨新聞を退いて東京へ往つたから、其後の事は精しく知らないが、明治十八年文海翁のかゝれた「何櫻彼櫻錢世中」は沙翁の『ベニスの商人』を飜譯したもので、大好評を博した（註、十八年四月―五月、朝日新聞）併しこれも内幕を割つていへば、材料は小宮山先生から出たのである。初め先生が單行本として發行すべく、起稿してゐられたが、恬淡水の如き先生は、文海翁の懇望により、惜氣もなく其の材料を譲られた。題命は其角の句「何さくら彼ざくら錢の世なりけり」といふによつて、先生が選ばれたのだ。（一）

此の談によると、「何櫻彼櫻錢世中」も、「新編三枝物語」も少なくとも半分は天香の作といつていゝわけである。前者については、有名なものだけに、特別に新しく說く必要はないが、後者について眞のいさゝか一言しよう。これは、十八年五月―七月、朝日新聞に出たものである。前述引用中に見えるやうに、如何にも飜案らしい匂ひのする時代小說であるが、原作はフランス小說とのみで、題名作者とも解からぬは遺憾である。幕末の頃、何處の地方かに三枝侯といふ藩公があり、虐政をもつて人民を苦しめる上に、家には奸臣が跋扈して、主家横領の陰謀を巧んでゐる。それを、義助、民藏、勝七の三義民が、忠臣の家老梅澤右京、竹田左京等と心を合せ、主公秋政の妹照姫の助力を得て、奸臣を退けて主家を建て直し、秋政をして改心せしめて良政を布かしめ、萬民が泰樂を樂しむといふ筋である。勿論極輕くだが、政治的寓意のあることは、冒頭や團圓の文句で明白である。

十八年春繪入朝野に轉じて以後の天香の小說も、數篇あると思ふが、只今のところは、私が天香かと推定するのは、左の一篇だけである。――

○鶴の巣籠（十八年四月二十九日以後）

署名は池畢閑人とあるが、この閑人の天香たるは、明白であるらしい。内容は、祇園の藝妓麻鶴（まづる）の生涯を寫したもので、俠客大庄と兄妹の名乘りをし、近江の豪商松井某に根引され、俳優璃鶴を翻弄し、或は勤王の士楢林榮實と二世を契るなど舞臺は丁度幕末維新にかゝつてゐるので却々賑やかなものだ。

「ともしび」新聞に書いた小說中、今日確實に判明してゐるのは、――

○青燈夜話（十九年六月十九日以後）

であるが、――

○今俗浮陽譽の花（十九年二月九日以後）

も、天香の小說であるやうに思はれる。今前者に就いてのみ、些か語つて置かう。私の見たのはその第十二回迄であるが、大阪長町内に隱れ住む强盜小動浦右衞門の娘おさとと、質屋江波屋の一子七之助との間に醸し出される戀物語であるが、その全體の空氣が何うも飜案物に似てゐる。餘程巧みに飜案してあるが、外國小說を種子につかつたものであるらしい。それも、私の見るところが狂はぬとならば、ユージェーヌ・シューの『パリの祕密』の筋書だけを取つて、巧みに作り替へようとしたものであらう。七之助がおさとを尋ねんとして惡漢の巢窟に迷ひ込み、困難するところまでしか見てゐないが、それだけで見當がつくのである。

浪華新聞時代の天香は何うであつたか、矢張り小說も書いたことゝ思ふが、肝心の浪華新聞がその存在が稀有に屬する爲め、私もまだ纏つたものに寓目してゐないので、何とも斷言しかねる。だが從來の分に徵して、矢張少くとも一二篇は書いたものと思ふのが、無理ではなからう。

浪華新聞をやめて東京に引上げた天香は、恐らく餘り得意な心境ではなかつたらう。これは、殊に立派に生長させや

うと努力してゐたゞけに、幾分落膽し、歸京後も自己の運命について氣迷ひの氣味があつた。そこで、改進新聞からの小說寄稿の申込みは、天香にとつては、大袈裟にいふと天來の啓示のやうに思はれ、一番これによつて自己の運命を開拓しようといふ志を起し、平生の技倆を揮ひ盡してその小說を書いたものに違ひない。卽ちこれが成功したら、甘んじて小說家になつても可いといふ氣があつたものに違ひない。その意氣込みが、彼の小說を成功させたものであらう。此の前後の事情に關しては、矢張り岡田氏の追憶を引く方が面白いからさうすることにする――

歸京後の小宮山先生は、元の如く根岸の里に閑居せられたが、浪人ではすまぬので、私は先生に勸めて改進新聞の小說をかゝせたいと思つた。併し先生の小說はいつも高尙過ぎて、俗受がしない虞れがある。殊に寺家村社長は低級ものが好きで、南翠先生の――其頃としては尖端的な新思想――小說などは、讀者が受けるから雷同して稱讃してゐるものの、其實どちらかといへば餘り好まない。むしろ雜賀柳香氏などの書く物が氣に入つてゐるのだから、若し先生にかゝして受けなかつた時は、私があやまつた位では追つかないと心配の餘り、先づ南翠先生に相談した所、同先生は小宮山先生の文才識量に敬服してゐられたから『こりやア名案だ、受ける受けぬは問題でない。兎に角かいてもらつたがよい。萬事僕が引受ける』と乘氣になつて同意せられ、直ぐに會計長の桐原捨三氏と謀り、寺家村社長を承諾させられた。

そこで私は根岸へ駈つけ、改進へ小說寄稿を奬め『但し御承知の通り、改進にあまいものが受けるのですから、そこはよろしくお手加減を……』と附加へたが、幸ひ先生は大呑込みに呑込まれ『一番自分の運試し、腕試し……一面には世間の程度試しに、異つた新しいものをかいて見やう』といはれた。そして間もなく起稿されたのが『聯島大王』と題する一篇で、其題號の上には「冒險企業」といふつのがきが冠せられた。

當時の新聞小說は、多く全部で四五十回、長くて七八十回、百回と續くのは皆無であつた。そのころ讀賣新聞で

鳴らしてゐた饗庭篁村氏などの小說は、一種かはつた八文字屋張のものではあつたが、いづれも二三十回であつた。南翠先生の政事小說『綠簑談』『新粧の佳人』の如き改進の紙價を騰からしめたものでも、回數は百回に屆かなかつた。處が小宮山先生の『聯島大王』は回數に於て先づ時流を超越し、百數十回に及んだのだ。勿論容受がわるかつたら、社でもさう長くはかゝせないが、それが又非常な大受であつた。私はどんなに喜んだらう。

本篇の趣向は、何とか健次といふ勇敢なる一靑年が、窮乏のうちに壯圖を懷き、廢物同樣の老朽汽船を手に入れて、僅かに數名の同志と共に鵬程萬里の南洋航行を企て、幾多の艱苦を凌いで絕海孤島の蕃人を征服し、殖產を講じ工業を興して德望を網め、遂に諸島を連衡せしめて其の大王となる壯絕快絕の雄篇であつた。當時は矢野龍溪氏の「經國美談」「浮城物語」森田思軒氏譯述の「大氷塊」「天外奇譚」などの冒險小說が盛んに持囃される樣な時潮であつたから、すつかり人氣にはまつて、湧立つ樣な評判であつた。文章は雄勁でもあり、豐麗でもあり、輕快でもあり、凄壯でもあつた。だから重に知識階級の人々に歡迎せられた。

當時の新聞小說は、作者の名前を記さぬものが多かつた。南翠先生なども皆々無名でかゝれた。そして當時の東都の新聞界には、南翠先生ほど雄麗なる文章を以て、新趣向の小說をかく人はなかつたので、世人は此の「聯島大王」もテツキリ南翠外史の作だと思ふ人が多かつた。現に當時「女學雜誌」を編輯して有名であつた嚴本善治氏の如きは、南翠先生の許へ小說を賴みに來て『どうか、聯島大王の如きものをお願ひしたい』といつたので、南翠先生は笑つて之を辯明せられ、私も共座にあつて、共に大笑ひをしたのであつた。

改進新聞は之に味を占め、引續き起稿を先生に賴んだ。今度は征臺餘聞とつのがきして「看護婦人」と題するものをかゝれた。本篇は女性の傑人が、西鄉從道將軍の臺灣征伐に從軍して偉功を立てるといふ目醒しいものであつたが、これ亦異數の好評であつた。

改進新聞に改進黨の機關として設けられたもので、同黨の本據「郵便報知新聞」の支店の如きものであつたから、社員は互ひに往來し、矢野文雄氏の令弟小栗貞雄氏、森田思軒居士の如きは絶えず改進新聞社へ遊びに來られた。其際にも思軒居士の如きは、小宮山先生の文章を近來の名文だと激稱してゐられた。又書肆春陽堂の主人和田篤太郎氏は常に南翠先生の許へ出入して、先生の所作は殆んど餘さず乞受けて出版してゐたから「聯島大王」に惚込んで、是非出版したいといひ、私に紹介を頼んだから、私も欣んで小宮山先生に取次いだが『あんなもの出版されてたまるものか。強てほしいといふなら書直してやつてもよい』といはれたまゝ、ツイ其れなりになつてしまつた。尤も先生は改作のお考へはあつたらしかつたが、其内に東京朝日創刊の主筆になられたので「それどころではない」といふ事になつたのだ。（二）

この追憶談の一段は實に面白いので、つひ途中で打ち切るに忍びず、長々と引用したが、讀者も決してその過長を咎めまい。但し岡田氏の精詳な追憶の中にも少々の錯誤はあるので、天香が改進新聞へ書き出した最初の小説は、決して「聯島大王」ではない、それは改進新聞（二十年十一月一日）に出た次の記事を見ると明らかである。

○小宮山桂介氏　今度本社が事業を擴張し紙上に掲ぐる小説も毎號三題づゝに增した事に就ては彼の有名なる天香外史小宮山桂介氏を客員として招聘し毎號一題づゝ掲載を遺囑したり本日の改進新聞第一ページに「籬の俤」と題して掲載し初めたるは即ち同氏の著作なり

即ち「聯島大王」の前に、「籬の俤」といふものがあり、それが天香の小説で改進に掲載された第一となるわけである。

「籬の俤」は十一月一日から同月十八日まで改進に出たものである。内容は、いさゝか小手調べの氣味か、天香の作

としては、可成り甘い物で、たゞ文章の老蒼灑脱なところ位が取柄といへやう。甲乙なる二人の青年があり、甲は舊來の箱入息子風に生立つたもの、乙は早くから西洋の空氣に觸れ、最近歸朝したもの、二人が同時に伉儷の佳人を得ようと欲する。ところが媒人の奔走で共に恰好の佳人が見つかり、いざ見合をするとなつて、（折柄全盛時代の）團子坂の菊人形園をその場所と定める。佳人の方も一人は全くの箱入娘風のA、一人は洋服洋髪、萬事西洋趣味のBで、媒人達の心組では甲青年にはA孃を、乙青年にはB孃を配するといふのだ。（誤解するといけないから一寸注意するが、この二組の見合は元々全然無關係に行はれたものだ）。然るに見合の結果は、案外にも新歸朝の乙は箱入娘のA孃を欲し（A孃も此の方を好む）、箱入息子の甲は却て西洋趣味のB孃を思ふ（B孃の心理もさうだ）。媒人達は番狂はせを演ずる、その結果一寸した茶番陰謀があつたり、喜劇的可笑味があつたり、強請欺騙の場面も出るが、結局好きな同士と納まつて、大團圓となるといふものである。或は何か西洋喜劇の飜案かも知れない。文致には篁村風といひたいところが可成りある。

「聯島大王」は、二十年十一月十九日から二十一年三月二十八日まで百三十日程も連載されたものである。此の小說の世評内容については上記岡田氏の追憶談に大體が見えてゐるが、尙ほその内容の檢討は後章に試みよう。次いで二十一年四月五日から「看護婦人」が掲載され始め、五月九日まで及んでゐる。これの内容その他も、大體は岡田氏の語つてゐる通りである。此の小說についても、後章に於いて多少詳しく語るつもりである。

以上の如く天香は、「聯島大王」の一篇によつて文名が一時に上つたので、從來大阪方面にのみ知られてゐた彼の小說家的技倆が、漸く中央文壇でも認められ、森田思軒、饗庭篁村、前田香雪、塚原渋柿、宮崎三昧、南新二などの

東京文士の間に重視されるに至り、先づ所謂文壇大宗に伍することになつて、慧星のやうな光芒を示した。明治二十二年一月、須藤南翠編輯（表面は篁村、思軒、南翠と三人の名）で春陽堂が新小說（第一期）を出した時に逸早く天香を抱込んだといふわけである。

天香が新小說に掲げたものは、――

○しらぬ火（新小說第七卷―第十五卷）二十二年四月―八月

○花扇（新小說第十八卷―第二十二卷）二十二年十月―二十三年二月

の二篇で、共に卽眞居士の名で發表してゐる、卽眞の號は蓋しこの頃の臨時雅號と見ても可いものである。前者は一讀聯島大王に似た趣向であり、必ずしも政治小說といふのではないが、後に「聯島大王」に關連させて述る方が便宜であらうから、さうする。後者卽ち「花扇」は、洛東清水阪のほとり、落葉庵に住む花扇をひさぐ美人お蝶の薄命物語。お蝶は深草の人形師七兵衛の拾ひ娘だが、頗る美人であつたので、十五の春淀川縁りの某藩の家老大橋某が主公の侍妾にすゝめる。然るに此の藩には、幕末の諸藩によくあるやうに、佐幕勤王の爭ひがあり、心は佞邪ながら時勢を見るに慧い大橋がお蝶を通して主公を動かさうとする姦謀を早くも看てとつたのは、佐幕派の首領山科左太夫だ。左太夫は大橋の使者と詐つて我が家にお蝶を引取り、これを匿まふことになる。然るにお蝶の心が左太夫の子左太郎に動いたのが左太夫に知られ、物堅い左太夫は主公に濟まぬといふので、潜に家を落してやる。間もなく維新の騷動となり、佐幕派の左太夫は惡名を着て腹を切るが、大橋は主家安堵の功を笠に着て、主公も無きが如く振舞ふ上に、暗に主家の財物を横領する野心もある。明治の天下になつては、大橋一派の得意の一層なのに引換へ、左太夫の子左太郎は巡査になつてゐる。だが、かねて大橋等の腹黑いのを知つてゐるので、餘所ながら主家を守つてゐるのだ。だがその苦心も遂に報はれる日が來た。一日主家に盜みに入つた惡漢善太を捕へたのが機會となつて、大橋等の陰謀が

露顯する。

お蝶はその後父を善太に殺されてから、鳥追となつて密に左太郎の行衞を探してゐたのだが、偶然にも左太郎が大橋等を捕へた日、出逢ふことが出來、漸く志を遂げることが出來やうとする、ところが、大橋の告白で、自分がこの大橋の娘なのだと分かつたので、喜びが俄に悲と變る。

雜誌の都合で急に結末をつけたといふので、後半はひどく窮屈な不自然なものになつてゐる。天香の小說では拙い方に屬するが、前半の老練さは格別だ。

『涙の谷』は、單に天香の著書としてだけでなく、明治初期文學界に於ける稀本の一であるが、その內容に於いても、明治小說史上可成り細かな注意を要するものであらう。刊行は明治二十一年三月三十日（金港堂）であるが、著作はその前年二十年の秋避暑中に「いたづら書き」をしたものであるといふ。此の時の天香は二部の小說を書き、一を「嘆の垣」一を「涙の谷」と名づけた。その著作の主旨は――

「谷」は五女子を假りて社會の裡面に對する感情を寫さんことを願ひ「垣」は五男子を假りて社會の外面に對する感情を寫さんとの冒險を試みたるものなり

といふのでその大體が知られるが、天香はその新聞記者としての多年の體驗に基づいて一種の新しい社會小說を書くつもりであつたのであらう。私のいふ新しいといふ意味は、この小說の表現文章を見れば、直に知られるのである。

此の小說は、全體が眞木健三といふ人物の自叙傳になつてゐる。眞木の自傳的なところをすぐそのまゝ天香の自傳と見ることは、勿論出來ないが、然し叙述の間に大分相類似したところが出て來てゐるらしい。眞木が人の書生となつて苦學するところ、その主人を撰んで轉々と變るところなど、何となく天香が東京苦學時代を思はせるものがある。眞木の五番目の主人龍田大助の家に住み込むのは、明治十九年十月のことゝなつてゐるが、この龍田大助なる人

物は實に不思議な性格で、一寸日本人離れがしてゐる。その素姓は不明だが、學識あり、財産あり、立派な紳士である。だが爲人は寡言沈鬱、ユーゴーを愛し、正義人道の味方を以て任じ、社會改良を理想としてゐる、一言でいふと、ロシヤ虚無黨の首領といつた感じのする性格である。

眞木が龍田家の人となつた翌日、不思議な來訪者がある。それはもと新橋の藝妓であつた小大、今は時任お大と名乘る女性だ。小大は龍田の助力で妓籍を脫し、今は專ら女性の社會的救濟を任としてゐる。その小大が大助を尋ねて或る女性の救濟を相談する。それは日下幸子といふので、緣あつて宮中女官にまで召されたが、思ふところあつて辭退して叔父の家にゐたところ、叔父の上長官の手から、好もしくない結婚話が持ち出され、義理に迫つて死ぬ程懊惱してゐるのだ。大助は社會の不正を憤り、幸子の不幸を憐れんで、奮つて助力することにし、小大に對して、先づ幸子を保養旅行に連れ出して環境を代へることをすゝめる。小大はこれに從ひ、幸子を伊香保溫泉に連れ出す。健三も主命でこの一行に從ふ、一行には小大、幸子、健三の外に、阿駿といふ幸子の召使がある。

數週の溫泉保養で、幸子は健康にもどる。小大は忙がしいので間もなく歸つたが、大助も時々見舞に來た。幸子はいつとなく大助の來るのを心待ちにまつやうになる。身體が健康になり、心に希望があるので、幸子は全く生れ代つたやうになつた。

だが「涙の谷」である此の社會には、幸子の爲めの新しい涙の泉が用意されてゐなくもなかつた。それは、幸子が結婚を承諾しなかつた爲めに、表面上は別の理由で叔父の折田が免職になつたことである。幸子は此の悲報に深く嘆くが、同時に婦人にこれだけの自由も許さず、かういふ邪惡が平然と行はれてゐる社會の惡風俗に怒るところがあり、これを改良するのが將來の婦人の爲めの義務だと感じて、堅く戰ひの決心をする。

『涙の谷』の初編はこゝで終つてゐるのだが、これは二編三編と出たものとは考へられぬので、何うも、今日のとこ

ろでは吾等は以上の知識だけで滿足しなければならぬらしい。これがこのまゝで二編三編と發展して行つたならば、實に素晴しい社會小說が出來る筈であつたらうと思ふが、先づ先づ止むを得ない。『嘆の碑』が今日全然讀むことが出來ぬのに比較すると、初編だけでも手にし得るのが、幸福だと諦めなければならぬのだ。

この小說が何を書くつもりであつたかは、前條の引用文で略ぼ知られるが、この小說の總體の意向が、悲劇を通しての光明といふことになる筈であつたらしいのは、冒頭の眞木の文句によつて見當がつく。女性の立場からの社會改良を描くのが主眼であつたとして、さて前にいふ五人の女性とは誰々を指すつもりか。五人中三人は旣に出てゐるが（小大、幸子、阿駿、阿駿はもと小大と同じ家のお荷であつたのだが、大助の勸說と助力で妓籍を脫し、幸子の腰元として宮仕へをしたものである）、後の二人は何ういふ女性を、如何樣に出現させる心算であるか、その邊は全然分からない。

この小說はいはゞ片々たる小冊子だが、幾多の注目すべき點々をもつてゐる。第一に、前にもいつたが、表現に歐風の意味が加はつて來てゐる。小說形式としての自叙傳は、この頃ではまだ新しい。內容的には、婦人問題を取扱ふのに、恐らく意識的には此の小說あたりが最初ではあるまいか。從來とても婦人の政治進出のことは書かれゐではなかつたが、もつと廣汎な、婦人對社會といふ根本の問題を小說のテーマに取りあげるといふことは、當時としては思ひ切つて大膽な、又それだけに清新な着眼であつた。たゞ中絕したので、天香の意圖が十分表はれてゐないが、然しこの初篇一冊でも、その一斑を窺ふには足りるのである。婦人の味方、婦人の社會改良的努力の助成といふことは、一讀して分かる。

更に珍しいのは、その內容に思想的特色が加味されて來た。而かもその加味された思想が、天香獨自の見解に成るもので、決してそのまゝ他人のお說教の受け賣りではないといふ點が、殊に採るべき價値がある。

（前略）概ゆる人間世界の事柄といふ者は多くは其世から其世への遺傳に係はるものとぞ、前代の歴史は今代の歴史を仕込み今代の歴史は又後代の歴史を仕込むものとぞ（中略）されば人たる者がその行狀を大切にすべしと言ふことも只々社會の爲に好き情態を造らんとするが爲に外ならず、只々次の世の爲に好き社會を遺さんとするが爲に外ならず只々子孫の爲に好き歴史を造らんとするが爲に外ならず此が人たる者の第一の義務といふ者にて侍らん此が人間の事業の極意と言ふ者にて侍らん（第五回）

實に氣高い一種の「人生觀」といつてもいゝ思想だ。戲作系統の多い天香の周圍の文學には、當時これだけの認識をもつてゐる小說家は實に少なかつたのだ。春のや主人及びその周圍、その他の二三子を除けば、青年の新進文學者としてこれ程はつきりした思想をもつてゐる人々が先づ無かつたかも知れない。

「小說といふ者は讀むまじき物ぞ多くは人の心を誘惑し易きものなり近ごろ英國などにて婦人に犯罪多きは一つは情史といふ者の廉價なるが爲に因る」と或る傳道師の語られたるが能々吟味して好き物を讀む時は中々教育上に利益多きものにこそ、天父は教育に乏しき婦女子を導かんが爲には愛と哀との二つを借てその心を勵まし給ふなり、正當なる愛情を寫せし優美の文章といふ者は大きに人の心を高尙にするものにこそ（中略）、されば巧妙なる小說は世間の情態を寫さんとして却つて世間の爲に情態を造るが如きことも候べし、情史の爲に犯罪人多しと言へるも此等の例證に外ならざるべし（第五回）

天香は文學の强い感化力を知つてゐた。單に感化力といはず、寧ろその創作力をも感じてゐたらしい。文學が社會をつくる、これ程の新しい思想が、明治二十年の當時、漢學仕込みの天香の頭腦に何うして湧いて來たか、不思議に思はれる位である。

さればこそ、天香が甘んじて小說家にならうとした決心も、かういふ文學的自覺のことを考へてみると、極々當然

のことだと解かるのである。

勿論テクニクの點で種々の不滿があるし、度々いふ如く長編の發端だけのことでありもするから、これだけでその評價を判定するのは危險かも知れぬが、少くとも、明治小說史上新舊過渡の際に於ける最も注目すべき小說の一とすることには、これを讀んだ人々は何人も躊躇せぬであらう。

最後に、「夢幻」、これは明治二十七年九月十八日から十月三十日までが前編、二十八年四月二十六日から五月二十八日までが後編で、何れも東京朝日新聞に出たものであるが、これが私の知る限り天香の小說に於ける絕筆であるやうに思はれる。これが又當時の文壇としては一風變つた小說であつた。幸ひ此の小說については岡田氏の追憶があるから、それを拔いてお目にかけやう。

處が間もなく先生が書始められた小說といふは、彼の改進新聞に載せられて大好評を博した「聯島大王」や「看護婦人」とは正反對に、極めて古典的な物さびたものであつた。「聯島大王」は未來數十年後の新世界を想像した尖端的新小說で、文章も時流の新傾向に合致した極めて新銳なものであつたが、今度のは其時代も遠き昔しの奈良朝に溯り、人物も伶人、陰陽師、國司、郡司、かんたちめなどを配し、文章も古雅典麗、和文を主としたもので、雅言が大部分を占めてゐるから、普通人には難解である。

私は先生に向つて『餘り古雅過ぎるぢやありませんか』といつて御意見を探つた處『前の「聯島大王」は未來を見越して書いたから、今度は成丈け古い所を覗つたのだ』と答へられた。惟ふに先生のお心では、世間の文士等が、ヤア西鶴ぢや、ソレ寫實ぢや、馬琴ぢや、春水ぢや、飜譯物ぢや、言文一致ぢやと平凡な考へを以て、時尚におもねつて騷いでゐるから、おれは一番ズツと飛放れた原始的上代ものを、趣向文章もそれに準じてやつて見せる

のだと、平たくいへばかいなでの三文文士らが、愚弄してかゝられたものではないかとも想はれた。先生は前回にもいふ如く、小說では六樹園もの、眞顏もの、種彥ものを愛讀され、雜書中では樂翁公の花月双紙を好まれ、殆んど其全部を暗誦してゐられたから、和文にかけては運筆自在、特殊の靈腕を有つてゐられ、心にくい程うまい事をかいてゐられた。だから斯道の好事家が讀んだら、趣向といひ、文章といひ、無限の妙味を覺えるのだが、世人はさうは受けてくれない。軈て讀者から「分らぬ〳〵」といふ非難の投書が舞込むやうになり、賣捌店からも願ひ下を乞ふ樣になつて來た。かうなつては先生も强て書つゞける譯に行かず、中途で結末をつけられた。それでも普通小說ほどの長さには、書かれたのであつた(下略)(三)

岡田氏は奈良朝時代云々といつてゐるが、然しこれも岡田氏の記憶違ひで、そんなに古いものではない。時代は平安朝、それもさう初期ではなく、何れかといへば中期以後である如く見える。それに第一これは天香の創作ではない、「古き韓版の小說九雲夢といふもの」を飜案したものである。韓版といふ點に、日淸戰爭をきかしたものであらう(因にいふ、私は岡田氏の言によつて此の小說を天香が朝日出社を斷はつてから後のものと前に書いて置いたが、然し此の小說を書いたときは、まだ朝日に出てゐたかも知れない、さうすると天香の不出社は今少し後にならう)。

「夢幻」の物語は主人公千春の夢で始まる。然しこの夢中の物語は、この小說が完結してをらず、從つて千春の身後の事が少しも語られてゐないので、殆んど本筋と關係のないものとなつてゐる。たゞ吾等はこれを讀んで、成る程千春は凡人ではないのだなと感ずるのみだ。

千春は明經博士橘の悠(ひさし)の一子だ。父は勿論京都の人で、朝廷に仕へてゐたが、或る時日頃嗜む音樂のことで(彼は笙の名手であつた)、伶官等の嫉妬を買ひ、爭ひを出來してから、浮世を味氣なく思つて東國に來り、武藏の國忍ケ岡に隱れて世を終つた。千春は京で生れたが武藏で生長した。美しい子であつたが、數歲まで口をきかなかつたので、

此山の聖人に見せたところが、これは凡人でないと相したといふ。

物語は千春が十六の時からである。此の頃千春は學問文章ともに秀れ、もう東國では師とすべき人はないので、母の勸めもあり、京都へ上つて僧になつてゐる叔父をたより、大學寮に入つて文學の蘊奥を極めようとする。母の心算では、かうして京都へ送つて、好い家柄の婿にでもして立身出世をさせたいといふのである。此の頃はもう王朝の威も地方に及ばなくなつた頃で、盜賊が隨處に出沒してゐるので、十六の少年が武藏から京都まで一人で行くのは容易でない。その間に凡そ四つ程の語るべき事柄がある。

その一は、橋本の宿で、尾張の前司秀秋の娘白露と契つたこと、これはふとした緣であつたが、互ひによくも逢はぬうち、伊勢の强賊の侵入で兵火の間に分れ分れになる。

その二は、父の昔の仇なる伶官和邇部の伴成に會つたこと、これも尾張、鳴海のあたりだ。伴成は一時の嫉妬で悠を讒したが、悠が去つた後彼の音樂の妙を知るものがないので自分もやがて悠の後を追つて東國へ下らうとする。だが悠が死んだといふ風說を耳にして、こゝに止まつて風月に嘯いてゐたのだ。彼は悠への詫びの意味で、千春に笙の祕曲を悉く傳授した。

その三は、千春が伊賀から大和へ迂廻して難波に着いた時、川口の大堰といふ妓と契つたこと、大堰は筑紫人の檜隈の戟成、犬上の猛を始め見手あまたの身であつたが、遂に一日高津社頭で見た少年千春の文才を愛し、行末を契つた。

その四は、千春が難波から淀川を溯つて上京する途中、鳥飼に夜泊した時、筑紫人が女を誘拐するのを見、これを救はんとして及ばなかつたことだ。

この四つが、後々千春の身の上にそれぞれの方面から淺からぬ關係をもつて來る。

上京後の千春は、叔父の傳手で大學寮に入り、秀才の試驗を受けたが、近年稀な才學だといふので、直に六位の藏人を賜はつた。さうしてこれも叔父の手で、井手の宰相文姬（あや）の婿になることが出來た。千春が女裝してこの文姬と見合ひする一段は漢の司馬相如が琴心によつて卓文君を挑んだ故事から出てゐるらしく、實に優雅なエピソードだ。

此の頃地方の豪族にさへ十分朝廷の威令が行はれなかつたのだから、外蕃には猶ほ更であつた。そこで朝廷では國威を一振する策があり、外蕃には國書を遣はすことになつた。博士や學士がいろいろ名文を作り上げたが、それが時の帝のお氣に召さぬ。そこで、若年ながら千春がよからうとなつて、起草して上つたところ殊の外御意に入り、賞として五位の宰相に上せた。その上、外蕃の監督府ともいふべき太宰府の政事が殊の外亂れてゐるといふので、千春に從者數多を添へて、檢閱に下した。

船は難波から出るのだが、千春はこゝで大堰と再會する。千春は今迄の無音をわび、都へ迎へようといふが、大堰は千春の立身出世をよろこぶにつけても、自分の前身を恥ぢて、隱れてしまふ。

千春の一行は無事博多に着くが、太宰府の下司で多年人民を喰物に威福を恣にしてゐた連中は、千春の下向を大に恐れ、或は逃げ、或は巧んで、途中に千春を殺さうとかゝる。だがその陰謀の都度、無名の女文が來て、千春を救ふ。

千春は太宰の師と會ひ、その政事向についての朝廷の注意を傳へ、やがて巡撫の命も果したので歸京する。この時千春を殺さうと計つた惡者は、例の戟成、猛などであつた。

千春は再び難波に着き、住吉社にお禮詣うでをする。こゝで友人の紀友善少將にあふ。この夜、千春の宿所には盜人が入り、馬を盜んで去る。千春と少將はこれを追ひ、盜人は射落したが、路に迷つて民家を訪ねると、思ひがけなくも、そこは大堰の隱家であつた。大堰は泣く泣く自分の遁世の志を告げ、今一人の女の友人を紹介する。これは玉

淵といひ同じ妓であつたのだが、筑紫人に拐かされて、永い年月憂目を見、この頃漸く逃げて歸つたのだといふ。語つてみると、これが、鳥飼宿泊の時、千春が救はうとした女性であつたと分かり、その上、此の玉淵こそ實は和邇部の件成の一女であり、又千春の危難を警告してくれた手紙の主であることも知れた。千春は友善に後事を托して上京した。

この後の千春は、上のお覺えめでたさ限りなく、日夜お傍を去らず奉仕した。だが幸福極まつて災禍生ずる理で、妙なる機緣から、我も泣き人も泣かせる身となつた。

前關白の八の君、今の兵部卿の妹に美人の譽高い若い女性があつたが、この女性が千春の名を聞き、面當り才を見て、彼を戀ふやうになる（こゝの館に、白露が八の君のお相手となつてゐる、さうして千春の姿を他所ながら見て獨り哀んでゐる）。そこで八の君の母は兵部卿の威勢をかりて千春を井手殿から貰はうとかゝる。井手殿は力なく、兵部卿の乞ひを容れる。一つの弱身といふのは、どうしたものか今まで、千春の母の消息がなかつたので、文姫千春は正式の祝言がのびてゐるといふことだ。井手殿から諭されて、千春も仕方なく八の君と婚することにするが、一夜衷心憤慨の念を抑へかね、斷然兵部卿へ婿入りお斷りの手紙を送る。井手殿、文姫は喜んだが、間もなく千春は解官（免職）となつた。

「夢幻」の物語はこゝで中絕してゐる。讀者に受けなかつたばかりでなく、日清戰爭の際とて戰爭の記事が輻輳し、その爲めに小說が往々邪魔扱ひされることが多かつた。中絕した事情にはさういふこともあらう。

此の小說は一篇の新聞小說で、勿論近代小說としてテクニクから云々すべきものでも多大な文學史的意義を認むべきものでもなからうが、それにしても如何にも美しい物語である。王朝時代の數多い物語や草子物の書法を逐ひ、その文章に幾分の近代的雅味を加へた、あはれ深い、餘情の多い小說である。筋は既に借物とせば、結構の手際と文章

の美とを取るべきのみかも知れないが、天香が王朝時代の社會、風俗、歷史等についてもつてゐる深邃な知識が遺憾なく驅使されて、その空氣なり、背景なりが如何にも生き生きと描かれてゐる。この小說の文章のみを見ても、當時これ程の美しい文章を書ける人は、若手の才人連にだつて少なかつたらう。實に上品な、美しい、さりとて和かに失せず、硬きに馳せず、いはゞ練熟した美、臈闌けた美といふ趣きがある。その美しさを傳へるには千言萬說するよりも、讀んで味つていたゞく方が可い。左に引用してみよう。丁度鳥養の夜泊に、千春が筑紫の女人誘拐を知るところである、——

そも〳〵淀川は當昔より名に高き畿內の大河にて國々より集ふ百千の舟都へ登るには總てこの舟筋より日數經て山崎に到る習ひなり夜舟を出すは後の世のことゝは聞えしされど風汐の便りに付ては當昔も倘其事ありけんかし其頃は川づらも至りて廣きに秋深て露霜しげき頃なれば六日許の月さし出たる夜の景色はまして得も言はずあはれなりさやさやと蘆の葉戰ぎて船窓の風も身にしむ程なるに楫取ども例の舟歌あはれに打出て漕上せもて行も且は心細く覺えて千春いろ〳〵の事思出つゝ片隅に潛まりをれば同じ舟に乘合たる人々これも夜寒に故里忍ばれてか皆むつまじげに一處に居よりて物打語る國々の女の事ども言出て端多なく評め爭ひなどするも聞ゆめる夫が中に川尻の大堰といふ聲のふと耳に留りて千春目覺むる心地して打忍びに聞けば今京難波の間にさる際の女三人あり其一人は今言ひし大堰いま一人は同じ處の玉淵また一人は山崎の渉とてこゝらにては五畿內の隨一とし總春秋冬の三つの眺に喩へなどして賞めもて囃すなり夫が中に渉は貌優れたれど實少きに似たり彼繪に書ける類にやあらん實に花といふに當らずとせず又玉淵は清きに過ぎて久しく打對ふに寒き心地さへ傍ふめり即ち雪といふに當れど實に大堰こそ似るものも無りけれ此玉淵住む所も同じければ彼の大堰とは日ごろ二なく語らひ交して今は然ながら姉妹などの樣にて住めば同じくに二つながら倂せ迎へてなどあこがれ物する賓客も少からずと聞けど然は言へ月の方には倘比べ言し

からんなど言つゝ評め爭ふといふは彼の大聲がことゝと千春いとあはれにも又をかしく聞做されて猶打忍びに聞もて行くに實に今宵の月もいつしか入方になりて船窓小暗く蘆吹く風、浪の音のみ寂しく聞えて夜の景色いとゞ更しづまりぬはや鳥養の御牧近くも來つらん此舟いづくに泊らんとするにかと旅心さへいとゞ悲しく覺えて打潸みをるに此折しも何事とは知らず行手の方に女の泣叫ぶ聲はげしく聞えて人々俄かに爭ひ騷ぐ（第十七、萩の一本、下）

以て全貌を知ることが出來やう。

吾等は更に進んで、天香の著作中、特に政治小說と目さるべきもの數種についてやゝ詳しい研究を試みることにする。天香の政治小說は大體前後二期に分つべく、前は十三年から十九年迄の五年間で、此の間は主として飜譯飜案に從つてゐた。二十年からは後期となるが、これは創作期である。然し何れにしろ數はさう多くはない。

〇勇婦テレーズ傳
〇名節三葵
〇柴の小楯

は前者に屬するもの、――

〇聯島大王
〇しらぬひ
〇看護婦人

などは、後者の類に屬するものである。

註（一）「ひむろ」五ノ九（昭和五年九月）
註（二）「同」六ノ一（同六年一月）

註(三)「同」六ノ二(同六年二月)

四　政治小說について

天香の小說については、恐らくまだ語るべき事が數々あるべく、以上の記事位では、天香が南翠、文海、篁村と同等の文壇的位地を要求して然るべき人だといふことが首肯されないかも知れない。だが、吾等の目的は政治小說の研究にあり、これ以上小說家天香に頁を割くことが許されぬので、今は已むを得ず、以上に止める。

吾等は『斷蓬奇緣』卽ち『勇婦テレーズ傳』で始めよう。十五年十一月、この小說を新聞に譯載する際の緒言に曰く、——

左の一篇は佛蘭西の史家エルクマン・シヤートリアン氏の著す所にして十八世紀のすゑ該國革命の前に當り當時共和黨員たる一少婦の其の黨義の爲めに自分一身を抛ち賤むべき糧食小荷駄部の一員となりてモゼール河方面の共和兵と共に獨逸に入り同國アンスタツトの戰に傷を負ひ死に瀕したるを同地の一義醫の爲めに救援けられたる一條の奇譚を記したるものなり斯る稗史を紙上に掲げ加へんことは元と我が社新聞の旨には非ざれとも猶ほ二三讀者の企望黙止がたくて後進小子の爲めに斯くは物するに至れるなりそも原著は行文巧妙にして寓意も亦深く片楮短册の間讀者をして彼の共和兵の勇敢義烈なる克く短兵隻隊をもて堂々たる大敵に中り辛苦曲さに甞めて遂に自由の大義を立て佛蘭西國をして歐洲列國の侵凌を免れしむるに至るの景狀を想見さしめ聳然懦夫をも起すに足るものなるから如何にせん新聞は紙幅に限りありて全く原意を悉すに便ならず或は却て其完璧を瑕つくるの恐あるを讀者請ふ幸ひに之を諒し給ひて且らく彼の籬外に花を見るとの憾を忍ばれんことを

文中、「斯る稗史を紙上に掲げ加へんことは元と我社新聞の旨には非ざれども」云々の語句を翫味されたい。此等所謂政治新聞記者の小説に對する功利的輕侮的態度の一斑を窺ふことが出來る。文學掛りの天香さへ、この頃はまだかう考へてゐたのだから、他は推して知るべきであらう。

さてこの書の内容が如何なるものであるか、と言ふ事は、上に引いた文章で大體分るのであるが、猶ほ簡明にその大體をのべて置かう。

上の文章には只「十八世紀のすゑ」とあるが、これは實に千七百九十三年の十一月から翌年へかけての物語である。此頃フランス共和國の革命熱が自國に波及することを恐れたヨーロッパ諸國は、フランスに對して同盟攻擊の擧に出た。フランスは連年の革命騷ぎで國内的には甚だしく窮乏衰弱を來してゐた筈なのに係らず、この外部からの挑戰に對しては異常な勇氣と祖國愛をもつて奮起し、見事に敵軍の侵入を喰ひ止めた。殊に、東部の獨逸國境方面に於いては、たゞに敵軍を喰ひ止めたばかりでなしに、數回叛襲した上、度々獨逸領内に侵入し、國境に近い諸地方を占領さへした。この物語は同盟軍の代表となつてフランスに進軍したプロシヤ兵とフランス共和國の義勇兵とが頻りに追ひつ追はれつを繰り返してゐた時にあつた事だとなつて居る。

舞臺はプロシアの西方國境アンスタツトの山村である。

此頃アンスタツトの村にジヤコフ・ワグネルといふ醫師があつた。元來が學問が好きで種々な書物を讀んで居り、道義に明るい俠氣のある、先づかういふ山村には珍らしい人物であつた。その平常主義としてゐたところは、愛他平權の道にあり、平和論者として知られてゐた。彼は新聞によつてフランス國内に於ける共和政治の有樣やフランスとプロシヤ兵との衝突の事を知り、一人心をなやまして居た。

然るに前にいふ如く、千七百九十三年の十一月の或土曜日の夜、このアンスタツトの山林に突如としてフランス共

和國の一部隊が襲來し、それが丁度同じ樣にアンスタツト方面に向けて進軍中であつたプロシアの大兵と遭遇し、忽ち大激戰が展開した。

ワグネルは此處に始めて戰爭の災火を實驗する事が出來て、益々その平和主義の信心をかためたのである。彼はこの戰の際にフランスの義勇兵が、評判と違つて、非常に勇敢に戰つたのを見て驚いた。その際猶ほ驚いた事は、フランスの兵隊の中に、彼等がマダム、マダムと呼んでゐた一人の女性が參加してゐた事だ。彼女の仕事は、主として兵卒の給養にあつたのだが、勿論女の手で出來る事は何でもやつてゐた。この女性の雄々しい姿が、ワグネルの心に深い印象を與へた。

戰は、數十倍の大軍であるプロシア側の勝利となつて終つた。フランス兵は終に數多い死者を殘して國境方面に退却した。勝ち誇つたプロシア兵は、村人を驅使して、敵味方の死者を片附けさせた。いつの間にかかの勇ましい女性義勇兵も、村人の掘つた土穴に投げ込まれんとする死體になつてゐた。ところがその死體が何やら他の者と違つてゐたので、一度は立派に死者扱ひにされたに係はらず、親切な一人の村人がワグネル醫師を呼んで來て更に調べさせた。すると意外にも、この女性はたゞ重傷によつて氣絕して居るのみだといふことが分つた。

ワグネルはマダムを自分の家につれて來て、力の及ぶ限り介抱した。マダムはその傷の重かつたのにも係らず、日増によくなつた。彼女はワグネルの親切に對して感謝したのみならず、やがてその人物の立派なのに對して敬慕の念を持つ。ワグネルとても同樣、始めからしてこの女戰士に對して好意を持つてゐたわけだから、それが解らぬ筈がない。二人は心で相許し合ふ。只ワグネルは今迄先入主となつてゐた思想、つまり共和主義に對する偏見からマダムの思想が反平和主義だと考へ、度々平和の福音を解いてマダムを改宗させようとする。マダムはその度に、共和主義の眞の意義が何處にあるのかといふことを說いて、ワグネルを論屈させる。ワグネルは漸く自分の理想が共和政治と反

對するものでないことを悟るに至つた。

マダムは儀ひ癒えてもワグネルの家に止つてゐる。村人の中には、平常ワグネルに對して心よく思はない人間も二三居たので、マダムがワグネルの家に何時迄も足を止めて居るのを奇貨として、ワグネルはフランス共和國と通謀して居るとか、賣國漢の疑ひがあるとかプロシヤの本營に知らせる。

そこでプロシアの本營ではワグネルの許へ捕縛の兵を向ける。だがワグネルはプロシヤ軍に居る自分の友人から早くその事を聞き知つて、この義勇の女性をプロシア軍の慘忍な手に委ねるに忍びず、却つて自ら護衛してフランス軍の本營へ送りとゞける。その上、自分もマダムと分れるに忍びぬものがあり、又自分を裏切つた人々の卑劣な態度やプロシヤ軍の不正不義を憤る餘り、自分も斷然フランス義勇軍の軍醫に志願する。

やがて再びフランス軍はアンスタツトを占領する日が來た。かくてアンスタツトはもう二度とフランスの手から奪はれることはなかつた。ワグネルの家では賑かな婚禮が行はれ、村人の祝賀の聲が何時迄も續いた。

この小説は譯者がその凡例で述てゐる通り、一八七一年の作であり、即ち同年普佛戰爭の際本國フランス人民の愛國心を喚起せんが爲めに著したものであり、從つて原書の主眼は、フランス軍が一度は敗けたが、遂に捲土重來してプロシヤ兵に對して最後の勝利を占めるといふ點、フランスの制度、フランス人民の義勇奉公を讃美してゐる點等にある。だが天香がこれを紹介したのは、さういふフランス國民の愛國心とか敵愾心とかを傳へるためではない、この作を一種の政治小說と見て、これに依つて、多少にせよ、立憲政黨の自由民權的主張を宣傳し强化しようとした爲めである。原著者は特に明確に自由民權といふことを目的としたのではないから、この譯書も、天香等の意圖に完全に副ひ得るものか何うか、多少の懸念はあるが、自由政治の讃美といふ點に於て自然に相通ずるところがあるから、此の小說の紹介も先づ政治小說としての效果を擧げたものと考へて可い。

作中、思想的に對立させられてゐるのは、ワグネルの平和主義とテレーズの共和政治讃美であり、リクトル等の保守主義とコベル等の進歩主義である。さうしてその結局に於て、保守主義は敗北して進歩主義が成功し、平和主義の理想は眞の共和政治に於て實現されるといふところで、合一されることになつてゐる。

著者の暗示するところに依ると、平和は人類の理想であり、人類窮極の幸福は平和に盡きるのだが、然し平和の理想の實現にはいろいろな邪魔障碍を取りのけなければならぬ。この取除け仕事を戰爭と稱する。戰爭は、それ自身としては人類の災禍の第一ともいふべきものだが、然し平和になる段階としては是非經なくてはならぬものである。戰爭をなくなすには、私慾で戰爭を起す人々をなくしなくてはならぬ。フランス義勇軍があくまで外敵に抗し、實に好戰的に見えるのは、その理想を實現せんためである。

かういふ理想を寫すのだから、自由を讃美し、貴族や遊食階級を排擊する語調が到る處に見られるのも、當然であらう。天香等が利用せんとしたところも此處にあつた。天香は、かゝる自由政治讃美、貴族跋扈排擊を民權意識に轉用して、以てその主張の啓蒙と宣傳に役立てようとしたのである。

飜譯のことではあり、テクニクの論議は止めることにするが、一二特色をいへば、此の小說は、ワグネルの甥なるフリチュルなる小兒が他日人々に物語りする態になつてゐるが、これは、當時の小說形式としては先づ珍らしい方に屬する。物語の進行は、かゝる理想的小說であるに係らず、極めて素直に出來て居り、人物の描寫の如きも、かゝる小說によくある英雄崇拜的な誇張がない。その例はマダム・テレーズを見るが可い。本來ならばジャンヌ・ダルクにも比さるべき烈女なのに、表面は尋常素樸な、つゝましやかな女性として描かれてゐる。それだけに彼女が義憤と祖國愛に奮然として起つときの感激は、却て强いわけだ。殺伐な戰場と平和な山村の生活の對象、不安に戰のく大人と無邪氣な少年群、西ドイツ國境の冬の自然も、可成りよく描かれてゐる。

譯文は、流石名文家の天香の工夫に成つただけに、硬ならず軟に過ぎず、『經國美談』より出て更に幾分の和文脈を加へたるかの感があり、流麗溫雅、好譯文と推すに躊躇しない。

次に語るべきは、「名節三葵」である。これ亦飜案であり、その原本を「信義之友」といふ。「古ギリシヤ三名士を中心人物にして書いた歐洲の樂府」で、これを小說に引直したものと斷はつてゐる。たゞ歐洲とばかりで、何國の何人の作か一切不明であるが、內容によつて察するに、これは古ギリシヤで有名なデエモンとピシアス（フィンチアスが正しいといふ）の物語を指すものである。デエモンはシラキユーズの人、ピサゴラス派の一學徒として名を知られてゐた。彼は平日同じ學の友ピシアスと甚だ友とし善かつた。然るに或る時、ピシアスはシラキューズの僭主ダイオニシアスに對する陰謀に加擔したので死刑に處されんとした。ピシアスは死刑を甘受はしたが、家事を整理するために數日間の猶豫を乞うた。僭主は、然らば誰か人質を立てよ、然かせば猶豫の乞ひを許すであらうといつた。これを聞いてデエモンは進んでピシアスの爲めに人質に就いた。然るにピシアスの家事整理は案外に手間取つて、丁度約束の日になつても歸つて來ない。僭主は、止むなく人質のデエモンを處刑すべき命令を下し、デエモンを刑場に引出さしめて將に處刑せんとした。そこへピシアスは漸く驅けつけて、デエモンを救ふことが出來た。然るにこれを見た僭主は、二人の友情と信義に感激して、ピシアスの處刑を免じたばかりでなく、自分も二人と友人の契を結び、三人が美しく交つたといふ。これがデエモンとピシアスの友誼の物語である。天香の謂ふ所の歐洲の樂府とは、前にいふ如く何人の手に成るものか未詳であるが、此の物語を詩化したものには、ドイツの文豪シルレルの物語詩が一篇ある。或はこれが天香の指す樂府かも知れない。

以上の如く、これは大筋に於ては全くの飜案に違ひないが、然しそれはたゞ骨格を假りたまでゝ、事實は天香の著

作といつても可い位に血肉が附いてゐる。

作中の三主人公は、京都の人（元は若狹の出）小松三郞、薩摩の人梅谷隼人、越後の人竹岡要人、これを前の古ギリシヤの物語に當てはめると、梅谷がデエモン、小松がピシアス、竹岡がダイオニシアスを代表するといふ關係になる。

小松は父の代からの尊王攘夷家で、熱心な朝廷方であつた。梅谷も小松と略ぼ同じ志を抱いてゐる。竹岡も尊王の志は劣らぬが、これは然し一橋慶喜公の懷中刀として活躍するので、立場は幕府方となる。小松は夙に父を助けて勤王に努めてゐたが、大阪の俠客豐田屋甚七なるものゝ紹介で梅谷と知り、共に志望を語り合ふと節を合せる如きものがあつたので、兄弟として國事に奔走することを誓ふ。小松の父主計が安政の大獄で捕はれて江戸に下され、獄中に歿する。小松は乞食に身をやつしてその仇井伊大老を狙ふ。或る時ふと上野で、二人が武士の果し合ひの結果氣絕したのを生かすと、それが梅谷と竹岡であつた。梅谷は近畿四國の同志の動勢を探つて關東に下り、更に水戸方面に赴かうといふのであつた。竹岡が梅谷を斬らうとしたのは、紋が似たので、梅谷を井伊の懷中刀長野主膳と人違ひしたのであつた。そこで三人は更に兄弟の契を固め、小松は江戸、梅谷は大阪、竹岡が京都と分擔を定めて國事に盡すことになつた。

小松は萬延元年三月、水戸浪士等と共に井伊を襲ひ、首を揚げて、兎も角父の仇を復す。それから大阪へ逃れ、豐田屋に賴る。小松には前から藝妓小歌といふ押妓があつたが、小歌は長野主膳に附き纏はれるので苦しんでゐる。小松は一日長野の手の捕吏に圍まれ、一時兵庫まで逃げのびるが、海上で又捕吏の圍むところとなるので、海に投じて死ぬ。

竹岡は一橋慶喜に用ゐられ、京都と江戸の間を往來して公武の間に周旋する。梅谷にも自分の素志は天下國家の爲

めを思ふに外ならぬのだからと告げ、江戸に招いて一橋家の客分として自分に協力させる。

だが、時勢も切迫して文久三年將軍家の上洛と共に攘夷の問題が俄然喧しくなると、竹岡と梅谷の間に意見の對立が生ずる。竹岡は公卿を抑へて幕府の實力で進まうとする。梅谷は先づ攘夷を實行すべきだといふ。かくて竹岡は梅谷が慶喜の身邊にあることを利としなくなつたので、密に策を運して此の年の鎖港談判使節の一行に加へてフランスに遣る。

だがこれは梅谷には大に利益になつた。彼は口舌で鎖港を論ずるの不利を悟り、萬事實力の世界だといふことを知つた。彼の滯佛中、フランス政府(ナポレオン三世)と幕府一部有司の間に貸兵の約が結ばれやうとするのを聞き、極力反對して、それを實行させなかつた。が何より意外なのは、死んだ筈の小松三郎が生きてフランスにゐたことだ。三郎は兵庫沖で入水したが、そこを通りかゝつたフランス軍艦に救はれ、フランスに伴はれて來てゐたのだつた。梅谷は小松を伴つて歸國する。

歸つて見ると、わづかの間に竹岡は全く人が變つてゐた。彼はその權勢と地位に滿足し、日夜遊樂に耽つてゐる。そこへ意外にも小松が訪ねて來て、竹岡が昔の誓ひを忘れたことを責め、早く立憲的施設を實行して國論を統一し、庶政を更新して富國强兵の實を擧げるのが國家の急務だと論ずる。竹岡は怒つて、部下の壯士をして小松を捕へしめんとする。小松は死は覺悟の前だが、後事を始末するため三日待てと求める。竹岡は人質を出せといふので、梅谷が進んで人質となる。これからのことは、古ギリシヤの物語の通りだ。結局二人の信義に竹岡も感心し、改めて三人友誼を誓ひ、國家の爲めに盡す。明治維新の出現にはこの三人の隱れた力が與つて大きかつた云々。

以上の外、小松の父のこと、小松の妹淺香の身の上、淺香の味方たる刀屋清七のことなど、いろいろなエピソードが織り込まれてゐるが、要するに根本の物語は以上の如くだ。本書上卷でも述べた如く、政治小說の手法の一に、明

治維新の歷史的事件を假りて政治的イデオロギイを述べる種類があり、それには坂崎紫瀾流の實錄物と小室信介流の創作物と二種あることを語つて置いた。天香の此の小說の如きは、後者、即ち小室信介の『新編大和錦』と同じ範疇に屬する。

『斷蓬奇緣』は全然飜譯であり、從つてその中の政治意見も原作者エルクマン・シャトリアンのそれであるが、「名節三葵」は大筋はともかく、本文は大體天香の作と見て可く、從つてその中の政治的イデオロギイを示した部分も、天香自身の思想と見て然るべきであらう。而して吾等はさういふ政治意見をこの作の處々に發見出來るのである。(殊に後半に於て)。

例へば、第二十九回、竹岡、梅谷が天下の形勢を論じ、方今は國内の爭ひを事とすべきではない、協力一致して外に當る必要があると論ずるあたりは、各政黨の爭鬪を諷したもの、同三十回、竹岡と梅谷との意見の對立、政治は當事者に任せて置け、民間人士が騷ぐのは不可ぬとする竹岡の論と、いや上司や當局に失態があればこそ民間人士が騷ぐのだ、萬事公約(即ち五ケ條の御誓文のこと)通り實行すべきだといふのは、攘夷實行を催促する風を示して、實は立憲政治の實行を催促したもの、第三十二回、梅谷の外交論——

凡この外寇といふものを處置するの道只必死の中に一生を求め必戰の中に和睦を存すといふをこそ偏に其道の秘訣とする所なれ戰ふべしといふが故に人我れを侮らず侮らざるが故に和睦して國辱(はつかしめ)を受けず然るを他人(ひと)は先づ自ら侮りて我れ及ぶまじといふを見するが故に人も亦侮りて我れ勝るべしとその隙に乘る云々。

これが外交の眞諦だといふのは、明治十五六年當時の日本國民にその對外の覺悟を警告したものである。第三十六回、竹岡が志を忘れて遊樂に耽つてゐるのを叙したところには、昔日の志士伊藤博文、井上馨等が當年の大志望、大理想を忘れて、その成功に慢心し、日夜酒色を恣にしてゐるのを諷したもの(伊藤、井上とて民間人士が考へる程に

當初の志を忘却し去つたのではないが、外から見たら、さう極端にも見えたことであらう)、小松が竹岡に說く次の語葉

某(それがし)謂ふに方今の大計は幕府を廢して政體を一變し至誠を以て朝廷を奉じ信義を以て萬國に接するに在り其法如何にして可からんか一には歐洲諸國の例を採りて上下議政局を置き人材を天下に徵(め)して以て一切の大政を參議せしむるの所となし一には各國の條約を確定して以て信義を同盟國に表(しめ)し一には軍局を京阪兩府に設けて以て陸海軍を練りて威を萬國に張り以て天下と更始を共にし以て億兆と富强を謀り時勢を考へ舊習を除きて地球上に獨立するの大基礎を立つるにあり勢既に燒眉の間に迫れり足下(おんみ)それ速かにこの事を謀(はか)られよと言を正し色を勵まし端然としてうち陳じたる啓宛から秋霜を含み舌滑かにして流るゝ水の如く云々

は、天香の政治理想をそのまゝ表示したものと見て可く、甚だ簡單ながら、先づはこの頃の知識階級の輿論を撮要したものといへよう。

小說的テクニクの上からいへば、一通りの出來といふべく、深く立ち入つて論ずるにも及ばぬが、難をいへば種々ある。その第一は、趣向に戲作的不自然の多いことが擧げられるが、それは、或る意味で天香の習作といふべきこの小說に於ては止むを得なかつたであらう。第一の取柄は、矢張その文章だといつて可い。

第三に紹介すべきものは、「紫の小楯」といふもの、これが飜譯であることは、前に述べた通りである。

この小說の掲載されてゐる新聞の揃つたものを見てゐないので、その梗概を十分に語ることが出來ないが、私の讀んだ範圍に多少の想像を加へてみると、それは恐らく『斷蓮奇縁』と同じ系統のフランス愛國小說で、時代はフランス革命の末期か、ナポレオン失敗後聯合軍のフランス侵入のころか、恐らくは後者であらう。場所はアルサス、ロー

レンス地方の山地で、そこの半農半獵の慓悍な人民が團結して、山道の要害を據に侵入するドイツ軍、ロシヤ軍を惱す物語である。沸々とたぎるやうな人民の愛國の熱意、さういつたものが到るところに看取される。山地の村人の生活、一致せる活動、粗樸な言行、雄大な自然の背景などがなかなかよく寫されてゐる。原作は餘程面白いものかも知れない。出る人物は何れも相應に細かに生き生きと描かれてゐるが、中でも隊長に推されるユーラン、女丈夫のカテリーナ老婆、狂人エコッフなどが特に面白い。エコッフは自分を王だと信じてゐる狂人で狼と鳥とを家來だと思つてゐる。譯文は此の篇に於て特に精妙であり、周密文體といつても可い。左に見本を出して置かう。

稍時ありて狼の中の最老いたる者が默し其次の者が默し次に皆の者が默しければ蒼忽夫は再び口を開いて曰く「さなり〳〵是こそ悲しき歷史なれ看よや我々の血を流せし所の河は今も尙此處にありメルウヰクよ他の人は又其骨を此叢の中に留めたり看よ此空に輝ける月は彼者共の女原が三日三夜の間我々の髮の毛を引拔き合ひたるを見たり實に悲しむ可き日にてありし其時は彼者共の犬までも其大なる勝利に就て驕慢りたりし汝等其怨を思はゞ努めて彼者共をして災を蒙らしめよといひつゝ蒼忽夫は其冠を脫ぎて地上に投げつけしが頓て嘆息して又之を取上げゝり狼は常に蹲踞りて彼の演說を聽くこと宛も人に異ならず其內尤も大なる者一聲高く吠えしかば蒼忽夫は之に向ひて曰く「シリマールよ爾は饑ゑたるか喜べよ〳〵是より後長き間爾は肉に事を缺く事なかるべし我この軍兵は到着せり再び軍は始まるならんと言ひつゝ身を起し手に持てる笏にて一個の石を叩き「看よ汝の骨は爰にあり又他の石の傍に近きて曰く「メルウヰクよ看よ汝の骨は爰にありと言ひ了りて徐に步を進むれば狼も烏も之に從ひけり蒼忽夫は又小き岩の上に立ちて山の洞を見て高く叫ぶやう「我々の軍の歌は死なり我々の軍の歌は嘆息なり時は近づけり時は再び來らんとす汝等は軍人となる事を得ん汝等は又再び此谿や此山を占領する事を得べし吾耳には車の音や女の叫び聲や衆人の打合ふ音を聞得たり空氣は其聲を以て充滿したりさたり〳〵彼者共は此上より降りたり我

々は彼者共に圍繞まれたり彼者共も我々も今は死したり聽けよ〳〵凡て死となり汝の骨は眠れりさりながら汝の子孫はやがて到着するなり汝の順番は再び來るなり歌へ〳〵此く言ひ了りて番忽犬は自己先づ異しき聲を張り上げて吠出でければ狼も亦之に和して歌ひけり此不平の聲は漸次に悲みの聲となりて最冷じく之に加ふるに周圍の岩の暗きもの又月に照されて輝やける墓石や雪を負ひたる森の樹木の闃然として動かざる樣且は彼等が怪しく悲しき音聲に應ふる谷の谺の響まで見るもの聞くもの凡て牧人ロバンをして痛くも恐怖をぞ催さしめける（下略）（第十回峯の月の中ノ下）

これはエコッフが月下の狼を相手に來るべき慘澹たる血戰を語る一節だが、この章だけでも實に面白い。譯文の精妙は天香の力だとしても、原譯者が別にゐたらうから、その人の功も認むべきであらう。

以上は悉く翻譯といはぬも、先づ外來文學を政治小說化した部類に屬してゐて、天香の創作ではない。「聯島大王」に至つて始めてその創作政治小說に接する。「聯島大王」については、前章に種々述べてあり、殊に岡田氏の追憶には簡略な梗概さへ出てゐるので、讀者も略ぼこの作の概念を捉へ得たと思ふが、これは天香の小說としては傑作でもあり、又彼の政治小說として極めて主要なもの（殆んど唯一の）でもあり、內容は岡田氏の梗概と少々喰違つてゐたりするので、矢張り梗概を掲げていさゝか詳密に語らう。

先づこの小說に出る重な人物を掲げると、——

大東一郎　海軍下士官（主人公）
森　健二　生糸商會のボーイ（一郎の同志）
豐良　匡　元牧師（一郎の同志）

英國人フオツクス
英國人ミス・リツプル
李　福　海　　支那豪商
日下お淑　　一郎の援助者、後に一郎の夫人

大京一郎は代表的の海國男子だが、海軍の制規として下士官からなか〳〵上進する事が出來ない。その上、かつて英國グラスゴーで建造中の軍艦を監督に行つた時に、造船所附近のカフエーの娘リツプルの戀をかち得るが、軍艦が竣工して日本へ廻行する時、愛人と別れを惜しんで居る中船に乘り遲れてしまふ。その爲にもう士官になる望は無くなつた。さうするとミス・リツプルの態度は、何やら冷たくなつてくる。一郎は始めてミス・リツプルの巧らみを悟り、快々として日本へ歸る。日本へ歸ると、乘り遲れの罪で軍法會議にかけられ、終に軍職を去らなければならなくなる。一郎は大志があり種々な計畫も持つて居り又これを實現するだけの氣力もあるが、まだその機會がないので、日下自分の下宿先お淑親子の親切によつて生活して居る有樣だ。お淑は一郎の人物を見こんで自分の夫はこの人だと心の中できめてゐるのである。

お淑の母が、一郎の借りた金の證人になつたことがある。ところがその金の貸主の横田新七は、實はお淑を自分の親分のブローカア、フオツクスに世話しようと言ふ積りなので、わざと度々うるさく催促にくる。

今日も一郎の留守にフオツクスと二人で催促に來て、散々お淑をいぢめてゐるところへ一郎が歸つて來て、新七を叱りつけ、二人を追ひ歸してしまふ。一郎は、世良田匡が世話した就職先（支那人李福海の商店）へ行つて見たが、その仕事が思はしくないので歸つて來たところである。そこへボーイの健二が素晴しいニユースを持つて飛び込む。それは、何かといふと、横濱で日米兩國商人の間に懸賞競泳が行はれるから、一郎にも加はれといふのだつた。

一郎は奮然としてこれに加はつて、見事に勝つ。そしてこの懸賞金で、浦賀の沖で沈沒した汽船を一隻手に入れる、一郎はこの沈沒船を引きあげて、多年の希望である海上商業を實行する決心をした。一郎の決心に感激して、世良田も健次も、新七さへもが同志になる。

一郎は先づ水漬しになつてゐた船荷を巧みに賣拂いて大利を得た、さうしてその金で南洋向の品物をつみ込む。いよ／＼船が出る時、妙なことでフォックスも一行に加はつた。

船は東京灣から南へ南へと進む。一郎の心事を知らぬ水夫等は、船規の嚴正に堪へかね、フォックス等の煽動にのつて、叛亂を起す。さうして一度は一郎を押し込めて、自分達が船の實權を握り、横濱へ戻らうとかゝるが、舵を取り違へて却つて南へ流され、流れ流れて濠洲シドニーに着く。そこで一郎は、彼等の手から脱して、却つて彼等を心服させる。

一郎は積んで來た荷物を賣り拂いて大利を得る。同時に日濠貿易の事を細かに調べて、今後の商業的發展をはかる。然るに丁度その際清佛事件（明治十八年）が起つた。一郎はこゝぞとばかりに船一ぱいに石炭を買ひ込んで、上海に向ふ。

一郎達が出帆した後で、何箇月も何箇月も消息がないので、お淑等は心配する。勿論一郎の消息が無いからとて心を變へる樣なお淑ではない。

上海を目ざした一郎は目的地近くの海上でフランスの軍艦に出逢ひ、石炭を高價に賣る。ところが上海に着いて、李福海の紹介で道臺（知事）に逢ふと、道臺は臺灣に軍器その他を運送する船が無いので弱つてゐることが解る。義俠な一郎は、支那側の窮境を見るに忍びず、その運送を引き受ける。途中種々冒險があつたが兎に角無事任務を果して歸る。ところが上海近くの河口で英國の汽船と衝突して一郎の船が沈んだので、英國の船主相手の訴訟となり、一

郎の主張が通つて數千ポンドの賠償金を得る。のみならず、一郎の沈んだ船が、意外にも支那側にとつては、河口閉塞する役に立つたので、道臺は喜んで運賃共に二萬ドルの大金を渡す。一郎はその金を盡く自分のものにすることを潔とせず、一部は部下に別ち、一部は上海の窮民の救助に當てる。別に一方では又石油船の買占めをして又儲ける。さうして新たに大汽船を買ひ入れて歸國する。一郎はそれより横濱に商館を立てゝこゝを本據とし更に數隻の汽船を買ひ入れて盛大に海外貿易を營む。南洋は勿論、濠洲、上海、布哇等の諸方に支店をおいてそれ〴〵腹心の部下を主任にする。その間にも、お淑親子を尋ねて禮を言ひ且つ慰めることを忘れはしない。

世良は、やがて一郎の後援を得て獨立し、窮民や廢人（聾者啞者など）をつれて南洋無人島の開拓に當り、立派に新島開發の實績を擧げる。

この間一郎は南方から北方に目を向けて、北海道から千島、カムサツカ方面の漁業經營を企てる。さうしてこれ又計畫が圖に當つて大成功をする。

且つて一郎を捨てたミス・リツプルは、一郎の成功を聞き、父親にそゝのかされて突然横濱の一郎を訪れる。一郎は一度は「自分は士官の名譽がない」と皮肉を言つてはねつけるが、遙々尋ねて來たリツプル父子の失望を思ひやつて、父のリツプルをシドニーの支店に使ふことにする。

かくて一郎は自國の商利は自國の商人に收めよと言ふ主旨を着々實行して、多年の宿志をとげたので、企業の三週年にあたる日、一週間に渉る大祝賀宴を催して、厚く部下を勞ひ、將來の發展を誓つた。祝宴の席には日下お淑が一郎の新夫人として列席してゐた。

此の小說の題、「聯島大王」といふのと、今この內容を比較して考へると、天香は最初の腹案を變へて、舞臺を縮

小したのではないかといふ氣がする。この小說では新島開發の事實はあるが、それは世良の理想を實現したもので主人公の一郎から精神的物質的援助はうけてゐるにせよ、一郎は新島の大王ではない。だから恐らくこの新島開發をもつと大袈裟にした南洋諸島占領の如き大事業を描き、一郎をもその主人公にしたかつたのであらうが、何か故があつて、かういふ風に舞臺を縮少したものであらう。

尤もこの「聯島大王」といふのを比喩的に解して、一郎が南洋から、濠洲、布哇、北海道、千島等をその貿易線に連ねて皆我が領土の如く振舞つてゐるといふので、かく題したと見れば見られぬことはない。然しさうなると單たる業屋落ちとなつてしまふ恐れがあるから、これは矢張り舞臺縮少からかういふ體裁を來したものと考へたい。

「聯島大王」は普通の類別によれば、冒險成功小說である。これを經濟小說といふのは可いとしても、これを政治小說といふのは何うかと訝る人々が無いとも限るまい。だが、これは明治二十年の日本國家の國情からいつて、立派な政治小說であつた。少なくとも政治小說としての役目を果したものであつた。

明治二十年前後が、近世日本の產業史貿易發展史上第一期の發展期の始めとして特筆すべきものたることは、その方面の研究家の公論であつて、今更私が故らしく引照立證するまでもないところである。國民は上下とも歐米先進國の繁榮を欽羨し、何よりも先づ國力の充實を國家當面の急務としたが、その根本策としては產業立國、經濟的發展の方針を確定することであつた。既に政府はこれを執り、國民の要求もそこにあつた。だが、產業立國、經濟的發展は、平和的な國家伸張の手段であるが、我が國の如き狹い島國にあつては、これは自然海外發展を意味することになる。當時に於いても、北進か南進かの論が識者の間に盛んであつたのは、南北何れかに伸張するのが、當時からして日本國家として必然の運命であつたのである。中でも武力肯定者は多く北進論を唱へ、平和進出論者は、主として南方進出論を唱へた。當時朝鮮は嚴たる獨立國であり、支那も無限の未知數を含む大國であり、その背後には歐洲列强

中の雨横綱ともいふべき英國とロシヤが控へてゐる。北方大陸地方に進出するには、何うしても武力を必要とする場合に當面する。これに反して南洋地方は、もう可り歐米の手が伸びて來つゝあつたが、布哇も比律賓も獨立國であり、又南洋の小島にも土人の獨立國家（名のみにせよ）が多く、この方面に進出するには、武力によらず、平和的手段で可能なものゝ如く見えた。又事實出來たであらう、それで識者は多く南方進出論が國家の利益だ（日本の當時の實力を以てしては）と考へた。この北進か南進かは、當時の日本としては、國家將來の方針を決する重大な政治問題であつた。

而して商業立國、南方進出は、當時のジャーナリズム乃至知識階級の輿論と見てもいゝのであつた。開明せる社會の木鐸は何れもこれを以つて國論を喚起しつゝあつた。

「聯島大王」の著者小宮山天香も、當時錚々たるジャーナリストの一人として、憂國の熱情をもつ知識人の一人として、同じ理想を抱いてゐた。その天香の商業立國、南方進出の理想を寓したものが、先づこの「聯島大王」だといつて可い。

この種の理想を寓した小說が一つではないことは、前卷須藤南翠の條を見ても知られるであらう。だが南翠の場合には南方進出の理想は寓されても、そこには商業的發展といふ今一つの理想が、さう明確に出てはゐなかつた。然るに今天香の「聯島大王」にはその二つの理想が極めて明白に出てゐるのである。知識階級なり一般讀者なりがこの小說を喝采し歡迎したのは、これが小說として面白いためであつたからに違ひないが、一つは、そこに寓されてゐる理想が彼等をしてさう喝采歡迎せしめたものであつた。主人公一郎の事業が三週年に達したとき、新聞雜誌がその成功を稱へて左の如く評したといふが、これは、實は作者天香がその理想を揭げて、新日本の商人の奮起を促したものと見て可い。——

斯る非常の事業を始め斯る非常の勝運を得たる者とては實に昏睡せる我が商業社會に在りては此の一郎を以て第一の先登者となすならん然れば或る新聞は斯人を論じて眞個米國流の豪膽事業家なりと云ひ又或る新聞は斯人を論じて實に日本帝國の新商人たるに愧ぢずと言ひ此の剛毅の精神と機敏の智能とを以て倍進んで此等の事業を擴張せんには他日方に東南洋各處の島國を聯合して大に商覇を東洋に稱するの時あるも亦未だ知るべからずと言ふに至れり思ふに奇異なる此の新商人の結合體は隱然日本の 商業社會に向つて動すべからざるの大勢力を有たるならん云々（第三十三回の三）

而して、當時商業、貿易といへば、當局の保護を得て巧みに自國民の膏血を搾ることが能事であるかの如く考へられてゐたが、天香がその商業立國の理想を揚げるに當つて斷然これを排し、個人の智慧と膽力を資本に天然の資源を開發し、海外に遺利を求め以て國家國民の福祉を增進することを主眼としたのは、商業立國の理想としては勿論其のところではあるが、然し當時としては、全日本の商人社會に對する痛烈な警告类誡の意味を示したものに違ひたい。

（前略）良あつて一郎は氣色を直し更に昂然として一坐に向ひ、一郎「諸君は如何に思ひ給ふか知りませんが我々の同盟事業は只今も申した通りその經過した年月を問へば僅かに三年の星霜に過ぎずその獲る所の利益を問へば僅に數百萬の財本に過ぎません天下遺利の多き廢産の盛んなる到る處我々の取て以て有用に供し採ふて以て公益を補ふに任せざるは無き造物の無盡藏よりして見る時は我々同盟者が今日までの事業といふものは實に渺たる蒼海に一粟を拾ひ無邊の大氣中に一分子を收めたるにも過んでありませう。然らば我々の事業は今日を以てその結果を得たる日を見んよりは寧ろ今日を以てその最初の手始めをなすべき日と見んではなりますまい。諸君の勢力と一致とに依て、幸ひに社會に對して多少の信用をも博取し又多少の資財をも博取することを得たる今日こそ始めて我々がその全力を奮つて一層盛大に且つ一層勇氣のある事業に着手すべきの機會にして、實に我々同盟者一統の冀成の

企望なる者は全く自今以後にその大成を期せんではならん事と信じます。就ては何卒諸君に於ても一層の熱心と一層の勇氣とを以て愈々進んで艱難に當り、曾て我々が第一の目的となしたる世界の幽暗を開いて文明の缺處を補ひ天物の廢殘を利用して社會の幸福を增進するの事業に向ひ著々歩を進むるの精神を擴揮せられん樣一郎が深く企望に堪へん次第であります。不肖一郎既に一身を以て同盟者諸君に許し、又一身を以て國家の公益に許した上からは百難千苦も敢て辭する所ではありません。今日より以後尙倍々進んで遺利興通の務に精勵し誓つて當年の初志を成さんと思ひます。諸君試みに看給へ諸君は今日如何なる勢力を有しました又三年前には如何なる勢力を有しました又その勢力は如何にして有しました。又その名譽と富榮とは如何して有しました。他人の惠與にも非ず、國王の恩賜にもあらず、皆是れ自から進ん自ら取る所の勝利ではありませんか、南洋の勝運も諸君が自から取る所であります。北海の勝運も亦諸君が自から取る所であります。內國の勝利も諸君が自から取る所なれば外國の勝利も亦諸君が自から取る所であります。陸上の勝利も諸君が自から取る所なれば、海上の勝利も亦諸君が自から取る所であります。此の勝利をして永く千百年にその運命を保しめんことは一に諸君の進取すると否とに因のであり升、天下遺利遺產多し、今より後諸君の進取力にて尙少しも怠ること無之に於ては諸君の時運をして、更に百層千層の盛況に見るに至らしむるも亦決して難からざる事と信じ升勗よや諸君勗よや諸君……（第三十三回の二）

これは、その事業の三週年記念大宴會席上に於ける主人公一郎の演說の一部であるが、よく作者の意を盡したものといつて可い。

以上「聯島大王」が出た當時の空氣からいつて、「聯島大王」そのものが一種の政治小說たること、政治小說たる役目を果してゐることは明白に察知されると思ふ。

尙に作者の寓意は以上に止まらない。「聯島大王」の中心理想と關連して考ふべきは、この中の人物のもつ寓意で

ある。英人フォックスは當時日本の對外貿易を獨占してゐた歐米人を代表する。彼の子分新七は、當時外人と內地人の間に立つてブローカア的利益に生きてゐた一派の小利巧な一般日本商人を代表する。水夫頭吳子黑は支那人を代表する。フォックスが吳子黑と腹を合せて、一郞の船を自由にするのは、英國と支那が提携して日本を抑へる意味である。然し遂にそれが成功せず、一郞に屈するのは、日本が東洋南洋の貿易市場に於ても、支那、英國を凌ぐことになるといふ意味を示したものである。

一郞の同志中健二は冒險企業家として一郞の片腕たるにふさはしい人物であるが、世良は同じ片腕といふものゝ特異な人物である。彼は一面宗教家道德家である、この點が作者の寓意のあるところと見てよく、つまり商業的新日本の成立には、この宗敎乃至道德の力を根本にもつことが一の必須條件となつてゐる。この點も亦、作者の眼光が從來の商人社會操觚社會に卓越したものといはなくてはならぬ。つまり新日本が商業的に他と競爭して打ち勝つには、かかる正しい精神の力に依らなくてはならぬといふのである。こゝは、ブルジョア商業の發展の根本としてブルジョア道德を力說したもので、讀者は特に注意する要があらう。

主人公が南洋で成功して北方に眼光を向け、北海道から千島方面の經營の忽諸に付すべからざること、又この方面の海上漁獵の利の莫大なことを說いてゐるのは、從來看却されがちであつた北方開發の急務なことを人々に知らしめるためであつた、これ又當時の一部識者の輿論を織り込んだものであつた。

尙ほ注意すべきは、此の「聯島大王」の出た明治二十年は、海防整備の詔勅の出た年であり（三月）、又橫尾東作、玉置半右衛門等の明治丸が小笠原島等を巡航して南方開發に努めた年であり（十一月）、又南洋に關する限り不朽の名著といふべき志賀重昂の『南洋時事』（四月）の刊行された年である。志賀氏の『南洋時事』は、此の種の著作としては最も早く、最も有益、最も烱眼、最も興味多いものゝ一つであるが、「聯島大王」の作者も、大體の構想をこの書に

依つた如き感じがなくもない。さもなくとも、その主張に於て『南洋時事』から最大支持を受けてゐるのは事實である。海上の風景、航海中の生活の如きも、或る部分は『南洋時事』その他の航海記に依つたものと見える。

然し船舶に關する根本的な知識は、天香が矢張り入念に調べ上げたものと見え、特に精細を極めてゐる。

前に掲げた岡田氏の追憶の文章を見れば、「聯島大王」の人氣の如何なるものであつたかといふことは知られると思ふが、その人氣の原因はといへば、既に述べた如く、その主意が好く時代の海外貿易熱に合した點、識者の輿論を代表した點、又當時一部の批評家の要求してゐた如く、結構の雄大な點などが主なものであらうが、然し當時の小說界に於いて、「聯島大王」が小說としても若干の長所をもつてゐたことも一因であつたといつて可い。

「聯島大王」を小說的技巧の上から見て、先づ取るべきはその文章の高雅暢達であらう。努めて平俗を旨としてゐるらしいが、然し天香の敎養の豐富が自然に溢れ出て、讀者には滋味津々たる感じを與へる。想像も比較的豐富で本來架空的な冒險小說を書きながら、その描寫が寫實的な手法を用ゐ、先づ先づ讀者の印象に破綻を示さぬところは、多とすべきである。船中の生活、上海港口の光景などは（新聞記者だけに調査耳聞の便もあつたらうが）、いかにもと首肯させる。又、元來が理想小說、寓意小說である「聯島大王」に、人物の性格の興味を云々するのは少々無理なことであるが、かゝる小說では、人物がよく作者の理想の單なる傀儡となり勝ちなものであるのに（此の小說でも幾分それは免れぬが）、成る可くこの缺點を避けて自然に動かさうとしてゐる點は認めていゝ。

要するに、「聯島大王」は、當時のこの種の小說としては、着眼描寫ともに最も優秀な中の一つだと許して可からう。

次に「しらぬ火」のことを述る。

これは明治二十二年の作であり（二十二年四月新小說第七卷から同年八月第十五卷に至る）、從つて順序からいへば、

「看護婦人」の次に語られるべきものであるが、內容が如何にもよく「聯島大王」に似てゐるので、「聯島大王」に續けて語ることにする。

「しらぬ火」は、「聯島大王」に比すれば、ずつと短い、短篇といつてい丶かも知れない。又その筋も、「聯島大王」と酷似してはゐるが、必ずしも深い政治的寓意があるといふのではないから、その大略だけを語つて置かう。

中心の物語は、フランスより日本に廻航の途中行衛不明になつた軍艦「しらぬ火」の捜索である。「しらぬ火」が、「畝傍」の假名なることは、いはずして明白であらう。「畝傍」艦の行衛不明となつたのは、明治十九年末から二十年にかけての事件で、當時幾度も手を盡して捜索されたが、全然手掛りを得ずに終つたものである。これは今日尙ほ解決されてゐない怪事件であるが、それだけに種々小說的想像を容れる餘地があり、小說家がこれを材料に用ゐたことが一度ならずある。既に述べた須藤南翠の『旭章旗』の如き、又後に語る久松義典の『南溟偉蹟』の如き、皆これである。それが延て押川春浪の冒險小說『海底軍艦』以下の諸作ともなつてゐることは、知る人ぞ知るであらう。この天香卽ち卽眞居士の「しらぬ火」もその中の一つなのである。

荒筋は簡單である。

海軍兵學校の生徒筑紫太郎は、或る時佛人敎師ランネスの「軍艦しらぬ火の怪」といふ物語を聞いて、日本海軍の名譽の爲めに憤然「しらぬ火」捜索に出かける。ランネスは元來フランス海軍々人で「しらぬ火」建造の監督官であつただけに、この軍艦の行衛不明になつたのに人一倍遺憾の念を抱いてゐる。ランネスの物語によると、「しらぬ火」の最後の寄航地として知られてゐる新嘉坡を出發以來、日本に到着するまでの日數の間には、「しらぬ火」を沈沒せしめる如き天候乃至自然的變化はない、又技術的にも「しらぬ火」を沈沒せしめる原因は考へ得られない。且つ「しらぬ火」は沈沒せりと假定するも、それが沈沒したといふ證據が何一つない、却つて何故となくまだ何處かの洋上に

浮んでゐるに違ひないといふ氣を起させる。ランネスはかう言ひ足した、凡そ海軍々人たるものは、不慮の天災で一箇の碇を失つてさへ終生の恥辱とする、然るに日本の海軍々人には、堂々たる一大兵艦を失ひつゝも、それの行衞を不問に附さぬだけの勇氣をもつた人がないのかと。それが筑紫太郎を奮發させたのである。

かくて太郎は横須賀海軍屯營附屬の帆船東海丸に乘じ、十餘名の水夫を從へて「しらぬ火」搜索に出かけた。ランネスは自分が平生愛してゐた下僕の健介を貸して太郎の附添とした。かくて一行は新嘉坡から南洋諸島、比律賓、我が小笠原島、南支那海等隈なく搜索するが、「しらぬ火」が沈沒したといふ消息も、沈沒しさうな原因も何一つ探り出すことが出來ない。太郎は一々その行動を本國に報告はしたが、自分と健介は、「しらぬ火」の行衞をしつかと確めるまでは本國に歸らぬ決心である。

かくて、太郎及び東海丸の一行は三年の長い月日を「しらぬ火」の搜索に費したが、結局「しらぬ火」沈沒の證跡は何等得ることが出來なかつた。そこで太郎はランネスの言葉を思ひ出し、逆に「しらぬ火」が何處かにかくれてゐるのではないか、まだ沈まずにゐるのではないかと疑ひ始め、その沈沒せぬ「しらぬ火」を探す方に方針を一變した。さうして三檣型の新種の軍艦といふのを目當てに、種々消息をつかまうと努力した。

太郎がかく方針を變へてから、「しらぬ火」に似た軍艦に遇ふこと十餘艘に及んだ。然し矢張り「しらぬ火」には遇はない。一行はこれにも絕望しなければならなかつたかと思はれたが、最後でマニラで聞き込んだ或る手掛りから、「しらぬ火」に酷似した一軍艦が日本の方に向ふことを知り、その軍艦の後を追ふことになる。ところが思ひがけなく、臺灣海峽近くで大暴風雨に會ひ、東海丸は沈沒の憂き目をみる。

太郎も健介も、他の水夫も、通りかゝつた軍艦に救はれるが、その軍艦は、いかにも太郎の追つかけたものに似てゐる。たゞ名を「ユウメイ」といふのみで、何國の軍艦とも何處に行くものとも判明しない。乘組は何れもフランス

人である。太郎と健介は、初めは助命を感謝してゐたが、漸く彼等の擧動に不審を抱き、果ては海賊ではないかと疑ふ。つまりこの軍艦は「しらぬ火」の改名したもので、それが海賊に奪はれて今は海賊船となつてゐるのではないかといふ疑ひである。さうして暮夜ひそかに艦中の樣子を探りにかゝつて、捕はれの身となつてしまふ。

だが、これは海賊船ではなかつた。太郎が船長の前に引出されて見ると、意外とも意外、これは舊教師のランネスだつたのである。「ユウメイ」即ち「有明」は、日本政府が「しらぬ火」の代りに建造させた同型の姉妹艦で、今度それが竣成して本國へ廻航の途中であつたのである。

かくて太郎の一行は無事日本に歸つたが、太郎はその不撓不屈の精神が日本海軍々人の名譽を發揮したものと賞讃され、大尉に昇進した。

太郎と、その叔母の女澄子との戀物語めく關係が、本筋の添物となつてゐるが、これは眞の添物であつて、別に彼是といふべき程のものではない。

描寫の筆は流石に老練である。暴風雨の夜に於ける太郎と健介の活動及び二人が決死の覺悟を定めるところが、先づ一篇のやまといふべきであらう。

應と答へて船中に馳入りたる健介は逸早く船匠の斧を取出して再び甲板に馳昇り來れるが、折しも颯と一しきり烈しく吹落し來る暴飈一搖り烈しく打上ぐる浪に脚根(あしもと)をすくはれつおし流す潮に引れて仰(のけ)さまに其處に倒るれば倒るゝと均しくおのが頭上の第一の帆檣は忽ち凄まじき物音を發して中程より二つに折れ折るゝと均しく船は逆しまに側だち身は又潮(うしほ)に引かれて船舷(ふなばた)を外れんとす「健介第二の帆檣を斷れ」と厲しく打叫ぶ太郎の聲の幽かに耳に入るよと覺えて目も眩れ心も半死たる健介は再び氣を勵まして起上り拋棄たる手斧を搜りて逸早く躍近づきつゝ第二の帆檣に一斧入るれば吹怒れる風の力に帆檣はハッシと折れて浪に墜つこの間髮を容れず船は僅に覆るを免れて搖られ

くて波間に漂ふ、帆船にては第一の利器と頼むべき二本の帆檣を折違して名残もなければ追ふべき船は眼前に認めながら今は船を行らんにも力無し揺り上げ揺り下げ水煙を飛ばす大浪には船體何となく逆退りする樣に覺えて追ふ船に近づくべき望みも次第に纔少なくなりもて行くに甲板に被る波のみはいよ〳〵激しくして今しも折れて反激せし帆柱の爲めに破られたる船首の此方より船上の潮は滾々として中層甲板に注ぎ入り看る間に船中の過半潮水を堪へたり此有樣に一二時間をも消しなば船體は最早底の水屑となり了るべきなり然れば健介は心千縷に亂れて狂ふが如くに船上を馳廻り帆布とも言はず衣服の類とも言はず手に觸るものども取出來りて潮の注ぎ入る損所を塞がんと勉むれども生憎に船中は過半潮水となり果ては最早內に入り物を求むべからず僅かに船上にある怪しの綱具など引集めて之を塞げば一揺り打上ぐる波と共に忽ちおし流されてそが名殘だに留めず云々（第八）

以て天香の圓熟した文章の一斑を視ることが出來るであらう。

「しらぬ火」は、前記の如き問題を扱つてゐるので、自ら海事思想の奬勵となつてゐることに論はなく、又天香自身も幾分そこを目的としてゐたと思ふが、作中の興味は餘りに多く「しらぬ火」號の捜索に集中されて、海事思想の奬勵も政治小說となる程イデオロギイ的な表現を見せてゐない。從つて作としては「聯島大王」に極めて似たものであるが、又政治小說めくところが臭ふといへば臭はなくもないが、小說「しらぬ火」を直ちに政治小說とはいふことが出來ない。海事小說、冒險小說の範圍に屬するものとして可い。

最後に、「征臺遺聞看護婦人」、これは殆んど「聯島大王」に引き續いて改進新聞に現れたもので、明治二十一年四月五日から掲載され、五月九日第十回の三で終つてゐる。「聯島大王」に比すれば分量は半分にも達しないが、『しらぬ火』に比すれば、先づ長篇といふべきであらう。

此の「看護婦人」も、表面的にいへば政治小說ではないが、然し間接の意義に自ら政治小說的なものがなくはない。この政治小說的意義の說明は後にして、先づ作の內容が何ういふものかこれから語らう。

明治七年五月、わが征臺軍が牡丹社征伐に向ふ際に起つた壯烈な一事件が、この小說の骨子である。征臺の役は明治最初の外征事件であつたゞけに事の小なるに拘はらず國內の人心は頗る昂奮してゐた。のみならず、文明のために野蠻を征するのだといふジャーナリズムの人道的宣傳がその効を奏し、外國人でわが國に同情し、征臺に同行を乞ふものもあつた。支那では最初たかをくゝつて、臺灣は化外の地だから日本で勝手に征伐したら可からうと放言したが、日本の征臺軍が着々奏功して臺灣が日本の領有となるのも間近いことがわかるや、俄に異議を唱へ、臺灣は大淸國の領土なのにこれを勝手に征伐するのは怪しからぬと抗議した。そこで諸外國でも驚いて、局外中立を宣言し自國民の征臺軍同行を差し控へさせるといふ有樣になつた。その最も著しいのは米國の態度であつた。これは、自國民の征臺軍に助力することを許さなかつたのみならず、既に同行してゐる者には至急歸還を命じ、命をきかぬ者は國法で處罰するといふのであつた。そこでリゼンドル將軍事件の如きも出來たのであるが、この小說にもそれに似た事が語られてゐる。

此の小說によれば、米人アリソンは長崎の敎會堂を預るキリスト敎の牧師だが、前身が軍人であつたゞけに此の征臺軍派遣を文明の義擧と感じ、わが軍に同行して助力することゝなつた。この時信者の一人、佐賀の人高田時子なる女性が一緒に行つて、ミス・ナイチンゲールの役目をつとめ、わが軍の上下から頗る感謝された。この時子が卽ち題目の看護婦人に當るのである。

物語は明治七年五月第三火曜日、牡丹山東坡第十三號陣營で始まる。時子が傷病に呻吟してゐる兵士の手當に奔走してゐると、アリソンが來て、公使の嚴命で何うしても歸らなければならぬ。公使からの報知によれば、支那が異議

を中立てる以上、日本との一戦を覺悟してゐるのだらうから、中立國の手前、何うしても自國民の從軍を許して置けぬといふのである。アリソンは時子に勸めて同時に歸國しては何うかといふ。時子はきかぬ、この數多い傷病兵を、手不足な醫師や看護人に任せきりで歸國することは出來ぬとて、日本婦人の任務を說き、アリソンを感服させる。

やがて牡丹社攻擊の進軍が始まるので、前線にも醫者や看護人の出張が必要となるが、道路の險難なのと疲勞と病氣のため看護人達は前線に進むのを欲しない。軍醫がいろいろ諭すが聞き容れない。これを知つた時子は、慨然として自分から志願して前線に出張する任務を引き受ける。軍醫も、容易ならぬ場所だから女性の身ではと、時子の請を却けるが時子は、人間の義務と愛を說いて軍醫に迫るので、遂に許すことになる。時子は不在のアリソンに訣別の辭を認めて、勇躍して前線に赴く。

陣營に歸つて來たアリソンは、これを見て大に驚き、急に歸國の仕度も放棄して、時子の後を追ふ。時子を諫めて危險の地から連れ戻さうといふつもりだが、止むを得ずば、危難を共にする義氣もある。

アリソンは前線に追ひついて、軍醫に時子の消息を尋ねると、これは丁度時子が牡丹社の土人に囚はれたといふ報知が軍醫の耳に入つたばかりのところであつた。

そこでアリソンは牡丹社に交涉して時子の生命を助けようといふつもりで、軍の司令(西鄕從道)に數日間進軍を止めることを賴む。然し軍司令はきかぬ、時子には氣の毒ながら、一軍の大事にはかへられぬ、明日は斷然總攻擊にうつるつもりだとアリソンに告る。司令の腹では支那から抗議の來ぬ中に臺灣を平定してしまはうといふのだ。そこでアリソンは必死を覺悟し、明朝までに時子を救ふつもりで、通譯代りの土人をつれて、單身牡丹社に乘り込む。

土人は時子を囚へて酋長の許に連れて來ると、酋長は大に喜こび、やがて日本軍を皆殺しにしてから血祭りにしようといふので、牢に入れて置く。その夜は大雨であつたので、時子は、雨に乘じてのがれたいと思ふが、監視が嚴重

で何うにもならぬ。一方アリソンは、牡丹社の山寨に近づくと、先づ從へた土人に旨をふくめ、時子の安否を探らせる。さうして時子の無事がわかると、今度は一計を考へ、土人に自分を縛さしめ、山寨に連れて行かしめる。かくして時子に會つて、脫走の手筈を定めようといふのだ。然し牡丹社の土人にその計を看破され、結局アリソンもそのまゝ捕囚となつてしまふ。

土人は驚いて時子に密にこの旨を告げ、夜に乘じて時子を助け、二人でアリソンを救ひ出し、三人力を合せて日本軍の居る方に逃げる。然るに何分雨夜のことであり、その上不案內な山路であるので、遂に敵の追手に圍まれてしまふ。その時アリソンはふと思ひついて、携へてゐた喇叭で進軍の譜を吹奏すると、土人は日本軍が突如襲つて來たものと思つて、驚いて逃げ去る。かくて三人は、山寨を離れて漸く味方の陣地を目指して歸るが、途中で進軍の日本軍に會つて、行を共にする。この時、三人が逃げるとき山寨に仕掛けて置いた火が風を得て燃え上り、敵はそのために日本軍の襲擊に一たまりもなく逃げ亡せる。司令官は大にアリソンと時子の功を賞する。二人はかく冒險を經て、初めて自分達の間に一種の愛情が湧いてゐることに氣づく。

だが米國公使はアリソンが日本軍を助けたと聞いて大に怒り、本國に召喚して査問する旨を嚴達した。時子はこれを聞いて、進んでアリソンと同行して米國に渡り、彼の義勇の行爲を說いて、官憲の寬典を乞ふ決心をする。その時、折よく日淸和議の報が來り、アリソンの召喚のことも沙汰止みとなつてしまふ。

時子とアリソン夫人とは凱旋の後、夫婦となり、依然長崎の敎會堂を預ることゝなつたが、世人の賞讚のうちに、福音を傳へる貴い仕事をつゞけた。

「看護婦人」の物語は以上で終る。今日此の物語を讀んだゞけでは別にこれといふ政治的意義もないやうな氣がするが、當時の時勢、卽ち明治二十年、二十一年の日本の現勢に照すと、必ずしも政治的意義がなくはない。

既に「聯島大王」の場合に述べた如く、日本は當時北守南進か、大陸進出か、何れにしても海外進出の必要に迫られてゐた。天香の「聯島大王」は、既記の如く北守南進の思想を露骨に示したものであるが、既にその時も無人島を征服して文明開化の恩澤に浴せしめるといふ一條があつた。臺灣は、當時日本の領有ではなく清國の領土であつたがその位地からして日本の南方進出の第一門戸となるべきものであり、これを領有し得れば國家の進展上多大の利益があると考へられた。而してこの類の議論は當時一部の知識階級（若干の冒險的氣分のある）の好んで唱へたところであつた。だから十何年前の臺灣征伐を事新しく持ち出したのは、大體さういふヂェスチュアの現れであるとして、他にも種々な理由がある。當時の清國は日本にとつて、丁度勃興期のプロシヤとオーストリアの關係にあり、大陸進出にせよ、南方發展にせよ、清國が眼の上の瘤となるを免れなかつた。だから軍部その他ではもう此の時から清國との一戰を覺悟してゐたのである。それには然し我が方に歐米の同情を得る必要があり、爲めに文明の爲め人道の爲めに日本が起つのだといふことを十分宣傳した。その實物敎訓の一に臺灣征伐が持ち出されたといふ形がある。今一つは、明治十七八年の朝鮮事件、十九年の長崎事件以來、日本の對支感情が甚しく惡化した。長崎事件は、或る意味で清國海軍が、日本へ示威挑戰の態度を露骨に示したものであつた。十九年以後日本の海軍熱が俄然高まつたのは、一つはこの刺戟である。「看護婦人」は、この國民の對支鬱憤をもらす安全瓣となつた觀があるが、そこにこの小說の博した喝采の意義もある。それから更に心得なくてはならぬことは、この小說は一面日本女性の海外奮鬪を促したものだといふ點である。たゞ男性の海外奮鬪だけでは永續性が少ない、日本の海外進出を永續性のある確實なものとするには、日本女性が奮起しなくてはならぬといふのである。卽ち女權主義の擡頭を見越して、新しい日本女性への一つの呼びかけであつたことに注意しなくてはならぬ。

「看護婦人」は技術的に言へば多くいふことがない。これ亦、何等か裏面の事情で急に構想を短縮して、筋書だけを

あらあら書いたといふ感じがする、それは「聯島大王」に比して更に甚しい。それだから「聯島大王」に比してずつと人爲的な筋の運びが目立ち過ぎる。又アリソンの活動が餘り詳しく物語られてゐるので、何か外國の小說の飜譯でも讀むやうな感じがして、今日からは餘り妙でないが、此の點が、歐化思想が表面的には社會崇拜の的となつてゐた當時のことであるから、却つて讀者から歡迎される一因となつたのかも知れない。

天香の政治小說乃至準政治小說は以上の如きものである。彼の政治小說家としての技倆乃至位地の問はるべき創作物は、「聯島大王」以下の三篇であり、いさゝか物淋しい氣がせぬでもない。殊に「聯島大王」以外の二作は小說として十分な滿足を與へるものではないので、尙ほ更さうだが、然しこの「聯島大王」の一篇だけでも、小說家天香の名を南翠、文海、柳村等の間に伍せしめて恥しくない。況んや更に『涙の谷』の奇作、「夢幻」の佳作があるに於てをやである。

明治文學史を編むものは、舊型の戯作と新興文學の交代期となる十八年から二十年頃の過渡時代を代表する一作家として――而かも當時からは作家中の作家、一種の大家視されてゐた作家として、小宮山天香の名を忘るべきではなからう。（昭和十二年四月）

福地櫻癡の政治小說

序説

櫻癡居士の小說的著作中、これに政治の名を冠して些の差支へのないやうな作物は眞の少々で、他は多くその社會的諷刺小說の一部局として政治界に言及してゐる、從つて此等の社會的諷刺小說も、その政治に關連せる部分がある限りに於いて、假りに政治小說として列擧することを許していたゞく。此等の所謂政治的小說は勿論、正銘の政治小說に至つても、櫻癡のは十中八九は暴露的政治小說である、政治界の內情、裏面を、その豐富な體驗から割出して剔抉したものが多い。從つて今迄政治小說として取扱つた如き積極的主張なり理想なりのある作物とは違つて、全く消極的な現實暴露的なものゝみであるから、最初からその概念で讀むより仕方がない。此の篇では、櫻癡の政治小說について語ると共に、彼が何故にかゝる特色ある政治小說を書いたかといふことを述べよう。

櫻癡の政治小說めく作品を擧げると、ざつと次の如きものであらう。

○もしや草紙

明治二十一年九月二日、東京日々新聞
同年十一月九日、同五十一回
明治二十一年十一月二十日「增訂」單行

三十一年一月一日「自註自評」版發行

○煨芋の煙

明治二十一年十一月十五日、東京日々

同年十一月二十四日、第八回中止

單行本なし

○(滑稽小說)色と慾

明治二十一年十二月一日、東京日々

同年十二月三十日、全三十回

二十五年十二月單行、改題「色慾二筋道」

○外國巡禮(同行二人)

明治二十二年一月三日、東京日々新聞

同年三月十五日第四十七回中絕

單行本なし

○(滑稽小說)仙居の夢　署名なし

明治二十三年七月一日、東京日々新聞

同年七月三十一日、全二十六回

單行本未考

○都見物　困睡翁

明治二十三年八月一日、東京日々新聞

同年八月三十一日、全二十七回
二十七年四月單行、改題「夢が夢中」

○世態人情陰陽大和錦（うらおもて）　夢の屋主人戲作
明治二十三年八月三日、やまと新聞
同年九月六日、全三十回
二十六三月單行「櫻痴滑稽談」所收

○黑犬漫筆　貧乏神
明治二十三年九月二日、東京日々新聞
同年九月十六日、全十回
二十五年十一月二日單行「櫻痴放言」所收

○同　智惠傳授
明治二十三年九月十七日、東京日々新聞
同年九月三十日、全八回
「櫻痴放言」所收

○滑稽素人芝居　夢の屋主人戲作
明治二十三年九月七日、やまと新聞
同年十月十九日、全三十五回
二十六年八月單行

○駄子放言　第一　御吐合

明治二十三年十月一日、東京日々新聞

同年十月二十八日、全十四回

「櫻痴放言」所收、改題「不平の捨溜」

○（滑稽小說）花懺悔　夢の屋主人著

明治二十三年十月二十五日、東京中新聞

同年十一月十八日、全二十回

「櫻痴滑稽談」所收

○社會百態　夢の屋主人戲作

明治二十四年一月三日、やまと新聞

同年二月二十四日、「出放題」（全集所收）

○（理學哲學）嘘八百

明治二十五年一月八日、東京日々新聞

同年二月十七日

二十七年二月單行

○（滑稽奇談）田舍めぐり

明治二十五年二月十八日、東京日々新聞

同年三月十八日、全二十五回

二十七年二月單行、改題「浮世見物」

○（滑稽）六歌仙講義錄

明治二十五年三月十九日、東京日々新聞
同年三月二十六日、第六席終
「浮世見物」附錄「滑稽譚六歌仙」

○嘘世界（うそのよのなか）
明治二十五年九月二十四日、やまと新聞
同年十一月二日
二十八年十二月單行歌題「兩面假與眞（ふたおもてうそとまこと）」

○嘲世諷俗浄玻璃（はり）
明治二十五年十二月一日、都新聞
同年十二月二十九日、全二十五回
二十六年十一月單行「櫻痴新編」所收

○當意即妙戲畫解贊
明治二十六年一月三日、都新聞
同年二月十六日十八回迄か

○僞稱紳士
明治二十七年五日、明治文庫第十編

○支那問罪義經仁義主汗（にんぎすかん）
明治二十七年九月十五日、國民新聞
同年十月十九日、全二十九回

○張嬪
明治二十七年十二月單行（發禁といふ）
○嘘の世の中
明治二十八年一月、「伏魔殿」後篇
○怪物屋敷
明治二十八年九月單行、「伏魔殿」前篇
○滑稽小說秘密機關
明治三十年一月二十七日、東京日々新聞
同年三月三日、全三十回
三十年六月單行、改題「買收政略、大策士」
○思ひ〳〵別名 奇緣奇遇
明治三十年十一月二十八日、時事新報
同年十二月二十六月、第二十六回
○世はさま〳〵
明治三十四年十一月一日、日出（やまと）國新聞
同年三月十三日、第百二十七回完

以上でその大數は擧げたと思ふが、然しこれで櫻癡の政治小說が盡きたといふことが出來ぬのは勿論である。彼のやうな多作の作家ではいつ何んな小說を書いて何新聞に投稿してゐるものか、さう明確にはいへたからう。然し彼の政治小說の生命たる暴露的特色は、以上の諸作によつて十分窺はれると思ふから、その點では先づこれで櫻癡の政治小

說として典型的なものが殘りなく集まつてゐるといひ得るのである。

一　櫻痴居士の政治小說

『もしや草紙』

此の作は、櫻癡居士が小說家として文壇に打て出た處女作であり、その政治小說としても、いはゞ總論的典型的存在で、其の「予は如何にして政治小說家となりしか」を語る述懷の興味が可成り深いから、小說的價値の如何に係らず、いさゝか詳しく研究して見よう。

この作は、諷世嘲俗の小說によくあるやうに、夢物語的未來記の形式を採つてゐる。夢物語的未來記の小說はスケチ風の描寫が多く整然たる筋のないのを常とするので、概して梗概が取り惡い。それで最初は眞の荒筋だけ標出して置いて、後は本文に從ひ、回を逐ふて步を進めて見よう。先づ此の作の主要人物を擧げると、——

清水潔（本篇の主人公、家は舊幕時代大名用達、明治二十一年より洋行、明治三十六年歸朝、溫厚にして學識ある秀才、これより活社會に出て立身出世を求めんとす、たゞ長く日本に在らざりし爲め諸事不案內なり）。

同　乙女（いはゞ女主人公の格、潔の叔父の女、種々の運命を經て潔の夫人となる）。

夢野實（これは清水の顧問格で、實は作者櫻癡が氣焰なり述懷なり社會批評なりを發表する機關なり、新聞記者の戲作著述家）。

篇中に通じて隨處に動く主要人物は、此の三人でよい、他にそれぞれ、社會各方面を代表する無數の人物が出るが、それは必要のある場合に應じてそれぞれ紹介する。

時代は明治三十六年、卽ち櫻痴がこれを書いた二十一年より十五年後のことである。荒筋をいへば、十五年振りで歸朝した清水潔は、折角西洋で學んだ政法經濟の學問を實地に役立てゝ立身を求めんため、先づ準備として紳士の交際社會に入るのを手始めに、夢野實の意見によつて、官吏社會、銀行社會、政治社會、新聞社會等々に出入するが、その各の社會の内幕を見ては呆れて逃げ出し、遂に夢野と同じ文學社會の人となり、遂に學士として位地を得る。又乙女は父の死後、手内職して母を養つてゐたが潔の助力で、敎養を受け、一流の淑女として交際社會にも出入する身となり、又女敎師として生活の途も得る、然し演劇改良の大事業に贊成して自ら女優となつて進歩を計る。勿論最後に潔、乙女二人は結婚して大團圓となるのである。

櫻痴の描いた社會が明治三十六年となつてゐるのは表面だけのことで、事實は當時の社會世相を活寫してこれに思ひきつた諷刺を浴せるつもりであることは、いふまでもない。從つてその三十六年の社會なるものは、悉く二十一年の社會の特色をそのまゝ誇張しただけのものになつてゐる。

以上を豫備知識として、以下本文に卽して語つて行かう。

清水潔の出身及び在學中の詳しいことは割愛するとして、潔が歸朝卽後のことから始める。潔が歸朝後第一に會つた人物は、父の時代に世話してやつた那權藏といふ人物である。これは投機師兼高利貸であるが、紳士として羽振がよいので、潔は萬事これに相談して歸朝後の身の振り方を相談しようとしたのであるが、權藏はそんな昔の恩義などを思ふてこれを返さうなどと考へてゐるやうな人物ではない。權藏の態度が意外に猶太人式に徹底してゐるので、潔も呆れて逃げ出す。それから叔母母子を訪ふて、叔父の一家の轉變を聞き、昔叔父からうけた損失を忘れて、賴りの

ない母子を助ける（潔と乙女は從兄妹である、初對面から互ひに慕ふ心がある）。潔は樫藏の身上と叔父一家の轉變に、此の十五年間の日本社會にも案外な變化があつたことに氣がつく、さうして昔同窓だつた人々と舊交を暖めるにつれて、益々その變化の甚しいのに驚き、立身出世の準備として、日本の社會の實地を十分に研究してみようとする。潔が第一に飛込んだのは、當時の流行社會である。（第四回、五回、六回）。飛び込んで見たものゝ骨の折れることは一通りでない。日本の流行社會なるものゝ趣味慣習は和洋混淆種々樣々で、到底眞面目に應接し切れはせぬ。先づ流行社會に入る資格としてはシガーにシガレット、「西洋骨牌のウィスト」及び花骨牌の「ヨロシイ」、舞踏、ピアノ、唱歌、讃美歌、さては謠曲、茶の湯、骨董、相撲、芝居、端唄、都々逸、相場、待合遊び、碁將棋等々を一通り心得なくては（乃至心得た顏をしなくては）ならず、「是ではナンボ修行でも體が續かねば根も竭る入用損の日間つぶし、コイツ一工夫せねば堪らぬ」とさすがの清水も茫然と方角を失つた如くになる。然かもこれを我慢して流行社會なるものに近づけば近づく程醜陋とも汚穢とも腐敗とも墮落とも、言語に絕えたことばかり、清水の發見した社會の內幕は意外とも意外なことづくめである。

上流の都人士には特有の性質と知られたる君子國の名物日本一手捌きの德義は斯く腐敗したりとは思はざりき、江戶ッ子の俠み膚と云はれて三百年間養成したる義俠の氣風は僅か二十年か三十年間に其痕跡を絕たんとは思はざりき、義理にも人情にも構はず、己れさへ都合よければ何でもすると云ふ事が開化の當世風なりとは思はざりき、御髯の塵は積らぬ先に拂ひ閣下の高論敬服仕ると竈にも媚び奧にも媚び以て榮達の道を計るが世上の欣羨する所なりとは思はざりき、不景氣な顏色を持ちながら美人を氣取り無暗に男子に向つて橫柄なるが女權の伸張とは思はざりき云々（第五回）。

夜會、舞踏會、接見日の御機嫌伺ひ、貴女の獨吟獨奏會、政略的集會、藝妓の周旋、利權の涉漁が所謂流行紳士の生

活の大部分を爲してゐるのを見てつくづく世相の淺ましさに呆れてゐたが、或る日、『處世眞理』と題する著書が媒介となつてその著者たる烏有仙史夢野實を訪ひ、夢野の社會論と處世話を聞くことになる（第七回）。夢野の論は、社會に對する個人の態度は二つしかない、此の社會が萬事嫌ふべきものづくめなら、これに逆行しこれを破壞して新らしい社會を造るか、それとも社會の成立を自然的なものと觀念して社會の現象に順行し、「風に逆はず潮に激せず棹を取り帆を操り終にはおのれが目ざす所の彼岸に着する」か、この二つである、奮發して立身の策を立てよ、社會の現象を恐れず勇往邁進せよといふのであつた。それで清水も考へ直して、先づ立身の捷經と當時考へられてゐた官吏社會に身を投ずる。試驗にも及第し、よき傳手もあり、前途有望に見えたが、清水は「自分は官員の辛抱が出來ぬ」といふので數月で辭職してしまふ。つまり官吏の表面の職分たる職務上の盡力は如何樣にも出來るが、裏面の職分たる上長への奉承逢(あう)迎が出來ないといふのである。こゝで、清水と夢野の物語に批して、官吏社會への諷刺が始まる（第八回——第十一回）。

第一は官吏高等試驗への諷刺である。先づ試驗官諸氏のこき下ろしがある。

（前略）夫に試驗官に選ばれて威儀を整へて臨席したる先生達を見ればソレ先生も御存じのフランクホルトで何時も〱不出來ばかりして皆が嗤つて居た長來(チヨンキナ)氏が首席を占め、其次がオックスホードで三落第と異名を取つたる鈍(ニブ)井(キ)氏、其次は僕は知らぬが何でも東京の法科大學で卒業した解部(トケベ)氏（中略）其次が米國留學生中で誰も知らぬものも無かつた賭川(カルガハ)氏、其次は法螺協會の幹事で自稱術數家の茶良鉾(チャラボコ)氏で御座りまして、尤も委員長は御承知の May Be 大博士云々

これから口頭試驗、筆記試驗の奇觀に至つては「若も春の屋おぼろ氏か誰かに眼のあたり其樣を見せたなら其實況を寫したばかりでも一冊三百ページ上中下三冊の滑稽小說が一部出來ませうよ」とあるので想像すべく、詳しくはいは

ぬ、櫻癡は種々試驗場の奇觀を寫した揚句、最後に諷して曰く――

老輩の話を聞きけるに十六七年前に文官試驗規則を初て實施せられた時には試驗も中々嚴重で請謁などゝ云ふ事は當時藩閥の積威が有つた時でさへ微塵毫末も行はれず洵に方正公平で有つたさうで御座るに明治三十六七年の今日に至つて斯く相成り臭白少年でも紈袴子弟でもサッサと試驗に及第出來るは不思議の世の中これが社會の風潮で御座りませうよ云々（第八回）

明治三十六七年より十六七年前は丁度明治二十一年で、『のこもしや草紙』執筆の當時である、二十一年當時官吏任用試驗の嚴正公平を特筆するところに、櫻癡の强いアイロニイが示されてゐるわけである。

淸水は幸ひ、外國で恩を施したことのある欒井某が勢力ある何伯夫人の弟で羽振のいゝ官吏であるところから、難し家で通つた某省の次官をも納得させて、この省の參事官となる。この次官の性格は實に當時の俗吏の典型を擧げたものともいふべく、「次官の男爵（バロン）先生は判任十五年奏任十年勅任十年と鰻登りに登り此省の事はおのれが鵜嚥ぢや一寸見た計りでも此書付は誰の草稿で寫字生は誰だといふ事まで分ると、乙な處に自慢はすれど重大なる事件に出會へば是と云ふ分別は出ず、其癖定規定例の細い事なら楊枝の尖で重箱の隅を洩はうといふ代物で表べには德義を飾つて邊幅を修むれども、一皮はげば眞の俗物で鼻もちのならぬ人物」云々といふ描寫は眞に迫るものがある。それから始めて靑雲の上に昇つた時のお禮祝ひ、「（前略）相濟まぬは學友知己たまでの盡力も無いに御禮の贈物は先方から御催促これも仕方が無いとした所が同僚の懇親を結ばねばならぬとか、屬官にも近づきに相成るべしとか入らざる御注意で、或は水ッぽいビールを飮で諂諛の席上演說を並べたり、或は紅の輪廓を附たる蒲鉾に粟きんとんのお料理で調子ッぱずれの端唄を拜聽したり揚句に詰らぬ議論から酒の上の擢み合ひ婆藝者と其家の女房の取押へて仲裁とは成つたれど此方が其夜の主人だけに翌日は双方に行つて首尾を取繕ふ始末ソンナコンナで札は鵞毛に似て飛だ散財し人は薄

情を見て遂て後悔すと云ふ有り難い仕會」云々（第九回）、これが又その場の光景と清水の當惑を見せる輕妙文字である。

ところで本文の官吏生活の退屈の描寫になると又一段と面白く穿つてある。「サア是からは我も高等官なりイザ學藝才能の程を事務の上に顯はして見せんござんなれと腕によりを掛けて出頭し萠黄羅紗で張たる大机を前に据ゑ小豆皮の大椅子に腰を掛け右の方には硯箱、左の方には御用箱サア來い御座れと一身の全力を集めて待て居れど」、折角待つてゐるが、清水のする用は何もない。九時より十時までは新聞見直し、十時次官昇省と御機嫌伺ひ、同僚出勤、漸く書類の檢印（此の書類の取り扱ひにも天降りの御注文、情實つき、形勢觀傍などいろいろある）、これも同僚からの指圖通り、晝飯、午後も何も用事なし、三時退省といふ順序がいはゆる常務といふので、先づ「高等官員は小印を押すなり」といふ新聞記者の悪口通りである。此の外臨時に省中會議、次官殿を議長にして局長次長書記官參事官總出仕の器械大評議があるが、これとて畢竟は言論尊重の美名を看板にしたゞけ、大臣次官殿のお説に敬服し合ふ競演會に過ぎぬ。然かもかゝる省中會議で決定したものは直に内閣の會議を通り、議院に下附となつて「西洋では十年も二十年も乃至五十年も掛つて實際に明るい老輩が討論しても濟らぬ事が早くて三週間遲くて二月か三月の中には法律勅令と相成る」。これでは本家の西洋の政治家も舌を捲いて閉口の外はない（第十回）。ところで以上が官吏生活の全部なら退屈とした處で馬鹿々々しいとした處で何ら辛抱ならぬ程ではない、辛抱のならぬのはその裏面である、その交際の内幕である。生活の體面上、馬車と人力車は備へる要があり、赤十字社、地學協會、國家學會、佛學會、英學會を始め女子教育の奬勵、貧民救育の病院の爲め又は噴火、洪水、地震、大火、難船、海嘯等の天變地異のある毎に義捐金寄附金の用言に出る、それから和洋兩様の服裝だ、それから又同僚その他の交際で新柳二橋の花、墨陀の舟遊、北里の遊蕩も試みなくてはならぬ、時々は詮方なしのお供もある、夫が更に下つて來ると神明、赤坂、四谷、牛込、湯

島、下谷、向島に至るまで安い一點張りの「實地研究の御相伴イヤハヤ鼻持が出來ぬ」それからが例の花骨牌、小言をいはれて敗北ばかり下手だから御免を蒙り度いといふと「ドウモ君は附合が悪い是が出來いでは紳士の仲間へは入れぬぞ」と權柄づくの脅迫で徹夜となることも珍しくない。それや是やで月給は拂底、御茶屋の拂だけ持出しとなら う。この外にまだ〳〵辛抱の出來ぬ嫌な事が澤山ある。同僚の高慢、先輩の手柄話、これも大變なものだ、若い連中は自治制を外國に傚へといふ、老輩は外國崇拜はいかぬ、日本には日本の長所があるのに日本を歐米にしようとは怪しからぬと若僧の專横を怒る、思ひ思ひの不平話をも御尤千萬と聞かなくてはならぬ、就中我慢が出來かねるのは俄レーディの御機嫌取りである。これが何とも一番卑屈で厭なものだ云々（第十一回）。

官吏社會の表裏は實に手に取る如く穿つてある。

夢野はそこで清水に對し、然らば外國相手の外交官になつたらと勸める、追々外交多事の折柄、功名を立てる地が多からうといふのである、然し清水はこれも斷はる、實力競べの世の中では日本の外交官位氣骨が折て効の無いものがないといふ、こゝで日本外交のこき下しが一席ある（第十二回）。さればと財務官を勸めると、これは尙ほ更難かしい。「當今百姓、町人、職人共外の納稅者を見れば如何にも稅の負擔が重いに相違ない、取分け農家に至つてはいくら汗水を流して田を作り畑を作つたからと申して割に會ふ話どころか算盤を取つては出來ぬ稼ぎ」である。然るに財務の長官は負擔の輕減どころか、この位の稅は國民當然の負擔である、堂々たる大日本帝國の文武の行政を維持するには此の位の經費は勿論だとしてゐる、これでは心ある者は何でその下風に立てやう。こゝに當時の財政當局に對する手痛い諷刺がある（第十三回）。

第十四回は『もしや草紙』の中でも最も面白い一段であるが、こゝで、夢野は、自分の經歷を引いて清水の不平病を警しめる。今日「學識に富み才能に長けたる人々が動もすれば社會の現狀に不平を懷き可笑しく世にすねて筋違に

其身を置き戯文小説を假て世を嘲り時を罵り以て愉快なり」とする、然しこれは矢張り「儘ならぬこそ浮世なれ」といふ社會の原則を悟らぬからの惑ひだから、清水自身は決して此の魔道に迷ひ込んではならぬ。決して社會穴探しの政治小説などを書いてはならぬ。政治小説を書くのは、恰も社會の有力者に絶交狀を送るやうなものだから、清水は用心してかゝる事業は試みぬやう注意しなくてはならぬ云々。これは清水に托して、櫻癡自身がいよいよ小説家として立つに至つたその身の不遇を憐れむ嘲嘘の言葉と見て可い。殊に清水を警しめる例として擧げた自家の經歴に至つては、櫻癡自身の半生の實錄で、切々たる悔恨の情が文字の外に溢れてゐる。

(前略)マア僕が善い手本ぢや君も御存じの通り僕は歐洲に數年留學して成業の後に日本に歸り官員になつたが當時の政略に感服が出來なかつたから朋友の諫をも容れず斷然官を辭して民間に下り夫から商人になつたり職人になつたりして色々の境界に身を置たが何も彼も氣に食はぬからグツと世に殺げて政治論者になり我苟も國の爲とあるからには世間の毀譽はなんの糸瓜の皮帽子言ふなら勝手に夕月夜かまを拔るゝ乃公ぢや無いぞと腹を据て掛つて見ると頓に思つた本陣は何時の間にやら裏崩れ氣の毒なるは先陣に進んだる新聞紙と僕の身せ四方八方の敵に當り茲を最期と戰つて後を見れば本城は疾に落ちて白旗で和睦の條約が濟んだと云ふ有樣、ソコデ僕も陣を引上げて見ると負たる深手が是まで盡力したる賞牌、誰あつて御苦勞だと云ふてくれる人も無くナンノあれは彼漢が醉狂で仕た事だ乃公の爲には却て迷惑であつたと酷い御挨拶、と云つて腹を立つた所が此方が馬鹿の上塗をして暗夜の恥を白日に出すだけの事で妙は無し、またソンナラ僕も店を出し直して一番若い衆の御機嫌を取結ばうと出掛け場當りの喝采を得て餓鬼大將になつて見た所が氣恥しい始末ア、斯なつたら身を退くに若は無し(中略)深淵へはまつたは此方がベラボウゆゑと悟つて見れば十餘年議論の夢は覺にけり、夫から政事の議論はフツ〳〵否になり藝が身を助ける程の不仕合せで少しばかり物が書けるを資本にして(中略)變な浮世の穴探し筆一本で世を渡るいくぢの無い

身で御ざんす哩なぢや

「去れど老驥は既に伏して志は千里にありと申す如く此の烏有仙史小梅の里に引込んで居ても時節が來たら打て出る氣力は少しも挫け申さぬ、マダ〱腕は慥で御座る」と力んではゐるが、前段の述懷は櫻癡衷心の叫びである。「氣の毒なのは先陣に進んだる新聞紙と僕の身サ」の一語でも、滿腔の不平悔恨が溢れ出てゐるのを覺える。こゝの、新聞紙とは政府擁護に專心してゐた東京日々新聞のことを指す。櫻痴と日々新聞の關係、對政府、對在野政黨の關係については、周知のことで、種々述べたものもあるが、それにしても櫻癡の憐れむべき心事を知る好文獻としては、以上の述懷記事にまさるものはない。

こゝで清水は、櫻癡即ち夢野の忠告を聞て、「世にすねることをやめ」、「社會の中に居て身を立てる心得で」社會膝栗毛をやることになる。（然し清水はもう此の時『煨芋の煙』といふ所謂社會穴探しの政治小說を書いて、後に文學の士として起つ素地をつくつてゐたのだ。）

「社會の中で身を立てた」清水は第一に何になつたかといふと、思ひがけなく投機銀行の行員になつた。こゝで夢野と清水の間に非難辯明の遣取があつて、結局櫻癡の皮肉な銀行論となる（第十六回十七回）。投機銀行の名に既に諷刺があるのであるが、夢野は、世間に銀行も多いに此の相場屋と質屋とを兼業してゐる銀行に選んで入つたといふので清水を責めると、清水は、此の頃の世間の銀行は、營業上からいへば皆投機銀行と同じことで、何れもこれも質屋で相場屋を兼ない銀行がないといつて反駁する。その上、世間の銀行家が政府の鼻息を窺つてもうけようてもうけようとのみしてゐることを暴露したものである。

然し清水は投機銀行に長くは居らず、決算の遣繰のことで頭取と衝突して止めた。さうして今度は一思ひに相場會所に入らうといふので夢野に意見を求める。夢野はこゝぞと相場會所の成立を說明して、當時の相場會所改良論のこ

と、ブールス法から商品取引所設立論となり、急轉して非ブールス法となつて元の相場會所に落ちついたこと、及びその弊（政府の內部と連絡があること、眞面目な取引を妨害すること等）を說き立てたので、清水は思ひ切る（第十八回）。

やがて清水は假分限の赤螺(あかにし)長者の園遊會（此の園遊會の描寫は當時流行した成金者流の所謂園遊會なるもの丶典型的なものとして實によく穿つてある）で生質(イキシチ)子爵と知りあひ（第十九回）、子爵によつて政治界に引込まれさうになる。だが生質の眞意は、清水の文才（『煨芋の煙』に感心したので）を利用して陰險な政敵の人身攻擊をやらせ、それを內閣乘取の一助にしようといふにあることがわかつたので、政治上の爭ひは公明正大を尊ぶと信じてゐる清水は、それを斷はる（第二十回、二十一回）。こゝで清水と子爵の間に當時の政黨論がある、子爵は、要するに政黨なるものは皆朋黨で營利を目的としたものだから、かゝる倒閣手段も當然だといふ、これは正しく當時の或る種上層政治家の政治信念を露骨に示した諷刺であらう。

清水が有名になり、政府要路の人々とも知己になつたと知つて、やがて彼の那樫藏が、いはゆる熊鷹連で造らうといふ政府御用達會社（欲得社）の社長にといつて來て、その有利の事業たることを滔々陳べる、これには流石の清水も立腹し、わざと皮肉に欲得づくの條件を吹つかけて追ひ拂つてしまふ（第二十二回）。

夢野は始めこそ、清水の政治小說を書くのを止めてゐたが、清水がもう『煨芋の煙』を書いたと知ると却て清水に力をつけ、濡れぬ先の露で、かう爲つたら引續て政治小說でも社會小說でもどしどし著して思ふ所を述べたがいゝ。若し又政治界に興味があるのなら活潑に政治界入りをするのも可からうといふので、政黨人、政治家としての自分の經歷を話して聞かせる。此の經歷が又、大體櫻癡自身の經歷の骨子であることはいふまでもない（第二十五回、二十六回）。こゝで夢野は明治二十七八年頃卽ち十年前の形勢をお話するといつてゐるが、事實は多少空想を交へて明治十三

四年以後櫻癡當時に至るまでの政治運動乃至政治界に對する諷刺的批評を試みたものである。當時政黨の起ること大小二十有餘、然し「何れもたゞの朋黨で眞の政黨と云ふ程の價あるものは一ツとして無く表面には銘々大層な事を云つてヤレ主義だの政略だのと誤託を吐けど其內心は何れも內閣に入らうと云ふ丈の欲心ばかり」のものである、それが大體薩長聯合の藩閥勢を維持しようと云ふ藩閥黨と反對の非藩閥黨に大別されるが、その立場で色々な名稱がある。(第一)が法主黨(保守黨)、「これは法律を以て政治を行なひ、主權を政府に握ると云ふ主義に固まつて居る」、(第二)が慢心黨(改進黨)、「これは政治は我等どもの外に知つたものは無いと自惚切たる慢心ものゝ寄合」、(第三)は死勇黨(自由黨)、「これは我黨の目的の爲には死して厭はざる勇氣を蓄えて居るドウで一度は死ぬる命ぢやとえらひ決心の豪傑連、しかしお手際は拜見しなかつた」、(第四)は至窮黨(守舊黨)、「武士は食はねど鷹楊枝花は櫻に人は武士であつたもの怪化の風にあたら花を散らしたが恨めしいと嘆いて必至に窮する人たち」、(第五)が奇智黨(自治黨)、「奇妙に智慧のある官員や紳士の寄合で出沒變化の測るべからざる仲間であつた」、その他何々黨何々黨と實に賑やかなこと、且つ各黨が銘々新聞紙と倶樂部をもつてゐたので益々賑やかさを增すことになつた。その政爭たるや、向ふから此方を罵て彼奴等は人民々々と人民の權利を道具にして利を謀る陰險黨(民權黨)ぢやと云へば此方でも亦向ふを嘲つて彼輩は特權を楯にし威力を賴みとなし環堵の中に籠城して一身の安を謀る環劍黨(官權黨)ぢやと云ひ相互に人が馬鹿でをのれが利口と誇り我等に任すれば天下太平五穀成熟商賣繁昌千鶴萬龜大入叶で御座いと天上天下唯我獨尊で吹立たる功能は寶丹も宜しくと云ふ位で何れも由々しかりける次第なりであつたヨ云々確に當時の政治運動の一面を痛烈に抉つてゐるものがある。これを前置として、夢野郎ち櫻癡自身の政黨經歷談となるのである。

月日は最はや失念いたしたが蓋か明治二十七年の頃であつた其時は僕もまだ英氣勃々で可笑しく義俠の志を重じ苟

る我が主義の爲め我が同志の爲とあらば假ひ火の中水の中お前と一所に暮らすなら鯨よる濱虎ふす野でも——オットと險難はなし岐路(わかれみち)にそれる——島有（夢野）は敢て之を辭せずと云ふ勢ひで當時誘唆の制出に乘つてお先に遣はれた頓轉來もの。平日(ひごろ)心安い同士が寄合て話す會所に仕たる楊柳館と云ふが酷い流行(はやり)で凡そ官員紳士豪商學者の中でも智慧があつて如才たくつて學問があつて氣力の無い才子連中は大抵これに加入したり此會員の性質が餘りドット仕らぬから僕も其初は巧く遁てドウしてく\\夢野如き貧乏人は迚もアノ立派な中には入れませんと斷つて居たがイヤ〱夢野先生は當代の議論家政治經濟外交歷史いづれも究めざる所なく博學多識で名望世に備ねく殊に文章演說に於ては先生に肩を並ぶる人なしとは天下の公評かゝる人物が加入なくては當苦剌部(くらぶ)の光(ひかり)を失ふ道理我々も倶に商代の心地いたせば是非とも御入會下されい特別名譽會員に祭め奉り入會金たどは更に申受けぬ若し臨時に先生を煩はす樣な事が有る時には聊かながら尉勞も差出すで御座らう必ず〱御心置たく御加入をとひた勸めに勸められた所から島有先生忽ち自惚先生となり左程までの儀ならば諸君の厚意を無にするも本意にあらず委細承知仕ると分際をも顧りみず右の楊柳苦剌部の會員(メンバア)とは相成つたり

これが夢野即ち櫻痴が政黨運動に關する第一步であつた。自嘲の語調の底に悲痛な憤懣も感じられ、前に引いた述懷の語と相俟つて、如何にも櫻癡その人の眞心事を吐いてゐるかと思はせる。

此の頃は何といつても政治熱の絶頂に達した時である。「凡そ會と名の附くもので多少政黨の臭を含まざるもの無く佛寺の集會に高天原に神止まりましたる鈴の音は神權主義の演說を初むる知らせとなり旦那寺の法會に諸行無常と響きたる鐘の聲は貴賤一致の目的を圖むる會同となり製造所を持てる輩(ともがら)は其品を澤山に賣らんが爲に保護稅論の金主となり舶來物の問屋組合は輸入品を安直に仕入れん爲に自由貿易說の尻押となり森羅萬象みな政治と私利との道行狂言公平の眼を以て之を見れば皆な百鬼夜行の圖を見るが如くなりき」といふ時勢である。（政治と私利の道行狂言云々

とはいふが當時漸くブルジョアが勢力を政治に及ぼして來たことがこれでもわかる)。何うして楊柳苦刺部のみが政黨熱にかゝらずにゐるといふわけに行かう。創立一年ならずして早くも政黨熱に襲はれ、金平(キンピラ)子爵たるものを黨首に百囀(ベテン)黨といふものを作り上げる。その政黨組織の主旨が如何にも當時の一部ブルジョアジイの腹構をそつくり穿つてゐて鏡にかけるが如くだ。

御同様に我國で屈指の紳士と言はれて居る身分これ迄の所は其の紳士も政治黨派の事に關係せずとも濟だらうが是からは左様はまゐるまいぜ平日(いつも)銚子の濱では鰯が取れる柳の下には泥鰌が居ると思ふと目的(ちて)が違はう、夫も御同様が木地の紳士で内閣がドウならうが政略がドウ變らうがナーニおれはおれの財産で立派に立て行くと云ふ様なら宜しいが實はと云へば御同様に危い橋も時に由つては渡つて歩行(ある)かねば甘い儲の出來ぬ體政府の息が掛つて居ればこそ人の及ばぬ所に手が屆いて安い金も遣へゑらひ儲もして居るが明日にも其縁が切れて御覽じろ木から落た猿も同前、斯く申せば失敬の至ながら御同様の身代は猶ほ氷の上に建たる家屋の如し、若し其れが融て仕舞たらドウなさる成ほど諸君の中では其用意にと今日は某侯に御權威があるから御機嫌を取つては居れど明日は某伯に代るも知れねば豫め其覺悟で彼方へも縁を繫いで置き夫で安心だと思召さうが向ふにも前日のお出入があればモウ八宗兼學では往ますまい……勿論我々が官員や議員に成り度いでは無し政治家と云ふ評判を取り度いでは無し實を申せば政黨などと云ふ事は虫が好かねど背に腹は替られまい、ナンでも我々が頼とする本尊様さまを今の中拵らへて其本尊さまが永く權威を政治の上に占める様にして御同様の利益を保護させ甘ひ金儲は外へ遣らぬ事に仕てもらはねば安心が附まい……(中略)ナニ主義をドウするとエ、野暮を云つては困るぜ別に主義も糸瓜も入るものか何事に限らず我々の利益を保護するのが大主義サ(云々第二十六回)

さうしてその政黨組織の手段は金權による買收々々の一點張りだ。勿論小說的創作が幾分入つてゐるにしても、此の

政黨組織の經緯は多分に櫻痴の實驗を織り込んだものであらう。その實驗の何時頃なるやはさう明確にし難いが、恐らく半ばは明治十七八年頃以來の經驗と半ば二十年前後此の種の實業黨組織の計畫があつた時の想像と見て可い。いよ〳〵政黨が組織されて夢野は何ういふ役割を振られたか、櫻痴は冷然結んでいふ、「僕か僕はアノネ口が惡いから邪魔になるつて直に其仲間を追出されたノサ」。こゝにもブルジョアジイに賣られたインテリゲンチヤの自嘲的口吻を見ることが出來やう。

その後清水は東京商人會議所の顧問となる。こゝは報酬は豐で仕事は樂で滿足だつたが、ブルジョアが貴族を饗應する時執持役に引出されるのには閉口した。こゝにもその一例が仔細に描寫してあるが、それは本書について見るべく、こゝには贅しないことにする。たゞこの種の例によつて、如何に當時の貴族がブルジョアの傀儡となつて彼等を太らせる役目をつとめてゐたか、いかにブルジョアが表面貴族を押し立て煽て上げつゝ内實着々と國家經濟を私して行つたか、貴族の愚と貪、ブルジョアの貪と狡猾が實に見事に描き出されてゐる(第二十七回――第二十九回)。殊に成上り貴族紳士の無教養、下司趣味、化し合ひ、藝妓遊び、花骨牌引き等の光景に至つては祕中の祕を穿つ趣きがある。

清水は然しこゝでは何うやら辛抱したので、會議所の幅利たる赤螺、鹽井等々の長者連の信用を得、彼等の名代といふ格で下院議員となつた。これは、彼等が漸く多數政治といふものゝ恐ろしさを悟つた結果で、勿論議會政治になると、利權の源が大臣大官の手から政黨へ移る、從つて政治的に彼等の利益を保護するには、味方の議員を一人でもなくしなければならぬ、利權亡者たる一部ブルジョアジイの議員操縦策の現れである。彼等の味方で出來た一黨を風靡させ、いふ、風潮を見て動いて漁夫の利のみさらふ意である。清水は勿論、彼等の表面の理由たる社會の爲めなどといふ美辭麗句に與かれはせぬが、然しこれを機會に議員に爲らう、萬事は議員になつてから自説を通さうといふ考へ

で議員になつた。

櫻癡は清水を議員にして置いて、狡猾にも夢野に政黨の内幕と議場の素破拔をさせやうといふのだ。議場の素破拔は、大部分は、想像であらうが、政黨の内幕に至つては、蓋し實地の見聞に成るものが多い。

尤も黨派の情實は改めて申さいでも（中略）其弊も委しく御明察で御座らうが頃日は益々烈しく成つて詰り政黨が主義に依つて樹立するとは嘘か騙し誠は私利を共にする目的を以て結び附たる朋黨（パーソナルパーテイ）なれば苟も利の在る所と見やうものなら義理人情は何のその間がよくば親子兄弟の腕でも捻上げて引たくらうと云ふイヤハヤ恐ろしい心底の豪傑ばかり。されば權謀術數は申すに及ばず我黨の利益の爲には蜚語を以て人を傷くるも可なり讒誣を構へて離間するも可なり書生壯年輩を敎唆して勸告の强迫を成さしむるも可なりと云ふ氣組で眼のあたりに元龜天正の紛亂を見るが如しとはなんと大變な世の中では御座りませんか云々（第三十二回）。

更に議院内の光景の豫測に至つては捧腹絶倒、何とも彼ともいへないものがある。先づ他人に演說草稿を造つてもらつて棒暗記をするもの、書記に依賴して記錄だけ宜しくやつてもらふもの、日當を出して傍聽人を連れ行きわざと喝采させるもの、新聞記者や速記者を買收して自分の演說記事を大々的立派なものにしてもらふもの、自分から提灯記事の投書をするもの、八百長議案の議決、お禮の多寡の爭ひ、大臣の御馳走政略、等々實に痛烈な諷刺的豫言だといつて可い。

風潮黨の我利的醜狀が堪へがたいものであるに加へ、清水の選擧母胎たる楊柳苦刺部の變形燕子會といふのが又利己的亡者の寄合で日夜私腹を肥す註文ばかりつけてゐるので流石覺悟の清水も大に嫌氣がさし、議員辭職のことを夢野に相談するが、夢野は、議員になつた以上徒らにやめず、男兒だけの仕事をしてやめろといふ。清水は議員に就任して以來、正義の主張ばかり試みるので、大に燕子會の人望を失ひ、又風潮黨でも孤立的立場になる。

そこへかねて知合の巣鴨伯傳が、清水の立場を察して、議員をやめて地方官にたらぬかとすゝめる。櫻痴はかういふ趣向をつけて置いて、今度は當時の地方官氣質といふものを冷評かさうといふ腹だ(第三十三回)。清水は巣鴨伯の恩命を體よく斷はる。第一內閣の政略が浮動して一定しない、「文福茶釜」の玩弄具のやうに變る、これでは勤め難いといふのだ。地方官寄合がある、內閣では是々の政略を行ふに付左樣心得て地方の政治を執れと嚴命する、急いで歸縣して大騷ぎをして郡長集會だの參事會だのと實行の仕度にかゝり、一年も骨折つてその仕度が出來ると肝心の內閣では御沙汰止み、「ナニ內閣が何を知るものか」といふ態度だ、それを彼是いふとすぐに免職か非職だ。それはかりではない、何か布達があると、「ソリヤ嚴しく遣れ。ヘイ畏つたと取締を附るとエー人心の折合を見ぬか。寬にせい。ヘイ畏つたと寬にする。ソレぢや寬め過た好工合にせい。ヘイ畏つたと云ふ狀況は左ながら湯屋の三助が熱湯ずきと溫湯ずきの客に一所に入浴られたるが如し」だ。然も少し任他を行なへば事業を放擲すると云はれ、少し世話すると民業に干涉すると叱られ、重官が通りすがりに一寸見た計りの報告が標準になつて見たり、變な筋の緣曳て特別の命令が出抜に天降つたりするのは今日に罕らしからぬ儀である。清水はこれだから勤め難いといふ。內閣に對してはかういふ態度だが、而かも縣下にゐては又別の意味でお話にならぬ事が澤山ある、「今日の地方官も亦十六七年前の地方官と大違ひで」などとカムフラージュを施してはゐるが、事實はその十六七年前即ち二十一年當時の地方官を皮肉るにある。曰く——

天子樣の次は乃公だと云ふ樣な顏附で上へ見ぬ鷲の爪を磨ぎ横柄傲慢の振舞に屬官は乃公が家來で縣民は乃公が百姓だと思ひ丸で五十年前の國守氣取り願筋の叶ふも叶はぬも蔓次第地獄の沙汰さえ其通り況て人間世界ぢやものソリヤ當然の事。割の宜い地面は乃公が買取る。餘が有つたら分て遣る。乃公を置てお拂下とは失敬千萬云々

成る程これでは全くお話にならぬ次第であらう。

かくて清水は一部大ブルジョアを庇保する特別保護議案に反對したが、又此等ブルジョアに事業上の專有獨占權を與へようとする商業特例案にも反對に決し、選擧區民を集めて一大演說會を開いてその決心を告げ、自分の意見が入れられぬと議員を辭する決心をする。だが諸友の意見で、議員は年限だけはつとめ、たゞ燕子會の財政的援助だけを斷はることにする。

新柄、清水のところに東京新報といふ表面だけの大新聞から主筆になつてくれとの申込み、清水にも先方が利用するのだとわかつてゐるが、此方も漸々此の新聞を利用して主義擴張の機關にしようといふ腹をきめて、承諾して、同紙に筆を執り始める。こゝで今度は新聞社の內幕談になるのだ（第四十回）。看板だけ大新聞で內證は火の車なこと、苦しさから强請がましいことばかりしてゐること、主義は示してゐても金次第でそれを何にでも變へること、その他淺ましい現狀に愛想も何も盡きて、間もなく新聞との關係は絕ち、專ら著述に從事する。清水は前に匿名で政治小說『懷芋の煙』を著して名を揚げたが、今度は全然社會小說『憂世の素顏』を著して又世間を騷がした（かういふ著作の順序は櫻痴の腹藁そのまゝを寫したものと見えて、櫻痴はこれを實行してゐる）。然し前者のために政治社會、殊に藩閥の貴族政治家輩から憎まれた如く、今度は「社會交際の眞相」を素破拔いて、燕子會あたりと要路官吏との關係などのことを遠慮なく書き立てたので、今度は富豪連から怨を買ふことになつた。從つて議院に於ける清水は八方敵で全く孤立になつた上、殊にはその許嫁の妻の乙女の問題もあつて、潔よく議員を辭職した。さうして今度は本氣で筆を執り、平生の學問識見を十分示して歷史考證の書物を書いたので、忽ち學士會院に列せられ、又清水平生の學識に對し、文學博士と法學博士の學を賜はり、年金を貰ふ。清水に關する限りではこれで團圓する。（

これより先き夢野は、政界の變動に際し、議院と內閣が衝突して、議院が解散されたので、有志の慫慂によりて候補者として出馬し、激甚な競爭を經て見事に當選した。

一つ殘つてゐるのは乙女を中心にして織り込まれてゐる種々の出來事であるが、これは直接政治には關係がないとはいへ、時代の一半たる女性生活を反映したものとして、本來ならば可成り仔細に觀察されるべきものである。だが政治小說研究といふ立場からすれば、さう仔細に觀察する餘裕がないので、わづかに一斑に止める。

乙女は前にも述べた如く清水の世話で女學校に入り、一通り高等婦人の修業がすむと、歌舞音樂の代稽古として生計を立て又內職に縫針のこともする。母も働いて手助けをする、それで乏しからず暮してゐる。これどころか、清水が燕子會と手がきれて、財政的援助をことはつた時に、かつて清水から分けて貰つた七千圓の金を耳を揃へて清水に返して、清水の志を成さしめ、その上自分は奮發して女役者になつて演劇改良を實地に成就させたいといふ。一つは清水の政治活動の費用を助けようといふのである。此の邊は又夢野卽ち櫻癡の理想が出て來る。最初は突然のことゝて清水も氣がすゝまず、二女の味方たる巢鴨伯夫人等も見合せるやう忠告する。然し夢野一人は乙女に贊成する。ここで夢野は滔々と演劇改良の持論を述べる（第三十七回）。さうして女子の天職として、女政論家として男女同權を論じたり婦人選擧權を議したりするより、女優になる方が餘程卓見だといふ。（櫻癡の政治に對する幻滅は、かういふところにも出てゐるのは、注意すべきであらう）。さうして反對者の女優下等論に女優高尙論を說いて聞かす。これで一同もやつと納得して乙女を女優にする。それで乙女は雲野通路（くものかよひぢ）といふ藝名で東京座に出演し、夢野の新作『松操貞女譽』といふ袈裟御前の事蹟を脚色したものを演じて大成功をした。劇界のパトロン何某伯爵が雲野の美貌にほれこんで、座主その他を拐にして迫るが、雲野は見事はねつける。又某長者も口說くが勿論きかぬ。某男爵も同じ申込みをして同じ目にあふ。雲野は一方技藝益々熟達して東京座の女座頭となり、遂に上覽を得るまでになつて大に名を揚げた。この間、雲野卽ち乙女が女優になつて清水に貢いだといふので、清水の代議士たる立場から不名譽を云々する人が出來、その他の原因もあつて、清水が辭職したことは前記の通りである。櫻痴が、乙女の口に託して當時の有閑ン

デイの教育を諷したところを一節引用して置かう。

（前略）お指圖どふり學校に通ひマア及ばずながら稽古をいたし一ト通りの交際(つきあひ)も出來る樣にと精出して居りますが……實は高等婦人の修業は餘り感心いたしませんョそりや有り餘つて榮耀榮華なお方はアレで好いか知りませんが中々親子夫婦が共稼で往くと云ふものには餘ツぽど調子が釣合ませぬ樣に思はれます當然(あたりまへ)ならば女は女のする業(わざ)があつて申さば臺所の始末縫針洗濯家の賄ひかたを一番に覺えねば成らぬと常々母にも教つて居ましたが學校ではドウして〳〵ソンナ事でも言はうものなら夫は下等社會の婦人レージーたるものが賤(しづ)の女(め)の學びをするには及びませぬ第一が舞踏第二が唱歌第三が奏樂第四が談話（流行言詞(はやりことば)を專らに覺ゆべし）第五が讀書（流行の小說は必らず讀まざる可からず）を出精お仕なさい是がよく出來ねば人中に出て品格を高くし男どもの尊敬を受る譯には參りませんゾと申す教で御座いますから私どもが目では丸で世界が變つて居る樣でございます云々（第十五回）

櫻痴は、第十一回の終に於ても、淸水の口をかつて當時の俄レデイ、歐化張りの男女同權論者、むしろ女權主張の貴女連を罵倒してゐる「西洋の女性は胎內から女を尊敬すると云ふ風儀の所で生れ其風儀の中で教育られたる女ゆゑ橫柄の中にも鄭寧あり倨傲の中にも愛嬌あつて如才なく立廻りますが日本のはソレネ申さば俄富限の一夜レージー男女同權の勢ひは磐梯山の噴出したる如く女性尊敬の望は利根川の溢れたる如く矢も楯も溜らず恐ろしいとも〳〵」云々以て櫻癡が當時の歐化レディ達に何んな感動をもつてゐたか、推察がつくであらう。

以上で『もしや草紙』に現れた櫻癡の對政治的乃至對社會的態度に冷嘲的幻滅的な氣分の多いことがわかる。勿論櫻癡の心算では必らずしも冷嘲するつもりではなく、時弊を是正するための諷刺といふ親切氣も幾分はあつたと思ふが、然し表面へ出てゐるあの强い冷嘲的幻滅的調子を如何ともし難い、これは蓋し櫻癡の政治小說創作の根本的な氣

持であつたのではないか、吾等は重ねて彼の言に聞かう、彼はその分身夢野をして語らしめて曰く、――

僕見た様に人間世界の政治舞臺でスッテンコロリと投り出されヱ、儘よ浮世は三分五厘世の中に色氣が有ればこそ彼の連中が熱を吹くのを我慢して聞き貴卿の御無理は御尤と程よく誤託を受て居たれ其の境界を脱た上は思ふ存分に言ひ度い事を言ふが氣の薬と御覧の通り世に背いたる畸人に爲つて云々（第二十四回）

知るべし、彼の政治小説が時世を諷するのが主ではなくて彼個人の不平鬱懐を開くのが目的であつたことを。冷嘲と幻滅の濃いのは、固よりその處である。

此の冷嘲幻滅の氣持が、今後とも彼の政治小説の大部分の作に通じたものになつてゐることを、讀者は先づ心得てゐて頂きたい。

小説としての『もしや草紙』については、餘り多くを語る要はない。一言でいへば、明治新小説界の『和莊兵衞』の一種だといへば先づ足りる位である。趣向は、先づ清水と乙女を出した點で有りといへばあるに違ひないが、櫻癡自身が單行本の序で、「毎日々々心に浮べる儘を書綴りたるもしや草紙、これと云ふ趣向もなければ結構も無し」云々といつてゐる通りで、餘り當てになるものではない、たゞ筆を運ぶ緣とした位のところである。脈絡とか貫通とか、自然の味とか變幻の妙とか、凡そ趣向の性質上、善い意味で特色と見られるやうなところはない。その運びも隨手放題、作者の肚裏の都合で何うにでもする。いはゞ作者の諷刺的描寫に都合のよい社會各方面の表裏種々相をつたいでゐるだけの用をしてゐるのみである。人物の性格も、部分々々に寫實の妙があるのを除くと、先づ支離滅裂、中で比較的見られるのは、作者櫻癡の分身たる夢野貫の烏有仙史と女性乙女である。乙女の母の如きも、甚しい惡婆に描かれてゐたら、もう少し此の小説を面白いものにしたらうが、これでは仕方がない。清水に至つては全然夢野の傀儡といふべく、自分の意志から何一つ行動しない、まるで無能無才、人形以下といつて可い。その他の貴顯、長者、博士、記者、

摹倣、その他は、恐らく一々モデルがあるのだらうが、然しそれも合成的に使つたのだらうから、姓名の交換で何方が何方ともなく代表的類型となつてゐる。それから次から次へと展開されて行く社會各方面の表裏の場面も、大抵は根據のある描寫であらうが、矢張り類型的代表的概念的なものである。然し細部の道具立てなり、人物の會社の運びなりに、櫻癡當年の經驗が見えて、讀者の肺腑をつくところはある。此の點で、作者の政界乃至紳士生活、花柳方面の經驗は實に豐富でもあり徹底したものであるから、それから割出して來るいはゆる「穿ち」の觀察は可成り鋭く當つてゐる。記叙の文章の老練なところは、先づ唯一の取柄でもあらうか。文章の一點は、小說體に合つてゐるか何うかは別として、流石に見事なものである。文章と今一つ、世間的雜知識の饒多なことは驚嘆させる、かういふところは駈出しの青年作家などに眞似の出來ない長所があるのである。例へば園遊會、集會、宴會等の場面の描寫を見れば、その特長がよく出てゐる。

根本精神の冷嘲的幻滅的なのと同じく、小說としてのかういふ特色も、以下の諸作の大部分に略ぼ此のまゝ通用する。この點も、諸者は預め御注意願ひたい。

では『もしや草紙』は今日讀むに値しない小說であらうか。小說技術の點からいへば實に下らぬと或る人々から一喝されやう。然しその精神を取つて、當時の政狀、乃至社會的事件と櫻癡自身の心理を照會して讀みわけると、可成り面白い小說だと斷言して可い。此の頃の政治小說として、殊にこの種の形式のものとしては、先づ上乘の中に屬するであらう。一部知識階級から歡迎されたことは、三宅雪嶺がわざわざ批評の筆を執つてゐるのでも知られやう。大衆からは新聞に出てゐるうちに歡迎されて當り物と稱されてゐたが、出版同時三千部賣れたといふ、當時にしては稀有の現象であつたらう。然し櫻癡は從來政界に深く關係し、大官にも妙な因緣があり、藩閥政府の內幕に關して種々見聞したところも多かつたらうから、かういふ小說を著して一部在野識者の觀迎を受けるなどといふことが、他の或

る一部の人々にとつては如何に苦々しいことであつたか、篇中で夢野が淸水に忠告するところ、「政治小說などを書いて憎まれるな」云々は、恐らく櫻癡自身の實驗であると思ふ。尙ほ此の事は次の段に移つていはう。

『煨芋の煙』

此の頃の政治小說を書く意志は可成り前からあつたものと見えて、旣に『もしや草紙』の中で淸水潔の處女作として度々言及されてゐるし、現にその第十五回中には腹案らしいものも見え、「あの芋燒の翁が秋萩の媼を宜い樣にくるめやうとすると媼もさるもので故とくるめられた振をして翁の不意を出し拔かうとする所から縺つりの舟人がこち痛く言ひ爭へる樣などの面白さ」(初版一〇八頁)などといつてある。從つて、これが『もしや草紙』に次いで、第二作として東京日日新聞紙上に現れるや、「明治三十六年冬秋影樓主人しるす」と署名した序文をつけて如何にも淸水の著作を引出したらしくしたのは、櫻痴の最初からの豫定であつたらうし、又これに依つて別樣のカムフラージュを施さうとしたものに違ひない。然しその內容は何うやら『もしや草紙』に現れたものと違つたものになつたらしく見えることは、下に述べる梗概で知られやう。先づ序の全文を揭げると、——

今は煨芋の煙も立ずなり小萩の餠もつくるなりと聞けど其昔は靑柳の絲たえず松の葉の散りせずしておさつの蔓のながく傳はり萩の花ひさしく榮えて時めきて有けるを憶ひ出せば昔し忍ばれてなつかしと煨芋の翁が圍爐裏に柴を打くべて語りしも哀れにこそ覺ゆれ此の煨芋の翁と申すは東京の近き邊に庵を結び常は芋を煨て打くらひ古き事ども話して賑ひければ誰いふと無く煨芋の翁とは申したり此翁おのが身の上の物語を聽くまゝに書き取りて扨は煨芋の煙と名つけぬ

芋は薩摩、萩は長門、つまり序の意は、薩長藩閥の華やかなりし頃を薩人の老翁が追憶する體に托して、櫻痴執筆當時威勢赫々たる藩閥を諷するつもりだといふことが、この序だけでも分かる。

この小說は主人公の自叙傳である。「西の國なる片ほとり」に生れた歷々の武士唐芋平太右衞門泡盛の自傳である。平太は維新の時十六で出陣し、東北に戰つた。戰終つて、同族の長老の忠告で學問で立身することになり、同族長老の一人隨喜入道といふ醫者上りの豪傑に監督されて、學問の道に進むことになるが、隨喜が、これからは時代が時代だからといふので、福澤の『西洋事情』を示して英學をせいといふが、攘夷精神で頑固一點張りの平太は、それをきかず、漢部神州といふ漢學先生の塾に入る。この塾で苦學すること二年、學問は大に進歩したが、一日友人の爲めに塾生十餘人を相手に大喧嘩をして、退塾させられた。友人といふのは奧州赤松の藩士尾花枯之助といふので、尾花の貧なのを他の諸藩から來てゐる塾生が侮つて惡いぢめをした、平太はそれを見かねて奮然と立つて、彼等を打ら懲らしたのだ。

退塾した平太は久しぶりで歸國して、母を省したが、國許でも時勢の急變がもたらした種々な改革があり、第一主君と臣家の別がなくなり、主君は知事としてたゞ統治するために上にある外は、同じ士族といふものになつてゐる。平太はこれが面白くない。やがて廢藩置縣といふことになり、由緒長い藩制もなくなり、郡縣政治となる。平太は益益面白くないので、同志を語つて、先輩長者に反對論を述べ立て、四民階級維持を主張する。果は國で有名な大先生から說諭を食ふ。他の同志はそれで時勢だとあきらめ、改革は仕方のないものと承服したが、平太一人はきかぬ。不平のあまり、又々東京へ出て來て、さうして漢部先生の塾に詫言をして又入れて貰ふ。在京の大先輩氣負（きおひ）殿といふのが、平太の頑固を聞いて呼びよせ、懇々と時勢の變とこれに處する覺悟を說くが、平太は保守反對論を述べたてゝ屈しない。農工商が階級的でなくなり、金の力でのさばり出すのが氣にいらぬ、官制服制の洋風が氣にいらぬ、廢刀、

太陽暦、全國皆兵が皆いかぬ、と存分いひ立てる。氣負殿が、これが日本將來のためだと諭しても耳にも入れたい。たゞ英學をしてみろといふ一事だけには、平太も心を動かし、漸く英學の緒につくことになる。……話の模樣だと大分面白いものになりさうに思はれる。ところが何ういふ理由からか、僅々八回掲載されたのみで、中絶してしまつた。中絶の說明に曰く——

　煨芋の畑は是からソロ〳〵面白かるべしと思ひ其草稿を早く送るべしと促したるに櫻癡居士は答へて、去ればなり余も左樣と存じたるが故に、日報社に寄送すべしと封じ置きたるに昨夜深更に及び其長拔群たる大鼠が床下より顯れ出で机の上に飛び上り右の封じ置きたる煨芋の種の稿本を引嚙へ瞬く中にムシヤリ〳〵と盡く食ひ盡して何地とも無く消失せたり第十回ごろよりは餘程面白かりしに惜い事をしたりと云へり然らば貴君少し其趣向を覺えて居るべし代筆あれと乞ひたるに居士は頭を打振りて否、少しも覺ては居らずと云へり依て止を得ず第八回にて掲載を止むるものなり

これは何等か櫻癡の筆を制肘する事情が急に生じて、この小說を書きつゞけ難くなつたことを、戲れにかういつたものであらう。諷刺される相手方が果して命令を下したか何うか、官憲の內命といふ如き形式で好意の中止勸告が櫻癡の手許に到達したものではなかつたらうか。『もしや草紙』に出た廢案とは多少違ふが、大體の趣向からいつて、薩摩武士出身の頑固家が同情的に薩英戰爭の由來、その過去等を說く形になつてゐるらしいが、前記の如く、櫻癡は當時の政情を知ること深く、黑幕の內も外も十分知つてゐるから、このまゝにして置いたら何を書き出すかわからぬといふ心配があつたらう。さういふ心配から櫻癡の所謂「大鼠」が原稿を喰つてしまふといふ戲劇も生じたのであらう。

『煨芋の種』の名は、今日好事的意味で有名になつてゐるが、要するに初頭で中絕したものであり、この作に關しては、これだけしか語ることが出來ない。

たゞ形式に自叙傳を試みたところは、幾分新しいといへばいへる。

『滑稽小説 色と慾』

『色と慾』は全體からいふと政治小說ではない、少くとも政治的諷刺を作の中心目的としたものではないが、內容の進行上、度々政治の問題にふれて來るので、准政治小說として兎もかく採錄することにした。大體は『もしや草紙』を今少し社會的世話的にしたものと思へば間違ひはない。先づ東京日日へ初出の時の序文を揭げて概念を得ることにしよう。

此小說は我國の未來およそ明治五十一年ごろの世界に假想したる結構なり居士初め之を演劇に仕組まばやと思ひ稽を起したること有りしが聊か思ふ所あつて中止し先づ小說にものせんと致したる折柄に頃日煨芋の草稿を鼠に喰盡されたるに付き日報社の誌友は交々居士の不注意を責め急に是に代るべき小說を書くべしとの督促はたゞ嚴重なり依て其責に應ずるに此の小說を以てすべしと俄に筆を下す事とはなりぬ但し此稿は急劇の間に成るを以て結構の十分ならざる所もあり又滑稽の佳境を匆々に過たる所もあるべし他日大に增補を加へて別に出版するの日を俟て其完備を告ぐべし云々。

明治五十一年頃の未來記といふ點が先づ注目すべきところで、これは此の小說の政治的要素には想像的分子が多いぞといふ豫表であるが、同時にその苛竦な諷刺に對するカムフラージたること勿論である。

政治小說ではないから餘り深入りせず極ざつと述べる。

上院議員綿屑伯といふのは、舊奧州五十四郡の中七郡を領した大名であるが、今だに封建大名形氣が拔けず、祿で

もたない取卷連をつれて日夜酒色に溺れてゐるので、次第に家計不如意になり、今やその郷里福島に殘る世襲財産も他人の管理に移らんばかりになつてゐる。

こゝに綿屑伯の舊臣の筋で今は成金の大雪團平といふのがある。これは疾くに綿屑家へ度々金圓を用達てて大分懷中を肥してゐるのだが、慾心は際限がなく、その殘つた世襲財産をも我が物同樣にしようといふので、先づ自分の二男冬次といふのを綿屑の一女しのぶと婚せしめ、自分が後見といふふれ込みで世襲財産へ手をのばさうとする。惡代官を手先につかつて計畫をさ〳〵怠りない。

ところが、肝心の冬次が父のいふことをきかない、これは冬次は自分の家に預けられてゐる秋山家の小萩といふ娘に戀してゐるからだ。小萩は今こそ大雪家の小間使同樣になつてゐるが、父は嘗ての自由黨急進派の名士秋山嵐といふので、明治四十年に保安條例に抵觸して外國へ追放されてゐるところから（母は病死）、財産附で親類の大雪家に托されたものだ、團平はその財産だけはとつて置いて、今では本人を居候厄介扱ひにしてゐる。

大雪は下院議員であるが、維新で立遲れの奧羽地方の勢力を振興さすべく、議會で奧羽黨といふのを作つて頑張つてゐる。さうして代議士を一人でも殖さうといふので、冬次を諭して補缺に立てようとするが、冬次は、父が地方黨を建てるのは封建感情の變態だといつてきかぬので、又々父の意をそこねる。

冬次の反抗にじれた父は、もう待つて居られず、綿屑父子を招待して、强制的に冬次しのぶの結婚契約をとりきめ同時に世襲財産の件も自分に有利に片づけようとかゝる。

冬次は兎もかくしのぶが承知したといふので、しのぶと見合だけして心中を聞いてみる、すると、しのぶは實は冬次の兄で、團平から勘當された津守（青年志士）と云ひ交した仲だといふ、そこで冬次は小萩のことを打ち明ける。

冬次には又呉竹直といふ友人がゐて、小萩と冬次の味方になつてくれる。

小萩は、勿論冬次の意中をよく知つてゐたが、現在自分のことが問題にたつて案内がもあるので、竊々自分を保護してくれてゐる春山某といふ人の許に逃げて行かうとする。ところが、冬次宛の遺書と春山宛の手紙が行違つた爲め、妙な濡衣をきせられるが、その春山がかけつけて來ると、それは即ち小萩の實父秋山の變名（今はロシヤの義勇軍大佐）だつたので、皆が驚く。春山の出現と、吳竹の執成しで、團平も我を折り、冬次と小萩を結婚させ、又しのぶは思ひ通り潾守の許に嫁ぐことゝなる、これが一編の大意である。

綿屑や大雪の政治運動、小萩の父秋山某の經歷、その他に於て種々政治くさいところはあるが、この小說で直接政治を論じてゐるところは、第四回、團平が冬次と奥羽黨なるものゝ得失を論ずるところと、第五回、冬二が同じ問題について綿屑伯に逆襲するところの二節で代表されて可い。その團平の主張に曰く——

一體奥五十四郡は日本の大國なれど御一新の時に方向を誤まつて後（おくれ）を取つたる故に諸事萬事みな手後に成つて頭が上らず政治の上にも社交の上にも兎角に關西の輩に先を越され今日に至まで凡そ五十年が其間いまだ對等の地位に立つことが出來ぬとは何と殘念の至ぢや有るまいか。夫ぢやに依つて貴族院には葦名葛西畠山大崎二階堂綿屑の諸侯下院には須賀川郡山團子森佐瀨富田の諸氏を初とし斯いふ大雪團平に至るまで奥羽黨の看板を懸勢力を張り一度は我黨の權威を議院の多數に占めやうと二十五年このかたの千辛萬苦は如何程なりと存ずるか、畢竟この親父が自（みせ）費（に）を遣つて暇を潰し投票を買求めて議院に頭を出して居るも皆これ我本國たる奥羽の爲と云ふもの、ト言ふは表向き內容は乃公が第一の財產たる鑛產も養蠶地も十の九までは皆奥羽にあるから否でも奥羽の人氣を取失つては大雪が政略に取つて甚だ都合が惡い奴ぢや。斯の通り表向でも內容でも奥羽の爲には無二の愛國者と成つて居らねば名利兩ながら保つに骨の折るゝ身代、ソレに悴たる貴樣が可笑しく奥羽黨を袖にして不黨不偏だの中立正義だのと一

文たしの貧乏學者が言ひそうナ詞を云つて封建の遺習を慕ふが如き藩閥黨は國家の害物なりと論ずるは實に悟らぬ次第ナにほど薩長の藩閥黨は善く無からうが奥羽の勢力を張ろうと云ふ黨が何の悪い事が有るものか是が卽ち愛國心の顯はるゝ所と申すもの（第四回）

綿屑大雪が實在の人物かいなかは別問題として、此の奥羽黨が田舍津人士（柴五三郎、山口千代作その他）を中心に計畫されたのは、當時明治二十一二年頃の事實である。櫻痴は幾分此の邊の事實をも諷してゐやう、然し眼目は、當時のブルジョアジイが來るべき政黨政治に對して自分自身の利益を防護すべき牽制運動を試みてゐる點にあることはいふまでもない。櫻痴はこれによつて政黨政治に對するブルジョアジイの今後の態度如何を豫想させようといふのである。次に、左の一聯の對話を聽くが可い。

（綿屑）前略、今日に當つては是非とも奥羽黨の勢力を擴張して議院の決議を左右し遂に內閣を乘り取る樣に工夫を運らさねば奥羽の面目が立たぬてな……と頻に奥羽の勢力を謀るを聞き冬次は餘りに怪からぬと思ひ（冬次）一應は御尤で御座いますが凡そ黨派政治と申すものは各々其利害に由て主義を殊にすると承はりて居ります徒らに一地方によつて黨派を樹て甲は關東黨、乙は奥羽黨、丙は山岳黨（五畿信越北陸）、參は中國黨、我は九州黨と別れ互に黨派を樹て議院に爭ひまするは是れ政黨の爭に非ずして實は封建の爭とも申すべき有樣なれば甚だ行過ぎたる儀では御座れども恰も割據分裂の狀ありと申すべき樣存じられ不省ながら此の冬次に於ては御同意いたし兼ます政黨の爭ならば外交財務內政等の際々に就て各々其目的を立て我黨は此目的をば云々の手段にて實行すると明白に趣意を述べ堂々たる論爭を仕り度いものと存じます、然に目的も無く手段を定めずして空に奥羽の勢力を張ると申す事は實地に出來がたく又出來れば國家の害たるは歷然たるに御同意することは冬次の良心に背きますゆゑ心痛仕つて座る、辯舌爽に說出すを聞き大雪はヤツキと成つて

（大雪）ナニ此の冬次めが生意氣を申すか、良心に背くと、ヘン良心と云ふ語は此の國平十五年來下院に列坐して居るが一度でも議場で承はつた事の無い語じやそんな語はナ學者仲間では通用しやうが議院の政治家仲間では通用せぬぞ

（綿屑）イカにも主人の申さるゝ通り良心だの良智だの云ふ語は上院に於ても聞かぬ語なれば良心に背くゆゑ政黨に同意が出來ぬと云はるゝは取も直さず憲法違背（オンコンスチチユーシヨナル）の語と申すもの

右の三者に於て綿屑が貴族を代表し、大雪はブルジョアを代表する如く、冬次はインテリゲンチやを代表する。上記の對話に於いて、綿屑に對して冬次が反對し、批判的態度に出てゐるに對し、大雪が綿屑に賛成して冬次を抑へんとかゝり、綿屑もこれに加勢してゐるが、これは、當時の政治狀勢からいつて興味あるものであらう。卽ち貴樣とブルジョアは政黨政治に於て妥協し、インテリゲンチヤは、その理想的見地から兩者の妥協に對して鋭い批判を浴せかけてゐる。インテリゲンチヤの立場は、從來自由民權運動でブルジョアと同盟してゐたのに、現實政治への幻滅から、ブルジョアと離れ、今は孤立的なものとなつて來た。丁度これが明治二十一二年當時の日本の知識階級の立場だつたのである。

政治的な分子を離れると、此の小說は餘り成功したものとも思へない。場面の運びは如何にもキチンと芝居風に出來てゐるが、その筋は陳腐な、草双紙めくものだ、殊に前半が少し面白いのに對し、後半のつまらなさは何といふものであらう。

第一表題の「色と慾」とは、何を意味したものが、綿屑と大雪を諷したものとすれば當らぬこともないが、然しこの小說全體でいへば綿屑と大雪はワキ役であるも、ちろんワキ役のみで表題を決定するのは作者の勝手ではあるが、

然しそれは畢竟意味の無い事に外ならぬ。若し又此の「色」が冬次と小萩、しのぶと津守等の戀愛關係を表したものとせば、作者の頭腦の舊さが依然幕末戲作者程度たることを語るものであらう、此等青年男女の相互關係に對して、當年のオールド・モダンボイたる櫻痴居士は單に「色」の一語で表するよりも今少し高尙な理解をもつてゐるべきではなからうか。だが櫻痴の眞意は、その何れにも卽して此の二手をつかつたのではなく、全く時代の表象として「色と慾」の二字を打ち出したものとせば、吾等も流石はといはざるを得ない。

性格その他も、テクニクの點では『もしや草紙』以上に出來ない。何れも類型、概念化してゐるか、そのうちで綿屑と大雪のみは幾分實在の人物らしい、これは何かモデルとするところがあつたに違いない（モデルの何人かなどと血眼になるのは、この種のカムフラージュ小說の場合には野暮の骨頂といふべきものだ）。その他の青年老年男女とも、多くは良い加減の影法師然たる人物のみである。

いつもの傳で事件進行上必然的に進移する背景といふものがよく描かれてゐない。その癖花柳界の風物とか、坐敷の描寫とか、人物の假裝とか、持物とか、調度とかいふものゝ描寫はいやに綿密で手に入つたものである。たゞ背景はそれだけ離れた死んだものでは、何れ程上手に描寫されてもテクニクとしての役を足さない、櫻痴の場合は多くはそれだ。

この小說の興味は『もしや』同じで全くその暴露的な點にある。殊に華族の內幕、ブルジョアの內幕の暴露に對する興味である。當時の華族の封建的不生產生活、大名輩がブルジョアに次第に實權を侵蝕されて行く有樣、又ブルジョア生長の經路（例へば第五回、園平が冬次に訓誡のため自家の經歷を語つてきかするところを讀み給へ）、その經路の如何に醜怪千萬なものであるかの說明、表面華族に敬仕しつゝ次第にその實權を奪つて行く心計、知識階級養成の目的等々が、混沌としたあはたゞしい社會の雰圍氣の中に要領よく描破されてゐるが、これは全く櫻痴自身の體驗、

又は實地見聞の豐富なためから生れて來る巧みであらう。下らぬといへば下らぬ稽滑小說であるが、世故に熟した作者の觀察體驗の記錄としては、一讀しても損をせぬだけのものがあらう。

篇中、老人組と青年組が殆んど對立的に立場をとつてゐるのも、當時の社會が、老人と青年の交代期に入りかけた點を反映してゐるとして考ふべきであらう。

暴露といふ點では、代言人氣質、三太夫氣質、藝妓氣質等々、種々語るべきものがあるが、今はそこまでに及ばずに筆を止めて置く。

『外國巡禮（同行二人）』

櫻痴の小說で從來名を知られたことのないのが此の小說である。櫻痴の小說は可成り短いものまで大抵單行出版されるか叢書にされゐるのに、これだけは四十何回の長物で、たとひ中絕してゐるとはいへ、十分一册となるだけの分量はありながら、何處へも二度と顏を出してゐない。櫻痴の氣に入らぬ作であつたか、或は何か憚るところでもあつたか。然し何れにしても、政治小說としては必ず取り上げなくてはならぬ作である。

此の小說はいはゞ赤毛布式失敗談の連續であり、その種は櫻痴自身の數度の洋行中に見聞したる事實、當時の新歸朝者たる東京日々社長關直彥の見聞等を中心に、はては廣告で讀者から募集したものをも利用して書き續けたものである。一讀、末廣鐵腸の『啞の旅行』と頗る類似したものではあるが、一は正眞の紀行であり、櫻痴の作は全くの小說であるから、それだけは區別しなければならぬ。內容の赤毛布式失敗談といふ點からせば、この小說の目的は專ら當時の知識階級に大流行を極めた洋行熱を諷する如く見せかけて、陰にその時好に投ぜんしたものとだけしか思はれぬ

が然し同行二人の青年洋行者の見聞に托して母國の政治的現狀を批評し、日本憲法を論ずるあたりは、全く一種の政治小說である。同行二人とは——

生利(なまぎき)從五位源跳鶴(はねる)臣、簡單に生利跳卿とよぶ、舊封建大名たる生利子爵の若殿

聞田(きいた)風之助(ふうのすけ)、父を聞田要太といふ、明治新興の紳商で日本有數の豪商の一人

である。一篇の趣向は、生利聞田の二人が、洋行中その「生聞き」と「聞いた風」なるところより、至るところ失敗し、赤面する記錄となつてゐるが、これは、例によつて作者櫻痴が、當時大流行たる洋行熱を藉り、貴族の代表たる生利とブルジョアの代表たる聞田を世界的舞臺に引出してその「生聞き」と「聞いた風」なるところを外國人の口をかりて十分に侮辱し冷笑し嘲謔してゐるのだ。こゝにも作者櫻痴のインテリゲンチヤとしての鬱懷と不平の捌け口が見られる。

「緖言」には當時の社會に於ける歐化主義洋行萬能熱が巧みに諷されてゐる。全文は少し長過ぎるが、いはば作の趣意の眼目を要約したものであり、作全體が單行本では發表されて居ず、且つ文章の見本にもなるから左に同文揭げて示さう。

佛師が大涕に垂しながら足の先に引挾みて夜延仕事に刻み上たる佛像も金箔を塗て須彌壇へ安置すれば御利益が有そうに思はれ馬を鹿と間違へ菽と麥と辨じ兼ぬる殿樣も二本道具牽馬で通れば天晴の御大將と思はれたるはずつと昔の昔のこと今日の世界となつては千兩出して京上りをすれば按摩鍼の盲一も直に飯蛸檢校になつて紫の衣を纏ふことも無く、後の山の野良狐が上方から官を貰へば正一位掃溜稻荷大明神と崇められて油揚の食傷をする事も無くなつたれば世間は現金懸値なし秤に掛たる正銘の値段百のものは百なければ通用せぬと云ふ烈しい人情には成たれど困つた事には人間には目と耳と云ふ厄介物が有つて視たり聽たりする間は輝き光れば錬物も金剛石(ダイヤモンド)と喚び面白き

かしく聞ゆれば訣詞も卓說かと思はるゝが世の習ひ如何なる名醫も裏店住ひの書生上りでは手を出して脈を診てもらふものも無く肉食妻帶の俗僧でも金襴の袈裟を纏ふて尤もらしい顏附をすれば殊勝げに見ゆるが即ち浮世と云ふもの社會の人類が皆ゑらい智惠者ばかりに成つたら知らず目明千人目闇千人である中は目明のみを當にしては頓だ當の違ふ事があると知し召せ

立身出世は耳朶次第とは道理に懸らぬ詞とは云へ其の耳朶が大きからうが小さからうが夫に拘らずに榮枯盛衰があるならば格別なれど家に百萬の富を貯へて榮華に誇れる豪紳は必ずしも經濟の實理に長じたる智者にもあらず胸に勳章の光を輝して功名に驕れる貴顯は敢て盡く神國の經綸に績しある豪傑にもあらず日用の手紙すら碌に書けぬ文章博士あれば遣繰の算段に頭の上らぬ理財學士もあり法律の蘊奧を叩かずとも頓智の能(よい)で流行する狀師あり議論の公平は其所除で胡摩化の上手にて泳で渡る新聞記者あり三味線の調子は合はずとも座敷の數が多れば新橋第一等の流行子(はやりっこ)となり政治の得失は知らずとも田舍の人氣に投ずれば最多數で議員となるは珍しからぬ世の中では人を見て法を說き場所に由て法螺を吹き何でも耳朶を大きくするが肝心要め幾ら自力があらうとも打遣て置ては耳朶は何年待つても大きくは成らざるべし

山師の玄關と笑はゞ笑へ虛喝の議論と誇らば誇れ內證では火の車を廻はす樣な酷い才覺に苦んで居ても時に依ては金の茶釜が土藏の隅にころがつて有るが如き觀をも飾らねば繰廻しが附かず聞取り學問の鍍金修行でも奧の底まで知り拔たる風をせねば世間の信用が厚くないは是れ自然の勢そこが即ち盲目の寄合目明一人が力身(りきん)で腹を立て見ても詮かたなかるべし古風なチョン髷より五分刈の散髮が氣が利て見えお召縮緬のゾロリ拵へより洋服の方がキリヽと男らしく見え若くて眼鏡を懸て居れば學問が有りさうに見ゆるならば斯く見するに若かず相手に分らうが分るまいが談話の間に英語や獨語(ドイツご)を交へ西洋では云々なり米國でも斯々なりと云ふが聽衆に受よくばそう云ふに何か苦し

かるべき畢竟世に用ひらるゝと云ふは個樣な所に拔目の無い働き上手の手際と云ふもの夫を彼是と批難するは詰り己が及ばざるを白狀するも同前なり相手が柔と見たら怖かし附るとも甘いと思つたら吹て吹立つるとも各々其人の力量次第誰か傍より之を妨ぐべき大學に入て親しく外國教師に接すれば幾分か西洋の空氣を呼吸するの思ひを成すと知らば一たび洋行して歐米諸洲の地を踏みたる人が歐米の風に化せられて歸り來れば俄に馬鹿が怜悧になり愚鈍が敏捷になり無學が博識になり不術が多謀になり醜漢が美男になり書生が官員になり法螺が實說になり愚說が名論になるも亦さも有べき勢なり爾と云へども我國が僅か二十年か三十年の間に是ほどの進みを成し歐米と肩を並べて左までの劣を取らざる樣に昇つた事は矢張り洋行の效能なりと知らば洋行に若ものは莫るべし洋行の旅費が無くば致方が無けれども官費なり私費なり其工夫が附くならばなどか洋行せでは止むべき是を外國巡禮の原因なりとす

當時の社會に對する櫻痴の諷刺的冷嘲的態度が、十分こゝに現れてゐるが。これを讀むと逆に又當時のブルジョア社會の一部に滿ちみちてゐた僞瞞性、その僞瞞性を滿足させる洋行熱といふものゝ强さを感じさせられる。

內容は割に單純なもので、前記の生利跳卿及び閑田風之助君が、前者は「國會開設も間近になつたので」特權ある華族たる身は當然上院に入つて堂々と國政の衝に參じなくてはならぬ、それには西洋の政治運用の實際と貴族と政治の關係を視察しなければならぬといふ點から、後者は國會設後は從來の如く商業も政治と分離してゐることが出來なくなるのみか、今後は商業が政治の基本となるので、「商業の文明」を進步せしめて立派に立憲政治の經濟方たる實を備へるやうしなくてはならぬ、それには西洋の政治と商業を視察しなければならぬといふ點から、同行して洋行する。此の洋行の目的には、丁度明治二十三年國會開設前後のブルジョア社會の動搖乃至轉換が反映してゐるわけである。且つ前にもいつた如く此の貴族と紳商が相提携して政治視察に赴き、實際政治界の第一線に乘り出さうとすると

ころに、櫻痴の意味した時代相の特殊な表現がある。

二人の送別會には、二人の知己友人同輩同族がそれぞれの立場から注文なり奬勵なりの文句を出してゐる、これを玩味することは、時代の空氣を知る上に於て有益であるが、今こゝでその一つ一つを繰返してゐるわけに行かぬので、要は上記の洋行目的に盡きるとし、有志の士には東京日々本紙に就いて見ていたゞくことにしよう。たゞ送別の餘興たる俄狂言「官人帖」（勸進帳のもじり）は、櫻痴が當時の洋行者流の間抜さたり、醜態なり、愚頓さなりを思ひきり嘲つた素破抜きの文字として、なかなか面白いものだ。

二人は二十二年一月十六日横濱出帆、船に醉ひ醉ひ、又初洋行者の失敗を種々演じつゝ、神戸、長崎、香港、新嘉坡、コロンボ、スエズ等を經て、二月二十三日佛國マルセイユ港に上陸する。船よひの光景は櫻痴の實見であらうが、よく細かに描き立てゝある。香港にてはホテルと領事館を取り違へ、銀行と魔窟の穿ち違へ、船中浴衣がけの失敗、食卓に於ける失敗（オムレツのみ三つも四つも食ふ云々）、その他いろいろの可笑味があり、二人は船中の笑ひものとなるが、金の威光を大に示すので、西洋人の或る者やボーイなどには受けが惡くない。航海最後の可笑味は、マルセイユ稅關で二人の荷物檢査の際、三州味噌のブリキ筒を爆彈と間違へるところだ。これからが、その赤毛布的失敗が益々佳興に入るわけだが、これは必ずしも櫻痴の實見だけでなく募集種も澤山あることと思ふ。さうして東京日々を讀むと、此の小說が相當讀者に受けてゐるが、これは櫻痴の諷刺よりもむしろ、この赤毛布式の可笑味にあつたのだと考へてよい。

旅館ではエレヴェータの失敗、貴族貴族と觸れ込んで多額の宿料を取られる話、閙田が床屋で眉毛を落される話、いろいろある。二月二十四日巴里着、當分巴里見物といふことになり、案内役として、前々から留學してゐる（何を勉强してゐたか）世間學に明るい飛田修行次といふのを賴む。飛田は二人の不案內と愚昧なのを利用して金を捲き上

ふつは勿論、種々な事を持ち出して二人をおもちやにする。少々妙でない性格に描かれてはゐるが飛田はインテリゲンチャたることに注意されたい。注意して讀めばそこにまた櫻痴の一つの皮肉が見られやう。二人は飛田におだてられ、衣食住ともに皮相的巴里子と成りすまして大得意である。

二人は巴里で、日本の憲法發布の報に接する。二人を中心に、巴里の日本人は一週間ばかりお祭り騷ぎをする。二人はフランス丸のみの勢に加へて、俄に大政治家氣取りとたり、豫定を代へて先づ巴里で政治經濟を研究しようとかかり、生利はクレマンソーなどに會つて佛國現代政治を質し閒田は商業會議所會頭に條約改正の議論を吹かけたりするが、固より何の手答へもない。その間ホテルに於ける種々な可笑しい失敗はあるが、それは略す。たゞ注目すべきは、作者櫻痴が巴里日本人の意見に托して、憲法發布の光景を描いたり、發布の事情を論じたりしてゐるが、流石はと思はせるところが少くない。發布の式に記者代表を入れるのはよい、然し人民の代表があつて然るべきだといふ。府縣會議長が丁度それに當つてゐるが、然し議長が無斷で人民の名を濫用してはいかぬ（明治十二年、福地が府會議長の時、府民の名で明治天皇に上野公園御臨幸を願つた、その時沼間守一が福地を以て人民の名を濫用するものと責め、各新聞これに和して、大に福地を苦しめたことがある。福地がこゝでこんな事を持ち出してゐるのは、それに對する皮肉なのである）。又新聞記者ともある者が氣がきかぬ、憲法草案の內容が如何に嚴秘されてゐたからとて、これをかぎ出す位の藝が出來なくて何うするか、これが外國なら疾うにかぎ出してゐたらう云々。これなど、官憲の內幕を窺知つてゐる櫻痴などからいへば、最も歯がゆいことだつたらう。

日本憲法は海外でも割に好評であつた。況んや當の生利、閒田の如き、陛下より幾分の參政權を下し賜はつたものである以上、「大滿足にて一言の不の字を云ふ所なしだ」といふ感激振りである。そこで愈よ議院及び議員の實地見學に「自由の開山、民權の本元、憲法の元祖、議院の本山」たる英國に赴くことになり、四月十日ロンドンにつく。

二人がロンドンで案內役にしたのは、內幕賢郎といふ、これも古い留學生くづれである。內幕はこの二人の若い議員修業者に敎へて曰く、議員修業には、議院の見物、議員の訪問も勿論必要だが先づ交際社會に入つて名士貴婦人と交際し、社會の空氣にふれなくてはならぬ、それには次の十條の心得が要るといつて、十誡を授ける。これは當時の貴族やブルジョアの洋行者達の生活が窺はれるものがあるから要約して轉載するとしよう。曰く（一）二頭立馬車の必要、（二）侍僕（フートマン）の雇人必要、（三）服裝をロンドン流行に改む可し、それも貴族社會に御出入の裁縫師を賴む可し、（四）夜會の招待には必ず出席のこと、（五）演說の機會あらば演說すべし、尤も通譯は內幕が要領よくやるにつき、本人方は日本語で何とでも勝手にいふべし、（六）何でも流行には遲れるな、舞踊もやるべし、（七）唱歌をやつて示すべし、尤も日本の歌なら何でもよし、（八）日常、午後は馬車のドライヴ、夜は芝居見物とすべし、（九）貴族婦人の面會日には必ず行くべし、（十）流行に合はぬ學者は交はる可からず、以上の十條である。二人はこれを實行した結果、金ばかりかゝつて而かも皆の笑ひ物になつてゐる。然し表面は金の威光で羽振りが可い。

二人は議院傍聽に出かけて少しは議會といふものゝ樣子が分かる。すると忽ち又大政治家氣取で方々押し廻る。生利は一日上院議員の貴族B侯を訪ふ。生利は例の貴族特權論を振り廻し、貴族には人民と違つて元來參政の權利があるのだから、日本の上院も英國の如く、人民を雜へぬ貴族のみがよし云々といふと、侯に叱られる。侯はいふ、英國上院は封建貴族の縮圖であり、歷史によつて出來たものだから日本の貴族とは違ふ。日本の貴族は一度その貴族としての特權を陛下にお返してゐるのだから、貴族の權といつても、人民同樣に陛下から下し賜はつたものである。且つ富力の點でいふも、英國の貴族はそれだけで一院を組織する實力があるが、日本の貴族の富力は知れたものではないか。これでは貴族のみの一院は作られぬ。然るを特權特權と振り廻すは何ぞといふので、B侯に大に油を絞られて閉口する。閧田又、他の自治體議員を訪問して商業偏重論をもち出しては、先方を呆れさすこと、度々である。その結

果、着實た英人達は、若し本當に生利や開田の如き飛上りの若者が日本の代表的貴族なり紳士なりで、眞に代議士として國政を擔ふことになるものとせば、日本の立憲政治の前途が極めて危いといふので、大に心配し始める。此のB侯の言及び英人の心配は勿櫻痴自身の意見なり心配なりをカムフラージュしたものと見るのが當然であらう。B侯の貴族論なるものに曰く――

貴卿は貴族の特權々々と云はるゝが其特權とは如何なる權利を指して申さるゝが、余が見る所では日本の貴族には十二分の特權が有ると思はるゝが是でも貴卿は不足を感ぜらるゝか、其不足は何の點に御座るか、一々承りたい。全體貴族々々と自己が門閥を鼻に掛て無暗に力身ちらし平民とは天然に階級が違つて居る様に心得たり、先祖より讓り受たる財產の饒なるに任せて其財を浪費したりするが貴族の本分では御座るまい、貴族と云ふ名ばかりで內證は借金で首が廻らず、智惠も無ければ學問もなく世間の嘲笑を受けるものが歐羅巴諸國にも澤山あるが、實に貴族の面よごしと云ふもの、貴卿なども未だ年は若く經驗も少なく失敬ながら學識も十分とは申し惡い樣に見えるが夫では貴國の君主に對して本分を盡す事が出來まいぞ、餘り倫敦に長居して惡い事を覺えぬ內に早く歸國なされて大學校にでもお入り成るが上分別で御座らう

例によつて二人はロンドンに於て盛に赤毛布を發揮する。何も知らずに喪章帽子を被つて倶樂部へ出かけたり、新聞紙をハンケチ代りにしてブラック・プリンスの異名を貰つたり、柄にもなく某夫人の郊外別墅を訪ねて馬車屋と大悶着を起したり、マダム・テユツソーの蠟人形店で生きた美人を人形と間違へて怒られたり、水晶宮見物に汽車に乘り遲したり、さては開田は柄になく某豪富の令孃に野心を起して、鼻もちのならぬクリームケーキの大醜態を演ずるなど、枚擧に遑あらずといふところだ。

櫻痴の政治的イデオロギーの最も明瞭に出て來るのは、生利が保守黨の名士ニャーテンと日本憲法を論じ、開田が

民間愛蘭黨の首領パーネルと政黨的政治論を交はすところ（第四十四、四十五回）である。此の二回は、この小說の政治小說的價値を決する程重大なものであるから、左に詳しく紹介する。先づチャーチル卿と生利の憲法問答から始めよう。

玆は英國保守黨の首領中に其人ありと知られたるC—L卿が倫敦の邸なり卿は悠然と椅子に依りて對座の來客即ち日本の貴族生利卿に向ひ政治上の談話に及ばれたり（此間の通辯は都て內幕なりと知るべし）C—L卿は生利が頻に東西の政略に付て辯ずるを聽き暫く默然たりしが稍あつて（C—L）貴卿のお說を承れば何分にも僕に解し兼る所がある英國には英國の人心に適當する政治を行ふの必要ある如く日本には又日本の國情に適當する政治を行はねば相成るまいに、貴卿(あなた)の宣ふ所では丸で國情も人心も顧みず空中に樓閣を設くる樣な高案と思はるゝが青年書生の學校論には間々左る妄想もあらん苟も政治家となり殊に皇室の藩屛たる貴族にして斯の如き妄想あつては國家の秩序も幸福も共爲に紊るゝ患が御座らう云々

生利は然しかう押し返す、C卿の言は尤もだが、日本が是を改め、君主獨裁を改めて歐洲の新主義たる立憲君主制とする以上、日本古來の慣例を皆歐洲主義にせぬと辻褄が合はぬ、歐洲主義の中では萬事英國を模すべしといふのが日本政治家の輿論だが、特權階級の連中が獨逸風の帝制主義を行はうといふのは怪しからぬ。云々。そこで日本の商法及び選擧法について具體的に論ずることになり、生利は「先づ第一に貴族院をば英國の如く純然たる貴族のみを以て組織せずして勅選議員やら大財產家の種類を入れるが英國の模範に反してゐる」と云ふ。

（C—L）併し英國でも大僧正が上院に列席するから世襲貴族ばかりでは御座らぬよ原來英國の上院は封建貴族の餘力を存したる國情に出でたる制度ゆゑ他國にて其國情なき以上は決して模範とすべき所では無い、既に英國に於てさへ急進派に於ては上院の組織を改更すべしと云ふ論が頻に行はるゝでは御座らぬか其上に日本の上院に此の種

類を入れたるは英國に比すれば更に自由を進めてあれば自由論者に大慶で有らねば成らぬ筈じや、

次に生利は云ふ、議院には彈劾權が無い。

（C―L）彈劾權や內閣信用投票權の有無は寧ろ體裁上に屬して實際の問題では無い良しや其權を定めて置いても議院に勢力が無くては效用を成さぬもの又その權が明文に無くとも既に議院の意見を上奏する途がある上は議院の智識才略次第で何樣にも相成ること畢竟それ等の有無を以て論ずるは學者說で政治家の屑とせざる所で御座る。

生利又云ふ、次に日本の內閣の帝室內閣制（議院內閣制でなく）である點が英國の模範に反する、云々。

（C―L）是は妙な事を承るものかな英國の內閣は議院の內閣では御座らぬ憚ながら我女皇陛下の內閣で御座るゾ尤も議院にて多數を占めたる黨派の首領を擧て總理大臣に任ぜらるゝは國情を察せられての叡慮に出る譯で決して議院より命ずる次第では御座らぬ、是を論ずるには先づ政黨の實況を知らねば成らぬ日本には如何なる政黨が御座るか……其政黨は何人の議員を議院に出して居ますか……其政黨の政略に如何なる所が相互に反對して居ますか……其政黨は如何なる地方、如何なる種類、如何なる利益に依て別れて居ますか……荒增の所をお話しなされ

帝國議會は來年にならねと開かれぬので、今から政黨が判然と顯はれて分立する道理がない、生利に返答が出來ぬ。

以下は自然に政黨論となつて來る。

（C―L）日本でも他日は自ら政黨が實際に分れませうが今日お話の政黨ではチト覺束ない樣に考へられるネ貴卿も政黨に加はらうと思召するなら篤と政黨の利害を研究なされい其內幕に入れば隨分否な事が澤山に御座る僕らでも政黨の羈絆には相應に困難して居るョ是から歐洲大陸の諸國を巡禮して御覽じろ政黨の利が多いか少ないかゞ貴卿にも解るであらう（中略）お別れに一言貴卿に忠告するが英國政治の表面ばかりをチツと覗て見て是が英國風だと思召すと飛だ間違ひが出來ますだよ、何に付ても學問が第一だから精出して少しでも學問をお仕なされい無學無

才の貴族は役に立ちませぬぞ云々

次に聞田とパーネルの政黨問答――

原來P―L氏は尋常の政治家の如くに談話を好まず沈默を喜ぶ人なれど今日は絕東より遙々と英國に來遊せる日本紳士が我を慕て折角に來訪せるをスゲ無く待遇せんは本意に非ずとや思ひけん例にも無く快活に話しを成し問ひもし答もしたりける（P―L）段々のお話を伺つて見れば日本には中々自由の制度が行はれて歐洲を凌駕する位じや何でも此機會に乘じて上下心を協せて國家の進步を計らねば相成りますまい。

これに對して聞田は、謙遜のつもりで、成る程來年から議會を開き、地方には市町村自治制を布くが、當分は十分な事が出來まいといふ。パーネルはこれに對して、物には初めから完全に行くものはない、今回日本の英斷は歐洲でも稀に見るところだ、既に此の基礎の建られた上で國民の自由幸福が進まぬとそれは國民自身の招く所だ、それを人の所爲のやうに不滿足さうにいふのは貴君の考へ違ひだらうと嗜める。聞田は、別に不滿足と思はぬも、英國政治機關の實況を視、議院の勢力を考へると、日本の議院など幼稚なものと思はれるからだと答へる。

（P―L）ムー未だ開設にも成らぬ議院の幼稚か幼稚で無いかを貴君はどふして判斷なさるヱ、且當英國の議院を大層に感心して御座る程のものでも無いよ、尤も歐洲大陸諸國の議院に比ぶれば實に超越して居やうが善く其眞況を見玉へ所謂黨派の巢窟、情實の淵叢と評して可なりじや

聞田は、然し英國議院は全國の輿論を代表してゐるぢやないかといふ。

（P―L）其通りの事が書物にも載せてあり又英國人が自慢話しにも致すが中々さうで無い……シテ貴君は英國の議院々々と左も舊敎宗徒が羅馬に於ける樣に言はつしやるが誰の講義を聞き誰の著述を讀で研究なされたな……フ―別に講義も聞かず著書も讀まぬと夫じやお話にならぬ折角に倫敦にお出なすつたものだから少しは本統の研究で

も成さつたら好らう差當りメーンの憲法史でも手初めに讀むがお爲だらうと思ふよ、さうで無いと丸で話の筋が立たぬから……

パーネルは話頭を轉じて、更に日本現時の政治狀況を尋ねる。而して更に語を續ける。

（P―L）シテ見ると貴國には未だ政黨は確と組織して居ませぬナ……又新聞紙の勢力も英國程では無いと見えますナ……政治家が演說を以て人心を膠着する事も無い樣子だナ……（中略）聞田君、僕は日の本爲に賀せねば成らぬ、日本には政黨の計略を以て公益公利を左右する事なく、日本には新聞紙を使用して會議輿論を阻遮する事なく、日本では巧に辯舌を揮て國是を紊亂し人心を蠱惑する事なきは實に日本國民の大幸福この上に出ず、ア、羨しい哉望ましい哉、貴君日本に歸つて日本の政治家に遇つたらばP―Lは斯の通りに言つたと傳へ玉へ

パーネルの「平素の心事は自ら此の述懷に現れ慷慨悲壯の言詞に深き意味を含みたれでも」、聞田には何の事か分らぬ、それでパーネルに向つて愚考を持ち出す、「愚考には今日日本の急務は政黨を起して勝を議院に制するにあり新聞紙を以て政黨の機關となし輿論を誘導するに在り頻に政治演說を興行して人心を鼓舞するに在りて大先生がたが盡力せられて改進黨も保守黨も大同團結も國粹保存も其首領は皆この事に肝膽を挫いて各々才覺を運らして居ますれど何も〳〵思ふ樣に行屆かぬかくて日本人はマダ〳〵英國の如く政治に熱心で無いと嘆息で御坐ります」云々。そこで又パーネルに叱られる。

（P―L）ハア扨て貴君は解りの惡い人だ……イヤ此上は僕とお話しをなすつても左迄の益も御座るまい……矢張り英國風の流行說が貴君の氣に入るであらう……併し聞田君よ貴君の如き年若の紳士は得て熱に浮されて騙されたがるもの……政治議論と商業に仕て居る連中の口車に乘て騙され無い樣に用心お仕なさいよ

以上の問答は勿論假設であり、その全部が、當時の政治社會に實力ある貴族とブルジョアジイに對する警告なり冷

罵なり皮肉なり諷刺なりと見て然るべきものであるが、こゝで櫻痴としては珍らしく眞劍に異見を吐露したところが見える。從つてその問答の各條は又同時に當時の社會に流行した最も勢力ある政治的言論に對して櫻痴獨自の立場から批判を加へたことになつてゐる。英國風を崇拜する民間政治論に反省を求めたのは明治十五年の主權論の論爭の續きとも見られる。大體として貴族をして先づ社會の現勢からブルジョアジイの實力を認めしめ、ブルジョアジイをしてはインテリゲンチャを飽くまで離反せしめぬやう用心させ、これに指導者の役目を與へつゝ善用し而かもこれのために昏迷に陷入ることのないやう戒心しつゝ宜しく日本の國情民心に適した公正な政治改革を行つていかうといふ理想であるが、これが櫻痴の眞面目たる彼の漸進的改革主義の現れであることはいふまでもない。例の如く貴族とブルジョアに對して冷嘲的飜弄を試みようとして、意外に本色を示したところを注意すべきであらう。櫻痴がその政治小說でこれ程力を入れて本氣に政治論をやつてゐるところは、外にないといて可い。

かくて生利、聞田の二人は再び巴里に取て返し、更に伯林に赴かうとする、その途中逆に南獨逸地方を見物しようといふので先づストラスブルグにつく、丁度そこで此の小說は中絕してゐるのである。伯林についてからは自然又日本政治社會の論辯になる筈と思ふが、それは何ういふ議論になるか、略ぼ當年の櫻痴の立場から想像はつくものゝ、こゝにそれを描き示す限りではない。

小說として何うにか讀めるのは、兩人の出發まで、殊に送別會の光景が面白い、然し赤毛布式珍談の續出となつては、全く興味索然欠伸を連發させる。當時は或る程大に讀者に受けたものかも知れないが、今日讀んでは、たゞその馬鹿々々しいのに呆れるのみ。何も彼も笑ひに化さうとすると却て笑ひが逃げるといふ、此の小說の如き全くこれである。尤も二人の失敗失策の一切を、櫻痴が當時の貴族洋行者、ブルジョア洋行者に對して抱いてゐる嘲罵の氣持ちの現れだとして見れば、それは又それで片つくであらう。

『滑稽小說 仙居の夢』

仙居は即ち選擧である。作の時日に見て、明治二十三年七月一日より三日に亘つて行はれた第一回總選擧を指してゐること勿論である。即ち第一回總選擧の或る部分に對する暴露的諷刺がこの小說である。

例によつて此の小說も、全體の趣向は作者の夢になつてゐる。先づその緒言を讀め——

（前略）此頃の日中の暑熱の堪かぬる程なれど避暑の法も無く机の上に重ねたる物語の枕本を枕となして暫し打まどろみ昔の夢なりとも見て心を慰めんと思ひしに先生起たまへ〳〵と呼ぶものあり打驚きて起上り誰ぞと見れば年の頃は五十ばかりなる男が道服を身に纏ひ麥藁帽子を冠り黑き履を穿ちたる體は唐繪で知己の道士が四分、插繪で愁意の天狗が三分、それに西洋風を三分ほど加味したる有樣なり。斯る鵺の如き怪物には朝に晩に遇ひて奇しとも見ねば又怪しとも思はず、足下の來意如何にと尋ねたるに彼の男打答て、先生越方の夢見たりとて詮もなし寧ろ予と共に仙居の今日の有樣を一日見物せんとは思ひ給はずやと云ふにぞ。夫おもしろからん案内し玉はんや。いと安き御事なりいざ來りませ。さらば參らんと其座を立ち歩むとも無く飛ぶとも無く余が身は程なく空中に在りて雲煙縹渺たる間に下界を明々と見下したり

その見下した場所はといへば——

人煙稠密なる市街かと見れば田園の間に鷄犬の聲する田舍の如くにも見え市とも鄙とも分ち難し加ふるに突然の雲の旅路方面は一向に分らねば何國とも更に知るに由なし茫然以て漠然たる次第云々

それでは空中より見下した時の光景は何うか——

馬車に鞭うちて馳るものあり綱曳の人力車で飛び廻るものあり、此處にては演說會を開きて諸君よ諸君と聲をからすものあり、彼處にては懇親會を開き酒肴を振舞て何分宜しくと頼むものあり、蓬頭短袖の豪傑が數十群をなして諸所に威張るものあり、鰹節の切手菓子の折を持廻りて音信を家々に通ずるものあり、此處にも集會、かしこにも寄合ひ、御寺の本堂鎭守の社殿に至るまで晝も夜も人の群集にて（中略）男女老若押並て皆氣狂の如く腹を立たり頭を立たり笑たり頭を集て心配するかと見れば陰に廻つて舌を出したり左ながらお正月と盆と節季が一所に來てお祭と婚禮と御弔が落合つたるが如くにて中々の混雜詞も心も及ばれず。

これには平生物に驚かぬ主人公の「余」も肝を潰し、案内の男に向つて、これは一體何處で何をしてゐるのだと尋ねたところ、男は「是ぞ卽ち當仙居區にて仙居の所なり」と答へた。仙鄕も昔は物靜かで花笑ひ鳥なくの無事を樂しんだものだが、世の中が開けるにつれてこゝでも西洋風が流行し、耆院を開きその耆院に出る人を仙居の最中だからこの騷ぎだといふ。耆院仙居に出たがる候補者の數が先づ一ダースから二ダース位まであり、これが畢生の智慧と財產を抛うつて競爭してゐるのだ、娑婆へのいゝ土產だから此の仙居競爭を見物して歸れとすゝめる。そこで主人公の「余」は、案内に任せて仙居の體を逐一見物し「此の內幕彼の相談寄合集會ども見もし聞もし驚入つたる次第」を書きつらねて、それで出來上つたのが此の小說だといふのである。

櫻痴の材料は勿論何れも某々の選擧區であつた事實を綜合したものであらうし、候補者の人物も、代表的に各派各黨の類型を一ヶ所に寄せ集めたものといつてよい。その主なる候補者の名に曰く――

第一　頓田山四郞（愛身塔又は敗心塔）

（參謀）南高虹內（運動員）朽唐出放太、炭山競太、時世持說、風並變多等二十餘人（後詰）大株一六

第二　望梨之助（似雄塔）

（參謀）倉志駒郎（運動員）大螺吹足、御影倒四郎、樫野素徹記、赤井決鬪

第三　雲往御膽（寶劍一派）

（指揮）高慢上人（運動員）向志籠四郎、掛卷賢、玉垣明石、小石輕母、念佛空也

（後詰）當地第一の舊家草分權太兵衞

第四　甘居仁太（無主義、暗雲伯の甥）

（參謀）表部大學（運動員）蟻馬梨之助、出船松右衞門、綾獅々男之助

（尻押）臨辛長者

第五　大樓津絞内（利權派）

第六　今出務遲撤平　以下十八名

以上各候補その他の政綱、政見、主義を覗いて見やう。

先づ頓田山四郎（飛ンダ山師に通ず）は愛身塔（改進黨に通ず）の若手才子で博識、所謂輸入候補である。公正なる選擧、非腕力主義、言論主義を標榜してゐる。親分の阿濃圓伯の持論たる紙幣インフレ政策の實現を當て込みに愛身塔の勝利を願つてゐる連中がこれを後援する、大株一六の如き金融資本家が頓田に肩を入れてゐるのも、一にこの點からである。

望梨之助（望無しに通ず）は似雄塔（自由黨に通ず）の錚々たる人物、悲憤慷慨、正義我に在りの一點張りと、非常手段と稱して腕力行爲を慣用する。極度の運動費缺乏に惱んでゐる。ブルジョア方面の後援は全然無い。

雲往御膽（雲行且夕カに通ず）は寶劍（神權）一派の名望家、和漢の學に秀で、家に富あり、專ら古風遵保守門閥家に推されてゐる。其の草分は奈良朝以來の舊家の門閥、雲往の家も平安朝以來の舊家である。參謀の增長寺の阿闍

梨高慢上人は耶蘇嫌ひからの味方、黄金の膠で高慢上人と投合したといふ。向志鯉四郎（昔戀しに通ず）は漢學者、掛卷賢は皇學家、小石額母は新蔭流の師範だ。此の一派の主義は極粹（國粹）主義といふ。その趣意に曰く神州の元氣、尊皇奉佛、愛國敬神、君威は神權なり、政府は天與なり、處士の横議は亂階なり、其位に在ざれば其政を議せず云々。先づ政府黨の志願別働隊といふところ。

甘居仁太（甘い人に通ず）は「政黨の外」に超然獨立し、從つて政治上の主義も公明偏闇といふだけ、强ていへば無能な中立主義だが、區内のブルジョア紳士が擧つて應援する上、且つ在朝の暗雲伯の甥として官憲とも連絡がある。尻押たる鹽辛長者の言に曰く「我々の代議士には身代も祿に無い癖に議論ばかりして居る新聞記者や法律家を見た様な人物を出すには及ばぬ」云々。その得意は金力の利用だが、勿論時々は威力も加はると知るべきだ。政府黨。

大根津鮫内（大熱サメナイに通ず）、その立つ處不明なるも、大體は利權黨で、政府方と相通じてゐると見て可。武器は金力のみ。

今出羽遲勘平（今デハ遲カラウに通ず）、主義は頓田一派の改進主義に近いといふ。

候補者都合十八名といふからもう十二名なくてはならぬが、今出羽以下の十二名は姓名も政治上の主義も何も一切不明だから、それは當然省略として、さて以上の六名が一の議員席を爭ふといふことになる。誰が何ういふ手段で結果が何うなるか、その駈引の虛々實々の內幕がなかなか面白い。詳しく述べて居れないから、荒筋を述ることにする。第六回から始めよう。

第六回は愛身塔の政見發表演說會の光景、聽衆は大部分日當を出すか氷水擶待で狩り集めたもの、拍手連、喝采連、それから型の如く雇壯士、爲の者迄出て護衛してゐる。巡査も多數出張。南高參謀の進退懸引なかなか要領が可い。演題には「耆員仙居を祝す」、「仙居者の心得」、「卑劣の手段は我黨の行はざる所」、「腕力は仙居の大忌なり」、「耆員

たる人は誰ぞ」「余は候補者たることを諾す」等である。似雄塔の樫安は部下二十人程連れて演說妨害に來てゐるが、南高の懸引が巧いので成功せぬ。

第八回は大根津鮫内の御馳走政略（二次會をも含む）。投票買收の相談（一票三圓云々）。投票ブローカアとの交渉等いろいろ。

第九回望梨之助の參謀倉志が甘居派へ談判、明日政見を發表せよといふ。甘居派の表部大學がそれをのらりくらりの瓢簞挨拶で追返す。こゝに甘居派の策略がある。甘居派は愛身似雄を爭はせて漁夫の利を占めようといふのだ、そのため始めは成るべく處女の如く弱い色を見せて彼等に侮らせ、仙居間際に勃然脫兎の如く運動せよと、表部の方針が決する。「威力と金力を以てし是を助くるに計略を以てする」のが仙居の祕傳だといふ。威力とは背雲伯の引力を匂はして郡長の力を借りること、金力とは買收抱込み、又待合の女將に手傳はして女色を利用して有力家を動かさうとするのが即ち計略の計略たる所以であらう。

第十回、頓田側は形勢不利と見て、今出羽を買收し、候補を辭退せしめ、投票を讓らしめる、今出羽は大株に舊債があり、心ならずも泣々これに從ふといふ悲喜劇である。

第十一回はいよいよ諸派の大競爭で、先づ望派の過激な仙居廣告に雲往派が怒り、力づくで爭はうとする。雲往はブローカア醫學師貝塚周仙（これは大根津のブローカアでもある）が投票一票と米一俵と交換しようといつたから何うしようと相談する、一同憤慨するが結局、貝塚の條件を容れる。草分が來て頓田派が葉書の推薦狀を出したので此方も出せといふ。結局、葉書、新聞廣告、引札、廣告屋の觸れ、信者氏子への說教、敵の切崩し一切を試みろとなる。

第十二回仙居の前夜、頓田派、一部投票者の裏切（甘居のため）が出來て手んてこ舞、金ももう續かぬので壯士をやつて脅迫することにする。

雲往派、勢力を過信して當選確實と思ひ、前祝赤飯の仕度をしてゐる。

望派は勿論、選擧人を暴力で脅迫する一手、その外に頓田と雲往の候補辭退の手紙を僞作して選擧區間に廻す。

甘居派、ブローカア貝塚はこゝにも現れて見許を見込んで飛切の高値で投票を買込む。そこへ待合の女將も運動成功の旨いつて來る。表部はこれでやゝ安心、成算既にあるものらしい。

第十三回仙居當日、當日の大騷ぎはいふまでもない。各派とも休憩所の設備いろいろあり。雲往派も頓田派も突然の候補辭退の聲明を出されて大に驚く。三派とも御馳走、狩り出しに狂奔、中でも甘居派が一番豪勢なることいふまでもない。

第十四回唐瓢（投票）の開函、各候補の一喜一憂よろしくあつて、結局、無主義の甘居仁太が最高點登仙（當選）、次點は頓田、望、雲往、大根津以下の順序だ。甘居大得意。

第十五回甘居派登仙の祝宴、暗雲伯も出席、表部の勞をねぎらふ、表部盛に甘居の今後政治家としての出世を吹聽し、暗雲に阿諛する。

第十六回落第（落選）の述懷、頓田の述懷、政見で負けたなら兎もかく甘居の懸物に買收で敗た位は我慢出來る、然し此の分では國家の行末も思ひやられるが、必ず第二回第三回の改仙があるに違ひないから、その時を期するといふ負惜みの自己慰安がある。

落選各派共同で甘居の買收選擧を指摘し無效訴訟をすることになる。

第十七回勸告狀、これは一寸重要な部分であるが、自由の開山、壯士の本尊たる乾鯣伯のところへ任俠義會主幹西藤武藏之助が來て今度の總選擧の結果が殆んどブルジョアの獨占といつてもよい位になつたのを心外とし、耆筷院（貴族院）、衆耆院（衆議院）を通じ「正統公平の人をば飽まで保護するが、佞奸邪智の連中には耆員辭退を勸告する」と

いふ、さうして「勸進帳」がかりになつて、勸告狀を讀み上げ、乾錫伯に問答宜しくあつて幕になるのだが、その西藤が總選擧の案外なのを嘆ずる言葉にかういふ一節がある。

（前略）抑も我黨の有志は其主義の如何を問はず民仙耆院論の初まつたる時よりして是を贊成し天下の爲に帝室の爲に國家の爲に人民の爲に政權の爲に自由の爲に何でも一日も早く耆院聲事（議院政治）の美擧を見んものと（中略）一命を民權に奉り。屍を書生の中に沈め。下宿の二階に起伏しあかす壯士の單衣に添し破袴。かたしく暇も茄子の蔕。或時は繩に掛り。露倉に身をまかせ。又ある時は三錢の。工夫も出來ぬ雪の夜に。芋少しある夕飯に。箸取る青や菜ランプ。とかく凌ぎし甲斐もなく。都には置かれずして。三里の外に逐出され。あちら此方と吟よひしが。世は末世に及ぶと雖ども。日月未だ地に落玉はず。今度の仙居こそ、有り難けれと思ひしに。此の登仙は何事ぞと思召す。人才は遼遠萬里の雪に覆はれ俗物奸商世にはびこり。左しも尊き耆院をば。名利の巷と成さん事の。口惜う候。アラ恨めしの世の中や〳〵云々

櫻痴の筆にかゝつては、政治上の幻滅から來る冷笑半分で書かれてゐるが、これは實に一部志士壯士の實感で、多年民權自由に粉骨した彼等からいへば、悲憤の涙なくしては第一回總選擧の意外な結果を眺められなかつたらう。「人才は遼遠萬里の雲に覆はれ、俗物奸商世にはびこり、左しも尊き耆院をば、名利の巷と成さん事の、口惜う候」實に彼等は衷心から、口惜しく感じたらう。多年淸節を持して奮鬪した士は皆破れ、當選者は今迄名も聞えぬ地方ブルジョアの巨頭乃至その傀儡の古官吏のみ。然かも彼等が總選擧の第一線に乘出して議院政治の實際に關係しようとするに至つたのは、先に鹽辛長者が甘居に立候補を勸めた時に吐露した文句にも見られる如く、自家の利權を自家の手で防護保守しようといふに外ならぬとせば、議院を「名利の巷と成す」といはれても仕方がないところだ。從來政府大官の手に左右された利權は、議會開設と共に、議院の方に移つてしまふ。これが即ち政商紳士や利權屋が、俄に議院議

院といひ出した大原因であると見て可い。こゝからして、愛身塔の頓田が、これからは議院の同志を通して在野の者でも金儲けが出來るといふ告白もすることにもなる（第十六回）。この邊の消息を流石古狸の櫻痴は抜目なく睨んでゐる。櫻痴は更に所謂紳士の心事を罵倒していふ。

佞奸邪智は紳士の深祕にして語り難き事なれど。疑念を拂さん其爲に說聞せん。夫れ自稱の紳士といふは所謂表面修飾内心貪欲者の九字なり。正に論ぜんとする時には。正しく立て面を見ること三十六分。利慾の話しを持掛て。其心底を探り。共に儲けを謀る時は。剛欲邪心立所に顯はれずと云ふ事なし云々

所謂壯士の由來及び本來の精神意氣を說明していふ。

（前略）その由來いと易し。夫れ壯士の法といへば。民權自由兩部を旨とし。紳士豪商を踏荒し。世に害をなす佞人奸物を退治して現世貧氏の肩を持ち。或は難行苦行の功を積み。天下泰平の冀望を持す。故に内には文明開化の德を修め。表には野蠻の相を顯はし。惡徒外道を威伏せり云々

即ち壯士の發生は必竟ブルジョアがその金力を賴んで政治上横暴を働くのを社會的に監視し抑正することを使命として生れたものだといふのであるが、これは如何にもさうなくてはならぬ。

その後仙居の騷動は如何になつたか。

落仙候補は、連合して自派の唐瓢者達に慰安會を開いてもらつて僅に氣勢を揚る（入費は勿論候補の自腹）。又西藤を利用して甘居に登仙辭退の勸告をさせる。然し勿論甘居もその手は喰はぬ。そこで愈々甘居が唐瓢買收を探偵して告發することになる。世間ではもう仙居のことは忘れて、此の年の不景氣挽回、困窮人救助に頭を惱ましてゐる位なのに、政治家連のみはまだ仙居の事に夢中に騷いでゐる。一つは失敗の善後策が焦眉の急となつて、無理算段の運動費の祟り目がいよいよ出始めるからだ。登仙者甘居も、新聞では叩かれる、壯士は脅迫に來る、何やかやで落ついて

ゐられないので箱根に逃げ出す、失敗連中も、借金取りや仙居區への間の悪さを恐れて同じくいひ合した如く箱根行をする、さうして箱根で敵味方が落ち合つて結局茶番的大笑ひの裡に遺恨を水に流してしまふといふので終つてゐる（第十八回――第二十五回）。

最後に快達浪人といふ道人が出て、自分の經驗から割出して種々作者の居士に說教する、その間、例の自嘲の語が續出するが、――

惣別先生は一體金饒口が過ぎる、口も八町手も八町と若い時から自慢さうに言れたが身の祟り、舌の廻るに任せ筆の走るに乘て何でも彼でも饒舌ちらし書廻し世間は馬鹿で己れ一人智惠が有ると自惚たが心得違ひ、世間の智慧者が食傷をして紳士に成て居る中で、先生一人が今以て老書生、新聞屋の足をさへ洗ひ得ぬが馬鹿も大馬鹿の證據じや有まいか云々

などはその好い見本といつて可い。

時に傍なる客間よりチヨロ／＼と落來る灌水の下に大なる蛙が面（つら）を洗つて澄し切て居るを見て道人は「先生あれあの蛙が平氣で居る面を見玉へ、解りましたか、登傷して英雄豪傑に成ふと云ふにはアレ位の膽力が無ては望が逹しられぬものだ。

といふ打止の一段、議員に對する冷罵として、骨を刺す力はなくとも、三斗の冷水を浴せた位の效目はあつたらう。

テクニクの論は一切省略する。

『奇奇滑稽都見物』

『都見物』は、單なる東京見物記ではない、地方上りの大ブルジョア氣樂院書員從五位具連呼太平閣下の眼を通して見た社會見聞錄乃至著眞學修行錄ともいふべきもので丁度『仙居の夢』の續篇に相當する。全篇矢張り作者の夢中の出來事となつて居り、主人公具連閣下は作者櫻痴卽ち困睡翁の夢中の化身といふわけだ。後にこの小說を改題して『夢が夢中』といふに至つたのも、此の夢中の出來事といふところが元になつてゐる。

先づ前文で櫻癡の自身の態度を見よう、もつとも例によつて例の如きものだが、證據が一つ加はれば結論がそれだけ堅固を加へるわけだから、そこは我慢していたゞかう。

無くて七癖と云へば四十八癖は人間に普通の癖その中にも余は尤も癖に富み、夙に文壇に登りし時に時論癖に罹りてより一身を危くする迄に成しかど其癖は中々癒らず變症して嘲世癖と成り、又變じて諷刺癖となり更に變じて寓言癖と滑稽癖となりて、此節は遂に困睡癖となり、一種の痴夢癖を引起し去月の仙居の夢の覺る間もなく、又もや困睡して此の都見物を夢見たり、前者の夢は夢中にて仙居の態を傍觀せし迄なりしが、今度の夢余みづから其人に成て親しく其境界を經たる夢、夢癖の上乘に達したるもの歟、あな賢こ讀み給ふ人々の諷刺寓言などとな思ひ給ひそ云々

大袈裟にいふと櫻痴居士一生の縮圖ともいふべきところだが、それ程仰々しく言はずとも、此の小說を書いた頃の櫻痴の根本態度が知られるといふだけで結構である。

さて此の小說の內容だが、有體にいふと、これは『仙居の夢』の續編とはいふものゝ、『仙居の夢』と違つて純然たる政治的諷刺小說だとはいへない。矢張り社會諷刺に幾分の政治的分子の加味した程と承知されたい。

大體の主旨は、今もいつた如く、大ブルジョア具連閣下の東京見學の結果、政治學修業の結果を讀者に紹介して、その如何に馬鹿々々しいものであるかを嘲笑するにあるのだが、その具連閣下が作者櫻痴の夢中の化身となつてゐる

から、具遠への嘲笑が卽ち櫻痴の自嘲といふわけ、カムフラージュとしては、最も巧妙たものだ。

時は明治二十三年だから分かつてゐるが、所その他は一切不明、こゝに東京より遥か西の方の某地に具遠呼太平、綽名を可惜長者と呼ぶ大ブルジョアがある、ブルジョアもブルジョア大變た大ブルジョアで、その生活は封建の昔の國守大名にも當らぬ位――

家には巨萬の富を積み田地田畠山林原野は幾百町と無く我物にて、公債證書諸株券貸金證文が簞笥に二掉銀行の預金手許の有金が幾百萬圓、東京大坂その外の出店が幾十軒、年々出入を勘定すれば何程贅澤に暮して金を遣つても差引幾十萬圓は是非とも餘つて藏入になると云ふ身代、田舍でこそあれ本宅別莊とも普請向なら庭向なら庭の模樣致て都に當らざる迄に仕つらひ手許の召遣ひは言ふに及ばず、氣に入れば相手の食客何人にても養ひ置き、三度の食事に二度の酒、煎茶に抹茶に書畫骨董、碁將棋雙六、花骨牌、詩歌管絃流行唄、何でもござれと手を出して一年三百六十五日遊んで暮すが身の勤め（第一回）

といふ大層もないものだ。ところが此年三十二の具遠閣下は去る七月の選擧で氣樂院（貴族院）耆員の一人に互選されたもので、いよいよ今年十一月議會開會となれば氣樂院に出席しなくてはならぬ。そこでその支度旁々最近の東京を見學のため、大小從者を引連れて七月末上京する。

處々の溫泉に浴して避暑氣分を味ひつゝ悠々上京した具遠閣下は、新橋驛頭の大歡迎には流石驚く。自分の店の東京出張所の連中、及びそこへ出入してゐる人達の出迎へは當然だが、全東京の紳商、學者、法律家がオール東京を代表して紅提灯、旗飾りでの大々的出迎へで、可惜長者の萬歲を三唱されたには驚いた。宿は東京第一の紫鸞亭の寮を借切るといふ豪勢さ、先づ着いた晩にオール東京代表主催の慰勞宴で、隅田川で月見の宴を張り、中州のあつみやといふので醉倒して、新橋美妓おだるの介抱とある。

久し振で上京の具連閣下は在京中の行動指南兼議院出席稽古掛として、オール東京代表の中から法學者蛸板辯太、新聞記者利手掻也、文學者眞間世杜撰齋の三人を東京社會學の顧問に頼入れる。

此の三人は、具連閣下に建議して先づ各方面への入京挨拶に廻らせることになる。元來微行だがもう知れてゐるからさうはいかぬといふので大臣、大官、議長、議員、書記官長その他に名刺をもつて廻るのだが、三人は相談して先づ公用、私用、職務用と三様の名刺をつくらせる、それから服裝一切の最新流行仕立直しをすゝめ、帽子、靴の調製、馬車、訪問時間等々凡て西洋紳士の社交規約を一通り敎へ込む、その間の滑稽がいろいろあるが、先づインテリがブルジョアを大なぶりになぶつてゐるのだと思へば間違ひがない。

さて挨拶もすむと、いよいよ耆院會出席の支度兼東京見學となる。その必要から宿屋住居は不都合といふので、芝に本邸、築地に別邸を買ひ入れ、半永住の計を立てる（今後毎年上京するのだから）。さて一期在京中總費用二十萬圓、交際費三萬圓の豫算を立て、家人職制を定め、俸給を一定する。

顧問三人が耆員としての必要な練習として第一に敎へたのは、洋食の稽古、それから舞踏の稽古、此の二つが出來ぬと耆會で幅がきかぬからだ、殊に後者は美人を先生にして大に勉强して間もなく上達する。それから演說の熟練、これは具連閣下が義太夫の嗜みがあるといふのでそれを土臺にすることになり、眞間世が草稿をつくつて「租稅輕減論」を芝居口調でやることになる。（それでも中に貧民のため云々といふ文句があるから奇妙だ）。

具連上京の挨拶が廻つたので、續々と政治家や名士などが來て、皆が皆自分の說を述べたて、自分の黨派に入れ味方にしようとかゝる。具連も初めは、不偏不黨でやつてゐたが、來る相手が皆具連に本心を明させようとかゝるし、又堂々と政治を論じて相手を心服させようとかゝると、何うしても主義といふものが必要になる。ところが、具連自身は、自由、改進、大同、保守、何れを聞いても、その時だけは尤もだと思ふ。三人の顧問に相談すると、これも名

策がないが、結局、眞闇世の發案で卜筮に問ふことになる。すると雷天壯といふ卦が出た。これはいはゞ下手に主義をきめず、靜に他の黨派の動くまで中立でゐよといふのだ。具連閣下は喜んでこれに從ふ（餘談だが、櫻痴は易が名人で、いつか上州野州の方へ流浪した時これで飯を喰つたことがあるといふ）。

そのうちそろそろ東京見學を始める。第八回の東京の道路、第九回の淺草並向島の公園など代表的なものだ。具連閣下の高見によると、東京の狹い道路を改良するのは第一の急務だが、現在の如く火事を待つて道路を擴げるといふのでは間だるいから大に土地買收政策を行ふべし、それが出來ずばせめて火事にポンプを使用せずして道路改良の期を早めよといふのだ。淺草では仲店を市が有してゐることの不可をいひ、パノラマ流行と競爭の愚を論ずる。（以上は大抵當時の實狀に卽してゐる）。向島に渡つては、公園の風致保存のことで、建板の實用萬能論と眞闇世の非實用必要論との大論戰となるが、具連が快樂論で水を入れて預かりとする。

第十一回と第十二回は、この小說中でもつとも政治的氣分のこもつてゐる部分だが、第十一回では、具連閣下が政府の勢力家巴倫（男爵）雨滴殿を訪問したところ、雨滴殿は大に優待し、例によつて彼の政治上の主義を問ふ。そこで具連は昂然として喇叭吹込みの是々非々、不偏不黨論を述べ立てる。

此の具連呼太平不肖なりと雖ども五仙の乏を忝うして氣樂院の椅子を占る以上は飽までも國家の爲に盡す心底、黨派の利害に心を奪はれ是非を誤る樣な漢では御座らぬ、今日現政府の施政に就ては十が十とも悉く敬服いたし罷在ると云ふでも無く、又民間の反對論に就ても十が十とも悉く不感心とも存じ申さぬ、夫故に苟も事の不可なるものは政府の施意たりとも是を切論いたし、說の善良なるものは民間の議論たりとも是を賛成して、不黨不偏を旨と致し何れの黨にも屬せず中立して國家の爲にするが始終の目的、尤も政治の大體に關して聊か平生より抱きたる主義なきに非ざれども夫は開場の上で實際問題に當選て發表すべき譯なれば唯今閣下に對して是々と豫言いたすは無益

と存じ敢て喋々仕らぬ（第十一回）

雨滴殿は「萬事御任せ」とあるところへこんな迷論を並べ立てられて一寸當が外れたが、そこが老猾家だから、大に具連の心がけを賞し、さて搦手から具連の民間黨加入を止めようと政黨論を始める。

原來政黨と云ふものは憲法の範圍内に於て運動し相互の主義や目的には差異が有るに拘らず、國家の安寧を保ち社會の秩序を守ると云ふ要點は大切に心得ねば成らぬものじや、其心得ある正統の政黨に對しては政府は適當の保護を與へ保護を加へて有る、新聞紙條例を改正して發論の自由を與へ集會條例を改正して政談結社の自由を與へたるは貴紳も承知の事であらうがナ、夫ゆゑ安寧秩序を擾亂せざる言論運動は何程あつても宜しいが、今日民間の政治を論ずる連中の間には動もすれば政黨の本分を離れて右に述たる如く國家の安寧と社會の秩序を擾亂せんと欲する輩が有るじや……イヤサ貴紳は未だ氣が附まいが、往々共黨が有るに困るじや……是等は卽ち佛國の共產黨獨逸の社會黨露國の虛無黨と一般……此の害物に法律と威力とを以て國家の爲に鎭壓して其痕跡を斷て仕舞はねば安心が出來ぬ……若も此の社會黨イヤ破潰黨の分子が耆院に混入するか但しは耆員先生たちが此の破潰黨の論を誤て輿論と取違へて主張する樣な事が有たら貴紳は其利害は如何計で有ると思はるゝ歟……若し誤て其破潰論が多數を占むる如き事が萬々一にも有ときは、是に隨はんか國家社會は忽に其禍を蒙るべし耆院を幾度にても解散せんか人民の權を如何せん、と云ふ場合に陷るじや無いか

こゝで具連雨滴の問答となり、雨滴がそれとなく具連に我が味方になることをすゝめる。――

余成ほど至極御尤の御心配で御座るが、然らば社會黨イヤ破潰黨の分子を掃攘し盡しては如何です雨是れ實に我心を得たり、此の分子を政治界より驅盡すに非ずんば眞正の政黨も起らず純然たる輿論も顯はれぬものである、畢竟は今日一身衣食の計に窮して居る貧乏書生輩が此社會黨の勢力を成に由て之を退治するには政府と耆院が協力同心

せねば行はれぬじや余夫では貧乏書生は皆破潰黨と認める譯で御座るか雨イヤ〳〵、ソウ單純に斷定は出來ぬ、富貴にも破潰主義があり貧賤にも純粹主義があるに由て余然らば堂して夫を識別しませうか雨ソコが政治家の活眼を要する所じやテ余シテ又輿論の內にも破潰論が有る時には雨ソレも識別する活眼が入用じや余その活眼は堂して出來ませう雨急に出來る譯には往ぬが、貴顯たちがかう僕等に接する度を重ねると自から其活眼を開く樣になるものじや哩（ワイ）（第十一回）

次に（第十二回）具達は民間政治の巨擘たる神鳴轟殿に會つて御高見を伺はさせられる。曰く破潰論撲滅は政治論ではない、國家論だ。主義上は國民たる者は誰でも贊成する。然しその破潰論とは何か、何をもつて破潰論といふかが問題でたゞ自分に反對するからといふだけでは理由にならぬ。こゝは雨滴の破潰論排斥、政黨攻擊は注意して聞かなくてはならぬ。さて神鳴殿は雄辯を揮つて、具達の不偏不黨主義の維持すべからざる所以を論じ立てる。

其次に不黨不偏と言はるゝが貴君が政治海の外に在るならば不黨不偏が保て樣が既に其身を政治壇上に置く以上は恐らく保てまいと思はるゝ、例（たとへば）、兵備案は政府の原案が氣に入つたから是に同意する、會計案は改進黨の修正案に同意する、外交策は自由黨の說が適當だから同意し樣と其時々で出た所勝負を極るも宜らうが、ソウする時には御自分の持說を立る事は始終出來ませぬぞ、夫位ならば寧ろ多數の方に御同意仕ると初ツから打出した方が世話が無からうぜ、貴君ごとき有名なる政治家が眞逆提灯者員では相濟ますまい、然らば貴君が「我は是々の主義である故に中立するが卿（おまへ）は堂だ」と同志を集め者院にて一塊に成るときには是れ卽ち中立黨と云ふ一黨派を建るの實あればソリヤ不黨不偏と云ふ事は行はれ無く成るで御座らう……政府とても其通り、黨派の外に超然たらんと望まるゝは至極この上も無い結構な事だけれど、實地に於ては遂に超然黨と云ふ一黨が自然と出來は仕まいかと思はるゝに是等は其時に成て實地に當つて見なければ御同樣に判然たる事は分らぬもので御座る……全體黨派と云ふものが自然

の勢に依て成るものだから、勢の未だ至らざる時には組織し樣と云つても出來ぬもの、又勢ひが至れば禁示しても出來るものゆゑ開場の日に於て其現場に當らねば局外中立も超然端立も行はれるか行はれぬか僕は保證いたし申さぬヨ……今日ハ政府と同論でも場合に由て分離せねば成らぬ事も出來る、又只今こそ政府と反對なれ事機に應じては同意せねば叶はざる時もあらうに由て、迚も〱前定は致し惡いが、貴君、主義は慥かにお極め置なさらんでは耆院に於て勢力を有する事が難う御座るで……（第十二回）

これには具連も成る程と思ふ。さうして神鳴に貴君程の大人物が、事毎に政府に追隨する必要はあるまいと說かれ、暗に民間黨に加擔してくれと謎をかけられ、うつかりこれに乘りかけるが、例の卜筮の卦を思ひ出して止めて、やはりもとの不偏不黨主義に還る。さうして政治家とは成るべく近寄らず東京見學に專心することゝする。

見學は各方面に及ぶが、第一は俳優論及び演劇改良論だ（これが當時文學藝術關係者のみでなく、朝野の紳士の一大問題であつたことはいふまでもないところだ）一夕具連が芝居見物からの歸途ある料亭に俳優を招くと、藝妓等は俳優ばかりチヤホヤして、具連の取卷達は一向もてぬので、中腹の眞間世が演劇改良論（史實と人情に叶ひ、道德的教訓あるを最上とするといふ）を始め、暗に俳優連を苛める。それから發展して藝妓私娼論對非娼論となり、廢娼論の花を咲かせる（これも亦社會風敎上の大問題として當時のやかましい問題だつた）。

この間にも耆會出席の支度はつゞけ、顧問を集めて、耆會の問題となるべきことを討究する。第一が憲法論、此の頃殊に問題になつてゐたのは、第六十七條の既定歲出の問題だ。これは議院の豫算議定權に大關係があるといふので各新聞や議員の間で難しい問題となつてゐた。政府は補則を出して說明したが、それでも異論が靜まらぬ。開會の曉には當然大議論を發生すべきものとして、今から研究して置かなくてはならぬ。然るに具連閣下は、顧問の忠言を散散聞いた後で、平然として、法律で定つてゐるものなら定つたまゝの方が面倒がなくていゝぢやないか云々。流石の

顧問も折角開ける議會政治を無視した具連の意見には啞然とする。次に仙居(選擧)訴訟の問題、これについても態度を決する要あるが、これは耆員の神聖、皇國の恥辱だから不問に附されぬとなつた。第三は、これも當時議會開會を前にして大分問題になつた(が遂に實現しなかつた)政黨大合同の問題、これは容易に實現出來る問題ではないにせよ、大合同を遂げないと國政運行上、政黨分立は有害無益だといふ說を出す。第四は上院と政黨の問題、今第三にいふ政黨大合同は、直接には此の年七月集會及政社法の發布となつて起つた問題であるが(政社同志間の連絡を許されぬので)、これの容易に實行されぬ以上(事實上改進黨に解黨の異議があつて實現しなかつた)、下院が政黨分立となるは明白だ。然るに下院と上院とは或る程度まで聲息が通じてゐるので、下院の分立が上院の分立となる、然し上院が政黨分立となり下院と同じになると國家の利害を如何といふことになる。そこで世界を例にして(英米は上院政黨、佛獨は上院非政黨)三顧問及び朽程出來内が討議する。眞間世、利手は上院政黨化贊成、建板、朽程は不贊成論。そこで具連は折衷論を出す、曰く、上院に政黨あるは可、然しそれは上院だけのものとし、下院や民權と連絡は保つべからず、又行政官に對しても同樣の關係を持し、同輩との交通以外は一切遮斷とすべし、かくせば民間政黨にも卷込まれず、政府より抱込まるゝ心配もなく、上院は上院だけで太平無事安心してゐられる云々。つまり政府と下院と戰はせ、高見の見物的態度をとることを理想としてゐるものである。

こゝで櫻痴は又例のいたづら氣分、ふざけ氣分を出す。それは謠曲官話論といふので、つまり上院下院ともに各地方の人士が集まるので、議會は必ずや各地方言の展覽會の觀を呈するであらう、依つて議場ではさういふ意志の疏通を缺く方言をやめ、謠曲を用語とすべしといふのだ。そしてその見本として具連が謠曲調で、「諸藝再興の建議」を演說する可笑味がいろいろある。

さうかと思ふと又第十九回「全國經濟」の如き成る程と首肯させるものもある。

此の年は春に長雨があり、夏には水害が續き、具連も貧民救助に三十石の米を出した程だが、その結果商賣不景氣、金融逼迫、株劵下落、米麥不作となつて、政治家連の豫言は皆噓となつた。國會が開けると、租税は減るし、兵には出ぬ、米や金はお上から下さる、何一つ不自由なことがなくなる。これが自由の有り難さだと宣傳した。そこで國會が出來たから、お前達のお說敎通りにしてくれといふので、選擧區から豫言實現促進の總代が出て來たといふのも尤もだ（これは皮肉）。然し米麥の不作は天災だ、いくら國會が開けても天災は何時起らぬと限らぬ。國會が開けると、租税は重くなつても輕くはならぬ。株の下落も、損をあきらめると、思つた程は下落せぬ。さうして金は政府がドシドシ貸さなければならぬ。先づ全國の經濟を盛んにするには、外國に輸出するものを盛んに輸出するが第一である。輸出が盛んにならぬと全國の經濟は樂にはならぬといふのである。

次の第二十回に至つて「白柄子再興の議」といふので、又々皮肉な惡戲氣分を存分發揮する。こゝでは、櫻痴の花柳方面の知識が十分利用されてゐることはいふまでもなからう。それだけに讀むと破顏させるところが多いが、だが吾等の研究の目的からいへば、輕々にパスして然るべき一章だ。花柳界改良のため、大に遊んでその知識を得ようとするが、公娼も私娼も極端に墮落してゐることが分かるので、いよいよ改良の議を出すに決し、白拍子再興の案となる。卽ちその要旨は、藝妓は昔の白拍子の如く容易く貞操を賣つてはならぬ、先づ勅任以上、紳士以上だけに賣るやうにするといふのだ。さうすると藝妓社會の改良になるは勿論、自然風俗矯正且つ社會進步の一助となるといふ。當時の官公吏、紳商等の汚習の一面を暴露したものとして實感が出てゐる。

第二十一回は「投機の研究」といふ。これも直接政治界に關係がないが、當時の經濟社會の反映としては、一顧の價値なしとしない。具連の手代共は、初め主人の金を少しづゝ投機相場に注ぎ込んで損をしてゐたが、やがてそれが分つたとき、具連は手代共の失敗を怒ると共に、その埋合せに自分で乘り出すことになつた。それも、一つは當時の

經濟社會の空氣が專ら投機中心に動いて居り、歐米流のブールス設立の可否論が盛に議論されてゐた頃のこととて、投機なるものも經濟上必要かも知れぬから、一つ自ら研究してみようといふ、議員學修行に厚い心掛の現れであつた。具連は投機社會に首を入れて見ると、投機は相場師ばかりの獨擅場と思つたら大違ひで、銀行、會社、紳商、富豪、皆これに手を染めぬのはない。堅實な發達を望まれてゐる新興日本の實業社會は、實に投機中心の伏魔殿であつた。それで、具連は所謂好い鴨あつかひにされて、老猾な投機商人に好い樣に引き廻はされる。或る時は儲け或る時は損するが、兎に角計算すると、損の方が多い、それで具連は、一擧に手代どもの損と自分の損を取り返さうと、大口を試みて、大敗を蒙る。そこで具連は、投機の恐ろしさ、その弊害をつくづく味はつて、身ぶるひする。

これ以後は、每回社會諷刺、乃至裏面的暴露として、それぞれ面白いものであるが、政治小說と目すべき分子が少ないので、以下數回はたゞ要領を掲げて、この作を終ることにしよう。

第二十二回は分離論の可否といひ、神佛の爭ひ、及び神社と神教との分離の問題をのべたもの、第二十三回は「迷惑なる案內」、舊藩主〇〇侯から向島別邸の茶會案內を受け、具連が大閉口すること、但しこの茶會は後で藝妓のお酌で大騷ぎする趣向があるところに、當時の流行を諷してゐる。第二十四回は實地の傳習、具連が茶會に出るため、臨時に宗匠を賴んで茶湯の式の稽古をして大汗をかきつゝある。勿論當時の紳商間の下らぬ流行を諷したものと見て可い。第二十五回茶人の虛飾、〇〇侯の家令からの內密の依賴、茶の手前の下手なのを大褒めにほめてくれといふこと、破格だが主人に正客を讓つてくれといふことなど、似而非茶人同士の間の馬鹿々々しさが種々素破拔いてある。第二十六回、これは「茶番の拘引」といふので、可笑さではこの作中一二といふところであらう。茶會の窮窟なのを慰めるため、三囲神社のところで、吉野靜を茶番でやつたところ、見物も多く大受けに受けた。具連も家來も大得意でゐると、意外にも主從ともに警察に召喚される。具連は、最初は何かの間違ひと思つて、議員風を示して憤然と怒るが、

よく聞いて、屋外無斷集會の咎だと分かり、グニヤリとなつて、あはてゝ辯護士を賴んでやつと善後策をする。

これから以後、具運には東京は恐ろしい所とばかり思はれて、一向面白くなくなる。そこで第二十七回「歸去來」となつて終る。七十日の東京滯在で得たところは、株の大損、故鄕の風水害、藝妓の悶着、妾の駈落、ぐらゐが落ちだ。流石の具運も思案屈托してゐると、柳橋の大たかといふ婆さん藝妓が來て、何もかも詮めて早く歸鄕するのが第一だと忠告するので、具運も思ひ切つてみ腰を擧げる。これで此の作は終るのである。

小說技巧の點は、例によつて別に論じないが、內容に至つては、顏が廣い well informed の櫻癡のことだから當然種々な見聞を排して書いたものに違ひなく、夢中の空想に托してはゐるが、實は、種子のある痛い皮肉が多かつたらう。

尙ほ、以上、櫻癡の一作每に可成り詳しく回を逐うて語つて來たので、或る人々には倦怠の感を與へぬでもなかつたらうと思ふが、然し櫻癡の小說は、事實上、隨筆的諷刺に小說の皮衣を被せたゞけのものであるから、私自身の紹介や研究の仕方も、自然隨筆的にならざるを得ない。但し此の調子で終りまで進むと、櫻癡の分だけでも五百枚以上を要する恐れがあるから、その邊は多少の手心を加へ、政治小說的分子の少ない作品の記述は、成る可く簡略にして往かうと思ふ。

その點は諒承して頂きたい。

『世態人情陰陽大和錦』

「世態人情」と角書きしてあるので察しがつくが、この小說はいはゞ當時の日本の社會の表裏を諷したもので、必ず

しも政治小說といふ程のものではないが、その諷するところの世態人情が矢張り政治に關係があるので、全然政治小說とは無緣といふのでもない。先づ消極的暴露的な政治小說と見て置くのが無事かも知れない。

そこでこの小說を政治小說として見て何處が主眼となるかといへば、官僚と政商の關係、議會政治の出現が此の兩者の關係に及ぼす影響、官僚と政商とブローカアと藝妓と四重に入り組んだ盤根錯節の暴露等、いはば官僚政治の裏面史とも、間接の政府攻擊史ともいふべきものであるといへよう。

筋立は極く簡單であるが、此の小說の、殊に政治小說として見るときの寓意の大半は人物同志の關係にあるので、先づ登場人物を解說してその如何なる人物かを一通り呑み込んで置いていたゞかなくてはならぬ。

先づ官僚の方から掲げよう。

〇兆朴殿（又は大臣）鹿兒島出身の大官、爵位は書いてないが、何れ伯とか子とかいふのであらう。

〇干鰛伯　これも現大官

本文に曰く、中國邊の御出生にて今年三十八歲（中略）此干鰛どのは婦人に掛ては一際勝れたる大英雄にて云々

（第二十一回）

〇音沙汰殿　現大官

〇浦安良殿　現大官

〇福富殿　前大官で非常の權力家たりし人物

現大官とある人々も、此の小說中でやがて閑散の前官となる。時代は丁度二十三年頃と見るべく、國會開設直前と見て可い。この數人は官僚として同僚である上に、それぞれ次の政商の何人かを通して利害の連絡がある。

次に政商はといへば、——

○狼物四郎

本文に曰く、「其生れは飛驒の高山とも云ひ又は上州沼田在とも云ひ出生の地も判然ならず尤も十六七の時に江戸に來り夫より諸方をウロ附歩行てお戸前をも度々潛黨丸船も腰に附た事のある苦勞人十年程以前から甘く山が當て〳〵爲こと成こと外さぬ所より俄に世間で名を知れ唯今では通り町に本店を構え住居やら別莊やら五六ヶ所も持て居る流行の紳士なり」（第二回）、狼は何れかといへば批杓殿に最も接近してゐる。

○熊鷹長者

本文に曰く「此熊鷹と云ふ紳士は元來どこの馬の骨だか牛の骨だか當人は舊藩の頃より士族に列したる鄕士とは申せども實は出所不定の魔性のもの二十年ほど以來から情實どのと申す權威に深く取入り其お蔭で何百萬と云ふ身代になり今では熊鷹長者と尊ばれ既に其長女おけち（十五）に嫁せて別家させんとて子供の時から貰ひ置たる養子の甘太郎と云ふは內實かの情實どのゝ隱シ子なりとぞ、斯る緣邊より情實どのとは密着の中と成り此殿が閑散になられたる後とても今日まで緣に緣を引て中々拔目なく立廻る紳士なり云々」（第十回）、熊鷹は赤沙汰に最も取入つてゐる。

○河居惣太

本文に曰く「河居惣夫（三十五）は中國生なるべし一時は諸方の用達をして派手を賣つたが今では文無商人云云」（第十回）

又曰く「爾來この惣太は普通の教育も一通り受たる上に英語は外國人の許にて學び東京の商法學校にも入て卒業せし漢なれば若年ながらも外國品の取引は差支なく功者に出來て末頼しき商人かなと京濱の間に於ても評判の人なりしが、明治十四五年の頃より紳商の附會をなし自から社會の有樣をも實驗し殊に經濟の事を好みて論じたる

に到底銀貨と紙幣と同じ價の通用に相成らねば日本の經濟も立ず商業も盛に成ぬは知たこと政府にても理財の目的は此に在りと信じたるものから大利益を占るには相場の高い銀貨を賣て廉い紙幣を買て置に限る日歩を拂つても終ひには莫大の利が有は必定なりと見据を附て專ら洋銀相場に從事して初の程は利益を得たりしが朝鮮の暴動一件の爲に俄に銀貨の價が昂騰つたる爲に情なや惣太の身代は皆その爲に大半摺潰したりければ此上は詮方なしと横濱を立退き十八年の暮に東京に來りて何かの商賣に關係しては居ども復前日の俤も無く零落商人とぞ成にける。」（第二十六回）河合は干鰮にも好く、淺矢良にも好い。

（註）第十回では河居を中國邊の者といつてゐるが、二十五回から二十六回へかけての詳しい記事では近江の人間となつてゐる。

主な政商はこの三人であるが、事實は狼と熊鷹の二人で、河居は先づロボットの形である。これ等政商も、官僚と同じく、何れははつきりしたモデルがあり、事情に通じた人が見たらほゞ首肯されるやうに描けてゐるのであらうが、今日の吾等からは、先づ誰が誰やら見當がつかないといつて置いた方が可い。

此の官僚と政商の間に介在して、時には爪牙となり、時には犬馬の勞を執り、時には幇間の役をつとめるブローカア的存在がある。それは——

○早房利彥

本文に曰く「早房利彥と申すは中國邊の士族にて一ころ世に時めきたる役柄をも勤めしが六年前に非職になり其非職も年限が切て今では前非職の風采どの、併し根が才氣の廻る質なれば官民調和の實行策と出掛て如才なく立廻り前にも勝る程の暮しで押切て行く働ものと知り玉へ」（第二回）。

○猾谷三百郎

本文に曰く「法律家」一（第二回）、又曰く「狎合三百郎（三十四）は四國邊の生と云ふこと、其妻は赤沙汰どのゝ妹で有たゆゑ此緣で甘く立廻つたが惜かな去年この大切なる妻が死なつて木から落た猿、しかし里に遣つてある一子の三太郎（三）が赤沙汰の甥に當れば是が大事の電信の線なり」（第十回）。

右の內、早房は主として狼方、狎合は熊鷹方の手先乃至連絡係として奔走する。然し損得次第でわざと逆になることもある。

此の外に注意すべきは、以上三者の女性を介しての相互關係である。一般的なものは別として、芋蔓式なところを一寸示すと、——

○早房の妻おのり

本文に曰く「元は新橋にて某と云はれたる白拍子此節批杓どのゝ外妾となつて居るおとび（十九）が新橋に居た時に此おのりの抱えであつた、是が早房が批杓に取入て內幕の參謀になつたる因緣」（第十回）

○狎合べん子

これは狎合三百郎の妹である、本文に曰く「某の學校の女敎士で批杓の令孃たけ子（十四）は此者の弟子」（第十回）、その他狎合の亡妻が赤沙汰の妹女たことは前述の通り。

○河合の妻おでれ

本文に曰く、「濱矢良どの權妻おうゑ（二十）の實の姉で柳橋に姉妹で出て居たとのこと」（第十回）

○河居の愛妓おづる（二十四）

本文に曰く「干鯿どのがうつゝを抜して御座る白拍子小しやく（十七）の姉」（第十回）

此等の女性關係が、いざといふ時にはそれぞれ利害關係に生きて働くことになるのである。

以上で登場人物の解說と、相互の人的關係が大體呑み込めたものとして、さて、この小說に說かれた官僚對政商の魂膽驅引を說くことにしよう。

此の魂膽は大體二つに分れる、狼側の計畫と熊鷹中心の計畫である。先づ狼側の計畫といふのは、狼が早房を介して批杓を動かし、殖産興業の大國益といふ觸込みで、日本玩具の世界的輸出を實現するために、製造資本五十萬圓の拜借と、對外輸出玩具の一手專賣の件を願ふ。狼側では、これを實現するため早房を使つて、批杓に女を世話したり、御馳走をしたり、拜借金の幾分を獻上するとほのめかしたり、種々の醜陋な取引が實行され約束される。事實は國家の金を五十萬圓タヾでいたゞかうといふ腹で、日本の國力增進とか殖産興業とかいふことは、表面の口實たるに過ぎない、批杓もそれは十分知つてゐて、殖産とか國家の爲めとかいふことを勿體らしく理由にして、狼の願ひの趣意を貫徹させてやらうとかゝる。

一方の熊鷹はといへば、これは、濱矢良と赤沙汰を抱き込み、質のいゝ鑛山乘取りを策してゐる。つまり有望な他人名儀の鑛山を、その所有主には何とか難癖をつけて採掘を許させず、熊鷹一味にたら採掘を許すと、いふことにしようといふのである。これも第一理由は國益增進である。兩人は元來が友人だから協同すべきのに、利益にかけては目のない連中だから、獨占に血眼になつて、こそこそ隠れて運動してゐる。然し批杓も赤沙汰も一つ穴の狢だから自然互ひの計畫が知れ、止むなく協力することになる。ところがいざ許可が出るとなつて、中心人物の干鍋どのが大變な條件をいひ出した、それは、許可はすぐにも出してやるが、その代り河居を事業の主任にせよといふ。つまり河居を頭由の會社の社長にせよといふのである。これは、上記の人的關係から、意氣銷沈の河居を助けるといふ殊勝な心もあるにはあるが、それだけでない、熊鷹、狼等の裏を掻いて、干鍋と河居の懐中に利益を多く運ばうといふ心算から出てゐる。熊鷹、狼も薄々その邊のことは感づいてゐるが、河居が、好人物型の人間なので、何とでもゴマかせる

と思つて、承知する。かうして鑛山會社、本文にいふ「高山會社」が成立する。干鍋、熊鷹、狼にいはせると、勿論この會社を作るのも、皆、愛國の爲め、國家の爲め、國益の爲め、といふことになつてゐる。而かも熊鷹と狼の二人は、陰でかう心事を露き出してゐるのだから面白い。

（前略）狼「何分よろしく、是じや御同様に少しは運が向いて來た様だ。熊「僕こそ少しだが君は中々少し所じや無い哩、これ迄に餘程儲け込でるぜ　狼「併し今の内に儲け込で置なくちやア儲かる時は無いぜ　熊「實に君の名言通り、世間は一雨々々に不景氣に成て來る、理屈ばつかり高じて何か少し廉立た事でもあると直に正議だの公論だのと訐き立て邪魔をする世の中だもの迚も十四五年前の様な甘い事はモウ有りや仕ないサ　狼「だがまだ〳〵今の内だ　熊「大にそうだ其氣で遣らうョ、なんの、君、少し位世間で悪く言れても構ふものか思ひ切て遣玉へ　狼「勿論さ面白くも無い御託宣を承つて常でも手柄咄しのお手前味噌おのれ一人で天下を治めた様な自慢をヘイ〳〵と受て居て　熊「其上に君、かの淀君が横柄な顏をして貴婦人と自稱して、西洋服の家鴨尻、我々を見て家來同様に取扱ふを我慢して居るもの　狼「其代になる丈の御利益を見なくつては間尺に合はないワサ云々（第六囘）

かうして一方で結托して利益をつかみ合ひながら、他方では別な儲口のためにいがみ合ふのが始終だ。例へば、組合商法の石炭の一件で、熊鷹、狼の二人は突然喧嘩を始める。それは、熊鷹が約束した利益分配を實行しないからといふ理由からだ。さうして今度は、いつもと違つて、熊鷹の代人が早房、狼の代人が狎合、といふことになつてゐるのが面白い。代人同志は勿論利の爲めに動いてゐるので、本來は何方が勝うとも好いのだから、八百長は勿論だが、たゞ自家の勞力を大きく見せる爲めに、聲を大きくして騷ぐ。これを聞いた干鍋その他は、これ又慾心から仲裁に入り、無理押へに押へつけてしまふ。

かゝるうちにも喜劇の一幕といふのは、情實を始め、新に閑散の前官となつた北杓、干鍋等の政黨組織運動であ

る。これに對する政商連の態度は、當時の大ブルジョアジイの對政治態度を如實に語つたものとして、頗る興味あるものといはなくてはならぬ。

前大官連の政黨運動に乘り出す動機は如何。それは、此の一派の前大官連の頭領ともいふべき「情實どの」たる一人の口を藉りて次の如く述べられてゐる。これはいさゝか長文句であるが、この小說の所謂「ヤマ」の一つであると共に、當時（二十二三年）の政界一部の實寫でもあるから、長文句をそのまゝ掲げることにしよう。

（前略）扨今日の形勢は別段演說いたす迄も無く各々方にも定めて承知の事であらう奇簇集耆兩院の仙居も既に相濟み十一月の開院とても最はや僅の日合なれば數ヶ月以來人心大に一變いたし苟も少しく政治の思想を懷くものは耆院の黎明には俄たる狂言や出來べきと案じて居るは當然の理想と申すもの。尤も自由改進の兩黨が一纏めに成て一大政黨を結構るに於ては無論に多數を下院に占る譯なれど是迄の往掛より見れば恐らく一大團結は言ふべくして行はれずで名稱はどう變らうとも實地の所は是に保守の一黨あつて耆院には此の三黨が鼎立して互に勝敗を爭ふで有う。但し無主義の中立連中は政府に味方の向ならんと臆測する說も世上に有が私しが察する所では恐らくサウでは無く大抵は此の三黨の內に加入するで有うと思はるゝ。斯うして見ると下院には政府味方の黨なしと云ふものじやが固より政府は初めより超然として政黨の外に立ち、不可たれば何黨の說たりとも是を聽かず可たれば何派の論たりとも是を容るゝと云ふ公平不黨の主義を守り內閣の眼中には政治黨派なければ敵味方も無しと云ふマア立派なる見識ゆゑ敢て味方を求むるに及ばぬ政略たること判然なりじや。先づ其通りで有ると仕た處でイザ實際と云ふ場合に至て昔どと／＼內閣が耆院の決議の如く諾々と承知をしては或は肝腎なる一定の政略を行ふ事に差支やうし去とて不認可／＼が打續いては耆院との折合が附かず、夫では解散を斷行すると云ふ時に成とドウ時候が一變しやうも知れぬもの。

これは、議院政治が、看板を超政黨政治としても、結局は政黨政治にたらなくてはならぬ理を説て、今後の政治は政黨中心となることを仄めかしたもので、いはゞ總論である。自由改進云々三黨鼎立云々は當時（二十三年八九月の交）の政界の實狀と見て可い。

　勿論貴院内閣に成うが帝室内閣に成うが政府と貴院の間が圓滑で有うが無らうが我關せず焉商賈の掛引を甘く遣て拔目なく金儲さえすりや我事畢る矣と云ふが各々方唯一の目的ゆゑ政治上の關係を避るに汲々たるは是以て尤もの次第私しとても昨今では同樣の地位じやが、篤と考へて見られたい、果して其通りに行はれ樣か、私しは恐らく行はれずして政治上の變事ある毎に先づ第一に其祟を蒙るものは卽ち諸君の如き紳士紳商なりと憂るじや。

今後は、紳士紳商も政治に無關係ではゐられなくなる、卽ち例を引いていへば――

是が英國佛國獨逸米國の如き社會上商業上の秩序が儼然と立て居る國柄ならば假に內閣が毎月一度づゝ更迭しても紳士紳商は平氣の平左衛門の尉銈面不知顏の半兵衛の太夫源の澄で居られるが殘念なるかな口惜かな我國には未だ其秩序の基礎が商業の上に固く無から其更迭ある毎に折角これまで骨を折て手に入た仕事も明日は忽に他人の物と相成り憂しと見し世ぞ今は戀しきと云ふ苦界に陷り痛しや身は罪障の絆に引かれ造りし罪の重くして浮ばれぬこそ遺憾なやと嘆く樣な目に遇は必定と覺悟をせねば相成るまい。

卽ち何うしても政治に引込まれるとすると、政治の動搖が卽ち自家の利益に直に影響して來る。政治の動搖は構はぬが、そのため自家の利益を失ふのは大變である。要は自力で自家の利益を保護するより仕方はない。

と言つて私しは各方を引連て政府のお味方に馳參らんと云ふでは無いぜ、堂々たる帝國政府の內閣に椅子を占たまふ諸公が何の我々如き廢物を賴みにお仕なさらうや、又我々も一旦議論が合ずに引込だ身が今更何の利益有てお味方に附べきや、今日憂ふる所は政府の事では無くて我々の身の上我々の利益を失ふては大變だと憂ふるが卽ち「文

明の人民は自己の金力と自己の才力とを以て自己の利己を保護する」と云ふ獨立の精神上より來のが大眼目じや。然るに紳商連の中には、政黨政治にたつても從來の態度で、風向と日和のまにまに相手をかへて儲口を探さうといふ精神の者もあるといふが、それは事實上不可能である。

是の如き事情あるの今日に當つて各方は此の危急存亡の場合に臨で堂しやうと思はるゝか、此程チラリと道路の說で聞いたには「ナニ構う事は無い甲黨が政治世界に勝を占めたら甲黨に取入て旨い儲口を探さう乙黨が勝たら乙黨のお將の塵を拂ふてペテ込まう臨機應變猫の眼隧或は紫陽花七面鳥三面の所作や七變化義理も胡瓜のかわるが當世三十六計熘るを以て第一とする覺悟で有る」と云ふ了見だと云ふ事だが向ふにも荒神さまの有る國ゆゑサウは問屋で卸すまいぞ、良んば夫が行はれても先方の熱を承つて氣兼苦勞をするも大變風袋にばかり物が掛つて差引て見りや骨折損の草臥儲けコンナ事なら手を出さねば宜かつたと後悔する事が無にしも非ずと思はるゝネ增て況や何地も同じ欲の中お萩か牡丹餅かおさつの丸揚これが否たら松魚のでんぶ熊野の鯨佐賀松茸鳴門のわかめ何でも賞玩いたすが勝と博覽會の出品では無けれども素早い奴は開場前から賣買約定濟の札を下て相應の手附を打て居るだらうぞ夫を知らずに値が出たら買うとは餘程野呂間の相場師だらう。各方が其な考へを持て居ちやア當が外れて後悔先に立たす借金元に返らずと相成るに違ひない。

これが不可能とせば、勢ひ同盟を結んで若干の政治的勢力を得、それを利用して、利益の擁護に當るより方法がない。かくて官僚側で本音を吐いて、ブルジョア側に同盟を暗示して來る。

右の如き事情切迫の今日ゆゑ我々共は我々共の利益を保護する爲に竊に同盟を結び其勢力を以て我々の利益になる樣にと貴院外より工夫を運らす積じやが各方も御同意とならば腹心を披いて此先の運動を與に仕やう、併しコリヤ人々の覺悟だから不同意の人を强て引込まうと云ふ所存は毫も是なしじや一私どもは又別に獨立して自分共の利益

を保護する」と云はるゝならば夫でも更に差支は無い詰る所が利益保護の一點が大眼目じや、尤も各方の即答を望む譯で無ければ篤と勘考の上で諾否を承はらう。

表面は相談だが、事實は强制である。多年此等前官僚によつて旨い汁を吸つて、家の子郎黨の取扱ひに甘んじて來た紳士紳商共に、今更何で反對が出來やう、といつて、思ひきつて贊成して彼等の一味と見られるのも、それが自家の利益と定まらぬ以上、出來ることではない、要は官僚もブローカアもブルジョア政商もお互ひの利益の一點にある。

かくて熊鷹、狼、早房、狎合（河合は仲間外れとある）の四人は額を集めて苦心の相談となる。こゝでは四人といふが、これは代表的の四人で、事實は此等四人の一連が、當時に於ては同樣な苦心をしたものと考へて可い。四人の中で熊鷹と狼、早房と狎合とでは立場が違ふ、然しながら「馬鹿々々しい此世の中に金儲を仕やうと思ふ者がきた切雀の書生上りお宿はドコだ下宿屋の二階と云ふ奴等と一ツに成て政黨騷ぎなんどして溜るものか」（十六回）といふ心事は同じ事である。早房と狎合は元來が政治上の關係から干鰮、情實、赤汰沙、批杓の前官一連と結びついたのだから、行き掛りからいへば、官僚連の政黨が利でも害でも眞先に入らなくてはならぬ。然し下手に政黨に面を出すと、身體に色がついて本職の周旋に差障りが出來る。狎合は政治的色彩が濃くなれば、直ちに辯護士商賣に影響する。かといつて、早房も狎合も、今こゝで情實、批杓、干鰮の連中の申出を蹴飛すと、德義の問題は超越するとしても、二人とも大切な鰭がなくなつてしまふから、今日の利害からいへば大損といふことになる。

そこで、四人は苦肉の一計を案出する。その計略に曰く、——

狼「ソコで僕が祕密の計略は此場合に臨んでは據なく苦肉の計を用ゆる積りだ、熊鷹「ムヽ苦肉の謀と云はるゝは

狼「外でも無いアノ連中がア、云出した上は迚も異見をしても思ひ止る氣遣は無し、其仲間に入ては此方又損、と云て今日唯今疎遠に成ては其も大變、ソコで三方四方の納りを善しやうと云ふには「我々は迚も政治上の運動の出

來る人物で御座らぬに由て名前を出すのはお斷りで御座る」と立派に胸壁を築て尻火の來ない樣に防ぎをして置て「其代りに御趣意は至極結構御贊成申上ます其證據として運動費の算用金はきつと引受ませう及ばず乍ら兩人の手で三萬や五萬は何時でも御沙汰次第で內々にて差出しませう」と云て出すサ、三萬五萬は大金なれど身代には替られぬから盜的に逢たと明らめて仕方が無いが出すと極めやう、夫から甲房狎合の兩君は「イヤ〳〵我々は加入いたす進退を閣下と共に仕つる」と態々僕たちと議論の合ぬ振をして大威張に威張て連判帳に血判して置て扨と云ふ時には「其議論は僕よりも誰々が宜しい」と工合よく外の飛上りものに背負せて成たけ世間に目を附されぬ樣にするが專一、ソウさへ仕て居りやア彼連中が起ても轉でも此方にやア異なしで濟むじやア無いか　熊鷹「天ぱれ名策甲房狎合」夫に據て彼等を瞞着する事に取掛らう（第十六回「巧に外したり政黨の仲間入」）

政治的小說的にいへば、此の官僚對紳商の駈引、腹藝の一段がヤマといふべく、兩者の心事を穿つて實に面白い、多年兩者の裏面を知り拔いてゐる櫻癡が、その知識の眞の片端を示したものであらうが、後段紳商の心理を暴露したところは、殊に讀む者の頤を解く。

この政黨運動は、櫻癡が座興的に筆の先から生み出した空中樓閣であるか、それとも何等かの根據があるのか。第一にこの小說の性質は、暴露的諷刺小說であり、その性質上、內容が全然空想的創作であることを許さない。櫻癡のこの種の小說がいつでもさうであるやうに、この小說も、作中の出來事は、少くとも實有の出來事で、それを小說的に案排したものと見なくてはならぬ。さうすると、此の官僚及び政商等の政黨運動の一段も、これに似た出來事があつて、然る後櫻癡はこれを小說化したものと見なくてはならぬ。そこで問題は、櫻癡が種子に使つた實際の出來事とは何かといふことになるが、これは、あれこれと探究するまでもない、當時、議會開設間近かに、前大官が中心になつて官僚や紳士紳商を打つて一團として試みた政黨運動といふのは、明治二十一年から二年へかけて政治社會の注目

を惹いた所謂自治黨の運動しかないのである。

自治黨運動の中心人物は、當時の官僚大立物の一人井上馨である。井上を中心に、野村靖、青木周藏、小松原英太郎等の官僚、澁澤榮一、益田孝、原六郎、藤田傳三郎等の紳商が古澤滋、齋藤修一郎、有松英義、高梨哲四郎等の中間的存在を動かしてブルジョアの政界專制に乘り出さうと試みたものがこの自治黨運動なのである。尤も自治黨といふのは假稱で、當面の團體は自治制研究會といふ。明治二十一年十月井上、澁澤等の首唱の下に創立されたものであるが、表面の仕事は、ドイツ人モッセ、又はラートゲンを招聘して自治制（同年四月初めて地方自治制が施行された）の講義を聽くといふことであるが、井上の意は、經濟立國にあり、都市地方ブルジョアジイをして國家負擔の志を起させ、これによつて新興日本の經濟的發展の基礎を送るにあり、その前提としてブルジョア發展の自由を認可する意味での自治制に力瘤を入れたわけであるから、研究會とはいひ條、單なる學術講究の如き殊勝なものではなく、多分に政治社會乘出しの意味を含んだものであつた。それで、ジャーナリズムは井上の周圍の青木が漫然使用した自治黨といふ語を固有名詞として用ひ、この一派の運動を自治黨運動といふことにした。その顚末は、簡略ながら『世外井上公傳』の第四卷第一章第四節に纏つた記事が見える。この運動は、井上當初の意氣込みに反し、ブルジョア連、殊に、紳士連が表面の態度の熱心なのに似ず、裏面では本氣に井上の運動を助ける熱を缺いてゐたので、政黨運動としては議會開設前に終末となつてしまつたが、今この運動の消長を、櫻痴の小說のこの一段に當て嵌めて考へてみると、そこに何やら首肯出來るものがあるではないか。井上を情實どのとし、青木、野村を批杓どの、干鰡どのとし、熊鷹狼を、益田、澁澤の連中とし、古澤高梨の類を、早房、狎合のモデルとして見ると、自治黨裏面の魂膽が手に取る如く映つて來る。恐らく櫻痴は、この一段で、この井上中心の自治黨運動のことを諷したのに違ひなからう。

かくて、政黨運動の仲間入りは巧みに遂らせることは出來たものゝ、その後はさう結構なことはなく、例の熊鷹が

中心になつてゐる鑛山は、持主から無理強ひに買ひ取つて、鑛山會社を作つたまでは好かつたが、間もなく、事實は廢坑同樣の掘りカス鑛山と分て大狼狽をしたが、今更何うにも出來ず、結局、濱矢良、熊鷹、狼等の大損となる、その上、狼が主として運動してゐた日本玩具一手輸出、資本五十萬圓拜借の件も、いよいよといふ段になつて、お上から罷成らぬとなつた上、今迄借してある官金も即時上納をよといふ絕對絕命。さうなると、情實、批杓等の官僚達も、各〻自分の身廻りの仕末に急がしいから、他人の方まで構つて居れぬ。結局、熊鷹、狼等は表面的には身代限りとなる。

此の一段は、政黨運動など、前段の諸事件と違ひ、事實に即したものではなく、恐らく豫言的なもので、議會政治ともなれば、恐らく情實因緣の紳商等はかういふ末路を見なくてはなるまいぞといふ寓意があると思ふ。たゞ同じ紳商中河居惣太のみは、近年不景氣の故をもつて熊鷹、狼等から、暗に敬遠されてゐたが、意外にも莫大な叔父の財產を相續したので、早く熊鷹一派との事業關係を淸算し、その厄運を免れて、熊鷹等が倒產して後も、一人繁昌することが出來た。

こゝで櫻痴は、此の河居の閱歷といふものを長々と說き立てゝゐる（二十五、二十六回）。その內容は、櫻痴がかつて飜案して河竹默阿彌に授けた脚本『人間萬事金世中』即ちリットン卿の原作の「マニイ」（錢）と極めて似たものであるが、その內容は兎もかくとして、これを讀むと、河居惣太といふ存在は、これも熊鷹や狼の如くモデルはあるにしても、單に實在人物を小說化したといふのみではなく、熊鷹や狼が明治に入つてから出來た紳商を暗示してゐるに對し、舊日本以來のブルジョアジイを代表してゐるかのやうに思はれる。即ち河居が弗相場で損をしたのは、舊ブルジョアが實際出逢つた苦い經驗であり、又その挽回のため熊鷹や狼等と提携して仕事を始めるといふことは、舊ブルジョアが成金政商と組んで、新時代の事業に乘り出す意味であり、彼等が結局成金政商達に馬鹿にされ利用される

のみであつたことがよく描かれてゐる。だが成金政商の金儲けは商人として正道に依るものではなかつたので、議會政治と共に次第に振はなくなるに反し、地道に勉强して來た舊ブルジョアジイがこゝで漸く盛り返して、新興日本の商權を、成金連中から取り返すに至つた。河居惣太の一代は、大體さういふ意味を寓されてゐるやうに思はれる。

官僚も政商も、かうまでして金儲けをしてその儲けた金を何うするかといふと、こゝに描かれた限りでいへば、共に花柳に遊び酒色に奢るといふ位ゐのものである。もつとも政商連は酒色と共に花柳遊びをやる。それは實に盛なものである。これも、當時の政商間の惡風習の一つであつたことは、種々な文獻に徵して知り得る。さうしてこの花柳遊びにつれて、花柳社會の裏面、對女性の醜關係等が、いろいろ暴露されてゐるが、これ等は櫻痴が多年花柳場裏に驅逐して得た實見實聞であらうと思ふ。中に可笑しいのは、干鰮が芳原藝妓おスリを妾とした一件、熊鷹が寵妓のお土産の子供のために五十圓取られる一件などであらう。尤もこの藝妓も、政商連からいへば肉慾滿足の具であると共に、金儲けの爲めの必要物でもあるので、その方面から、この對官僚運動が圓滑に行くことが多いのはいふまでもない。だが河童も何とか、猿も樹から落ちる類句で、案外一杯くふこともなくはない。熊鷹と狼は、慾得づくから、新橋の愛妓を引かせて、料理屋兼旅館、乃至待合を營業させる。これは、いよいよ議會開設となつた曉、議員生活にはかゝる設備が是非必要だと先見してかゝつたものである。此間に、熊鷹、狼が表面身代限りとなるや、名儀人たる彼女等は、知らぬ顏をして熊鷹、狼にお尻を向け、その旅館なり待合なりを甘々と自分のものにしたといふ。

慈善音樂會、音曲改良會など、上流社會への諷刺もあるが、それは、こゝでは一々いふ程のものではない。

『黑犬漫筆』

「貧乏神」・「智惠傳授」

黑犬の二字は合して默となる、後に出る默子云々も同じ心持の表現であらうが、物言へば唇寒し、一默に如かずとの意を示したものである。而かもかく默を題にしつゝ、比類なき饒舌を弄するところは題からして皮肉に思はれる。此の二篇以下、數篇は、社會諷刺といふべく、『陰陽大和錦』よりも更に政治的分子が稀薄である。從つて極めて簡略に說いて置く。

「貧乏神」、これは社會的諷刺として極めて痛烈なものである。舊幕以來の大ブルジョアに金多銀藏なるものあり、先祖代々聖經賢傳を禁物とし、人間の敎へを斷物として、その富を累積して來たが、銀藏一旦貧乏神の敎へに從つて聖經賢傳の訓ふるところを守り、人間の敎へを實行すると、累代の富も一朝にして無に歸したといふ話しで、貧乏神の正體は畢竟聖經賢傳、人間五常の敎へを意味する。富を得るにはこの神を遠ざけるのを第一とする。この神のいふところに從ふと、人間は立派に淸らかになり、無形の富と無上の天爵を得るが物的の富とは緣がきれてしまふ。卽ち人非人的生活をしない限り、富は得られぬといふ意味である。勿論一般的に直向富を貶下したものではない、當時の卑陋な精神の持主たるブルジョアジイに對し、インテリゲンチヤたる櫻痴の幻滅的氣持から、大痛罵を試みたるものである。

「智惠傳授」は、問合卽智齋といふ易者まがひの人物が、來客に種々の智惠を授けるといふ趣向で、その智惠を傳授される客と、卽智齋の問答の間に社會的諷刺が織り込まれる。こゝでは八回で打ち切られてあるから、その傳授さ

れる智惠は、都合左の八種になつてゐる。

第一回　青雲に上る傳授（官吏の出世法）
第二回　否氣にならせる傳（旦那に切れる法）
第三回　流行醫者になる傳授
第四回　投機を外さぬ傳授
第五回　小說の佳話を得る傳授
第六回　藝妓が繁昌する傳授
第四回　大法律家に成れる傳授
第八回　鑑定家で流行る傳授

この問答は、世間人、つまり man of the world たる櫻痴の修行の程度を見るべきもので、戲謔ではあるが、深く人心の機微を捉へて談じてゐる。それに、その登場人物の描寫も風俗、容貌等寫實の妙を盡してゐる。勿論假作の戲語だから穿ちの爲めの穿ちといふ氣持もあるが、然し世故に長けて人間ではないと、かゝる面白い觀察は出來ぬ。一例を擧げよう。例へば、官吏として出世したしといふ人物に對して、卽智齋卽ち櫻痴は、縱橫に當時の所謂官吏界の特色を剔示した後、かういふ智惠を傳授してゐる、――

扨貴公様第一に才智がある學問があると云ふ自惚をお止めなさい、先方よりも才智學問とも劣つたる振をするが智惠――腰を低くして先方の御機嫌を取りお髯の塵を拂ふが智惠――斷られても押を強く願ふが智惠――煩さがられても根をよく附纒ふが智惠――危ないと見たら不實になつても拘合はぬが智惠――勢が好と思つたら否な奴にでも頭を下るが智惠――是だけの智惠を御傳授申すからお守りなされば貴公様の大願成就はキツト受合ですえ、

これでその諷刺の調子が分かると思ふ。八回とも此の調子で、櫻痴流の皮肉な人生觀を破露してゐるものと承知されたい。

次に――

『素人芝居』

この戯著は、直接には紳士達の演藝改良運動を冷かしたものといつても好く、生物識の高尙がりや芝居通の天狗連がア、でもないがかうでもないの論議沙汰改良論を、一日の素人芝居に托して諷刺したものである。先づ殆んど政治小説的分子がないといつても可い。たゞ、二番目狂言の切られ與三の作り替へに何か寓意があるらしく、赤馬源左は非職の大官、與三は壯士上りの俳優、お富は大官の妻といふことで芝居を運んであるが、與三が赤馬一味に切り苛たまれる場面で、頻りに自由民權的議論を並べて前大官の赤馬を罵るところがある、これには何か寓意があるやに見える、然し固より眞面目に扱ふべき程のものではない。

中ミには、櫻痴がかつて東京日々の附錄として記述したシルレル原作「メリイ・スチュアルト」(『春雪瑪利御最期』)が新作物の試演として飜案し亡織込まれてゐる、これだけは、別の意味で注意すべき部分である。總體として、演劇改良運動方面からせば、種々の當て込みやモヂリや面白い穿ちもあるらしいが、その邊の立入つた研究は、今手を着くべきではない。割愛したくてはならぬ。

『默子放言』

此の「放言」は、その第一の「御吐合」のみで中絶してゐるが、この「御吐合」が、後に「不平の掃溜」と改題されて『櫻痴放言』中に收まつてゐることは、前に記した通りである。序に於て默の義を解して曰ふ――

居士弱冠筆を載せて事に從てより幾と三十年、未だ曾て一日も筆に倦まざるなり且つ夫れ默の事たる言ふを要せざる事を言はざるは固より默と言ふに足らず、言べきを言はざるを以て默と云ふべきなり、居士が復た時を論ぜずと云て文壇を追逐せられしより果して論じたること有るか、居士が默を守てより已に三年、その間時事の論ずべき事なしとするか、而して居士は曾て一言も之を言はざるなり、然るも吾子（關橘郎、即ち櫻痴について日報社長となつた關直彥のこと）は居士を難じて默を守らずと云ふ乎彼の滑稽妄語の如きは云ふを要せざるの言たり、之を言ふも言はざると何ぞ默の意に害ありとせんや云々

櫻痴が默の意知るべく、その默子と號する心持ちには同情に堪ぬものがある。默子の號そのものが旣に無限の大不平の掃溜となつてゐる感じがある。

內容からいへば、默子放言は、黑犬漫筆の續篇である。漫筆中、「智惠の傳授」の主人公間合郎智齋が夜逃して、新橋邊に隱れ、安待合の跡を借りて御吐合といふ不平（乃至得意）吐合所を開く。即智齋改め則鳴亭主人が、入り代り立ち代り吐合ひに來る人物の相手をして、世相人心を觀察する。例察によつて、裏を穿つ行き方であるが、「智惠の傳授」は、我より敎へるを主とし、この「御吐合」は、彼をして上手に心事吐露せしめるを主とする。そこに對照の妙がある。

この則鳴亭に出入して不を吐合ふ人物には、紐斯（ニュース）先生（新聞記者）、官員學士、狭邪（藝妓）連中、神數家、速記通信者、日本繪師、新聞社内部連中、大繖（だいさん）先生（これは下に說明する）、藩閥屬官、少數派株主、作曲家、漢字反對家、上等旅館主人等、いろいろあるが、その中で、先づ直接政治に關係があるのは、大繖先生の條である。大繖とは、大傘の義、グレート・アンブレラといふことで、此の先生が、平日、黨派大合同の說を唱へ、英國の自由黨はグラドストーンの大繖の下に集まり云々といふのを口癖にするところから出た渾名である。先生の不平は、民間政黨が國會開設の曉合同して政府及び保守黨に對すべきに、細事に拘泥し、行掛りに捉はれて、大同團結せぬ點にある。然し先生自身の進退と民間黨合同とは別物で、民間黨には、憲政の發達の爲め大合同を勸めるが、自身は割のよい政黨に甘くもぐり込まうといふ工夫を運らしてゐる。かゝる民間政治家の言行不一致が櫻癡から皮肉られる所以である。それにしても大繖先生の面影は、何處やら英米漫遊後の末廣鐵腸に似たところがあるが、それは故意か偶然か、人の悪い櫻癡のことだから恐らく偶然ではなかろう。此の民間の自由、改進兩黨合同のことは、矢張り二十二三年の政界を賑はした問題の一つであつた。

だが、默子放言も勿論、黑犬漫筆と同じく、社會諷刺として解頤の妙であるので、政治小說と取り立てゝいふべき程のものではない。

『滑稽小說　花懺悔』

花は當時流行つた花札を意味し、これに耽つた七險人（しちけんじん）の末路の不幸を密かに描いて、花札に耽ることのいかに有害たるかといふ意を寓してある。櫻癡自身大の花札好きであつたといふから（だが下手の横好きであつたといふ）、恐ら

く罪滅しの意でこの諷刺小說を書いたものであらう、それでこそ懺悔と題した意が分る。

作中の七險人とは、柳下定九郎、武藏野丸作、菊川靑也、松野鶴藏、櫻谷幕助、桐山鳳栖、梅田鶯所の七人で、櫻谷は成金商業家、株の大將、菊川は官吏くづれの政論家（櫻癡自身に似たり）、柳下も出來星紳商、洋品賣買にて大成功し、更に鑛山で大山を當てた冒險的事業家、梅田は當時第一流の著述家、松野は東京で一二を爭ふ理財家の大金權、桐山は有名の法律家、武藏野は近來成功の製造業家等、いはゞ社會各方面の代表的人物であるが、その各々には恐らく、それぞれモデルがあるらしく、七人とも個性の書き分けが巧みに出來てゐる。

『花懺悔』は、櫻癡の諷刺小說全體からいつて、もつとも出來のよい、且つ最も面白いものであらう。たゞ政治小說ではないので詳しくは述べない。

『社會百態』改題『出放題』

これは小說といへないもので、漫錄といつた方がいゝのであるが、それでも部分的に小說的文字があり、構成があるので、ともかく小說に入れて置かう。正しくば、漫錄と小說のなひ交ぜといふ方が當つてゐる。これの大部分は順序を顚倒されて、後に博文館版『櫻痴全集』下卷に『出放題』と改題して收まつてゐるが、『出放題』の方には、『社會百態』に見えない分子も收められてゐるので、一度他の形式で單行本となつたものかも知れない。

『社會百態』の本色は要するに社會諷刺の小品集たるところにある。その新聞に出たまゝの「百態」を擧げると、

——（上より下へよむ）

○羽織は褻服たり　　○爭はれぬもの

○商家の豫算會議
○箱出娘
○死後の濡衣
○感式抹茶の再發
○一月十六日
○度量衡の講釋
○漢語違ひの木葉天狗
○久松は留守
○荷車の論
○一大名策
○落魄家の述懷
○木偶の坊
○藝者に藝は無用なり
○無理な注文は破滅の基
○婚姻の祝宴の座で山姥
○上臈くさ〳〵

○機密費
○御座附
○新發明の病氣
○俗臭紛々
○著作家の著眼
○當込は外れたり
○大天狗の間違ひ
○古書畫の怪物
○電氣燈
○官員の言葉
○世に處する策
○清婦黨政府黨
○詞の進化である
○醒ての上の御分別
○語れる淨瑠璃があるか
○下交のつま

新聞の缺號の爲め一二脫落してゐる項目があるらしいが（「怪物屋敷」の如き）、先づ大體の目次はかういふもので、この中約三分の二程が「門外放題」に入つてゐる。題材は種々で「[illegible]錄」や「度量衡」「死後の濡衣」の如き風俗乃至國

史の考證的なものもあり、「箱出娘」、「抹茶」の如き純然たる社會諷刺物もあり、「爭はれぬもの」（九星狂ひ）、「久松は留守」（お染風邪流行の呪ひ）などの如き愚俗を笑ふものもあり、「無理な流文は破滅の基」の如き政治的諷刺もあるかと思ふと「著作家の著眼」の如き文學論もある。これは、現代の著作家は、歷史小說、時代劇を作る場合は別として、大に此の現代社會の事件を描くをもつて任じなくてはならぬといふ論で、論としては尤もなところである。「無理な注文」云々の政治諷刺は、丁度これは二十四年二月に書かれたものであるが、昨年始まつたばかりの第一議會で、議會は豫算查定案を中心に政府と紛紜を重ねてゐた、櫻痴はその事を諷したので、節減もいゝが、飯も食はずに働けといふのでは無理だらう、節減も程々にするが可いといふ、いかにも第三者らしい忠告を出してゐる。

政治的分子は、この條、その他二三の項に散見してゐるが、要するにこれといふ纏つたのはない。作者櫻痴の學才世才の博さを知る量としては、いかにも適當なものであるが、政治小說研究の立場からは、格別力を入れるべき作でもないから、これでパスさせよう。

『出放題』に入つてゐるが『社會百態』の中に見えない『忠臣藏權利論』は明治二十五年一月都新聞かに出たものである。これは、權利義務と眞理一點張りの人間達が忠臣藏の人情演劇を評論するに擬した社會諷刺で、なか〳〵意味深長なものがある。櫻痴の諷刺的意圖の如何は別として、恰度此の頃から明治の社會に權利義務の法律づくめと、社會の眞理の學術づくめの批評的言論が非常に勢力が强くなつて來たといふことが、此の一篇でよく分る。同時に、これは櫻痴の意圖に反する見方であらうが、當時の藝術が新興知識階級の批評眼からいつて恐ろしく缺點だらけの不滿足なものに見えたといふことも、半面の事實ではあつたらう。

『選擧競爭嘘八百』

此の作は櫻痴の暴露的政治小說中最も面白いものゝ一つといつて可い。大體の仕組みは頗る『仙居の夢』に似てゐるが、氣分からいつて『仙居の夢程』の冷罵冷嘲の憤慨氣分はなく、櫻痴らしい、いたづら氣分、冷かし氣分の方が勝つてゐる、これは政治に對する筆者内心の憤りが、『仙居の夢』の時程でなくなつたことを語るものであらう。序文に於ける彼の政治觀はそれを裏書きしてゐるかに見える、曰く――

迷つて見れば何事も虛、悟つて觀れば何事も實社交の複雜なる人世の變幻なる誰か此虛實の境を分明に看破するを得んや、殊に矧や政黨政略の功夫懸引に至りては其才學智識辯舌文章みな成敗を爭ふの利器たらざるは莫く嘘も方便事悶も計略昨日は味方今日は敵、反覆表裏變節自在手を覆へば民となり手を翻せば官となり觀者をして端倪するを得せしめず、英雄の顏見せ豪傑の土俵入實に不可思議の見ものなり、其を居ながらにして無錢無料で拜見のできるとは扨も有がたき明治今日の御代ならずや、中にも尤も見ばへあるは選擧の魂膽なり、兩度の解散に經驗の功を積み現に今日各地の競爭驚馬に鞭つて中原に鹿を逐ふと思ふ中に壁に乘掛て落るもあれば鷸蚌の爭ひにぬつくりと漁父の利を收め物怪の幸ひ得るもあり嬉しや此方では牡丹餅が棚から墜れば悲しや彼方では柳の下に何時までも泥鰌は居らず、彼もし壯士の腕力もて脅かさば、我は美人の手をもて招かん、說爺干涉何の懼るべき黃白がものいふ世の中なるにと誇る所は地獄も同じ實力沙汰愛想も盡よ德義も廢れ政治家の胸中本來一條の節操をも貯へず一定の主義をも有せず、是れ即ち乃公が英傑たる所以なりと云ふ都合よき分疏於濁世間滿目皆是の如し、豈獨選擧の沙汰のみならんや陰險の詐術も政略と云へば逆取順守の辭柄となり無稽の蜚言も方便と名くれば衆生濟度の要具たり

思ふに此等の文字は、十年以前に於いては、櫻痴自身が民黨の各新聞から投げつけられ叩きつけられた文字であつた。然るに十年後の今日、その櫻痴から同じ文句でかう手甚くたゝきつけられて、眞面目に腹を立てることさへ出來ぬといふのは、十年前の政治理想の如何に淸高であつたか、又十年後の實際議會政治の如何に墮落したものであつたか、その邊の差別を明白に語るものであらう。それにしても、十年の昔方々から投げつけられた罵詈文句を、この機會におまけを添えて投げ返す當の櫻痴は何處やら、さも心地好さゝうに、「それ見ろ」とでもホクソ笑んでゐるやうに見える。

『嘘八百』は、明治二十五年二月の選擧騷ぎを材料にしたものであるが、これは有名な品川內務大臣（彌二郎）の干涉選擧である。二十四年の十一月、第二議會開會前、早くも自由改進の兩黨民間が聯合して政府に迫る氣勢があり、（大隈、板垣の會合、民黨代議士の懇親會等の事件が相續く）、政府でも警戒はしたが、果然十二月の本會議では、政府の意に反して監獄費國庫支辨案鐵道買收案を否決し、集會政社法改正案及び新聞紙法改正案、田畑特別地價修正案を可決し、更に豫算案に大削減を加へ、査定案を作つた（軍費削減、民力休養の主旨）。その結果、海軍大臣樺山資紀は激昂して、議場を睥睨して、維新以來日本國家の安寧は薩長の功なりと放言したのは、議會史上有名の事實である。かくて、議會政府の正面衝突となり、十二月二十六日解散となつた。

そこで、政府は（首相松方正義、內相品川彌二郎、陸相高島鞆之助、海相樺山資紀等が主として選擧の事に與かつた）覺悟を定めて總選擧に臨み、品川は是が非でも民黨を抑へて政府黨を多數にせんと努力した。吾等は、三宅雪嶺の「同時代觀」（我觀所載）明治二十五年の條に依つてこの邊の空氣の動きを察して、然る後櫻痴の作に入ることにしよう。

解散直後の新年は、和氣が滿たず、二月十五日を以て衆議院議員臨時總選擧を擧行するに決定し、政府側も、反對

派側も、其準備に專らなり。結果を見ざれば知り得ざる事ながら、双方各〻有利に考へ、必勝を信じ紛爭を極むるを免れず。政府部內は獨逸の影響を受け、國家主義に立脚し、陸海軍を擴張し、東洋に爲すことあらんとし、反對派は英米佛の自由主義に依り、議會政治を行ひ、藩閥政府を根柢より覆へさんとす。大久保が內治を主にせし時代より變じ政府にて國權擴張に猛進せる事情の知られんには、反對派も稍〻鋒を緩くすべく、政府に於て國權擴張を獨り呑込にし、反對派の國事を解せざるを罵り之を一掃し去り、代ふるに御用議員を以てせんとするが故、從來の軋轢が劇烈の沸騰點に達す。品川內相及び白根次官が衝に當り、高島陸相、樺山海相と共に、吏黨を選出するに努む。

一月二十八日豫戒令を公布し、尙ほ土地を限りて保安條例を施行し、能ふ限りの壓迫を試む。最初の選擧干涉にして關係官吏が手心に通ぜず勞して效少き事に力を用ゆ。總じて官吏は人に驕るを欲するに、中央より威壓を命ぜられたるを以て、地方官が時を得顏に權を振ひ、下民を脅迫し、叱咤し、親の心子知らずとたるに及ぶ。

而かもその結果は何うであつたかといふと、――

選擧終了後、干涉沙汰の愈〻知らるゝと、選擧の結果の異常なるとにて、世間が驚きもし怪みもし、怒りもし、笑ひもせり政府の調査にても死亡二十五人、負傷三百八十八人とあれば、實數は更に多かるべく中に就て高知が死亡十人、負傷六十六人、佐賀が死亡八人、負傷九十二人、福岡が死亡三人、負傷六十五人、石川が死亡二人、負傷二十四人、熊本が死亡一人、負傷三十七人、群馬が死亡一人なり。政府は吏黨を過半數とするに努むるの外、反對黨の領袖を倒さんとせるを以て、領袖の居る所に競爭最も劇烈、而して能く高知に片岡健吉、林有造、佐賀に武富時敏、松田正久を倒せり。若し政府にて多數を主にし、之に力を注ぎたらんには、幾許か成績を良くしたるべきも、徒に區域を廣めんとし、野戰に戰術を缺き、反對黨の百六十三名に對して百三十七名に止まる。品川は權力を以て更

對諸派を粉碎すること當年錦旗を翻へし、宮さんを謠ひ、賊軍を追撃せしが如くなるべきを期し、地方長官をして警吏郡吏町村役場員をして威嚇せしめ、雇壯士が劍を拔き、家を燒くに至れるも、着眼が簡單に過ぎ實際の勢を遠ざかること甚だし。既に憲法發布、議會開設ありては、世間が薩長藩閥を見ること舊幕府の如く、之に壓迫せらるる者を見ること當時の志士の如し。政府と緣故ある地こそ指圖通りにすれ、一般に官吏の威力を弄するに反感を抱き、之に抵抗する團體及び個人に同情を表す。

政府黨は敗北して再び民黨の優勢となつた。

此の二十五年二月の選擧を、これに先立つて、幾分事實に即し、幾分櫻痴の空想を寓して、豫想的に描いてみせたのが、即ち小說『噓八百』である。櫻痴自ら『噓八百』とは、實際の事實に比してこれに描かれたる事柄は噓八百分の一に過ぎぬが爲めであるといひ、或は、この書の內容は皆噓八百なる故ともいふ、この後の言は勿論一片のカムフラージュで、噓八百の眞の意は實に前者にありと考へていゝのである。

さて『噓八百』の內容に入るが、この小說も例の如く、スケッチの連續といふべく、プロットらしいプロットのない小說であるから、梗概も語り憎いが、極く大略を語つて置かう。

櫻痴居士が正月早々晝寢の夢に、夢野實にそゝのかされて諸方の選擧運動の現況を見物に歩くことである。夢野實とは、『もしや草紙』以來、櫻痴居士の分身として、吾等に馴染みの人物である。

櫻痴居士の眼玉を通して見た光景を、その順序に述ると、第一は廣間の集會、これは民黨の早利(總理)先生彼園無息齋及びその一派の解散善後策の場である。彼等が政府いぢめは、一の戰略であつて、實際人民の爲めに政府藩閥と戰つたのではない、從つて解散はその欲せぬところでもあり、又マサカと思つてゐた。それだけに今更大當惑であるが、事こゝに至つては、人民の爲めと稱して遮二無二進んで、多數黨となるより道がない。早利は部下を饗して門出

を勵ます。だが黨員同志は選擧費の工面で青菜に鹽の態、結局「政治政論黨派議員つまる所が金の世の中」と痛切に感じて、「人が善く云はうが惡く言はうが此混雜に一利益しなけりア身の上が往立ぬ」といふことになる。

此の一場は改進黨の連中を諷するものであり、早利の、早は早稻田の早、利は利益の利である。此の一語が既に櫻痴の改進黨觀を示して餘りがあらう、更に早利を取り卷く部下の面々を、櫻痴は次の假名で呼んでゐるが――

初目高狐内、貪取稀獅、陰謀巧之助、揚足取右衛門、裏切四太郎、烏勘左衛門、朽先馬之進、厄荷不立之亟、青菜鹽八郎、投首當惑之助、鐵切駒利之助、胴舌琴太郎、小理屈夕兵衛等云々

これ等の假名でみても、櫻痴が改進黨の諸豪連をいかに面白半分に見下してゐるかといふことがわかるわけである。

次の「一場の上」の條では、民塔の今一派の天狗連の戰評定である。これも第一の苦勞は金、人民をごまかす點と選擧民を驚かせる大法螺には困らぬが軍用金には早利一派よりも閉口して、草紙（壯士）天狗の食料にさへ事を缺く始末である。この連中も、「商人其外の實業者が起り立ち自ら振つて出掛んと」相談してゐることを頗る警戒してゐるのは注意すべきである。

さていよ〳〵「旅店の秘密會議」から選擧の準備の光景に移る。候補者闇雲怒鳴と有志世話人相鎚打五郎の候補演說會の打合せ、有權者の顏役を馳走する懇親會の打合せなどよろしくあつて、政談演說會となる。こゝで闇雲は政見の發表から聽衆の反對となり、集收すべからざる混雜となつて、會主の方から演說會を解散してしまひ、立合の警官を啞然とさせる。當時民黨は官紀振肅、條約勵行、監獄費國庫支辨の三件で政府に反對したが、その或る點が民黨の人氣に障つてゐたことは事實だ。この條で櫻痴は巧みにそこを掴んでゐる。

「直に懇說」は、戶別訪問の實景である。「志願候補者の審問」、「謝罪の無效」と三場面つゞく。民黨早利先生の一乾児、朽先馬之進が、有志家の親株屑仙藏を訪ふて形勢を窺ふ。さうして東黨の古井節藏の外に農家の株元堅右衛門

といふ大敵のあることを聞く。立候補演說に、附燒刄の過激論、政府攻擊をやつてから、有志家の氣受けが惡くなつたと聞き、狼狽してその取消訂正を試みようとして、有志家の集會に出かけるが、この有志家連の要求は、第一、實業者の爲めを計ること、第二、因循姑の議論を院內で持すること、これである。別に民黨政府黨といふ差別には構はぬ。至るところ實業家の勢力が政治を動かしつゝあるのが、それとなく仄めかされてゐる。

朽先は有志名望家の集會に出ていろ〱辯明するが、たかゞ田舍の土百姓と思つてかゝつたところ、彼等の方がずつと頭がよく、政見について一分試しの審問にあひ、大閉口をしてへドモドの態になる。一例をいへば君が議員になつたら地價修正をやるかといふ、やる、地租輕減もやるかといふ、やる、然らば、それで人民卽ち百姓が、助かるときかれて、「此の上も無い善政」と朽先が答へるや、相手は承知せぬ、かゝる修正や輕減で利益を得るのは、大地面持や大百姓のみ、小百姓や水呑百姓は何ともなし、何が人民の爲だ、大方大百姓連から賄賂をとる約束でやつてゐるのだらうと叱られる。こゝで櫻痴は、知らぬ顏で政治批評をやり、意外にも銳どく議會政治の背後を衝いてゐる。

朽先は有志家の追究に堪へず、民黨の內閣乘取の祕計を打ち明ける、內閣を乘取ると、人民に都合のいゝ政治が出來る上に、自分達の懷中具合が大によろしくなるのだ云々、かくて問ふに落ちず語るに落ちて、朽先は這々の態で退却する。

「內幕の苦現」は民塔選擧事務所の光景である。南海(みなうみ)大先生は猶又某、綾志經策、小刀細九郞を、相手に運動費調達、應援辯士、壯士派遣の大苦心、南海とは、土佐の南海にあるの故で、自由黨總理の板垣を諷するものに違ひない。こゝでも利權の空手形で金策してゐるが、裏面にはかゝる事實もあつたのであらう。こゝで民黨同志打ちが暗示されてゐるが、かゝる同志打は勿論澤山あつた。綾志が頻りに腕力使用を主張するのは、いかにも自由黨らしい空氣が出てゐる。

次に「候補者の御馳走」、「同志打の風波」は、吏黨候補里軒先生側の運動をスケッチしたものである。里軒（利權）は、御馳走買收は、理論上は避くべきも、實際上は必要なこと、諸君の意見次第で如何やうにも變說する、必ずしも政府案に盲從するといふのではないから、宜しくたのむ云々。これは吏黨の軟派といふべきもの、これに對して硬派の櫟木拾吉が猛然として起ち、政治家が主義を第一とすべきを論じ、大に里軒を罵詈する、こゝであはや同志打とならうとするが、參謀の長下古名が立つて、櫟木のは理想論、里軒のは實際論、然し主旨は同じ、これ順守、逆取の妙用とこじつけて、政治政略には、主義と德義は禁物と結論し、何とかその場を纏めるが、この古名の演說は諧謔の妙を極め、一讀人をして絕倒させるものがある。櫻痴の滑稽の才も得難いものである。この招待會は一番金がかゝつて立派（といつてもたかの知れたものながら）であるのは、流石に吏黨だけのことはある。斡旋する藝妓が、ウツかり民黨の流行させた里軒攻擊の「梅の春」替歌をうたつて一座を怒らせる波瀾も自然で面白い。

「變說自慢」と「執中正太夫」の二場は、此の作中最も注意して讀まるべき部分の一つで、櫻痴の政治批評が久々飛び出して來る。執中正太夫は「累代金持の名家」で獨立獨步の商人でり、「相應譯の解つた男」である。その執中のところへ、虎井雁藏が候補者藤元搗内を連れて來て、暗に知事郡長等の內意だから盡力せよと迫る、藤元は表面民黨と見せつゝ出たら吏黨にならうといふ豫約をしてゐるイヤな人物である、當時かういふ人物も少くなかつたことであらう。御用商人達が知事の說諭で動くからお前も勤けといふ虎井の言を聞いて、執中はキツぱりとかういふ、——

ハテナ御用商人が政府の提灯持と云ふことは東京の惡口新聞に每日書て有ますれど新聞紙屋の憎まれ口と打棄て置ましたが唯今貴君も其御說とある上は改めて心得の爲に窺ひ置たう御座る、全體御用商人とはドンナ種類の商人で御座りまする……ム、政府諸官省の用達、官吏の友達……それで利益を得るもの……其の緣に由て濡手で粟を握むもの……成ほど左樣な連中は廣い世間に隨分ありませうが失敬ながら此正太夫など四十年來未だ一度も政府の御厄

介に預つた事の無い男ですが、ソレでも商人ゆゑに政府の挑灯を持てと貴君は仰しやりますか……イヤ〳〵其分疏は卑怯で御座りませうぜ、現に貴君は實業者の連中は政府の御味方であると仰しやつたで無いか……憚ながら貴君方の茶羅辯に乘ぜらるゝ執中正太夫では御座りませぬ、私は政府の挑灯も持たぬ代りに豆蒔の手傳も仕らぬ……靑二才の書生上り、皮包（カバン）一つの風見鳥政治論でヤツト飯を食て居る連中に大切な代表を賴む事は御斷りで御座ります云々

この言は實に堂々たるものであるが、これは櫻痴が社會の多くの實力者にかういふ態度であつてくれと暗に望んだものと見て可い。然し櫻痴をしてかゝる言を爲さしめた反面には、此等實業家の實力がいかに社會に根強く植附いて來たか、今迄政治に動かされて來た實業家が、もうこの頃では逆に政治を動かすだけの實力をもつて來たのだといふ實勢を明白に認めなくてはならぬ（事實、二十五年一月には實業同志會又は同盟會といふものが組織されて實業家が政治に進出する勢ひが示され、櫻痴の小說をのせてゐる東京日々が大にこれに贊成したものであつた。櫻痴のかゝる意見はこの事實と引合せて讀むべきであらう。）

「女將軍の參謀」、「戀は思案の外」、「思はざる遺恨」、これは、實業家の幇間めく似而非インテリの遠阪衣布藏（えんさかほいざう）が、選擧の有力者嚶辛長者を動かして應援してもらふつもりで、その寵妓に接近するが、その寵妓と妙な關係になつたのが分つて、大に鹽辛に恨まれ、何もかも打壞しになつた上、遠阪自身は發狂する。

この條といひ、この前の條といひ、その他にも見えてゐるが、實業家側でインテリ風の候補者に政治を托さなくなつた傾向が特に目立つて見える、理由はいろいろあるが、此の小說によるとインテリゲンテヤ連中の無節操無氣力無主義が第一原因となつてゐると見られる。インテリ側からいへば又それだけの理由は何れもあつたかも知れぬが、これも實業家自身政治に乘出すに至る一つの見方であるといひ得やう。

「恐入たる答辯」、「神佛の應援」、「議員の引倒」の三回は、民黨候補富足春太郎の選擧に關する部分である。第一は富足が有權者の開いた候補者意見質問會に出て失敗する話、當時かういふ意見質問會は方々で開かれたことは事實であるが、かういふ會の出來たといふことは、一面では選擧民の政治意識の覺醒を意味するものに違ひない。つまり候補者と有志が候補者の政見について一問一答を交換する會であるが、一問一答だけに曖昧なことが言つてゐられず、蝙蝠候補者にとつては最も困る。富足も實はかういふ蝙蝠候補の一人なのである。此の問答の間に櫻痴の政治批評が出て來るのは、勿論である。例へば、富足の答辯中——

ミンの字も以前は民といふ字を書たが我塔の目的は民の爲では無い卽ち銘々自分の爲じやに由て、先づ眠塔と書く、共譯は愈々議論が切羽詰つて一言の返答も出來ない樣に成た時には塔の上で假眠をして知らぬ振をするに由て眠塔と名く云々

の如き、又は——

彼は實業の爲と申して吏權論の肩を持つべしと定め我は自分共仲間の爲に危い橋は愚の事絹糸渡も致す覺悟、彼等に任せて置ては世の中がガヤ〳〵と騷出して賑に成てドサクサ混れに百姓でも町人でも殊更山師心のある何樣師などと來たら思の外の儲が出來て後は野となれ山となれ、先づ當座の所は一寸景氣が附て來る樣に見える云々

といふ一條など、所謂人民の味方と誇稱する民黨人士にとつて、骨を刺す冷罵と感じられるが、それをふわりと柔かなおどけ文句に包んであるところは、櫻痴の年齡の效と心境の變化である。勿論民黨とて、かゝる人物のみではない、誠心誠意人民の爲めに奮闘した人々も多かつたことはいふまでもないが、中にはかゝる富足の如き連中も一二ではなかつた。

「神佛の應援」は、『仙居の夢』の際に使つた趣向と同じく、神主と僧侶が選擧運動に乘り出して來て互ひに爭ふこ

とで、富足は僧侶を買收し、神主は、富足の敵手たる士族上りの國學者宇賀野御魂を助けるわけである。「曇眞の引倒」は、有志評議會の席で、僧侶と神主が味方を造らうとしていがみ合ふこと、僧侶の文句が法華經のもぢり、神主の主張が宣詞(のりと)のもぢりであるのは面白い、かういふもぢりは櫻痴得意の文章で、彼自身、腹を捧へつゝ書いてゐるやうな氣がする。

「唐瓢」の一節は狂言の態をかりた挿話といつても可い。唐瓢とは投票のこと、勿論投票買收を諷したものであるが、太郎冠者が間違つて買つて來た唐瓢に喩へて、議員の心得を述るあたり、諷刺家櫻痴の面目が、實に鮮やかである。而してその終りに於て、——

斯る者等に語らはれ。身を誤るぞ恐ろしき。いでや此上の修羅をばのがれ。實(まさ)しき業(わざ)の人を選ばん

といつてゐるが、こゝ等に櫻痴の政治理想がそれとなく繰返してほのめかされてゐる、彼の前出の執中正太夫の如き人物を選べといふのである。

狂言の終つた席で、狂言の內容のことから民黨の候補者同志に同志打ち喧嘩が始まる。が、これも、前に出した如く、少しも珍らしい出來事ではなかつた。

次の「壯士の魂膽」は示雄塔（自由黨）候補焼野(やけの)洋八(やんぱち)の運動員たる壯士連が、豫戒令に困つて候補者を脅迫して金をせびる話、これ又恐らく實事であつたと思ふ。

「熊鷹長者」の一回は、早利(さうり)の一乾兒朽先馬之進と、早利側の運動費融通掛り熊鷹長者の問答だが、熊鷹の借金請求に對して、朽先の答辯が面白い、無い金を取らうとしても、それは無理だ、金が欲しいなら宜しく取るやうにして取れ、つまりこゝでウンと資本を入れて、民塔連の當選を大に殖し、その勢ひで早利を總理大臣にする、さうなると早利周圍の連中も顯職にありつくから、それだけの借金などものゝ數ではない、といふ、熊鷹は此の手で又々五千をま

き上げられるか、利權の密約といふ手も、運動費調達には、いろいろと利用されてゐる。かゝる有樣であるから、明治三十一年日本最初の政黨內閣が出來た際のあの醜態振りも生じたわけである。長い間のかゝる空手形や出世證文が積りつもつてゐるのだから當然のことであらう。

「不意の敗北」、「兩軍の謀計」、これは敵方の候補者や應援者の「足」を奪ふ買收その他で、人力車の借切、妨害的の催し物、貸間借切など、當時としては新手戰術として驚嘆されたものらしい。

「兩參謀の裏切」同黨同志競爭激甚の裏面、參謀同志が、有權者の二枚舌に呆れて、競爭候補の參謀同志が相談をして、有權者達の上越す大陰謀を目ろみ、表面は從來の候補の爲めに運動してゐる風をして、內々は兩人で取り集めた票を第三候補者に高く賣り込まうといふ相談をする。この一節は恐らく櫻癡の空想から捏ち上げたもので、事實ではあるまい。買收又買收の結果はかゝる事とまでなるかも知れぬぞといふ警告の意味が、無量の可笑味の裏に、見えてゐる。次の「臨時村會の議案」、「投票賣却決議」の條も同じく、空想的警告に違ひないが、此の種の諷刺としては奇想天外の妙がある。選擧競爭の最高潮に達したとき、某地方の某村で、かういふ決議をする、つまり、村內有權者の各投票は自由行使を許さず、村に寄附させる、かうして一まとめにしたものを一票三十圓乃至五十圓で一まとめに賣渡す。さうして得た金を村の永久基金とするといふのである。櫻癡のいたづら氣分の生んだ傑作に違ひないが、純朴な田舍人をしてかゝる決議をさせかねまじき狀態があつたればこそ、櫻癡の空想もかく動いたわけであらう。吾等は櫻癡の筆に引廻されてはゝはゝと笑ひつゝ讀み進んで行くが、實はこの一場面には、慄然たるものがある、最も無邪氣な人々が、最も無邪氣な口實の下に、人間の靈魂や自由の賣買を議してゐるのである。吾等は、これを讀んで、天を仰いで浩歎すべきであり、呵々大笑して止むべきではなかつたのである。かくてこの村會の決議に至つて、この小說はその興味の絕頂に達する。

「佐渡は四十九里」は、佐渡相川郡から立候補した某候補が、急いで選擧區に行く途中、新潟で船止めを喰ふ話、「大騷動」は吏黨候補演說會が聽衆に潰される話。「案外の合戰」は、選擧の結果、政府の敗北を源平盛衰記まがひの、文句で述べたもの、文中彌隙(やひま)の內腐とは、內相品川彌二郎を諷したもの、最後は、平家物語、六道卷に擬した妙文句で終つてゐる。此等のもぢり戲文章も、櫻癡の文才を見るには、最も恰好のものとして、その意味で推稱に値すると思つてゐる。柳北以來、この種文章では、櫻癡に及ぶ才物はなからうと思ふ。他人のかゝる戲文は拙劣詰窟、平板でせゝこましくて見るに足らぬが、櫻癡が筆をとれば、原典の味を存して、しかも巧みにもぢり、滑稽百出、滾々として窮るところを知らぬ。德不德は致し方ないとしても、その才のみを取れば櫻癡は、依然明治文壇第一流の才物たるを失はないであらう。

例によつてテクニクのことは論じないが、『仙居の夢』以前に比して老練になつたし、政治上にも幾分積極的な理想をそれとなく示すやうになつた傾きがありはせぬか、同巧同型の作ではあるが、何となくそれ程の差違が出來てゐるやうに感じられる。

『田舍めぐり』改題『浮世見物』

『田舍めぐり』といふ以上、都會に對して地方生活社會のアラ探しを試みたものと早合點してはならぬ、この「田舍」は、實は都會の中の「田舍」換言せば大東京の中に於ける「田舍」を見物して廻る話である。題目から既に諷刺になつてゐる。序文に——

面白や面白の浮世かな。桑田變じて碧海となり、都會(みやこ)かはつて田舍となる。新橋に春を惜むの美人多くは愛知の輸

入に係り、向島に馬を走らする才子概む東京出生の江戸兒にあらず。金さへ持てば馬の骨も紳士と崇められ、家道衰ふれば名門も乞食と一般。耳食學問(きゝとりがくもん)よく世間を瞞着す今日に、遣繰算段豈敗綻(ぼろ)を目前に隱さゞらんや、演說の紙叭喇新聞の破太鼓、猶よく文明を飾るに足れり云々

とあるのによつて、「田舍めぐり」の意味が大體見當がつく譯である。

舊幕以來の豪富福富福藏、舊幕臣上りの新紳士金丸保の二人が、例の櫻癡の分身夢野實に案內されて「東京の都中で田舍めぐり」をし、「田舍でも見る事の出來ぬ浮世見物」をする。さうして自分達の若い頃の江戸兒生活と比較して、その變遷の激しいのに、今更のやうに呆れるといふ筋である。勿論政治小說といふのではない、社會諷刺の戲作であるが、その中で處々に政治的諷刺が入り込んでゐるので、輕く內容を紹介して置く。全二十四回、發端は別にいふことがないとして、第二回「梅莊」これは新時代の花柳女性と通客の相違を寫したもの、「別莊」は紳商の女房連の生活の素破拔き、櫻癡は下司な花柳的嗜好の流行がその生活を支配してゐることを嘆息してゐる。「官宅」は大臣の官宅洋館の世界無類の國辱的安普請なること、「書畫」は當時の官人紳商を目的とするいかさま書畫屋の魂膽あばき、「書齋」は大臣秘書官殿の書齋のいかにも見窄らしき有樣を述べてゐる。此の「官宅」や「書齋」で、櫻癡は大臣や秘書官の生活を昔の大老老中や奧御祐筆等との生活と比較して、今の昔に及ばぬことを嘲つてゐるが、これはたゞ櫻癡が溜飲を下げる方便とみるべきで、眞實の諷刺とはいへない。こゝ等には、聰明な櫻癡にも一寸した認識不足がある。新興日本の當時の世界的位地を考へたら、かういふチグハグな、安物一式の雜然とした生活に對して、もつと理解をもつべきであらう。江戸趣味、江戸人の生活は舊日本の二千五百年の文明の粹の凝つたものだから、自らそれ相當な落ち着いた生活があつたが、新興駈け出しの世界的日本には、自らそれに相當する假普請的生活が伴ふのも止むを得ない。當の大臣や秘書官がかゝる生活を最上無二の理想的な美的生活とでも思ひ込んでゐるならば、諷刺にも

なるが、止むを得ずしてさういふ安直な生活をしてゐたからとて、それは諷刺の材料にはならぬ。大體衣食住のことは表面だけで諷刺の材料に使へるものではない、江戸人は桃源的生活から或る意味で衣食住そのものを目的視してゐたに對し、明治の新時代はさうはいかぬ、日本が世界的に進出するといふ大切な用がある、大體、衣食住などにかまけてゐられない、明治人は衣食住を目的視してゐられなくなつてゐる。間にあへばいゝ、それが明治以後の日本人の頭を支配してゐることである。江戸時代には、これこれの魚は貴顯が食はなかつたのに、今日は盛にくふとか、酒も本物の何とかゞ飲まれたに、今日はイカサマが多いとか、そんな事は人間生活からいつて、何を食はうと何を飲まうとさう大した問題ではない。櫻痴が、往々かういふ事を諷刺材料にして得意がるのは、偶ま以てその卑俗性、戯作者根性、惡ヂレツタンチズムを示すものであらう。眞面目な諷刺と取るべきではない。但し、これによつて當時の社會が生き生きと知られるのは、櫻痴の筆の功德で、それについては文句のいひ様もない。

次の「財政」、「饗應」、「忠諫」は或る大臣の生活を例に引いて、彼等の生活のいかに苦しいものかを說明してゐる。「忠諫」とは、夫人執事が、生活維持の爲め大臣をやめて場末へ引込めと諫めたことをいふ、これも極端な空想であらうが、然し大臣の中にはかういふ苦しい生活の人々もあつたことは事實であらう。これに引かへて、「普請」は成金の別莊普譜の俗惡豪華趣味を思ひきり諷刺したもの、「檢校齋」はその反對の愚俗抹茶の似而非寂しみに一撃を加へたもの、この邊で諷刺も本格になつて來る。「寄附（よりつき）」(茶の湯の語)、「道具附」、「餘興」、「田紳」これは檢校齋の茶會のスケツチで、當時の紳士紳商なるものゝ趣味がいかに下劣俗惡、醜陋猥雜なものであつたかを、遺憾なく、筆力を極めて描き抜いてゐる。

「割烹」は料理趣味の變化、「名醫」は醫者、「大天狗」、「會合」は新聞記者連の諷刺である。「記者」の一條では、櫻痴が特に新聞記者としての自家の體驗から、當時の記者生活の如何に、出鱈目なものかといふことを說教してゐる

が、やゝ毒舌めくものゝなかなか面白い。「大宮人」は官吏の藝妓買ひのこと、「新歌」は文壇名士の集會、新歌とは、その席で某文士が自作の四季の長歌を披露するからつけた題であるが、そこには當時の新體詩の用語の半熟た點、新體詩家の無學などに對する諷刺がある。第二十三回の「熊鷹」は同じ席上で披露された改作熊阪の謠曲であるが、これは全然政治的諷刺で、第二議會（二十四年五年）で、民黨が豫算で政府をいぢめ、政府乘取を策したところ、解散といふ早業で失敗をするといふ筋である。それを「熊阪」の原文をもぢつて巧みにはめこんである手際は、いつもながら老練なものである。

（前略）吏搭の頭も。舌打濕し。物間を少し隔て待たまふ。熊鷹も工夫をかまへ。互に掛るを俟(まち)けるが。焦つて熊鷹早速をふみ。鐵壁も通れと突く勵行を。はつしと押さへて駁すれば。おつ駈透さずこむ辯論に。ひらりと乘れば。起立になし。退つて引ば。演說なすと。追取直して丁と打てば。中にて困るを解く手で。却て拂へば飛上つて。其儘見えず形も失て。此や彼所と案ずる所に。思ひもよらず後(うしろ)より。擬事の間隙(すきま)にちようと解散。こはいかに。あの官者に仕て遣られたる腹立さよと。云ども天命の。運の極めぞ無念なる云々

大體の調子がかういふものである。

かうして第二十四回結尾に於いて、櫻痴は結論を下していふ、「實に我が東京は何處から何處まで大田舍で御負に男女の風俗衣食住純粹の西洋でもなければ純粹の日本でも無く丸で怪物の樣では有ませんか」云々。正に然り、と吾等もこれに贊成せざるを得ない。

尙ほこの結尾には、此の社會怪物(ばけもの)觀から割出したニヒリステックな政治哲學の片鱗がある。

「今日の國家は方に危急存亡の秋にあり是を救ふものは乃公を措て誰ぞや苟も一身を以て國家に殉するの赤心を懷く豈に世間の毀誉を恐れんや」と立派に言て居る政治家もグルリと廻れば名利の羈絆に繋がれて榮華を慕ふ怪物の

大本尊、『社會の爲じや人民の爲じや』と罵る政論家も一皮剝げば己の爲を謀る怪物云々その他、「公衆の利益全國の便益とは私欲を包む怪の皮。百萬圓の金庫には反古證文の怪物葛籠」云々といふ、同じ怪物觀を盛つた處世哲學に至つては、こゝで一々語るまでもない。

尙ほ、此の「田舍めぐり」即ち『浮世見物』の附錄となつてゐる——

『滑稽講義 六歌仙』

は、古の六歌仙（僧正遍照）、在原業平、文屋康秀、喜撰法師、小野小町、大伴黑主の歌の解釋に託して例の社會諷刺の戲謔に及んだもので、短篇の割に、縱橫に滑稽の才を示してゐる。

『噓世界』改題『兩面假與眞』

櫻痴の緒言にいふ、——

（前略）左れば社會の複雜する、人情の輕薄なる、何に付ても彼に付ても、影日向の兩面あるが即ち當然（中略）文明開化の世界ほど、益々烈しい假僞。聖人君子英雄豪傑學者紳士女郎藝者、ありとあらゆる百般の人種、皆是假面假粧して、社會の場に登り、舞踏に世を送るに外ならず、實に世の中は一大劇場。その序幕の開齣を僅に書たる脚本の筋書、云々。

この緒言で知れる如く、櫻痴得意の社會諷刺である。社會の各方面より、大商業家、政論家、令夫人、自稱實業者、

待合女將軍、官吏、外妾、法律家、投機仲買、女髪結、西洋料理通、藝妓、流行紳士、遊藝師匠、家例鋏（家令扶）などを捉へて來て、各々その假の生活と眞の生活とを暴露して示したもの、その中で政治に關係のあるのは、政論家の部分と、自稱實業者の部分である。政論家は、代議士立候補の表裏を穿つたので、前來度々繰り返してある如く、表面は國家の爲め、諸君の爲め自分を選擧してくれといひつゝ、裏面では、あらゆる手段で議員にならぬと二進も三進もいかぬ事情を暴いたものであるが、格別のこともない。たゞこの暴露で、この頃から議員が一種の職業の如くなつて來たといふ事實が知られる。自稱實業家の條はそれに比して、短いながら、實際の時事諷刺であるだけに面白い。前に述べた如く、二十五年二月の總選擧の際、一部實業家の奮起があつたが、この章は、その時奮起して政治に乘り出しかけた實業家連の心身を穿つたもので、彼等の損得利害の駈引を暴露し出して、成る程と首肯させる、手痛いものである。櫻痴によると、彼等の團結も、事實は、自家の利害擁護が眞の目的であつたといふのである。

『諷世譏俗 淨玻璃』

これは、社會諷刺といはんよりも、寧ろ時事諷刺といふべきもので、一々筆鋒の向け先きが定まつてゐるといつて可い。從つていつもの一般的な社會諷刺と違つて、幾分深刻な感じを與へる點が、少し變つてゐる。淨玻璃とは、本物の閻魔の廳の淨玻璃も此の作の中に出て來ることは來るが、然し題意は必らずしもそれだけを指すのではなく、主として作者の社會的正義感を明鏡に譬へていふものであらう。

趣向は作者櫻痴の分身たる厄介翁と覡鼓生といふ二人が連れ立つて娑婆世界の漫遊をする、さうしてその見聞の事實について表裏を穿つて語り合ふといふので、此の點だけでは例の櫻痴の社會諷刺の趣向と同じことである。その目

次に曰く、――

第一回　類を以て聚まる兩士の漫遊
第二回　驚き入たる交涉祕密の會擬
第三回　鐵官の水掛論に都合のよい變說
第四回　泣面に蜂とは貧乏人の境界
第五回　半減で宜しいとは眞實の心底
第六回　老猫の舌頭に英雄の大敗北
第七回　何の浮世は三分五厘で新陳代謝
第八回　大才子の腹中は本來無一物
第九回　二枚の舌の仲裁に怪しい信用談判
第十回　木魚講から忘年會で意外の出現

右の中二三について、櫻痴の諷刺するところと時事を對照して示せば、例へば第三回である。これは當時東京市の水道敷設について、鐵管に外國製を用ゐるか內國製を用ゐるかの大議論があつた（後に內國派が勝つたが、粗製の故をもつて使用にならず、大疑獄が起つたのが、鐵管事件として知られてゐる）。水掛論といふのはそれを指したのであるが、變說とは、この外國派內國派の主張者の色分けの面白さをいふので、本來此の主張者中外國派には、明治二十四年の議會で、日本では鋼鐵製造が可能だといふので、製鋼所設立に贊成した吏黨の連中が多い、從つてその反對者には製鋼所反對者が多いといふ奇妙な現象を呈してゐた。そこを櫻痴は、御都合次第で變說自在と皮肉つたのである。
又第四回は、當時（二十五年）議會にて地價修正が可決され、その代償として酒稅、煙草稅が增加されるに至つた

が、こゝに奇現象といふべきは、輸入税が増加されなかつたので、増税の結果、上等の洋酒や、舶來煙草は別に値上りせず、値上りしたのは内國釀造の酒、及び内國製造の煙草のみであつた。且つその地價修正も、土地持ちの大百姓には利益であるが、借地小作の貧乏百姓の歳入には何の影響もない、然るにその結果反對に内國酒と煙草とが大に値上りがして彼等の手の達かぬものとなるに至つた。櫻痴の諷刺はこれを狙つたもので、老百姓の愚痴話しに託してゐる。又、第五回は、これ又當時の議會で官吏の俸給が冗員削減の犠牲となつて、官吏のストライキ氣分を釀成したことがあつたが、此の時民黨の或る人々は、半減は宜しいが、それでは俺達が内閣をとつた時に困りはせぬかと心配した、然るに多くは、イヤ半減でも萬年野黨の今よりも結構だからと、當業者志願者が澤山出たといふ、さういふ民黨一派の心事を諷したものである。以上によつてその大略を知ることが出來やう。

勿論時事諷刺といひ條、社會諷刺の分子も澤山入つてゐることは事實だ、第六、第七、第九、第十の如きは、時事諷刺とのみいふよりも、社會諷刺の部分が多い。殊に政治家と待合遊び、政治家と花牌遊び等を暴露し、民間政治家(議員)の言行のいかに不一致かといふことを徹底的に指剔してゐるが、これは、櫻痴としては、大に意があつてのことである。話柄が猥雜に亙るので、こゝに細説することが出來ぬのは遺憾であるが、櫻痴を知るには、本文に就て一讀すべきものであらう。

讀者或は言はん、櫻痴の社會的正義感など怪しいものだ、彼は散々かゝる惡事をして來たのではないか、彼の小説を讀むと、自ら顧みて他を言ふ如き文字が多いやうな氣がする、と。私も亦、一應はさう思ふ。櫻痴自身、あれ程の怜悧漢であるから、この矛盾には十分氣がついてゐたと見えて、此の『浮玻璃』の卷首で他に託してかう辯解してゐる、曰く、「己の非を棒て以て人を譏しむる所は實に人の死んとする其言や善とある通り色慾の慎むべきを說たのは感心では有ませんか」云々。こゝに櫻痴の本音が幾分出てゐるであらう。櫻痴の諷刺小說暴露小說を讀む人々は、櫻痴

が己れを以て他の墮落を防がんとしてゐるのだといふ點を、呉々も汲み取つていたゞき度い。この意味で、吾等は櫻癡の社會的正義感を笑つてはならぬのである。

『當意即妙 戲畫解贊』

これは文章としての面白味は兎も角、作としては格別いふに足るものではない。新聞の讀者をして各一の戲畫を投寄せしめ、これについて一篇の解答を書く。從つて毎日毎日別々の趣意の戲文の連續であり、別に趣向とか人物とかいふ小說的技術は使用されてゐない。勿論その戲文は時事諷刺、政治諷刺、社會諷刺であるが、その時々の思ひ附きであるから、牽强な點もいろいろある。彼の作中では、先づ何うでも可いものである。中で、政治的なものを拾へば、明治二十五年末に開會した第四議會を諷した弔蛙戰場文（二十六年一月十八日都新聞掲載）の如きものであらう。これは古文眞寶でよく知られてゐる唐の李華の弔古戰場文をもぢつたもので、滑稽の妙、人をして捧腹せしむるに足りる。李華の原文と對照して說かぬと、そのもぢり文の妙味が解からぬので、こゝに引用するのは止めるが、再再いふ如く、此の種の文章では、櫻癡は柳北以後の上手といつて可い。

『僞 稱 紳 士』

僞稱紳士とは何ぞ。作者櫻癡は戲れに解說して曰ふ、――

伊太利國シカゴ府の處世哲學大博士ギューテ先生の新說に曰く『籠商御用商人と云へる名稱は賤制時代の遺物なり

立憲政治議院政治に於ては是を政商と名くるなり。紳士の稱は純然紳士より一變して長袖紳士となり再變して流行紳士となり又變じて冒險紳士となり虛喝紳士となり自稱紳士となりて今日に於て行はるゝは僞稱紳士なり、而して僞稱紳士と政商とは密接の關係を有して或は同體異名たる事あり。此政商僞稱紳士が權家に結んで事を謀らんには脅迫三分諂諛三分黃金四分を以てすべし。正當の交際は決して親密の媒介たること能はず其媒介は即ち惡事に限るなり、故に眞日な談話よりは彼を誘引して倶に待合に遊び藝妓を相手方となすべし又碁將棊よりは倶に花牌を弄て勝負の賭を爲すなり、希臘の古哲シセーロが『十回の茶話は一回の酒席に敵せず、十回の酒席は一回の女遊びに敵せず、十回の女遊びは一回の花弄に敵せず』と云ひたるは交際の親密を計る格言なり。一回花牌朋友に成れば倶に相場を爲すべし、若し法律に觸るゝの恐なくば與に詐欺を與にし密通を與にし盜賊を與にするに至れば眞の親密たるを得るものなり。此心得を以て權家と同腹になりて目的を達すべし、但し彼を寄視して賄賂に終らんと思ふは不可なり宜しく合資協力の仲間に入れ利益は之を分ち損毛は掛けざるの組合と成すべし』云々（第二十二回）

これで僞稱紳士の意義、行爲、主義等の一斑は明白であらう。この櫻痴作『僞稱紳士』の一篇は、右の引用を引のばして若干の筋を作り、これを數人の性格に當てはめて、數ケ所の場所に躍らしめたものと思へば間違ひがない。たゞ政治小說的分子が極めて少なく、むしろ或る種の暴露小說、警告小說ともいふべきものであり、且つ中絕の作らしいものであるから、詳しくは說かない。たゞ大筋を簡單に說いて置かう。

この小說で最も多く動く僞稱紳士は、桐塚常太郎（商法家）、月岡武藏（事業家）、菊川壽（交際家）、それに花井和三郎（財產家）の四人で、この四人が腹を合せ、更に政治家松井眞鶴、法律家櫻田丹作を抱き込み、當局の長官、局長等を骨抜きにした上、議院の方まで手を廻し大金儲けの手品をやらうとする。その手品の種はこれも一味の大法螺吹き、自稱電氣工學大博士、洋行何十年といふ稻妻奇策の新案に成る空中電氣鐵道といふものである。つまり電信

電話の如く一條の電線を張り廻して、その上に電車を走らせるといふ妙案である。走る走らぬは別として、一條の電線の上に重い電車を如何にして載せるか、これからがして珍不可思議な案たのであるが、さういふ學理的疑問などは何うでもよいので、問題は大發明珍發明といふのを看板に愚衆の眼を集め、慾張つた出資者を呼びよせることが出來れば、それで目的は達する。つまり株金が集まつたところで、發明の連中は各自の持株を數萬の金にかへて、工事の始まる前に身を引いてしまふといふのである。

もつとも此の發起の僞稱紳士の連中も、必らずしも步調がよく揃つてゐるのではない、甲は乙を欺き、乙は丙に用心し、丙は丁を賣るといふ小ぜり合ひが澤山ある。たゞ大體の目的を同じくしてゐる間だけの一味なのである。連中の計畫が手順よく運んで、いよいよといふところに入る前で、この小說は筆を擱いてあるから、先づ未完成といふ方が當つてゐよう。

この腹黑い金儲けの話を中心に、例の如く藝妓遊び、花牌引き、その爲めの喧嘩、花柳界の內幕などをあしらつたのが、『僞稱紳士』である。

この小說の大筋たる空中電鐵の話は、恐らく事實ではなく、櫻痴の空想に成るものであらうが、たゞ當時の紳士達が、恥も名もなく、手段を選ばず金儲けに熱心する有樣を諷し、餘り夢中になると、揚句の果は、こんな馬鹿氣た事まで考へ出して人の金を掻き集めることにならうと、いさゝか警告の意を寓したものであらう。

こゝで注意すべきは、從來は多くブルジョアに對立的な關係に置かれてゐたインテリゲンチヤが、經濟的逼迫の爲め、甘んじてブルジョアの金儲けの手先きになつてゐる點である。つまり地の鹽の役目を果すべきインテリゲンチヤが、食ふか食へぬの境に立ち、苦しさの餘りブルジョアに降參して、全く地の鹽たる役目を拋擲するに至つてゐる。櫻痴がこの小說を書いた明治二十六七年の社會は、一面さういふ風に惡變しつゝあつたものであらう。つまり以前の

如く、單に政治家との請托だけではもう思ふやうに儲からぬ、そこで、インテリゲンチヤを仲間に入れて、尤もらしく學問の看板を借りて世間の眼を欺くのが流行となつたのである。

『支那問罪義經仁義主汗』

此の作は、卒然として讀めば、いさゝか人を喰つた歷史小說の如き印象を與へるであらう。成る程、これは義經傳說を利用した歷史小說である。義經は奥州高館に死なずして、蝦夷島に落ち延び、それより今の沿海州から滿洲蒙古の地に入り、成吉思汗となつたといふ傳說を、少々傍若無人的に利用して綴り成した歷史小說に違ひない。然しそれはこの作の表面であつて、その實、この作は、歷史小說であると共に、一の政治小說なのである。この作が人を喰つた如く、又傍若無人の如き印象を與へるのは、この作が一面に於いて政治小說たる役目を果さなければならぬところから出てゐる。それでは、この作に含まされた政治的イデオロギイは何かといふと「支那問罪」といふ角書きによつても察せらるゝ如く、勿論、折柄勃發した日清戰爭を當て込んだものである。だがその政治的イデオロギイを指摘するに先立つて、この作の内容を紹介することにしよう。

文治五年閏四月、義經主從は奥州の高館を落ちて秋田から蝦夷に渡つた。この作では、義經は最初から賴朝と諒解の上、蝦夷唐太から山丹蒙古を經略するつもりで渡つたことになつてゐる。高館にゐる間に山丹蒙古の形勢を探知して置いたのである。そこで宗徒の面々三十餘騎、兵卒三千を率ゐて秋田から蝦夷地に亙り、蝦夷酋長の手引で唐太に至つて、こゝに越年し、翌建久元年五月を以て山丹、卽ち今の沿海州に押渡つた。かくて、十五年を經た元久元年には、古の肅愼、靺鞨、契丹の地は勿論、蒙古一帶の地を平定して日本の武勇仁義を廣く海外に輝やかした。然るに、

端なくも隣國たる夏（國の名）のことから、當時支那本土に勢力を張つてゐた金の國と確執を生ずることになつた。

金は元來契丹の一部族から起つたものだが、その頃遼國が北支那に蟠居して宋を苦しめてゐたのを見、巧みに宋を唆かして力を合せて遼を滅し、さて今度は宋を北支から逐つて揚子江の南に押し詰めて自ら支那の大皇帝となつたものである。義經が蒙古を平定した頃の帝を永濟（廢帝）といつたが、この頃金の暴威は益々甚しく、宋を抑へつけたのに慢じて、大陸の盟主となる大野心を起し、四隣へ使を出し、高麗、夏、蒙古の諸國等に、征伐されぬうち早く金國に臣屬せよといふ催促狀を送つた。然るに、義經はこの使を得て、勃然と怒り、對等の交際とあらば格別、臣屬とは以ての外である。强て臣屬させたいなら弓箭で相手をしようといつたので、金國は事面倒と見て、義經の方は差し置き、專ら夏主を屬國とする方策を決めし、早速それに着手した。

義經の方でも、金の野心を看破し、先づ高麗及び夏國に使をやつて、蒙古、夏、高麗の三國間に對等の平和條約を結んだ上、更に金に人を遣つて、義經は、夏、高麗の二國を金の屬國とは認めない、蒙古と同じ獨立國として對等條約を結んだから、金もその心で交際して欲しいといはしめた。金は大に怒つて、すぐ樣大兵を起して義經及び夏國を擊たうとしたが、右丞相顏承輝の策を用ふるに決して、大兵を起すことは見合せとした。義經もこの赴きを聞いて、金の計略を察し、早くも増尾十郎權頭兼房を夏國の都靈州に遣はし、密々施すところがあつた。

その中金國からは邊賢濟といふものが一千餘の兵を率ゐて靈州に向ひ、夏國のしかとした返答を直々に聞くことになつたので、先に義經の威勢と、大臣董仁夫の硬論によつて獨立の條約を結んだ夏國では、又々心配を始め、軟派の大臣畏吾兒を先頭に、金に臣服しても可いといふ議論が再び流行し、遂に邊賢濟について、改めて金國へ臣事する旨の使者を出すことに定まつた。

然るに、その夏國の金國に臣事する約定に調印の當日、義經の使節兼房は、かねて邊賢濟が無禮の振舞があつたの

を口實に、いきなり部下を率ゐて邊賢濟一味を靈州から追ひ拂ひ、臣事の約定の交換を邪魔立てした。これが義經の計略であつた。兼房は、邊賢濟を追ひ拂つた上、夏の國王に謁見して、重ねて利害を述べ、締盟國の蒙古に何の斷もなく金の屬國となるのは、條約違犯である。支那は大國、蒙古を小國と思うて大國の勢ひに從はうといふのは、極めて淺薄な愚見であつて、國の强弱は、國土の狹廣、人民の多少で定まるものではない。夏は安心して三國同盟を守り、支那の威嚇をきいてはならぬ。若し支那が兵力で夏の獨立を侵すなら、義經は卽時援軍を出し、支那兵を退けて差しあげる。夏國が若し支那の屬國となれば漠北の形勢が一變して我が蒙古にとつても一大事であるから、夏國が何うしても支那に屬するといふなら、先んずれば人を制すで、義經の方で先づ夏國を攻めるかも知れない、と、手强く夏主の反省を促した。夏主も、兼房の言を聞き、又大臣董仁夫等の諫言によつて、實にもと悟り、支那への屬國たることは斷然拒むことにした。

金では邊賢濟が不成功で還つたのに痛く怒り、硬派の將軍連中は今度こそ早速征伐をと主張したが、又も例の顏承輝が、いや別に計略があるから、今一度自分に任してくれといふので、さういふことにした。顏承輝は内々夏の朝廷の專大黨との間に使者を往來さして種々計るところがあつた。

折柄義經は痛風の病に惱んでゐたが、或る日夏の朝廷から使者が來て、夏の都靈州にはいゝ溫泉があるからといつて、招待した。突然の招待なので、部下は皆疑つて行くなといつたが、義經は義經で、兼て又考ふるところがあつたので、表面喜んでその招待に應じ、僅か一千の同勢で、御簾中卿の君と伴に夏の都靈州に向つた。元久二年八月のことであつた。

義經の察した如く、溫泉招待は、顏承輝の旨をうけた夏國の專大黨の陰謀で、義經を靈州に引寄せて置いて、支那の大兵を續々に呼び、夏主と義經を一度に片づけようといふ巧らみである。だが義經の方では、表面それに乘せられ

た風をして、この機會に夏の朝廷を根本的に改革し、支那を徹底的に打ち懲らさうといふ腹で、靈州に向ふときもうその用意はして置いた。

義經の病氣は間もなく癒つたが靈州に着いて十數日經つと、果せるかた、支那の大軍は突然靈州近くに現れたので、狼狽した夏の君臣は又々和戰の方途に迷うた。義經はこれを抑へ、密々手配して置いた數萬の精兵を動かして、支那の大軍を見事に漢江で打ち破つた。王城では、顏承暉と事大黨の策謀で、國王を義經の應援に出した上、內應を試みたが、義經の指揮が宜しきを得たので、それが成功せず、却つて支那側の敗北を重ねることゝなり、支那軍は這這の態で本國へ引取つた。

かくて義經は、夏國の朝廷の改革をそれぞれ處置して本國に還つたが、改めて金國問罪の師を起した。さうして勿論向ふ所敵無く通化、薊州、懷柔などを陷入れ、金の國都燕京、今の北平に迫つた。金の方でも、或は辯士を使つて嘆願したり、反間の計で後方擾亂を試みたり、日本と親交のある宋の國を調停に頼んだり、種々小刀細工を弄するが、遂に百計つきて和を請ふ。義經は、別に支那本國占領の所有慾から兵を起したのではない、仁義問罪の師であるからと、金の請を許してやる。條件としては、夏の獨立を認め、侵地を返すこと、宋に對しても同じ、金帝は燕京地方（今の河北地方）を義經に委任し、汴京に遷ること等々であつた。

かくて目出度く凱旋した義經は、餘威に乘じて蒙古の隅々まで平定し、遂に建永元年正月大汗の位につき、仁義主汗（ジンギスカン）と名乘つた云々。

以上の梗概を讀んで、炯眼な讀者は既に察してゐられるであらうが、義經、夏、金の三國關係は、卽ち日本、朝鮮、支那の三國關係のカムフラージュである。金の夏に對する態度は、支那の朝鮮に對する態度であり、義經の兩國に對する立場は、そのまゝ日本の淸韓兩國に對する立場である。勿論この小說の書かれたのは二十七年の九月十月の

間であるから、日清戰爭の進展を全面的に取り入れることは出來なかつたが、大戰の發端たる成歡牙山の役より、漢江の戰として描かれてゐる。卽ちこの小說は、日清戰爭に於ける我が國の主張の公正なることを宣傳し、支那の敗北、日本の大勝を豫言して士氣を鼓舞せんと試みたものであり、我が日本の大陸進出を豫言し、乃至慫慂したものである。

義經が大汗の位につくときの詩詞に――

但し此大陸を統一するの績は未だ半に至らずと雖ども我日本の御光華は旣に遍く世界に照り渡ること義經が御幸公なりと叡覽を垂させ給へ、一統功全く成るを俟ち陛下に奏聞し此大陸日光の照さん限りは日本の大君に屬させ奉らんは義經が願なり云々

とあるのは、當時の日本人一般の思願であり、國權伸張論者の理想とするところであつた。

此の小說は、漢江の勝利までは、日本の主義主張の公正仁義なることを述る宣傳小說で、よく實際の形勢を捉へてカムフラージュしつゝ書いてあるが、漢江の勝利から支那本土への攻入りの條は、擬痴の妄想の所產であり、從つて士氣の鼓舞、激勵と共に、支那の策略に對する警戒を忠告する氣味も見える。遊說緖士の手に乘るな、後方攪亂の用心をせよ、他國の調停に注意せよといふなどは、皆その忠告と見て可からう。

作中で、描寫の筆が最も活き活きと動いてゐるところは、夏の朝廷の形勢、事大黨と日本黨の爭ひ、夏國に對する兼房の忠言、漢江の戰などの場面であらう。カムフラージュの程度を示すため、文例に一二引けば――

此に夏王の玉體の上および其朝廷宮中の事を尋ぬるに（中略）御寵愛第一の女御閔氏と云へる美人後宮を專らにして自ら后の樣に待遇されて閔妃と呼ばれ（中略）閔妃は漸く廿二歲の女盛り其美色は世にも稀なる美人の上に女性に似なく才氣還しく、男子も及ばぬ程に怜悧なる質なれば、深く國王の寵心に適ひ何事も言ふが儘に行はれ威勢尤も時めきたり。されば閔妃が父兄一門の輩は外戚たるを以て何れも重く用ひられ、中にも閔英駿、閔英煥、閔英商な

んど云へるは無智短才の小人ながらも文武の重官を帶て富貴に誇り、今の世にて閔家の一族にてあらざらん輩は人非人なりと罵りて我もの顏に振舞ひたり（第七回夏王の朝廷）

閔妃は閔妃、閔英欽は閔泳翼、閔英俊は閔泳駿、閔英高は閔泳鎬である。十郎權頭兼房の忠言が、二十七年七月の我が公使大島圭介の韓帝への忠言にそつくりなのは、いふまでもない。今一つ――

果せる哉八月十五日と申すに支那金の將軍阿寶器、攝子誠、葉奇鳥等その勢凡そ十萬餘騎の大軍にて夏國に亂入なし所々の勢を打取り破竹の勢を以て十八日には既に靈州の京城より三里の所まで押寄たり（第十回内應の陰謀）

阿寶器は左寶貴、攝子誠は聶士誠、葉奇鳥は葉志超である、何れも成歡牙山で日本軍と戰つた大將連である。推して知るべきであらう。

たゞ一つ櫻癡の烱眼ともいふべきは、日清戰役で日本が勝つた後、夏即ち韓國で日本黨が志を得て政治改革宮廷改革をやるが、その際、義經の口をかりて、急激な改革をしてはならぬ、又私憤を晴らしてはならぬ、尊王の志を失つてはならぬと警告してゐるが、事實に於いては、役後の韓國政界では急々の改革が行はれ、私憤の晴らし合ひが行はれたので、混亂して大騷動となつた。韓國の如き未開積弊の國に對しては、櫻癡がこの小說中に述べてゐる如き手心が大に必要であつたに違ひない。

『義經仁義主汗』は、櫻癡作の政治小說中で特異な位置を示すものである。櫻癡は從來暴露的政治小說に終始して、末廣鐵腸流の國權伸張小說に筆をつけなかつた、然るにこの小說に於て始めて國權伸張意識を寓した政治小說を試みた。且つ歷史小說は從來櫻癡の得意のものであつたが、歷史小說と政治小說とは別々に展成して、兩者混じたことはなかつた、然るに、今此の『義經仁義主汗』に至つて、この二潮流が合一したものと見ることが出來る。さういふ意味で、この小說は、一讀いかにも一時の戲作らしいものながら、二重の意味で注意すべきものといふことが出來や

う。（尤も櫻痴の歴史小說は、いつも多少のイデオロギイを伴ふのが常であり、『天竺徳兵衞』（二十五年刊）などにも日本人の海外發展を奬勵する意を暗示したところがなくもないが、然しこれを以て明白に政治小說とすることは尙早である、矢張り『義經仁義主汗』を此の種の歴史的政治小說の第一とすべきである）。

『張嬪』一名『朝鮮宮中物語』

櫻痴居士手稿と題してゐるが、井上角五郎氏が近代韓國史を書くつもりで蒐集した材料を、手塚猛昌（庚寅新誌發行者）から示され、それに據つて一氣に書き下したもので、純然たる櫻痴の著作とはいへない。又内容も、『朝鮮宮中物語』といふ副題が示して居る如く、朝鮮宮中の妃嬪間の寵愛爭ひを中心にした近代朝鮮政變裏面史ともいふべきものであつて、小說ではない、內容からいへば歴史、側面史に屬すべきものであるが、たゞその文字がいさゝか演義的色彩を帶びてゐるのみである。從つてこれを純粹の政治小說の中に數へるのは、嚴密にいへば誤りとすべきで、本來省くべきものであらう。たゞ當時旣に一種の政治小說視され、今日尙ほその概念で扱はれてゐるから、たゞ一言だけして置く。

○哲宗（李昪）薨御の事
○今王（李熙）即位の事附大院君攝政の事
○張内人の事
○張内人嬪御の事附閔趙金三妃の事
○大院君盛衰の事

○張嬪流浪の事
○閔族失政の事
○京城騷動の事附閔妃身替の事
○壬午兵亂の事
○甲申變亂の事
○張嬪最期の事

以上の目次によつて知られる如く、幕末の頃より日淸戰爭直前に至る約三十年間の朝鮮政權移動裏面史であるが、中心をなすものは大院君と閔妃との對立である。此の書は張嬪を題としてゐるが、張嬪の事件は實は一挿話で、張嬪の運命が不思議なことに、この大院君對閔妃の對立に絡み合つて來て、遂に閔妃の爲めに無慘な最期を遂げる、そこに可成り小說的な興味があるから、櫻痴はわざとこの挿話を主にしたものであらう。素生の賤しい張某が、美人の故を以て國王の寵を受け、王子を生む。それで王宮で嬪御として貴ばれる、それだけなら閔妃とてまだ我慢が出來たであらうが、政治上の反對黨即ち閔妃排斥黨が騷動を起す度に（即ち明治十五年壬午の變、十七年甲申の變など）、此の張嬪が國王の寵があり、王子の母である故を以て、閔妃に變へるにこの張嬪を以てしようとかゝる。かう政治的に利用されて來ると、閔妃は我慢が出來ず、慘々責め苛なんだ上、手づから殺してしまふ、その殺し場から、張嬪の亡靈が出て閔妃を惱ますあたりは、怪談の味ひがたつぷりある。この邊は櫻痴の創作かも知れない。

閔妃はかくて張嬪の亡靈に惱まされ、その靈を慰めるために、張嬪の生んだ王子を義和宮と冊立した。

つまり朝鮮の內政の如何に紊亂した亡國的のものであるかといふことが仔細に說かれてゐるが、別に櫻痴の政治的イデオロギイが出てゐるわけでもない。價値は兎にかく、性質からいへば一種の際物的作物であるといつて可い。

『怪　物　屋　敷』（合『伏魔殿』）
『噓の世の中』

以上二篇を合して『伏魔殿』の一册となつてゐるが、前後二編に分れてゐるから二話を合して一話に作り替へたのではない。二話は依然たる二話である。而かもその二話の趣旨が何れも一種の伏魔殿としての社會の暴露諷刺にあるところから、これを合して『伏魔殿』と名づけたものであらう。

作の順序よりいへば、『怪物屋敷』を後とし、『噓の世の中』を先とするが、『伏魔殿』に於ては、『怪物屋敷』を前編とし『噓の世の中』を後編とする。今伏魔殿を語るにも、この順序に從つて、『怪物屋敷』から語ることとする。『怪物屋敷』については、正直をいへば、さう多く語ることが無い。憂世の翁といふ某居士の分身が、さる妖怪屋敷を訪れてそこに出沒する種々な妖怪を見た物語である。妖怪屋敷とは此の日常社會の裏面のことであり、出沒する妖怪とは、この社會の裏面にさらけ出される淺ましい人慾を妖怪化したものである。例へば第一回大鯰の怪に於いては、上級官吏の藝者遊びの暴露、第二回泥鰌の怪に於いては、下級官吏の立身出世法、その運の果敢なさの暴露、第五回怪草に於いては、地獄の火草に等しい會社の内幕、株主の内情等の暴露、第七回は奇夫人の怪に於いては、貴夫人の奢侈生活の暴露など都合十九回十九種の妖怪の物語が、いかにも面白可笑しく述られてゐる。勿論、例のスケッチ流で綴つた趣向も何もあるのではない、たゞ觀察と文章の妙が身上であるが、その觀察も、何れかといへば前に度々使つたものもあり、諷刺的戯筆としての性質上止むを得ないとしても、又かと思はれる節々もある。だが時事に觸れたごーもとした當時的諷刺もなくはない。第八回當聞の怪の如きがこれである。元來新聞と稱するもので、新聞に

その逆である。それでは賄賂とは何かといふに、先づ賄賂の定義から始めなくてはたらないが、賄賂とは、下の者が內々上の者に贈つて、自分の志願を叶へさせて貰はうとするものである、賂賄はそれと反對に上の者から下の者に賂つて志願を叶へさせて貰ふ性質のものをいふ。議院に硬論を唱へる議員がある、政府の議案がその爲めに阻止されて、政府にとつては一方ならぬ邪魔になる、その際にこの賂賄を用ひると往々にして思ひ通りに成功する。賂賄といつても必らずしも現金のみと限らない、或は山林拂下げ、或は某々の請負仕事、或は某々の官吏職などがこれに用ひられるといふ。此の頃議會に吏黨なるものが出來たのは、皆この賂賄の致すところであるが、表面侃々諤々の民黨の中にも、隨分この賂賄が目的で動いてゐる人がゐたと聞くから、櫻痴の諷刺は必ずや種々の見聞に基づいてゐたに違ひない。勿論第十四回寵商御用商人の怪の如きブルジョア生活の穴探し、第二、三回大猫小猫の怪の如き花柳方面の消息の素破抜もあるが、それ等は一々擧げずともであらう。

後編の『嘘の世の中』は政治小說ではないが、櫻癡の社會諷刺中その深刻さの點で屈指のものゝ一つである。たゞ政治小說的分子が少ないので、餘り詳しくは語らぬが、櫻痴作中一讀すべきものたるは論がない。この作の裏にこつてゐる自嘲的懺悔の調子が殊に讀む者の心をしんみりとさせる。

此の作の主人公となるものは始め鴉勘齋後嘘吐彌次郎兵衞と名乘るインテリゲンチヤである。名は例によつて極めて戲謔た可笑しなものであるが、これが半生を讀書學問に過した典型的インテリの一人であり、明らかに作者櫻痴の分身と見て可い。この勘齋が五十四の時人間社會の現狀について疑ひを起した結果嘘が社會一切の本質と發明し、從來「學問文藝理論德義」のみを眼中に置いて來た自身が、「無類飛切の大馬鹿」、「世界隨一の間拔」であつたことを悟つて、人生五十年思ふ存分振舞つて世間人並に面白可笑しく世を送らうと發心する。その述懷に曰く、——

嗚呼この勘齋十萬圓の負債をして、買込んだる貨物は棚に積たる百五十冊の草稿と、胸中に蟠まつたる屁理窟糞智

識、その外は世間の惡說不評判、よし〳〵此三ツを唯今さらりと捨て了ば、取も直さず、借財を清淨と償つたも同樣の氣持。いざ斷然と其氣に成て、此からは和光同塵、浮世の塵に交らん（第一回）

勘齋の身の上、何ぞ作者櫻癡と似たるやである。勘齋この時五十四といふ、櫻癡は天保十二年生れといへば、この作を書いた二十八年には五十四五の筈である。櫻癡が自家の體驗を吐露して警世識人の具にしようとする意圖が可成り濃く出てゐる。

嘘吐彌次郎兵衞と名まで改めて嘘と慾の世界に若返つた勘齋は、その甥岩成眞鐵、姪みさをの二人にも自己の心機一轉を語つて二人を得心させ、眞鐵を打股金多、みさををお茶羅と改めて、浮世へ出直しの道づれとする。志願達成の第一歩として、まづお茶羅を誘つかして內閣の大官搔括伯の妾とし準備工作を遺憾なく施した後、日清戰役の企業熱に乘じて先づ世へ出したのは、占領地の遼東滿洲を利用しての新日本殖民會社である。この會社はその思ひ附きに加へて、その筋の後援があり、株主募集は大成功で、嘘吐は巨萬の金を掴み、一躍大實業家と伍するに至つた。然し嘘吐にしては、眞物の事業は何うでもいゝので、證據金と株の賣拔きが目的なのである。從つて會社そのものは、暫時好景氣にモチヤモチヤした後、何時とはなく立消えになつてしまふ。社會の立消えと共に搔括が內閣から退職することになり、嘘吐の實業界に於ける勢力もなくなつて、元の勘齋流の隱居に戻りかけるが細工は流々で、搔括の後役たる桃井子爵に再びお茶羅をはめ込み、紳商の加古川某を抱き込んで鑛山會社を盛り立て、再び何萬といふ富を手に握ることになつた。

お茶羅は元來賢女型の物堅い女性であつたが、叔父の訓誡で心を入れ替へて當世向きの女性となつた。搔括全盛の間は叔父のために兄のため自分のために宜敷く彼をあやなしてゐたが、その退職となつては、忽ち後足で砂をかけてわれからお暇を貰ひ、一時池の端で好き放題の道樂生活を試みるが、叔父の失脚と共に女教師に化ける。だが再び叔

父の旗揚げの餌として桃井子爵の妾となつて思ふさま腕を振ふ。だが池の端時代の亂行から妊娠となり、流石の妖狐女性も大に狼狽するが、やつと七月兒として桃井に押しつける、

お茶羅の兄打股金多は、妹のおかげで掻括伯のお聲掛り、三角會社の理事といふものになる。三角會社とは可笑しい名だが、「上等大仕掛の際物師、早耳が資本で小股をすくふを專一とする營業といふのがその本體で、德義廉恥人情の三をかくから、三角會社といふ。社長を大神聽郎といふが、これ亦表面紳商中の老雄と見せかけて煮ても燒ても喰へぬ代物である。金多は緣あつて內閣の利け者差洲瀬（サシスセ）閣下の若夫人の妹（人三化七、根性曲りの大變な女）に思ひつかれ叔父の說諭で有り難く頂戴したところ、社會の信用が一段と加はり、押しも押されもせぬ當世の才子紳士となつた。だが流石に叔父の敎訓を服膺してゐるだけ、金錢は肉親も他人といふので、叔父の失敗した時には、見てゐて指も出さなかつた。

三角會社の社長大神を鬼とすれば、藝妓上りのその妻お鹿は鬼神とすべきであらう。大神は元來米相場の合百師であつたのだが、この鬼神の女房を得てからこれを玉に使つて、兎もかくも三角會社の長といふ紳士紳商の仲間に入つたしたゝか者である。彼の三角會社も長官が掻括から桃井になつて一時監督嚴重を極めて弱つたが、そこはぬからず打股を使つて局長の紡地曲郞（つむぢまがらう）を藝妓で抱き込み、以前にまさる好都合となつた。但し局長のお相伴で大神も（下地は大好き）、度々藝妓遊びをするので、お鹿の大嫉妬となつて、待合怒鳴り込みの喜劇を演ずる。その癖そのお鹿もさる者で、一方でそんな騷ぎをしてみせながら、道具が替ると鈍帳役者の坂東變佳との濡事となるのだから、恐れ入つてしまふ。

この外、彌次郎兵衛が再擧の道具に使はれて、鑛山會社に大金の資本を出す大名華族の花森菜と飛彈高山の大地主馬草肥藏の二人は、全く好い道づれといつて可い。

然るに、針狼新聞たるものが、何處から聞き込んだか（政治的利害上反對の立場に立つ連中、つまり桃井等の得意を快とせぬ搔括等の一派から聞いたかの如く暗示されてゐるが）、「社會の伏魔殿」と題して矢鱈に暴露し出したので、一味連中は大に狼狽し、取り敢ず嘘吐の策を用ゐて新聞を買收するとなつた。ところが、買收に當つた大神と打股が金を出し惜んで壯士を使つたところ、壯士達は新聞と妥協して逆に大神等を脅迫し、途方もない大金をしてやられることになる。かくて壯士と新聞の方は何とか彌縫したが、今度はこの脅迫が警察の耳に入り、壯士連中の検擧となつたので、折角の彌縫も役に立たず、政府との腐れ縁、三角會社のからくり、鑛山會社の内幕、藝妓遊びの淫靡などが、一切合切ほぢくり出されて社會の指彈を受け、僅か二三年中に一味何れも無慚な境涯に陷入つて、榮華の夢は一炊の間に消え失せてしまふ。たゞ嘘吐のみは、早くかゝる破局が來るのを見越して、かゝる連中から足を洗ひ、もとの鵜勘齋となつてゐたので、その恥辱を免れることが出來た。

勘齋は、誤つた一念發起から紳士仲間に入つたことを深く後悔すると共に、早く足を洗つて仲間から拔け出たことを大に喜び、仲間の落着を見てかう述懐する。

鵜勘齋はから〳〵と打笑つて「成ほど世の中と云ふものは皆かうしたものだなア、空しく蓬蒿の間に沈淪して一生の[illegible]を嘆き、梵天帝釋或は修羅天三惡道の魔神に願を掛け、あはれ此勘齋をば一度は豪富の紳士になしてたばせ玉へと祈り漸く紳士の社會に入て見れば實に呆れかへるの癡冤とも云ふべき淺ましき境界。傳へ聞く愛宕に上つて天狗になれば日に三度の苦みありと、三度は愚か紳士に加つて天狗になれば晝夜おつ通しの苦みは人天の二道を離れて四道の中を彷徨ふに異ならず。夫を何となれば金儲の口なりと見れば相互に競爭て我占めんと思ひ、權謀術數を用ひて人を仆し我利を計る、其裏の蒐引は是れ修羅道の苦なり。貴顯に諂ひ權門に媚び、可笑も無きに笑ひ[illegible]の如き[illegible]を[illegible]し、飲たくも無き酒に諂ひ、食たい時に飲も食はれねば是れ餓鬼道の苦なり。[illegible]株を費へては品貴の劍の山

に追上され、當なしの借財に由て高利の血の池に陷とされ、執達吏の强制執行は牛頭馬頭の如くに思はれ、果は詐欺の罪にて遂に懲役の身となること、是れ地獄の苦なり。父子夫婦の情愛も無く兄弟朋友の義理も無く親疎も冷熱も渾て是れ金の世界、その金次第が肉體の獸慾を擅にし、母をして娘を口說せ姉の前で妹を愛玩び人間の恥を恥とも思はず、其甚しきに至りては金屛風裡に一牡數牝の戲圖を現じ却て風流の快樂なりと誇るものあり、嗚呼人間の倫理それ將た安にかある、是れ畜生道の苦なり。斯る苦を以て紳士の境界となし其苦を苦とも思はず相與に其樂となすものは噓を以て人を欺きまた己をも欺く者なれば社會は實に噓の世の中ならずや。天道幸にいまだ此勘齋を捨たまはず、早くこの諸惡道より救はせ玉ひけるこそ有がたけれ。あな忌はしの噓の世の中かな、あな恐ろしの噓の世の中かな（第四十四回）

再びいふ勘齋の生涯何ぞ櫻痴に似たる、である。彼は讀書人として出發した、明治十年以後はいつとはたく紳士紳商に入り交つて、物質的榮華に誇り顏をした、女遊びもした、池の端御前の異名がそれを語つて餘りがある。然るに歌舞伎座の失敗、吉原賄賂事件から、忽ち一顚、榮華の夢は一炊の間にさめ、元の讀書人に戾り、著作三昧に入つた。この間、櫻痴は表面たゞ洒落のめし、戲れちらしてゐたやうに見えるが、聰明な彼のことである、胸中無量の心事が沸湧したことであらう。又、その轉變の際に、種々生きた社會學を學んだことであらうと思ふ。その悔恨と開悟とが、戲作的諷刺の形式を借りて表現されて後に來る人々の鑑戒にもと示される。櫻痴がかゝる小說を書く氣持ちは私にはよく分る。表面、人を茶化したやうなもの言ひをしてゐるが、その內心は悲壯なものである。櫻痴の場合は、人を嘲謔することは同時に自家を嘲謔することであり、自己を犧牲にして、「おれがいゝ手本だ、諸君はおれのやうになつてはならぬぞ」といはないと、鑑戒の目的を達しないのであるが、櫻痴はそれといはずに、度々讀者にかう宣言してゐるのである。上の引用文でも「天道云々」以下は櫻痴の本音で、彼は自分が豐かな、だが汚ない紳士生活を淸

算して貧しいが淸らかなインテリ生活に戻り得たことを、心より幸福だと感じ、同時に、「おれのやうになるな」と叫んでゐるのである。私どもは笑ふべきではない。

だが、櫻癡の鑑戒の意味はそれとして、かゝる諷刺的暴露小說は一面又、當時の風俗史、社會史の資料とし貴ふべきものをもつてゐると思ふ。彼の知識が深い體驗の裏書きを得てゐるだけに、益々さうである。この點でも、櫻癡の小說は、別に見直さるべき價値があると信じてゐる。

『滑稽小說 秘密機關』

『秘密機關』は後に『政界大策士』と改題されて春陽文庫第一編に收まつてゐる。名の如く暴露的政治小說であるが恐らく櫻癡の作物中この種の暴露的戲著の最後のものであらう。此の頃（三十年）から櫻癡は最後の事業として修史のことを眞面目に考へ、專らその方に力を注ぎつゝあつたらしいから、自然に、彼としては一種の遊戲文學であつたこの種の小說が、出て來なくなつたものであらう。勿論一種心境身境の變化からして、かゝる政治界の暴露に興味を感じなくなつた點があつたかにも感じられる。何れにしろ、戲作ながら種々の意味で紀念すべき作品だといつて可い。

櫻癡がこの小說で對象にしてゐるのは、明治二十九年後半から三十年へかけての所謂松隈內閣たるものと、この內閣を中心にした政界、政府對政黨の驅引である。作の基調としては、例の如く暴露的なものであるが、警告的豫言的な意味も多分にこもつてゐたらしい。その邊のことは、作中の人物が單に寓意たるに止まらず、假作的な點があるのに見ても知れるし、こゝに描かれた政局の推移と實際のそれを比較してみてもさうと首肯されよう。從つて誇張の點も

可成りあるが、然し或る點ではこゝに描かれてゐるよりも、更に更に甚しい醜狀もあつたらうと思ふ。

この作の大體の筋は、櫻痴の序言で盡してゐるといつて可い。

噫政界の秘密は斯の如く陰險なる乎、議院の擒縱は斯の如く奇變たる乎。居士は門外漢なり、之を知るに由なきなり、但し世間の傳說する所を聽けば、醜怪、卑劣、貪吝、狡猾、たゞ黃金の令する所に是れ任せて、意見議論を上下するに似たり。噫、これ果して眞なる乎、居士これを知らざるなり。姑く聽まゝを錄して、所謂買收政略に於ける秘密機關の實に然るや否やを江湖の博識に問はんと欲するのみ。

即ち櫻痴の描くところは全然マンモンの走狗と化してしまつた當時の政治社會の醜態である。次に章を追うて、この小說の梗概を述べて置かう。

(一)の「その出身」といふのは、先づ此の作の主人公ともいふべき目鱠辛(櫻痴は例によつてかういふ人物の名に持前の惡謔氣分を存分發揮してゐる)、即ち櫻痴の語をかりていへば、——

日清戰爭後より俄に世に知れて、某株式會社の理事、某合資會社の取締役、曰く何頭取、曰く何委員長、曰く相談役、曰く監査役、曰く評議員、定議員、幹事長、檢査役、世話役と、毎日の諸新聞紙廣告欄內に、其姓名を載せざる日無く、殊に鐵道、鑛山、製作、開拓等の事業に就ては、相手變れど人變らずで、何時でも發起人創立人の初筆

云々

といふ俄富限の流行紳士で、「姓名こそ新顏なれ、金力と智慧の働では、從來東京で五本の指を折られたる豪商等に一歩も讓らぬ」豪傑であるところの目鱠辛の出身についての噂話である。(二)「邸宅の狀」、これも宜しく大々的成金趣味を發揮した金ピカの豪華版的邸宅を想像されたら可い、この邊は本文について讀むべく、引用を許さないから、簡單に片づけて置かう。

本文は是の虎進の秘訣から始まる。これはこの話でも肝心な部分で、つまり日鯖辛畢生の金儲けの秘訣を論じたところである。幸石によると今日は冒險の世界である。大冒險をやるのが金儲の第一義であるが、それも自分の金を出すのは愚の骨頂で、初めから他の金を用つての大冒險を張る、さうして儲かれば根こそぎ取り込み、損になるとヘイた様ならで、些の怪我もなく引込むのだ。だから冒險仕事には、何としても組合員即ち相棒が必要だ。相棒の第一は資本家即ち金をつかはれる人物、次に必要なのは、權力ある「地位家」即ち要路大官の肯動である。その地位家を利用するのは、賄賂や世辭や阿諛などの舊い手では駄目で、威迫の新手に限る、即ち饗應から女遊び、妾の周旋、花札遊び、株の共同實買、官省の請負仕事の秘密連盟といふ風に次第に淺いところから深處に引き込んで、此方の味方にする、さうして彼が思ふやうに動かぬときには、これ迄の魂膽秘密を暴露すると威迫して動かす、もつともその代り儲けたときは、タンマリ裾分けをすることを忘れてはならぬ、云々。櫻痴はかういふ秘訣で成功した連中を知つて書いたものか、知らずに空想したものか、恐らく何か見聞するところがあつてから說き出したものであらうが、實に政商、御用商、乃至一派の山勸ブルジョアの得意の手口を暴き出して餘蘊なしといふところである。

總じてこの日鯖辛は、何かモデルがあつたらしいが、それは單一モデルでなく、綜合モデルといふべく、日清戰役を機會に俄に勃興した惡性成金連中の一派を一括してモデルに用ゐたものらしい。そのつもりで讀むべきである。(同)の「御手ぬかり」から、買收政略の描寫に入るのであるが、その前に政府對議會の形勢を一寸述べたいと、櫻痴の諷刺がよく吞み込めないところがあらうから、この邊の事柄を一寸述べて置かう。

明治二十九年八月伊藤內閣は辭職したが、辭職の原因は政府で專任外務大臣に大隈重信を入れ、大藏大臣の後任に松方正義を迎へようといふ議が起つたとき、松方には何人も異議がなかつたが、大隈に對しては、當時自由黨の首領で伊藤內閣の內務大臣をしてゐた板垣退助が極力反對し、その結果閣內不統一で總辭職となつたのである。そこで、後

任について種々元老間に詮議があつたが、結局松方と大隈に內閣組織の大命が降り、總理格の松方は、樺山資紀、高島鞆之助に諜つて、九月遂に松隈內閣が成立した。樺山は內務大臣として入閣し、松方の總參謀兼議會係となつた。

ところで、この時議會に於ける政黨關係を見ると、自由黨は最多數で百三人、進步黨は九十三人、國民協會たるものが二十四人、無所屬中立その他八十人である。外務大臣大隈は進步黨の首領であるから進步黨は大體に於いて政府の味方と見て可い。種々小面倒な條件を持ち出しても、要するに味方である。自由黨はといへば、前內閣時代からの行き掛りがあるので、新內閣正面の敵手となる。國民協會は元來が政府黨として出來たものであるが、伊藤內閣が自由黨と妥協して板垣を內務にして以來、政府反對黨となつた。松方や樺山、高島は薩人であり、國民協會の事實上の首領西鄕從道との關係上、協會內部の人間とはいろいろ緣故があるが、協會總體としては、贊否不明、所謂是々非々的態度を持してゐる。それで政府が議會に於いて賴むところは、進步黨の九十三人と中立その他の八十人中の味方議員若干名だけであるが、然しこれでは議會乘切りの確信が何うしてもつけにくい。このまゝでは反對黨の方が多い。そこで、最多數の自由黨や洞が峠の國民協會に向つて、勸誘の裏面的魔手が動かざるを得ない。卽ち、黃金による操縱で、これを稱して買收といふ。これを應諾した議員は、表面尤もらしい理由を楯に自分の黨を脫し、さて議場に於て、又尤もらしい理窟をつけて政府に贊成するといふわけである。

此の小說の主人公目綸はこの際買收係に見立てられて、政府對議員の間に接衝するわけであつたが、この「御手ぬかり」は目綸が、議會係の大臣卽ち內相(樺山、小說には匿名)に形勢を報告する一段である。目綸の報告では、政府の買收係の手先が拙いことばかりやるから金ばかり要つて、効はない。自由黨の連中も、思ふやうに動かぬし、進步黨とて、皆々大隈の手下といふのでもない(事實、この進步黨は、舊來の改進黨と日淸戰役の時出來た對外硬の革新黨との合同したものである、改進黨は大隈恩顧であるが、革新黨系の連中は硬骨の士が多いので、必らずしも政府に

盲從するものではなかつたのである）。このまゝでは、政府の前途が危い。意外の結果とならうといふ。大臣も、目鏥の言葉に今更のやうに狼狽して、日鏥に賴む。そこで日鏥はこゝぞと、思ひきつて公然大規模に議員買收をやることをすゝめ、自分を買收政略の本締めにしろといふ。議員は平生高利貸から責められてゐるが、この高利貸が大半は日鏥の手下である。それで、一方此の高利貸からきびしく催促させ、一方買收の話を持ち込むと、何んな議員とて味方にすることが出來るといふのである。大臣は喜んで日鏥の策を容れ、内閣の機密費をその買收費に當てることにする。そこで日鏥の買收政策はいよいよ實行となる。（六）の「方正嚴直」（七）「化の皮」はその小手調べで、民黨議員の領袖たる甘利(あまり)某と政府の某局長骨拔(ほねぬき)某を待合で顏合せをさせ、彼等の假君子的體面をさつぱりぬがせて、先づ甘利に同志二十六人引拔の筋書を授ける。

（八）の「追加支出案」、甘利もさるもの、いよいよといふとき、日鏥に買收費の追加を申込む。それが無いといざといふときに受け合はれぬといふ、そこで二人が相談して、わざと買收された連中の味方喧嘩を始めた風をして、又又大臣から買收費をせしめにかゝる。その度に日鏥の懷中に莫大な金が轉がり込むのは、いふまでもない。

（九）の「依賴の手紙」では、買收のおかげで豫算案が先づ無事通つたこと、たゞ外務省の經費に多少の傷がついたが、これは、自由黨當時進歩黨の策謀であることなどが述べてある。別に日鏥が大臣の手紙で藥籠中(やくろうちゆう)といふ政治家兼實業家の株受渡しの急を救ふ話、（十）「孰(どつち)が失敗(しくじつ)たか」、（十一）「曖昧謝罪狀」は、骨拔局長と愛妓の閨着一條で矢張取り立てゝいふことはない、たゞ局長が吝嗇なので女の方の鼻息の强いだけが面白い。

（十二）の「石黑負高」と（十三）の「何が何か」は、環市電鐵の案をめぐつて日鏥等の暗闘、これの許可と政府への出資を條件にする一方、これの絡んで買收議員を操るため、石黑負高、京井決席、日鏥の三人が宜しく相談する一段、（十四）「作文意見書」、（十五）「無駄で無い」の二回は、前案を表面に立てゝ、中立議員買收の魂膽、議員達が

何れも表面に公正潔白を賣物にする可笑味など、（十六）「名望の力」目鯰と骨董屋、當時の成金ブルジョアの悪趣味たるいかゝものあさりへの諷刺である。

次に（十七）「熊運の御使」、（十八）「這々の躰」は、目鯰の買收策が露骨過ぎるによつて、進歩黨から尾先（尾崎）、犬神（犬養）を代表に抗議する、併せて、内閣大臣が進歩黨の申條をもつと十分聞き入れぬと、進歩黨も味方としての足並揃はぬとて、暗に獵官のことを匂はせる。目鯰はこの抗議をせゝら笑ひ、買收は議會の形勢の不安を鎭める唯一の策であり、畢竟進歩黨の無力から出てゐることをのべ、現金買收が獵官運動より後腐れなきため内閣にとつて安心である。買收政策に腹が立つたら内閣と手を切つてみたまへ、買收でいくらも味方がつくれるといふ。尾犬兩人目鯰の豪語を面憎いと思つたが、その通りなので這々の態で引下る。

（十九）「知事令夫人の候補」に進歩黨の領袖某が藝妓上りのヒステリイの妻君に不品行をとつちめられ、今に運動が奏效すると知事になれるから、その時はお前も令夫人だといつて和める話、かゝる家庭爭議は當時澤山あつたものに違ひない。

（二十）の「反色を示せ」、（廿一）の「反覆に當然」は買收組の秘密會議で、つまり何うで買收で悪評を買つた以上更に政府に大きく喰ひついて、交換的に相場所增設といふ利權を握つて、纏つた金を取らうといふ相談、これには豫算がすんだが、勸業銀行の件、金貨本位の件電車鐵道の件、外債の件といふ問題がまだいろいろあるから、それが議案となつた際、假に反色を示して政府の荒膽を挫ぐにある、目鯰が私利の爲めに買收に奔走し、内閣又私利の爲め（閣力維持の爲め）買收を行はせた以上、かういふ連中を相手にしては幾度も反覆の色を見せて幾度も買收費や利權を貪るのが議員の特權だといふのである、これは此の仲間の頭目たる關田風之助の說であるが、一同の代表意見と見て可い。ところが、この反覆を行ふに三つの難關がある、即ち第一、前の買收費が議會がすむ迄は借用證書になつてゐ

る、第二、日脩部下の高利貸が攻めて來る。第三、新聞紙の攻擊が喧ましい。だが、関田風之助はこの難關を鼻先で扱つて曰く、第一は、若しこの證書で出訴したらこれが内閣の醜態たることを暴露してやれ、第二、これはこの高利貸の猛攻擊を逆に利用して反覆する一口實とせよ（あまり喧しく攻められるので反對派の助力を受けるのだといふ。）第三、喧しくいふ新聞もあるが、却つて賞める方もあらうから、五分五分といふもの云々、實に此の自由黨の関田風之助の如きは、日脩以上の豪傑といふべきで、この小說としては、この一場は讀者に破顏大笑させるところであるが、然し眞面目に考へると、大笑どころではない。これを十五年前、板垣が岐阜で遭難した當時の自由黨と比較して何といふ變遷であらう。成る程彼等は過激であつた、粗暴でもあつた、政府を暴力で覆へさうとした、所在兵を擧げて官人と戰ふ盟約をした、名古屋城奪取の密謀をした、爆彈を製造した、軍用金强盗に入つた。然し彼等の眼中、國家民人の將來のと福幸いふものがあるのみで、私の榮利など考へるものが先づ無かつたのである。然るに待望の議會が開設されて七年、藩閥降伏政黨政治の曙光が見えかけた此の年に及んで議員の意氣は、かくの如しである。笑ふどころの問題ではない。櫻痴自身としては、十五年前帝政黨時代に散々意地めつけられたことを思ひ出して、「ザマア見ろ」と心中せゝら笑つてゐるのかも知れないが、これが幾分でも事實であるとせば、而して事實であるが、何といふ政治界の墮落であらう。當年の自由民權の理想も、光明も何處にある。不潔な阿堵物の分配に叩頭して或は妓に狂ひ、或は花札に夢中になり、議場では居眠りして、待合では徹夜する。議場の言行は場外の取引でもう決定してゐるのだから、居眠りでもするより仕事がないのである。偶々波瀾があると思へば、畢竟こゝに說く如き買收費釣上げの驅引が多い。恐らく明治三十年前後の三四年間は、日本憲政史上の最暗黑期といつても可いものを示してゐる。一切萬事支貴の金配下に歸した點からいへば、この頃を以て近世日本に於けるマンモニズムの全盛期といつて可い。（殊にこの反對黨の少なかつた點に於いて）。明治十年代に種子を播かれ二十年代に發芽した社會主義がこの三四年間に、勃然

と生長したのも無理のないところである。その餘勢が文學に及んで社會小說の要求となり、社會小說論となり、社會小說の製作となつた。この點からして、當時の政府も議會も共に(社會一般は勿論)、社會主義の發生生長に對して、多大の責任があるといへるのである。

(廿二)の「鐵拳騷動」は買收政策の一挿話ともいふべきもので、目鰭の手で買收された議員の一人が、その金で目鰭の愛妓を買ひ馴染んだ爲め、目鰭とその議員の間に鐵拳沙汰が起り、二人を中心に、大騷動となる話、これ亦、それもこれも金で收まつてしまふ。

(廿三)の「幣制論」(廿四)「船中の密議」(廿五)「得意の境界」では、話頭が新たな方面に發展する。幣制改革、卽ち金本位制の斷行は、松方內閣の唯一の功績ともいふべきものであるが、この問題を遶つても議員間に種々な思惑的賍引が行はれたといふ。上記三回はこの幣制改革問題に關するもので、目鰭はこれを利用して巨利を博さうとかゝり、雪見に托して、進步、自由兩黨の有力者を招き、この問題を利用して、諸會社鐵道の株券の賣買を試み、儲けた金は七分三分に分け取る方略を立てる。實に何といつていゝか分からない。

(廿六)「目鰭諫言」目鰭の買收奏功して議會も無事乘切りの見込み立ち、內閣も高枕安臥の出來ることになつたので、買收本文の大臣の一人膺巢膺友(高島鞆之助)から目鰭へ褒詞がある。そこで目鰭は、政界の形勢が底に不穩なところがあり、伊藤の手が自由黨、國民協會の二黨を動かして再擧を計る氣味があるからとて、大臣を諫め(廿七)の「內閣萬歲策」といふものを進める。卽ちこの議會だけ買收で切り拔け、次の議會では反對黨の氣勢を和らげるやうな八方美人主義は不可である。あくまでも買收政策を强行して、國家の爲めに最善の政治を行はなければならぬ。今や我日本帝國は世界を相手にして肩を比べ、負ず劣らずの一大强國と成る場合に臨んで居る大事の關所、こゝを通過には內閣諸公が非常の英斷を以て政治を行ひなさらねば、軍備擴張も、財政整理も、公債募も、工業奬勵も、

物產增殖も、何も彼も、逆も成功を見る譯には參りません（此言大に理あり）、かういふ際だから、藩閥だの、非立憲だのと世間から攻擊があつても議員連の蛙鳴雀躁は、意にかけるには及ばない（現に藩閥攻擊を看板にして、この藩閥のおかげで生きてゐる連中が多い）。新聞を氣にする大官方は多いが、新聞は買收と發行停止を勵行すれば、日本國中の新聞を政府方にすることも出來る。進步黨が買收に異議を唱へたなら、斷然提携を絕つたらよろしい。大隈が不平なら內閣から、出してしまふが可。何も一政黨に賴るに當らぬ。金さへあれば議會每に百七八十（當時の過半數）の頭數を味方にするのは、譯はない。要するに買收政策を固持して、政黨も、輿論も、元老も無視して國家の爲め邁進せよ、といふのが、日輪が應友大臣に進めた內閣萬歲策である。

だが此の邊から可成り警告的な意味が入つて來る。事實內閣萬歲策の裏には櫻痴の警告的意圖が動いてゐるのである。今のまゝで進めばかういふことにならうが、それで國家の爲めに可いのかといふ氣持ちが動いてゐる。讀者はそこを汲み取つて讀まなくてはならぬ。

（廿八）「反擊脅迫」、これは買收議員の交換的利權の一たる相場所增設の件につき、買收連と日輪との衝突で日輪の反對で彼等の請願が許可されぬ、その尻を日輪へもち込むと、日輪は表面急に正議を楯に連中の申出を排擊する、內實は、かうして防碍して置いて自分で甘い汁を吸はうといふのである。

（廿九）「橋本樓上」、日輪の親權、花柳界への勢力、花柳界を利用して、女どもの早耳を政治と相場に使ふことなど

（三十）「逆夢一覺」、買收強行の結果、議會では成功なれど、全國民の反對熾烈となり、買收議員は選擧にも歸れぬ始末、その上、約束の利權や官職は、人多く品少く、いざとなると、とても約束通りいかぬので、又々買收連の反對となり、內輪喧嘩同志打ち、內閣は慘憺たることになつたのみか、日輪自身、株式の見込みの大外れ、その他借金倒れ訴訟の失敗、內憂外患一時に生じて流石の大策士日輪も臺灣に落ち延び、夢輪覺足（ゆめわさめたり）と改名して、この小說が終る。

此の小說は三十年三月の初めに執筆したものであり、松隈內閣の最期は同年十二月であるから、櫻痴は內閣の最期を見てから此の小說を書いたのではない、だが大體の道行きは、この小說の豫想する通りで、買收に買收を重ねて政策を强行するつもりから、進步黨と手切れとなり、又利權の悶着や、輿論の反對やで自由黨や國民協會からも反對され、四面楚歌の中に野たれ死をした。その形勢が分つてゐても、樺山、高島等は藩閥中心の內閣改造延命策に狂奔し、世間から不死身と嘲けられ蠻勇內閣と呼ばれたのであつた。だが、かくすれば、かうなるといふことは、もう櫻痴が筆を擱くころには識者には見通しがついてゐたに違ひない、こゝは櫻痴の先見を誇らしめるより、大臣連の盲勇に恐入るべきところである。三十一年一月第三次伊藤內閣が成立したが、これは脆くも半年で倒れ、六月、大隈板垣の聯合內閣が成立して、初めて政黨內閣が出現することになつた。松方內閣の最期の惡足掻きは藩閥斷末魔の苦痛であつたといつても可い。

上記の如く、この小說には警告的豫言的な點が可成り多く入つてはゐるが、暴露的諷刺が主調となつてゐることは勿論で、これは作中の事件が大體は實際の政治界で動きつゝあつた通りに盛り込まれてゐるのでも知られやう。當時の新聞を見れば、この作を裏書きする記事は文獻的に澤山提供出來るが、さういふもの一例として、三十年三月三日に、自由黨硬派中の硬派の一人と稱された屈山小室重弘が衆議院で政府の魔手による議會の墮落を痛烈に攻擊して大雄辯を振つた、その一節を揭げてみる、——

（前略）屈山は咳一咳說き出して曰く諸君の了解に便せん爲め一應本員の質問趣意書を朗讀せんと冒頭に一喝を出して松方內閣の政綱を引き立憲的動作、財政の計畫の如きは當初天下に約す所ありしに拘らず官職を餌とし黃金を飛散し土地山林銀行鐵道の如き啗すに利を以てして議員を買收したりといひ又富豪と結托して巨利を網したりといふの世評は果して事實なりや否、萬一事實とせば實に紀綱の紊亂焉より甚しきはなし云々と悲憤慷慨の文字を以て

記せる趣意書を朗讀一番し更に叱咤して曰く惟ふに今回の松方內閣は立憲政體を完備する爲に生れたるたるべし本員は其立憲政體を破壞するが爲に來りしにあらざるを信ぜむと欲す旣に破壞の爲に來りしにあらずと云はゞ本員は去る明治二十五年に於ける前の松方內閣を想起せずんばあらず嗚呼諸君は必ず今に猶ほ前の松方內閣が所謂選擧干涉の非行を以て帝國憲法に一大汚點を印し行政權警察權を濫用てし國民の權利を蹂躙し其甚しきに至ては白晝白刄を閃かして人を殺し家を火くに至りし悲慘の事實を記憶せむ本員の如き亦た當時害を蒙むる大なりしものゝ一人なるを以て其慘禍を忘れんと欲して忘る能はず實に遺恨骨髓に徹す然るに松方伯は平然として仍ほ此に出席せらる眞に厚顏と謂ふべしと大臣を一睨して氣昂然言激越頗る聽衆を感動す而も議場は笑聲を以て之を迎ふ吁嗟何の冷淡ぞや居山居せず言を續けて曰く然りと雖も幸に當時社會道德の制裁力炬の如きものありしを以て伯等如何に傲慢なるも如何に鐵面皮なるも遂に松方內閣は之が爲に憫然たる末路を取るに到れり若夫れ今回の松方內閣にして前日の非を悔い罪障消滅の爲めに立憲的善政を施くに勇なるものならしめば本員の如き亦進んで其驥尾に加はり敢て其提灯持たるを憚らず然るに熟々松方內閣が第十議會に向て爲す所を見又道路囂々傳ふる所を聞くに及で誠に實に浩嘆に堪へざるものあり前年の選擧干涉の暴橫は勿論憲法蹂躙の行爲にして其人を殺し家を火くが如き慘は則ち慘なりと雖も而も中に一種武士的氣象を含み且其流血の一時暫且にして歇みたり然るに今世上に喧傳せらるゝ黃金權勢を以てする金力的暴害に至るもの果して事實之れありとせん乎其爲害深毒酷甚なる得て名狀すべからざるものあらむとす然り而して是れ實に政治社會の節操根底を腐敗せしむるものなり今夫れ譬を以て說かん乎彼の選擧干涉の暴橫は猶ほ白刄を以て人を殺すが如し黃金の魔力を以てするの暴橫は猶ほ鴆毒を以て人を殺すが如しと此論痛切最も人耳を快にす宛も驟雨一過乾坤清の概ありヒヤ〳〵の絕叫四隅に起る例の新自由黨の鐵面漢と知られたる重野謙君は遂に獄しくやありけむ其顏の色を翫びつゝソンな分らぬことはないと呟き新井章吾君亦微笑を漏して端たく胸中の秘密

を白す古人曰く其云爲する所を見る人焉ぞ廋さんやと眞なる哉
眉山百尺竿頭一歩を進め勵聲叱咜して曰く此の如き風說は普く世上に喧傳せらるゝのみならず御用新聞と稱せらるゝものすら金力を以て政界を腐敗せしめたる事實は認むるものゝ如し云々（ヒヤヒヤの絕叫盛んに起る）君意氣更に揚がり辭色更に勵し一聲悲音を放て曰く吁嗟皇天后土若し之を知らば豈に印痕する所なくして休まむや彼の佞者の鵞烏鷺の詭辯を用ゐて自ら欺き又天下を欺かんとするも遂に欺くべからざる國民の斷案あるを奈何せん第十議會の會期業に既に三分二を過ぐるの今日に膺り社會萬衆が疑惑しつゝある此大問題に何人も一言の質すなくんば天下萬衆は抑誰に頼りてか其疑を解かん粵弘不肖と雖も員に立法府に備はる焉ぞ口を噤で止むべけんや嗚呼千早城中に翩翻たりし菊水の旗旌は幾許の勤王家を喚起したるかを憶へ今や第十議會の日課とする所を見るに政府案の贊成通過に力むると大臣演說の提灯持の外一の能事あらざるなり諸君試に思へ曾て四千萬同胞が至仁至惠を以て發布せられたる憲法を歡迎したるは職として年月の邁むと共に善良なる進行あるべきを信じ又之を期したるに由る然るに第十議會近今の眞情は如何ぞや嗚呼本員は實に言ふに忍びざるなり若し夫れ松方內閣をして眞に經綸あり抱負あり政策あるものならしめば議會に多數を占むると否の如きは問ふを要せず若し自家の意見を遂行せんとして多數の反對に逢はゞ寧ろ男子らしく解散して可なり亦何を苦んで闇黑の裏に憲法無視の擧措に出づるを要せんやと喝一喝忽雨の篁竹に灑ぐが如し意氣滿盛乾坤を呑吐するの勢を示し更に語を續で曰く、天下萬衆の傳ふる所に依れば松方內閣は富の勢力に倚りて政權を維持せんとし三井家の如き岩崎家の如き又彼處に居らるゝ松本重太君の如きと深く結托すといふ諸君も知らるゝ如く戰國の諸侯は國大にして兵强きものと結婚し以て互に人質を取り合ひたるは歷史上の事實なり今の政治家も亦此筆法を以て未だ政權を握らざる時より早く富豪家と結緣して地盤を固むるより這般の質問を提起せざるを得ざるの事實を生ずるなれ、本員は今之を公言するに忍びずと雖も一片國民の淸議を代表せん爲

め忠愛の心止むを得ずして茲に至れるのみ嗚呼所謂「議員買收」の四大文字は是非とも社會の制裁を受けしめざるべからざるものなり諸君の耳悉く聾せば則ち已む苟も然らずんば「議員買收」の聲は諸君の耳朶に達せざるの理なし本員は茲に一々擧證論斷するを欲せず蓋し擧證論斷は三百代言の事にして堂々たる立憲憲的大舞臺に立ちて此事を論ずるに於ては素より證據呼ばりの陋を爲す可らざればなりと言は漸く進んで蔗境に入り風雷を叱咤し日月を赤手に攫むの槪あり（後略）

これによつて、議會の腐敗墮落の實狀は、この小說に櫻痴が寫した如きものでないことが知られやう。明治二十五年の品川彌二郎選擧干涉は憲政發達上の大暴擧としてよく引かれる例であるが、然しながらその害の深く且つ遠い點に於いては、三十年の松方內閣の行つた買收政策の方がずつと品川の干涉を凌ぐ、この買收で、世間は全く政治といふものに信を失ひ、全くこれを道化芝居茶番芝居視し、或は汚水溝泥の如く、正人君子の近づくべからざるものゝ如く考へるに至つたのである。

尙ほ作中の主な人物は、大體綜合モデルであるが、明白にその人と分らせるやうに描いてあるのもある。議員で尾崎犬養の如き、大官で樺山高島の如き、これである。又匿名を用ゐても一讀それと知られるのもある。赤井血屠の新非常普の如き清濁蛇内の栗原亮一の如きこれである。本尊の日爺辛に至つては、大體假設の人物であるがこれ又全然モデルがなかつたのではない。即ち松方高島等と特別關係がある議員操縱の黑幕であり、買收策の獻言者であり、自らも資財を散じて買收に當つた關西實業界の巨頭松本重太郎である。松本はこの時議員を兼ねてゐたので、日爺以上に買收の便利を得てゐたであらう。松本はこの小說の如く日清戰爭だけで頭を伸した成金ではない。一代分限ながら元來關西に於ける相當の實業家であつたのである、だが日清役の際相場で巨利を得てから、その財界に於ける勢力當るものなく、山陽鐵道、第百三十銀行等の會社銀行の役員を兼ねること四十餘、新聞では、日本銀行總裁に擬され

たが、不思議にも松方内閣瓦解前後からその事業が急落し、遂に大失敗して再起不能となつた。目論の運命は全く櫻痴の想像に止まるのであるが、モデルの松本がこれと運命を共にしたのは、一奇といふべきである。

作の一々のテクニクの評論は避けるが、總體として描寫が圓熟して來て諷刺に圭角張つたところがなく、主觀的反感を露骨に見せることも少なくなつた點を取るべきであらう。

『思ひ〳〵』
『世はさま〲』

政治的暴露乃至政治的諷刺を主にした所謂政治小說は、前記の『秘密機關』を以て一應打ち切りの形となつたが、社會諷刺に多少の政治的色彩を帶びた諷刺小說はなほ二部を餘してゐる。『思ひ〳〵』及び『世はさま〲』がこれである。この二部は格別政治小說といふ程のものでないので、單に紹介の程度に止めて置かう。

『思ひ〳〵』は、例の如く櫻痴の眼からは和洋混淆、新古ごちやまぜの猿芝居（といつて、櫻痴自身、その若い日にはかゝる社會を實現するために骨を折つた先達の一人であつた。それだけに出來た社會に對する悔恨の念は一しほ深いものがあるのかも知れぬ）としか見えぬ當世社會の一面に當てつけた手强い諷刺である。

（上略）請ふ眼を開いて浮世の狀況を御覽ぜよ、株式の相場師一變して大紳士と貴ばれ、政界の蕩漢躍飛して大官人と敬ばるゝは敢て罕からぬ事ならずや。蓋し人權平等說行はれて、放蕩息子が阿爺を勘當なし男女同權論盛にして我儘女房が亭主を尻の下に壓と云ふ世の中。時勢の氣風に冒されては悧巧な子も純乎たる阿呆と變じ、風敎の感化に依つては快活なる令孃も飛上の阿轉婆と爲ること、幾ど世の例ぞかし。何が扨葡萄酒を燗して茶湯の會席に持

出し、胡弓を二上りにして名古屋甚九を夜宴で唄ふと云ふ今日。木に竹を接ぎ、耳を執て鼻に附るが流行る世界、善惡不二、公私不分、柳は紅花は綠、昨日の敵は今日の良友、一昨日お出の非職が明後日世に出る染直し、高野聖の宿無しも、金さへあれば一夜檢校、盲千人衆愚の決議、これで押行く開明社會は、實に是れ全幅の滑稽、宛然たる百鬼晝行の數々其中より摘採し來りて茲に記す一場の奇語、事實に似たりと雖ども、詮じ去れば敢て奇とするに足らず、畢竟これ尋常茶飯と一般なるのみ云々

櫻痴のかゝる社會觀は、當時の社會（といつてもこの作の書かれた明治三十年より數年前を目安にして描いたものと考へた方がいゝ）の全面的特徴を盡したものではないが、人間の物質生活を基調とした限りの一面においては、櫻痴からかく罵られるだけの特色を示してはしてゐたに違ひなからう。だが度々いふが、櫻痴の心境――描かれたインテリゲンチャー――といふものをよく合點してこの諷刺に對すべきである。

一代成金の熊手損藏たるものゝ娘阿乘、歐米流の教育を受けた揚句、本場で仕上げをかけるため米國に留學する、留學二年の後教師を同行して歐洲を見學すること又二年、佛京巴里において日本貴公子赤居光氏たるものと約婚し、相携へて歸朝した。光氏は大名華族赤居家の次男で、かねて文學改良の志を抱き、フランス文學を專攻してゐたものであつた。

熊手家では阿乘光氏の結婚に異議をいふどころか、金滿家の大名華族の赤井家と聞いたゞけで二つ返事で承諾したが、赤居家の方では阿乘の父が成上りの一代分限だといふので、多少難色をみせた、然し若い二人の熱心がこの難關を乘り切つて、目出度結婚し、各自身についた莫大な金を分けて貰つて新生活に入つた。

新生活で二人が先づ試みたのは、その外國にゐるころ理想としてゐたところを日本に實現するにあつた。然るに阿乘の理想は婦人改良、男女同權、女子參政等の方に活動するにあるのに、光氏は、文學改良、それも差し向きは演劇

改良に大に力を入れることになつた。それで二人は夫婦仲は好かつたが、同じ家の中で思ひ〳〵の不干涉生活を始めることになつた。

甘いものには虫がつくやうに、金のあるところには取卷きが集る。殊に阿乘夫婦には理想があり、その理想成就の爲めには金を惜まぬといふのだから、益々取り卷きよいわけである。そこで阿乘の周圍には政治家、女權論者、代議士などが集り、光氏の方には、役者、藝人、芝居者などが集まる。

いろ〳〵細かい可笑しい事件はあるが、それは略して、とゞ兩人とも取卷きに卷かれて、理想實現に深入りし、阿乘は議會に女子參政案を出させる運動をし、光氏は自作上演のため芝居を買切るといふ騷ぎ、それで少なからず金をつかふ。然るにさういふ騷ぎの結果は兩人とも理想の實現どころでなく、取卷のために金のタダ取りをされてゐることが分かり、始めて眼がさめるといふのである。

櫻癡の諷するところを當面の社會現象に當てはめていへば、光氏によつて、明治二十年代に上流社會の連中が熱心した演劇改良の件を諷し、阿乘によつて、同じ時代に歐米婦人を模範にして熱心に叫ばれた婦人改良運動の方を諷したものと見て可い。元來さう力の籠つた作でもなく、一通りの諷刺物であるが、たゞ阿乘の女子參政、男女同權論が政治と多少の關係をもつて來るから、こゝに揭げたわけである。然し櫻癡は、かゝる運動、女子參政、演劇改良そのものを否定する意味で諷刺してゐるのではなく、金持がお道樂的に、國情も世態も考へずに直譯的にかゝる運動に關係することを諷したものであるといふことは注意しなければならぬ。

『世はさま〴〵』は、『思ひ〳〵』に比較すると、數倍する長編であるが、これ又純然たる政治小說といふのではないから、さう長々と語る要はなからう。

『世はさま〴〵』は、後に改題して『人生×光線』といふ。これが社會諷刺であることは前述の如くであるが、作に即して嚴密にいふと諷刺小說といふよりも教訓小說といつた方が可い。櫻痴はこの小說の最後に訓へていふ、——

噫世を擧て富貴の熱に趨り黄金さへあれば何事も心の儘と誰しも思へども、さすが此世界は人間の住む所なれば黄金とて萬能力を有するもので無く德義の制裁は何所かに微幽ながらに存し居るは此狀況にて證據だてる事が出來る

（第三十九回）

櫻痴の訓ふるところは、當時の社會に萬能の威を振つてゐる黄金が、事實は萬能のものでなく、到底道德の力には及ばぬものだといふことで、單にその本旨のみを以ていへば道學先生の常談じみたものであるが、訓へられる當時の社會そのものが文字通りの黄金狂の群集したものであり、訓へる櫻痴がかつての黄金狂であつて今始めて眼の覺めた人間だといふ點に、痛切な感情と新しい意味が盛り上つてゐるといへばいへる。櫻痴が今迄自分を欺き、自分に取り憑いて自分の自由を奪つてゐた黄金の魔力に對する呪ひは、可成り深刻なものである。この小說でも櫻痴は例の調子で戲謔口調で述てゐるから一見さうと感じないが、仔細に味つて讀むと、櫻痴が、自己の經驗により、いはゞ自己暴露によつて後生を戒めようとする殊勝な氣持は、十分汲み取れる。從來の世評に反して、私が敢て櫻痴に同情するのは、一つは彼にこの一片の殊勝な氣持があるからだと知られたい。此の一念で、過去の櫻痴がいか程の惡業を成したにもせよ、成佛疑ひなしと思ふ。

さて此の小說は、頑固慾翁なる強慾非道の成金一家を中心にして、此の小說の書かれた當時（即ち明治三十三四年）の世間の種々相を寫し出したものである。

筋はさう入組んだものではないが、人物關係が少々煩雜なので、先づ簡略に說明して置かう。

頑固慾翁は舊幕の御家人上りだが、御維新のドサクサにお上の財物を多少くすねてそれを資本に貨殖に專念して今

や數十萬の財産家となり、表面は頓田銀行といふものを經營してゐる態にして、矢張り高利貸をやつてゐる。長男の山九郎は、慾翁を年若にしたゞけで、强慾と好色にかけては父を凌ぐ人物、これが頓田銀行の頭取である。彼は又名の如く、山氣の多い人物で、往々一攫萬金に夢中になる。次男の拔也（ぬくなり）は大學出の官吏上りで、只今は本職は辯護士である傍ら代議士として某政黨の小策士間に名を得てゐる。彼は何ら政治的抱負とか國政參與の理想とかゞあつて、代議士にたつてゐるのではたい、議會乃至政黨を金もうけの機關と心得てゐる豪傑である。三男忠實は、これも拔也と同じ大學出の法學士だが、父兄に似ず（恐らく母のお好に似たもの）眞面目な銀行員として朝霜銀行に勤めてゐる。外に長女お直がある、これも名の如く正直な忠實に似た性格である。以上の外に慾翁の妾にお奸といふ佞奸な女性がある。

頓田家一族がかく大體物慾の權化であるのに對し、慾翁の弟正木霽齋一家は德義の一家といひ得る。主人霽齋は、幕府が倒れてから舊主に節を立てゝ世に出ず、好む畫技を以て淸い生活をしてゐる。長男眞助は大學卒業後アメリカに渡つたが、感ずるところがあつて成功の念を拋ち、專ら基督敎を硏究し、神學博士となつて歸つて來た。さうして文筆で生活しつゝ社會淨化を以て自己の任としてゐる。次男の實次は社會學專攻でドイツに留學し今は文學博士であるが、その議論文章は現代第一流で、上流社會知識社會の信服を得、大臣大官にも交友がある。三男正信は初め外交官、後文學方面に入る。長女お歌、語學音樂に長じ、フランス學校の助敎となつてゐる。正木一家は、頓田一家とは反對に、物質的には豐かとはいへぬが、淸く正しく高い生活理想を具現してゐる。

以上頓田正木兩家相互の間の交涉、兩家と社會の各方面との交涉がこの小說の根本プロットとなつてゐる。即ち頓田慾翁、山九郎によつて社會と黃金の關係を述べ、山九郎によつて實業界の內幕を、拔也によつて政治界や政黨社會の內幕を、忠實によつて銀行家の內情を暴露して示し、反對に正木一家によつて社會と道德の關係、道德と黃金の力

の優劣等についての作者の考へを暗示すると共に、眞助によつて宗教界を、實次によつて新聞界を、正信によつて官界及び文學界の消息を語つてゐる。尚ほ山九郎拔也などの生活によつて花柳界の素破拔きをやつてゐる。

櫻痴の小說によくあるやうに、人物關係はやゝこしいが、その割合に筋は入り組んだものではない。が、從來の同種の櫻痴小說に比較すると、力めてプロットを立て、首尾を整へたところが見える。

此の小說の大筋を述ることにするが、これも亦、櫻痴の小說によく見るやうに、必ずしも有機的發展を試みさせてゐるのではない、寧ろ『世はさま〲』の文字通り社會の各方面の觀察描寫に都合の好いやうに、幾分作者の勝手に筋も場面も移動させてゐるのだが、然し矢張り小說らしくしようと骨を折つた形迹がある。然し大體は有機的自然的發展といはんよりも人爲的發展であるから、そのつもりで聞いて頂く。

頓田拔也は、金が欲しい金が欲しいの一念から兄の山九郎を抱き込み、自分の所屬の政黨を利用して大掛りな惡策を立てる。それは、當時政府が許可と定めた甲利權會社があるのを、同樣の乙會社を造つて政府を嚇してこれを橫取りしようといふのである。それには政黨對政府の駈引だけでは巧くいかぬから社會輿論の同感を捏つち上げる必要がある。そこで、山九郎、拔也は父の慾翁を拜んで、正木の實次に、伯父の威勢で、この旨を飮み込ませて貰はうとする。實次は社會正義の權化ともいふべき人間だから、伯父や從兄弟の言葉でも、理のないものに同意はせぬ。結局大論判をして喧嘩分れをする。忠實やお歌はそれを心配して、實次の兄眞助を賴み、兩家の和睦をさせる。眞助も、山九や拔也の奸惡は知つてゐるだけ、實次の怒るのを尤もと思ふが、眞助は又眞助だけに、これは獨り山九郎や拔也の罪ではない、今日の社會が道德を無視して生存してゐるのが根本原因であるといふことを認めてゐるので、兎にかく兩家の和睦を執り成す。

拔也等一味は更に鐵道敷設の件で大儲けをしようと、親分鷲尾嘉武を始め手分けして政黨の正論、內閣の軟化を歡

化させやうとかゝる、その上懲りずまに實次を利用して總理大臣を動かさうといふので、先生々々と奉つて社會學の講義を聽く。實次は講義もする、紹介もするが、政黨無用論の主張者たる實次は彼等に利用されず、巧く逃げてしまふ。その上彼等の奸惡を此の上寛恕出來ぬといふ決心を固める。

慾翁の金錢にかけて豪傑たることは勿論であるが、慾翁は又女色にかけても大豪傑である。始めは方々の花柳界へ出かけて安價な漁色を試みたが、それでは體裁も悪い上に不經濟だといふので、海千山千の莫連女のお奸といふのを妾として同居してゐる。このお奸は又大變な女で慾翁の寵を一身に受けてゐながら、それだけで滿足せず、壯士役者の紐川迂鈍（實名卯吉）を情夫にしてゐる外、慾翁の三男忠實にも秋波を使ふ。勿論忠實の方ではそんなことに氣がつきはせぬ。それをお奸は、忠實が自分の年長なため嫌つてゐるのだと感じつゝ獨りで怒つてゐる。

政治家連は拔也を仲介にして、頻りに金融資本家連や事業家連から利權漁りの運動費絞り取りの工夫をする。然し相手方もさるもので、さう易々と出しはせぬ、かくて虛々實々、一上一下、そこに汚惡言語に絕した金錢の授受が行はれる。

頓田忠實の勤める朝霜銀行といふのは、創立は新しいが當時の經濟界でも最も信用ある銀行である。だがその內情の紊亂は言語道斷、甚しい投機會社といふべく、この窮狀は火の車などといふ比喩以上である。そこで、頭取や專務等は、有力な當務者たる忠實に命じて惡事に加擔させようとする。忠實はこれを拒んで辭職する。これを聞いた慾翁は大に怒つた、そこでお奸はこゝぞと讒言を持ち込んで忠實を勘當させてしまふ。忠實は仕方なく正木家に身を寄せて、眞助の教へを受けて好きな學問に身を入れることになる。

正木家の方では、正木正信は外交官として身を立てるつもりで、試補となつてゐたが、いよ〳〵外國行が定つたのに、政黨側の裏面運動で、某政黨に緣故のある某と取り換へられる、正信は外交界の無氣力、官僚社會總體の腐敗に

愛想をつかして、辭職しようとするが、二人の兄が、眞に官僚社會を矯正するつもりなら、寧ろ踏止まつてゐろといはれ、成る程と承知して踏み止まる。

此の間にも山九郎等の高利貸にいぢめられる政治家の内幕がいろ〳〵と語られてゐる。又その政治家連を廻つて山九郎と拔也と頻りに爭ふ。

一方實次はいよ〳〵機熟せりと見たか、直筆新聞に據て、大に政治革新、社會革新を呼號する、その理といひ、筆といひ、一世を動かすに足るもので、上流、官界、知識階級、ともに反響が多い。眞助もこれに贊成し、德義の養成で社會を根本から建て直さうとする。實次自身、スパルタ流の生活を試み、青年を養成して他日の社會の柱たらしめんとする。

慾翁はお妍に丸め込まれて、本妻に直さうとするが、山九、拔也は慾得づくから連合して諫めたので、中止する。お妍はその代り弟と稱して情夫の紐川を引き入れる。紐川は要領を呑み込んで巧く立ち廻るので、大に慾翁の信用を得、養子になつて、頓田卯吉と名乘る。山九、拔也は急のことに驚いたが、何うにも仕方がない。

買收連の代議士で花柳界の常得意、花札の常習犯なる連中は直筆新聞を目の仇にして、黨議をかりてこれへ談判しようとしたが、硬派に阻止されたので、遂に實次の許に壯士を向けて威迫を試みる。ところが、實次は筆ばかりでなく腕の方も覺えがある上、手許には有爲な青年がゐるので、反對にひどい目に會つて歸る。だが、流石の直筆新聞も、經濟的弱點を藏ひきれず、遂ひに實次と絕緣して、金持ちに降參することになる。

正信は、その後我慢して外交官界に止まつてゐたが、長官の不品行の尻拭ひをいひつけられて憤然止め、今度は文學界に足を入れる、足を入れてみると、こゝも理想鄕といふ譯にいかず、種々の弊もあり、インチキいかさまもあつて、歎息すべきことのみが多い。

眞助は正信の辭職、實次の新聞絕緣の前後、大に決心するところがあり、斷然宗教覺醒の烽火を揚げる。要は宗教を科學の眞理と調和せしめて新しく社會生活の基調としようといふのである。既成宗教方面からは盛んに迫害が來るので、實次、正信、忠實等は皆鋭鋒を緩和するやう諫めるが、眞助は毅然としてきかぬ。

此の間に又山九郎の金貸仲間たる臺田蒲造と不見轉藝妓の喜劇が一幕あるが、この趣向は前に幾度も繰返されたもので、趣向としては一向珍らしくも何ともない、たゞ當時成金連や金貸ブルジョアの連中に櫻痴がいかにも憎惡輕蔑の眼を向けてゐることだけは分る。

山九郎も惡運の下り坂になつて、大山師風寺福三との腐緣から、柄にもなく大儲獨占の野心を起す。大寺は鐵道國有の大ヤマを當て込んで、風寺黨の代議士を何十かつくらうといふのだから軍資が大變である、それで山九郎をも軍資調達方に利用してゐるが、たゞそれだけなのである。風寺は派手に御馳走政略などをやるので、流石の山九郎も眼を眩まされて覺らない。

山九は又慾に走り過ぎて不正手形の問題を起し、監獄へ收容といふ一歩手前でやつと實次に救はれたりする。やがて慾翁は死ぬ。流石慾で固まつた慾翁ながら、今はの床では將來のことをいろ〳〵考へたか、遺言の執行を正木眞助に托した。慾翁の遺産は數十萬に上つたが、山九、拔也はこれを自分達の手に握らうとし、殊に山九郎は遺言の改造までやる。一度は訴訟となるが、實次の扱ひで四方納まる。勿論遺産の大部分は山九郎、拔也の手に渡つたことはいふまでもない。だがかうして得た大金も、山九郎が深はまりした大ヤマに皆吸ひ込まれる。拔也とて同じことで、意外の財産が轉がりこんだので急に大政治家氣取りで政界操縱を試みてゐる中に、何もかも思惑外れとなり、二人ともすつかり失敗してしまふ。そこで忠實は自分の取り前を分けてやつて二人に衣食の資を與へる。

正木家では、惣領の死ぬ前から病氣であつた雪齋は、頓田家の亡散を見つゝ、わが身とわが家の幸福に感謝しつゝ

死ぬ。さうして正木一家は依然幸福に正しく清く暮して行つた。

かくて櫻痴は最後に斷案を下して、私が此の作を語るとき最初に引いた文句でこの長編を終つてゐるのである。

以上の梗概と斷案とを語れば、この小說についてはもう澤山なのであるが、然し政治小說の研究といふ手前、この作に描かれた社會世相の各方面から政治方面だけを取り上げて、此の頃の櫻痴の政治觀といふやうなものを、明確にしてみよう。有體にいふと、正木實次の政黨無用論は櫻痴の政黨無用論なりといつても差支へない。その實次の政黨論に曰く（第十三回）——

政黨々々と大層に言觸し政黨が無ければ立憲政體は行はれず上下兩院の効能も無いやう共同臭一味の連中は速立るが其は大きな間違である。政黨が無くても立憲政體の政治に差支の無いのは宛然(ちやうど)米穀取引所が空米相場の賭博(ばくち)が無くても米穀の實地賣買には更に差支が無いと同じ事である。英國の如き議院制の國ならば格別、我日本の今日では更に政黨の必要を感じない。況て現時の政黨の如きは何の役に立て何の効能がある。賣藥の効能は書てある程に利が無いだけで別に害も與へ無が政黨の効能は少しも無い上に醜い害を國家にも人民にも與へるに自て賣藥の罪人と云て可なりぢや。政黨の總理だの總務委員だのと大きな顏を仕て居ても、僕の眼で見れば越中富山の萬金丹や何某家傳の千金丹を大きな聲して賣步(ある)行く藥賣よりも遙に下つて見えまするぢや。彼の政黨の首領株や隊長株とも云はるゝ先生たちが、何(いか)に金錢にのみ眼が眩んで利益を是れ顧る乎は既に此三四年來の經驗で心あるものは皆愛想を盡して爪彈(つまはじ)きを仕て居るで無いか？　其私慾の段々は僕が今改めて申さずとも諸兄は皆御承知の筈ぢや。我が社會で德義の制裁の弱きを嘆ずるが之を弱くしたのは實に政黨の所爲である。巾着切は今でも鼠小僧の墓を拜むが、詐欺、誣妄、脅喝、取財、掠奪、賄賂、私黨、破廉恥、不節操、變說、反覆、中傷、讒誣、其他あらゆる一切の罪惡を行ふ輩は南無政黨大菩薩と書たお札を飾つて香華を手向るが宜しい。鼠小僧の墓石か、ららその御利益はあらう

と思ひます、强て政黨の利生を言へば先此外には無いのである。斯る政黨の悪習を洗滌し去るには三度でも五度でも解散に亟ぐに解散を以てし全く氣風を一洗し盡す迄に行かねば迚も〳〵療養して全治は期し難いのである。併し其療法を施す醫師は今日の內閣の如き藥禮ほしがりの藪醫者では匕は執れぬのぢや、この藪醫者は地位を失ふが嫌であるくせに病理を研究する學識も無ければ治療を施す勇氣も無くドーフルス散で感冒を治す位が關の山、その技倆で政黨炎の難病をばどうする事が成りますものか？ 其で議會開期の前に臨んで徐々と秋波を政黨に送れば政黨も得たり賢しで之に應ずる、其狀は轉覆藝妓と男地獄俳優の野合と一般である。內閣の方では彼等は我々共に解散の決心あるを以て怖を爲し俄に軟風に變じ來つたと自惚て居るが、政黨の方では來年の總選擧で當選が心細いに由て今から內閣をたらし込で味方に引付け置き來年は手を濡さず再選に成る手配ぢやと陰では舌を出して居ますやうだ。双方ともに其手管の穢さは、聞てもぞつとするでは有ませんか。其上に鐵道國有說を內閣で愈々實行する樣な振を仕て政黨と提携の風を示さば政黨では其內情を承知で例の國有株屋の投機師連中から腕かぎり取て饑たる腹を肥すであらう、然る時は政府に一錢の身錢を切らずに十分の賄賂が遣へて此節がら國庫の財政必迫には尤も適當の妙案であるとは扨々淺ましい計策ではありませんから、是が今日の大日本帝國の大政治家の行爲である云々。

要するに(櫻痴はいふ)政黨と稱するものは、やれ國利民福だの國家の權利だのと尤らしい名を附て各黨その政治意見を主張すれども皆是羊頭を懸て狗肉を賣る輩ばかり、一皮剝で其骨髓を見れば、詰り自黨の利益、も一皮はげば自分の錢儲を謀るものゝ集合體で、欲得と名けられた一原素が相互に吸收し合つて一團結を成してゐるに外ならない。一部の論者は、政黨を改造するには其黨利を除き去るを要すると頻りに其理窟を述べてゐるが、是れも今日の實際には行はれ難い空論である。如何となれば黨利といふ神髓があつて政黨の團結が初めて成るのが事實であるから、政黨から黨利を去れといふ云ふのは恰も建てた家の大黑柱を拔き去れと云ふに異ならない。だからさういふ出來ぬ相談は

止めにして、初から政黨といふものを全然無くするが可いといふ説を主張するだけである。

　櫻痴が『大策士』を書いた明治三十年から、此の小説を書いた明治三十四年に至る數年間は藩閥沒落、政黨勃興の過渡期で、怪傑星亨が思ふ存分手足を伸した時代である。三十一年二月伊藤內閣成立、大體自由黨を操縱して議會通過を期したが、政黨側の要求過大のため絕緣となり、自由黨は遂に政府反對黨として態度を明確にした。そこで政府は自由、進步の二大政黨を敵とすることになつたが、自由進步の二大政黨は端なくも政府反對の同一步調を取つたところから、合同して憲政黨を作つた。伊藤も此の形勢をみて大隈板垣に政權を引渡し、三十一年六月遂に日本最初の政黨內閣が成立した。だが黨內の自由、進步兩派の勢力爭ひから間もなく分裂し、遂に紛擾裡に瓦解した。かくて自由、進步兩派は一は憲政黨、一は憲政本黨と名を代へたまゝ、相對立を續けることになつた。これ以後星亨の怪腕が自由に政治界に躍ることになる。卽ち十一月成立した山縣內閣は自由黨と提携するに決し、その操縱策として、官を與へず、專ら利を喰はしめた。この際の仲介役が主として事實上の自由黨々首星であつた。これ以後政黨の腐敗は、層一層甚しいものとなつた。議員が臆面もなく歲費を八百圓から一躍二千圓に增加して私腹を肥すことにつとめたのも、この時である。その他鐵道國有問題といひ、官林拂下臭聞といひ、市街鐵道私設問題といひ、橫濱埋立地問題といひ、醜聞利權のあるところ、多くは星亨が介在し、政黨の腐敗の極端に達したかに覺えた。三十三年伊藤博文の政友會創立（憲政黨は自由黨以來の歷史をすてゝ擧黨これに身賣りした）は、政黨政治に一轉機を劃するかに見えたものゝ、政黨界に腐敗は治すべくも悔むべくもない。島田三郎の東京每日新聞が公盜星亨と絕叫したのは、この前後のことに屬する。櫻痴の政黨論、政黨政治論は、かゝる事實を背景として讀むべきである。

　だが、社會の腐敗はひとり政治界にのみ止まらぬ。官吏、外交、經濟、實業、文學、宗教その他一切多面に及び、社會一體の骨の髓まで染み込んでゐる。その根本は卽ち政治家の責任にたいふので、人間倫理性の最も重大な發現たる

政治（人間が人間を治めるといふことは、容易ならぬ倫理的意義をもつことはいふまでもない）といふものを、多年物慾、黄金慾を刺激することによつて自由にせんと期した結果が、ひとり政治及び政治家を墮落腐敗せしめるに止まらず、社會人心一體を墮落せしめ、世を擧つて黄金に奔つて悟らざるに至らしめたのである。

明治三十四年の日本に社會を擧て實に腐敗極まるぢやア有りませんか、是れ社會に於て倫理の制裁が無い故とは申しながら腐敗も腐敗大腐敗、凡そ社會に立て人の視聽する所と成る人物即ち政治家、實業家、華族、紳士、學者、技術家、其他職工庶民の末に至るまで一人として眞面目に其職に從事するものが有ません云々（第二回）

從來漸進と罵られ御用記者と誇られ、曲學阿世と嘲られた櫻痴にして尙ほ且つその腐敗に呆れて社會改革の思想を抱くに至る位ゐであるから、此の前後、明治の社會主義思想が長足の進歩を遂げたのも、當然のことであらう。

社會學者正木實次をして政黨の腐敗、社會の頽廢を思ふさま暴露させた櫻痴は、その兄の神學者正木眞助をして、社會救濟の一端をかう洩らさせてゐる（第十三回）――

（上略）余の目から見る時は實次の論難はまだ程度が低くて區域が狹い、實次が今日世間の所謂政治家即ち政黨利益の投機師をば尋常の人間だと思つて之を責むるに德義廉恥を以てし之を詰るに節操公義を以てし戒飭自省せしむる所あらんと冀望するのが根本的の誤である。彼等の頭腦を解剖すれば良智良能の分子は疾の昔に消散し盡して微塵の痕跡も遺つて無い。遠慮なしに云はるなら誠に人間に能肖た一種の動物である（ダルヴィン）も想像し得なかつた猿猴以上の哺乳動物で恐くは此五六年以來日本で發見したる所のものである。此動物一たび世に出る時は其呼吸より散布する黴菌はコレラ、ペストに百倍千倍するの速度を以て蔓延して全國の人類に傳染するの甚だしさは言語を以て形容する事は迚も出來ぬ譯のものぢや、通交遮斷、避病院、消毒は扨措き鼷鼠一頭を一圓で買上ても撲滅は六ケ敷。これを根治するには先づ全國人民の德義を養成して健康體と成し、彼の病毒の黴菌が來り犯すこと能は

ざるやうにして豫防する外は無い。尤も豫防と撲滅とは同時に行はねば成らぬ様に破邪と顯正とは由來別儀に非ず、場合に由ては調伏の利劍折伏の神才に代るに攻撃の銳筆論難の雄辯を以て全國の人心を警醒せねば成るまいよ。

倫理觀念を失つて今日の弊を生じたのである以上、その倫理觀念を取返して今日の弊を去るより仕方がない。而して社會の倫理觀念を代表するは知識階級人であり、インテリゲンチヤであり、讀書人であり、卽ち廣義の文學者であり、この倫理觀念養成の機關は文學ではなければならぬ。櫻痴はさうと明白に述べてゐないが、私は彼の意を推してかう言ひ足して置く。

櫻痴の社會救濟策は、要するところ社會の根本を道德的に積極的に叩き直して再建する意であるが、これには迂遠ながら世人の倫理觀念を高めるより仕方がない。櫻痴の說くところは極々普通の論であり、又それだけに別に何の無理もないものであるが、たゞ櫻痴の如き生活をして來た人間がかゝる叫びを揚げるに至つたところに、社會惡の深刻さを見ると共に、櫻痴自身の改悔の實が見えるので、その言にやゝ異なるを覺える。兎もあれ、櫻痴が從來の小說では、始終からかへばからかひ放し、罵れば罵り放しであつたに對し、かく此の小說では積極的な救濟策まで持ち出して示してゐる。從來の態度に比して珍らしくも幾分光明的樂天的なところが見える。この點は、注目して置くべきところである。

以上に於て、私に最初列擧しただけの櫻痴居士の政治小說を述べ終つたのであるが、上記諸作の外に、私の寓目しないものもあるに違ひないから、以上で櫻痴居士の政治小說が盡きたとすることは出來ない。然し若し私の寓目しない作が發見されるにしても、その作の傾向なり特色なりは、以上の諸作と大體相似たものであるに違ひないと思ふ。

それで私は櫻痴居士について是非語るべき項目を今二つほど殘してゐるが、それ等は項を改めて語るとして、今こゝでは以上をもつて櫻痴居士の政治小說研究を打ち切つて置く。且つ又以上の諸作について語つて來た間に、私の櫻痴觀を隨處で述べて來たから、改めて結論的に櫻痴論をする心要はないやうに思ふが、何か纒つたものが一寸無いと、こゝで彼の政治小說研究を一段落にするといふ落着がつかぬので、小說家としての櫻痴に關する私觀をいさゝか陳べて見よう。

從來、文學史上では、櫻痴の演劇改良上の功績は比較的多く認識されてゐるが、然し小說家としての彼については、その歷史小說が眞の一顧を拂はれてゐる位ゐのもので、この政治小說や諷刺小說社會小說については、何ともいふ人がない。一言一語これに觸れたものさへない位ゐだから、況してこれを讀んで評價するなどといふことは、誰もがやらなかつた。又、その小說なるものが、(歷史小說は別として、)いかにも上記の如く戲謔けた、不面目至極であるかの如き表面的印象を與へるから、この點に拘泥する人には、これを讀むことを欲せず、若しこれを讀んでも、これを研究的に論議することを欲しなかつたのも一應はもつともである。

だが櫻痴の此の種の小說は果して不面目なものであらうか、たゞ社會にして櫻痴一時自己慰安的な興を買つたに過ぎぬものであつたらうか。私をして云はしむればさうではない。櫻痴の小說がいかにも不面目らしく見えるのは、それは櫻痴のカムフラージである。二重の意味でのカムフラージュである。二重とは何かといふに、一に世間に對する自己のカムフラージュで、これは主として當時まだ小說を戲作視し、小說家を戲作者視する觀念が遺つてゐたから、それに對して體面上多少のカムフラージュを必要としたのである。櫻痴の前半生は、眞に毀譽紛々たるものであるが、然し社會の一流人物と見られてゐたことは、蔽ひがたい事實であらう。その一流人物が、卽ち政治家として、新聞記者として、社會の代表的インテリゲンチャの一人として、衆人具瞻の生活をしてゐた人物が、突然小說家とな

る。當時の世人の觀念として、（インテリの小說改良運動が始まつて十年を經たに係らず）、櫻痴の行動を不審としたに違ひない、而して此の際若し櫻痴の小說執筆が眞面目なる努力だといふことが分れば、從來畏敬をもつてみてゐたその環境は、多少人の輕侮を感じたであらう。そこで、櫻痴は、環境と妥協する必要上、ナアに小說なぞは、おれの本氣ではないよと、放語せざるを得なかつた。そこに櫻痴の俗氣、婆婆氣が見えるのであり、彼としてはその性格の弱點たる vanity の多分に殘つてゐることを示したもので、遺憾なことであるが、當時の社會狀勢からせば、櫻痴が自存自衞の必要からかういふカムフラージュをしたのも、さう責める譯にもいくまい。櫻痴の小說のカムフラージュの今一つは、彼の社會小說、政治小說、諷刺小說に描かれたものが悉く實際見聞した體驗を盛つたものであるだけに（このことは、上來縷々說明して來た）これ等の小說に現はれた相手方の立場を若干ぼかしてやる必要（といふよりも浮世の義理）があつたのである。そこで、おれの小說は皆浮世を拗ねた素浪人の世迷ひ語だ、根無し草だとカムフラージュを張つた。此の二重のカムフラージュがあるので、櫻痴の小說は極めて戲謔けた、戲作家式の太平樂を並べたものゝやうに受けとられてゐるのであるが、然しこのカムフラージュを取去つて讀むと、これ等の小說が如何に櫻痴の本音本心を出したものかといふことが、昭々としてとして明らかになる。これは、私が、上記の各々小說で指摘した通りである。

櫻痴は此のカムフラージュの下に小說を書いたので大變な損をしてゐる。彼は夙に西洋文學に接してよくこれを理解し、明治初期に於いて西洋文學の觀念をもつて文學を論じた第一人者であつた。その彼が、今自身で小說を書く段になつて、かういふ理由があつて無い如き、辨解がましいカムフラージュの假面を冠むるときは、彼の文學に對する態度の眞摯さを疑はしめるものである。だがこれは、その文學に對する態度の眞摯さを疑ふのは間違ひで、彼の性格の弱さにたゝられてゐると見た方が當つてゐる。兎もあれ、彼は、文學者として堂々と確信を示して起つべきであつ

たのである。さうしてこそ彼の文學に對する理解が生きて勢力をもつことが出來たであらう。だが意識的に勇氣ある態度を示す代りに、消極的な曖昧なカムフラージュを用ゐた。當時はそれで彼の體面は糊塗されたかも知れぬが、その爲めに、永久に彼の作物に不眞面目なるかの如き印象を烙きつけた。これは到底取り返し難い損失であつた。

明治の文學者は、その展開の途中からしていろいろの批評や注文を受けた。それは實に種々雜多な方角から成されたもので、勿論明治文學自身がいかに奮發してもその悉くに應ずることは出來なかつたであらう。勿論その中には、肯綮に當つたものもあつたが、出鱈目のその場限りの思ひつきだけのものも少くなかつた。がその肯綮に當つた批評の中の一つに、明治の文學は專ら若人の夢を描くのみで、社會と何の交渉もないといひ、作者の社會的體驗の不足からその小說に迫眞力も複雜性も社會的有機性も何もないことを指摘したものがあつた。(その例として高田半峯の文學論を擧げて置かう。例へば廿五年九月七日八日、讀賣「近頃の文學界」同八月十一日讀賣「文學餘論」の如きものを一讀されたい)。一言でいへば、世間知らずの書生の空想に偏してゐるといふので、もつと世間にも出、讀書もして眞に小說家たる資格を養へといふ議論が、やゝともすると紅葉露伴を花形とする明治文學に對して下されがちであり、その點に關する限り、或る程度まで眞を穿つ批評でもあつた。

此の點でいへば、實に櫻痴の如きは、小說家たる資格を最も豐富に備へた一人であつた。彼の前半生に於ける人生行路の善惡は別として、その世故を閱することの多いことは、書生上りの作者の小見聞の比ではない、彼は社會の上層も知り、下層も知つてゐる、臺閣も知つてゐれば花街も知つてゐる。その上、程度の如何は別として、和漢洋の學殖があり、又文章の才がある。勿論小說家として成功するには世故、學問、文章の外に、天才といつても可いが、一種天成の氣魄がなければならぬ、然しその天才をして眞に天才たらしめ、天才として發揮させるのは、この世故、學問、文章の三長である。三長がなければ天才も發揮するに由がない。明治の文學者は多く少壯であり、この三長を具

備するといふ點で遺憾が多かつた。殊に世故の點では全く問題とたらなかつた（露伴を別とする）。先づ此の三長を滿遍なく具備してゐる點では、櫻痴こそ眞に小說家たる資格がある人物といふべきであつた。

櫻痴の出身は、幕府の晚期に長崎通辭として身を起したに始まる。彼は才氣と學問をもつて、幕府の外國方となつた、外國へも數回出かけ、或る程度まで留學生の扱ひをうけた。彼は蘭語、英、佛の語學、文學に通じてゐた外、漢學は父から仕込まれ、昌平校にも遊び、普通以上の造詣をもつてゐた。易には特に秀でてゐたといふ。彼は歐陽修の文を愛し、その五代史をもつて文章の範とした程であつた。和文學の造詣のことは取立てゝ擧げるまでもたからう。維新後政府に仕へ、理財方面に關係し、この他各方面で新知識としてもて囃された。辭して日々新聞に筆を取り、一方市政府政に關係し、又商業會議所議員となつた。一種のニヒリスチックな氣持ちと持ち前の輕佻さから花街に豪遊して池端御前の名をかち得たのは、この頃である。やがて自由民權の運動の猛烈となるや、伊藤井上に說かれて政府の味方となり、丸山作樂、水野寅次郎等と帝政黨を組織した。だが政府大官のウッチャリを喰つて、政黨は潰れ、新聞も悲境に入る。そこで日々引退となつたが、更に吉原の賦金の件で府會も退き、演劇改良の實現を一生の事業と打ち込んで建てた歌舞伎座の負債から、池端御殿も明け渡し、備さに有爲轉變の味ひを嘗めた。その後脚本作者と轉じ、更に小說の執筆に衣食することになる。實に多岐多樣な經歷であつたといはなくてはならぬ。

櫻痴は天保十二年の生れであるから、小說を書き出した明治二十一二年には、四十七八で、年齡からいつても人生の體驗の豐富であるべき頃である。一寸似つかぬ例だが、西洋の小說家（ヂッケンズとかバルザックとか）を例にとつても、四十以後に傑作が多いとは定說のやうであるが、それは矢張り人生の體驗が口をきいてゐるのである。櫻痴の小說には勿論さういふ人々と比較すべき傑作は出來なかつた、然しそれは櫻痴自身の俗慮から出たカムフラージュと、自ら衣食の爲めに小說を書くので小說家となるつもりはないたどといふ生半熟な態度で筆をとつてゐたので、

この小說を形式的に整へなかつたからである。その內容に盛られた社會知識、人生體驗の豐富なことは、デッケンズ、バルザックにも劣らぬ位ゐのものがあるやうに見受ける。

從つて、櫻痴の政治小說社會小說、諷刺小說を讀むとき、その形式的不備、テクニク上の不滿を超越して、綜合的に彼の生活體驗をつかむべきである。形式に拘泥した文學批許をやつてゐては、櫻痴の豐富な生活體驗の記錄たるこの種の小說も、實につまらぬ、取り柄の一つもない世迷ひ語のやうに感じられてしまふ。然しながら今私が述べたやうに、テクニクの方面を超越してこれを讀むと、先づ明治中葉の社會的パノラマがそこに展開される。獨り政治といはず、紳士社會、實業社會、花柳社會、あらゆる方面の表裏魂膽が、まるで、綴れの錦の裏をひつくり返して示したやうに、實に明白に陳列されてゐる。吾等は、所謂眞面目な社會史世相史の如きものを讀むよりも、櫻痴のこの種の小說を讀むこと於いて、遙かに具體的に如實に、明治社會のいかなるものかといふことを諒解することが出來るのである。それには勿論多少の豫備知識を要するが、何れにしても、文學的批評やテクニクの巧拙を超越した態でこれを讀み、綜合的にその內容を捉へることが必要である。かく捉へると、櫻痴小說は決して不眞面目な戲作でも、浮世を拗ねた隱居老人の放言でもない、そのまゝで立派に、櫻痴が生きてゐた明治社會の社會史となり、世相史となり、風俗史となるのである。

二　櫻痴居士の社會主義

前章の中、特に明治三十年『大策士』の條と、明治三十四年『世はさま〲』の條を讀み返しいたゞく。此の頃櫻痴が社會の腐敗墮落について、いかに公憤を感じてゐたかといふことが分かる。櫻痴の從來の經歷に反感と憎惡をも

つゝ、或は、櫻痴輩に何の公憤ぞや、又例の手だらうと嘲笑するかも知れない。又、さう嘲笑されても仕方ない程の經歴の持主である。然し私は、上來屢々述べた櫻痴の心境變化の理由によつて、この公憤を、一應眞面目なものと受け取りたい。人知れず改悟の本音を吐きつゝある櫻痴の心事に照して、さう解する方が當つてゐる。よし多少の附燒刄があつたとて、國家を憂へ、社會を慨する志は嘉すべくして、罵るべきではなからう。況んや、役人時代伊藤博文を手こずらせた程の急進論者であり、明治十四年の北海道開拓使拂下事件では敢然起つて花形と歌はれた福地のことである。これ位ゐの公憤は、あつて然るべきであらう。

櫻痴がこの公憤なり憂慮なりを小説に託したことは、上記で知れるのであるが、櫻痴はこれを小説に託したのみでなく、同じ氣持ちから眞面目に社會政策的のものを案じ出して、一種の社會主義的思想を發表した。當時の社會の腐敗[illegible]から日本近世社會主義の生長がいかに刺戟されたかといふことは、前にも暗示したが、同じ理由が、浪人櫻痴居士をして矢張り一種の社會主義的思想を抱かせるに至つたのである。

櫻痴の社會主義を知るべき文獻は、私の手許で分つてゐるものが二篇ある。他にまだいろいろなものがあるかも知れないが、これだけによつて櫻痴の社會主義思想の如何なるものかを知ることが出來る。それで、前章櫻痴の政治小說研究の附錄として、こゝにそれ等の文獻を紹介して、政治小說で櫻痴が示した氣持がいかに眞劍なものであつたかを明白にしたい。同時に、かく櫻痴をしてさへかゝる思想を抱かせるに至つた當時の社會がいかなるものであつたかを察知する料としたい。

その文獻の一は、「國體社會主義」と題するもので、明治三十一年八月號國民之友第三百七十二號以下連載される筈であつたらしいが、國民之友の廢刊によつて序論を揭げたのみで止んだ。然しこの序論だけで結構櫻痴の思想とするところが知られるので、要するに國體社會主義とは、國體を擁護しつゝ社會主義を實行せんとするにある。換言せ

ば、歷史的にみて、日本の國體といふものには、善い意味での社會主義的分子が入つてゐる。それを生かして實現させたいといふのである。私は社會主義の知識に暗いから、これをその方面から批判したら學術的に何ういふ範疇に屬するものかそれは知らぬが、概していつて、國家社會主義の一變形といつて可いやうであり、而かも普通にいふ國家社會主義に比して、歷史的國粹的な色彩が強いところを異色ありとすべきである。この序論はさう長篇ではないのだから、全文をこゝに掲げて置かう。（假名遣ひ等原文のまゝ）

（一）國體社會主義

櫻痴居士

序論

如斯新らしい標題を掲げて私が主意を演ずるときには、人が必ず驚くに違ひない、國體といふ文字の本統の意味は暫く措て、普通言ふ所で見るといふと、恰も今日世に稱せられて居る日本主義若くは國是主義とか稱する言葉である。甚しいのは君主神權主義といふのも此内に含まれて居る。又社會主義といふことは西洋で流行るソシアリズム、即ち翻譯して社會主義といふ、或は貧富を平均するとか、財產を平等にするとか、或は人間の權利をば往ける所まで悉く平等にするとか、遂には無政府主義にまで陷る如くに思つて居る。して見ると國體主義といふ語と社會主義といふ語は、全で西と東に往つてる、別物に世間の人は普通思ふて居る、然るをば今演說者が國體社會主義といふ標題を出したならば恰も之を一ツに集めたる如くに認めて何事を云ふかと驚くであらふと考へる、併し演說者が此處で云ふ國體といふものは國粹保存家のいふ種類でもなし又所謂社會主義でもない。日本といふ國が興つた始まりから今日に至るまで二千五百年の間に經歷したる歷史から推して見るといふと、自から國體といふ内に社會主義を含まれて居る

事實がある。此事實を講じる爲めに國體社會主義と暫く假りに名を付けたのである。君主神權主義でもなし無政府主義でもない、此講義を聞かぬ先から嫌ふといふやうな狹い量見は止めて、平意虚心で聞て貰ひたい。然る上で不承知があるならば、充分に之を御駁ちなさるが宜しい、甘んじて御攻擊を承けやう、又間違つたらば謹で御說を聞て私も改める。

凡そ政治を行ふといふことに就ては、到底國の歷史に據らぬければならぬものである。歷史に齟齬する政治を行ふといふことは、如何たる時代でも出來ない、行へば必ず不結果を生ずる。其不結果たるや、意外なことを生ずる、古來西洋各國――近來日本でも此學理的のことを行つて見て之がどうかするといふと、意外の結果を生ずるのを見るに、みんな歷史と違つて居る。要するに理想は實際に當箝らぬといふ判斷を世間で云つて居る。又實際ある。實際に當箝らぬ理想ならば、眞の理想じやない、眞の理想ならば、實際に當箝らんければならぬのである、然るに理論が實際と齟齬するといふのは、或る歷史上から推し及だ理想でなしに、全く單純に獨立したる理想をば、此社會に直に持つて來やうと思ふから生ずるのである。其國の歷史といふものを抛つから生ずるのである。歷史に反するといふことは、恰も寒國に住む者に帷子一枚で育てといふのが無理であり、熱帶地方に往つて革の着物を着て居ろといふのが無理であると同じだ。

私は昔の學者の如く、政治は氣候から來るだの、人種から來るだの、甚しいのでは立憲政體はクリスチヤンの人民でなければ往かないのと、そんな小言をいふのじやない。そんな間違つた論を二十世紀近き今日には云はない。唯歷史に符合させねばならんといふ丈けをいふのだ、兎角に政治上の議論をする人が、理想の一片に走つて其ことが日本の歷史にはどんな關係があるか、歷史に適當して居るやら居ないやら少しも考に置かない、右に依つて行なつて見るといふと、木に竹を接いだやうなことがある、凡そ此立憲政治をするには、何處の國と雖ども、英吉利を御手本にし

て、彼をば完全なものと斯ふして居るが、兎角不都合千萬なことが多い、そして其國の歷史と反對したことが出て來るのである、近くはプロイスの如きは大變に自慢して居るけれども彼の國のコンスチチュウションの如きも、隨分木に竹を接いだやうたことがあると私は思ふ、私が思ふ計りでない、現在日耳曼の政治學者は其ことを嘆息して居る。

之に依つて考へて見ると、日本の憲法も誠に結構に出來て居る、憲法は完全なものと斯ふ思はなければならぬ、所が之を施行するに當つてどうかといふと、矢張り木に竹を接いだやうな事實が起りはせぬかと案ずる。憲法既に然り、況や、百般の政治を行つて、どうも既に木に竹を接いだことがある。近くは民法の如き、商法の如き、日本の歷史をどうも粗末に見て居やアせぬかと私は考へる。譬へて云ふならば、財產の相續、或は戶籍の事、如斯ことは其國の歷史から來るのである。此國が歷史を構はずに用ゐたならば、それこそ矢張り歐羅巴の眞似をする。てもなく北の歐羅巴が大變開明である、實に衣食住とも結構だと斯ふ羨んで、其通り食物を喰い、其通りの着物を着て見やうと思ふと同じである。到底往けない。今日の弊たるや、要するに歷史を粗末にすることが一般に受ける過である。して見ると政治を本統に眞の改良をしやうと思ふならば、政治家が皆此歷史から來るやうなことを勉めるのを、私は只管希望する。歷史から來る改革でなければ、眞の改革でない。歷史から來る改革を名けて卽ち私が國體社會主義と斯ふ名を付ける。

で今一二のことを擧げて見やうならば先づ大きい處、御維新の如きである、それで御維新に引續いて主權論の如きである、政治は主權論が全く純粹な理論、又御維新と云ふものは今の大きな歷史上の事實である、此二ツが如何に運關して居るか、又主權を論ずる者が從來喧ましい、今日になつても又喧ましいけれども、之を曾て連關して論じた人があるか、未だ私は一人も見ない、之が歷史を度外に置て居る證據である。御維新の歷史の嘶を極く簡單に說かふならば、曰く德川氏が惡い政治をした故に天子樣が之では置けぬと被仰ると思召された、勤王の人達が之を輔けて德川

氏を潰した、明治の維新を起した、斯様な簡單な解釋ほかない。

併し深く此原因に立入つて見ると、徳川氏の政を行なつたのが悪いといふのは名義で、其實は國體論から來つた、成程徳川氏の政の悪いのは私は徳川氏の家來だけれども決して隱しはしない、悪るかつたらう、家康家光若くは八代の吉宗、斯様な時分は善かつたに相違ないが、之から段々悪くなつたらう、もう輓近五十年來は、即ち文政天保以來は悪かつたに相違ない、私は自白する。併し嘉永六年に亞米利加のペルリが來て條約を求め、それから慶應の三年前將軍の大政返上をされたまでに、政府がすべき丈けのことは曲りなりにも行なつて來て居る、下手であつた、政府の力が微弱であつたといふ議はあるけれども、政府が行ふ丈けのことは行なつたのである。未だ之を以て大逆無道だの何のといふ名を下す程の悪事はなかつた。

又明治元年より明治三十一年の今日までの天下の豪傑英雄が集つた政治を見よ、それ程香しくない、又甚だ失敗だが、松方内閣伊藤内閣、今日から先きに見る所の大隈板垣内閣、それ位の政治は幕府の役人も立派にして居るのだ、今日の政府に居る人は曰く、幕府の條約の結びざまは何だ、吾々は力を用ゐて今日改正條約をする、豪からう――豪らい。乍併大隈伊藤をして、嘉永年間にあらしめたらば、彼の時分の條約よりも善い條約を結ぶことは出來まい。又幕府をして今日三十年に在らしめたならば、海陸軍も立派にしたらう、又條約の改正も寧ろ早くやつたかも知れない。それ程誇つて自慢をなさる程のことはない。見るべし、政治といふものは、どれ程豪傑が出てもそれ程自分の思ふ通りに出來るものでない、如何となれば木に竹を接ぐことは出來ない。熱帶地方に雪を降らせることが出來ないと同じである。然らば御維新のことは徳川氏が弊政を行なつたから打ツ潰すといふ話は誠に淺墓な見やうで、悪く言へば小學校の卒業生徒がいふことだ。本統の解釋の仕様ではない。本統の解釋は國體の問題、國の歴史である。

天に二ツの日無く、地に二ツの王なし、普天の下王土にあらざる無く、率土の濱王臣にあらざる無し、斯様な格言

が二千年來日本人の頭には染み込んで居る、然るに慶長元和以來は大層學問として益々其論が盛んになつて來た、到底日本の正統の君主たる天子樣を、虛器を抱せて置て將軍といふものがあつて、全權を取つて居るといふことが往かないのだ。詰り正統の政府、實權の政府斯樣に二ツ成り立つことは往けない、將軍がどれ程善い政治を行なはふとも、幕府といふ其物が往かない。之を平たくいふと御前がどのやうな政治を行なつても、私は幕府といふものが嫌ひなんだ。恰も佛蘭西の那破崙三世時分、彼の時分に何とか不承知を言つて、那破崙がどのやうな政を行なつても、那破崙が往けないと斯ふ言つた、それと恰度同じ精神であつた。それだから幕府を倒した。幕府が倒れさへすれば、意趣も遺恨もない。何處の國の歷史にも倒された君主――君主といふのが惡いならば、寧ろ其人――の命を全うすることがあるか、又其人が其國の內に居ることが出來るか、とう〳〵國外に抛り出すとか、何とかしなければ、此禍を絕つことが出來ない。然るに日本では前將軍は現に立派にして居る、今日は一番の待遇を被むつて居る。幕府が倒れても今日は幕府方の大名も勤王方の大名も同じである、そんなことが歷史に例があるか、一遍もない。

其譯だ、將軍其人のタイレントを憎んだのじやアない將軍のコンスチチユーションがなくなつて仕舞へば其後は意趣も遺恨もない。此事實を以て維新の起りは國體問題であるといふことが分る。して見ると今御維新になつて仕舞ふと藩閥が出來た。御維新の功臣卽ち薩長土肥といふ藩閥が出來た、其薩長土肥の內にも薩長最も藩閥だ。此藩閥が三十年永續した、世間の人が藩閥を憎む譯なんだ。私は幕府を潰して薩長に上げやうと言つたのじやアございませぬ、幕府を倒して正統なる君主に政權を返す、然る所をば薩長がやつて御出なさる。薩長の人のしたことが善いだらう、明治三十年の歷史を見ると誠に善い、善いが矢張り幕府が善いことをしたと同じである。貴方方の政治の善惡よりも寧ろ薩長といふのが嫌やだ、幕府が嫌やと同じで、薩長幕府が嫌やだと言つたのだ。之が今日の變動のあつた所以と言はねばならぬ。之は精神です、して見ると之に代つて大隈板垣が出る、大隈板垣も門閥が不承知なんだ。さすれば

之で英吉利の如く議院政になつて國の主權がパーリアメントにある時には矢張り混同して議院幕府なんだ。之も喧ましい不承知の起る原因である、世間で憲政黨にも不承知がある、詰りそれなんだ。して見るといふと之から先政黨内閣になつても、議院政になつても、不承知だ、若しも又議院政になつて宜いものならば幕府を潰すこともなければ薩長を潰すこともない、詰り少數の壓制と多數の壓制丈けのことに過ぎない。さすれば歴史から見る所の問題といふものは國體問題、矢張り天子樣を正格なる君主とするの目的は、何時までも唯形を替へて色々になるに過ぎない。

然るに又此天子樣が主權を御執りなさることが、實際にどういふ鹽梅に出來るか、君主は神聖にして侵すべからざるものだ、君主に政治上の責任をば負せ申上ることが出來ぬものである。斯ういふ……それならば之が憲法の大趣意である、斯うしたときは御自分で責任を御負ひなさることは誠に六ケ敷いものだ、實際出來ぬ話である。

そこで日本の歴史を今度又考へやう、もう一遍……極く往古のことは論じない、中世から論じて見ますれば、聖德太子が宗教論のことからして御隱謀を御知りなすつた、アノ時分は大連が武官で詰り天下の政治を自分が持つて居たんだ、之を誅したが今度は蘇我と云ふ者があつて、大逆無道を行つた。トウ／＼畏れ多くも天子樣を弑した。聖德太子は如何ともすることが出來なかつた、是が實際の歴史で、聖德太子も之を中途で御承知があつたらう、あつたらうけれども如何せん力がなかつた。それで守屋の大連の武官政治に續いては蘇我一家の大臣政治だ、所が天智天皇樣が中大兄の皇子と被仰つた時分には入鹿を御誅戮なすつた、それで蘇我の大臣を取上げて暫くの間は御親裁政治であつた、けれども此當時に藤原家が起つて來た、藤原門閥だ、所が清和天皇が御幼少で、御卽位になるときから、藤原家が專橫の政を行つた。是から後に藤原がソロソロ權を失ひかゝつて來て、白河の院、鳥羽の院の如きは、皆天子樣の御隱居の御政治だ、代るといふと畏れ多いけれども、藤原家に代つた、それからトウ／＼保元平治の亂となつた。それからして平家源氏、北條がやつた。後醍醐天皇の時分に中興のことがあつた、之は長い戰で、足利家の世となつて

長い間のグアクエージ、それから又豐臣德川、それから御維新だね。さうして先刻申上げた薩長藩閥。それから今日の憲政黨の內閣……と云ふか寧ろ大隈板垣內閣と云ふか、それが起つて來た。

して見ると天皇御親裁の政治が行はれたのは歷史あつて以來、先づ少いね、誰か天子樣に代つて責任を帶びる者が出て來た。日本神武天皇以來二千五百有餘年の長い間でも、天子が御自分で責任を帶びて政治をなすつたことは先づ少い。さうすると主權を君主に屬せしむると云ふ國體の理論と、事實をば合併しなければならぬ。理論から云ふと先刻申上げた通り、議院に主權を持たして議院制と云ふ、それが日本に行へない理論がある、歷史上の理論……又今云ふ通り天子樣御自分で責任を御帶びなさることが、到底往けない、道理が往けない計りじやアない、事實がゆるさない。して見ると天子を輔弼する人が代りに此責任を帶びると云ふことは、日本の歷史上明白なる事實である。

斯く考來れば、如何なる限度まで天子の主權が行はれるか又如何なる限度までの責任を人民に向つて負ふか是れ一の實地問題である。而して夫を研究するには、歷史上から見て考へたならば善い程度に往くことが出來やうと思ふ。其善い程度に密接せしむるのが今日の政治家、然らば伊藤內閣の言はれる超然主義は決して行へる噺じアない、既に國會を設けて議院を開き議院の多數に從ふと云ふ日になると、多數を得なければならぬ。天子樣の內閣である！ 勅命を奉ずれば五度でも六度でも解散々々と云ふけれども、そんなに解散の出來るものでない。議院に多數を失ふて一度解散しても、矢ツ張り多數を失つたならば責を負ふて自ら退くのが當然の事だ。超然內閣と云ふものは到底出來るものでない。

又それと同じで、議院政治——英吉利の通りの議院政治が日本に行はれる噺じやアない。英吉利の如きは歷史が行つた英吉利の主權が何處にあつたか、パーリアメントにあつた、と云ふのはウイリヤムの朝廷を止めて仕舞ふ時分になつて、パーリアメントが自分で政治をした。是で宜ければ貴方を御連れ申して天子にします、惡るければ御止めな

さい、斯ふ云ふのだ、それじやアまア宜敷ございますと斯ふ云ふので來たんだ。養子に來たんだ、要するに英吉利の君主制はチャールスが國を追ん出されて其以來ないのだ、ウイリヤム夫婦が來た時分に卽ち議院制は極つて居るのだ。パーリアメントに所謂君主の充分の權力があるのだ。

其通り日本もやらうと言つた、それも國體も許さぬければ事情も許さぬのである。西洋各國で是を許さぬのである。然らば日本で許す譯がない、さうすると云ふと超然內閣と云ふ御話も御無理な御註文であるし、同時にいきなり議院制にするのも無理な御註文である。何方も事實が許さない、して見ると事實に從つて往けば、歷史と齟齬しないやうなものが自然出來るのである。どう出來るかと云ふと、是から內閣が度々交迭すると云ふ內に持つて來て續けるのである。唯其時に國體社會主義と云ふのを歷史上から來つたものを皆んながやつて吳れゝば善いものも出來るが、變ふる所は今日の超然主義を唱へる人も、又政黨內閣主義を唱へる人も、何方も歷史を度外に措くのである。歷史から來る所の人情風俗と云ふものまでも打つ捨つて、唯御自分達の考を以て歷史上にないことをするのは宜敷ない。それも宜敷い、是を何時までも行はふとするから、詰り人民が難儀をする。斯う云ふことを云ふと、餘り今代の事に立入るけれども、一方には事務官と政務官を置き、英吉利の如くにします、一方では又政務官の次官を拵へて置くとか或は事務官丈けは大臣と一緖に交迭しちアならぬ。大隈さんの御持論通り事務官と政務官を判然區別する、斯う一方では言つて居る。一方では何でも役人にしなければならぬ、獵官を行なふ、是等の如きも實に不都合だ。能く考へると政務官と事務官を置くと云ふことも、實際に段々經驗した上でなければ、今では出來得べきものではなからうと思ふ。又政務官が何で必要だと云ふと、其人が議席を持つて居るから必要だ。英吉利の如き、議院制の國では、大臣と雖ども次官と雖ども選擧にならぬければ——若くは貴族院の如きは自分が議員たるの資格を持つて居なければ出ることが出來ない。私が唯大臣で候と言つて出たならば、頭を張り倒される。議院制の國だからどうしても、議院の多數

の人の委員として大臣に出るのだ。此シートを議院に持つて居るのが本分だ。然るに日本の如きは政府の委員と云へば傲然として其席に着て、而も他の者よりも口を利く權利がある、して見ると云ふと此政務官を採ると言つても、英吉利の風とは違つて政務官を採らなければならぬ。して見ると此區別は一代や二代の經驗で直ぐそう出來るものじやアない。

又獵官々々と言つて皆んな騷いで居るけれども、御維新の時分を考へて見るが宜敷い。德川幕府を潰して役人は德川の役人をソツクリ使ふかと云ふと、使はない皆んな罷めて仕舞ふ。廢藩したけれども藩の役人は置かなかつた、矢張り書生が政治をした。而して自由黨が出來たのが明治の八年（二）、改進黨が出來たのが明治の十五年、でそれから長いのは二十年、短いのが十四五年でみんな寄つて藩閥內閣を倒さうと思つてやつたのだから、良く成りたいのは尤も千萬。私は少しも不思議とは思はない、未だドツサリ役人になるだらうと思ふ、能くも板垣さんなり、大隈さんなりが止めて置くと思ふのだ。若し福地如き者が居たならば、ドン／＼擧げて交迭するであらうと思ふ。此端を開いたのは誰が開いた、御維新の功臣が開いたので、卽ち明治元年に御維新を行つた時に開いた。何も下宿屋に居る大臣があつたり、或は往來の人力車を飛來する大臣があるのは少しも不思議じやアない。卽ち明治元年がさうで、此例を開いたのは明治の元勳が開いた、して見ると此獵官の行はれるのは當然である。凡そ草でも木でも、種を蒔かなくちやア生へない。其種は明治元年に蒔た。乃公達が明治元年に蒔たのは結構だが、二度目に種の生へるのは往かない、と言つて、二度目に生へて來るのを不承知を言つても出來ない話だ。して見ると是も矢張り歷史から來つた、成程役人を交迭すれば人民も難儀するであらう、事務も延滯するであらう、それも御尤も、それに相違ない。乍併同時に持つて來て、今迄の役人の情實の弊を吹き拂ふと云ふ利益があるだらうと思ふ。薩長藩閥が三十年續いた、此間に居つて事務官の內には隨分情實から成り立つて役人になつたのもあり、又役にも立ぬのがドツサリある。如斯者が交迭する利益

もある、して見ると事務に馴れない、事務が延滞すると云ふ損があるのと斯様な情實を拂ふと云ふ利益を較べたたらば、何方が多いか少くないか知れないのである。して見ると、之を以て一概に惡く云ふことは出來ぬ。又善く云ふことも出來ない、要するに此自然淘汰に任ずる、矢張り前の議院制が內閣の制と同じで、是以て二度も三度もやつた內に自然良い方にならうと思ふ。又陸海軍の如きが、今日の此大臣が全く憲政黨の以外に立つて居るのが可笑い、此事も言つて甚しいのは此現內閣に反對する陸海軍が何でアノ儘で居るか、是では政黨內閣でないと言つて惡く云ふ。一層アレも退けて仕舞つて、我黨中より拵へると威張つて居る連中もあるけれども、どんなに大隈板垣の兩氏がやつても、三十年來の歷史を一時に罷めることは出來ないから、天皇陛下に奏上して依然西鄕桂を置いた、或は之が慣例になつて止むことを得ずやつたことが、慣例になつて善いことやら知れぬ。日本の爲めには政府の交迭する度每に、此陸海軍の位置が動搖せずして、善いかも知らぬ。止むを得ずやつたと云ふのが善い慣習となるかも知れない。一方では伊藤さんが辭職をして大隈板垣の出たのは不都合だと云ふ、是も善い例を開くやら知れぬ。伊藤が執奏して大隈板垣を薦めたのが、是が善い例を出したか知れぬ。止を得ずしてやつた事が善い例になる事が澤山ある、止を得ずと云ふのが歷史上の事實である、如斯考て見ると、此目前の問題は追々自然淘汰で實驗に實驗を重ねて、善くなる、此演說者杯それに就て今代の政體問題、若くは政治問題に對しては、或る人の如く今日の內閣に向つて酷く失望もしない。又或る人の如く大層な希望も抱かない。只歷史上の事實から來る變遷の一部分と見て置く。而して政治と云ふのが段々進んで來るものならば、それにしても善い方に進ませるには中々一朝一夕では出來ない、是から長い間の歲月を要する、唯進める間に向つて國體社會主義と云ふものを基礎にして進める。

之を打捨て置くたらば、惡い方に進む、進むは進むに相違ないが、右に進むか左に進むか、此進み方に依りて國家の休戚利害に關する。……もう一ツ說いて見ます。今迄言つた所は專ら國體のことを言つた、是から此主義のことを

言はふと思ふ。

前段にも斷はつた通りに私の云ふ社會主義は無政府主義でもなければ、貧富平均論でもない。同じく歷史に基いて居るのだ、日本の歷史が何であるかと云ふと、詰る所酷く貧乏なものもなければ、酷い金持もない。詰り富貴ですね、富み貴き斯う云ふことは、何時も痛苦といふことを壓制する、貴いものと富と云ふものが何如でも合併して居る、夫婦である。富貴が夫婦になつて居ると云ふと何時も貧賤と云ふものを壓制する。

つまり壓制を解かなければならぬと云ふのが、日本で度々起つた歷史上の事實である。而して歷史は此事實をば記載するのみならず、併せてそれをば善い事と認めた。善い事と認めて居ると云ふのは、何かと云ふと、先づ今日まで吾々が倫理の大本と尊んで居る孔子の學問、此孔子の學問も卽ちさうだらう、論語一遍讀で見よ、詰り歸する所は社會主義である。恰も歐羅巴でバイブルを讀む如くクリスチヤンの敎が矢ツ張り社會主義だ。して見ると東の孔子も、西のクライスも、歸する所は社會主義を唱へて居る。社會主義が惡いことはない。唯是を行ふの如何にある。社會の進步を助け安寧を維持し幸福を進めると云ふ社會主義ならば是程結構なものはない。而して孔子が唱へたことも、バイブルにあることも、又印度で釋迦の言つたことも、要する所それに過ぎないのだ。今演說者が希望する所は卽ち國利民福を進め、國家の安寧を維持する所のものが、自から社會主義に循つて居る。其上に於て、歷史が是を認め、畢竟貧富が之を能くして居るんだ。

試みに見よ、保元平治の亂が起つてアノ通りになつた、アレが何から原因したか、藤原氏は其一門の富貴を專らにし、人民の安寧も、幸福も少しも顧みなかつた。朝廷の職位は皆藤原家が持つて居る、それからして國々には庄田をドツサリ持つて居る、殆んど國の富貴が藤原家の自由になつた。之が不承知なんだ、何故不承知か、日本の歷史に反對して居る、日本の歷史はどうかと云ふならば、どうか水呑百姓がないやうにしたい、卽ち貧民がないやうにしたい

と云ふのが之が歷代日本の始まつてからの天子樣の御希望、又人民の希望である。

　それ故に歷史を見ると判然と分る、人間が生れると男には何反女には何反、斯う田地を與へて地面といふものは國家のものである。國家のものを無償で與へる。之を以て生活して居る、其人が死ねば、又之を返上する、斯う云ふ支那の風を習つて其制を設けられた。所がさう云ふことが事實矢張り理想から來つたんだね、そんなことが事實行はれるものでなかつた。やつて見ると云ふと死んで居るものが、何時までも生きて居つて、困つた者は返へさず、自分が戶籍の上では生きて居るやうになつて見たりして、行へなかつた、行へなかつたけれども千有餘年前からの考へが、其所であつた。此考へと云ふものは何處迄も宗教と同じで、倫理で是と一緒に頭にクッ付いて居る。事實に於て難儀をする、難儀をするから貧賤は何時も貧賤富貴は何時でも富貴である。而して之を覆へさうと思つて起つたのが、保元平治の亂。

　之が一ツの原になつて富貴の世となつた。富貴の世となつたならばどうかと云ふと、詰る所貧賤であつた者が富貴を打ち壞はして平均を取つた。それから後醍醐天皇の時分に建武中興の政が行なへなかつた、行なへなかつたは實に殘念である、どうかならば之を元の藤原氏の如くに富貴をば集めやうと思つたに就て反對した。足利尊氏が謀叛人となつて、千載に汚名を被つたけれども、アノ人がアノことをしたのは全く富貴を平等に平均すると云ふことを主張したに過ぎないのだ。詰る所富貴の分配に過ぎない。御維新の亂はどうか、詰り理想から來つた、此理想の國體論から來つた、同時に又社會主義から來つた。何かなれば富貴の分配を求めやうと思つたのだ。

　德川氏其に當して三百年、武門武士に富貴を集めた、自然集つたのだ、此分配をしたくちやアならぬと云ふから分配した。明治の元年に續いて明治四年は廢藩置縣を行なつた、之で以て矢張り富貴の分配をやつた。又三十一年の今日憲政黨の政治も、之も矢張り三十年間薩長藩閥が持つて居た所の富貴の分配を、求めるに過ぎないのだ。して見る

と、富貴の分配を求めると云ふことは日本の歴史で何時も成功する事業である。而して其度毎に歩を進める事業である。して見ると歐羅巴の如くに社會の組織を破ると云ふものでない。從來の組織をば段々善くして、惡いものを改めて、之を改正して富貴の分配を以て改良する。之は日本の今日まで行なつた事實である。然らば此分配をどうか善くしたい。血を流さずして善くしたい。歴史が之を集めつゝあるのだ、それに反對したる政治を行はれたならば其政治はどんなに理論上では宜からうとも、日本の人民には不適當である。

故に吾輩が茲に說く所は、此分配を善くする學に進めたい、之を名付けて國體社會主義。詰り國體を維持すると社會を進めるとの二ツが連關して進んで行くのである。之が國體社會主義と云ふものを是から說く大體の趣意である。

註（一）自由黨の萌芽を愛國公黨と見て明治八年から計算する。

（二）帝國社會主義

櫻痴の社會主義文獻の二は、明治三十四年に日出國(やまと)新聞に出た「帝國社會主義」である。三十一年に國體社會主義を發表して以後、數年の間に政治界その他の墮落に益々甚しいものがあり、さらでも勞資の不調和、資本主義の偏長、西洋社會思想の影響等によつて知識階級間に延びつゝあつた社會主義思想の勢力に一層の刺戟を受けたに違ひない。既に明治三十一年には社會主義研究會が開かれたが、それが三十四年四月に至つて社會民主黨の組織とまで發展するに至つた。以て社會主義思想が、澎湃として當時の知識社會に勢力を得つゝあつたことを考察するに難くない。

櫻痴の「帝國社會主義」は此の社會民主黨の組織に先立つ二日の、三十四年二月二日から日出國新聞に掲載され、二月十三日第七回を以て中絶したものである。二月二日の分は、いはゞ總序といふべく、何故に帝國社會主義を唱へ

るか、彼の所謂帝國社會主義とは何ういふものかを說明してある。以下、——

二月四日「無職業の遊民」（帝國社會主義の一）
二月六日「遊民は社會の寄生物」（——二）
二月七日「就職業を勵行せよ」（——三）
二月八日「公務律を制定せよ」（——四）
二月九日「蓄妾の制裁に就て」（——五）
二月十二日「公務員並に華族に對する裁判」（——六）
二月十三日「官位勳爵の相當及尊榮」（——七）

これまでは掲載されてゐるが、こゝで中絕してゐるから、以後何の方面に說き及ぼされて行くものか、その邊は判然しない。總論のところで彼が述べてゐるのでも察しがつくのであるが、この目次を見て考へられることは、櫻癡の社會主義は、當時の所謂社會主義の如く理論的に整備した點をもつてゐないで、主として彼の豐富な社會的見聞に基礎して語られてゐることである。その點で、彼の社會主義が果して所謂社會主義と同視し得られるものであるか何うか、多少疑問になるのであるが、それに拘らず、この特色があるだけに、社會及び國家の將來に對する彼の憂慮をそれだけ眞劍な痛切なものと感じさせる。

この「帝國社會主義」は、文が長いので全文を掲げるわけにいかぬが、序論だけを全文掲げて、その後の分は要領だけ述べることにしよう。

帝國社會主義

櫻癡居士

余が主唱る所の帝國社會主義は歐洲現時に唱道せる社會主義に非ず彼社會主義は社會の現狀に不滿を懷き之を根底より顚覆して新に別種の社會を組織せんと欲するものなり此帝國社會主義は斯の如き激烈なる顚覆を未發に鎭壓し帝國の歷史に根據して社會を秩序的に改善し以て國民をして各々其所を得せしめんと欲するものなり之を換言すれば社會主義の禍亂を阻止するが爲に萬全の長計を行はんと欲するものなり冀くは讀者諸君余が主唱する所を以て普通の社會主義と誤認する莫れ

歐洲今日の社會主義の目的は主として平等を求むるに在り蓋し貧富貴賤の懸絕して人民の幸否に不平等の甚しき歐洲今日の社會より甚しきは莫し其富貴たる上流は益々富貴を極め其貧賤なる下流は愈々貧賤に陷り名譽も實利も權務も幸福も皆盡く擧て上流の專有する所と爲り困難貧窮艱難汚辱は都て皆下流の回避すること能はざる所なり昔し鯀(こん)の水を治むる隣國を以て壑(がく)とせしが今日の歐洲諸國の上流は下流を以て壑とするに非ずや而して上流の榮華は皆下流の膏血たるに外ならざるを知らば所謂樂園は上流に在りて眞の憂世とは下流の現狀なり之を如何ぞ此社會を根抵より顚覆して平等にするを望まざるを得んや

論者は曰く歐洲今日の富强は貧富懸絕の功果なり貧富にして平等を得ば農工商の諸業惡んぞ今日の如く發達するを得んやとは此言を以て全く一理なしとは云はず物質心の發達は其重を資本に置き勞力これに次ぐとせば寔に此言の如くならんも勞力を以て第一位の主地と定め資本これが次任たりとせば歐洲諸國の殷富は國民が勞働に勉强なる是が主因にして未だ必ずしも貧富懸絕の故に非ざるなり

看よ歐洲諸國に於て將來社會の一大變動を來すものは經濟問題に關して社會が其平等を求むるに在るを今日已に其萠兆を顯はせり歐洲諸國の識者政治家は此大勢を達觀して頻りに匡救の策を講じ專ら其善處を謀るに苦心せるの今

日に於て我帝國の政治家は何を苦みて新に彼貧富懸絶の風を傳播し養成し勸誘し保護し帝國の社會をして彼弊害に倣はしめんと希望する乎政治家は曰く、是歐洲の文明を我國に移植せんが爲なりと果して然らば歐洲の文明は忌避すべきの文明なり文明の功果をこそ移植せんと願ふたれ其文明の弊害は豈吾人の傳播を冀ふ所ならんや況や貧富懸絶は我帝國の歷史に於て古より深く忌避するものなるに於てをや余や剪劣不敏なりと雖も太だ我帝國今日の情勢に慮る所あるを以て請ふ是よりして時々鄙見を此紙上に開陳し以て大方に質し其誨を乞はん願くは諸君開陳の條項に付きて十分の批評を賜ふ所あれよ

此の主旨を、前の國體社會主義に比較すると、遙かに現代的になつて來てゐる。勿論國家社會的な調子を脫してはゐない。が國體社會主義の歷史偏重に比して、此の帝國社會主義はずつと現代社會に卽したものになつてゐる。それだけ此の三四年間に社會の墮落（つまり櫻痴からいへばブル階級の跋扈横暴）が甚しくなつて來たからだと見ても可いであらう。「帝國の歷史に根據して社會を秩序的に改善し」云々、これが櫻痴の根本思想とみていゝ。帝政黨然り、國體社會主義に於て一層然り、この帝國主義の主張も畢竟此の精神の發露したものである。

以下日出國（やまと）新聞掲載の分の要領を延ぶれば、「無職業の遊民」、櫻痴の所謂遊民とは――

曰く執る所の常職業なくして衣食する者皆遊民なり。華族を始とし其の豪富と稱せらるゝ輩は滔々皆然り、彼輩は公債の利に諸株の利益配當、所有地所家屋の上り高、預ケ金の利息より年々收入する所を以て充て爾も榮華を極め驕奢に誇りて社會に跋扈し其尊敬を受けてある者なり。

日本は古來遊民の存在を許さぬ國である、代々の天皇皇后さへ耕織を手づからせさせ給うたといふ程である、然るに明治は遊民漸く殖え、その遊民が却て社會の上層に立つて市民に誇つてゐる。遊民は何等の名目にせよ、「他より得て

以て已に供する」ものであるから「國家の食客にして社會の食潰し」と認むべきものである。今日良民が營々職事を努めて尙ほ衣食に事を缺くのは畢竟社會にこの遊民といふ寄生物の存在するによるのである。

「遊民は社會の寄生物」、櫻痴のいふ遊民は主として資本家階級を指すが、これに對して反對論が出るに違ひない、資本家は資本によつて生產事業の根幹たるものであるから、資本の利益によつて、衣食せばとて必ずしも衣食の遊民とはいへまい云々。勿論資本家中にも遊民ならぬ生產的良民はある、自らの事業を自らの資本で運營する人々はそれである、然しながら大部分は全くの不生產的遊民で、良民の寄生物である。資本が生產に關係するのは勿論であるが、資本の生產に對する關係は間接であり、勞力は直接である、間接と直接と何れが輕、何れか重の判斷を無理につける必要はないにしても、間接關係を偏重して直接關係を無視するの不合理なるはいふを俟たぬ。かゝる不合理の生ずるは遊民の存在からである以上、社會の改善は遊民の無職を禁ずることから始まるべきである。

「就職業を勵行せよ」、これは題の如く、遊民を社會から絕根する策として、法律によつて無職業を禁ずることにすべしといふ論である。

「公務律を制定せよ」、これは官吏の風紀振肅を目的としたのものであるが、官吏は社會に於ける威權待遇は武官に比して甚しく大且つ厚いが、その割合に責罰は寬に失する、その爲めに不心得の官吏は、この責罰の寬大に乘じて放縱に流れ、責務を慢りにする。これが今日社會墮落の有力な一因となつてゐると、櫻痴はいふ。それでこれを是正するには公務律を制定して、武家時代の如き、文官に對する嚴重な責務律を定めなければならぬ。かくして始めて官紀の振肅を見ることが出來る。公務律の罰條は、斬罪、切腹、遠島、追放、禁獄、蟄居、閉門、罰俸、沒取等、嚴重を極めた方が可いといふ主張である。

「蓄妾の制裁に就て」、これは多言するまでもない、社會の風紀を正すには上流の家庭から正さなくてはならぬ。それ

には近時第一の弊風である上流（華族、官吏、富豪）の奢侈の風を止めなくてはならぬ、これ又法律の力をかりて行ふべく、さもないと勵行されまいといふ論である。

「公務員並に華族に對する裁判」、これは要するに公務上の犯罪は公務員律の懲戒裁判をもつて嚴重に罰し、私行上のものは司法裁判によることにする。たゞ司法上の場合でも、公務員律によつて、普通より一倍重いものにする。かくして始めて社會の上流を清ましめることが出來る、上流が清まずに下流のみ清ますわけにはいかぬ。

「官位勳爵の相當及び尊榮」、官吏及び華族の責務に重きを加へると共に、その禮遇も、それだけ重きを加へないと、偏頗になるから、そこは又それ相當の規定を設けてそれ相當の尊榮の實を示さなくてはならぬ。服制、車馬制、呼稱制等も、場合によれば設けて可い云々。

「帝國社會主義」はこゝで中絶してゐるので、櫻痴の思想が此の後に何う動く筈であつたか、それは判然しないが、たゞ上掲の分によつて、これから本舞臺に入るところであり、以上を序開きとして、社會の表から内に進み、勞資の問題に入るつもりであつたに違ひないことは推察される。

以上の二篇の社會主義的文獻の發表によつて、私は別に櫻痴を社會主義者視するものでもなく、社會思想家として彼に特別な位置を要求するものでもない、これは前にも一寸述べた通りであるが、たゞそれによつて、櫻痴の社會小說や政治小說の中の諷刺的分子が、單なる一場の思ひ付き的放言でなく、その背後に櫻痴としては可成り固い信念ともいふべきものをもつて居り、その信念の發現したものだといふことを、信じて貰へれば足るのである。讀者も、以上彼の社會小說、政治小說について讀まれた上、此の如き文獻まであることを知つたならば、その櫻痴觀を可成り是正出來ることであらう。進んで櫻痴の社會思想の本質を究明して、これを學的に批判するのは、他日他の人の手に俟つ

べく、私は、今はこれだけで滿足する。

三 『元寇物語』と『鎭西對外談』

櫻痴の政治小說が、概していつて諷刺的暴露的なものであることは以上述べた通りであるが、中に一つ異色があつた。それは二十七八年日清戰役の時書いた『義經仁義主汗』である（その條參照）。これだけは國權伸張、士氣鼓舞の對外的イデオロギイをもつて書かれた歷史小說體である。然るに越えて三十七八年日露戰爭の際に至り、櫻痴は再び渾身の力をこめて二篇の歷史小說を發表し、これに矢張り士氣鼓舞、國權伸張の對外的イデオロギイをこめて示した。『元寇物語』及び『鎭西對外談』の二篇がそれである。この二篇は、『義經仁義主汗』と同じくその體裁からいへば歷史小說であるが、その本質、そのイデオロギイからいへば政治小說に屬する。それでその荒筋だけでもと、こゝに附載する所以である。

此の二篇は連續した二部作といつて可い。事件的にはさう緊密な連絡があるやうに描かれてゐるのではないが、人物によつて連絡が保たれてゐる。二篇ともに、足利三代義滿の應永十三年に、今は兵庫の邊に閑居する稻佐時義たる鎭西武士が、明使來朝を前にその子時良に對して稻佐一家の歷史を中心に、日本武士の對外奮鬪史の昔語りをして聞かせる體になつてゐる。物語は、時義の祖父時高が元寇に力をつくしたことに始まり、時義の父時國が一つは元寇の復讐と、今一つは日本人の海外發展の爲め、所謂倭寇の頭目として大活躍することを中にし、時國の勤王理想が實現されず、その子時義がつひに今日あるに終る長いものであるが、惜しいかな、『鎭西對外談』は完結しなかつたらしい。左に今少し詳しく筋書を語らう。

『元寇物語』は一名「蒙古襲來記」といふ。明治三十七年五月十日から七月二十五日まで七十七回に亘つて日出國新聞に掲載されたものである。元寇のことは周知の事實であるが、櫻痴はこれを稻佐一家の側から寫し、中心人物といふべき稻佐時高の意見といふものを通して、事件に對する自家の史眼を示し、當時の武士の盡忠報國の精神が國家を救つた點を强調して士氣振興のイデオロギイを寓してゐる。

『元寇物語』は、事を源平時代から起してゐる。源平時代に、源氏の一味（對馬）、或は平家の遺臣等（九州）が對岸の高麗に渡つて、或は時機を待ち、或は再擧の機を伺つたことがある。その邊の行きさつから、九州地方の武士と高麗との間に紛紜が斷えず、賴朝が天下を平定してから、進んで高麗を討たんとする志を發したが、關白兼實の諫言で思ひ止つた。その後北條の時代に、高麗から、再三暴民取締りの要求があり、遂に太宰府、鎭西奉行所（大友氏）、鎭西守護所等（少貳）に命じて高麗に渡海する暴民を取締らせたが、なかなかそんなことで手に了へず、依然高麗に渡つて剽掠を事とする連中は斷えなかつた。そこで高麗では、これは太宰府その他も同心の上でかういふ亂暴をさせて置くのだと考へ、すんでのことで日本と合戰に及ばうとした。然るに折も折、支那の本土を略ぼ統一した元主忽必烈から日本と通使のことを命ぜられたので、此の機とばかり日本征伐の擧をすゝめ、自ら先鋒嚮導する旨申出た。元の威をかりて日本に仕返しをしようといふのである。かくて文永四年の高麗國信使の渡來となり、同八年元使趙良弼等の渡來となり、文永十一年の初度の蒙古來となり、建治元年の元使來、弘安四年の蒙古大襲來となつたことは、正史に詳しいから、こゝに述べ立てるまでもなからう。

この時、肥前稻佐庄の武士に庄の三郎時安といふものがあつた。武勇に秀で、學問を好み、且つ大志があつたが、かつて高麗に留學して略ぼ高麗及び元國の事情も知つてゐたので、既に高麗國の信使が來たときに、少貳に對して、元國も蒙古の容易ならぬ國たることを忠告し、今に蒙古と高麗が一緒になつて押寄せるにきまつてゐる。それには陸

に上げては面倒であるから、何にしても船戰で勝たなくてはいかぬ、今からその備へをして水軍を盛にしなくてはならぬといふ意見を述べたが、少貳は別に重くも見ずに過した。

此の邊が、櫻痴の持論たる海軍擴張論である。大陸發展には何うしても日本海の制海權は握つてゐなくてはならぬ、それには海軍を大に盛にしなくてはならぬといふのである。時安の水軍重視の主張に托してそれを示したものといつて可い。

時安は少貳家から自分の意見を無視はされたが、自分では必ず蒙古來があるものと信じてゐるから、憂國の念に堪へず、遂に佛敎研究と號して再び高麗に渡り、更に機を得て元に渡り、國都北京に入つて密々形勢を窺つた。時安の國情報告で語るところは、明白に元を以てロシヤに擬してその軍の强弱長短を論じてゐる、陸戰に長じて水戰に慣はぬといふのも、騎兵の强天下に寇たりとコサツク兵を暗示してゐるのも、皆さうである。

時安は北京では淨良居士と呼ばれ、その才德が一時に高かつたので、一日元主忽必烈が彼を招見した。忽必烈は、淨良居士が日本人時安なることをかねがね知つてゐたのであるが、大度の彼は、わざと時安に高麗國主から日本征伐の上書が來てゐることを語り、自分の平和主義を告げて、時安の手をかりて日本との通交を開かうとかゝる。趙良弼が使したのは、淨良が北京にゐる間のことである。忽必烈は、佛經の講義を聞く態にみせて、度々淨良を招き、對日本通交について種々意見を聞く、時安は、對等を原則としないと日本は絕對に應ぜぬといひ、元主の反省を促す。この問答の間に、元主は臣下に調べさせた日本の國情歷史を語つて時安を驚かせるところは面白い。殊に、天皇と、公卿と、幕府と、執權關係をクドクド質問してもなほ腑に落ちぬあたり、いかにも元主らしい。それならわしが大學して執權を伐つて天皇の政治に戾して上げようと思ふが何うぢやといふところが、殊に面白い。文永十一年日本征伐の計が決するに及んで、淨良の時安は、元主に惜まれつゝも國難に死ぬために歸國した。

かくて時安は、高麗及び元國で具さに視察して得た知識を元として和戰の意見を立て、これを長官なる少貳資に呈して、執權時宗に執達を乞うた。時安の意見の要領は、元の申條が、我が國を對等とみて通商の利を得たいといふのであれば、和して通交するが可い。但しこの場合でも戰備が疎そかであれば相手に禍心を懷かしめるから、戰備は斷然怠つてはならぬ。又相手方が無理をいつて來たら直ちに戰へ、ぐづぐづすることはない。戰については、矢張り船戰を第一とする、上陸させて防がうといふのは不可である。その理由は、我が軍は一騎打の戰ひには得意であるが、蒙古流の團體戰法には慣れないから、必らず負ける、是非とも船戰を第一とする云々。これは、櫻痴のイデオロギイとして、當時の日本の對外政策の骨子を述べたものと見て可い。少貳は然しこの意見を見ても、又も時安が小さかしいことをといふので、執權へ執達しなかつたのは遺憾であつた。

かくて、文永十一年閏高麗の使が來り、元の最後通牒を渡した。少貳以下九州の武士は、度々來る來るといつて來ない元軍を侮つてゐたので、最後通牒を受けても、さう重大視しなかつた。時安は然し大亂必至と覺悟し、子どもを兄に托し戰死の決心でゐた。果して間もなく元軍は高麗を先鋒として押寄せて來た。蒙古軍を博多に迎へ打つた我が軍は、時安の豫言の如く、新戰法になれぬので、敗戰した。時安は、この時國難に殉じたのである。幸ひ此の時暴風雨のため蒙古の戰艦が散々になつたので、難を免れたが、執權時宗は、少貳から時安の意見書を示され、早く時安を用ゐなかつたことを嘆息した。

かくて元では日本再征の議を決し、弘安の役となるのであるが、この時、時安の子時高（叔父の養子となつて稻佐時高といふ）が大功を立てた。それも父の遺策によつて水軍を第一としたものであつた。殊に海上の經驗から大風の近く起ることを察し、元艦を一處に集めて火攻の計を建るあたりは、實に壯快である。この計も消極的な少貳がきゝ入れぬので實行されなかつたが、元の方でも日本が火攻めにせぬかと大に心配してゐたのである。だが、再び大風（所

謂神風）のおかげで難を免れた。

間もなく元主忽必烈が殂したので日本征伐の議は止んだものゝ、若し長生して三度日本征伐を試みたなら、果して又も神風が吹いたか何うか。そこで櫻痴は、或る人々の如く、外寇に對して神風のみを賴むのはいかぬ、武士の魂、國民の忠節の眞心こそ第一とすべきものだと結んでゐる。

『鎭西對外談』は、時高から引つゞき、その子治郎少輔時國の物語りである。原名を『倭寇物語』といふ。倭寇を元寇と相討させたものと見える。

時高の理想は、外には國權伸張と、內には勤王盡忠である。倭寇とは、九州の亂民（武士あり）が支那の沿岸諸州を犯す一種の海賊行爲をいつたものであるが、これは勿論明（元の次代）の政府の要求で太宰府の禁ずるところであつた。然るに時高は二つの考へから暗にこの徒を奬勵し、自らその中の頭目となるに至つた。時高の考へといふのは、これによつて、日本人の復讐心を知らしめて外國（卽ち明）をして日本を窺ふ志を絕たしめるのが一つ、少しでも外國に發展し、外國の土地財寶を日本のものとして日本を富ましめることが一つ、この二つの考へである。而して日本を富ましめるといふことは、時高の場合卽ち勤王と同じことで、かくして得た資力によつて王事に盡さんといふのである。此の邊に、櫻痴の海外發展卽勤王憂國といふイデオロギイが出てゐるわけである。

丁度十八で元弘の役に活動した時高は、今や七十の老人として、後醍醐天皇の御世になつてゐる。天皇の皇權恢復の志と北條氏との爭ひがいろいろな形で出る、正中の變の如き、その最大なものゝ一つであつた。時高は、九州の邊土にゐても、この消息を聞いて安心せず、長子安高を上國に遣つて、京洛の風雲を窺はせ、次子時國には倭寇の大將として、支那の浙江地方を侵掠させて他日の用意をしてゐた。護良親王の密旨を受けた安高は、土佐に流された尊良親王を迎へて九州に義兵を擧げるために歸國し、父の同意を得て兵船を從へて土佐に迎ふ。安高の不在中肥後の菊池

寂阿が一族と共に兵を擧げて、九州探題、少貳、大友等、北條方を討たんとする。時高は、寂阿と親交があり、且つかねて計策するところがあつたので、籠城して諸方の兵の蜂起するのを待てと諫めるつもりで出かけるが、寂阿はきかず、進んで賊を撃ち、天下の義心を激せしめようといふ。時高も是非なくこれに從ひ、遂ひに寂阿共々博多の戰ひに討死する。

時國はかねて父の意をうけ、少貳、大友の如きは問題でない、要は天子に仕へるにあると心を定めてゐたので、大友から平和の使があつたのを幸ひ、一應敵と和し、兄の後援として土佐に向ふ。さうして伊豫の土居、得能等の助力を得て無事尊良親王を救つて九州に移し、親王を奉じて、北條氏討伐の兵を起す。九州の大名、少貳、大友、島津等も、北條を見限つて宮方となり、親王を迎へて太宰府に入れた。そこで自然九州一帶が勤王軍となり、時國の理想は實現した。

かくする中に建武の中興となり、恒良親王も上洛した。今度は時國がお伴で出かけたが、時國は建武の新政を眼のあたり見るにつけ、公卿の得意に引かへ武士の不平が多く、何うもこのまゝでは再び天下の大亂となると思つたので、恒良親王に意見を申して、それとなく天皇に通達していたゞかうとした。それは、(一) 大覺寺とか持明院とかいふ皇統の流派の爭ひは止めること、(二) 主上御一人の私を政治の上に出し賜はぬこと、萬民の天下といふことを特に強くお考へのこと、(三) 功臣の爲め政治を狂げてはならぬ、(四) 復古といふも、それは精神的に限り、必ずしも具體的に古式等に拘泥してはならぬ、(五) 爲政の當局者には人を選ばなくてはならぬ、(六) 今日の中興は天下太平の手始めであつて、完成ではない、その邊よくよく考へられたい云々といふのである。

時國は歸國して兄安高に上方の形勢を語り、公卿と武家との反目、武家の不平、尊氏の大野心から、天下が再び大亂となるべきことを豫言する。そこで二人相談し、將來の計として、再び尊良親王を迎へて九州の鎭撫としようとす

る。だが尊良親王を迎へ下すための使者は不成功で歸つて來たが、その語り傳へたところでは、もう武家方の心は尊氏に歸した如くであつた。その尊氏の大志、彼が口にした外國征伐の快さ、倭寇の仕事を賞めたことなどが、異樣に時國の胸にひゞいた。時國は兄安高がはやつて上京しようとするのを制し、却つて時勢の方は打ちすてゝ、支那經略の仕事に熱心した。安高はかねて弟の智略には服してゐたから、强て反對はしなかつたが、時國の思惑を測りかねた。次に引用するのは、この時時國が安高にすゝめて支那經略第一の方針を決定する一節である。

（前略）かく思召定め玉ふ上は高麗唐土の經營こそ第一の要務に候へ、此兩三年が程は國內の爭亂に關係り此要務も自から人まかせの樣に成て果々しき功績を見ざるは本懷に背くの至には候はずや。抑々故の尉殿の異國攻を思召し立たまひしは一には若父の怨を報ひ日本の國辱を雪がせんが爲また二には彼國の土地を切取て我日本の領分と爲し以て神國の光を輝かさんが爲にして敢て眼前の利欲に迷ひ金銀財寶を掠奪ひ海賊の所業を快しとするに非ず、尤も一時兵備を整ふるに差支て分捕に及びたるは是止を得ざる次第にして素より父子傳來の本志に候はざること守殿にも常々仰せ諭させ玉ふ所に候ふなり、然るに今日の狀況を見るに我等兄弟國內の御奉公に忙しくて心ならずも其指揮を忽せに致が故とは申しながら我配下若くは末黨の輩が頻に分捕掠奪を旨とし全く海賊に異ならざること甚だ奇怪至極に候はずや、依て自今以後は專ら此事に尊意を注がせ眞の異國攻に力を盡させられ度と冀ひ奉るなり。幸ひ御嫡子左衛門大夫ぬし（安信）は當年二十三歲異國の軍にも數度出陣して稍々物に慣て候ひぬ御次男孫次郎ぬし（高信）は十七歲近年時國に從ひて唐土の言語讀書を學ばれて殊の外の上達末賴しく候ふ。次には時國が愚息時春（民部丞）は十歲次男又次郎は六歲いづれも未だ幼年に候へども此目的を以て是より文武の道を學ばせ度、續いて一族一類の少年若殿ばらへも皆この意を得させ不肖ながら時國この面々の修行を引受け夫々に習學いたさせ往往は日本の領地を唐土に押擴げ候ふ爲め用意いたし度と存じ候ふ斯々唐土の地を取て一州にまれ一府一縣にまれ我日本の

領分と爲したらんには是程の快事は世に候はじ、尊意は如何と辯舌流るゝ如くに演たれば、安高は忽に愁眉を開きて『實にも我家の素志は其事にて候ふなり』と悅の笑壺に入たりけり

此の引用を見ても、國權伸張の意を寓した櫻痴の用意を知ることが出來る。

かくて北條時行の中先代の騷動を切掛けに天下は再び亂れ、尊氏の叛となる。安高は、時國が支那に行つてゐる間、約束を守つて動かぬが、氣が氣ではない。そのうち尊氏は一敗して九州に落ち、九州の兵を擧つて味方につけて東上することゝなる。丁度その時時國は支那から歸つて來た。それで安高が急いで尊氏を撃たうといふのを止めて、自ら使者として太宰府に赴き、尊氏に會つた。尊氏は名にし負ふ稻佐時國の味方は百萬の援兵を得た思ひがするといふので、大に喜んだが、時國は味方に來たのではない、たゞ將軍の九州來に敬意を表するためと前提し、意外の事を言ひ出す。大膽といふか、不敵といふか、驚くべき一策を進める。それは、今日尊氏が日本にゐる限り、天下の騷は止まぬ、かといつて尊氏の大志は何うしても彼をして默つてゐさせない。そこで、思ひきつて倭寇の總大將として支那征伐に行かぬか、さうなると自分が喜んで先導する、それにもう下地は作つてあるといふのである。尊氏にはいさゝか呆れながら、意が動かぬではなかつた。

丁度こゝで作品中絕となつたものらしい。帝大の明治文庫所藏の日出國新聞はこの前後で新聞が缺けて居り、上野圖書館には同新聞が所藏されてゐないといふが、私がかつて見た作者櫻痴居士の原稿本も確かにこの邊までしかなかつた（原稿本は岩田富美夫氏所藏。私は傳記學會の伊藤貢一氏のお世話で見ることが出來た）。それでこの後が何うなるのか、明白に出來ぬのは遺憾であるが、史實の推移を見ると、その大略がつかめると思ふ。恐らく時國のこの策は、他の武家乃至尊氏側近の連中の反對にあひ、止むなく時國安高等は、尊氏等と決戰することになるのであらうと思ふ。尊氏を大將にして倭寇をやるといふのは、實に奇策であり、歷史小說としても壯快雄大な趣向である。流石に

晩年の櫻痴が大事に練つたものだけのことはある。

この二篇について歴史小說として細論すればまだまだ論じられるけれども、今は、政治小說としての立場からの一瞥に止めて、たゞ大體の特長だけ一言して置く。第一は構成の緊密なこと、構成の點は、從來櫻痴は餘り得意でなかつたのであるが、これは歴史の經緯があるせゐか、實に密に織り成されてゐる。第二は歴史的知識の豐富、二十年かかつて調べたものだといふから豐富なのも尤もであるが、一つは櫻痴の鄕里長崎に近い土地だけに、殊に多く調べる便宜があつたものであらう。第三は想像と史實の調和がよく出來てゐる。櫻痴の從來の歴史小說では、史實を偏重するところがあり、さもないとまるきり想像にのみ走せるかして、この二者を巧に調和してゐないが、この二篇は先づその缺點がない。第四、舞臺の雄大なこと、第五、背景と人物の連契、第六、海洋小說的一面をもつことなど、それぞれ特長として擧げ得るところであらう。一々は論じないことにする。概していつて、この二篇は、歴史小說といふ點からいつても、明治文學史上、大作力作の隨一に入るべきものであらう。（十二、十一、二十五）

【附】木下尙江の習作斷片について

一　解　說（柳田　泉）
二　斷片本文（木下尙江）

解　說

昭和十一年四月二十八日、五月十二日の二回、早稻田大學明治文學會で木下尙江先生の講話があつた。その第一回は先生の見て來た明治社會及び文壇、先生在學時代の早稻田が話題の中心になつたが、第二回は、主として先生自身の創作について話され、いろいろ質問應答もあつた。

この時の講話によると、先生が小說の筆を執つたのは、全く偶然であつたといふ。その大要を私の手記から轉載すると、大體かういふことであつた。

尙江先生の東京每日に入社したのは、明治三十二年であるといふが、入社して當分の間は星亨攻擊で忙しかつたから、編輯のことにあまり關係がなかつたが、星の死後、次第に編輯に關係するにつれて、文藝方面の改良のことを考へ、先づ小說に基督敎的匂ひのあるものを入れたいと思つた。すると、そのころ折よくシェンキウィッチの『クオ・ヴァディス』を譯して見たいといふ人があつたので、あれなら可からうと、早速賴んで譯させ、『クオ・ヴァディス』では拙いといふので、『リヂヤ姬』と改題して新聞に揭げた。ところが、社內、社外、ともに恐ろしく受けが惡い。讀者も、あんな面白くない小說はないから止せといふ。社內では、何でも面白くないものを『リヂヤ姬』とよぶ習慣まで

出來たほどであつた。それで、これは自然立ち消えになつたが、尚江先生は、まだその考へをすてずにゐた。

ところが、その頃、德富蘆花が黑潮社を創立して、『黑潮』の第一卷を發行した。尚江先生はこれを讀んで感激したが、殊にあの序文にはすつかり魅了されてしまつた。そこで、蘆花に會つて（この時が初對面といふ）、『黑潮』の後の方を自分の新聞に載せさせてもらへまいかと賴んだ。

蘆花は、自分は差支へがない、ないどころか進んで載せてもらひたいくらゐだが、たゞ兄と喧嘩をして分れたとはいふもの丶、今すぐ君の新聞に『黑潮』を載せることは、いかにも兄に對して當てつけがましいことになる。だから、少し待つてくれといつた。そこで尚江先生も、强て賴むことが出來ず、それなりにして歸つた。

その中、明治三十六年ごろのことであつた、といふが、每日新聞に關係してゐた山崎某といふ青年が、尚江先生に向つて、自分に一つトルストイの『復活』を譯させてみてはくれぬかといひ出した。この青年は尚江先生が前ゝから才能を認めてゐた青年だつたので、では一つやつてみろと許したから、山崎青年は勇んで譯にかゝつた。挿繪は平福百穗に描かせることにした。さて新聞に出てみると、初めのうちは、文豪の名もあり、裸體畫なども出たりなどして、多少人氣が立つたもの丶、ダレ場になると、又不評判だ。最初喝采した販賣掛などから、すぐ苦情が續出するといふ有樣だ。これも自然消滅となつたので、その掛りの尚江先生は大に迷つた。

そこで、人氣不人氣は別として、まづ何で『復活』が面白くないのか、そのわけを考へてみることにした。すると、それは、トルストイがこの作を書いたのは、別に新聞に載せるつもりがあつたのではないから、新聞に每日載せてゐるうちに、筋が中斷されたり、文勢が亂れたり、構想が破れたり、いろいろな事があるので面白くないのだといふことに氣がついた。つまり編輯者が新聞小說といふものに無經驗なためだとわかつた。

明治三十六年の暮、明年度の經營方針を決定するため、東京每日で總會を開いたが、いろいろの問題を決定したあ

とで、小說の問題が殘つた。小說を續けるか、續けないか、それからが議論の的となつたが、それは尙江先生の主張で續けることに定まつたものゝ、その方針がつかない。この時、小說は三面の一部を借りてゐる始末であつたから、三面の方の意見がなかなか大きく影響する。そのころ三面の主任は杉璽阿彌であつた。璽阿彌の意見として、小說を載せていくなら、それは、矢張り相當に金を出して大家連に賴むに限る、さもないと、元のやうに講談がよいといふ。そこで璽阿彌の意見が好いとなつたが、大家連に賴むとして、一體いくらかゝるかと、會計から質問が出た。璽阿彌は、一回五圓も奮發したたら、力作を書いてくれるだらうと思ふといふと、會計主任の鈴木老人が（社長島田氏の實兄）が首をかしげた。が、まづ賴むとすれば誰かといふと、その頃では、柳浪か天外、特に天外が全盛時代であつたから、その邊といふことに落ちつく。そんなら兎もかくやつてみるかとなつたら、意外のところから反對が出た。それでは、政治部經濟部の連中が承知しない、小說などの碌でもないものにこんな大金をかけるなら、こつちへ廻して貰はねば困るといふ。さういはれると、璽阿彌も困つた。すつたもんだの擧句、結局尙江先生の意見で何とか打開の道をつけようといふことになつた。

そこで、先刻から默々として皆の意見を傾聽してゐた尙江先生に、璽阿彌が尋ねた。

小說は何うしますか。

尙江先生は、「矢張り出します、」といふ

では誰に書かせます。

尙江先生は、まるで憑き物でもしたやうに（自らの言葉）、「僕が書きます。天外、柳浪級のものでなくば、僕が書きます」と啖呵を切つた。すると、會計の鈴木老人は、第一に贊成した、「ヨウがせう、木下さんなぞ風變りな小說が出來ませうから、きつと讀者にも受けませう」といふ。璽阿彌は、尙江先生の啖呵を聞いて、憤怒のあまり、満面朱を

殺いだやうになつた。だがその場は何もいはず、尚江先生の意見の通りとし、半ば嘲笑氣味のうちに散會となつた。

この時までも、尚江先生には別に何を書くといふはつきりした考へがあつたのではない。だが、數日して、販賣部から豫告の催促が來た。それでいろいろ考へた末、題名は、舊約聖書からとつて『火の柱』とつけた。初めは『雲の柱』にしようかと思つて、雲か火かと考へた末に、火に決めた。內容は、新しいモーゼを書きたい、日本民族をリードするモーゼのやうな人物を書きたいといふのみで、後は何もきまつてゐなかつた。

かうして出來たのは、尚江先生の處女小說『火の柱』だ。

先生の『小說由來記』といふ遺稿にも、大體さういふ事柄が書いてあつたと思ふが、明治文學會席上の講話も、まづそんな風なものであつた。

それは實に面白い vivid な講話で、今でもその光景、身振り、手眞似を覺えてゐるほどであるだけ、いかにも面白く聽きはしたものゝ、私は、どうもそのまゝに受けとりかねたものがあつた。疑ふといふのではない、先生が『火の柱』以下の小說を書くに至つたのは、恐らくその通りなのであつたらう。然し小說といふものに始めて手をつけたといふ點を、そのまゝ受けとりかねたのである。成る程『火の柱』以下、『良人の自白』、『靈か肉か』、『火宅』など、いづれも素人らしさの滿ちみちたところがある。然し例へば、『火の柱』をとつてよく讀んでみると、素人らしさはあり餘るほどでありながら、何處となく場なれのした、新聞小說として要領を得た感じが出てゐる、人物の配合なり、場景の割方なり、全體の構想なりに、或る種の「經驗」を思はせるものがある。それは先生の文學的天才のせゐだといつてしまへばそれきりのことだが、その「經驗」は然したゞさうとのみで片づけられぬものがあるのだ。それで私はたしかその席でも、ほんたうにそれが最初かと失禮な質問をしたやうに思ふが、その後も二三度それとなしに繰り返して尋ねた。先生は、その度に「イヤほんたうだよ」とあつさり答へて、あとは笑ひに紛らしてゐた。

昭和十一年の夏、夫人みさ子さんを失はれたことが、先生には、可成り大きな精神的打撃となつたらしく、それが表面からもそれと見えるほどであつた。先生は、肉體には何となく枯槁した氣味が見え、精神的には一種の淋しがりやになつたやうに思はれた。と同時に、自家の過去の生活についても何となく寛いだ心になつたらしく、回顧的になつた。あれほど愛し合つた先生夫婦の間には、もちろん秘密と名のつくほどの事々しいものはなかつたであらう。然し別に秘密にするほどの事柄でなくとも、それと自分から打ち明ける必要のないためにそつと自分だけの心の片隅に藏つて置かれる事柄は幾つもあるものだ。聞かされるともなく、私はさういふお話を幾つも聞いた。お終ひには、「懺悔僧」といふ名をつけて、手紙にも「わが懺悔僧」といふ文句が出たことがあつた。昭和十二年二月に肺炎を煩はれてからは、餘計回顧的になられたかして、益々度々さういふお話を窺ふ機會を得た。

さういふお話の中には、當然女性に關する事柄が二つも三つも出た。その女性の大關和子女史の名もあつた。大關女史は、知る人ぞ知る、民間看護婦會の創立者で、女志士乃至女丈夫的存在だ。先生と女史との關係は、普通の戀愛といふよりも、むしろ先生の方に於ける憧憬の情の嵩じたものであつた。年齡も大關女史の方が十以上も上であつた。先生が女史と始めて知つたのは、越後の高田であつたが、女史の非凡な素質は先生の心をたゞ一日で捉へてしまつた(容貌も立派であつた)。この時は先生の漂遊時代であつたから、まだ交誼が熟さぬうちに、故郷松本に歸ることになつたが、先生は歸郷後、青年の純な敬慕の心を「小說の形」に書いたと告白された。それは明治二十四五年のことであつたといふ。當時の先生は鷗外漁史の心醉者であつたゞけ、この「小說」も、漁史の『文づかひ』を摸したものであつたといふ。そして、——

一ツ原稿をさがして君に提供しよう

といふ約束をしたが、その後筐底を探してみても見つからぬから、あれは一つ斷念してくれといつて慰められた。

だが、私は失望はしなかつた。明治文學會の席で先生の講話を聽きながら抱いた疑問が、不言不語の間にサラリと解けたやうな氣がしたからだ。先生ほどの多情多恨の熱血漢があれほどの文才を惠まれてゐて、その青春時代に何一つの文學的遺産がなかつたなどといふことはあり得ないのだ、さういふ私の信念が、この鷗外張りの「小說」云々で、すつかり裏書きされたわけだ。私が推想したやうに、先生の小說由來は、明治三十六年や七年に發端するものではない、もう十年もそれ以上も古いものだといふことが、これではつきりした。私は、先生には默つてゐたが、これは今にもつとはつきりした證據が出て來るにちがひないと、心ひそかに樂しみにしてゐた。だからその鷗外張りの「小說」がなくなつても、大して失望はしなかつた。

だが私の期待が滿されないうちに、先生の健康が意外なほど急激に傾いていつた。さうして十二年九月からはすつかり病床の人となり、十一月五日遂に道山（だうさん）に歸つた。私は二ケ月ばかり仕事に沒頭してゐたので、うつかりして先生の病氣を知らなかつた。嗣子正造さん（今忠勇な一兵士として出征中）からの手紙で馳けつけたのは、十月下旬の或る日であつた。さうして一週ばかりの間に、二三度病床で會つていたゞいた。もつとも、もう長い話は禁物で、多くは顏をみて笑ふくらゐのものであつたが、それでも少しつゝはいろいろな話をした。その時、「反古が少し殘つてゐるが、いづれこれは君に見て貰ふことにならう、まアお手柔かにたのむよ」と話されたが、先生の方では、遺言のつもりだつたかも知れない。

先生が亡くなつてから程經て、（といつても、その年の十二月のこと）、私は嗣子正造さん、純枝さんお二人に手傳つて貰つて、先生のおつしやつた「反古」を拜見した。成るほど「反古」にはちがひないが、それは貴重なものであつた。そこには、例の鷗外張りの「小說」らしいものは確に見當らなかつたが、その代り私は數篇の習作斷片を發見した。

これが私が心待ちにした證據であつた。

これ等の習作は（本文で見るやうに）、何れも文字通りの斷片で、纒つたものは一つもないが、私はそれを點檢して、二つの事實を證據立てることが出來た。第一は、『火の柱』が先生の處女作ではない、處女作はそれよりも少くとも十二三年は前に書かれてゐること、第二は、これ等の習作は何れも、先生の『火の柱』以後の小說と、テーマに於いて、場景に於いて、人物に於いて、著しく類似した點をもつてゐることだ。つまり、先生の作物は、十年間も、先生の胸裏で煖ためられてゐたものなのだといふことが分つた。先生は、『火の柱』を、私が書きさすと宣言したときに、「頭には何もなかつた」といつたが、さうではなしに、頭には、もう無形の『火の柱』が出來てゐたのだ。先生自身は、他事に多忙であつたので、この『火の柱』の生長を意識しなかつたのかも知れない。

先生の所謂「反古」のうちから私が見出した斷片は四篇ある。それを平凡に、一、二、三、四といふ假號で呼ぶことにしよう。

斷片の一は最も古く、その認めてある原稿紙から判斷して、東京專門學校を卒業して歸鄕した明治二十年を幾らも去らぬ信陽日報記者時代のものと推察される。二十一二年のものであらう。或は、この頃信陽日報に此の種の小說じみた文章を時々揭載したものではなからうかと考へられるが、その「信陽日報」をまだ見てゐないので、何とも斷言されない。この篇は、脚本の形式になつてゐるが、內容は小說體である。先生の作でいへば、『火の柱』の原型といふべきものであり、秀才が社會救濟のため、貧民の友として起つのに對し、富豪の娘が父母親戚の反對を押し切つてこの秀才に味方するといふ筋であるが、時代は爭はれず、『火の柱』のあくまで社會主義的なのに對し、これはすつかり前期の政治小說式に出來てゐる。この點で、尚江先生の小說と政治小說をつなぐ歷史的役割をしてゐるわけで、資料的價値は滿點といひ得やう。これの發見によつて、政治小說と社會主義小說との關係が、單なる推測でなく、大分具

體的なものになつたやうな氣がする。

斷片の二は、或る長篇ものゝ一部分で、前者より少し後、二十六七年のものでなからうか。然し案外、今少し前後するかも知れない。原稿紙からいつても、二十三四年頃に盛んにいろいろな文章を認めてゐるものと極めて似てゐるが、まづ正確な年代は不明といふより外はない。何れにしても、三十年以前のものたるは、明らかであらう。この斷片は、『良人の自白』の或る場面にそつくり當てはまるやうに出來てゐる。俊三高子夫婦が松本に引越してから、俊三がまた放蕩を始める。それを待つ高子の氣持ち、といつたところであらう。

斷片の三は、全くの斷片であるが、紙の具合から見て、第二とあまり違はぬ時代に書かれたものと推察される。見らるゝ通りの散文詩風のものであるが、こゝに點出された人物を女性から男性に變へると、何となくわれ等は『靈か肉か』の中の、ロマンチックな山の溫泉の條を想起させられはせぬか。

斷片の四は、斷片中もつとも長い纒つたもので、題もあり、年代も分かる。題は「一夜の假寢」といふ、執筆年代は、明治三十年五月上旬とある。すなはち、これを見ても『火の柱』以前に先生が相當な小說的技倆をもつてゐたといふことが分かる。內容は、信州の或る山里に一夜の宿を借りた若い女醫が、山里の人々から生活苦を聞かされて、人生の不幸に憤る話である。たゞ處々に例の先生の思想がもつとも純粹な形で入つてゐるので、たとひ斷片であるにせよ、こゝに發表することを遠慮するのを當然とする。これだけは他日の機會に讓ることゝした。

以下、直に本文に入ることにする。

附言。本稿を認ためて後、念のために、宮武外骨翁の東京帝國大學明治新聞雜誌文庫で、東京每日新聞を調べてみたら、『リヂヤ姬』は、卽ち『李日亞姬』で、明治三十五年九月六日から揭載され、同十一月十三日、五十回で中絕してゐる。譯者は櫻井明石居士である。評文は、特に新聞小說といふので幾分體を崩してはあるが、今日讀んで決して拙劣なものではない。むしろ當時と

しては種々苦心した點を十分買つて可いものだ。『復活』は三十六年九月十五日から十二月三十一日までつゞいて大尾になつてゐる。なほ蘆花の『黑潮』が國民新聞に出たのは、三十五年一月から六月までで、單行は三十六年二月だ。

以上の事實に照すと、先生の記憶は多少の訂正を要することになるが、そこは讀者諸君の諒察を乞ふ。

柳田泉

習作斷片（一）

此處は八幡社の境內にて老杉鬱蒼として日さへ漏らさぬ苔の上に革囊(かばん)を枕として横はる一少年。身には薄茶色たる背廣仕立ての洋服を着なし右手に開ける一洋書を其の儘胸の邊(あたり)に打ちふせ、眼鏡もとらで靜かに目を閉ぢたるは綠陰讀書のいつしか華胥の國に遊べると見へたり。

折しも後ろの方より出で來る三四人の子供、年は七つ八つより十ばかりなるが何れも垢染みたる單衣の上に竹にて編める籠を背負ひ手に〳〵竹の棒を携へたるは紙屑拾ひのものなるべし。少年の眠れる樣を見て其の內の一番の年かさと見ゆるが連れの一番少さき者に何やら指圖せしが其の躊躇ふ樣子に外の連れのものも同じく『早くせよ〳〵』と目顏やら手眞似やらにて迫るにぞ、泣かんばかりの餘儀なき體に拔き足、差し足しながら、やがて少年の臥したる側まで近寄り其の顏を見つめながら、をつかな〳〵右手を延ばし又た振り返へりて連れの方を見れば何れも手を振り目を動して早く〳〵と責むる樣子、やがて思ひ決めて少年の「ポケツト」より半ば落ちかゝり居りたる錢囊を出り出だし一目散に逃げんとする其の物音に夢驚かして少年は目を開き、

「誰だ、何をする。

と言ひさま起き上がりて子供の袂を捉へり是れにて見て居たりし子供等はやー〳〵と驚き叫びながら雲を霞と逃

げ散れり。

少年「何處の者だ貴樣は、何をしたのだ。

子供（わあ〳〵と泣きながら）「どうぞ御免なすつてお呉れ。市さや金公が取れつこつて、取らにや一緒に歩るかねえつて……どうぞ勘忍してお呉れナさんしよう――

少「ふうむ、此の錢嚢を取らうとしたのか、小供の僻に、貴樣は何か紙屑を拾つて歩くんだな、ふうむ。宅は何處だ。

子「どうぞ勘辨して……旦那樣――

少「なにどうもするのではない、が何處だ宅は、親父はあるか。

子「宅は無常寺小路の長家でござんす。

少「無常寺小路なんて聞ても吾は此處のものではないから譯らん――貴樣親爺はあるか。

子「あい、ござんす。

少「お母はあるか。

子「あいおつ母もあります、此の中から鹽梅が悪いなんて寢たり起りたりしてます。

少「ふうむ兄弟もあるか――多數あるか。

子「あい大きい姉は遠い所え行つてるし少さい姉はお屋敷へ行つてるしね、まだ弟が二人あるがね、一人は此の間生まれたばかりだ。

少「成程大部多家内だな、して親爺は何をしてる、何が一體商賣だ。

子「あい、あのね、色々と方々へ賴まれて歩くはね。

少「ふー、そして貴樣は今までも方々で泥棒をしたらう、どうだ。

(子供は此の一言に復たもや聲をうるませて)

子「いんね、一遍も他の物を取つたこたア御坐んしない、隣りの市さや金公なんざあ始終方々から取つて來るで、己にもやれつて爺さんが……お母かそんな事しちやいけねえつて言ふで、一遍も取つたこたあ御坐んしない、どうぞ御免なすつてお呉れ……

少「ふう――

と思案の折から社の方より何やら話ながら來るは女の聲なり。

孃「婆や、森の中はほんとに涼しいじやないか。

婆「ほんとに夏は何處やらと思ふ樣で御坐いますね。

(島田に結ひし品好きは豪家の愛孃なるべく後に從へる五十の坂を越へたると覺しきは其の乳母にやあらん少年と子供とのイみ居るを見て歩みを止め)

孃「婆やあすこに、あの洋服の方の傍に居るのは家へ能く來る吉松とか言ふ兒じやないか。

婆「おやほんにお孃さまのおつしやる通り皆か最負の吉松で御坐いますよ、其れになんだか目のあたりをこすつて居りますが、若し何ぞ不調法でもしたのじや御坐いますまいかね。

孃「大方そんなことだらうよ、お前一寸あの方に承はつて不調法でもしたのならお詫び申しておやりな。

婆「はい、それよりお孃さま、あなたの方が宜しふ御座います、皆の申しますには家のお孃樣は西洋人とでもたんとでもお話がお出來なさるつて。婆やの時分にはあなた、男の方の前などで唯只顏をぽつ〳〵として默つて居たも

のでで御座んすに只今ではえらいものですねえ、婆やはまださう云ふ御様子を拜見したことが御座いませんから此處で一寸やつてお見せ遊ばせ。

孃「あらいやだよ婆やは、戲言はよして早くお前謝まつておやりな。御覽、餘まりお前が大きな聲をするもんだからあの方が此方を見て居らつしやるよ。

婆「そりやあなた、見て在らつしやる筈で御坐いますよ。

孃「まあいゝから早くさ

老婆は是れにて笑ひながら少年の傍に行き慇懃に腰をかゞめて

婆「あの誠にぶしつけがましう御座いますが此の兒は私の存じて居りますもの、何にぞあなた樣に御無禮でも致しましたか……これ吉松や、お前何か惡いことでもしたのじやないかえ。

少「あ、何處のお方か存じませんが此の兒を御存じのお方で

婆「はい此の兒の親共も私共主人方の出入りで御坐いまするし、其れに此の兒も常に參りますので

(此の內、孃も來りて挨拶あり)

少「それは丁度宜しう御座いました、實はほんの一寸したことですが、宿屋も誠に暑ふ御座いますから此の森が大層宜しいと言ふので今朝から出掛け書見致して居ります內何時かうと〳〵と眠りました所、

(と其れよりありし事共あらまし語り)

段々取り調べて見ましたが誠に善良の性質の様です、然かし四圍の境遇が……ですね、それが良くないですから遂には不良の輩と成り果てるやらも圖られませぬ、只だ此の兒ばかりではない實に是れが大問題です、實に……。御迷惑では御座いませうが貴女達にお引き渡し致しますから、尙ほどうぞ御教訓下さいます樣に。(一寸時計を見て)

あ、大きに遲くなつた、私は是れにて失禮致します、坊や決して惡いことをしてはたりませぬぞ。

（と吉松の顔をしげ／＼と打ち眺め二人の婦人に禮し、スタ／＼と綠陰深き裡に去り行けり）

跡見送りて、

婆「お孃樣。何處の方で御座いませう、お若いにも似ぬほんに御親切な、おや吉坊に五拾錢下さつたのかね、お前能つくお禮をお言ひだらうね、うつかりひよんと逸ひお名前も伺ひませんでねえ。

孃「ほんとに氣が付かなくつてね、御容子と言ひお話の模樣と言ひ、東京から暑中休暇を幸に山國へ遊びに御いでの書生さんらしいね、然かし何處の……

（吉松は何物か拾ひて、おばさん此處にこんなものが落ちて居たと示す）

婆「おや／＼それは名札だよ、今のお方のじやないか知らん。

孃「どれお見せ、『道野友三』、あつ今の方が。私しやどうしよう……

婆「どうなさいました、おわかりですかね。

孃「あの婆や、此間私が東京から買つて來てお前にもお話した『貧民行』つて云ふポヱ……あの長歌ね、あれをお書きなすつた方なんだよ……

婆「おや／＼左樣で御座いますか、お孃さまが大層お譽めなすつて、此の位の深い情愛と高尚とやらの何とかを持つて居らつしやるお人にお目に掛りたいつて仰しやつた方で、左樣だらうと思つたんですよ、然しまあ何處へ行つておしまひなすつたらう、お孃樣どうしたら好いので御座いませう。

（孃は只だ渠が去り行りし方を眺めて）

孃「あゝ是れが眞正の詩人と言ふのか知らツ……

金子家の離れ座敷、風通し好き一室の障子を取り拂ひ伊豫簾を巻き上げたる上手の方、文机に倚りたるは前回に見へたる此家の令孃梅子、少し下りて團扇もて令孃を煽ぎ居るは矢張り前回に顏を出たせる乳母なり。

婆「お孃樣、あなたの樣にさう御勉强ばかりなさいましては體のお毒でお座います土用休みでお歸りなさいましたので御座いますから少しは御保養をなさいませんでは――それにまた何とやら申す、其の歌の御本に御執心なこと、おかげ樣に婆までが覺へましたよ。

孃「ね婆や、お前にも能うくおわかりだらう。私しやもう實に堪らない樣だよ、どうしたら是んな大詩人が生まれるだらう、もう近頃の柔弱な文學者などの比べものじやないんだもの、神籟と言はふか何と言ふか……

婆「おほゝゝゝまたお孃樣が婆などにはちつとも解からない御講釋が始まりましたこと、ホンに其の道野樣とやら仰しやるお方は何處へおいで遊ばしたか、あの時直とお名前を承はりさへすれば良う御座いましたにねえ、やうやうにお宿を尋ね當てたと思へば其の朝御出立の後の祭り……

孃「婆やそれ程悔やまないでも宜いよ、何もお前の罪と言ふじやなし……又た何時か東京でお目に掛ることもあらうから。

婆「いえ〳〵旦那樣や奥樣のお思召には今度は是非共、お梅と重利と婚禮させると仰しやつてゞ御座いますから、是れからはもうお孃樣も今までの樣にお身まゝにもなりますまい。

（お梅は此の言葉を聞くと等しく今までの喜ばしげなりし眉根をぴく〳〵と動かし、顏うつぶける途旦にばらりと頰にかゝるほつれ髮を其の儘口に嚙みて無言なり）

婆「此の間も奥樣の仰しやいますには忰（是れはお梅の兄にて當時〇〇銀行支店の支配人なり）もあの通り推擧され

る、お梅も大層な學者になつたから只だ此の上は嬢の良婿をと思ふばかりだが眼の寄る所へは玉とやらで甥（形見重利のことなり）に妻はせるが良からうつて内々相談も極めました、お梅はあれの是れのと言ふけれど、そりや誰れでも一寸さう言つて見るもので、男振りは好し、なにせよ國會議員を亭主に持つのに不足のあらう筈はないじやないかと仰しやいますから私もほんにお嬢様と重利様とを御夫婦になさいましたらさぞお雛様を見る様で御座いませうと申しました。

嬢「なんだね婆やまでが同様にそんなことを言ふのかね、人を……

婆「いえ〳〵なんのお嬢様、婆はあなたのお胸を能く存じて居りますから誠にあなたがお可憐さうで……婆も丹精してお育て申したお嬢様で御座いますもの。それをあなたのお嫌ひなさるのもお構ひなく如何に親の權柄とは言へ…

嬢「無學無節操なあの様なものを、代議士にするなど〻言ふは此の地方の名折れになります。其れにまあ鐵面皮なことつてね、「衆議院議員」なんて大きな名刺を持つて私の學校まで遊びに來てさ――失敬な。

婆「それはさうとお嬢様、一體あなたは如何云ふ様なお婿さまがお氣に召すので御座います。

嬢「なんだねえ、私しやお婿さんなんざあ一生持たないんさ。

婆「私にまでそんな他人行儀な、誰にでもあんな様なのとかこんな様なのとか望みがあるもので御座いますあね、ねえお嬢様。

嬢「おほ〻〻〻、さうさねえ、私ならばね、精神が確固して居てあらゆる世の中の困難に打ち勝つ勇氣があつて、溢る〻ばかりの愛心があつて、眞實生命を擲て世を救ふと云ふ人ならば私は其の人を輔けて一所に苦んで見たいと思ふわ。

婆「お嬢様のお氣象なこと、ではあなたのお婿様の雛形はまるでアの道野様の様なで御座いますね、おほ〻〻〻……

孃「あらいやな婆やだこと、おほゝゝゝ……

（此の時奥の方より父半兵衞、團扇片手に「どうだお梅、相變らず勉强か」と言ひつゝ入り來る）

父半兵衞の入來に梅子も乳母も共に其の座を下がりて

孃「おやお父さま、今日はまた餘程蒸す樣に御座います。

婆「一と降りざーんと夕立でもあると宜しう御座いますねえ。

父「左樣さ……然かし此の部屋などは風通しが好いから共れ程でもないが、いやもう銀行の二階などゝ來た日には蒸爐の中に居る樣だ。

（此の間に父に茶を出すなどのことあり）

父「何だな其の机の上の本は、ふむ是りや日本の字で書いてある――モウお前の持つて來た書物は皆な橫文字だから私には少しも譯らないが（一二葉開き見て）フーム歌の樣だね。

孃「はい西洋の詩の體に倣つて……餘程今までの新體詩などゝは異つて立ち勝つて居る樣に存じます。

父「ふむ、此の上へ赤い字で書き入れしたのはお梅だね（ペンもて細字に評言など書き入れたるを見ながら）

孃「あらお父さん、そんなものを御覧になつてはいけません（少し顏を赤めて父の手より書物を取らんとなす）

父「あはゝゝゝまあ好いわ、なに『窮民の狀態、誠に見るが如し』『博愛の大精神溢れて言外に在り、何等の天才ぞや』ふーむ。

孃「お父さんどうぞもうおよしなすつて、

父「是れはまたきつい讃め方だな、終へ行けば行くだけ眞赤に何か書き込である、此の『道野友三』つて言ふのは一

體どう云ふ男かな。

嬢「はい、あの其れは、私も能くは存じませんがまだお若い方ださうに御座います……

婆「旦那様あれで御座います此の間あの……

（お梅は叱かるが如く訴ふるが如く目顔もて乳母の言葉を停どむ）

父「近頃の若い奴は、少し學問をやると、もう道樂になつて苦るて、こんなものを書く閑に何かちつと利益でも圖る工風をすれば好いのに。だから國會なども金ばかり費やして何一とつ仕出かしたことがないのだ　。や、國會と言へば、お梅、今度も復た重利を候補者に立てることにしました、銀行連の方は今日で相談を纏めたが、此方は運動費に差支はなく手勢は揃つてるから、選擧權もない奴等が何を騒いでも何でもないてや。就ては婚禮の一件だがな前々からお前にも話して置いたし、兄の所からも此の頃手紙をよこして早く取り行ふが良からうと言つて來た、然かし選擧前は色々忙がしいから其れが濟んで愈々當選したと云ふ目出度い所でやるが良からうと思ふから、お前も其の積りで居るがいゝ、何れお母から委細話をするだらうから。

（お梅は袂を握りて俯ぶける儘、無言。乳母はお梅を見やりて同じく無言）

暫くありて

嬢「あの……手紙でも申上げたことがあると思ひますが、まだなか／＼修業も足りませぬし、それに近親の結婚などは良くなからうかと存じますから……

父「あはゝゝゝ修業なんざあ亭主を持つたからつて出來るわな、若し詰らない亭主でも持てと言ふならだが、そんな壓制はこつとも爲ない、只だ重利も度々の選擧競爭で借金なども出來たが、其等は少しも心配するにや及ばん、もと／＼お前を別家に出す積りで居るのだからた。まあ今度の議會へは新夫新婦が揃つて行くだ、其處はお前が豫

ねて好きな西洋流でやるが宜いさ、はゝゝゝ。今日は重利も色々の談合の爲め來る筈だから、夕飯でもしまつたら涼みがてら芝居でも見に出かけよう、乳母も一所に行くが好い。

（折から一人の下女來りて「旦那様。形見の旦那様がおいでに御座います」と報ず）

父「うむ、よし〳〵

と立ち上がり、

お梅それぢや何れ後に遇ひませう、はゝゝ何もさうはにかむことはない。何歳にたつても兎角ねんねえにはこまるわい。

と獨りのみ込み出でゝ行く後にはお梅、乳母と顔見合はせ

婆「お孃様、こまつたことに成りましたなあ。

お梅雨眼を閉ぢた儘、

孃「舊日本最後の犠牲となるか。新日本育途の祭壇に我一身を獻げるか。……

婆「あの何とおつしやいます。

孃「なに、もう私の心は定まりました。

（之をきつかけに舞臺廻はる）

此處は金子家の廣座敷にてランプの光は皓々と輝き茶蒲臺の上には種々の酒肴を陳列し金子半兵衛、同人妻、形見重利の三人宜しく座り居る。

半「どうだ形見、今夜はちつとも飲まんではないか、これお酌をしてやれ。

妻「さあ重利、コップをおほしなね、八方良い都合に行くつて、こんな喜ばしいことはないやね、前祝ひだからお過ごしな。

重「いや、もう何から何まで伯父さんの御心配で、何ともお禮の申し樣がありません、萬事お指圖次第に働きますから何分宜しく、

半「貴公もあれ程にはやるまいと思つたがどうして〳〵先頃の議會での立ち廻りには感心した、後世眞に恐るべしだよ。なにさ、主義だの、方針だのがあるものだ、新聞の惡口や世間の評定などが恐ろしくて仕事が出來るものか、まだ可笑しいのは選擧人の奴等さ、自分等が金を取つて投票して置きながら、やれ上奏案に反對したが惡いの、それ政府の味方をしたが怪しからんのと、是等は眞實の愚痴と言ふものだ、昔から「一に押し」と言ふ通り何でも押しの強いのが勝だ、是れからは吾の壻と言ふ譯だ、どうかお梅も可愛がつて呉れろ。

妻「重利ね、お前、あれまでにするつて仇やおろそかなものじやないよ。私の口から言つちやあ可笑しいがね、お梅だつて、まあ十人並よりや容貌も好しさ、ほんとに難有く思つてお呉れでなけりや埋まらないよ。

重「いや、もう。難有思ふの思はたいじやありません、實はあゝ云ふ才色優等の婦人が私見た樣なものゝ家内になるのは丁度、駿馬痴漢を乘せて走ると云ふ次第で誠に早や濟まん譯です、へゝゝゝ、

半「なにさ、女なんて者あ餘程賢いと思ふ奴でも偖々思ひの外に脆いものさ、其處は即ち御者の腕の見せ所なんだろ

——それは、さうとお梅は何をぐず〳〵して居るんだらう。

妻「あれでもお婿さんの前へ出るたんと思つて粉飾でもして居るので御座いませう、ほゝゝゝ、

半「それも、さうかのう、はゝゝゝ

重「いや、もう實に、へゝゝゝ

（此の時、梅子は障子しとやかに開きて「お父さん誠に遲なりました」と挨拶して入り來る。

形見重利は急に居ずまいを直し、

重「いや、もう、共の後は御無沙汰ばかり致して御起居も伺ひませんでしたが。いや、もう非常な御勉強で居らつしやるさうで、

孃「毎日遊んでばかり居ります——度々の解散で嘸お忙はしう御座いませう。

重「いや、もう實に閉口致します。又た伯父さんには毎々非常な御配慮を蒙むりまして……

牛「なんだな、そんな角張つことあ止めに〳〵

妻「お梅、お前はもう島田は止めたのかえ、あの、重利、どうしたらかう毛唐人の眞似ばかりしたがるだらうねえ。

重「いや、もう然し此の熱い時は矢張り束髮などの方が宜しいで御座いませう、へゝゝゝ。甚だ失禮ですが一盃差上げませう。

孃「私は御酒は少しも戴きませんから——どうぞ御遠慮なく。

牛「呑めなくつても盃だけ受けて、返盃しな。

妻「なんだね此の孃は、不興顏ばかりして居てさ、早く手をお出し、是りや葡萄酒だから藥だよ——共れに是れからは御酒も少しは飲み習はにやならんわね。

孃「失禮ですがどうぞ御免なすつて。

重「ですか、それでは伯母さんへ上げませう。

妻「ほんとに、どうしたらかう我儘なものだらう。

重利は一座をしらけさせじと雜談諧謔種々あれども梅子は無言、良久しくて、

嬢「あのう誠に恐れ入る次第で御座いますが、丁度皆様の揃の場で御座いますから、私の決心を申上げたく存じます。

（是れにて皆々怪訝の顔色）

父「ふむ、其方の決心と言ふからは尋常ではあるまい、遠慮なく言ふが良い。

嬢「お父さまどうぞお腹立なく一と通りお聞き下さいまし――私の決心と申しますは――あの、形見様との縁談のことは……どうぞお止めに願ひたいと言ふので御座います、さ、是ればかりでは御不審も御尤で御座いますが、こんな愚かしいものにも修業させて下さいました其のお蔭に片はしなりと物の道理もわかる様なりますに付け嗚呼がましけれど一生の中には何なり一事業を營みて御厚恩の萬分一にもお報ひ申したき私の志、其れ故、夫を持ちますに就きましても……

（と言ひも終らぬに先程より物言ひたげに見へたる母親は）

妻「ふーむ、其れじやあれだね、お前思召に協つた男があつて、夫婦約束でもしたから、其れで重利の方を斷はると言ふのだね。小娘と小袋つて能く言つたものだ、此の淫奔ものが。

（梅子はぴくりつと動きの眉を静め）

嬢「お母さま、如何に娘に向てとは言へ餘り情ないお言葉で御座います。

妻「それなら重利はお前の婿に不足だと言ふのかえ。

嬢「さあ、昔から夫婦は一體とも申しますれば如何様なる勝れた方で御座いませうとも心に合はぬ所があつては夫婦の契りは六ケしいかと存します。自分の斯くと信じまする所を身に試み行くが學問の徳かと思ひます故、どうぞお父さまもお母さまも私の心を御推量下さいまして、お心に背きまする不孝の段はお免るし下さいます様に……

（梅子はハンケチ取り出だして目の邊を拭ひ、母親は口を尖らして「我儘もの」「罰當りよ」「東京へ遣つてろくなことはない」などゝ頻りにつぶやき、父親は歎息の息をもらし、重利はわざと落付きたる容體を裝ふ）

孃「此の上、何とお叱りを蒙むりましても私の決心は動きませぬから。

（とやがて座を立ちて障子の外に出づれば最前より襖の外に息を殺して伺ひ居りし乳母は走り寄りて抱き付き）

婆「お孃さま……

梅子はハンケチ持つ手を動かして之を制するのみ。

（柳田云、此の間原稿トギレたるところあり）

（梅子はやがて門口に歩み寄りて）

孃「少々伺ひますが、あの八五郎さんのお住居はこちらで御座いますか。

辰「はい左樣で御座います、是れ吉松、誰樣かおいだよ。

吉「や、母や金子のお孃樣だ。

辰「おや、まあ、どうしたら宜からう、こんな穢しい所へ、お孃樣、かように取りちらけて御座いまして。

孃「お辰さん決してお構ひ下さいますな、いえなに、是れで宜ろしう御座います、お前さんは御病氣でおいでとのこと、お容子は如何です、どうかもうお構ひなく安臥で居て下さい。

（是れよりお辰は親子のものが平常金子家の厚き世話を蒙むることより、此の度、梅子が悴吉松を東京へ伴ひ呉れることまでこまぐ〵としたる挨拶梅子の應對あり）

孃「もう〳〵此の吉松のことは少しも心配なさいますな。まだ書生の身で嗚呼がましいと思ひなさらうが是非とも私の出來るだけの世話をして見たいと思ふのですから。お辰さん、ほんとに私は弟を世話する積りで居りますよ、私

は外に兄弟はなし、こゝら兄が一人ありますが……どうぞして話相手になる兄弟を欲しいと思つて居たところですから。

辰「何と申上げて宜しいやらお禮の申し樣も御座いません……今日は親父も早く仕事を仕まつて連れて參上致すと申して居りましたを、却てお孃樣の御いで下さいまして。

孃「いえね。もうお忙がしからうと思ひましたし、お前さんの御容子も一度伺ふ積りで居りましたから。

（とやがて携へ來りし包を開きて）

孃「さあ吉松、是れはお前の衣物と「しごき」だから着更へてね、それに靴もと思つたがね足に合はねばと思つたから草履を買つて來ました――是れはお辰さん、皆古物でお惡いがね、仕立直して子供達にでも着せて下ださい。さうして是りや誠に僅かでお恥かしいがね何か買つて來る代りですから、何ぞ口に合ふものでも食べて下ださい。

（と中は何程か白紙に包んで出だせばお辰は只だ涙の手に戴くのみ）

孃「おゝ是れが赤兒ちやんかね、まあほんとに可愛らしいこと、一寸私に抱かせて下ださい。なにね着物やなにか汚れても構はないわね。（と赤兒を抱きとり）おや私の顔を見て笑つてさね。好い兒は何がおかしいね、も一つお笑いなさい〳〵。お辰さん、ほんとにまあ可愛いじやありませんか。

（折から此の家の主八五郎は印半天にて急ぎ足「今日は金子樣へ野郞を連れて上がるだつたに、でえぶ遲くなつた」とつぶやきながら門口から）

八「お辰。今ま歸つたよ――いや是れは〳〵お孃樣ですか、なんだなお辰、お孃樣をこんな穢ねえ所で、と云つた所で穢にも奇麗にも一と間つきりだ、は……いやどうも誠にどうも濟みません、早く歸つて連れて上がるつてんで是れでも大急ぎで遣つて來やしたんで。

孃「なにね、お辰さんの御見舞を兼帶で來たのですから。
辰「もしお前さんお孃さんがこんなに色々……
孃「あらいやだよお恥づかしい。
八「いや、どうも、誠にどうも、お孃樣、すみやせん。
（尙ほ彼れ是れと雜談の後）
孃「甚だ失禮ですが、まだ明日お荷物なども始末しなければなりませんから、是れで御暇に致します。さあ吉松、ようく母ちやんにお暇乞を……
吉「母や、坊はもう行きますよ……どうか早く快くなつてお吳れよ……
辰「おゝ、……お前こそ用心してね、……お孃樣にお世話をお燒かせ申さない樣に……おとなしくして……勉强おしよ……御孃樣、あなた樣もどうぞ御機嫌能く……何分共に御厄介を……
孃「もう共の御心配には及びません。どうかお體を御大切に。
辰「私も是非お宅へ參上致さねばなりませんが、御覽の通りの體で御座いますから——、どうぞ旦那樣にも奥樣にも宜しくお願申ます。
孃「はい、なんの左樣な御心配には、さあ〳〵決してお構なく安臥で居て下ださい。
辰「じやあ吉松……
吉「あい母ちやん。
（さすが別離の惜しまれて互に言葉も淚のみ。梅子はハンケチにて吉松の目のあたり拭ひつゝ親子の心を察しやり「さあ吉松行きませう」と見返へりながらに連れて行く。後にお辰は門口にすがりつゝ梅子の後ろ姿を拜み居

りしは影見へぬ様になりしかば堪らへし悲しさ「わつ」とばかりに泣き倒れぬ）

八疊ばかりの一室。書棚の上には和洋の書籍、雜誌など積み重ね壁には單衣の衣紋竹に掛けあり、机上の臺ランプに邊を照らすは○○女學校の寄宿舍の二階なる金子梅子の寓する一室にて茲に高話するは主人梅子と同宿の三人の女學生なり。

甲「近刊の『女學評論』（雜誌の名）にあつた『道野友三君の貧民行を讀む』つて言ふのは金子さんださうですねえ、文山先生がアレを御覧で非常に感服してね我國のエリヲツト夫人は夫れミス金子なるかつて言つてゞしたよ（滑稽な口眞似をして云ふ）。

乙「私もあの詩をちつとばかり讀んだつけが甲田さん一體道野友三つて云ふのは何？

甲「何つてありや日本帝國臣民の一人さ。

乙「人を馬鹿に。

甲「ふゝゝ何んでも最初にね大學に居たんさ、政治學かなにかやるつて言ふので。所が大學の組織や氣風のことに就て教員と喧嘩をしてとう／＼保安條例を食つたのさ。友三茲に於てか憤懣措く能はず、まあ笑はんで謹聽し玉へ。乃ちさ、えへん乃ち改革軍の先登、社會黨の主領を以て自ら任し、時に鬱憤を詩歌に泄らすと言ふ譯さ、それにね貧に感心なのは自ら貧民の服裝をしてね東京の下等社會の實況を探檢したんさ。なにね、其りや詳しく知つてるさ、憚りながらつ……、容貌かね、能く色々聞きたがるね、先づ色は白くして雪を欺き眼は凉しくして星かと思はる、ゴールドの眼鏡は隆き鼻を挾さみてぴか／＼し黑き髯は紅き唇を覆ふてぴん／＼たり、あゝ苦しい。

乙「驚いた、そんな貴公子の様な社會黨があつて堪まるもんか。

丙「いひゝゝゝどれ程噂したつて駄目だよ持ち主が、もう疾つくに定まつて居るんだから、お氣の毒樣。金子さんが此間の暑中休暇にね故郷でもつて約束が出來てよ、いひゝゝゝ。

梅「あら誰がそんなことを言ひました、只だ其れと知らずにお目に掛つたと言つたゞけじやありませんか、ほんとにひどいよ此の人は（手を振り上げて叩く眞似し）ほゝゝゝ。

丙「いひゝゝゝお人が違ひますよ。だから御覧なさい、あの讃め方の非常なこと、丸で神樣のように言つてあるんだもの、ヒゝゝゝ。

甲「御亭主が詩を作つて妻君が其れを讃めるなんて、うまい攝理が行はれたもんだこと、輿てに乘せられて買ふものは良い馬鹿を見るんだわ、ふゝゝゝ。

梅「なんとでも勝手におなぶりなさい。

三人「いよ、みせす道野萬歳――ふゝゝゝ。ひゆゝゝゝ。いひゝゝゝ。

（折から廊下の時計べん〳〵〳〵

三人「おや、もう十時……どりや寢て面白い夢など見ませう。左樣なら。失敬。ぐつど、ないと。

（どさくさと出て行く）

梅子はなぶられながらも嬉しさうな顏付きにて邊取り片付け、やがて机に倚りかゝりて獨り言、

梅「あゝ……どうも自分で譯らないよ……私は若しも道野さんを思つて居るのじやないか知らん……是れがあの戀と言ふのか知らん……只だ一遍何殿とも知らずにお目に掛かつたゞけだもの……けれど目に見へぬ眞實の道野さんには始終お目に掛かつて居るわ（『貧民行』を繙きながら）……だから私は、決してあの方の容貌を愛するのではない……と思ふわ。風采は成程、簡雅で威嚴もあるけれども、色だからつて白いと云ふ方ではなし、浮薄の連中の言

ふ美男子ではないから——馬鹿氣た非難を受ける恐は少しもない……戀は元來、美で高尚なものには相違ない——只だ世の中の多くが之を汚どすから、おかしく思ふけれども……あゝほんとに私も馬鹿になつたよ、自分ばかりこんなに心を苦しめたからつて……是れが惑ひと言ふのか知らん……然かしどうぞ一遍お目に掛つてしみ〴〵お話をして見たいよ……

（と稍頭を擡ぐれば月影皎々と破璃窓より差し入るにぞ梅子は立ち上がりて窓を押して茫打ち眺め）

あゝ明月、實に美じやないか、詩人の好題目だねえ。あ、詩人と言へば……あの道野さんも今ま丁度此の月を眺めておいでだらうか知ら……

上野山内なる樹木森々たる下の自由椅子に腰掛けて在る女學生は金子梅子にして側に立てる洋服姿の甲斐〴〵しき幼年は是れ吉松なり。

吉「僕は今日はほんとに面白ろかつたよ、こんなに歩るいたことは近頃ないものを。然し姉さんはお足がお痛みなさるでせう、歸りには人力でおいでなさい。

孃「此の頃はもう〳〵くさ〳〵して病氣にでもなるかと思ふ程であつたがね。今日の散歩ですつきりとしました。

（此の時上手の方に洋詩を吟ずる聲聞へて、やがて第一個の道野友三、矢張り其の折りの洋服にて逍遙（マ）として出で來る）

吉「や、姉さん、あそこへおいでなさるは、あの道野先生じやありませんか。

孃（道野と云ふに驚ける樣子にて向ふを眺め果して其の人なりしぞ兩頰さつと紅らめつ、さゝやく聲もふるはれて）

「あのお前ね、道野先生つて早く行つて御挨拶をなさい。

吉「だつて僕はなんだか恥づかしいもの、姉さん行つて下さいね……

嬢「私も行くからね……お前まあ先きへおいでよ、さあ早く〳〵、あれ、向ふの方へ行つておしまひなさるじやないかね。

（是れにて吉松は道野の側に走り行き）

吉「道野先生……

道「はあ（と振り向きて）やあ、うーむと、貴君(あなた)はどなたでしたつけね……

吉「はい……あの僕は……あれです……過日(いつぞや)あの八幡の森の中で先生の……錢囊(ぜにいれ)を盗まうとした……

道（吉松の顔を凝視し居りしがやがて思ひ出し）

「うむ成程さうだ。どうして東京へ來たのだね、大層立派にして居るじやないか。

吉「それは事情(わけ)がありまして……

（と梅子の方を振り向く、此の前より梅子は椅子を離れてあちこちとして居りしが始て道野の側近く寄り來て）

嬢「誠に突然お呼び留め申して失禮を致しました（と丁寧に挨拶をする）。

道「どう致しまして（と梅子を見てありしが）。

うーむ、甚だ失敬ですが、あの八幡の森とやらで一寸拝顔をしたお方では御座いませんか。

嬢「はい左様で御座います。

道「どうして又た私が道野だと言ふことを……

嬢「……はい其れはあれで御座います、あなたが御著作の『貧民行』を拝見致しまして……私共にはわかりませんが日々拝讀致して居りました所、あの折あなたがお歸り遊ばした跡にあなたの御名刺が落ちて居りましたので、偖て

はさうであつたかと誠に殘念に思ひました、尙ほ又た御滯在ならば種々お敎に預かりたいと存じましてお宿をお探し申しました所御出立後と承まりまして重ね〳〵殘念に存じました。

道「や、それは〳〵實は御鄕里から段々大阪まで漫遊致しまして彼の地の窮民の情況など取調べまして此の頃漸く歸京した樣な次第で御座います、歸つて見ますれば地震やら火災やらの爲めに窮民の上に氣の毒のことばかりです……失敬な事を伺ふ樣ですが、あなたの御風俗はあの折とは大分異つてお見受申しますが何れかの學校にでも……

孃「はい〇〇女學校に居りまする金子梅と申すもので御座います……此の後どうぞお見知りを……（と口ごもる）

道「あ、左樣で御座いますが。では此の頃の女學評論に私のあの詰まらぬものを御批評下ださいました『梅女』とおつしやるはあなたでは御座いませぬか。

孃「はい……誠にお恥づかしい次第で御座います……

道「どう致して、私こそ御ほめに預かりましたのは何共以て恐れ入ることで御座います、御卓見の段は誠に近來得易からぬ文字と拜見致しまして、實はどう云ふおかたであらうかとお慕はしう存じて居りました所、圖らずお目に掛ることを得て實に喜ばしう御座います。

孃「いえ、私こそ誠に……

道「あゝ實に喜ばしう存じます。以後とも御懇親に願ひたう御座います。尙ほ一つ御意見を伺ひたいと思ふ廉もありまするが。然かしお急ぎで、――

孃「いゝえ別段……

道「では誠に失禮ですが。

（とやがて兩人は自由椅子に並び掛かり文學上の談話、貧民の實況等の對話あり、其れより續いて道野友三が抱

懷する社會主義の企圖等に移り)

道「あ、是りや思はず飛んだ横道へは入りました。一體此の少年はどうして東京へは參りました。

孃「はい、實はあの折性質は善良の樣であるが境遇の爲めに將來が案じられるとおつしやいましたお言葉に感じまして、是れの親共に申し談じ過般歸京の時に同伴致して御座ります。

道「はゝあ實に御奇特千萬の事です、私共の見る所では貧窮者の子弟の中になか〳〵有望の少年があるですが、惜しいことには其れを正道に伸ばすことが出來なくて皆な邪道に陷いらせるです。是れは寧ろ其の罪、社會に在るだらうと思ひます。

孃「誠に御尤ものお說と存じまする、甚だぶしつけなことを申す樣で御座いますが、あなたが下等窮民を救濟するお企ては、(以下中絕)

習作斷片(二)

障子はスウと中から開きて立ち出づる廿五六の丸髷の婦人、其の儘緣の柱に身を寄せかけて空打ち仰き見ぬ。陰曆の十日か十一日頃にや澄める月かげは庭の松が枝に傾きて葉越しの月の光は婦人の頰のあたりを靑白く照らせり。かしこにも此處にもすだく蟲の音は身に染み〳〵と響きぬ。

十分ばかりも此の儘に過ごして婦人は元の座敷へ戾りぬ、見れば淸らかなる八疊の一間には既に夜の具さへ延べてあるを、婦人は更らに寢ねんともせず、燈下の机の前に座はりて讀みさしたる書物の上に眼を注げり。去れど强て讀まんとすにもあらぬにや眸子は同じ所にのみ注ぎて進み行く樣子も見へず。柱の上なる時計の響きに振り仰ぎ見れば長き秋の夜も既に十二時を報ずるにぞ婦人は靜かに立ちて臺所の方に赴きつゝ、ほの暗きランプの影に針持てるまゝ

俯きて在る下婢をゆり起しぬ。

『由や、由や、うたゝ寝して風など引いてはいけないよ。

數々ゆり起こされて僅かに目さめたるお由と云へる下女は欠伸びをしながら眠むたげなる眼を開きしが奥様の側に居給ふを見て忽ち口のあたり手の甲にて拭きつ居ずまい直ほしてキマリ悪るげにかしこまりぬ。

『今ま、モウ十二時を打つたからお寝(やす)みョ表の締りは私がするから良いョ、

『へ、へ、

まだ能く目醒めならしきお由の様子に婦人は片頬に笑みを洩らしつ、うたた寝してはいけないョと尚ほも心付けて元の座敷へ返へりぬ。

夜は愈々深け行けども婦人は尚ほ寝ねもやらず。秋の深夜の寂しさを破りて遙かに聞ゆる車の音の次第に此方へ近つくにぞ、婦人は顔振り揚げて襟のあたり身づくろいなどしたりしが、車聲はリン／＼と我が家の門を走りて更らに彼方に遠く消へ行くにぞ、婦人は兩の手もて面を掩ひつ、開ける儘なる書物の上へ打ち俯せり。

二時は疾く過ぎて早くも三時の時計は響きぬ。身動きだもなさでありし婦人は此の時僅かに身を起こし、右手差しのべてランプの光を細くなしつゝ、やがて寝床の上に身を移せしが、帯をも解かぬ腰のあたりへ夜具を纏ひて其の儘枕の上へ身を投げ懸けぬ。

其の明くる日は日曜日なるに朝から天高く晴れ渡りて日は暖かに照らせば秋の野山はさぞ賑ふなるべし。婦人の顔の色さめて目の上の重もたげに見ゆるは昨夜安らかに眠むらざりし故ならん、お由と呼ばれたる下女は十六七にやあ

らん、昨夜の意氣地なかりしに引き換へて勝手元から庭のはき掃除まで一手を以て切つて廻はす敏腕家なり。今しも婦人が己が居室の取りかたづけしつゝある閾の上に手をつかへて、——

『御飯が出來まして御座いますが奥様、直ぐにめし上がりますか。

婦人は立ちてありし儘に振り向きて

『私はネも少こし後に頂くからネ。お前先きへ仕舞つてお呉れョ。

『へ、へ、

『私には少しも遠慮しないでネ。私は今朝少し氣分が惡るいんだからネ。

お由は其の儘罷かり下がりぬ。

其の日の十時過ぐる頃、門前に一輛の車留まりて八字髯美しき三十格恰の一紳士下り立ちぬ。婦人は奥より、お由は臺所より出て迎ふる途端に紳士はいそ〳〵と片足は早や式臺へ上がりぬ。

『お歸り遊ばせ。

『旦那様お早よう御座いました。

紳士は帽子片手に笑顏を作り、

『勝、昨夜はさぞ待つて呉れたらうネ、實に申譯がなかつたョ。

婦人の方に目を遣りて慰め顏にかく言ひつゝサツサと奥へ打ち通りぬ。是の紳士こそ此の家の主人松井青造とて〇〇新聞の主筆先生なり。婦人は良人に席を薦めつ。

『貴郞（あなた）。アノ御飯はお濟みになりましたか。青造は火鉢の縁にて卷莨の吸ひ殼を拂いつ。

『ウム、濟んだ。ドウダ昨夜は待つて呉れたらうネ。ウー左樣か、其れは實に氣の毒だつたなあ。昨夜は實に困却

さ、社の事に就て少し相談があつた所へ、倶樂部の方からも今度の新内閣に對する相談があるからと云ふので、トウと夜更かしさ——今朝はどうも頭がしん／＼してこまるョ。勝、氣の毒だが一服たてゝ呉れないか。

良人の所望に婦人は薄茶一服たてゝ良人の前に置けば青造は笑ひながら、例の松井流で頂くかなど打ち興じつゝグツと呑み干し、

『是れは結構。今日は一としほのお加減だ、お蔭で胸がスツキリした。

『今ま一服如何がで御座います。

『左樣さネ。では今ま一服頂戴しませうアハヽヽ。其れに今日は是れから伊藤や中村などゝ紅葉狩りに行くんだから。

『貴郎。まだ紅葉には少し早いで御座いませう。

『所が皆んな急進黨なもんだからな、ハヽヽヽ、

『オホヽヽヽ、

青造は又もや細君の手前に喉を潤ほしつ二ツ三ツ何やら言ひ付け置きながら立ち出でぬ。

『御ゆるりと御遊山を……

『ナニ。今日は早く歸るョ。

其儘門に待たせ置きたる車に乗りて急がせぬ。

『御免下ださい。

と言ふ嗄枯れ聲の訪づれにハイと言ひつゝ走り出てたるお由が、

『おや誰某(どなた)かと思ひましたに綿屋のお婆あさんですか、

『由ツちやんか、大層大きくおなりで其れに見違へる程綺麗におなりだ――あの御新造さんはお宅(うち)にかネ。

お由は褒められたるに少し耻づかしさうな面地をなしつにこ〳〵として老婆を勝子が部屋の外まで案内せり。

『奥様。綿屋のお婆さんがお見えです。

『御新造様どうも誠に御無沙汰致しました。

婆あやが見へたの、と勝子は内から衾(ふすま)を開きつ、

『久しく見えなかつたのネェ。何時もお丈夫なの。さあずつとお這入り、こゝまでおいでなネ。

老婆は薦めらるゝ儘、膝押し進め、ついで出されし茶に喉をうるをはせ偖て是れと取り立てゝ云ふべき程にもあらぬ浮世話しに餘念もなく、老婆の浮き〳〵として口滑らかなるだけ勝子は打ち沈みて只だ時々「フム」「成程ネエ」など殆と意味もなき受け言葉も挾み其の間に折々片頬の笑靨の現はるゝを見るは餘程に婦人の心を動かせる時なるべし。

婆やはナルロだからと命じ玉へる酒も出でたるにぞ老婆の元氣は愈々盛にして『どうせ私は御承知の通りだから』とて進めらるゝ儘老婆は相手なき酒に額の皺も延び〳〵となり一つ二つは若かく見ゆる様なりぬ。

『あの御新造様、こんな事を申すのは可笑(おかし)ふございますが是れも貴女(あなた)をお育て申し上げた此の婆々の心の苦勞なのですから……へ、へ、もう私一人で頂戴致しましたから、御覧なさいまし、これこんなに眞赤になりましたョ……其れでネ、お孃さま。ホヽヽ、あの御新造様』と老婆はズイと前へ乗り出して聲打ちひそめ『旦那様は近頃、夜(よ)るお宅をおあけなさる事が切々ありは致しませぬか――お泊り掛けや、お晩くお歸りなさる事などが――あの御新造様此の婆々に何もお隱くしなさるには及びません。婆々がお育て申した貴女様や其の旦那様の好いお噂を聞きます

時は此の婆々までが褒められる様に思はれて嬉しう御座いますもの。其れに此の頃聞きますれば、あの何とか申しました……ウー、ヲ、其れ〲立花屋の梅吉とか言ふ藝者に大熱々で大熱々でお通よひなさるとのこと。旦那様に限りそんな事はと初めは思ひましたが聞きますれば聞きまするだけ慥かな噂。私は御新造様がお可愛さうで堪へきれず今日は御無沙汰のお詫かた〲其れ伺ひに參上致して御座います。

眞實溢るる老婆の言葉に勝子は僅かに口を開きつ、

『なんの婆あや心配してお呉れでないョ。御交際の上では餘儀ないこともおありなさるでせうがネ、すき好んで不身持ちをなさる様なことは決してないのだから、

老婆は堪らへ切れぬ様子にて、

『其りや貴女。旦那様のお悪るい事をお隱しなさるは御尤で御座いますが、餘まり貴女が柔かにして在らつしやるのは却て旦那様のお不爲めで御座いますョ。貴女こんな事申しては何で御座いますが、どの様な殿方でも迷ふと云ふことは是非もない事ですから一旦の迷からはどんな事が出來するのも圖られません。其れに貴女、先方の女の方が旦那様よりも一生懸命だと云ふのですもの。其れはもう其の筈で御座います、私などにさへ、あゝ云ふ風に御親切にやさしくして下さるあのお口に掛つてはどんな女だつて、貴女、平氣で居られるもんですか』老婆は前なる猪口をグツと呑みほし『先頃もネ手前共の店先きを二三人藝者が通りましてネ店の若い者があの眞中のが梅吉と云ふのだと申しますから私もどんな女かと思ひましてネ。（中絶）

習作斷片（三）

八重の山路は草深く千古の松は鬱蒼たり漲り落つる谷川の岩にあたりて雷のごと碎けて雪と散亂す人里遠く離れた

るかゝる深山の境ぞ神のみたまや尋ねまし。

苔むす巖の根かたより湧きてぞ出づる泉川湯氣立ちのぼるさま見れば清水にはあらざりけり去らば地底の熱湯か爛れなせぞや汝が手と恐る恐るも探ぐり見る指滑らかに心地よく掬へば甘く乳の如し訝かしの泉かないとも怪しの出湯かなあゝ我知りぬ／＼天地の精氣露と結び雫と凝りて此處にこそ溢れ出でけめあらかしこしの泉かた。

夏の頃ほひとなりぬれば遠近人の峯つたひ谷をわたりて神の泉訪ひ來るもの最と多し。

我れ此の山深くわけ入りてより指折り數ふれば早くも七日を過ぎぬ或るは鎌を入れざる八重葎かきわけて峯尚ほ深く攀ぢ登れば麓の山は蟻の巣の如くにして遙けき高嶺峻岳は雲かと思ふばかりなり或るは急流激湍の碎けては百の獅子吼ゆるが如く飛沫玉を散らすの巨巖に踞して聲の限り神歌謳へば梢の風も水の流れも我が爲めの玉琴なりかし自づからなる賜物は豐けき上に豐けくあれど哀れ人は其ればかりにては飽かぬ心地のせらるゝなりわきて寂しきは夜にぞありける影暗き孤燈の下に獨り兀然と物思へば樣々の哀れは胸に往來して文讀むさへ心進まず家路なつかしく思ひ至るこそうたてけれ朝に歸り夕に來る湯あみの客の絕へなきに友を求めて得ぬことのあるべきや去れど我には眼に容る人の誰れも彼れも卑しき心の其の容貌に現はにして斯かる靈境を活かすべういと憂くぞ思ふなるを如何でか共に天地の偉大にして神の御業のかしこきを讃め稱へんの心起らんやあゝ人は果して友なしに在り得べからぬにやはた我が修練の足らぬが故か。

遙かなる西の山々さへまだ朝日うつらぬ曉の葉末の露吹きも落さぬ程なる風そよ／＼と寢起きの面にあたる心地よさ岸に沿ふてそゞろ浴みする方へ赴けば今朝は時早ければにや未だ一人もあらず懸けならべたる筧より落ち來る水は滔々として瀧壺の眞砂は玉を敷きたるが如くなり瀧の前なる欄杆に身を寄せておちこちと眺むれば雲は山の腰を繞りて霧は谷を塡め次第に薄くぞ消え行くなる。折しも丸木束ねて架たせる小橋歩み來る一人の乙女あり雪をも欺く單衣

に一としほ艶まさる漆の如き黒髮をいと輕々と束ね髮、白く豐けく艶やかなる頰のあたりに三筋四筋ほつれたる鬢の後れ毛くはへたる脣は實にや海棠の蕾の如く何を的てに見るともつかず又た見ぬとも付かぬ双の眼は晴れ渡りたる秋の夜の星の如し堂々と瀧なす上の丸木橋を繩の緒の庭下駄しとやかに步みを運ぶ風情、美しと云はんか淸しと稱たへんか今日の日までに見しことなき女子なれば定めて新たに來れる客人なるべし去るにても何處より來れるならんかと暫ばし其の樣のみ見てありしに乙女はやがて岩角あちこちと登り來りつ傍へに我が立てるをば心付かぬものの如く霏の如き衣脫ぎて欄に打ちかけ左手に白き手巾を提へ右手には鬢をかき上げつゝ靜々と瀧壺のほとりに近寄りけり我は其の振舞の世の常の乙女に似もやらぬに半ば怪み半ば驚き乙女のまに〳〵瞠子を轉じて見てありにき。

乙女は其のすき透るばかりなる足の先きをば瀧つ瀨に打たせてありしがやがて其の乳色なせる身を轉じてヒラリ瀧壺深く沈みたりあはやと言ふ間に彼女はスツクと立ち上がれり綠の髮は瀧にほどけて膝の下まで垂れ下がりぬ眼閉ぢたる儘少しく仰向きて顏や胸に亂れて垂れたる黑髮を兩の手にかき上げつ徐ろに右の肘を滑かなる石の上に支へ身をば横さまに伸ばして胸のあたり瀧に弄ばせぬ我は曾て古き畫伯が經營慘憺の結果なりと云ふなる神女が沐浴の圖を觀たりき其の神々しき容顏、身に一小布片だも纏はざることに依りて更に尊貴の念を惹起せり竊かに謂へらく是れ畫伯が美神の精力に感じて成れるもの元より世界に於て看るを得べきものに非るなりと斯く思ひしは全く我が誤なりき然か思ひしは必竟我が心の淸からず高からざることの證るしにして誠に恥づべきことにてありき看よ今ま眼前瀧坪の内に安置せられたる活ける女神の像を。丈けなす髮は水のまに〳〵波打ちて流れ腰より下は澄みに澄みたる水の中に横はりて左右の足は或は平行に或は交叉に動かされつゝあるたり半ば開ける兩の眼に慈愛は溢れ笑めるが如き脣に聰明は漲り細く通れる鼻筋に健固の意ひはこもるに非ずや如何たる名工の意匠にはなりけむ此かる崇高優美なる活畫眞像を拜せんこと殆ど夢境の思ひぞせられける。（中絕）

政治小說年表

一　本表は、一の私記ともいふべく、私の手許にある備忘手帳から私の知る限りの政治小説乃至准政治小説を書き抜いたものである。

一　本表の年代は大體明治年間の全體に亘つてゐるが、政治小説の時代としては、明治二十三年頃までを充つべく、それを延しても日清戰役前後までと見るのを妥當とする。從つて本表に於いても、以上の期間に力點を置いた。

一　明治期特有の「小說」觀念からして、嚴密にいへば政治「小說」の中に入らないものも、多少入つてゐる。

一　發行所中、明記してないのは東京である、但だ大阪の駸々堂は餘りに有名であるから、これも一々大阪と斷ることをやめた。

一　同一作物で先づ新聞雜誌に出たものは、成るべくその條にまづ載せた、又數册に亘るものはその第一册又は第一編の刊行年度の條に記入し、次卷以下は省略した。

一　本表は倉卒の起草ゆゑ不備脱漏が多いと思ふ。大方諸君の是正を仰ぎたい。

昭和十四年六月　　柳　田　泉

〔前記〕

○上巻「政治小説以前の政治文學」參照

明治元年

新聞讒敵 湊川餘瀧 二 　未詳

扶桑木の比喩 　もしほ草

神戸よりきたりしはんじるのうつし 　同

風說慶應大功記 一 東園主人 　清夢館

淀川合戰見聞奇談 三 浪花野夫 　同

明治六年

復古夢物語 十七 松村春輔 　文永堂

近世事情 十三 山田俊藏 　同人

近事紀略 八 石津賢勤・菊地三渓 　京都 三書房

雨窓紀聞 二 竹陰隱士 　青黎閣

明治七年

背合ばなし 二 榊原伊祐 　大阪 榊原

湖陀樓寄投書 　新聞雜誌

（諸評）閻羅殿獣鬼章 沈起鳳 　東京日々

自由譚 一 高田義甫 　協力社

（七五調風、手習本に作りしもの）

近世太平記 十二 吉村明道 　片野

近世新說 山陽一聲 五 原田道義 　奎章閣

臺灣軍記 五、田代幹夫 　堺屋

開化洋步 後世夢物語 二 ジオスコリデス作 上條信次譯 　奎章閣

明治八年

近世紀聞 四十二 條野傳平・染崎延房 　甘泉堂

近世櫻田紀聞 七 松村春輔 　武田傳右衛門

明治太平記 四十八 村井靜馬 　延壽堂

初夢の記 　東京日々

珍說郡彙新誌（一—三） 荻原乙彦 　同人

明治九年

開明小說 春雨文庫 一六 松村春輔 　文永堂

近世日本外史 八 關機 　東京 三書堂

明治十年

繪本西南太平記	二十	沼尻桂一郎	萬笈閣
西郷隆盛 夢物語	一	伏見豊吉	伏見豊吉
內幕論		小牟呂新（小室信介）	朝野新聞

（西南戰爭關係は無數にあるも省略す、『政治小說研究』上參照）

明治十一年

通俗民權百家傳	五	島田三郎抄譯 萩原乙彦演義	薔薇樓
歐洲奇事 花柳春話	五	リットン作 丹羽純一郎譯	坂上半七
新未來記	二	ジオスコリデス作 近藤眞琴譯	青山
近世櫻田講談	二	未詳	小林鐵次郎
報國やまと魂	一	染崎延房	同
近世見聞錄	六	石井善內編	荒川
晴雨新談		新玉夢吉	朝野新聞

明治十二年

歐洲小說 哲烈禍福譚	八	フェネロン作 宮島春松譯	太盛堂
島田一郎梅雨日記	十五	岡本起泉	島鮮堂
三田阿福町奇話			扶桑新誌
或る大店の內幕			同
格蘭氏傳倭文賞	九	假名垣魯文	辻岡文助
豊時田秋漣新雁	三	柳水亭種清	錦松堂
不情夫暴論ノ記		品肉子	朝野新聞

（題惡きも政治小說に極めて近し）

南の海自由旗揚	五	牧岡安次郎編輯	大阪 攝海社
演說必携 生醉の目覺し	二	清須主計	角松
西鄕地獄征討記	二	花鼎舍	金田

〔本　記〕

明治十三年

民權演義 情海波瀾	一	戶田欽堂	聚星館
龍宮奇談 黑貝夢物語（第一）	一	風賴子	風賴舍
民權穴さがし	一	牧岡安二郎編輯	大阪 攝海社

世界乗合船　一　總生寛　竹夭堂
國勢夢想記　一　岸甚咲　供泉堂
愛國一夜談　一　神村忠起編　開成舍
南海血潮の曙　南國野史　高知新聞
名廣澤邊萍　九　渡邊文京　金松堂
賞集花廼庭木戸　十八　轉々堂藍泉　松延堂
瑞西獨立自由の弦　一　齋藤鐵太郎譯　泉增吉
日本民權次郎長譚　十　萩原乙彦　同譯　文正堂
（刊否未詳）

明治十四年

阿國民造　自由廼錦袍　一　櫻田百衞　未刊
（十六年出版）
民權鏡嘉助の面影　鶴舟野史　東洋自由新聞
（右本は、筆者は有名なる松澤求策なり）
東洋奇談　鳳緣情誌　一　嘯風子（一宮猪吉郎）　大阪　山田氏
冥府紀事　生田精之　明治日報
（十五年刊、東京青木活版所）

秋の詠續物語（第一）一　加藤富三郎　大阪　綿喜
蓆旗群馬嘶　九　金松堂
日本近世太合記　二　加藤壽　金隆堂
魯帝弑逆記　二　大久保常吉　漸進堂
西國烈女傳　一　田島任天　弘令本社
露國奇聞　烈女之疑獄　一　柚田策太郎（譯）　由己社
慨發自由天與輪　芳川春濤　未詳
（淨瑠璃風のものといふ）
滑稽　國會夢物語　一　高瀬眞卿閲　小柳津柳窓著　東北新報社
滑稽　天狗討論會　一　同　同
蟬劍居士傳　未詳　鳳鳴新誌
秋雨奇夢　蟬劍取戻の始末　未詳　同
（蟬劍は民權のカムフラージュ）

明治十五年

民權泰斗　板垣君近世紀聞　九　中島市平編輯　金松堂
自由之魁　蝴蝶紀談（第一）　一　上田秀成　溫故堂

民權蕤栗毛(初)	二	蠻觸舍蘇山	木田・海田
文明開化 地獄極樂一週記	一	大久保夢遊	漸進堂
東洋自由の曙		坂崎紫瀾	高知新聞
當世言逆論(いさなひ)	一	淸水卯三郎	瑞穗屋
殷民増鑑 淸治湯(せいぢたう)講釋		春のや阿朧(坪内逍遙)	東京繪入新聞
壓制政府ノ顚覆		潤松晩翠譯	政理叢談
正四位坂垣公實傳 東洋自由の魁	二	野田與三郎編	開成社
自由の花岐阜の嵐 坂垣公の變報	一	宇和平輔	同人
佛國革命自由叢談 眞段郎蘭傳(上)	一	竹下康之譯	大阪 門田
西海血汐の灘		潤松晩翠譯	政理叢談
(一名佛蘭西大革命原因)			
勇婦テレーズ傳		河津祐之口譯 小宮山桂介筆記	立憲政黨
冥府紀事	一	生田精之(遺稿)	靑木
佛西國虛無黨 寃枉乃鞭笞	一	宮崎夢柳稿 内藤久人輯	京都 駸々堂
西洋血潮小暴風(初)	一	櫻田百華園主人意譯 渡邊文京校閲	繪入自由出版社
思案橋曉天奇聞	九	岡本起泉	金松堂
忠孝勇傳 眞鳥苅信濃美談(初)	一	竹内泰信編輯 假名垣魯文閲	信州松本 慶林堂
(作者は渡邊文京なり)			
蘐分東風英軍記	一	戸田錢湖(欽堂)	東京歌舞伎新報社
良政府談	一	井上勤譯	思誠堂
哲爾(てる)自由譚	一	山田郁治譯	甘泉堂
自由乃凱歌	二	宮崎夢柳意譯	繪入自由出版社
虛無黨退治奇談	一	川島忠之助譯	同人
春窓娘讀本		愛花情史	高知新聞 土陽新聞
歐洲奇話 瑞西革命記		(未完) 在東京鶴城生	土陽新聞
自由之空夢		蝸石園主人(上田秀成)	鳳鳴新誌
自由戯言 忠臣藏(はなのあに にゆうのさきがけ)		尾道桃彥	驥尾團子
早梅自由魁		樟竹物太夫	同

（新作浄瑠璃）
讒多我記　不粋庵喃々　驥尾團子
龍宮奇談　未詳　朝野新聞

明治十六年

〔齊武名士〕經國美談　二　矢野龍溪　報知社
〔新編奇聞〕自由夜話（前）　一　箕輪勝編　金松堂
〔新奇妙談〕閻魔大王判決録　二　高瀬紫峯　共同社
〔時事新話〕明治乗合船　一　柳窓外史（小柳津親雄）　今古堂
（時事珍談・開化乗合船）
〔明治流行〕嘘八百　一　菊亭静　績文舎
〔賢夫人破邪〕露國安那物語　坂崎紫瀾　土陽新聞
〔寓意演義〕自由の花笠　同　同
〔見光主義〕自由燈　一　中野了隨　鶴鳴堂
〔■■民造〕自由廼錦袍　一　百華園主人（櫻田百衛）
（十四年作）　阪部
〔■■■■■■〕新編大和錦　二　小室案外堂作　壇上■■■輯　京都　太田

〔繪入人傳〕自由新話　二　花笠文京（渡邊義方）編輯　芙蓉閣
〔天下無双人傑 海南第一傳奇〕汗血千里駒（初）　一　鳴々道人　駸々堂
（坂崎紫瀾）稿（土陽新聞）
〔近事奇談〕内幕話　一　淺井新之助　栗田競錦堂
〔勤王諸氏〕高峰の荒鷲　二　宮崎夢柳　繪入自由出版社
二十三年未來記　一　柳窓外史（小柳津親雄）　今古堂
（未來記と號せる最初の小説）
東洋民權百家傳　九　小室信介編　自由新聞社
自由の旗揚　〔佛國〕エルネスト女史著　澗松晩翠譯　政理叢談
〔治断大敵〕叱驚叢談　一　醉月仙史　九春社
〔天明騒動〕伏見義民傳　三　宇田川文海　京都　駸々堂
寒紅梅八年之雪（未刊）　菊亭香水　萬字堂
〔新説奇聞〕自由美談　一　吉本義秋　時事出版社
過去現在未來倭美談　一　未詳　大久保
〔滑稽奇談〕三政黨穴探（初）　一　柳窓小史　柳川堂
〔明治新說〕旭日美譚　土屋（須藤）南翠　開花餘情

汗血千里駒	三	坂崎鳴々道人原稿 雜賀柳香補綴之	摛陽堂
經世指針 鐵烈奇談	一	伊澤信三郎譯	白梅書屋
珍談雜煮餅	一	菊亭靜閲 竹亭綠著述	金章堂
太郎と次郎との話			日本立憲政黨新聞
滑稽繪入 冥府狆談	一	宮崎孝一編（小室案外堂作）	松木
明治十七年			
今淨海六波羅譚	一	幻々道人	稗史館
瑞西革命小史弦響錄		佐藤鶴谷	大阪每朝
佛國革命 修羅の衢		紫瀾漁長譯	自由新聞
春色日本魂		土屋（須藤）南翠	・開花新聞
興亞綺談 夢戀々		小室案外堂	自由新聞
義人傳淋漓墨坂		同	自由燈
自由艶舌女文章		同	同
（十七年五月刊）			
尊攘奇聞 筑波夢	一	菊亭靜編輯	摛陽堂
報國勤王 筑波水滸傳	三	同	螢雪堂
才子佳人 螢雪美談	一	花笠文京	繪入自由出版社
文明東漸史	一	藤田茂吉著	報知社
第二世夢想兵衛胡蝶物語（前）	二	服部撫松	九春社
滑稽笑談 淸佛船栗毛	初、二編 三、四、五編	伊東橋塘 川上鼠文	松成堂
慘風悲雨 世路日記	一	菊亭香水	東京稗史出版社
南山皇旗の魁（初）	一	烏々道人稿	土佐積小堂
開卷驚奇 冷音顔別他傳（れおんだんべつた）		未詳	函右日報
自由太刀餘波鋭鋒	一	坪内雄藏譯	東洋館
白露革命外傳 自由乃征矢	一	井上勤譯 渡邊義方校正	繪入自由出版社
一滴千金 憂世乃涕涙	三	宮崎夢柳演義	成文舍
鮮血の花		同	自由燈
泰西活劇 春窓綺話	二	服部撫松纂述	坂上半七
政黨餘談 春鶯囀	四	關直彦譯	同
秀才奇遇 雪の下萠		土屋南翠稿	開花新聞
明治十八年			
佳人之奇遇	十六	東海散士（柴四朗）	博文堂

通俗近代暗殺事蹟	一	菊亭靜	鳳城書樓
慷慨義烈 報國纂錄	一	植木枝盛	同人
虛無黨實傳記 鬼啾啾	一	宮崎夢柳著	旭活版所
開卷悲憤 慨世士傳	一	坪內逍遙譯	晩青堂
諷世嘲俗 繫思談（上中）	二	藤田茂吉 尾崎庸夫譯	報知社
滑稽道中 地獄傳信記	一	木葉散人	京都 東枝
佛國餘聞 霜夜の月	未詳		自由燈
英國名士 回天綺談	二	加藤政之助	大阪 岡島
軍馬倥偬落花談 榮花の夢	未詳		繪入自由
薔薇の露	未詳		自由燈
遠砧音菊月		須藤南翠	改進新聞
結城合戰花鍬形		同	同
當世娘性質	一	宇田川文海序 四文字舍半笑作	大阪 王文堂
胸の有邪無邪		寒林學士	郵便報知
明治十九年			
狡猾家列傳	一	局外山人編	吉野
高野長英 蠻迷物語	一	香夢樓（三木愛花）	加藤

二十三年未來記（上下合）	一	末廣鐵腸	博文堂
政治小說 雪中梅	二	同	同
新日本	二	尾崎行雄	同人
二十三年國會未來記	二	服部誠一	仙鶴堂
內地雜居 未來之夢	十	春のや朧（坪內雄藏）	晩青堂
諷誡京わらんべ	一	同	大阪 日野
近代悲慨 烈士傳	一	艸のや忍編	松成堂
慨世悲歌 照日葵		須藤南翠	改進新聞
一顰一笑 新粧之佳人		同	同
雨窓漫筆 綠簑談	一	同	大阪 改進堂
社會進步 蜃氣樓	一	山川鶴吉編	神戸 弘文堂 大阪 吉岡
西洋美談 政治之曙（第一）	一	曲川漁夫	成文社
獎喩夢物語	一	杉浦重剛立案 福本日南筆記	澤屋
三英雙美 政海之情波	四	渡邊治譯	丸善 博聞社
政治小說 梅蕾餘薫	二	牛山鶴堂纂譯 跡部素山校補	春陽堂

亂咲自由之初花		齋藤緣雨か	自由燈
雲井龍雄傳	一	菊亭靜閲、秋亭賓著	覺張
世界進步 第二十世紀	三	服部誠一譯	大阪 岡島
涉刀夜話 常磐の松蔭		楓瀨散人	改進新聞
東風(こち)の朝凪(あさなぎ)		東洋太郎（雛賀豐太郎）	同
自由の曙	三	未詳	未詳
朗蘭夫人傳	一	春の屋朧譯	大阪 帝國印書會社
佛蘭西國滿彰豪氏全傳 世界の燈	一	嶺林太郎譯	丁卯堂
佛國女傑如安實傳 自由の新花	一	朝倉禾積譯	同
明治二十年			
政海艷話 國會後之日本	一	仙橋散士（九岐晰）	文英書閣
春曉撹眠 癡人之夢	一	須藤南翠	晩青堂
一顰一笑 新粧之佳人	一	同	正文堂
朧夜櫻		同	改進新聞
幟の旗風		同	同
政事小說 花間鶯	三	末廣鐵腸	金港堂
時事小說 落葉之掃寄	一	末廣鐵腸	文學社
啞之旅行	三	同	嵩山堂
究途之涙（前）	一	同譯	博文堂
（刊否未詳）			
雨中花（前）	一	末廣鐵腸・二宮孤松共譯	後凋閣
地獄極樂 怪化の夢（前）	一	芳川廷翰	明進堂
政海波瀾 官員氣質	一	田中清風	共隆社
政海冒險 大膽書生		井上勤譯	文學之花
內地雜居 街衢噂	一	吸霞仙史	改良小說出版會
一名油斷大敵			
行幸奇事大阪紳士	一	織田純一郎	大阪 忠雅堂
政治家社會（初）	一	同	大阪 駸々堂
革命起原 近世紀聞	一	菊亭靜	上田屋
錦之御旗	一	同	同
立志鑑 美少年錄	一	同	イーグル書房
三春落花 獄裏之夢	一	河有野史	同
社會小說 日本之未來	二	牛山鶴堂（良介）	春陽堂

日本新世界（前） 一 牛山鶴堂 成文堂
屑屋之籠 二 西村天囚 博文堂
〔悲壯慘話〕鼎駒之跡 一 中村弱（啓天） 晩青堂
眞如之月 一 鹿目丑彦 精文堂
〔才子佳人〕流離奇談 一 鴫洋散士（熊谷確資） 榮泉堂
〔滑稽諧謔〕書生をもつぶ誌 一 鄉窓外史 山崎
景山英女之傳 一 獨醒狂夫 金鱗堂
通俗經國美談 一 安田倉三 永昌堂
（矢野氏の著とは何の關係もなし、スペイン、アラゴンの獨立の小說也）
〔女權董談〕文明の花 一 南柯亭夢筆 金櫻堂
日本前途之意見書 一 岡三慶（道明） 顏玉堂
一名未來の豫言
〔明治政談〕廣寄破鬼膽 一 同 顏玉堂
〔政治小說〕芳園之嫩芽 一 松木嵐峰（董直） 共隆社
未來の面影（前） 一 雜谷藏北（龍男） 金港堂
〔文壇佳話〕[illegible]やの月 一 東洋奇人（高安龜次郎） 吟松堂

世界列國之行末 一 東洋奇人（高安龜次郎） 金松堂
〔才子佳人〕政海之運動 一 同 吟松堂
〔近世慨士〕浪華之縲絏（上）一 焉然居士（太田貞次郎） 日新社
〔政治小說〕深山櫻 一 大久保夢遊 銀花堂
〔內地雜居〕東京未來繁昌記 一 同 春陽堂
〔口から出まかせ〕滑稽政談 一 自由狂人（中野了隨） 上田屋
濟民偉業錄（前） 二 藤田茂吉（鳴鶴） 集成社
〔政事小說〕綢繆瑣談 一 朝夷六郎 後凋閣
〔百鬼夜行〕社會假粧舞 一 三木愛花 共隆社
〔法理小說〕百難錦 一 西岡鸞南 榮泉堂
社會の餘憤はらし 一 原田種生 雨文社
一名建國新論
〔代議政談〕月雪花 二 久松義典 國華堂
南溟偉蹟（前） 一 同 金港堂
南海狂瀾 一 同 集成社
〔寫意小說〕瑩緬存 一 殿木三郎 金泉堂

政海波瀾	梅花薫	一	賀古殘夢道人	天章閣
明治二十三年	夢想兵衛開明物語(上下)	二	米替笑史	大阪 有益館
	通俗佳人之奇遇 (東海散士原作の書き換へ也)	二	大東萍士(土田泰)	同盟書房
政治小說	斷腸之餘滴(上)	一	楳影陰士(成等常照)	駸々堂
	新潟奇聞娘演說	一	爲永榮二演說 藤井源太郎筆記	大阪 岡島
	二十三年國會道中膝栗毛	一	香夢亭櫻山	大阪 競爭屋
時事珍談	開化乘合船	一	柳窓外史	上田屋
五日紀變	英雄之肝膽(上)	一	榮城居士(野田藤吉郎)	博文堂 文海堂
	小人世界	一	仙橋散士	大阪 文海堂
泰西名士	蓋世偉談	一	渡邊虎太郎	名古屋 東雲堂
政治小說	廿三年夢幻之鐘	一	內村義城(秋風道人)	駸々堂
政治小說	鶯宿梅	一	同	同
芳草花園	春之曙	一	花の舍狂風	共同 三盟舍
革命餘波	英國奇談	一	北越樵夫(村松熊太郎)	高橋
海外逸聞	蓋世偉蹟	一	同	精文堂
字血句淚	回天之弦聲	二	葦田東雄(半窓睡仙)	鎗田
政哲論談	破窓之風琴	一	辻治之(繡江居士)	春陽堂
	時勢走馬燈	一	菊池信太郎	鶴鳴堂
	憲法講談政海の波	一	吉田香雨	駸々堂
	今譽黑旗軍記	一	流鶯散史(谷口政德)	金松堂
內地雜居	經濟未來記	一	松永道一	春陽堂
	文明膝栗毛	一	總生寛	イーグル書房
	通俗佳人之奇遇 (東海散士の作と何の關係もなし、明治維新を舞臺とせるもの)	一	石心鐵膓子(花木宗忍)	駸々堂
爆發奇談	午睡夢		作者未詳	大阪朝日
	奇遇之幻燈	一	香夢樓	金泉堂
	通俗經世偉勳	一	松井從郎抄解 尾崎行雄校閲	博文堂

	新帝國策	一	北村三郎	興文社
寓金小說	天保紳士	一	鐵筆將軍（大矢森之助）	盛春堂
	青天霹靂	一	島本仲道	今橋巖
軍書打夫	午睡夢	一	杉山藍世	金櫻堂
	東洋之新天地	一	月桂孫士（田鍋安之助）	後凋閣
	三醉人經綸問答	一	中江篤介	集成社
政治小說	鐵騎之心（前）	一	石尾一郎助	博文堂
	（刊否未詳）			
寓意佳話	翠松影	五	春峽仙史（安西權五郎）	駕雲館
諷世小說	吾妻えびす	一	戸田欽堂	顔玉堂
政治小說	雪中楳（上）	一	末廣居士（末廣政憲）	大阪 博文堂
	（書き直しもの也、訴訟となりて止む）			
	二十三年後未來記	一	同	大阪 畜善館
[illegible]	共和之色旗	一	大石高德譯	金松堂
	後世浮世態（前）	一	高橋基一	東崖堂
	愛國偉勳	一	同譯	同
	斷蓬奇緣	四	小宮山天香	鳳文館
慨世警俗	獨嘯談	一	蘭堂紫水（岡野碩）	晩青堂
百課千語	青年鏡（第一號）		北水山人	同
	花天月地		梅の家かをる	岐阜日々
[illegible]	護身の劍		一二三四五六居士	繪入自由
	雲の梯		捉影子	同
	霹靂一聲		未詳	同
	水仙花		未詳	同
	（女權小說也）			

明治二十一年

國會組織	國民之會議	一	植木枝盛	大阪 嵩山堂
	芒の一と叢	一	宮崎夢柳	駸々堂
	義勇兵	一	同譯	盛業館
國民叢談	東洋開化之魁	一	雷霆散士	共隆社
	壯士之夢	一	竹外居士（山崎勇之助）	石川
政治小說	治外法憲	一	末廣政憲	大阪 政進園
日本帝國一大現象	志士淑女之想海	一	[illegible]	春陽堂

	剛膽之少年	一	竹田左膳	永昌堂
	東洋之少年	一	同	同
	書生之肺肝	一	關西居士（根岸貞）	靜岡 擁萬堂
政治小說	文明花園春告鳥	二	服部撫松	鶴聲社
二十世紀	新亞細亞(上)	一	同	菁莪堂
改選餘談	田舍紳士	一	文のやたより（須永金三郎）	隆港堂
	自由鏡	二	小林雄七郎	金港堂
	四時廼杜鵑	一	遊波迂史	同盟分舍
政事小說	佐幕慨談	一	佐藤尙友	片岡
米政新話	烈女之勳功	一	蘭屋散史（長井常）	文泉堂
政治小說	野路の村さめ	一	肌香夢史（中島端藏）	イーグル書房
諷世寓意	薩長士	一	黄蕨逸史	大阪 葆光舍
地獄奇聞	義勇の壯鬼	一	骨皮道人閱 成佛居士著	共隆社
頑固理屈	女權之反對	一	頑々居士	同
政治小說	雨前之櫻	一	末廣鐵腸	博文堂 春陽堂
才子佳人	政海廼寫眞	一	玉ノ家調秀（石橋三造）	大阪 福老館
政事小說	自由の華(上)	一	愛柳散史（坂下龜太郎）	新潟 北一舍
浮世夢譚	一睡夢	一	佐伯久作	駸々堂
時事小說	室の早咲(上)	一	松江釣史（高橋達郎）	金港堂
女子佳人	濟民之華(上)	一	横矢松千代	大阪 光玉堂
社會現象	うつし繪	一	南翠外史刪 彩幻道人著	正文堂
慨世悲歌	照日葵	一	須藤南翠	春陽堂
	雛黃鸝	一	同	正文堂
處世寫眞	綠簑談	二	同	正文堂 萬里堂
	隱君子	二	同	春陽堂
	增訂もしや草紙	一	福地櫻痴	文海堂
	煙草の煙		同	東京日々
征蠻歸燕	孤島の明月	一	紫の舍とぼそ	共隆社
	一名國會の仕度			
稚子も婦子も	政治の世の中	一	岡三慶	顏玉堂
自由政治	國民之演舌	一	同	同

小説	剛膽之書生	一	角藤定憲	大阪 太華堂
政治小説	今世之佳人	一	池畔逸夫	中村芳松
寓意放言	突天漢	一	馬然居士(太田貞次郎)	大阪 岡本
明治社會	壯士の運動	一	内村義城	未詳
	新日本之商人	一	同	曉鐘館
[illegible]	爆烈彈		自由狂人	永昌堂
天賦固有	腕力之權利	一	同	村形
	佳人之薄命	一	梅の屋かほる	名古屋 東南堂
政治小説	枯骨の扼腕	一	志賀遜莫	駿々堂
	總理大臣	一	同	同
裁判小説	秋霜嘆	一	岡野碩	春陽堂
	新日本之佳人	一	櫻井鐵造	名古屋 木田
	未見世の夢	一	尺寸廬主人(寺内章明)	尚書堂
	決闘書談文の友	一	同	同
	雙白問答夢物語	一	奥村金次郎	成文堂
	新商人	一	宗司新三郎	誠之堂
政治小説	大國仁政錄	一	杉浦重吉	未詳

自由演義	政痴學	一	安井常次郎	大阪 宋榮堂
	狐政學	一	洒落齋居士	同
政海浮燈	十九世紀之暗礁	一	久永廉三	駿々堂
	新日本之娘艶舌	一	著者久永廉三(學堂) 評者山縣信光(鶴堂)	同
鮮血淋漓	國民の骸骨	一	久永廉三	博愛書院
政治小説	國民之涙(上)	一	同	顔玉堂
曉鐘一聲	國會之燈籠	一	同	駿々堂
鮮血忠魂	大日本民權史	一	東洋狂史(久永廉三)	上田屋
	大日本帝國之行末	一	久永學堂(廉三)	駿々堂
哲學小説	髑髏之慷慨	一	同	同
	都の錦	一	吉田魁光	大阪 偉業館
	慷慨書生之涙(巻之一)	一	佐藤桂蔭	月華堂 天賜堂
	雪中松	一	宇田川文海	日吉堂
政治小説	中原の鹿	一	同	大阪 龍雲舍
中原逐鹿	壯士之覺悟	一	喇々居士(奥村金次郎)	成文堂

政治小說	小人國發見錄	一	内田彌太郎・鳥尾岩太郎共譯	兎屋誠
一讀三嘆	飛鳥川	一	松木董宣	共隆社
寓意小說	逆鱗餘聞	一	藤岷野子(村上昇)	大倉氏
	出放題	一	叢々亭突飛道人	日覺屋
	活髑髏	一	西村天囚	誠之堂
	奴隷世界	一	同	有文堂
	居酒屋の娘	一	同	同盟分舍
立志奇談	雪裏佳人	一	八重の屋主人	共隆社
日本一之剛之者	如倜子(第一編)	一	河瀬勇次郎	松陰餘滴樓
奇氣偉才	好男兒	一	花の家ふゞき	共隆社
感情情話	壯士之立志	一	北海漁夫(井口元一郎)	大阪 明昇堂
二十世紀戰爭豫言	日本花	一	北海散史(井口元一郎)	同
夢幻現象	政海之破裂	一	同	同
經濟小說	金貨氣質	一	前田香雪	駸々堂

町村制度	未來の夢	一	雨香散史(居端淸太郎)	駸々堂
	淸英阿片之騷亂	一	東洋漁人	淸暉閣
志士感慨	歐米太平記	一	福井淳	興民社
	無敵の刄		春の屋主人	新潟新聞
	外務大臣		共醉居士(坪内雄藏)	讀賣新聞
既往未來	金蘭花緣	一	春のやだるま(西田銳吉)	共隆社
開明世界	新平民	一	松のやみどり	同
淚淵一聲	深窓の月光	一	同	同
破天	活雷偉蹟	一	竹芝居士(岡三慶)	顏玉堂
	新住吉物語	一	玲瓏山客	文京堂
蒟蒻開化	口論會	一	竹天道人(總生寬)	岡安書店
	二十三年前滑稽議員	一	同	同
	青年之進路	二	櫻峰居士(佐藤良之助)	尙書堂
社會眞影	走馬燈	一	岡本半溪	魁眞樓
保安條例	後日之夢	一	同	同
英國革命	姿之夜櫻	一	松の舍主人	金松堂

奸雄之末路 一	吉田熹六譯	集成社
政黨情話 一	八木牛治	精文堂
千里風煙 一	鈴木天眼	敷文館
政治小說 白衣之美人	未詳	軍屋書店
政治小說 大人國發見錄	未詳	同
東洋之佳人 一	東海散士	博文堂
ガイフォークス 凱法居士	塚原澁柿園譯	東京日々
政事小說 想國戀	未詳	公論新報
情海波瀾 登龍門	三品藺溪	日本之時事
志士後談 花吹雪 一	蘆屋主人	駸々堂
加里保留尼亞	村井寛稿 須藤南翠閱	日本之時事
寫意小說 花盛	澂花居士	未詳
實錄隼人の風	台水散士（渡邊治）	大阪毎日
亂菊叢談	未詳	同
一年後	天保子	讀賣新聞
新日本浪人	菅野道親	未詳
（刊否未詳）		

國事探偵 この手柏	落花漂絮（中西梅花）	讀賣新聞
新國復仇 深窓之月 一	尙白散史	早瀨
志士寃會 朧夜櫻 一	眞木[illegible]	同人
自由の矢號 一	佐藤鶴谷	駸々堂
正義辯論 洒快演說 一	男道化居士	大阪興民社
月花悲情 鐵窓之夢	自由野人閱 錦宏漁夫著	花くらべ
懇親會 未詳		東雲新聞
明治二十二年		
新杜鵑 一	紅雪散史	共隆社
東洋才子傳 一	尺寸廬主人（寺内章明）	尙書堂
警世奇案 ねなし草 一	同	同
女子參政 蜃中樓 一	柳浪子（廣津直人）	金泉堂
民權の矢 房陽奇聞	三尾重定	水野
空蟬物語 一	佐藤鶴谷	駸々堂
唐松操 一	須藤南翠	國文社
旭章旗 二	同	春陽堂

日本政界	新波瀾	一	佐々木龍	藜光堂
海外策動	日本の刀光	一	香夢樓主人	駸々堂
	鯉魚風		作者未詳	東西新聞
	士族之商業	一	宇田川文海	駸々堂
一唱三嘆	海島王	一	海鶴仙史	文林堂
	鬼念佛	一	焉然居士（太田貞次郎）	大阪 偉業館
	お眼鏡違ひ	一	同	大阪 綺文館
	天爵大臣	一	同	藤谷
	東方新世界	一	依田民權子	信濃 潔枝社
	廿三年候補者之夢	一	逢水漁史（安西與四郎）	鶴鳴館
	勤王娘倭錦	一	松林伯圓	金櫻堂
	（案外堂主人の「新編大和錦」の講談物）			
	憲法發布大典賑	一	淸水義郎	金壽堂
	美人演舌	一	未詳	日吉臺
政治小說	條約改正（初）	一	塚原澁柿	文海堂
滑稽放言	書生之肚	一	靑雲樓立志道人	大阪 抱玉堂
地獄沙汰	賄賂奇譚		未詳	日本新聞

警世小說	條約改正未來之夢		鐵軒居士	明治之輿論
政界壯士	襤褸の錦		退思軒	京華春報
	眞誠之政治家	一	安田倉三	永昌堂
	（「通俗經國美談」改題）			
雄辯活談	貧書生	一	枯骨道人	鶴鳴堂
	天下好男子	一	安西權五郎	相模 文明堂
慘風悲雨	倫敦塔	一	三木愛花仙史	共隆社
四十世紀未來	市區改正後日之東京	一	岡本半溪	魁眞樓
	未來の都	一	同	金泉堂
	霹靂一聲	一	大橋乙羽	國粹堂・松成堂
	市區改正痴人夢		三木辨二	衞生新誌
	山間の名花		中島湘烟女史	都の花
壯士の浮沈藝妓の苦樂	色の革命		花笠文京	繪入自由
	重ね棲	一	爛柯山人	新潟新聞
	世界共和美談（前）	一	酒卷貞一郎	金生堂
慨世議膽	夷孃の聲（前）	一	北海散士	金港堂

西海孤島 千條の涙(上) 一 吉本襄 瓢哉庵
政治小說 投票 太華隱士 自治新誌
外國巡禮 同行二人 櫻痴居士 東京日々
化粧男 未詳 東雲新聞
(女權小說)
小說豆大眼(自叙) 太田焉然居士 日本社會燈
わたしでも 藻悟子 讀賣新聞
政經教諭 やまと錦 久米のや隨落仙人 月雪花

明治二十三年

よもや草紙 一 加藤紫芳 金櫻堂
變窟蟻之世界 一 笹のやすゞめ 同人
國會開設之前後 一 末廣鐵腸 春陽堂
政治小說 美人の艶舌 一 西村天外 自由閣
江藤新平 佐賀之夜嵐 一 平尾夢外 幸玉堂
國會料理 議員の風味 一 一山百文 春秋堂
報知異聞 浮城物語 一 矢野龍溪 報知社
他山之石 一 鳴々道人(坂崎紫瀾) 辻本

黨派の軋轢 一 一簑庵主人 金泉堂
悲憤慷慨 撰擧人後日之夢 一 久永廉三(學棠) 京都 自由館
修羅のちまた 小呉魏蜀志 春の屋主人 讀賣新聞
優勝劣敗 三人鑑 一 閑梓仙叟(關貢造) 信濃 潔枝社
新編 月雪花 一 梅の家かほる 木田
(本文終、「日本新世界」前編とあり)
萬春樂 二 須藤南翠 春陽堂
新編破魔弓 同 國民之友
自由之一箭 中川霞城山人譯 少年文武
修羅場 散史譯述(渡邊治) 大阪毎日
覡言 未詳 同
滑稽妄說 仙居の夢 福地櫻痴 東京日々
黑犬漫筆 同 同
默子放言 同 同
血淚 春亭主人 東京中新聞
名高砂礒濱松枝 愛梅野叟 東雲新聞

匿名投書		村井弦齋	郵便報知
丈夫の涙		春亭花友	都の花
都見物		困睡翁（福地櫻痴）	東京日々
陰陽大和錦		夢の屋主人（福地櫻痴）	やまと
明治二十四年			
壯士操縱 議員の電擊	一	鐵椎子	天怒閣
經國偉談 風雨渡江		岳東蟫史	春陽堂
ゆめ路の記	一	島本北洲	無可亭
政黨美談 淑女操	一	學海居士	金港堂
政治小說 南洋の大波瀾	一	末廣鐵腸	春陽堂
あらしの名殘	一	同	嵩山堂
闇中政治家	一	原抱一庵主人	春陽堂
懇親會	一	笠原道宇	巖々堂
風雲奇兒	一	吉村金太郎	同人
政治小說 木葉籠	一	伊藤徜徉	天風海水閣
如盆島	一	內田鐵三郎	如新館
滑稽國滑怪戲事抱腹錄	一	滑波道人（西森武城）	目黑
（滑波は骨皮のシャレなり）			
花のしがらみ		草林子	爆烈（新聞）
社會 渾沌世界	一	桑島鼇造	松英堂
政治小說 美人の刺客	一	野村莊	九春堂
影朦朧		未詳	東京新報
政治小說 商船「ロケツト」號航海紀行			東京經濟誌
夢路の記		島本北洲	讀賣附錄
國會相撲 輿論の腰投	一	井原智仙	大阪 正英館
南海之勤王	一	佐々木甲象	土佐（小島、小川、村岡）
黃金之花	一	末廣鐵腸	嵩山堂
玉手箱	一	同	同
白玉蘭（別名壯士）	一	山田美妙	同
政事小說 嫩綠		同	國會
珍說黃金大盡		二十四散史	東京日々
小說內幕		獪心堂主	同
非職		無名浪士	同
魔窟怪叢		J・N	寸鐵

黑怪僞員	J・N	寸鐵
再選の準備	同	同
政論 鐵會大評定		東京日々
軟硬軍記	頓智居士	同
眞ごゝろ	福井孝治か	初期國會批評
罔雨	須藤南翠	國民之友
魔風扇	同	經綸
明治二十五年		
明治の花(薩長土) 一	中村芳松	大阪 競爭屋
南海の激浪 一	末廣鐵腸	嵩山堂
政治小說 夢戀々(前) 一	小室案外堂主人著 館田宇宙散人補綴	春陽堂
選擧競爭 嘘八百	櫻痴居士戲作	東京日々
照鏡 一	鳥々道人(坂崎紫瀾)	大阪 鐘美堂
美人鏡 一	無署名	日吉堂
(柳浪「女子參政蜃中樓」の改題せるもの、僞版か)		
政治小說 近世素世美談 一	藤懸永治	細川書房
軟骨議員	村井弦齋	郵便報知

兩美人	弦齋居士	郵便報知
滑稽奇談 田舍めぐり	櫻痴居士	東京日々
蝸牛	漣山人	讀賣新聞
當世志士傳	小杉天外	國會
政治小說 岩戸開	宇田川文海	貝よせ
明治二十六年		
政治小說 明治四十年の日本 二	末廣鐵腸	嵩山堂
議員の黑白 一	天外山人	大阪 鐘美堂
政治小說 漂流の佳人 一	久永廉三	春陽堂
怪男兒 一	西村天囚	大阪 梅原
日本之佳人(卷一) 一	遊月散士	晴文堂
政治小說 染分衣 一	作者未詳	都の花
春の夢 一	青塚外史	日吉堂
政界珍聞 八面玲瓏 一	無心居士	未詳
慨世美談 一	嘲花散士	同人
人造洪水	塚原澁柿	東京日々
世界一統 未來の大決戰(譯)	未詳	自由新聞

	(原著者ジョン・シイ・ウエルナー)			
經世奇策	馬場之櫻(上)	一	槐堂主人	敬業社
	(下未刊、馬政改良の小說)			
	明治二十七年			
	祝砲	一(未見)	鹿鳴散士	未詳
政治小說	大海原	一	末廣鐵腸	春陽堂
	(「南洋の大波瀾」と「あらしのなごり」の合本)			
異國奇遊	瓜太郎物語	二	岡本昆石	同
	噓八百	一	福地櫻癡	同
	夢が夢中	一	同	同
	浮世見物	一	同	同
	僞稱紳士		同	明治文庫
支那問罪	義經仁義主汗		同	國民新聞
	張嬪	一	同	庚寅新誌社
	大終焉		石水生譯	自由新聞
	猛虎道人夢譚		三巾居士	同
	慘風悲雨		秋水生(譯)	同
	浮世長者		須藤南翠	ふみのにしき(朝日附錄)
	(社會小說、ストライキなど)			
	明治二十八年			
政治小說	蝸牛	一	漣山人	駸々堂
政治小說	戰後之日本(前)	一	末廣鐵腸	嵩山堂
	(後篇、村松柳江)			
	支那未來記	一	服部誠一	五書房
征淸小說	日本魂(初)	一	松本正純	厚生堂
	噓の世の中		福地櫻痴	東京日々
	怪物屋敷		同	同
	伏魔殿	一	同	春陽堂
	新闇中政治家		原抱一庵	文藝倶樂部
	明治の天下		人見沓牛	國民新聞
	明治二十九年			
	小說想夫戀(前編)	一	東崖散士(戸叶薫雄)	文海堂支店
責任問題	籬の花		紅映	自由新聞
	憂世の影		紅映	同

明治三十年

買收政略 大策士 一 福地櫻痴 春陽堂
（原題「秘密機關」）
政治小說 戰後之日本後編 一 村松柳江 青木嵩山堂
小說太平洋 一 遲塚麗水 金櫻堂

明治三十一年

理想の日本 一 矢野幸吉 同人
政治小說 累卵之東洋 一 大橋乙羽 博文館
うき枕 內田不知庵 新小說

明治三十二年

政鴦 小栗風葉 新小說
政治小說 しき島 一 阿山居士 三邑堂
過去の政海 一 末廣鐵腸 青木嵩山堂
（小傳、國會開設の前後、二十三年未來記、鴻雪錄）
東洋の大波瀾 大町桂月譯 太陽
軍事小說 寄國と難之夢 三 那須野舍譯 兵事雜誌社
冒險世界 まにらの夢 一 山田美妙（未見） 三國書房
腕くらべ 一 前田曙山 春陽堂

明治三十三年

勤王愛國 西鄕眞傳 一 峰村源助 自版
廚內團 一 後藤宙外 春陽堂
莊叟之胡蝶 一 佐藤正夫 日本司法學部叢書部
政治小說 鐵道國有 內田魯庵 太陽

明治三十四年

社會小說 東洋社會黨 一 久松義典 文學同志會
政治小說 東洋廻波瀾 一 伊藤阿山 鳴皐書院
政治狂 松原二十三階堂 新小說
銅臭 前田曙山 同
悽風悲雨 世路の殘月 一 鹿鳴散士稿 名古屋 栗本
（末廣鐵腸稿案、文殊九助のこと）
世はさま〲 福地櫻痴 日出國
檜舞臺 一 前田曙山 春陽堂
政治小說 出世の間道 一 尺秀三郎譯 內外出版協會

明治三十五年

小說外交之祕密 一 中尾撫劍 鳴皐書院

新社會	一	矢野龍溪	大日本圖書株式會社
（政治小說）桃いろぎぬ	一	山田美妙	嵩山堂
あぎなるど（前後）	二	山田美妙	內外出版協會
武俠の日本	一	押川春浪	博文館
三十三年之夢		宮崎滔天	二六新報
明治三十六年			
（日露戰爭）羽川六郎	一	東海散士（柴四朗）	有名館
血の涙	一	山田美妙	內外出版協會
露國奇聞虛無黨	一	田口掬汀	博文館
（小說）羽ぬけ鳥		山田美妙	日出國
さびがたな		同	同
（何れもヒリツピン獨立戰史の挿話）			
金忠輔		同	同
黑潮（第一）	一	德富蘆花	黑潮社
玉玲瓏		長田秋濤	文藝俱樂部
（露探事件を小說化し、自家の冤を訴へしもの）			
（慨世危言）明治國姓爺（こくせんや）		宮崎滔天	二六新報
明治三十七年			
虛無黨	一	塚原澁柿園	國民書院
火の柱		木下尙江	東京每日
明治三十八年			
（小說）情火鐵火		正岡藝陽譯	やまと
野心		同作	同
明治三十九年			
續虛無黨	一	塚原澁柿	國民書院
（英雄小說）新日本島	一	押川春浪	文武堂
明治四十年			
不必要	一	矢野龍溪	春陽堂
（黃禍白禍）未來之大戰	一	千葉秀甫	服部書店
（英雄小說）東洋武俠團	一	押川春浪	文武堂

『政治小説研究』總目一覧

（上卷）

末廣鐵腸研究

（下　卷）

藤田鳴鶴の『濟民偉業錄』について

尾崎學堂の『新日本』について

久松義典とその政治小說

昭和十四年七月五日第一刷印刷
昭和十四年七月十日第一刷發行

政治小說研究 下卷

〔定價四圓〕

著作者 柳田泉
東京市小石川區西丸町二五

發行者 神田龍一
東京市日本橋區吳服橋二ノ五

印刷者 堀內文治郎
東京市神田區三崎町二ノ二二

印刷所 堀內印刷所
東京市神田區三崎町二ノ二二

發行所 春秋社
東京市日本橋區吳服橋二ノ五
振替(東京)二四八六一

發賣所 株式會社松柏館
東京市日本橋區吳服橋二ノ五
振替東京三九七一六・電話日本橋二六二四

製本・鈴木製本所


三